丹波市

田ノ口遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日・和田山道路Ⅰ）建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

平成23（2011）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は兵庫県丹波市青垣町遠阪に所在する、田ノ口遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日・和田山道路Ⅰ)建設事業に伴うもので、国土交通省近畿整備局兵庫国道工事事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成13年度・14年度・15年度・16年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は国土交通省近畿整備局豊岡河川国道事務所の依頼を受けて、平成19年度・平成20年度・平成22年度に兵庫県立考古博物館で実施した。

4．遺構全体の航空写真測量を平成13年度は㈱パスコ、平成14年度は写測エンジニアリング株式会社、平成15年度は㈱リオプラン、平成16年度は日本テクノ株式会社に委託して行った。

5．写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については㈱谷口フォトに委託した。

6．本書の図版１は国土地理院発行の1/200,000「鳥取・宮津・姫路・京都及大阪」を使用した。図版３は、国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬・大名草・福知山西部・黒井」を使用した。また、図版４は、旧氷上郡青垣町発行の1/2,500「青垣町全図№５・№10」を使用した。

7．本書に使用した方位は国土座標(第Ⅴ系)の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。(世界測地系に変換)

8．出土品の分析は、年代測定を㈱加速器分析研究所に、土器の胎土分析および木製品の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

9．本書の執筆は、以下のとおりである。

第１章を西口圭介・篠宮正

第２章を篠宮

第３章第１節・第２節～第４節の遺構を篠宮

第５節・第６節の遺構を西口

第２節～第６節の遺物のうち古墳時代以前の土器と石器を篠宮、

奈良時代以降の土器を岡田章一、金属器を岡本一秀

第７節を山田清朝

第４章第１節を㈱加速器分析研究所

第２節を立命館大学青木哲哉

第３節・第４節をパリノ・サーヴェイ株式会社

第５章第１節を岡田

第２節を西口

第３節を山田

第４節を篠宮

10．本書の編集は篠宮が行った。

11．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

12．発掘調査および報告書の作成にあたり、

丹波市教育委員会・旧氷上郡教育委員会・旧青垣町

青木哲哉(立命館大学)・小林基伸(大手前大学)・下山文隆(丹波市教育委員会)・徳原多喜雄(丹波市教育委員会)

の各機関・各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

田 ノ 口 遺 跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日・和田山道路Ⅰ）
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

例言

目　　次

第１章　遺跡をとりまく環境……1
第１節　地理的環境……1
第２節　歴史的環境……2
第３節　田ノ口遺跡周辺の遺跡……3
第２章　調査の契機と経過……5
第１節　調査に至る経緯……5
第２節　分布調査……5
第３節　第１次確認調査……6
第４節　本発掘調査および第２次確認調査……6
第５節　出土品整理……10
第３章　本発掘調査の成果……12
第１節　発掘調査の概要……12
第２節　Ａ地区の調査……13
第３節　Ｂ･Ｃ地区の調査……18
第４節　Ｄ地区の調査……43
第５節　Ｅ地区の調査……70
第６節　Ｆ地区の調査……90
第７節　Ｇ地区の調査……99
第４章　自然科学的調査の成果……103
第１節　田ノ口遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）……103
第２節　田ノ口遺跡および土井遺跡の地形環境……107
第３節　田ノ口遺跡出土土器の胎土分析……122
第４節　田ノ口遺跡出土木製品の樹種……134
第５節　田ノ口遺跡出土ガラス玉の材質分析……137
第５章　まとめ……138
第１節　田ノ口遺跡の遺物の検討……138
第２節　中世の遺構について……149
第３節　田ノ口遺跡Ｇ地区のまとめ……157
第４節　田ノ口遺跡の総括……160
別表……163～179
報告書抄録……180
図版　1～126
写真図版　1～164

図 版 目 次

図版１	遺跡		１兵庫県の位置　２丹波市の位置　３田ノ口遺跡の位置(1/200,000)
図版２	遺跡		田ノ口遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版３	遺跡		田ノ口遺跡周辺の主要遺跡(1/35,000)
図版４	遺跡		道路計画と田ノ口遺跡の位置(1/8,000)
図版５	遺跡		確認調査と本発掘調査の位置(1/2,000)
図版６	遺構	Ａ・Ｂ・Ｃ地区	調査区全体図(1/400)
図版７	遺構	Ａ地区	遺構配置図・土層断面(1/200・1/80)
図版８	遺構	Ａ地区	掘立柱建物SB001A(1/100)　掘立柱建物SB002A(1/100)
図版９	遺構	Ａ地区	掘立柱建物SB003A(1/100)　掘立柱建物SB004A(1/100) 掘立柱建物SB005A(1/100)　掘立柱建物SB006A(1/100)
図版10	遺構	Ａ地区	掘立柱建物SB007A(1/100)　掘立柱建物SB008A(1/100)　掘立柱建物SB009A(1/100) 掘立柱建物SA010A(1/100)　溝SD002A(1/20)
図版11	遺物	Ａ地区	土器・金属器(１～35・M1)
図版12	遺構	Ｂ・Ｃ地区	遺構配置図(1/250)
図版13	遺構	Ｂ・Ｃ地区	土層断面(1/200・1/80)
図版14	遺構	Ｂ地区	遺構配置図(1/200)
図版15	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB001B(1/100)　掘立柱建物SB002B(1/100)
図版16	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB003B(1/100)　掘立柱建物SB004B(1/100)
図版17	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB005B(1/100)　掘立柱建物SB006B(1/100)
図版18	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB007B(1/100)　掘立柱建物SB008B(1/100)
図版19	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB009B(1/100)　掘立柱建物SB010B(1/100)
図版20	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB011B(1/100)　掘立柱建物SB012B(1/100)
図版21	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB013B(1/100)　掘立柱建物SB014B(1/100)
図版22	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB015B(1/100)　掘立柱建物SB016B(1/100)
図版23	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB017B(1/100)　掘立柱建物SB018B(1/100)
図版24	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB019B(1/100)　掘立柱建物SB020B(1/100)
図版25	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB021B(1/100)　掘立柱建物SB022B(1/100)
図版26	遺構	Ｂ地区	掘立柱建物SB023B(1/100)　掘立柱建物SB024B(1/100)
図版27	遺構	Ｂ地区	土坑SK213B(1/20)　土坑SK537B(1/20)　土坑SK131B(1/40)　土坑SK148B(1/40)
図版28	遺構	Ｂ地区	土坑SK160B(1/40)　土坑SK161B(1/40)
図版29	遺構	Ｂ地区	土坑SK130B(1/40)
図版30	遺構	Ｂ地区	溝SD113B(1/20)　溝SD112B・SD113B(1/20)　溝SD112B(1/20)　溝SD132B・SD128B(1/20) 溝SD143B(1/20)　溝SD171B(1/20)　掘立柱建物SB201B(1/100)　焼土SF111B(1/20)
図版31	遺物	Ｂ地区	土器１(36～74)
図版32	遺物	Ｂ地区	土器２(75～122)
図版33	遺物	Ｂ地区	土器３(123～156)
図版34	遺物	Ｂ地区	土器４(157～188)
図版35	遺物	Ｂ地区	土器５(189～231)
図版36	遺物	Ｂ地区	土器６(232～265)
図版37	遺物	Ｂ地区	土器７(266～288)
図版38	遺物	Ｂ地区	石器(S1～S5)
図版39	遺物	Ｂ地区	金属器(M2～M13)
図版40	遺物	Ｃ地区	土器・石器・金属器(289～301・M14～M16・S6)
図版41	遺構	Ｄ地区	遺構配置図(1/400)
図版42	遺構	Ｄ地区	土層断面(1/400・1/80)
図版43	遺構	Ｄ地区	遺構配置図(1/200)
図版44	遺構	Ｄ地区	遺構配置図(1/200)
図版45	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB001D(1/100)　掘立柱建物SB002D(1/100)
図版46	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB003D(1/100)
図版47	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB004D(1/100)　掘立柱建物SB005D(1/100)
図版48	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB006D(1/100)　掘立柱建物SB007D(1/100)
図版49	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB008D(1/100)
図版50	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB009D(1/100)　掘立柱建物SB010D(1/100)
図版51	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB011D(1/100)　掘立柱建物SB012D(1/100)
図版52	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB013D(1/100)　掘立柱建物SB014D(1/100)　掘立柱建物SB015D(1/100) 掘立柱建物SB016D(1/100)
図版53	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB017D(1/100)
図版54	遺構	Ｄ地区	掘立柱建物SB018D(1/100)　掘立柱建物SB019D(1/100)
図版55	遺構	Ｄ地区	土坑SK005D(1/40)　土坑SK617D(1/20)　土坑SK262D(1/20)　土坑SK100D(1/20) 土坑SK154D(1/20)
図版56	遺構	Ｄ地区	土坑SK212D(1/20)　土坑SK213D(1/20)　土坑SK214D(1/20)　土坑SK218D(1/20) 土坑SK217D(1/20)　土坑SK053D(1/20)
図版57	遺構	Ｄ地区	土坑SK123・161D(1/20)　土坑SK122D(1/20)　土坑SK162D(1/20)　土坑SK153D(1/50)
図版58	遺構	Ｄ地区	土坑SK226D(1/20)　土坑SK004D(1/20)
図版59	遺構	Ｄ地区	鍛冶炉群SF001D(1/20)
図版60	遺構	Ｄ地区	鍛冶炉群SF002D(1/20)
図版61	遺構	Ｄ地区	焼土SF274D(1/20)　焼土SF999D(1/20)　焼土SF275D(1/20)
図版62	遺構	Ｄ地区	焼土SF297D・土坑SK103D(1/20)　焼土SF271D(1/20)
図版63	遺構	Ｄ地区	焼土SF266D(1/20)　焼土SF279D(1/20)
図版64	遺構	Ｄ地区	焼土SF272D(1/20)　集石SS108D(1/20)

図版65	遺構	D地区	集石SS007D(1/20)　集石SS006D(1/20)
図版66	遺構	D地区	木棺墓ST215D(1/20)
図版67	遺構	D地区	溝SD374D(1/20)　溝SD216D(1/20)　溝SD375D(1/20)　溝SD210D(1/20)　溝SD209D(1/20) 溝SD152D(1/20)　溝SD189D(1/20)　溝SD376D(1/20)　土坑SK207D(1/10)
図版68	遺物	D地区	土器1(302～345)
図版69	遺物	D地区	土器2(346～388)
図版70	遺物	D地区	土器3(389～411)
図版71	遺物	D地区	土器4(412～438)
図版72	遺物	D地区	土器5(439～472)
図版73	遺物	D地区	土器6(473～510)
図版74	遺物	D地区	土器7(511～535)
図版75	遺物	D地区	土器8(536～547)
図版76	遺物	D地区	石器・玉(S7～S10・J1)
図版77	遺物	D地区	金属器1(M17～M29)
図版78	遺物	D地区	金属器2(M30～M32)
図版79	遺構	E・F地区	遺構配置図(1/500)
図版80	遺構	E地区	遺構配置図(1/400)
図版81	遺構	E地区	土層断面(1/200・1/40)
図版82	遺構	E地区	遺構配置図(1/200)
図版83	遺構	E地区	遺構配置図(1/200)
図版84	遺構	E地区	遺構配置図(1/200)
図版85	遺構	E地区	遺構配置図(1/200)
図版86	遺構	E地区	掘立柱建物SB001E(1/100)　掘立柱建物SB002E(1/100)
図版87	遺構	E地区	掘立柱建物SB003E(1/100)　掘立柱建物SB004E(1/100)
図版88	遺構	E地区	掘立柱建物SB005E(1/100)　掘立柱建物SB006E(1/100)
図版89	遺構	E地区	掘立柱建物SB007E(1/100)　掘立柱建物SB008E(1/100)
図版90	遺構	E地区	掘立柱建物SB009E(1/100)　掘立柱建物SB010E(1/100)
図版91	遺構	E地区	掘立柱建物SB011E(1/100)　掘立柱建物SB012E(1/100)
図版92	遺構	E地区	掘立柱建物SB013E(1/100)　掘立柱建物SB014E(1/100)
図版93	遺構	E地区	掘立柱建物SB015E(1/100)　掘立柱建物SB016E(1/100)
図版94	遺構	E地区	掘立柱建物SB017E(1/100)　掘立柱建物SB018E(1/100)
図版95	遺構	E地区	掘立柱建物SB019E(1/100)　掘立柱建物SB020E(1/100)
図版96	遺構	E地区	掘立柱建物SB021E(1/100)　掘立柱建物SB022E(1/100)
図版97	遺構	E地区	掘立柱建物SB023E(1/100)　掘立柱建物SB024E(1/100)
図版98	遺構	E地区	掘立柱建物SB025E(1/100)　掘立柱建物SB026E(1/100)
図版99	遺構	E地区	掘立柱建物SB027E(1/100)　掘立柱建物SB028E(1/100)
図版100	遺構	E地区	掘立柱建物SB029E(1/100)　掘立柱建物SB030E(1/100)
図版101	遺構	E地区	掘立柱建物SB031E(1/100)　掘立柱建物SB032E(1/100)　掘立柱建物SB033E(1/100)
図版102	遺構	E地区	土坑SK006E(1/20)　土坑SK023E(1/20)　土坑SK065E(1/20)　土坑SK055E(1/20) 土坑SK072E(1/20)　土坑SK076E(1/20)　土坑SK082E(1/20)
図版103	遺構	E地区	焼土SF003E(1/20)　焼土SF002E(1/20)　焼土SF001E(1/20)
図版104	遺構	E地区	竪穴住居SH001E・SH002E(1/50)
図版105	遺構	E地区	縄文土器堆積土層断面(1/50)
図版106	遺物	E地区	土器1(548～591)
図版107	遺物	E地区	土器2(592～629)
図版108	遺物	E地区	土器3・金属器(630～663・M33～M38)
図版109	遺物	E地区	土器4　縄文土器1(664～676)
図版110	遺物	E地区	土器5　縄文土器2・石器(677～696・S11)
図版111	遺物	E地区	土器6　弥生土器(697～718)
図版112	遺構	F地区	遺構配置図(1/300)
図版113	遺構	F地区	遺構配置図(1/200)
図版114	遺構	F地区	掘立柱建物SB034F・SB035F(1/100)　掘立柱建物SB037F(1/100)
図版115	遺構	F地区	掘立柱建物SB036F(1/100)　掘立柱建物SB038F(1/100)　掘立柱建物SB039F(1/100) 掘立柱建物SB040F(1/100)
図版116	遺構	F地区	掘立柱建物SB041F(1/100)　掘立柱建物SB042F(1/100)　掘立柱建物SB043F(1/100) 掘立柱建物SB044F(1/100)
図版117	遺構	F地区	井戸SE001F(1/40)
図版118	遺構	F地区	井戸SX002F(1/50)　井戸SE003F(1/50)
図版119	遺構	F地区	水田(1/200)　旧河道(1/200)
図版120	遺構	F地区	水田土層断面1(1/50)　水田・旧河道土層断面2(1/50)
図版121	遺構	F地区	水田・旧河道土層断面3(1/50)　旧河道土層断面4(1/50)
図版122	遺物	F地区	土器・木器・石器・金属器(719～749・W1・S12・M39)
図版123	遺構	G地区	調査区位置図(1/100)
図版124	遺構	G地区	G－1区 墓ST001G(1/20)
図版125	遺構	G地区	G－2区 経塚SX001G(1/20)
図版126	遺物	G地区	土器(750～756)

写 真 図 版 目 次

写真図版１	遺跡		1 田ノ口遺跡 遠景(南東から)	2 田ノ口遺跡 遠景(南西から)
写真図版２	遺跡	Ａ・Ｂ・Ｃ地区	3 田ノ口遺跡 近景(南東から)	4 Ａ・Ｂ・Ｃ地区全景(北西から)
写真図版３	遺跡	Ａ・Ｂ・Ｃ地区	5 Ａ地区全景(上が北東)	6 Ｂ・Ｃ地区全景(上が北東)
写真図版４	遺物	Ｂ地区	土器(白磁)	
写真図版５	遺物	Ｂ地区	土器(白磁・青磁・施釉陶器)	
写真図版６	遺物	Ｂ地区	土器(白磁・青磁)	
写真図版７	遺物	Ｂ地区	土器(青磁)	
写真図版８	遺構	Ｄ・Ｃ・Ｂ・Ａ地区	7 Ｄ・Ａ・Ｂ・Ｃ地区全景(南東から)	8 Ｄ地区全景(西から)
写真図版９	遺構	Ｄ地区	9 全景(上が北西)	
写真図版10	遺構	Ｄ地区	10 鍛冶炉群SF002D(北西から)	11 鍛冶炉群SF002D断面(北西から)
写真図版11	遺構	Ｄ地区	12 柱穴P0562D(南西から)	13 鍛冶炉SF002DSF903D(南西から)
			14 柱穴P0562D断面(南西から)	15 鍛冶炉SF002DSF903D断面(南西から)
			16 鍛冶炉SF002DSF905D断面(南東から)	17 鍛冶炉SF589D断面(南東から)
			18 焼土SF266D(南から)	19 焼土SF001DSF187D(南西から)
写真図版12	遺構・遺物	Ｄ地区	20 木棺墓ST215D(西から)	木棺墓ST215D出土遺物
写真図版13	遺物	Ｄ地区	土器(白磁・青花)	
写真図版14	遺物	Ｄ地区	土器(白磁・青磁・青花)	
写真図版15	遺物	Ｄ地区	土器(施釉陶器)	
写真図版16	遺物	Ｄ地区	土器(青磁)	
写真図版17	遺物	Ｄ地区	土器(青花)	
写真図版18	遺跡	Ｅ・Ｆ地区	21 田ノ口遺跡全景(南西から)	22 Ｅ・Ｆ地区全景(西から)
写真図版19	遺構	Ｅ地区	23 Ｅ地区全景(西から)	24 Ｅ地区全景(南西から)
写真図版20	遺構	Ｅ地区	25 Ｅ地区全景(上が北東)	
写真図版21	遺構	Ｅ地区	26 焼土SF001E検出状況(北から)	27 焼土SF001E(南から)
			28 焼土SF001E断割り(北西から)	
写真図版22	遺構	Ｅ地区	29 焼土SF001E埋土土層断面(南から)	30 焼土SF001E(東から)
			31 焼土SF002E(北東から)	32 焼土SF003E(北から)
			33 焼土SF002E断割り(南西から)	34 焼土SF003E断割り(南西から)
			35 土坑SK006E土層断面(東から)	36 土坑SK082E土層断面(南東から)
写真図版23	遺物	Ｅ地区	土器(白磁・陶器・青花)	
写真図版24	遺構	Ｆ地区	37 Ｆ地区全景(西から)	38 Ｆ地区全景(上が南東)
写真図版25	遺構	Ｇ地区	39 Ｇ地区遠景(南東から)	40 Ｇ地区全景(南西から)
写真図版26	遺構・遺物	Ｇ地区	41 Ｇ－１区 墓ST001G検出状況(南西から)	Ｇ－１区 墓ST001G出土土器
写真図版27	遺構・遺物	Ｇ地区	42 Ｇ－２区 経塚SX001G経筒検出状況(南西から)	
			Ｇ－２区 経塚SX001G出土土器・鏡	
写真図版28	遺物	Ｇ地区	Ｇ－２区 経塚SX001G出土土器・鏡	
写真図版29	分析		胎土薄片(1)	
写真図版30	分析		胎土薄片(2)	
写真図版31	分析		胎土薄片(3)	
写真図版32	分析		胎土薄片(4)	
写真図版33	分析		胎土薄片(5)	
写真図版34	分析		胎土薄片(6)	
写真図版35	遺構	Ａ・Ｂ・Ｃ地区	43 Ａ・Ｂ・Ｃ地区全景(上が北西)	
写真図版36	遺構	Ａ・Ｂ・Ｃ地区	44 Ａ・Ｂ・Ｃ地区全景(南西から)	45 Ａ地区全景(南東から)
写真図版37	遺構	Ａ地区	46 Ａ地区全景(南から)	47 Ａ地区全景(南西から)
写真図版38	遺構	Ａ地区	48 東半部全景(北東から)	49 柱穴P0057A(南東から)
			50 柱穴P0046A遺物出土状況(南東から)	
			51 掘立柱建物SB006A 柱穴P0053A土層断面(北西から)	
			52 溝SD002A土層断面(南西から)	
写真図版39	遺物	Ａ地区	土器(1)	
写真図版40	遺物	Ａ地区	土器(2)・金属器	
写真図版41	遺構	Ｂ・Ａ地区	53 Ｂ・Ａ地区全景(東から)	
写真図版42	遺構	Ｂ地区	54 Ｂ地区全景(南から)	55 Ｂ地区全景(北東から)
写真図版43	遺構	Ｂ地区	56 Ｂ地区全景(南西から)	57 Ｂ地区全景(西から)
写真図版44	遺構	Ｂ地区	58 Ｂ地区全景(東から)	59 Ｂ地区全景(南から)
写真図版45	遺構	Ｂ地区	60 掘立柱建物SB010B～SB019B(東から)	
			61 掘立柱建物SB001B～SB016B(南から)	
写真図版46	遺構	Ｂ地区	62 掘立柱建物SB010B～SB016B(南西から)	
			63 掘立柱建物SB017B～SB024B(南から)	
写真図版47	遺構	Ｂ地区	64 掘立柱建物SB001B～SB009B、土坑SK130B(北東から)	
			65 掘立柱建物SB001B～SB009B(北東から)	
写真図版48	遺構	Ｂ地区	66 掘立柱建物SB007B(北東から)	67 掘立柱建物SB001B～SB003B(西から)
写真図版49	遺構	Ｂ地区	68 掘立柱建物SB012B・SB013B(北東から)	
			69 掘立柱建物SB011B～SB013B(北東から)	
写真図版50	遺構	Ｂ地区	70 柱穴P0457B(北西から)	71 柱穴P0093B(南西から)
			72 柱穴P0393B遺物出土状況(北西から)	73 柱穴P0105B遺物出土状況(北西から)
			74 柱穴P0180B遺物出土状況(北から)	75 柱穴P0352B遺物出土状況(北東から)
			76 掘立柱建物SB017B 柱穴P0185B遺物出土状況(北から)	
			77 掘立柱建物SB019B 柱穴P0179B遺物出土状況(北から)	

写真図版51	遺構	B地区	78 掘立柱建物SB006B 柱穴P0753B(南東から)
			79 掘立柱建物SB015B 柱穴P0766B(南西から)
			80 掘立柱建物SB015B 柱穴P0768B(南東から)
			81 掘立柱建物SB015B 柱穴P0769B(南東から)
			82 掘立柱建物SB015B 柱穴P0770B(東から)
			83 掘立柱建物SB015B 柱穴P0771B(北東から)
			84 掘立柱建物SB015B 柱穴P0774B(北東から)
			85 掘立柱建物SB015B 柱穴P0775B(北東から)
写真図版52	遺構	B地区	86 掘立柱建物SB009B 柱穴P0283B(南東から)
			87 掘立柱建物SB009B 柱穴P0475B(南東から)
			88 掘立柱建物SB009B 柱穴P0272B(南西から)
			89 掘立柱建物SB009B 柱穴P0476B(南西から)
			90 掘立柱建物SB009B 柱穴P0491B(南西から)
			91 掘立柱建物SB009B 柱穴P0165B(北西から)
			92 掘立柱建物SB013B 柱穴P0118B(南西から)
			93 掘立柱建物SB014B 柱穴P0260B(南西から)
写真図版53	遺構	B地区	94 掘立柱建物SB016B 柱穴P0364B(南西から)
			95 掘立柱建物SB023B 柱穴P0540B(北西から) 96 柱穴P0467B(北東から)
			97 柱穴P0297B(南西から) 98 柱穴P0181B(北西から)
			99 柱穴P0539B(北西から) 100 柱穴P0538B(南東から)
			101 柱穴P0472B(北東から)
写真図版54	遺構	B地区	102 土坑SK130B・SK160B、溝SD128B(北から)
			103 土坑SK130B・SK160B・SK213B(北西から)
写真図版55	遺構	B地区	104 土坑SK130B・SK160B・SK161B、溝SD128B(東から)
			105 土坑SK130B・SK213B(南東から)
写真図版56	遺構	B地区	106 土坑SK161B(北東から) 107 土坑SK161B遺物出土状況(北東から)
写真図版57	遺構	B地区	108 土坑SK213B(南東から) 109 土坑SK213B北端下層(南西から)
			110 土坑SK213B北端上層(南西から)
写真図版58	遺構	B地区	111 溝SD113B土層断面(南西から) 112 溝SD128B土層断面(南東から)
			113 溝SD132Ｂ土層断面(南西から) 114 溝SD143B土層断面(南東から)
			115 溝SD171B土層断面(南東から) 116 鍛冶炉SF111B(北東から)
			117 土坑SK537B(南西から) 118 鍛冶炉SF111B土層断面(南西から)
写真図版59	遺構	B地区	119 Ｂ-２地区全景(西から) 120 Ｂ-２地区全景(南から)
写真図版60	遺物	B地区	土器(1)
写真図版61	遺物	B地区	土器(2)
写真図版62	遺物	B地区	土器(3)
写真図版63	遺物	B地区	土器(4)
写真図版64	遺物	B地区	土器(5)
写真図版65	遺物	B地区	土器(6)
写真図版66	遺物	B地区	土器(7)
写真図版67	遺物	B地区	土器(8)
写真図版68	遺物	B地区	土器(9)
写真図版69	遺物	B地区	土器(10)
写真図版70	遺物	B地区	土器(11)
写真図版71	遺物	B地区	土器(12)
写真図版72	遺物	B地区	土器(13)
写真図版73	遺物	B地区	土器(14)
写真図版74	遺物	B地区	土器(15)
写真図版75	遺物	B地区	石器(1)
写真図版76	遺物	B地区	石器(2)・金属器
写真図版77	遺構・遺物	C地区	121 Ｃ地区全景(南東から) 土器(1)
写真図版78	遺物	C地区	土器(2)・石器・金属器
写真図版79	遺構	D地区	122 Ｄ地区全景(南西から)
写真図版80	遺構	D地区	123 Ｄ地区全景(北から) 124 Ｄ地区全景(北から)
写真図版81	遺構	D地区	125 Ｄ地区全景(南東から) 126 Ｄ地区全景(南東から)
写真図版82	遺構	D地区	127 掘立柱建物SB007D・SB008D・SB009D・SB011D(北東から)
			128 掘立柱建物SB007D・SB008D・SB009D・SB011D(南東から)
写真図版83	遺構	D地区	129 掘立柱建物SB008D～SB019D(西から)
			130 掘立柱建物SB008D～SB019D(南東から)
写真図版84	遺構	D地区	131 掘立柱建物SB015D～SB019D(北西から)
			132 掘立柱建物SB016D～SB019D(南西から)
写真図版85	遺構	D地区	133 掘立柱建物SB001D・SB002D、鍛冶炉群(北西から) 134 鍛冶炉群(南東から)
写真図版86	遺構	D地区	135 柱穴P0122D遺物出土状況(北西から) 136 柱穴P0075D遺物出土状況(南西から)
			137 柱穴P0137D(南西から) 138 柱穴P0028D(北西から)
			139 柱穴P0101D土層断面(南東から) 140 柱穴P0089D遺物出土状況(北西から)
			141 柱穴P0341D土層断面(南東から) 142 柱穴P0327D土層断面(北西から)

写真図版87	遺構	D地区	143 土坑SK005D検出状況(南から)　144 土坑SK154D遺物出土状況(南から) 145 土坑SK212D土層断面(南から)　146 土坑SK213D土層断面(南東から) 147 土坑SK214D土層断面(北西から)　148 土坑SK218D土層断面(北西から) 149 土坑SK262D土層断面(南東から)　150 土坑SK617D土層断面(北東から)
写真図版88	遺構	D地区	151 土坑SK217D土層断面(南西から)　152 土坑SK226D遺物出土状況(西から) 153 土坑SK123D・SK161D・SK162D(西から) 154 土坑SK162D土層断面(西から)　155 土坑SK004D土層断面(南から) 156 土坑SK153D土層断面(南から) 157 集石SS108D(東から)　158 集石SS108D(北東から)
写真図版89	遺構	D地区	159 土坑SK103D(西から)　160 焼土SF271D検出状況(南西から) 161 焼土SF001DSF187D検出状況(南西から) 162 焼土SF271D土層断面(南西から)　163 焼土SF279D土層断面(北西から)
写真図版90	遺構	D地区	164 集石SS006D(南東から)　165 集石SS007D(南西から)
写真図版91	遺構	D地区	166 木棺墓ST215D検出状況(北から)　167 木棺墓ST215D(北から)
写真図版92	遺構	D地区	168 木棺墓ST215D(西から)　169 木棺墓ST215D遺物出土状況(北から)
写真図版93	遺構	D地区	170 木棺墓ST215D(北西から)　171 木棺墓ST215D遺物出土状況(東から)
写真図版94	遺構	D地区	172 溝SD189D土層断面(北西から)　173 溝SD209D土層断面(南西から) 174 溝SD210D土層断面(南西から)　175 溝SD374D土層断面(南西から) 176 溝SD375D土層断面(南西から)　177 溝SD376D土層断面(北西から) 178 土坑SK207D検出状況(南西から)
写真図版95	遺構	D地区	179 D-3区遠景(西から)　180 D-3区全景(北東から) 181 D-3区全景(西から)
写真図版96	遺物	D地区	土器(1)
写真図版97	遺物	D地区	土器(2)
写真図版98	遺物	D地区	土器(3)
写真図版99	遺物	D地区	土器(4)
写真図版100	遺物	D地区	土器(5)
写真図版101	遺物	D地区	土器(6)
写真図版102	遺物	D地区	土器(7)
写真図版103	遺物	D地区	土器(8)
写真図版104	遺物	D地区	土器(9)
写真図版105	遺物	D地区	土器(10)
写真図版106	遺物	D地区	土器(11)
写真図版107	遺物	D地区	土器(12)
写真図版108	遺物	D地区	土器(13)
写真図版109	遺物	D地区	土器(14)
写真図版110	遺物	D地区	土器(15)
写真図版111	遺物	D地区	土器(16)
写真図版112	遺物	D地区	土器(17)
写真図版113	遺物	D地区	土器(18)
写真図版114	遺物	D地区	土器(19)・石器(1)・玉
写真図版115	遺物	D地区	石器(2)
写真図版116	遺物	D地区	金属器(1)
写真図版117	遺物	D地区	金属器(2)
写真図版118	遺構	E・F地区	182 E地区全景(南東から)　183 E地区全景(北東から)
写真図版119	遺構	E地区	184 全景(上が北西)
写真図版120	遺構	E地区	185 全景(北から)　186 全景(北西から)
写真図版121	遺構	E地区	187 全景(南東から)　188 北部の掘立柱建物群(北西から)
写真図版122	遺構	E地区	189 北部の柱穴群(西から)　190 中部の柱穴群(北西から) 191 南部の柱穴群(東から)
写真図版123	遺構	E地区	192 掘立柱建物SB001E～SB003E(北西から) 193 掘立柱建物SB003E・SB005E・SB009E(北西から) 194 掘立柱建物SB003E・SB005E・SB009E(南から)
写真図版124	遺構	E地区	195 掘立柱建物SB013E(南から)　196 掘立柱建物SB013E・SB014E(南から)
写真図版125	遺構	E地区	197 掘立柱建物SB015E～SB022E(南西から)　198 掘立柱建物SB016E(南西から)
写真図版126	遺構	E地区	199 掘立柱建物SB025E～SB027E(南西から)　200 掘立柱建物SB028E(北から)
写真図版127	遺構	E地区	201 掘立柱建物SB015E(南西から)　202 柱穴P4114E土層断面(北東から) 203 柱穴P4115E土層断面(北東から)　204 柱穴P4116E土層断面(北東から) 205 柱穴P4118E土層断面(南西から)
写真図版128	遺構	E地区	206 掘立柱建物SB018E 柱穴P4077E土層断面(北から) 207 掘立柱建物SB018E 柱穴P4084E土層断面(南から) 208 掘立柱建物SB018E 柱穴P4085E土層断面(南から) 209 掘立柱建物SB018E 柱穴P4086E土層断面(南から) 210 掘立柱建物SB022E 柱穴P4121E土層断面(北東から) 211 掘立柱建物SB022E 柱穴P4123E土層断面(北西から) 212 掘立柱建物SB022E 柱穴P4130E土層断面(南西から) 213 掘立柱建物SB022E 柱穴P4200E土層断面(西から)

写真図版129	遺構	E地区	214 掘立柱建物SB019E 柱穴P4102E遺物出土状況(南東から)
			215 掘立柱建物SB005E 柱穴P4071E土層断面(南東から)
			216 掘立柱建物SB028E 柱穴P4179E土層断面(北東から)
			217 掘立柱建物SB028E 柱穴P4180E土層断面(北東から)
			218 掘立柱建物SB028E 柱穴P4184E土層断面(南東から)
			219 掘立柱建物SB028E 柱穴P4189E土層断面(南東から)
			220 掘立柱建物SB028E 柱穴P4188E土層断面(北東から)
			221 柱穴P4203E土層断面(南西から)
写真図版130	遺構	E地区	222 竪穴住居SH001E・SH002E(北東から) 223 SH001Eに伴う土器出土状況
			224 SH001Eに伴う土器出土状況(近接)
写真図版131	遺構	E地区	225 下層 谷部の土層堆積トレンチA(南東から)
			226 下層 谷部の土層堆積トレンチB(南東から) 227 作業風景(北西から)
写真図版132	遺構	E地区	228 E-2区全景(上が北西) 229 E-2区全景(南西から)
写真図版133	遺構	E地区	230 E-3区全景(北から) 231 E-3区全景(上が南西)
写真図版134	遺物	E地区	土器(1)
写真図版135	遺物	E地区	土器(2)
写真図版136	遺物	E地区	土器(3)
写真図版137	遺物	E地区	土器(4)
写真図版138	遺物	E地区	土器(5)
写真図版139	遺物	E地区	土器(6)
写真図版140	遺物	E地区	土器(7)
写真図版141	遺物	E地区	土器(8)・金属器
写真図版142	遺物	E地区	土器(9) 縄文土器
写真図版143	遺物	E地区	土器(10) 縄文土器
写真図版144	遺物	E地区	土器(11) 弥生土器
写真図版145	遺物	E地区	土器(12) 弥生土器・石器
写真図版146	遺構	F地区	232 全景(南西から) 233 全景(北東から)
写真図版147	遺構	F地区	234 全景(北から) 235 南半の遺構群(北から)
写真図版148	遺構	F地区	236 井戸SE001F(南西から) 237 井戸SE001F断割り(南西から)
			238 井戸SE001F根太出土状況(南西から)
写真図版149	遺構	F地区	239 北半 水田遺構(南から) 240 水田遺構(北から)
			241 水田遺構面より上層の堆積(北から) 242 水田遺構面より上層の堆積(北から)
写真図版150	遺構	F地区	243 下層 旧河道の全景(南から) 244 下層 旧河道の状況(北から)
写真図版151	遺構	F地区	245 下層 旧河道の状況(南から) 246 旧河道の堆積(1) 247 旧河道の堆積(2)
			248 旧河道の堆積(3) 249 学識経験者 青木哲哉氏による調査
写真図版152	遺物	F地区	土器(1)
写真図版153	遺物	F地区	土器(2)
写真図版154	遺物	F地区	木器・石器・金属器
写真図版155	遺構	G地区	250 調査前全景(南上空から) 251 調査前近景(南東から)
写真図版156	遺構	G地区	252 G-1区 表土掘削後(南西から)
			253 G-1区 墓ST001G上層検出状況(南西から)
写真図版157	遺構	G地区	254 G-1区 墓ST001G中層検出状況(1)(南西から)
			255 G-1区 墓ST001G中層検出状況(2)(南西から)
写真図版158	遺構	G地区	256 G-1区 墓ST001G中層検出状況(3)(南西から)
			257 G-1区 墓ST001G下層検出状況(南西から)
写真図版159	遺物	G地区	G-1区 墓ST001G出土土器
写真図版160	遺構	G地区	258 G-2区 表土掘削後(南西から)
			259 G-2区 経塚SX001G上層検出状況(南西から)
写真図版161	遺構	G地区	260 G-2区 経塚SX001G経筒被覆状況(南西から)
			261 G-2区 経塚SX001G経筒検出状況(南西から)
写真図版162	遺構	G地区	262 G-2区 経塚SX001G経筒被覆状況(南西から)
			263 G-2区 経塚SX001G経筒全景(1)(南西から)
			264 G-2区 経塚SX001G経筒全景(2)(南西から)
写真図版163	遺構	G地区	265 G-2区 経塚SX001G経筒全景(1)(南西から)
			266 G-2区 経塚SX001G経筒全景(2)(南西から)
			267 G-2区 経塚SX001G経筒近景(南西から)
写真図版164	遺物	G地区	G-2区 経塚SX001G出土土器

挿 図 目 次

第1図　蓋取上げ後 ……100
第2図　和鏡検出後 ……100
第3図　Ｘ線透過写真（上：上から　下：横から） ……101
第4図　暦年較正結果 ……106
第5図　遠阪川流域の地形分類図 ……108
第6図　田ノ口遺跡調査地区付近の微地形 ……109
第7図　田ノ口遺跡Ｂ地区におけるトレンチ断面図 ……111
第8図　田ノ口遺跡Ｄ地区におけるトレンチ断面図 ……112
第9図　田ノ口遺跡Ｅ地区におけるトレンチ断面図 ……113
第10図　田ノ口遺跡Ｆ地区におけるセクション断面図 ……114
第11図　土井遺跡調査区付近の微地形 ……116
第12図　土井遺跡Ａ地区におけるトレンチ断面図 ……117
第13図　土井遺跡Ｂ地区におけるトレンチ断面図 ……118
第14図　各粒度階における鉱物・岩石出土頻度(1)・(2) ……127・128
第15図　胎土中の砂の粒径組成(1)・(2) ……129・130
第16図　砕屑物・基質・孔隙の割合 ……131
第17図　木材組織の顕微鏡写真 ……136
第18図　田ノ口遺跡出土ガラス玉蛍光Ｘ線定性スペクトル ……137
第19図　土器・陶磁器編年図(1) ……145
第20図　土器・陶磁器編年図(2) ……146
第21図　土器・陶磁器編年図(3) ……147
第22図　土器・陶磁器編年図(4) ……148
第23図　骨蔵器の復元 ……157
第24図　経塚容器の復元 ……157
第25図　出土和鏡 ……158
第26図　和鏡の復元 ……159

表 目 次

第1表　測定試料及び処理 ……105
第2表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 ……105
第3表　胎土分析試料一覧 ……122
第4表　薄片観察結果(1)～(3) ……124～126
第5表　樹種同定結果 ……134
第6表　田ノ口遺跡掘立柱建物・柵一覧(1)・(2) ……151・152
第7表　田ノ口遺跡周辺の遺跡動態 ……162

別 表 目 次

別表1　田ノ口遺跡土器一覧(1)～(16) ……163～178
別表2　田ノ口遺跡木器一覧 ……178
別表3　田ノ口遺跡石製品一覧 ……178
別表4　田ノ口遺跡玉一覧 ……179
別表5　田ノ口遺跡金属器一覧 ……179
　　報告書抄録 ……180

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境(図版１・３)

田ノ口遺跡は兵庫県丹波市青垣町遠阪字田ノ口に所在する。

丹波市(旧氷上郡)青垣町は、神戸市より北北東へ64km、大阪より北北西へ76.5kmを測り、兵庫県丹波市(旧氷上郡)の最北端部に位置している。旧丹波国に属し、南を旧氷上郡氷上町、西・北を朝来市(旧朝来郡)山東町・生野町、東を京都府福知山市・天田郡夜久野町と接し、東経135度の日本標準子午線が通る。

青垣町は佐治町と芦田村・神楽村・遠阪村の３箇村が昭和30年に合併し町域を形成してきた。更に平成16年11月、氷上郡全域の６町の合併により丹波市となった。平成16年11月現在の丹波市青垣町の人口は7,401人、面積は99.86km^{2}である。

青垣町は、所謂氷上盆地(或いは氷上低地)とよばれる平野の北端に位置しているが、耕地が開けた南方の氷上町・春日町に比べ非常に狭隘である。四方を山に囲まれており、西部には三国岳・栗鹿山、南部には岩屋山といった標高700ｍから1000ｍ級の高峰が巡る。

河川は、ともに栗鹿山に源を発する加古川(佐治川)と遠阪川が主要な河川として町域内を南流している。両河川の合流点に広がる氾濫原や両河川が造り出す河岸段丘と、両河川にそれぞれ流れ込む稲土川・法用谷川・平野川・奥塩久川など中小河川が生み出す扇状地が狭隘な地形の中に居住域や生産域を確保しているのである。

氾濫原と中小河川が造る扇状地のうち、比較的広い可耕地や市街地を確保できる地点は青垣町域では南半に偏り、両河川が合流する佐治・沢野周辺もしくは南に隣接する芦田地区に限られている。北半の遠阪川沿いの遠阪・山垣・中佐治地区や、佐治川沿いの神楽地区では、河岸段丘に向かって口を開いた谷は小さく、この小規模な谷部に形成された扇状地に集落が営まれ、遠坂～和田・山垣・中佐治などの比較的広い平地を主な耕地として現在に至っている。

今回、調査を実施した田ノ口遺跡は、遠阪川の北側の田ノ口城跡が所在する尾根の両側に広がる谷部に存在する。田ノ口城跡の西側に広がるＡ・Ｂ・Ｃ地区は広い谷の扇状地の末端に立地する。東側に広がるＤ・Ｅ・Ｆ地区は谷部の扇状地末端に立地し、鹿島神社が存在している。Ｇ地区は田ノ口城跡の南斜面の尾根上に立地する。扇状地自体が急傾斜であることから、現在は谷奥に住居は営まれておらず、畠・水田として使用されており、近年耕地整理が行われており、一部に水路の付け替えなど大きな地形の改変が行われていた。

以上のように狭隘な地形が目立つ青垣町ではあるが、交通・流通の面から見ると、重要な位置を占めていることがわかる。

青垣町より南へ下る加古川(佐治川)は、最終的には瀬戸内海側へと流れ出ている。この加古川を利用した舟運は特に近世に活発に行われ、氷上町には舟座がおかれたが、明治時代の鉄道の開通によって衰退した。丹波市氷上町石生には分水界が存在しており、日本海側へと流れ出る由良川(黒井川)とともに、標高100ｍを超えない低い分水界を通じた交通路は『氷上回廊』・『加古川・由良川の道』と呼ばれ瀬戸内側・日本海側の南北をつなぐ重要なルートであったと評価されている。

同ルートは現在の国道175号へと引き継がれ、更に氷上町石生周辺で176号と合流、青垣町佐治にて明

石方面から播州峠を越えて加古川沿いに走る427号と合流し、遠阪峠を越え、日本海側へと通じている。また、遠阪谷に限って見るならば、遠阪峠以外にも、平野から福知山へ抜ける榎峠、山垣から福知山へ抜ける梨木峠、和田から谷を詰め福知山へと抜ける千原峠など他地域へと出る山越えの峠が複数知られており、山陰道と言う基幹道から葉脈状に発達した交通路が存在したことがわかる。

第２節　歴史的環境

田ノ口遺跡が所在する遠阪地区は、江戸時代には遠坂村と呼ばれ、明治時代には遠坂村・山垣村と合併し遠阪村となった。この遠阪村の主部は遠阪峠の麓から遠阪川が南流してゆく全長４kmたらずで幅300m程度の狭隘な谷内で、遠阪谷と呼ばれている。因みに､「とおさか」は３箇村を含む広域の範囲である谷全域あるいは峠を表記する場合には「遠阪」の字を用い、峠麓の集落のみを指す場合には「遠坂」の字が当てられている。

青垣町は平安時代には氷上郡に含まれ､『和名抄』には佐治郷の存在が記載されている。佐治郷は現青垣町のほぼ全域と考えられ､『丹波志』では大名草・大稗・小稗・稲土・市原・小倉・惣持・佐治・中佐治・檜倉・文室・山垣・遠坂・小和田・口塩久・奥塩久・東芦田・田井縄・西芦田・栗住野の20村としており、山垣地区・中佐治地区もその中に含まれていたと考えられる。

前節において少しふれた古代山陰道の経路は当地では現国道427号とほぼ重複していたと考えられている｡中世・近世を通してもほぼ同じ経路を通っていたと考えられ､「京街道」とも呼ばれることがある。

古代山陰道は大枝・野口・小野・長柄の各駅家を結び、おそらく氷上郡へ入る手前で丹後支路を分けるが、氷上郡を走る本道は更に星角駅家を通り、佐治駅家、更に遠阪峠を越え、但馬国の最初の駅家である粟鹿駅家へと至る。星角駅家は丹波市氷上町石生あるいは市辺周辺に比定されており、粟鹿駅家は近年の柴遺跡の発掘調査の成果から遠阪峠の但馬側の麓にあたる朝来市山東町柴とほぼ確定されている。

佐治駅家は、遺称地名の旧佐治郷内に存在することは確実であるが、正確な所在地は不明である。現在の佐治地区の中心は沢野・小倉地区と隣接する青垣町役場周辺に求められるが、中佐治の名称､『丹波志』による「山垣字横土居よりも奥を上佐治、口を下佐治」との記載などを考慮するならば、近世以前の佐治の中心を遠阪谷中に求めることも無理ではなく、推定地として中佐治周辺があげられている。

現状では、確度の高い遺跡・遺構は検出されていないが、詳細分布調査の結果をもとにあえて佐治駅家の候補地をあげるならば、古代から中世にかけての遺物が広範囲に広がる中佐治地区の中佐治遺跡、同じく古代から中世にかけての遺物が広範囲に広がる山垣地区の遠阪遺跡、古代に属する布目瓦が採取された山垣遺跡、更に北方の字馬場畑に所在する散布地が候補としてあげられる。

谷中での交通関係を示す地名を検討した場合、古代山陰道に係わる研究の中では、山垣地区に「大道」という地名があることが知られている｡「大道」は山陰道を指すと考えることができる｡山垣地区の「大道」という地名には北から字カゴ畑大道下・字松倉大道下・字大道がある。これらの「大道」という地名は現在の国道沿いもしくは更に西側の山寄りにあり、何れも遠阪川右岸にある。少なくとも山垣地区では山陰道は遠阪川右岸の山際を北上していた可能性が高いと考えられる。駅家の中枢部(駅館院)が山陰道に面していたと考えるならば、河川を間に挟むことは考え難く、中佐治遺跡・山垣遺跡はその点では不適と考え、右岸側に位置する遠阪遺跡及び馬場畑散布地周辺に駅家が存在する可能性を考えておきたい。

遠阪遺跡が存在する地点は現在の遠阪谷内の中心的な場所でもあり、遠阪小学校を含む集落は他の集落に比べ規模が大きい。但馬側から遠阪峠を越え、南下してきた場合、狭隘な谷が最初に大きく開ける場所でもある。後述するが、中世前期に地頭職として足立氏が山垣地区に拠点をおいた理由の一つには遠阪谷の中央のまとまった平地と言う点があげられる。

馬場畑散布地は更に峠よりにある平坦地である。字名以外に、遠阪谷が扼される立地であり、現状では中世の遺物の散布地でもあり興味深い。更に詳細を確認する必要がある。

佐治駅家についてこれ以上紙数を割く余力はないが､「大道」以外に注目したい地名として遠阪遺跡の対岸、左岸側にある「字萬田口」がある。萬田は馬田、即ち駅田(駅起田)の存在を想起させる。

中世前期には、佐治郷を継承した佐治荘が成立する。佐治荘の成立年代・本家・領家などは不明であるが、貞和５年(1349)11月27日の『大徳寺領諸荘園文書目録』の追記によれば、文和４年(1355)には佐治荘内の吉宗名が大徳寺領であったことが伺える。

佐治荘は佐治郷北部を継承して成立しており、現丹波市青垣町の北半に広がると考えられる。その主要な範囲は遠阪谷にあったと考えられる。遠阪字今出に所在する熊野神社には「シヨウノ宮」があり神楽谷四ケ、遠阪村、山垣村、中佐治村、朝来郡柴村の産土神であると『青垣町誌』は伝えている｡「シヨウノ宮」は「荘の宮」を指すと考えられ、佐治荘の惣社として機能していた可能性が考えられる。

佐治荘の地頭は足立遠政が承元３年(1209)に補されて関東から入部したとされ(足立系図)、山垣地区を本拠に荘内には一族が広く居住した。城ノ腰遺跡の北側には、中世後期に足立氏が拠点とした山垣城跡があり、谷中には主に15世紀代に活動したと考えられている方形居館跡の山垣館跡が存在している。山垣館跡からは黒色土器も出土しており、遺跡の始まりが更に遡る可能性も考えられよう。

足立氏は中世後期には山垣城を拠点とした国人へと成長するが、天正７年(1579)明智光秀の丹波攻めによって落城、敗亡し、一族の多くは帰農し、現在に至っている。

第３節　田ノ口遺跡周辺の遺跡(図版２・３)

田ノ口遺跡周辺を含めた旧氷上郡内全域の遺跡については、氷上郡教育委員会発行『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(4)－兵庫県氷上郡青垣町』(1997)・『ブラ山・ボラ山』(1995)・兵庫県教育委員会発行『七日市遺跡』・『市辺遺跡』・『横田遺跡』・『沢野遺跡』・『城之腰遺跡』・『中佐治古墳群』・『土井遺跡』・『伝平等寺跡』など既刊の北近畿自動車道建設関連の報告書に詳しく記され、本報告では多くを触れない。周辺の遺跡については、分布地図(図版３)と一覧(図版２)をあげておく。

遠阪谷内ではこれまでに旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。明確に人々の生活痕が確認できるのは縄文時代に入ってからで､土井遺跡からは縄文時代中期の土器が出土しており､もっとも古い。縄文時代後期の土器が土井遺跡・田ノ口遺跡・沢野遺跡で出土している。土井遺跡では時期不明ながら、狩猟に伴う陥穴を調査している。縄文晩期の土器は応相寺遺跡でまとまって出土しており、土井遺跡・沢野遺跡・田ノ口遺跡でも出土している。田ノ口遺跡と沢野遺跡では遺構に伴っていないが、弥生時代前期の土器と一緒に出土しており、応相寺遺跡とのあり方の違いを検討する必要がある。

土井遺跡では弥生時代中期の竪穴住居・土坑、弥生時代後期の木棺墓などを調査している。

弥生時代の大規模な集落遺跡としては規模の大きな扇状地が広がる沢野遺跡から、後期の竪穴住居・土器棺墓を調査している。竪穴住居は古墳時代初頭にかけて継続して多数調査されている。沢野遺跡は

青垣地区では最も広い扇状地に展開する遺跡として、以後、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代の集落遺跡が広範囲に確認されている。ボラ山遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭の台状墓14基が調査されている。

古墳時代の集落遺跡としては、遠阪谷内では田ノ口遺跡・土井遺跡・応相寺遺跡・沢野遺跡などがあり、後期の竪穴住居を検出している。特に沢野遺跡では古代にかけて継続的に多数の竪穴住居が築かれている。田ノ口遺跡では土坑を調査している。

古墳は、ブラ山古墳・ボラ山１号墳群・中佐治古墳群・応相寺古墳群・沢野遺跡などで調査が行われている。ブラ山古墳では竪穴石室と小石棺を調査している。ボラ山１号墳群では円墳を調査している。中佐治古墳群では、尾根の先端にある中佐治５号墳を調査しており、５世紀末頃の竪穴系横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。尾根の頂上では６世紀の木棺直葬墳を埋葬施設とする円墳を２基調査している。応相寺古墳群では７基の横穴式石室を埋葬施設とする小規模な円墳を調査している。沢野遺跡では居住域内で後期の木棺墓を検出している。

古代の遺跡としては沢野遺跡・土井遺跡・田ノ口遺跡があり、奈良時代から平安時代の遺構・遺物を検出しており、山垣遺跡・遠阪遺跡・中佐治遺跡・応相寺遺跡等からは遺物が出土している。

飛鳥時代から奈良時代の遺構は概して少なく、遠阪谷では土井遺跡において飛鳥時代の竪穴住居、奈良時代の土坑を検出している。

平安時代の遺跡としては沢野遺跡・土井遺跡・田ノ口遺跡・伝平等寺跡・平野遺跡などがあげられる。遠阪谷では、田ノ口遺跡・土井遺跡・平野遺跡が何れも10世紀頃より集落を形成し、中世へと継続する遺跡である。これらの遺跡からは緑釉陶器などの官衙的な遺物が出土しており、土井遺跡では工房跡、田ノ口遺跡では経塚や屋敷墓を伴っており、開発領主や有力農民の住居と考えられている。

中世の遺跡としては10世紀から続く上記の遺跡のほか、山垣館・伝平等寺跡(12世紀から)などがある。山垣館は関東から13世紀に佐治荘へ入部した足立氏の拠点である。足立氏は関東で培った湿地開発の技術によって周辺(字蛇湿などの地名が残る)を開発していったと考えられる。

伝平等寺跡は隣接する土井遺跡と密接な関係をもつ寺院遺跡である。

土井遺跡は、在地有力者の住居を指す土居に通じる「土井」や「カイチ」、用水管理に関わる「湯落ち」などの荘園地名をもっており、田ノ口遺跡と並び、中世佐治荘の主要な集落であったと考えられる。また、伝平等寺跡は土井遺跡の村落内寺院であったと考えられる。

田ノ口遺跡では16世紀末の建物や土坑を調査しており、北側の山上に存在する田ノ口城跡の基盤となる集落であり重要である。

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査に至る経緯(第４・５図)

国土交通省近畿地方整備局(旧建設省近畿地方建設局)は北近畿豊岡自動車道を計画した。北近畿自動車道は豊岡市を起点とし丹波市春日町(当時氷上郡春日町)を終点とする延長65.9km の国土交通大臣指定に基づく高規格幹線道路である。規格は道路幅員22m の４車線である。この道路は、但馬地域と丹波地域を直結し、さらに京阪神都市圏との連結を強化するとともに、地域を活性化させることを目的として計画された。

一般国道483号春日和田山道路Ⅰは、この北近畿豊岡自動車事業の一部として、丹波市青垣町から丹波市春日町に至る延長24.4km の道路であり、兵庫国道事務所が事業を計画し実施した。平成２年度に事業着手し、平成４年度から用地買収に着手した。この用地買収に伴い、平成３年度に路線全域の踏査(分布調査)を実施した。さらに平成５年度からは分布調査で埋蔵文化財の存在の可能性を指摘した地点については丹波市春日町(当事氷上郡春日町)域から順次確認調査を実施し、本発掘調査も平成５年度から開始した。平成８年度からは工事が始まった。

丹波市青垣町域(当事氷上郡青垣町)については、平成５年度から確認調査を開始し、平成11年度から本発掘調査を開始した。

田ノ口遺跡は、平成12年度に確認調査を実施し、平成13年度・平成14年度・平成15年度に第２次確認調査を実施した。さらに確認調査をもとに平成13年度・14年度・15年度・16年度に本発掘調査を実施した。

なお、平成17年４月17日には春日インターチェンジから氷上インターチェンジの間6.9㎞を暫定２車線の供用とし、平成18年７月22日には氷上インターチェンジから遠阪ランプの17.5㎞の区間および和田山間までの全線で暫定２車線の供用を開始した。

第２節　分布調査

１．分布調査(遺跡調査番号910019)

平成３年度に一般国道483号春日和田山道路の計画路線内のうち､近畿舞鶴自動車道春日インターチェンジ(当時氷上郡春日町、現在丹波市春日町)から遠阪トンネル(当時氷上郡青垣町、現在丹波市青垣町)にかけての区間、約24.4km について分布調査を行った。

調査は平成３年４月15日～19日の５日間で、延べ45人で実施した。

この分布調査において、全区間で41箇所について埋蔵文化財が包蔵している可能性が高いと判断した。当時の氷上郡青垣町域では今回報告する田ノ口遺跡(№41地点)を含め21箇所(№21～№41)の遺物散布地等の埋蔵文化財を包蔵している可能性が高い地点を確認した。

なお、丘陵地など下草の繁茂が著しくて踏査不可能だった地点や路線幅等用地が未確定であるため、用地内に遺跡が及ぶかどうか判断できなかった箇所は再度調査が必要であることを指摘した。

第３節　第１次確認調査(遺跡調査番号2000313)

分布調査において遺物の散布をみた田ノ口遺跡のうち、工事範囲に該当する計画道路延長約600m、幅約60m に対し、試掘坑(トレンチ)を設定した。試掘坑(トレンチ)は、水田１筆ごとに１～３箇所ずつ、１－１～１－26までの合計26箇所を設定した。

各試掘坑の規模は幅１m×全長20m(20m²) の長方形である。それぞれの試掘坑において、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。

調査の結果、１－８・１－13・１－14・１－15・１－16の６箇所の試掘坑から、柱穴・土坑・遺物包含層等の遺構・遺物を確認した。調査地の西側部分の１－１～１－７・１－９・１－10の９箇所は圃場整備で地形が大きく改変されているが、遠阪川の氾濫原であり遺跡が存在していないことを確認した。

以上のことから、田ノ口城から南に派生する尾根を挟んだ１－８から１－16の範囲で本発掘調査が必要であることを確認した。

調査期間は、平成12年11月６日～平成13年１月19日。調査面積は520m² であった。

(1)確認調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　大村敬通

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　高瀬一嘉

総務課　課長　森　俊雄

調査第１班　調査専門員

調査担当　調査第１班　主査　種定淳介　主任　池田正弘　研修員　大崎晃司

第４節　本発掘調査および第２次確認調査

分布・確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査を平成13年度・平成14年度・平成15年度・平成16年度に実施した。

なお、本発掘調査の進捗に伴い、第１次確認調査において「本発掘調査の必要がない」と調査の取り扱いをした地域へ遺跡が拡大する可能性が生じた。また、田ノ口城から南に派生する尾根上にも平坦地が確認できた。このため、協議を行い、本発掘調査の進捗状況に伴い平成13年度・平成14年度・平成15年度に第２次確認調査を実施した。

１．平成13年度の発掘調査

平成13年度には、確認調査の成果に基づき、Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区・Ｄ地区の本発掘調査とＤ地区北東側の確認調査と尾根上の確認調査を実施した。

(1)本発掘調査(遺跡調査番号2001100)

Ａ地区では古代末から中世にかけての掘立柱建物と溝を検出した。Ｂ地区では古代末から中世にかけての重複が著しい掘立柱建物と土坑、焼土土坑・溝を検出した。Ｃ地区では古代末から中世にかけての柱穴を検出した。

Ｄ地区では古代末から中世にかけての掘立柱建物と土坑、焼土土坑・集石・墓を検出した。また古墳時代の土坑を検出した。

以上、主として古代末から中世にかけての密度の濃い集落遺跡であることが判明した。さらにＤ地区北東部の平坦地に広がる様相を示した。

さらに遺跡立地を把握するため立命館大学の青木哲哉氏による現地での指導をうけた。現地指導に伴いＢ地区とＤ地区の扇状地・旧河道部分について現地形の観察及び下層確認トレンチによる精査を実施した。

調査期間中の平成13年11月29日に報道機関に調査成果を公表し、12月２日の現地説明会を開催した。

調査期間は、平成13年８月29日～12月８日。調査面積は4,113m² である。

(2)第２次確認調査（遺跡調査番号2001242・2001243）

分布調査では、調査必要箇所にはなっていなかった田ノ口城から南に派生するＢ地区とＤ地区の間の２本の尾根上には、本発掘調査の写真撮影時に平坦地が存在することを確認した。このため今年度は２本の尾根の内、西側の尾根に対して等高線と直行方向に幅１ｍ×全長７ｍのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。（遺跡調査番号2001242）

調査の結果、地表下約30cm で地形に沿って傾斜する岩盤を検出し、人工的な平坦面や遺物は出土しなかった。

さらに、遺構密度の濃淡はあるものの、Ｄ地区北東部の平坦地に広がる可能性が大きいことが推測された。このため、本発掘調査中に第２次確認調査（遺跡調査番号2001243）を行った。調査の結果、北東側に遺跡が広がることを確認し、本発掘調査が必要である事を確認した。

本発掘・確認調査を含めた調査期間は、平成13年12月３日～平成14年３月22日。調査面積は4,687m² である。

２．平成14年度の発掘調査

平成14年度には、平成13年度に本発掘調査を実施したＤ地区の東側の農道を挟んだＥ－２区の本発掘調査と、さらに北東側の平坦地に遺跡の広がる可能性が出てきたため、第２次確認調査を実施した。

(1)本発掘調査（遺跡調査番号2002155・2002156）

Ｅ－２区の本発掘調査では中世の柱穴と土坑を検出し、さらに南東方向に遺跡が広がる可能性が看取できた。

調査期間は、平成15年１月20日～年３月12日。調査面積は324m² である。

(2)第２次確認調査（遺跡調査番号2002156）

平成13年度の本発掘調査時に、広い平坦地が延びるＤ地区の南東部へ遺跡が拡大する可能性が生じた。このため、Ｄ地区の南東側にトレンチ（３－１）を設定し、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。調査を実施したところ柱穴・溝を検出し、さらに東側に延びることが判明したため２本のトレンチ（３－11・３－12）を追加して調査を実施した。

調査の結果、各トレンチにおいて柱穴・溝を検出し、古代から中世にかけての土師器・須恵器・輸入磁器が出土し、Ｄ地区の南東側（Ｅ地区）も本発掘調査が必要であることを確認した。

調査期間は、平成15年１月20日～年３月12日。調査面積は80m² である。

３．平成15年度の発掘調査

平成15年度の本発掘調査では、平成13年度に本発掘調査を実施したＤ地区の南東側に広がるＥ地区の本発掘調査を実施した。本発掘調査中に水路を挟んだ南東側にも遺跡が広がる可能性が出てきたため、第２次確認調査を実施して、本発掘が必要なことが判明した。これによりＦ地区の本発掘調査を実施した。

(1)本発掘調査（遺跡調査番号2003090）

本発掘調査ではＤ地区の南東側に接するＥ－３区と平成14年度に本発掘調査を実施したＥ－２区の南東側に位置するＥ地区と、さらに水路を挟んで南東側に位置するＦ地区の本発掘調査を実施した。また平成13年度に本発掘調査を実施したＢ地区とＣ地区の間に位置するＢ－２区の本発掘調査を実施した。

Ｅ－３区では中世の柱穴を検出した。Ｅ地区は中世の掘立柱建物と土坑と焼土土坑、古墳時代の竪穴住居を検出したほか、縄文時代後期から弥生時代前期の遺物を伴う落ち込みを検出した。

Ｆ地区はＥ地区の南東側に水路を挟んで位置する。南西側で中世の掘立柱建物や土坑・井戸を検出した。北東側では水田や流路を検出した。

Ｂ－２区はＢ地区とＣ地区の間の農道の下に位置する。中世の柱穴を検出した。

さらに遺跡立地を把握するため立命館大学の青木哲哉氏による現地での指導をうけた。現地指導に伴い現地形の観察及びＥ地区の扇状地・旧河道部分については下層確認トレンチによる精査を実施した。

調査期間は、平成15年８月22日～平成16年２月25日。調査面積は4,410m^2である。

(2)第２次確認調査（遺跡調査番号2003224）

平成15年度のＥ地区の本発掘調査を実施したところ、調査区の南側及び水路を越えた南東側に広がる可能性が生じた。このため、Ｅ地区の南東側に７本（４－１～４－７）とＥ地区の南側に３本（４－８～４－10）の合計10本（４－１～４－10）のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。

さらに平成13年度に確認調査を実施した田ノ口城から南に派生する２本の尾根の内、東側の尾根に対して等高線と直行方向にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。

調査の結果、４－２・４－３・４－４・４－８・４－９の５箇所で柱穴・土坑を検出したほか、４－２では水田を検出した。４－１では中世の遺物が出土した。４－５・４－７では近世の流路を検出した。４－６では耕作土直下で基盤面が出現し、４－10では大きく撹乱されていた。尾根部分は傾斜が緩やかになった部分に集石を検出した。

以上、４－８・４－９部分でＥ地区の調査区を拡張するとともに、Ｅ地区の水路を挟んだ４－２～４－４部分（Ｆ地区）と東側の尾根部分（Ｇ地区）で本発掘調査が必要であることを確認した。

調査期間は、平成15年11月13日・14日。調査面積は115m^2である。

４．平成16年度の発掘調査

(1)本発掘調査（遺跡調査番号2004012）

平成16年度には、これまで未買収であったＤ地区の北東部に隣接するＤ－３区の本発掘調査と昨年度実施した確認調査で集石を確認した尾根上のＧ地区の本発掘調査を実施した。Ｄ－３区では中世の柱穴と土坑を検出した。Ｇ地区はＧ－１区とＧ－２区の調査を実施し、Ｇ－１区で中世の墓を、Ｇ－２区で経塚を検出した。

調査期間は、平成16年７月12日～８月14日。調査面積は296m² である。

平成16年度の調査で田ノ口遺跡についての現地における発掘調査を終了した。

５．発掘調査の組織

(1)平成13年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　大村敬通

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　吉識雅仁

総務課　課長　森　俊雄

調査第１班　調査専門員　小川良太

調査担当　調査第１班　主査　西口圭介　主査　篠宮　正

臨時的任用職員　宮田耕平

調査補助員　櫻井雅子・竹本正明・中村真也・藤原　悟

(2)平成14年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　藤本修三

主幹　輔老拓治

総務課　課長　森　俊雄

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　高瀬一嘉

調査第３班　調査専門員　小川良太

調査担当　調査第１班　主査　別府洋二

調査第２班　主任　松岡千寿

調査第３班　主査　山上雅弘

調査参加者　櫻井雅子・中村真也

(3)平成15年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　柏原正民

総務課　課長　織田正博

調査第１班　調査専門員　西口和彦

調査担当　調査第３班　主査　西口圭介

調査第１班　主任　松岡千寿

調査補助員　櫻井雅子・竹本正明・野村大作・西本寿子

(4)平成16年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　柏原正民

総務課　課長　織田正博

調査担当　調査第１班　調査専門員　吉田　昇　主査　山田清朝

第５節　出土品整理

平成13年度・平成14年度・平成15年度に現地において遺物洗浄の一部を行った他は、平成19年度・平成20年度・平成22年度に兵庫県立考古博物館において実施した。

１．出土品整理の概要

平成19年度は、出土遺物の洗浄・ネーミング・接合・補強を行い、実測や採拓するものを選択した。

平成20年度は、出土遺物の実測・拓本を行い、土器の復原の後、金属器・木製品・石器とあわせて写真撮影を行い、写真を整理した。また金属器の保存処理を行った。出土品の分析は、年代測定を㈱加速器分析研究所に、土器の胎土分析及び木器の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

平成22年度は、遺構図をトレースが行えるように補正し、一昨年度に実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。また木製品の保存処理を行った。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

２．出土品整理の組織

(1)平成19年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長(総務部長兼務)　松下信一

総務課　課長　若狭健利

埋蔵文化財調査部長　若生晃彦　主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　西口和彦　担当課長補佐　森内秀造　主査　菱田淳子

主査　岡本一秀

整理担当　調査第２班　主査　西口圭介　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　眞子ふさ恵・伊藤ミネ子・早川有紀・荻野麻衣・谷脇里奈

日々雇用職員　的場美幸

(2)平成20年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信
副館長(総務部長兼務)　藤原　悟
総務課　課長　若狭健利
埋蔵文化財調査部長　若生晃彦　主幹　岡崎正雄
整理保存班　調査専門員　森内秀造　主査　菱田淳子　主査　篠宮　正
主査　岡本一秀

整理担当　整理保存課　担当課長補佐　岡田章一
調査第１課　担当課長補佐　西口圭介
調査第１課　主査　山田清朝
整理保存班　主査　篠宮　正
非常勤嘱託員　島田留里・前山三枝子・川村由紀・西村美緒・
吉田優子・島村順子・伊藤ミネ子・奥野政子・三好綾子・
荒木由美子・荻野麻衣・谷脇里奈・吉村あけみ
日々雇用職員　本庄瑛美

(3)平成22年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信
副館長(総務部長兼務)　安部邦明
総務課　課長　前川浩子
埋蔵文化財調査部長　若生晃彦　主幹　吉田　昇
整理保存課　課長　村上泰樹　主査　篠宮　正　主査　山本　誠
主査　岡本一秀

整理担当　整理保存課　担当課長補佐　岡田章一
調査第１課　担当課長補佐　西口圭介
調査第２課　主査　山田清朝
整理保存課　主査　篠宮　正
非常勤嘱託員　島田留里・宮田麻子・森園悦子・西村美緒
日々雇用職員　谷脇里奈

第３章　本発掘調査の成果

第１節　発掘調査の概要

１．田ノ口遺跡の立地（図版５　写真図版１～３・８・18・19・24・25）

田ノ口遺跡は、加古川の上流の遠阪川が形成する狭隘な谷の中に位置する。谷の中に位置しているにもかかわらず、遠阪川の北岸の南に緩やかに傾斜する扇状地に立地しているため、比較的日照時間が長い。Ａ・Ｂ・Ｃ地区は田ノ口城跡の尾根の北西側に広がる広い谷の扇状地の末端に立地する。Ｄ・Ｅ・Ｆ地区は尾根の南東側に広がる谷部の扇状地末端に立地している。Ｄ地区の南側に接して鹿島神社が存在している。Ｇ地区は田ノ口城跡の南斜面の尾根上に立地する。Ａ～Ｆ地区の発掘調査前の土地の利用状況は水田・畠として利用されており、Ｇ地区は山林であった。Ａ～Ｆ地区は近年耕地整理が行われており、一部に水路や農道の付け替えなどの大きな地形の改変が行われていた。標高はＡ～Ｃ地区が180.5m～180.8m、Ｄ～Ｆ地区が180.2m～181.9m、Ｇ地区が201.0m～207.0m を測る。

２．調査区の呼称

本発掘調査対象地の平坦地部分は、近年の圃場整備事業の実施により整然と農道と水路が整備されている。したがって必然的に調査区は水路および農道によって区切られることとなった。このため田ノ口城跡の尾根の北西側に広がる谷のうち、水路の西側はＡ地区、水路の東側はＢ地区、さらに農道の東側をＣ地区と呼称した。その後、Ｂ地区とＣ地区の間の農道の下も調査を実施し、Ｂ－２区と呼称したことにより、実質的にＢ地区とＣ地区がつながったため、Ｂ・Ｃ地区として報告する。

田ノ口城跡の尾根の南東側に広がる谷を当初はＤ地区と呼称していたが、その後の調査範囲の拡大に伴い、農道より南東側をＥ地区、さらに水路をはさんだ南東側をＦ地区と呼称した。Ｄ地区の北東側に追加で調査した地区をＤ－３地区と呼称した。Ｄ地区の南東側の農道の南東とＥ地区の間をＥ－２区と呼称した。農道の下をＤ－２区として調査を行ったが、Ｅ地区・Ｅ－２区と合わせて報告するため、Ｅ－３区と付け直した。

田ノ口城跡の南斜面の尾根上に立地する地区をＧ地区と呼称した。

３．田ノ口遺跡の調査

確認調査は平成12年度に実施し、本発掘調査を平成13年度～平成16年度にかけて実施した。

Ａ地区は平成13年度に本発掘調査を実施した。Ｂ・Ｃ地区のＢ地区とＣ地区は平成13年度に本発掘調査を実施し、Ｂ－２区は平成15年度に本発掘調査を実施した。

Ｄ地区は平成13年度に本発掘調査を実施し、Ｄ－３区は平成16年度に本発掘調査を実施した。

ＥＥ地区とＥ－３区は平成15年度に本発掘調査を実施し、Ｅ－２区は平成14年度に本発掘調査を実施した。Ｆ区は平成15年度に本発掘調査を実施した。Ｇ区は平成16年度に本発掘調査を実施した。

第２節　Ａ地区の調査

１．調査の概要（図版６　写真図版35～37・41）

Ａ地区は、Ｂ地区の水路を挟んだ西隣に隣接する。Ａ地区は、平成13年度に本発掘調査を実施した。田ノ口遺跡の西端に位置しており、標高は180.8m 前後である。全長50m、短辺４m、長辺14m、調査面積459m² を測る東西に細長い台形の調査区である。

基本層序は圃場整備後の水田耕作土と床土の下に圃場整備時の盛土が存在し、その下の黒褐色細砂から粗砂を基盤として遺構を形成している。南西側部分は特に撹乱が著しい。

遺構は、掘立柱建物・柵・溝を検出した。ただし、調査区の幅が狭いことや撹乱が多いことなどから掘立柱建物や柵として認識できなかった柱穴が多数存在する。

遺構の年代は遺物から見て、平安時代から鎌倉時代にかけてが中心である。

２．遺構

(1)掘立柱建物・柵・柱穴群（図版８～10　写真図版37・38）

柱穴は調査区の東半部中心に分布しており、掘立柱建物９棟、柵１基を復原した。しかし、調査区が狭く、調査区外に伸びていることと、圃場整備による撹乱と削平のため残りが悪いため、建物が完全に復原できるものはない。

柱穴から出土した遺物は少ないが、柱穴 P0004A・P0013A・P0028A・P0038A・P0046A・P0047A・P0062A・P0085A・P0089A からは遺物が出土している。

SB001A（図版８）

検出状況　調査区北東部のＭ－27・28区に位置する。東側と北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。中央部分は撹乱を受けている。SB002A～SB006A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N25°Ｅにとる総柱建物である。南北３間（5.80m）×東西３間（6.35m）以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.20m・1.80m、東西１間2.15m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～40cm、柱痕は径約15cm、深さは約20cm～30cm である。

出土遺物　柱穴 P0008A からは須恵器鉢１、柱穴 P0010A からは土師器椀２・皿３、柱穴 P0056A からは土師器皿４が出土している。

SB002A（図版８）

検出状況　調査区北東部のＭ－27・28区に位置する。東側と北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。中央部分は撹乱を受けている。SB001A・SB003A～SB006A と重複し SB002A を切っている。

形状・規模　南北軸を N25°Ｅにとる総柱建物である。桁行南北３間（9.00m）×梁行東西２間（5.70m）以上の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.20m・4.50m・2.30m、梁行１間3.10m・2.60m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm 前後、深さは約15cm～40cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB003A（図版９）

検出状況　調査区北東部のＬ・Ｍ－27・28区に位置する。北側は調査区外に延びているため本来の規

模は不明である。中央部分は撹乱を受けている。SB001A・SB002A・SB004A～SB006A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N25°E にとる総柱建物である。南北３間(6.50m)×東西２間(5.30m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.20m～2.10m、東西１間3.30m・2.00m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～35cm、深さは約15cm～35cm である。

出土遺物　柱穴 P0070A からは土師器皿９が出土している。

SB004A(図版９)

検出状況　調査区北東部のＬ・M27・28区に位置する。北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。中央部分は撹乱を受けている。SB001A～SB003A・SB005A・SB006A と重複し SB002A に切られている。

形状・規模　南北軸を N29°E にとる総柱建物である。南北３間(6.90m)×東西２間(5.25m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.90m・2.20m、東西１間1.80m・3.45m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～35cm、深さは約15cm～35cm である。

出土遺物　柱穴 P0030A からは土師器鍋10が出土している。

SB005A(図版９)

検出状況　調査区北東部のＭ－27区に位置する。東側と北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。SB001A・SB006A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N26°E にとる総柱建物跡である。南北２間(4.60m)以上×東西１間(2.00m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.30m、東西１間2.00m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径35cm 前後、柱痕は径約15cm、深さは約15cm～35cm である。

出土遺物　柱穴 P0003A からは土師器皿(５・６)と鉄器(M1)、柱穴 P0009A からは土師器皿７が出土している。

SB006A(図版９　写真図版38)

検出状況　調査区北東部のＭ－27区に位置する。東側と北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。SB001A・SB005A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N17°E にとる掘立柱建物である。南北２間(3.40m)以上×東西１間以上の規模である。建物の柱間は、南北１間1.70m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～40cm、深さは約25cm～40cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB007A(図版10)

検出状況　調査区南東部のＬ－27・28区に位置する。東側は調査区外に延び、南側は撹乱のため本来の規模は不明である。SB008A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N12°E にとる掘立柱建物である。南北１間(1.40m)×東西１間(2.20m)の規模である。北側の柱列は南側の柱列に比べて規模が小さいため庇の可能性が高い。建物の柱間は、南北１間1.40m、東西１間2.20m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～50cm、深さは約25cm～40cm である。南側の柱穴列には拳大の礫が詰まっていた。

出土遺物　柱穴 P0029A からは土師器椀８が出土している。

SB008A（図版10）

検 出 状 況　調査区南東部のＬ－27・28区に位置する。東側は調査区外に延び、南側は撹乱のため本来の規模は不明である。SB007A と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N25°Ｅにとる建物跡である。南北１間(2.50m)以上×東西２間(3.70m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.50m、東西１間2.00m・1.70m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm、柱痕は径約15cm、深さは約15cm～30cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SB009A（図版10）

検 出 状 況　調査区西部のＭ－28・29区に位置する。北側は調査区外に延び、周囲は撹乱が多いため本来の規模は明らかではない。

形状・規模　現状では南北軸を N23°Ｅにとる総柱建物である。南北２間(5.10m)×東西２間(4.20m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.70m・2.40m、東西１間2.10m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～40cm、深さは約15cm～25cm である。

出 土 遺 物　柱穴 P0045A からは土師器皿11が出土している。

SA010A（図版10）

検 出 状 況　調査区西部のＭ－29・30区に位置する。調査区の端に位置しており、周囲に撹乱が存在するため柵列になるか掘立柱建物になるかは不明である。

形状・規模　柱列に直交する方位を N28°Ｅにとる柱穴列である。東西２間(3.60m)の規模である。建物の柱間は、1.80m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径35cm～40cm、深さは約20cm～30cm である。

出 土 遺 物　柱穴 P0081A からは土師器の小片が出土している。

(2)溝

溝は１条検出した。

SD002A（図版10　写真図版38）

検 出 状 況　調査区東部のＬ・Ｍ－27区に位置する。SB004A の柱穴に切られている。撹乱で全容は明らかでない。

形状・規模　調査区の長軸に直交する直線的な溝である。Ｕ字状の断面をもち、規模は幅0.25m、深さ11cm、延長3.60m 以上を測る。

埋　　土　埋土は上層が灰黄褐色、下層が褐灰色のシルト～中砂である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物

(1)土器類（図版11　写真図版39・40）

SB001A

１は東播系須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して小さい縁帯を作り出す。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。２は土師器椀である。高台の断面は三角形状で比較的高い。外面は指おさえの後ナデ調整、内面はナデ調整の後、ミガキ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈

する。３・４は非ロクロ成形の土師器皿である。３は平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部～体部内外面にヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。４は体部が直線的に緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施し、色調は浅黄橙色を呈する。

SB002A

５～７は非ロクロ成形の土師器皿である。５は体部と底部の境は不明瞭で体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。６は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。７は平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

SB007A

８は土師器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB003A

９は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部と底部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

SB004A

10は土師器鍋である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

SB009A

11は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は比較的薄く、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が、体部内外面にはヨコナデ調整がそれぞれ施される。色調は浅黄橙色を呈する。

ピット内

土師器　12～18は非ロクロ成形の皿である。12は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。13は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。14は器壁が全体に非常に厚い。平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。15は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が、体部内外面にはヨコナデ調整が施される。色調は橙色を呈する。16は体部が短く緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。17は器壁が比較的厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰黄色を呈する。18は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。19は皿片である。外面は指おさえの後ナデ調整を施し、色調は橙色を呈する。

須恵器　20・21は椀である。20は体部が直線的に外上方に延び、内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。21は平底で体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黄灰色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

青磁　22は碗である。高台は幅が広く、比較的高い。底部の器壁は厚く、体部は直線的に外上方に立ち

上がる。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。畳付～高台裏は露胎である。龍泉窯系青磁で13世紀代に比定される。

包含層

土師器　23は椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともナデ調整を施し、色調は橙色を呈する。24・25は非ロクロ成形の皿である。24は平底で、器壁は全体に厚い。体部は短く直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。25は口縁部が大きく外方にひらく。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

瓦器　26は椀である。断面は三角形状に退化した高台を貼り付け、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

須恵器　27・28は鉢である。27は底部を浅い輪高台風に削りだす。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。28は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

白磁　29は碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも釉が剥落し、胎土はにぶい黄橙色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅱ類と考えられる。

撹乱坑中

土師器　30・31は非ロクロ成形の皿である。30は体部が緩やかに外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内面にはナデ調整、体部～底部外面には指おさえの後、ナデ調整がそれぞれ施される。色調は橙色を呈する。31は体部が中位で屈曲し、口縁部は外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整が、体部内外面にはヨコナデ調整がそれぞれ施される。色調は橙色を呈する。

須恵器　32は椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が認められる。色調は灰色を呈する。33は鉢である。口縁部の断面は三角形状に肥厚し、口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。焼成は不良で色調は褐灰色を呈する。

34は甕である。口縁部は外反気味に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施し、頸部外面に斜め方向の叩き目が微かに残る。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

白磁　35は碗である。浅い削り出し高台を持ち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

(2)金属器（図版11　写真図版40）

不明鉄製品（M1）

長さ9.9cm、幅6.6cm 厚さ0.7cm を測る水滴状の形状の製品である。柄の部分は直線である。

第３節　Ｂ・Ｃ地区の調査

１．調査の概要（図版12　写真図版35・36・41～44・59・77）

Ｂ・Ｃ地区はＡ地区とＤ地区の間に位置しており、標高は180.5m 前後である。Ｂ地区のうちＢ－１区は、平成13年度に、Ｂ－２区は平成15年度に本発掘調査を実施した。Ｃ地区は平成13年度に本発掘調査を実施した。Ｂ－１区は、全長41m、幅36m、調査面積838m² を測る三角形の調査区である。Ｂ－２区は、全長35m、幅４m、調査面積140m² を測る南北に細長い長方形の調査区である。Ｃ地区は全長19m、短辺２m、長辺７m、調査面積72m² を測る南北に細長い台形の調査区である。

基本層序は圃場整備後の水田耕作土と床土の下に圃場整備時の盛土が存在し、その下の黒褐色極細砂から細砂を基盤として遺構を形成している。南側部分は特に撹乱が著しい。

遺構は、掘立柱建物・土坑・溝を検出した。ただし、調査区の幅が狭いことや重複が著しいことなどから掘立柱建物として認識できなかった柱穴が多数存在する。遺構の年代は遺物から見て、平安時代から鎌倉時代にかけてが中心で、古墳時代の遺構がわずかに存在する。

Ｂ－２区およびＣ地区は柱穴など検出したが、調査区の幅が狭いことなどから掘立柱建物の復原はできなかった。したがって遺物のみの記述にとどめる。

２．遺構

(1)掘立柱建物群・柱穴群（図版14　写真図版50）

Ｂ地区では多数の柱穴を検出し、24棟の掘立柱建物を復原したが、建物に所属していない柱穴が多数存在する。このうち、P0004B・P0015B・P0016B・P0019B・P0022B・P0032B・P0033B・P0043B・P0053B・P0058B・P0060B・P0066B・P0068B・P0073B・P0075B・P0084B・P0088B・P0090B・P0094B・P0136B・P0156B・P0180B・P0184B・P0185B・P0189B・P0206B・P0209B・P0225B・P0227B・P0240B・P0241B・P0243B・P0276B・P0281B・P0294B・P0341B・P0349B・P0351B・P0353B・P0356B・P0357B・P0358B・P0376B・P0381B・P0393B・P0395B・P0398B・P0401B・P0439B・P0441B・P0443B・P0456B・P0460B・P0525B・P0541B・P0546B・P0547B・P0901B・P0903B・P0911B・P0913B・P0914B・P0920B・P0926Bから遺物が出土している。また、基盤面に包含している巨礫に礫を重ね礎石としているもの P0538B も存在した。

SB001B（図版15　写真図版45・47・48）

検出状況　調査区北部のＭ・Ｎ－25・26区に位置する。北側は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。SB002B・SB003B・SB007B と重複しているが、先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸を N30°Ｅにとる総柱建物である。南北３間(6.40m)以上×東西３間(6.30m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.20m、東西１間2.20m・1.90m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、柱痕は径約15cm、深さは約15cm～45cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB002B（図版15　写真図版45・47・48）

検出状況　調査区北部のＬ・Ｍ・Ｎ－25・26区に位置する。SB001B・SB003B・SB007B・SB008B と重複しており、SB003B に切られている。

形状・規模　南北軸を N27°Ｅにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(6.70m)×桁行東西４間

(9.20m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間3.35m、桁行１間2.30m・2.00m・2.50mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、深さは約30cm～50cmである。

出土遺物　柱穴P0013B・P0278B・P0010B・P0374Bから土師器皿(39～45)、P0010Bから瓦器椀(46)、P0724Bから須恵器椀(49)が出土した。

SB003B(図版16　写真図版45・47・48)

検出状況　調査区北部のＬ・Ｍ・Ｎ－25・26区に位置する。SB001B・SB002B・SB004B・SB007B・SB008Bと重複しており、SB002Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN28°Ｅにとる総柱建物である。南北２間(5.50m)×東西２間(4.80m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.75m、東西１間2.40mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径40cm～50cm、柱痕は径15cm～20cm、深さは約20cm～40cmである。

出土遺物　柱穴P0723Bから土師器皿(36)、P0725Bから土師器鉢(37)と瓦器皿(38)、P0722Bから砥石(S5)が出土した。

SB004B(図版16　写真図版45・47)

検出状況　調査区北部のＭ・Ｎ－24・25区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB003Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN26°Ｅにとる総柱建物である。南北１間(2.60m)以上×東西３間(6.90m)以上の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.60m、梁行１間2.20m～2.40mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径約30cm、深さは25cm～35cmである。

出土遺物　柱穴P0062Bから土師器坏(81)が出土した。

SB005B(図版17　写真図版45・47)

検出状況　調査区西部のＫ・Ｌ・Ｍ－25・26区に位置する。SB006B～SB009Bと重複しており、SB006BとSB007B・SD145Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN28°Ｅにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(7.30m)×桁行東西４間(10.00m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.50m・2.60m・2.20m、桁行１間2.40m・2.90m・2.30m・2.40mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径35cm～60cm、柱痕は径約20cm、深さは約20cm～65cmである。

出土遺物　柱穴P0744Bから土師器椀(53)、P0749Bから瓦器椀(54)、P0753Bから須恵器皿(55)、P0748Bから須恵器椀(56)、P0747Bから須恵器鉢(57)、P0743Bから須恵器甕(58)、P0151Bから白磁皿(59)が出土した。

SB006B(図版17　写真図版45・47・51)

検出状況　調査区西部のＬ－25・26区に位置する。SB005B・SB007B・SB008Bと重複しており、SB001B・SB007Bに切られている。

形状・規模　南北軸をN30°Ｅにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(4.40m)×桁行東西３間(7.20m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.50m・1.90m、桁行１間2.20m・2.50mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～40cm、柱痕は径15cm～20cm、深さは約20cm～40cmである。

出土遺物　柱穴P0751Bから土師器坏(60)と須恵器甕(63)、P0752Bから土師器皿(61)、P0753Bから

須恵器椀(62)が出土した。

SB007B(図版18　写真図版45・47・48)

検出状況　調査区西部のＬ・Ｍ－25・26区に位置する。SB001B～SB003B・SB005B・SB006B・SB008Bと重複しており、SB006BとSD145Bを切って、SB005Bに切られている。

形状・規模　南北軸をN27°Eにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北３間(8.00m)・梁行東西２間(5.40m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間3.00m・3.30m・1.70m、梁行１間2.70mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、柱痕は径約15cm、深さは約20cm～40cmである。

出土遺物　柱穴P0242Bから土師器皿(78)が出土した。

SB008B(図版18　写真図版45・47)

検出状況　調査区西部のＬ・Ｍ－25・26区に位置し、西側は調査区外に延びている。SB002B・SB005B～SB007Bと重複しており、SB005Bに切られている。

形状・規模　南北軸をN32°Eにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北３間(6.80m)×梁行東西２間(5.50m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.00m・2.20m・2.60m、梁行１間2.50m・3.00mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径45cm～60cm、深さは約30cm～50cmである。

出土遺物　柱穴P0741Bから土師器皿(47)、P0037Bから黒色土器椀(48)と白磁碗(51)、P0741Bから須恵器底部(50)、P0601Bから白磁皿(52)が出土した。

SB009B(図版19　写真図版45・47・52)

検出状況　調査区西部のＫ・Ｌ－25・26区に位置する。SB005B・SK148B・SK161B・SD132B・SD128B・SB201Bと重複しており、SK148B・SK161B・SD132B・SD128Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN29°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(2.80m)×桁行東西３間(3.10m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.80m、桁行１間3.10m・2.50m・2.00mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～45cm、深さは35cm～40cmで、すべての柱穴に石が入っている。

出土遺物　柱穴P0491Bから須恵器甕(64)が出土した。

SB010B(図版19　写真図版45・46)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置する。SB015B・SB016B・SB019B・SD128Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN30°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(4.50m)×桁行東西４間(8.70m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.50m・2.00m、桁行１間2.50m・2.20m・2.10m・2.40mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～30cm、深さは約15cm～30cmである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB011B(図版20　写真図版45・46・49)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB012B～SB014B・SK160B・SK161B・SD112B・SD113Bと重複し、SB014BとSK160Bを切る。

形状・規模　南北軸をN22°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(7.00m)×桁行東西４間(8.00m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.10m・2.80m、桁行１間1.90m・2.10mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～45cm、深さは約15cm～50cmである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB012B(図版20　写真図版45・46・49)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB011B・SB013B・SB014Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN28°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(4.60m)×桁行東西３間(6.30m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.50m・2.10m、桁行１間1.80m・2.40m・2.10mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～60cm、深さは約25cm～50cmである。

出土遺物　柱穴P0552Bから土師器坏(65)が出土した。

SB013B(図版21　写真図版45・46・49・52)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB011B・SB012B・SB014B・SB019Bと重複し、SB014Bに切られている。

形状・規模　南北軸をN26°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(5.10m)×桁行東西３間(7.30m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.55m、桁行１間2.50m・2.30mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～40cm、深さは約30cm～40cmである。

出土遺物　柱穴P0100B・P0101Bから土師器皿(68・69)、P0101Bから土師器坏(70)、P0367Bから白磁碗(71)が出土した。

SB014B(図版21　写真図版45・46・52)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB011B・SB012B・SB013B・SB019Bと重複し、SB011Bに切られ、SB013Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN28°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(4.50m)×桁行東西３間(6.50m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.50m・2.00m、桁行１間2.30m・1.90mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～35cm、深さは約15cm～35cmである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB015B(図版22　写真図版45・46・51)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置する。SB010B・SB016B・SD128Bと重複し、SD128Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN32°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(7.00m)×桁行東西３間(8.00m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.20m・2.40m、桁行１間2.65mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～60cm、柱痕は径約15cm、深さは約20cm～60cmで、多くの柱穴に石が入っている。

出土遺物　柱穴P0768Bから須恵器椀(72)と鉢(73)、P0769Bから須恵器鉢(74)が出土した。

SB016B(図版22　写真図版45・46・53)

検出状況　調査区中央部のＪ・Ｋ－24・25区に位置する。SB010B・SB015B・SD128Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN40°Eにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北３間(7.35m)×梁行東西３間(6.90m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.45m、梁行１間3.10m・1.90mと中央が広い。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～45cm、深さは約15cm～35cmである。

出土遺物　柱穴P0267Bから白磁碗(66)が出土した。

SB017B(図版23　写真図版45・46・50)

検出状況　調査区東部のＪ・Ｋ－23・24区に位置する。SB018B～SB024B・SD171Bと重複し、SB020Bに切られ、SD171Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN32°Eにとる南北棟の総柱建物である。梁行東西３間(5.80m)×桁行南北５間(10.20m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.00m・1.80m、桁行１間2.15m・1.80mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～45cm、柱痕は径約15cm、深さは約15cm～30cmである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB018B(図版23　写真図版45・46)

検出状況　調査区東部のＫ－23・24区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB017B・SB019Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN30°Eにとる総柱建物である。南北１間(2.20m)以上×東西２間(6.00m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.20m、東西１間1.85m・2.30mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～30cm、深さは約15cm～20cmである。

出土遺物　柱穴P0902Bから土師器皿(75)が出土した。

SB019B(図版24　写真図版45・46・50)

検出状況　調査区東部のＪ・Ｋ－23・24区に位置し、北東側は調査区外に延びている。SB013B・SB014B・SB017B・SB018BとSB021B～SB024Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN27°Eにとる総柱建物である。南北３間(6.70m)以上×東西２間(7.20m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.00m・2.70m、東西１間2.00m・2.90m・2.30mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～45cm、深さは約10cm～20cmである。

出土遺物　柱穴P0179Bから土師器椀(80)と砥石(S4)が出土した。

SB020B(図版24　写真図版46)

検出状況　調査区南東部のＪ・Ｋ－23・24区に位置し、南側は大きく削平を受けている。SB017B・SB021B～SB024Bと重複し、SB021Bに切られ、SB017Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN32°Eにとる総柱建物である。南北３間(7.20m)×東西３間(6.90m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.40m、東西１間2.45m・2.00mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～55cm、深さは約15cm～45cmである。

出土遺物　柱穴P0316Bから土師器皿(76)が出土した。

SB021B(図版25　写真図版46)

検出状況　調査区南東部のＪ－24区に位置している。SB017B・SB019B・SB020B・SB022B～SB024Bと重複し、SB020Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN30°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(4.00m)×桁行東西３間(5.40m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.00m、桁行１間1.80mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～40cm、深さは約35cm～55cmである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB022B(図版25　写真図版46)

検出状況　調査区南東部のＪ・Ｋ－23・24区に位置している。SB017B・SB019B～SB021B・SB023B・SB024Bと重複し、SB023Bを切っている。

形状・規模　南北軸をN29°Eにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(6.20m)×桁行東西４間(8.40m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.10m・2.50m・1.60m、桁行１間2.30m・1.50mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～45cm、深さは約15cm～50cmである。

出土遺物　柱穴P0490Bから土師器鍋(79)が出土した。

SB023B(図版26　写真図版46・53)

検出状況　調査区南東部のＪ－23・24区に位置し、南側は削平を受けている。SB017B・SB019B～SB022B・SB024Bと重複し、SB022Bに切られている。

形状・規模　南北軸をN34°Eにとる東西棟の総柱建物である。桁行南北３間(4.90m)×梁行東西４間(8.10m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間1.50m・2.10m・1.30m、梁行１間1.65m・2.40mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～40cm、深さは約15cm～40cmである。

出土遺物　柱穴P0519Bから土師器鍋(82)が出土した。

SB024B(図版26　写真図版46)

検出状況　調査区南東部のＪ－23・24区に位置している。SB017B・SB019B～SB023Bと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　南北軸をN35°Eにとる東西棟の総柱建物跡である。梁行南北２間(4.10m)×桁行東西３間(6.20m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.00m・2.10m、桁行１間1.80m・2.30m・2.10mである。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～35cm、深さは約20cm～35cmである。

出土遺物　柱穴P0513Bから須恵器鉢(77)が出土した。

(2)土坑

土坑は７基検出した。

SK213B(図版27　写真図版54・55・57)

検出状況　調査区西部のＬ－25区に位置し、SK130Bに切られている。

形状・規模　平面形は南北に長い隅丸長方形で、断面形は逆台形である。南端は一段深くなっている。規模は南北1.45m、東西0.65m、深さは20cmを測る。北側の西側面は火を受けて赤変している。

埋　　土　最下層に炭層が堆積しており、北端には焼けた平石が存在する。炭層の上には粗砂が堆積している。上層には焼土や炭を含んでいる。

出土遺物　瓦器椀(188)がある。

SK537B(図版27　写真図版58)

検出状況　調査区南東部のＪ－24区に位置する。

形状・規模　平面形は円形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は直径約0.65m、深さ約13cmを測る。

埋　　土　埋土は暗赤褐色の礫が混じるシルト質極細砂から極細砂である。

出 土 遺 物　土師器鍋(187)がある。

SK131B(図版27)

検 出 状 況　調査区西部のＫ－25区に位置し、SD132B の西側にある。

形状・規模　平面形は楕円形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北約1.40m・短径1.25m、深さ約23cm を測る。

埋　　土　埋土は黒褐色の小礫が混じるシルト質極細砂である。

出 土 遺 物　鉄釘(M2)がある。

SK148B(図版27)

検 出 状 況　調査区西部のＫ－25区に位置し、SD132B に切られている。

形状・規模　平面形は不定隅丸方形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は長径約2.20m、短径1.50m、深さ約20cm を測る。

埋　　土　埋土は灰黄褐色の小礫が混じるシルト質極細砂である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SK160B(図版28　写真図版54・55)

検 出 状 況　調査区中央部のＬ－25区に位置し、SD132B の東側にある。掘立柱建物 SB011B に切られている。

形状・規模　平面形は不定隅丸方形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北約2.30m、東西2.20m、深さ約12cm を測る。

埋　　土　埋土は黒褐色の極細砂で礫を含む。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SK161B(図版28　写真図版55・56)

検 出 状 況　調査区中央部のＫ－25区に位置する。SD128B の東側にあり、下方は SD128B に流れ出ている。

形状・規模　平面形は瓢箪形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は東西約4.20m、南北最大2.30m、深さ約12cm を測る。

埋　　土　埋土は暗褐色のシルト質極細砂で礫を含む。

出 土 遺 物　土師器皿(179～184)・鍋(185)、須恵器鉢(186)、鉄釘(M7)がある。

SK130B(図版29　写真図版47・54・55)

検 出 状 況　調査区中央部のＬ－25区に位置する。SD132B の西側にあり、下方は SD132B に流れ出ている。SK213B を切っている。

形状・規模　平面形は南北に長く不整形で、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北約７m、東西約３m、深さ約20cm を測る。

埋　　土　埋土は上層が暗褐色、下層がにぶい黄褐色のシルト質極細砂で、上層は炭と焼土を含む。

出 土 遺 物　土師器皿(157～164)・鍋(165～168)、瓦質土器羽釜(169)、黒色土器皿(170)、瓦器椀(171)、須恵器椀(172)・鉢(173・175)・甕(174)、施釉陶器壺(176)、白磁碗(177)、青磁碗(178)がある。

(3)溝

溝は７条検出した。

SD113B（図版30　写真図版58）

検出状況　調査区南東部のＬ－24・25区に位置する。

形状・規模　幅30cm、深さ15cm、全長3.1m を測る直線的な溝である。主軸方位を N33°E にとる。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD112B（図版30）

検出状況　調査区南東部のＬ－24区に位置する。北東側は調査区外に延びている。

形状・規模　幅35cm～70cm、深さ７cm、全長3.8m 以上を測る直線的な溝である。主軸方位を N32°E にとる。

埋　　土　埋土は褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD128B（図版30　写真図版54・55・58）

検出状況　調査区南東部のＫ・Ｌ－24・25区に位置する。SD143B と合流し、SD132B に分流する。途切れているが、SD171B に繋がる。

形状・規模　幅30cm～90cm、深さ10cm を測り、北西から南に屈折し、南東へ屈折する溝である。南北の主軸方位を約 N20°E に、東西の主軸方位を N58°W にとる。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD132B（図版30　写真図版58）

検出状況　調査区南東部のＫ・Ｌ－25区に位置し、SD128B から分流している。SK148B を切っている。

形状・規模　幅60cm、深さ28cm、全長7.6m 以上を測る直線的な溝である。主軸方位を N37°E にとる。

埋　　土　埋土は暗褐色のシルト質極細砂で、上層は炭を含む。

出土遺物　土師器皿（189～192）・鍋（193）、須恵器壺（194）がある。

SD143B（図版30　写真図版58）

検出状況　調査区南東部のＬ－25区に位置する。土坑 SK130B と SD128B とを結ぶ溝である。

形状・規模　幅70cm、深さ16cm、全長約1.0m を測る溝である。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　土師器鍋（195）、須恵器壺（196）がある。

SD171B（図版30　写真図版58）

検出状況　調査区南東部のＪ－24区に位置する。

形状・規模　北西から南西に屈曲する幅25cm、深さ５cm の溝である。途切れているが、位置関係から考えると SD128B から繋がる溝である。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂で炭を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD145B

検出状況　調査区中央部のＬ－25区に位置する。SK130B の西側にある。SB005B と SB007B に切られている。

形状・規模　幅30cm、深さ15cm、全長2.4m を測る直線的な溝である。主軸方位を N27°E にとる。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。

出 土 遺 物　土師器皿(197)がある。

(4)古墳時代の遺構

SB201B(図版30)

検 出 状 況　調査区西部のＫ・Ｌ－25・26区に位置する。南西角は撹乱を受けている。

形状・規模　南北軸を N23°E に取る建物跡である。南北１間(3.20m)×東西１間(2.60m)の規模である。中央部に被熱変色面 SF111B が存在する。

柱　　穴　円形を基本とし掘形径約30cm～約40cm、深さは約25cm～30cm である。

SF111B(図版30　写真図版58)

検 出 状 況　SB201B の中央部に位置する焼土遺構である。

形状・規模　楕円形を呈する被熱変色面である。長径約0.55m の赤変部の中央部に、直径約0.30m の還元黒色部がある。

出 土 遺 物　古墳時代の土師器甕(288)が出土した。

３．遺物

(1)土器類(図版31～37・40　写真図版４～７・60～74・77・78)

SB003B

36はロクロ成形の土師器皿である。平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整が、内面の体部から底部は回転ナデ調整がそれぞれ施される。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黄橙色を呈する。37は土師器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。焼成はあまく、色調は浅黄橙色を呈する。38は瓦器皿である。平底で体部と底部の境は不明瞭である。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

SB002B

土師器　39・44はロクロ成形の皿である。39は体部が短く直立し、内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。44は平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は橙色を呈する。40～43・45は非ロクロ成形の皿である。40は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。41は平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施し、底部外面はナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。42は平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施し、底部外面はナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。43は平底で体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を、体部～底部内外面にはナデ調整を施す。焼成はにぶい橙色を呈する。45はやや丸底気味の平底で、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施し、体部外面に低い段をもつ。体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

瓦器　46は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面には強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整、体部内面はミガキ調整を施す。色調は内面が褐灰色、外面が浅黄橙色を呈する。

SB008B

土師器　47は非ロクロ成形の皿である。平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

黒色土器　48は椀である。低い高台を浅く削り出し、体部は僅かに内彎気味に外上方に立ち上がる。体部外面は回転ナデ調整を施し、体部～底部内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は内面がにぶい黒褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。

須恵器　49は椀である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整がそれぞれ施される。底部外面は不調整で糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器と考えられる。50は鉢あるいは壺である。器壁は全体に厚く、底部外周に低い高台を削りだす。体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面には粗い叩き目が残る。体部内面にはヨコ方向のハケ目調整を施す。色調は灰白色を呈する。

白磁　51は碗である。高台の断面は台形状で比較的低い。体部は直線的に外上方に延びる。外面は露胎でヘラケズリ調整を施す。内面は透明釉を施釉し、やや黄色味を帯びた灰白色に発色する。華南産白磁で横田・森田分類の白磁碗Ⅵ類相当と考えられる。52は皿である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。華南産白磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SB005B

土師器　53は椀の底部と考えられる。平高台で側面はナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は明赤褐色を呈する。

瓦器　54は椀である。高台の断面は台形状で比較的高い。内外面ともナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器　55は皿である。平底で器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。56は椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。57は鉢である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁端部は若干内側に引き出す。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を、体部内外面には回転ナデ調整をそれぞれ施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。いずれも東播系須恵器である。58は壺である。口縁部は外方にひらき、口縁端部は若干内側に引き出す。内外面とも回転ナデ調整を施し、色調は灰色を呈する。

白磁　59は皿である。口縁部は大きく外方にひらき、端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。華南産白磁である。

SB006B

土師器　60は杯である。非ロクロ成形で平底、体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。61は非ロクロ成形の皿

である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調は浅黄橙色を呈する。

須恵器　62は椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は若干肥厚して、端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は暗灰色を呈する。63は甕の胴部片である。内面はナデ調整、外面に米印状の叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。

SB009B

64は須恵器甕である。口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。

SB012B

65は土師器杯である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～底部内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB016B

66は白磁碗である。浅い削り出し高台をもち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。外面は露胎でヘラケズリ調整を施す。内面は透明釉を施釉して灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SB013B

67・68は非ロクロ成形の土師器皿である。67は器壁が全体に比較的薄く、底部はやや上げ底気味の平底を呈する。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。底部外面は不調整である。色調は橙色を呈する。68は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB011B

69・70は非ロクロ成形の土師器皿である。69は平底で体部と底部の境は不明瞭で、体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。70は平底で体部は短くほぼ直上に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整をそれぞれ施す。色調は浅黄橙色を呈する。71は白磁碗である。浅い削り出し高台を持ち、底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延び、底部内面に沈線が１条巡る。内面は透明釉を施釉し、外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅷ類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SB015B

72は須恵器椀である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。73・74は須恵器鉢である。73は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は直上に引き上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。74はやや丸底気味の平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は直上につまみ上げ、口縁部の１箇所を捻って片口を作り出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整、底部内面は仕上げナデ調整をそれぞれ施す。色調は暗灰色を呈する。いずれも東播系須恵器である。

SB018B

75は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部から体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整をそれぞれ施す。色調は橙色を呈する。

SB020B

76は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で器壁は全体に比較的薄い。体部と底部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調は橙色を呈する。

SB024B

77は須恵器鉢である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部は若干玉縁状に肥厚し、端部は上方につまみ上げる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

SB007B

78は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB022B

79は土師器鍋である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は外方に引き出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

SB019B

80は土師器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

SB004B

81は土師器杯である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強い回転ナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB023B

82は土師器鍋である。頸部はほぼ直立し、口縁端部は外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を加える。体部外面に平行叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。長谷川分類播丹型Ⅰ類相当で、13世紀後半代に比定される。

ピット内

土師器

皿　83・88・97・107はロクロ成形の皿である。83は底部の器壁が厚く、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。88は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。97はやや上げ底気味の平底で、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。107は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面は回転ナデ調整、底部外面はヘラおこしの後、ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

84～87・89～96・98～106・108～110・114～116は非ロクロ成形の皿である。84は平底で底部と体部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～

底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。85は器壁が全体に厚く、体部は短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。86は体部と底部の境は不明瞭で、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は指おさえの後ナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。87はやや丸底気味の平底で、器壁は全体に厚い。体部と底部の境は不明瞭で体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。89は平底で体部と底部の境は不明瞭で、体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面にヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。90は平底で器壁は全体に比較的厚い。体部と底部の境は不明瞭で体部は緩やかに短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は淡橙色を呈する。91は体部と底部の境は不明瞭で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調は橙色を呈する。92は平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。93は平底で体部と底部の境は不明瞭で、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は黄灰色を呈する。94は体部が短く外上方に延びる。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。95は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。96は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。98は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。99は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。100は底部と体部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。101は平底で器壁は比較的厚く、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。102は平底で底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整、底部内面は指押さえの後ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。103はやや丸底気味の平底で体部は短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。104は平底で器壁は比較的薄く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調は内面が暗灰色、外面がにぶい橙色を呈する。105は平底で、底部と体部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。106は平底で器壁は比較的薄く、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。108は平底で器壁は全体に薄い。底部と体部の境は不明瞭で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整、底部内面はナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。109は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。110は器壁が比較的厚く、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を、体部内外面はヨコナデ調整をそれぞれ施す。色調

はにぶい黄橙色を呈する。114は平底で体部は外反気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面は指おさえの後ナデ調整を加え、指頭圧痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。115は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施し、色調は橙色を呈する。116は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整、底部内面は指おさえの後、ナデ調整をそれぞれ施す。色調はにぶい橙色を呈する。

杯　111は平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整が、体部内外面はヨコナデ調整が、底部内外面はナデ調整がそれぞれ施される。色調は橙色を呈する。112は器形が大きく歪む。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。113は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整が、底部内外面はナデ調整がそれぞれ施される。色調は黄橙色を呈する。

椀　117は体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。118は平高台で高台側面はナデ調整する。体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面～底部内面は回転ナデ調整、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。119は低い平高台を作り出し、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は不調整である。色調は橙色を呈する。須恵器椀の生焼けの可能性も考えられる。

鍋　120は粘土紐巻上げ成形で、底部は丸底を呈する。体部は大きく内彎し、口縁部は外方にひらく。口縁端部は若干外方につまみ出す。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部内面はナデ調整の後、横方向の細かいハケ目調整を施す。体部～底部外面は不調整で横方向の叩き目が残る。色調は褐灰色を呈する。121は体部が内彎し、頸部は短くほぼ直立する。口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は横方向のヘラケズリ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。焼成は浅黄橙色を呈する。いずれも長谷川分類播丹型Ⅰ類相当で13世紀後半代に比定される。122は陶器鍋である。頸部は直立し、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内面はヨコナデ調整、口縁部外面は指おさえの後ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。体部外面には平行叩き目が残る。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。丹波焼三本峠北窯跡出土品に類例が認められる。

黒色土器

皿　123・124は皿である。123は体部が緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整の後、ミガキ調整を施す。体部外面はヨコナデ調整を施す。色調は内面が黄灰色、外面が灰白色を呈する内黒土器である。124は平底で底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。内面～体部外面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施し、底部外面はヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黒色を呈する。

椀　125は平底で若干平高台風に削り出す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデの後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で、ヘラおこし痕が残る。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する内黒土器である。126は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する内黒土器である。127は平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面は回転ナデ調整、体部内面は回転ナデの後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する内黒土器である。128は平底で体部は内彎して外上方に立ち上がる。体部内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を、体部外面は回転ナデ調整をそれ

ぞれ施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面が浅黄橙色を呈する内黒土器である。129は内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を、体部外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する内黒土器である。

瓦器

皿　130は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部内面は回転ナデ調整の後、ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黒色を呈する。

椀　131～135は椀である。131は高台が断面台形状で比較的高く、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。132は平底で器壁は比較的薄い。高台の断面は台形状で比較的高く、体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面はナデ調整、体部内面はミガキ調整を施し、暗文が残る。色調は暗灰色を呈する。133は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整を施す。体部内面はナデ調整の後、ミガキ調整を施し暗文が残る。色調は暗灰色を呈する。134は体部が僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は僅かに内傾して丸味をもつ。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。135は高台は断面Ｕ字形の比較的高い貼り付け高台で、体部は直線的に外上方に立ち上がる。外面はナデ調整、内面はナデ調整の後、ミガキ調整を施す。色調は灰色を呈する。

須恵器

皿　136は平底で器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は灰白色を呈する。東播系須恵器である。

椀　137～142は東播系須恵器椀である。137は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。138は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。139は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。140は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整をそれぞれ施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。141は体部が直線的に外上方に延び口縁端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。142は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。143は低い平高台を作り出し、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。焼成は不良で色調はにぶい橙色を呈する。

鉢　144～153は鉢である。144は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁部は上面に端面をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。145は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。146は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。147は口縁部が上下に拡張する。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器であ

る。148は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は若干内側に引き出す。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈し、外面は灰被りが見られる。149は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。外面に重ね焼き痕が見られ、色調は灰白色を呈する。150は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整でヘラおこし痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。151は低い平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整でヘラおこし痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られ、色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。152は平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。153は平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、外面はヘラケズリ調整を施す。色調は灰色を呈する。

甕　154は口縁部が大きく外方にひらき、口縁端部は側面に端面をもつ。口縁部内外面は回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰色を呈する。

白磁　155は碗である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部はやや細長い玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。156は碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。いずれも横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SK130B

土師器

皿　157～164は非ロクロ成形の皿である。157は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。158は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部から底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。159は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。160は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。161は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。162は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。163は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。164は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

鍋　165・166は鍋である。165は体部が内彎し、口縁部はやや外傾する。口縁端部は外方につまみ出し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。外面に若干煤が付着する。長谷川分類播丹型Ⅰ類相当で13世紀後半代に比定される。166は体部が内彎し、口縁部は若干外傾する。口縁端部は外方に水平方向につまみ出し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。外面に煤が若干付着する。色調は浅黄橙色を呈する。167は陶器鍋である。頸部はほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、体部

外面には平行叩き目が残る。焼成は堅緻で、色調は灰褐色を呈する。168は陶器鍋である。体部は内彎し、頸部は直立する。口縁端部は外方につまみ出し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面に当具痕が微かに残る。体部外面に平行叩き目が残る。焼成は堅緻で色調はにぶい褐色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。

瓦質土器ほか　169は瓦質土器羽釜である。口縁部はほぼ直立し、口縁部外面の断面は台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。170は黒色土器皿である。平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黒色を呈する。171は瓦器椀である。高台の断面は三角形状で比較的高い。内外面ともナデ調整を施し、色調は暗灰色を呈する。

須恵器　172は椀である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内面は回転ナデの後、多方向のナデ調整、体部外面には回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。173は鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は直上につまみ上げる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。174は甕である。口縁部は大きく外方にひらき、口縁部側面に凹線が１条巡る。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。口縁部外面には微かに平行叩き目が残り、体部外面には格子目状叩きが残る。色調は灰色を呈する。175は鉢である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は上方につまみ上げ、口縁部の１箇所を捻って片口を作る。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。東播系須恵器である。

施釉陶器　176は施釉陶器壺である。体部は大きく内彎し頸部は直立する。内外面ともナデ調整を施す。外面にヘラ描き施文の後。灰釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。内面は露胎である。外面に横耳の貼り付け痕が残る。華南産灰釉四耳壺と考えられ、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

白磁　177は碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

青磁　178は碗である。高台の断面は台形状で比較的高い。体部は直線的に外上方に延び、底部内面に凹線が１条巡る。外面に櫛描き文、内面に櫛描き雷光文を施文し、内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ黄色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SK161B

土師器

皿　179～184は非ロクロ成形の皿である。179は平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。180は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。181は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ

調整を施す。底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。182はやや丸底気味の平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は緩やかに短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。183はやや丸底気味の平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。184は平底で体部は短く内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

鍋　185は器壁が全体に薄く、体部は大きく内彎する。口縁部は外方にひらき、口縁端部は若干外方につまみ出す。粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は褐灰色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅰ類で13世紀後半代に比定される。

須恵器　186は鉢である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は上方につまみ上げ、口縁部の１箇所を捻って片口を作り出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。

SK537B

187は土師器鍋である。器壁は比較的厚い。頸部はほぼ直立し、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は粗いハケ目調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は橙色を呈する。長谷川分類播丹型Ⅱ類相当で、14世紀前半代に比定される。

SK213B

188は瓦器椀である。高台の断面は三角形状で比較的高く、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整の後、ミガキ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

SD132B

土師器

皿　189～192は非ロクロ成形の皿である。189は平底で体部は短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。190は平底で体部は短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。191はやや丸底気味の平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。192は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

鍋　193は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調はにぶい褐色を呈する。

須恵器　194は壺である。平底で、幅が広く低い輪高台を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施す。

SD143B

土師器　195は鍋である。体部は内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は粗いハケ目調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調はにぶい橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅰ類相当で、13世紀後半代に比定される。

須恵器　196は壺である。平底で底部の器壁は厚い。高台の断面は長方形状で低く、体部はほぼ直線的

に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

SD145B

197は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で器壁は比較的薄い。体部は短く、ほぼ直上に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

包含層

土師器

皿　198～213・215～216・218～221は非ロクロ成形の皿である。198は平底で器壁は全体に厚い。底部と体部の境は不明瞭で、体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも指おさえの後、ナデ調整を施し、体部外面下位に指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。199は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。200は丸底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。201は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。202は丸底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。口縁部に煤が付着する。色調はにぶい橙色を呈する。203は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。204はやや丸底気味の平底で、底部と体部の境は不明瞭である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。205は平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を、底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。206は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。口縁端部は煤が付着する。色調は橙色を呈する。207は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。208は平底で体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。体部～底部内面はナデ調整、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は橙色を呈する。209は全体に大きく歪む。平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施し、体部外面に段が認められる。体部～底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。210は体部は緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。211は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。212は平底で器壁は全体に厚い。体部と底部の境は不明瞭で、体部は緩やかに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。213は平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。215は平底で器壁は全体に薄い。体部と底部の境は不明瞭で体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。216はやや丸底気味の平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部～底部内外面は指おさえの後、ナデ調整

を施し、体部外面下位に指頭圧痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。218は平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は褐灰色を呈する。219は平底で器形は全体に歪む。底部と体部の境は不明瞭で体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面と底部内面は指おさえの後ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。220は平底で体部と底部の境は明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。221は平底で底部と体部の境は明瞭である。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

214はロクロ成形の皿である。やや丸底気味の平底で、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

杯　217はやや丸底気味の平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

甕　222は体部が内彎し、口縁部は外方にひらく。口縁部内外面はヨコナデ調整、口縁部～体部内面は横方向のハケ目調整を施す。体部外面には縦方向の叩き目が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

鍋　223～230は鍋である。223は体部が内彎し、口縁部は外方にひらく。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調は黄橙色を呈する。224は口縁部が若干外方にひらく。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅴ類相当で、15世紀後半～16世紀初頭に比定される。225は頸部がほぼ直立し、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。226は体部が内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁部は上面に水平に端面をもち、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅰ類で13世紀後半代に比定される。227は体部が内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁部は上面に水平に端面を持ち、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅰ類で13世紀後半代に比定される。

228・229は陶器鍋である。228は体部が内彎し、頸部は若干外傾して、口縁端部は水平方向に引き出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。焼成は堅緻で色調はにぶい黄橙色を呈する。丹波三本峠北窯に類例が認められる。229は体部が内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁部は上面に水平に端面を持ち、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。焼成は堅緻で色調は灰褐色を呈する。丹波三本峠北窯に類例が認められる。230は体部は短くほぼ直立し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。231は羽釜である。口縁部は若干内傾し、口縁部外面の断面は台形状のやや幅の広い鍔を貼り付ける。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調は褐灰色を呈する。

黒色土器　232は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面は浅黄色を呈する内黒土器である。

瓦器　233は椀である。体部は内湾気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内

面はナデ調整を施す。体部外面は指おさえの後、ナデ調整を加え、指頭圧痕が残る。色調は灰色を呈する。234は椀である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は灰色を呈する。235は皿である。平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

瓦質土器　236は鍋である。体部はほぼ直立し、口縁部は「く」の字状に屈曲して外方にひらく。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。237は壺である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器

椀　238・240～242は椀である。238は平底で断面は長方形状の低い高台を貼り付ける。内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。240は高台の断面が台形状で若干外方にひらく。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。241は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。242は低い平高台をもち、底部内面は若干窪む。高台側面は不調整で、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部内面はナデ調整、底部外面は不調整で糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が認められる。色調は灰色を呈する。

杯　239は平底で高台の断面は台形状で低い。体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

鉢　243～245・247～258はいずれも東播系須恵器鉢である。243は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。244は平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。245は平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面は回転ナデ調整、体部～底部内面はナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。247は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に若干肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。248は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に若干肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。249は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は直上につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。250は体部が僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。251は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は直上につまみ上げる。口縁部の１箇所を捻って片口を作り出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。252は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。253は器壁が比較的薄い。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデの後、仕上げナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。254は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。内

外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。255は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は若干肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。256は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に若干肥厚する。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。257は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は若干玉縁状に肥厚する。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。258は体部が直線的に外上方に延びる。口縁端部は若干上下に拡張して断面は三角形状を呈する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。

壺　246は平底で輪高台は欠失し、体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

甕　259～265は甕である。259は口縁部が大きく外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内面は回転ナデ調整を施す。体部外面には縦方向の叩き目が残る。色調は灰色を呈する。260は頸部がほぼ直立する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部外面は不調整で叩き目が残る。色調は灰色を呈する。261は胴部片である。内面はナデ調整を施す。外面は叩き目が残る。色調は灰黄色を呈する。262は甕の胴部片である。内面はナデ調整を施し、外面は米印状の叩き目が残る。色調は外面黒褐色、内面灰白色を呈する。263は胴部片である。内面はナデ調整を施し、一部にヘラ状工具痕が見られる。外面は米印状の叩き目が残る。内外面とも黄灰色を呈する。264は胴部片である。内面はナデ調整を施し、外面は米印状の叩き目が残る。色調は外面が黒褐色、内面は灰色を呈する。265は口縁部が大きく外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、体部外面に一部叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

無釉陶器　266は甕である。口縁部は大きく外方にひらき、口縁端部を上下に引き出し、いわゆるＮ字状口縁を作る。内外面とも回転ナデ調整を施し、外面全面に灰釉が付着して灰オリーブ色に発色する。常滑焼で13世紀代に比定される。

施釉陶器　267は緑釉陶器皿である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも緑釉を施釉する。胎土は須恵質で、薄いオリーブ灰色に発色する。268は灰釉陶器壺である。平底で体部は大きく内彎する。無頸で、口縁端部は丸味ををもつ。内外面とも淡く灰釉を施釉し灰白色に発色する。底部外面は露胎である。古瀬戸小壺で茶入れとして使用されたと考えられる。

白磁　269・270は碗である。高台は浅く削り出し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。271は皿である。高台の断面は長方形状で比較的幅が広く低い。体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。山本分類の白磁皿Ⅲ類相当で12世紀代に比定される。272は碗である。高台の断面は台形状で幅が広く比較的低い。体部は緩やかに外上方に延びる。内面は透明釉を施釉して灰白色に発色する。外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅱ類相当で12世紀代に比定される。273・274は碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅱ類相当で12世紀代に比定される。275は碗である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰

白色に発色する。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。276は碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。277は皿である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。華南産白磁である。278は皿である。高台は全体に比較的薄く、高台の断面は三角形状で低い。内面は透明釉を施釉し、緑灰色に発色する。外面は露胎である。華南産白磁或いは景徳鎮窯産の青白磁と考えられる。279は壺の底部である。高台は細く高く、底部の器壁は非常に厚い。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。華南産白磁の四耳壺の底部と考えられ、12世紀後半代に比定される。

青白磁　280は水滴である。型作り成形で上面中央に穿孔が１箇所見られる。外面は型押しで施文し、透明釉を施釉して、明オリーブ灰色に発色する。内面は露胎である。景徳鎮窯産と考えられる。281は合子の蓋である。体部上面は中央が高まり、口縁部は直立する。外面は型押しで施文し、透明釉を施釉して明緑灰色に発色する。口縁部外面～内面は露胎である。景徳鎮窯産で13世紀代に比定される。

青磁　282～286は碗である。282は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面は櫛描き施文、内面は櫛描き雷光文をそれぞれ施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ黄色に発色する。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。283は体部が内彎気味に外上方に延びる。内面は片切彫りで草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。龍泉窯系青磁劃花文碗で13世紀前半代に比定される。284は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。外面に片切彫りで鎬のあまい蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で13世紀後半代に比定される。285は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面に片切彫りで鎬のあまい蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し明緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で13世紀後半代に比定される。286は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面に片切彫りで鎬のあまい蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で13世紀後半代に比定される。

白磁　287は皿である。平底で体部は内彎気味に緩やかに外上方に立ち上がる。内面は片切彫りと櫛描きで花弁文を施文する。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。底部外面は露胎である。華南産白磁である。

SB201B・SF111B

土師器甕288がある。球形の体部に頸部が外反して、口縁部が直立する口頸部をもつ。体部内面はケズリを行い薄く仕上げている。古墳時代前期に位置付けられる。

Ｃ区包含層

土師器

皿　289～290は非ロクロ成形の皿である。289は体部が緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。290は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は短く緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はナデ調整、体部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

鍋　291は体部が内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は横方向のハケ目調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調はにぶい橙色

を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅳ類で15世紀前半～中頃に比定される。292は口縁部がほぼ直立し、口縁端部は内側に引き出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。外面には煤が付着する。色調はにぶい橙色を呈する。

黒色土器　293は椀である。体部は直線的に外上方に延びる。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する。294は椀である。比較的高い平高台をもち、高台側面は丁寧なナデ調整を施す。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は黒色を呈する。

瓦質土器　295は鍋である。口縁部は屈曲して短く直立する。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を、体部外面は縦方向のハケ目調整後ナデ調整、体部内面は横方向のハケ目調整を施す。

須恵器　296は椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に凹線が１条巡る。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。

施釉陶器　297は椀の高台片である。内外面とも透明釉を施釉し、浅黄橙色に発色する。近世後半の京焼系陶器と考えられる。

無釉陶器　298は甕である。やや上げ底気味の平底で、体部は直線的に外上方に延びる。体部下位で僅かに屈曲する。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面はナデ調整を施す。内外面とも赤土部を塗布して、暗茶褐色に発色する。近世の丹波焼と考えられる。

白磁　299は碗である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

青磁　300は碗である。器壁は全体に比較的薄い。体部は内彎する。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁と考えられる。

染付磁器　301は碗である。器壁は比較的薄い。体部は直線的にほぼ直上に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面は簡易な草花文を描き、内面は無文である。肥前系磁器と考えられる。

(2)石器（図版38・40　写真図版75・76・78）

石鏃S1は、サヌカイト製の平基無茎式石鏃である。先端部の両側縁は膨らみをもち、脚部から緩やかに屈曲して先端部に至る。脚部は左右非対称で、二次加工は、粗雑である。

砥石はS2～S5・S6がある。S2は砂岩製の砥石で、被熱剥離した様相を呈し、砥面の一部が残っているに過ぎない。S3はシルト岩製の小形の砥石で、折れている。砥面は４面残り、砥減りしており、１面には深い砥傷がある。S4はシルト岩製の小形の砥石で、折れている。砥面は４面残り、偏って砥減りしている。S5は砂岩製の大形の砥石で、折れている。砥面は３面残り、２面は偏って砥減りしている。S6は砂岩製の小形の薄い砥石で、折れている。砥面は３面ある。

(3)金属器（図版39・40　写真図版76・78）

釘はM2～M8がある。分類は安田善三郎氏、金箱文夫氏によった。M2は皆折釘である。残存長は2.6cmを測る。M3・M4は頭巻釘である。残存長はそれぞれ3.0cm、3.7cmを測る。M5～M8は皆折釘である。M5とM6は先端まで残存しており、長さはそれぞれ4.8cm、6.1cmを測る。M7は残存長が6.2cmを測

る。M8は残存長が7.5cm で幅1.6cm、厚みが1.0cm である。

鏃は M9・M10がある。２点とも雁又鏃である。いずれも先端部は残っていない。M9の残存長は8.0cm、M10は5.3cm を測る。

不明銅製品 M11は直径2.8cm の本体に柄がついた形状で、本体は厚さ0.3cm、柄の部分は厚さ0.6cmである。本体部分の中心に１箇所、外周部に３箇所、直径0.3cm の穿孔がある。外周部の真ん中の孔は鋲状のものでふさがっている。柄の部分には直径0.5cm の穿孔がある。鋲などで扁平な物が固定されていたと考えられる。

銭は M12・M13がある。M12は景徳元寶(北宋銭)で、直径は2.5㎝を測る。初鋳年は1004年である。M13は景祐元寶(北宋銭)で、直径は2.6cm を測る。初鋳年は1034年である。

鍋 M14は端部が外反する鍋で、復元径は40cm である。

釘は M15・M16がある。２本とも頭巻釘である。M15は長さ4.7cm、M16は長さ3.0cm を測る。

第４節　Ｄ地区の調査

１．調査の概要（図版41　写真図版９・79～81・95）

田ノ口城跡の尾根の南東側に広がる谷を当初はＤ地区と呼称していたが、その後の調査範囲の拡大に伴い、農道より南東側をＥ地区、さらに水路をはさんだ南東側をＦ地区と呼称した。Ｄ地区の北東側に追加で調査した地区をＤ－３地区と呼称した。

Ｄ地区はＢ・Ｃ地区とＥ地区の間に位置しており、標高は180.3m～181.9m である。Ｄ地区のうちＤ－１区は、平成13年度に、Ｄ－３区は平成16年度に本発掘調査を実施した。Ｄ－１区は、全長95m、最大幅44m、調査面積2746m^2 を測る不整形の調査区である。Ｄ－３区は、全長50m、幅６m、調査面積300m^2 を測る東西に細長い長方形の調査区である。

基本層序は圃場整備後の水田耕作土と床土の下に圃場整備時の盛土が存在し、その下のにぶい黄褐色シルト質極細砂から中砂を基盤として遺構を形成している。特に南西部分は圃場整備時に厚い盛土を行っている。

遺構は、掘立柱建物・土坑・鍛冶炉・墓・溝を検出した。ただし、遺構の重複が著しいことなどから掘立柱建物として認識できなかった柱穴が多数存在する。遺構の年代は遺物から見て、平安時代から鎌倉時代にかけてが中心で、16世紀後半と古墳時代の遺構がわずかに存在する。

Ｄ－３区は柱穴など検出したが、調査区の幅が狭いことなどから掘立柱建物の復原はできなかった。

２．遺構

(1)掘立柱建物群・柱穴群（図版43・44　写真図版11）

Ｄ地区では多数の柱穴を検出し、19棟の掘立柱建物を復原したが、建物に所属していない柱穴が多数存在する。このうち、P0013D・P0021D・P0036D・P0057D・P0062D・P0081D・P0098D・P0114D・P0160D・P0172D・P0174D・P0179D・P0227D・P0234D・P0248D・P0250D・P0253D・P0263D・P0297D・P0301D・P0311D・P0316D・P0344D・P0350D・P0357D・P0361D・P0368D・P0384D・P0389D・P0543D・P0544D・P0557D・P0559D・P0570D・P0594D・P0598D・P0603D から遺物が出土している。P0562D には焼土が充満していた。

SB001D（図版45　写真図版85）

検出状況　調査区西端のＤ・Ｅ－17・18区に位置する。西角は調査区外に延びている。SB002D と重複関係にある。

検出状況　調査区において検出した。

形状・規模　南北軸を N18°Ｅにとる南北棟の総柱建物跡である。桁行南北３間（8.30m）×梁行東西２間（5.40m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間3.05m・2.20m、梁行１間2.40m・3.00m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～65cm、深さは約30cm～50cm である。

出土遺物　柱穴 P0034D・P0318D から土師器皿（302・303）、P0318D から須恵器甕（304）が出土した。

SB002D（図版45　写真図版85）

検出状況　調査区西端のＥ・Ｆ－18・19区の SB001D の西側に位置する。SB001D と重複関係にある。

形状・規模　南北軸を N17°Ｅにとる総柱建物である。南北４間（10.80m）×東西４間（9.90m）の規模で

ある。建物の柱間は、桁行１間3.00m・1.80m、梁行１間2.65m・2.30m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～50cm、深さは約15cm～35cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB003D（図版46）

検出状況　調査区中央部のＣ～Ｅ－16・17区の SB001D の東側に位置する。SB004D・SB005D と重複し、SB005D を切っている。

形状・規模　南北軸を N14°Ｅにとる総柱建物である。桁行南北４間（12.10m）×梁行東西４間（10.60m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.95m・3.25m、梁行１間2.50m・2.80m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、柱痕は径15cm～20cm、深さは約20cm～45cm である。

出土遺物　柱穴 P0071D・P0231D・P0334D・P0218D から土師器皿（305～310）、P0326D から土師器椀（311）、P0217Dから土師器甕（312）、P0071Dから土師器鍋（313）、P0334D・P0587D・P0071D・P0235D・P0325D から黒色土器椀（314～318）、P0334D から瓦器椀（319）、P0228D から須恵器壺（320）、P0325D から須恵器椀（321）が出土した。

SB004D（図版47）

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－15・16区に位置する。SB003D・SB005D と重複関係にある。

形状・規模　南北軸を N28°Ｅにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間（4.90m）×桁行東西３間（6.60m）の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.80m・2.10m、桁行１間2.20m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～55cm、深さは約20cm～50cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB005D（図版47）

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－15・16区に位置する。SB003D・SB004D と重複し、SB003D に切られている。

形状・規模　南北軸を N28°Ｅにとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間（6.10m）×桁行東西３間（6.70m）の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.90m・3.20m、桁行１間2.10m・2.20m・2.40m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～55cm、深さは約15cm～40cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB006D（図版48）

検出状況　調査区中央部のＣ－16区に位置する。SB008D と重複関係にある。

形状・規模　南北軸を N17°Ｅにとる総柱建物である。南北１間（2.10m）以上×東西３間（7.80m）の規模である。建物の柱間は、南北１間2.10m、東西１間2.60m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～45cm、深さは15cm～25cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB007D（図版48　写真図版82）

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－14・15区に位置する。SB008D・SB009D・SB011D と重複関係にあり、SB008D を切る。

形状・規模　南北軸を N23°Ｅにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北４間（10.80m）×梁行東西３間

(8.00m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.40m・2.70m・3.00m、梁行１間2.00m・3.30m・2.70m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～70cm、深さは約15cm～35cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB008D(図版49　写真図版82・83)

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－14～16区に位置する。SB006D・SB007D・SB009D・SB011D と重複関係にあり、SB007D に切られ、SB009D を切っている。

形状・規模　南北軸を N24°Ｅにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北５間(14.70m)×梁行東西５間(12.80m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.30m・3.30m・2.50m、梁行１間2.70m・2.40m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～65cm、深さは約20cm～50cm である。

出土遺物　柱穴P0063D・P0075D・P0146D・P0259D・P0134D・P0339D・P0087Dから土師器皿(325～333)、P0094D から土師器底部(334)、P0287D から土師器坏(335)、P0258D から黒色土器椀(336)、P0198D から須恵器椀(337)、P0075D からガラス玉(J1)が出土した。

分　　析　P0198D の埋土から出土した木炭の年代測定(AMS)を行った。870±30yrBP の測定結果がでている。

SB009D(図版50　写真図版82・83)

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－14・15区に位置する。SB007D・SB008D・SB011D と重複関係にあり、SB008D に切られ、SB011D を切っている。

形状・規模　南北軸を N19°Ｅにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北４間(11.40m)×梁行東西３間(7.80m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間3.40m・3.60m・2.20m、梁行１間2.60m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、深さは約20cm～45cm である。

出土遺物　柱穴 P0252D から土師器鍋(323)、P0092D から須恵器皿(322)、P0204D から須恵器椀(324)が出土した。

SB010D(図版50　写真図版83)

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－13・14区に位置する。

形状・規模　南北軸を N41°Ｅにとる東西棟の総柱建物で、北辺に雨落ち溝 SD376D が伴う。桁行東西５間(10.00m)×梁行南北３間(6.20m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.75m・1.55m・1.40m、梁行１間2.90m・2.10m・1.20m である。柱間と掘形の深さを考慮すると、北辺と東辺は庇である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～60cm、深さは約15cm～60cm である。

出土遺物　柱穴 P0551D から土師器皿(346)、P0347D から青花碗(347)が出土した。

SB011D(図版51　写真図版82・83)

検出状況　調査区中央部のＣ・Ｄ－14・15区に位置する。SB007D・SB008D・SB009D と重複関係にあり、SB009D に切られている。

形状・規模　南北軸を N24°Ｅにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北４間(10.60m)×梁行東西３間(7.00m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.90m・2.40m、梁行１間2.70m・2.30m・2.00m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～50cm、深さは約10cm～70cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SB012D(図版51　写真図版83)

検 出 状 況　調査区南東部のＢ・Ｃ－13・14区に位置する。SB013D と重複関係にある。南側は調査区外に延びている。

形状・規模　南北軸を N24°Ｅにとる総柱建物である。南北２間(5.00m)以上×東西５間(10.30m)の規模である。建物の柱間は、南北１間2.40m・2.60m、東西１間2.00m・2.50m・1.80m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～50cm、深さは約10cm～30cm である。

出 土 遺 物　柱穴 P0089D・P0563D・P0257D から土師器皿(338～344)、P0139D から瓦器椀(345)が出土した。

SB013D(図版52　写真図版83)

検 出 状 況　調査区南東部のＢ－13区に位置する。SB012D・SB014D と重複関係にある。南側は調査区外に延びている。

形状・規模　南北軸を N27°Ｅにとる建物である。南北１間以上×東西３間(8.00m)の規模である。建物の柱間は、東西2.40m・2.80m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径20cm～25cm、深さは約10cm～30cm である。

出 土 遺 物　柱穴 P0580D から土師器皿(353)が出土した。

SB014D(図版52　写真図版83)

検 出 状 況　調査区南東部のＢ－13区に位置する。SB013D と重複関係にある。南側は調査区外に延びている。

形状・規模　南北軸を N17°Ｅにとる総柱建物である。南北１間(1.90m)以上×東西２間(5.00m)の規模である。建物の柱間は、南北１間1.90m、東西１間2.50m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径約30cm、深さは約10cm～25cm である。

出 土 遺 物　柱穴 P0199D から土師器底部(348)、P0392D から須恵器椀(349)、P0388D から須恵器椀と鉢(350・351)が出土した。

SB015D(図版52　写真図版83・84)

検 出 状 況　調査区東端のＣ－11区に位置する。南東側は調査区外に延びている。

形状・規模　南北軸を N29°Ｅにとる総柱建物である。南北２間(4.30m)以上×東西１間(2.20m)以上の規模である。建物の柱間は、南北１間2.15m、東西１間2.20m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径20cm～40cm、深さは約20cm～35cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SB016D(図版52　写真図版83・84)

検 出 状 況　調査区東半部のＣ・Ｄ－11・12区に位置する。SB017D～SB019D と重複関係にある。

形状・規模　南北軸を N28°Ｅにとる南北棟の総柱建物である。桁行南北３間(9.30m)×梁行東西２間(4.50m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.85m・3.60m、梁行１間2.25m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～50cm、深さは約25cm～35cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SB017D(図版53　写真図版83・84)

検 出 状 況　調査区東半部のＣ・Ｄ－11・12区に位置する。SB016D・SB018D・SB019D と重複関係に

あり、SB018D に切られている。

形状・規模　南北軸を N30°E にとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(8.40m)×桁行東西４間(9.70m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間2.70m・3.00m、桁行１間2.20m・2.70m・2.40m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～60cm、柱痕は径15cm～25cm、深さは約15cm～30cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB018D(図版54　写真図版83・84)

検出状況　調査区東半部のＣ・Ｄ－11・12区に位置する。SB016D・SB017D・SB019D と重複関係にあり、SB017D を切っている。

形状・規模　南北軸を N30°E にとる東西棟の総柱建物である。梁行南北３間(10.20m)×桁行東西４間(11.90m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間3.40m、桁行１間2.60m・3.10m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径30cm～60cm、深さは約25cm～35cm である。

出土遺物　柱穴 P0575D から土師器皿(352)が出土した。

SB019D(図版54　写真図版83・84)

検出状況　調査区東半部のＣ・Ｄ－11・12区に位置する。SB016D～SB018D と重複関係にある。

形状・規模　南北軸を N28°E にとる東西棟の総柱建物である。梁行南北２間(5.50m)×桁行東西３間(7.00m)の規模である。建物の柱間は、梁行１間3.30m・2.20m、桁行１間2.55m・1.90m である。

柱　　穴　柱穴は円形で、掘形径25cm～50cm、深さは約20cm～35cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

(2)土坑

SK005D(図版55　写真図版87)

検出状況　調査区西部のＥ・Ｆ－18区に位置する。北端は調査区外に延びている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北2.00m 以上、東西2.20m、深さ約25cm を測る。

埋　　土　埋土は下層が灰褐色のシルトから粗砂で、上層が褐灰色の細砂から粗砂で多量の中礫と炭を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK262D(図版55　写真図版87)

検出状況　調査区南西部のＤ－17区に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北1.10m、東西0.90m、深さ12cm を測る。

埋　　土　埋土は灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK617D(図版55　写真図版87)

検出状況　調査区西半部のＤ－17区に位置する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は径約0.85m、深さ約10cm を測

る。

埋　　土　埋土は上層が灰黄褐色、下層が黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK100D（図版55）

検出状況　調査区北部のＦ－16区に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北1.10m、東西1.00m、深さ約13cmを測る。

埋　　土　埋土は褐灰色のシルト質極細砂から細礫で、炭を僅かに含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK154D（図版55　写真図版87）

検出状況　調査区北部のＥ－15区に位置する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形はＵ字形である。規模は径約0.50m、深さ約23cmを測る。

埋　　土　埋土は褐灰色のシルト質極細砂から中砂である。上部からは石や須恵器が出土した。

出土遺物　須恵器椀(397・398)が出土した。

SK212D（図版56　写真図版87）

検出状況　調査区北部のＥ－16区に位置する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は径約0.75m、深さ約10cmを測る。

埋　　土　埋土は上層が褐灰色の中砂から粗砂で、下層がにぶい橙色の極細砂から細砂で礫を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK214D（図版56　写真図版87）

検出状況　調査区北部のＥ－16区に位置する。

形状・規模　平面形は南側が尖った楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北0.65m、東西最大0.55m、深さ約５cmを測る。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂から中砂で、礫を含む。

出土遺物　須恵器椀(400)が出土した。

SK217D（図版56　写真図版88）

検出状況　調査区中央部のＤ－16区に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北1.25m、東西0.80m、深さ約15cmを測る。

埋　　土　埋土は灰黄褐色の細砂から中砂で、礫を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK213D（図版56　写真図版87）

検出状況　調査区北部のＥ－16区に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北0.77m、東西0.65m、深さ約５cmを測る。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂から中砂で、礫と炭を含む。

出土遺物　須恵器椀(399)が出土した。

SK218D（図版56　写真図版87）

検出状況　調査区中央部のＤ－16区に位置し、SK217D の東側に隣接する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北0.60m、東西1.10m、深さ約10cm を測る。

埋　　土　埋土は褐色の細砂から中砂で、礫と炭を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK053D（図版56）

検出状況　調査区北部のＦ－15区に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北1.25m、東西0.95m、深さ約10cm を測る。

埋　　土　埋土は黒褐色のシルト質極細砂から粗砂で、礫を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK123D（図版57　写真図版88）

検出状況　調査区東半部Ｄ－11区に位置し、SK122D の南東に隣接する。

形状・規模　平面形は不整円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は径約0.70m～1.00m、深さ約20cm を測る。

埋　　土　埋土は上層が灰黄褐色、下層が黒褐色のシルト質極細砂から中砂で炭と礫を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK161D（図版57　写真図版88）

検出状況　調査区東半部Ｄ－11区に位置し、SK123D の南側に隣接する。

形状・規模　平面形は不整円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は径約1.00m、深さ約26cm を測る。

埋　　土　埋土は上層が灰黄褐色、中層がにぶい黄褐色、下層が灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂で炭と礫を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK122D（図版57）

検出状況　調査区東半部Ｅ－11区に位置し、SK153D の南東にある。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形である。規模は南北0.85m、東西0.95m、深さ約10cm を測る。

埋　　土　埋土は灰褐色のシルト質極細砂から中砂で、焼土ブロックを含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK162D（図版57　写真図版88）

検出状況　調査区東半部Ｄ－11区に位置し、SK161D の東側に隣接する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形はＵ字形である。規模は径約0.90m、深さ約30cm を測る。

埋　　土　埋土は下層が暗褐色、上層が灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂で炭と礫を含む。

出土遺物　土師器皿(401)が出土した。

SK153D（図版57　写真図版88）

検出状況　調査区東半部Ｅ－12区に位置する。

形状・規模　平面形は南北に長い楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北約4.00m、東西約2.65m、深さ約35cm を測る。

埋　　土　埋土は最上層と最下層が褐灰色、上層が黄褐色、中層と下層が灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂または粗砂で炭と礫を含む。

出土遺物　青磁碗(402)・白磁碗(403)・青花碗(404)が出土した。

分　　析　埋土から出土した木炭の年代測定(AMS)を行った。400±30yrBP の測定結果がでている。

SK226D(図版58　写真図版88)

検出状況　調査区中央部のＥ－16区に位置する。掘立柱建物 SB003D を切っている。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は径約1.40m、深さ約38cm を測る。

埋　　土　埋土は灰黄褐色のシルト質極細砂～中砂である。

出土遺物　土師器小皿(406)・鍋(405)、瓦器皿(407)、須恵器椀(408)が出土した。

SK004D(図版58　写真図版88)

検出状況　調査区北部のＦ－16区に位置する。北側は調査区外に延びている。上部は側溝掘削で、損傷した。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形はＵ字形である。規模は径約1.35m、深さ約60cm を測る。

埋　　土　埋土は第５層が火を受けて焼けており、第３層と第６層に大量の炭を含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

(4)鍛冶炉・焼土(写真図版85)

SF001D(図版59　写真図版11・89)

検出状況　調査区西半部のＥ－17区に位置し、SF274D の東側に隣接する。

形状・規模　平面形は南北2.50m、東西1.50m の範囲に炭層や被熱赤変している土坑が群集する。北側に位置する SF186D は直径約40cm の円形の土坑が４基していた。南側に位置する SF187D は直径約50cm の掘形の中央部に直径90cm、深さ15cm の焼土が堆積していた。

出土遺物　SF187D から土師器鉢(409)・椀(410)、須恵器椀(411)が出土した。

SF002D(図版60　写真図版10・11)

検出状況　調査区西半部のＤ－16・17区に位置し、SF001D の南東方向にある。

形状・規模　平面形は東西2.50m、南北1.50m の範囲に炭層や被熱赤変している土坑が群集する鍛冶炉群である。SF901D は直径約60cm の掘形に、直径50cm の炭混じりの土が堆積していた。SF902D は直径約50cm の掘形の中央部に直径40cm の還元黒色部が存在している。SF903D は直径約50cm の掘形に直径35cm の被熱赤変部があり、中央部に直径25cm の還元黒色部が存在し、同心円構造になっている。SF904D は直径約60cm の掘形に炭混じりの土が堆積していた。SF905D は直径約45cm の掘形に直径40cm の被熱赤変部があり、中央部に直径35cm の還元黒色部が存在し、同心円構造になっている。SF589D は直径約75cm の掘形に直径55cm の被熱赤変部があり、中央部に直径45cm の還元黒色部が存在し、同心円構造になっている。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SF274D（図版61）

検 出 状 況　調査区西半部のＥ－17区に位置し、SF001D の西側に隣接する。

形状・規模　平面形は不整円形を呈する炭層が広がる部分に３箇所の被熱赤変している部分が存在する。全体の規模は直径約2.20m で、焼土は不定形である。規模は最大一辺約1.5m×1.0m、最小直径0.25m を測る。被熱赤変の深さは約８cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF275D（図版61）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ－17区に位置する。

形状・規模　楕円形に被熱赤変している。規模は南北約45cm、東西約30cm、深さ約５cm を測る。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF999D（図版61）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ－17区に位置する。溝 SD216D に切られている。

形状・規模　楕円形に被熱赤変している。規模は直径約17cm、深さ約３cm を測る。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF297D（図版62）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ・Ｅ－17区に位置する。南側に隣接する SK103D と一連のものと考えられる。

形状・規模　馬蹄形を呈する。規模は長径約35cm、高さ約８cm を測る。

埋　　土　にぶい赤褐色シルト質極細砂の焼土の盛り上りである。

SK103D（図版62　写真図版89）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ・Ｅ－17区に位置する。

形状・規模　平面形は南北に長い楕円形を呈し、断面形は浅いＵ字形である。規模は南北約2.00m、東西約0.95m、深さ約20cm を測る。

埋　　土　埋土は上層が炭と焼土を含む灰黄褐色のシルト質極細砂～中砂、下層が褐灰色の極細砂～粗砂である。

出 土 遺 物　出土遺物は土師器小皿(412～414)・鍋(415)、黒色土器椀(416・417)、須恵器甕(418)が出土した。

SF271D（図版62　写真図版89）

検 出 状 況　調査区西半部のＥ－18区に位置する。

形状・規模　平面形は不整円形を呈する炭層が広がる中央部分に２箇所の被熱赤変している部分が存在する。全体の規模は長径約1.30m・短径1.10m で、焼土の直径は約40cm を測る。被熱赤変の深さは約５cm である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF266D（図版63　写真図版11）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ－16区に位置する。ピットに切られている。

形状・規模　平面形は不整方形で、底面は凹凸がある。規模は東西約1.6m×南北1.2m、深さ約12cm を測る。

埋　　土　埋土は焼土と炭が多量に含まれる層が互層に堆積している。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF279D（図版63　写真図版11・89）

検 出 状 況　調査区西半部のＤ－17区に位置する。溝 SD216D に切られている。

形状・規模　平面形は隅丸長方形で、底面は凹凸がある。規模は東西約1.50m×南北1.20m、深さ約14cm を測る。

埋　　土　灰褐色から灰黄褐色のシルト～細砂に多量の炭を含んでいる。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF272D（図版64）

検 出 状 況　調査区西半部のＥ－17区に位置する焼土群である。

形状・規模　焼土の範囲が４箇所に広がっている。規模は最大のものが直径約1.30m、他は直径70cm・50cm・30cm を測る。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

(4)集石

田ノ口遺跡の基盤層には、もともと礫が多数含まれているが、明らかに人工的に集石したものを取り上げた。３基調査を行った。

SS108D（図版64　写真図版88）

検 出 状 況　調査区中央部のＤ－14区に位置する。

形状・規模　東西約1.00m、南北約0.40m の範囲に、高さ約20cm に角礫を密集して積んでいる。集石の下部には特別な施設は存在していない。

出 土 遺 物　集石の周囲から、土師器小皿（419～421）、黒色土器椀（422～425）が出土した。

SS007D（図版65　写真図版90）

検 出 状 況　調査区西半部のＥ－16区に位置する。

形状・規模　南北約1.60m、東西約1.20m の長方形の範囲に、高さ約30cm に角礫を密集して積んでいる。集石の下部には特別な施設は存在していない。

出 土 遺 物　出土遺物は土師器甕（426・427）、須恵器坏（428）・椀（429～432）が出土した。

SS006D（図版65　写真図版90）

検 出 状 況　調査区西半部のＦ－17区に位置する。西側は調査区外である。

形状・規模　東西約1.30m、南北約0.80m の長方形の範囲に、高さ約25cm に角礫を密集して積んでいる。集石の下部には特別な施設は存在していない。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

(5)墓

明確に墓と認識できるもの１基を調査した。

ST215D（図版66　写真図版12・91～93）

検 出 状 況　調査区中央部のＤ－14区に位置する。掘立柱建物 SB003D と重複関係にあり、SB003D に伴う屋敷墓であると考えられる。

形状・規模　墓壙の平面形は全長1.85m、幅1.05m の長方形で、深さ20cm の断面逆台形を呈する。墓

壙の周囲に礫を裏込めに詰めており、全長1.50m、幅は0.65m 前後の木棺を埋葬したと考えられる。木棺墓の上部には棺底から50cm の高さまで巨大な礫を封土としており、一部は棺内に落ち込んでいる。木棺の主軸方位を N81°E にとる。

頭　　位　土師器小皿の出土状況から頭位は東向きと考えられる。

出土遺物　棺内からは東小口部分に土師器小皿が４点(433～436)と胸部分に刀子が１点(M20)出土し、封土からは黒色土器椀(437)、須恵器椀(438)が出土した。

(6)溝

溝は８条検出した。

SD374D(図版67　写真図版94)

検出状況　調査区西半部のＥ－18・19区に位置し、南西側は調査区外に延びる。

形状・規模　幅15cm、深さ５cm、全長3.0m 以上を測る直線的な溝である。主軸方位を N37°E にとる。

埋　　土　埋土は暗褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD216D(図版67)

検出状況　調査区西半部のＤ－17区に位置する。焼土 SF275D を切っている。

形状・規模　幅80cm、深さ15cm、全長6.5m を測る直線的な溝である。主軸方位を N56°W にとる。

埋　　土　埋土は上層が暗褐色、下層が褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD375D(図版67　写真図版94)

検出状況　調査区南西部のＣ－16区に位置する。

形状・規模　幅25cm、深さ５cm、全長1.2m を測る直線的な溝である。主軸方位を N40°E にとる。

埋　　土　埋土はにぶい黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD210D(図版67　写真図版94)

検出状況　調査区西半部のＥ－16・17区に位置する。

形状・規模　幅18cm、深さ５cm を測るやや弯曲した溝である。

埋　　土　埋土は上層が黒褐色、下層が灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD209D(図版67　写真図版94)

検出状況　調査区西半部のＥ－16区に位置する。土坑 SK212D に切られている。

形状・規模　幅28cm、深さ５cm、全長3.3m を測る直線的な溝である。主軸方位を N42°E にとる。

埋　　土　埋土は灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂が堆積しており、上層は炭を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD152D(図版67)

検出状況　調査区西半部のＥ・Ｆ－15区に位置する。

形状・規模　幅30cm、深さ10cm、全長5.7m を測る直線的な溝である。主軸方位を N43°E にとる。

埋　　土　埋土は灰黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SD189D（図版67　写真図版94）

検 出 状 況　調査区西半部のＥ－12・13区に位置する。

形状・規模　幅35cm、深さ５cm、全長4.1m を測る直線的な溝である。主軸方位を N84°E にとる。

埋　　土　埋土は褐灰色の質極細砂から中砂である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SD376D（図版67　写真図版94）

検 出 状 況　調査区東部のＣ・Ｄ－12区に位置する。

形状・規模　幅30cm、深さ10cm、全長は一部切れるが、8.7m を測る。SB010D の雨落ち溝である。主軸方位を N49°W にとる。

埋　　土　埋土は上層が灰黄褐色、下層がにぶい黄褐色のシルト質極細砂から中砂である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

(7)古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には土坑が１基存在する。

SK207D（図版67　写真図版94）

検 出 状 況　調査区東部のＤ・Ｅ－12区に位置する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、断面形はＵ字形である。規模は直径約0.50m、深さ約20cm を測る。

埋　　土　埋土はにぶい褐色のシルトから細砂である。

出 土 遺 物　上層から土師器壺546が出土した。

３．遺物

(1)土器（図版68～75　写真図版12・13～17・96～114）

SB001D

302はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。303は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は厚い。体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。304は須恵器甕の胴部片である。器壁は比較的薄い。外面は平行叩き目、内面は井桁状叩き目が残る。色調は暗灰色を呈する。

SB003D

土師器

皿　305～308はロクロ成形の皿である。305は平底で体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈す。306は平底で底部の器壁は厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。307は平底で器壁は比較的薄い。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。308は平底で底部と体部の境は明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施

す。色調は浅黄橙色を呈する。

309・310は非ロクロ成形の皿である。309は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は緩やかに僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。310は体部が緩やかに外上方に延び、口縁部は屈曲して外方にひらく。口縁端部は玉縁状に肥厚する。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。いわゆるての字状口縁の皿である。

椀　311は平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

甕　312は体部が内彎し、口縁部は逆Ｌ字状に若干外傾する。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は縦方向のハケ目調整､内面はヨコ方向のハケ目調整をそれぞれ施す｡色調は灰黄色を呈する。

鍋　313は丸底で体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施し、体部外面は指おさえの後、粗いナデ調整を施す。体部内面上位は横方向のナデ調整、体部内面下位～底部内面は横・斜め方向のケズリ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

黒色土器　314～318は椀である。314は体部が内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整、体部外面は回転ナデ調整をそれぞれ施す。色調は内面が暗灰色、外面が灰白色をそれぞれ呈する。315は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は若干外方にひらく。内外面とも回転ナデ調整を施し、体部内面は回転ナデ調整の後、ヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。色調は内面が黒褐色、外面は灰黄色を呈する。316は体部が内彎気味に外上方に延び、口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面は灰黄色を呈する。317は低い平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部外面は回転ナデ調整、底部内面はヘラミガキ調整をそれぞれ施す。色調は黒色を呈する。318は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。底部内面は若干窪み、体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

瓦器　319は椀である。高台は断面台形状で比較的低い。内外面ともナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器　320は長頸壺である。口縁部は外方にひらき、内外面とも回転ナデ調整を施す。内面全面に灰被りが見られる。色調は灰色を呈する。321は須恵器椀である。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰黄色を呈する。

SB007D

322は須恵器皿である。平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。323は土師器鍋である。体部は内彎し、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整を施す。体部外面は平行叩き目が残る。色調は橙色を呈する。324は須恵器椀である。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。東播系須恵器である。

SB008D

土師器

皿　325・328・330・332・333は非ロクロ成形の皿である。325は平底で体部と底部の境は不明瞭であ

る。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。328は非ロクロ成形の皿である。器壁は全体に厚い。平底で体部は非常に短い。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。330は非ロクロ成形の皿である。平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。332は非ロクロ成形の皿である。平底で底部と体部の境はやや不明瞭である。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。333は非ロクロ成形の皿である。平底で体部と底部の境は明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

326・327・329・331はロクロ成形の土師器皿である。326は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。327は平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。329は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調は橙色を呈する。331は平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰黄褐色を呈する。

334は脚付皿の脚部である。平底で脚は内傾して斜め上方に延びる。外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

杯　335は平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

黒色土器　336は椀である。形骸化した平高台を浅く削り出す。底部の器壁は比較的厚く、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施し、体部外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面が浅黄橙色を呈する。

須恵器　337は椀である。平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。

SB009D

土師器　338・341は非ロクロ成形の皿である。338は体部が内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。いわゆるての字状口縁の皿で12世紀前半代に比定される。341は体部が直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

339・340・342～344はロクロ成形の皿である。339は平底で底部の器壁は非常に厚い。体部は短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。340は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。342は平底で底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。343は平底で体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。内

外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。344は全体に器壁は厚い。平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。

瓦器　345は椀である。やや丸底気味の平底は断面に台形状の高台を貼り付ける。体部は緩やかに外上方に延びる。内外面ともナデ調整を施す。炭素の付着は部分的で色調は浅黄橙色を呈する。

SB010D

346はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。347は青花磁器碗である。器壁は全体に薄く、高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面は牡丹唐草文、内面は界線を描く。明青花磁器で16世紀代に比定される。

SB011D

土師器　348は壺である。比較的高い平高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部内面は若干窪む。底部内面はケズリの後、ナデ調整を施す。高台側面はヨコナデ調整を施す。底部外面は静止糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。

須恵器　349・350は椀である。349は体部が内彎気味に外上方に延び、口縁端部は若干外方につまみ出す。内外面とも回転ナデ調整を施すが粘土のつなぎ目は明瞭に残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。350は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。351は鉢である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀前半代に比定される。

SB018D

352はロクロ成形の土師器皿である。平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

SB019D

353はロクロ成形の土師器皿である。器壁は全体に厚い。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

ピット内

土師器

皿　354～358・361・364～366は非ロクロ成形の皿である。354は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。355は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。356は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。357は器壁が全体に厚い。体部と底部の境は不明瞭で体部の立ち上がりは非常に浅い。内外面ともナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。358はやや上

げ底気味の平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。361は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。364は平底で体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。365は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は黄橙色を呈する。366は体部が緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

359・360・362・363はロクロ成形の皿である。359は平底で体部は短く外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。360は平底で器壁は全体に厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強い回転ナデ調整を施す。底部外面はナデ調整を施し、微かに糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。362は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。363は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面はナデ調整を加えるが、糸切痕が微かに残る。色調は橙色を呈する。

椀　367は器壁が全体に薄く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収め、口縁部内面に凹線が１条巡る。口縁部内外面にナデ調整を加える。瓦器椀の可能性も考えられる。

甕　368は体部が内彎し、口縁部は水平に外方に折り曲げる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は縦方向のハケ目調整、体部内面は横方向のハケ目調整をそれぞれ施す。色調は灰黄褐色を呈する。369は器壁が全体に薄い。体部は内彎し、口縁部は大きく外方にひらく。内外面ともナデ調整を施す。色調はにぶい褐色を呈する。

鍋　370～373は鍋である。370は体部が内彎し、頸部はほぼ直立して口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面には当て具痕が残り、体部外面には平行叩き目が残る。色調は橙色を呈する。371は体部が内彎し、口縁部は外方にひらく。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面はナデ調整、体部外面は不調整で平行叩き目が残る。色調は灰褐色を呈する。372は体部が内彎し頸部はほぼ直立する。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調はにぶい橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅴ類相当で15世紀後半～16世紀初頭に比定される。

373は陶器鍋である。器壁は比較的薄い。体部は内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はケズリ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は外面が灰黄褐色、内面が明黄褐色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。374は瓦質土器鍋である。体部は内彎する。口縁部は逆Ｌ字状に屈曲し、さらに内側に屈曲して僅かに外傾する。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は灰黄色を呈する。

黒色土器　375・377は椀である。375は体部が内彎気味に外上方に延び、口縁端部は若干外方につまみ出す。内外面ともヨコナデ調整の後、細かいミガキ調整を加え、器面を平滑に仕上げる。色調は黒色を呈する。376は杯である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は内面が暗灰色、外面が淡赤褐色を呈し、炭素の吸着がほとんど見られない。377は平高台で体部は

僅かに内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を加える。外面には平行暗文、内面には放射状暗文が残る。色調は黒色を呈する。

瓦器　378・379は椀である。378は椀片である。器壁は全体に薄く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味で、口縁部内面に凹線が１条巡る。口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。379は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器

杯　380は杯の底部片である。平底で高台の断面は長方形状の低い貼り付け高台である。内面は回転ナデ調整を施し、外面には糸切痕が残る。色調は灰黄色を呈する。

椀　381～388は椀である。381は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、底部内面は窪む。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。382は平高台を持ち、高台側面はナデ調整を施す。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。383は体部が内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。384は体部が内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。体部外面下半にはヘラケズリ調整を施す。色調は灰白色を呈する。385は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。386は器壁が全体に薄く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。387は平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。388は平底で器壁は全体に厚い。高台の断面は長方形状で低く、体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。

鉢　389は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上面に水平に端面を持つ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部上面に灰被りが見られる。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。

壺　390は広口壺である。口縁部は大きく外方にひらき、口縁端部は側面に端面をもつ。口縁部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

甕　391は甕の口縁部片である。口縁部は外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい赤褐色を呈する。須恵器の酸化炎焼成されたものと考えられる。

無釉陶器　392は甕である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。外面は横方向のケズリ調整とナデ調整、内面は縦方向のハケ目調整を施す。焼成は堅緻でにぶい褐色を呈する。丹波焼と考えられる。

白磁　393～395は碗である。393は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し灰オリーブ色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。394は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁部は直口する。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。華南産白磁で12世紀～13世紀代に比定される。395は底部の器壁は非常に厚く、高台は浅く削りだす。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類相当で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

青磁　396は碗である。底部の器壁は厚い。高台の断面は長方形状で比較的低い。内外面とも青磁釉を施釉し淡いオリーブ灰色に発色する。畳付～高台裏は露胎である。龍泉窯系青磁で13世紀代に比定される。

SK154D

397は須恵器椀である。平高台で器壁は比較的薄い。高台側面はナデ調整を施す。底部内面は窪み、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。398は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味で若干外方にひらく。内外面とも強い回転ナデ調整を施し、ロクロ目が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

SK213D

399は須恵器椀である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。

SK214D

400は須恵器椀である。平高台で高台側面は丁寧にナデ調整する。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整､体部内外面は回転ナデ調整を施す｡底部外面には静止糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。

SK162D

401は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SK153D

402は青磁碗である。平底で高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に立ち上がる。底部内面に魚文を貼り付ける。内外面とも青磁釉を施釉し、緑灰色に発色する。釉層は比較的厚く、畳付の釉はかきとり、淡赤褐色に発色する。龍泉窯系青磁で15世紀代の製品と考えられる。403は白磁碗である。高台内面を内反高台風に浅く削り出し、体部は下位で若干屈曲して内彎気味に外上方に立ち上がる｡内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する｡底部外面は露胎である｡華南産白磁と考えられる。404青花磁器碗である。平底で高台の断面は三角形状で細く低い。外面は界線２条、内面は草花文をそれぞれ描く。景徳鎮窯産で16世紀代に比定される。

SK226D

土師器　405は鍋である。器壁は比較的厚く、体部は内彎する。口縁部は外方にひらく。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケ目調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は褐灰色を呈する。406はロクロ成形の皿である。平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整でヘラ切痕が残る。色調は淡橙色を呈する。

瓦器　407は皿である。低い平高台を削りだす。体部は内彎気味に緩やかに外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。体部内面はヘラミガキ調整、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は暗灰色を呈する。

須恵器　408は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁部は尖り気味に収める。口縁部

内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。

SF187D

土師器　409は鉢である。体部は屈曲して外上方に延び、口縁端部は外方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は明褐色を呈する。須恵器の生焼けの可能性が考えられる。410は椀である。器壁は全体に薄い。高台は細く高く、体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面ともナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

須恵器　411は椀である。平底で高台の断面は台形状で低い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調子、体部外面下位はヘラケズリ調整を施す。底部内外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

SK103D

土師器

皿　412～414はロクロ成形の皿である。412は底部の器壁は非常に厚く、体部は直線的に短く外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は糸切痕が残る。色調は橙色を呈する。413は平底で底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、内面の体部～底部はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。414はやや上げ底気味の平底で、底部の器壁は厚い。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強い回転ナデ調整を施す。底部内面はナデ調整、底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。

鍋　415は丸底で体部は内彎して外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらき、口縁端部は側面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面は指おさえの後、指ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。体部外面は横方向の叩きの後、縦方向の叩きを施す。色調は橙色を呈する。

黒色土器　416・417は椀である。416は平高台をもち、底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、高台側面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は炭素の吸着が不十分で黄灰色を呈する。417は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調は内面は黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

須恵器　418は甕の口縁部片である。口縁部は大きく外方にひらく。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

SS108D

土師器　419～421はロクロ成形の皿である。419は平底で底部の器壁は厚い。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄色を呈する。420は平高台で底部の器壁は厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は糸切痕が微かに残る。色調は浅黄橙色を呈する。421は平底で底部の器壁は厚い。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

黒色土器　422～425は椀である。422は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面はナデ調整を施す。底部内面はミガキ調整を施し、縦・横方向の暗文が残る。423は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部

外面は回転ナデ調整、体部内面は回転ナデの後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は内面は黒色、外面は灰白色を呈する。424は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は暗灰色を呈する。425は体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデ調整の後ミガキ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

SS007D

土師器　426は甕である。体部は内彎し、口縁部は若干外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は灰黄褐色を呈する。427は甕である。器壁は比較的厚い。体部はほぼ直上に延び、口縁端部は外方にひらく。内外面ともナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

須恵器

杯　428は平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。

椀　429～432は椀である。429は若干上げ底気味の平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。430は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施し、底部内面は窪む。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部は屈曲して若干外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は黄灰色を呈する。431は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施し、底部内面は若干窪む。体部は僅かに内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。432は体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

ST215D

土師器　433～436は非ロクロ成形の皿である。433は平底で器形は全体に大きく歪む。体部と底部の境は不明瞭で体部は短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。434はやや丸底気味の平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。435は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。436は丸底で底部と体部の境は無い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

黒色土器　437は椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は若干外方にひらく。内外面とも横方向のミガキ調整を施す。

須恵器　438は椀である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面には静止糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。

包含層

土師器

皿　439・440は非ロクロ成形の皿である。439は平底で底部と体部の境は不明瞭で、体部は短く外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は黄橙色を呈する。440は平底で体部と底部の境は不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

441～451はロクロ成形の皿である。441は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強い回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。442は平底で底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。443は平高台をもち、底部の器壁は厚い。高台の側面は不調整で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。444は平底で底部の器壁は厚い。体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。445は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。446は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。447は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。448は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は短く外上方に延び、口縁端部は若干外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。449はやや上げ底気味の平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。450はやや上げ底気味の平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は切り離しの後ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。451はやや上げ底気味の平底で体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

椀　452～458は椀である。452は平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。色調は淡黄色を呈する。453は平底で器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。焼成はあまく、色調は灰白色を呈する。東播系須恵器と考えられる。454は低い平高台をもち、高台側面は不調整である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。器形は須恵器椀に酷似する。455は平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部外面は回転ナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は褐灰色を呈する。456は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部外面～底部内面はナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。457は平高台をもち、底部の器壁は非常に厚い。底部内面は窪み、体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。須恵器椀の生焼けの可能性が高い。458は比較的高い平高台をもち、高台側面は丁寧なナデ調整を施す。体部は直線的に外上

方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面はヘラ切の後、ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

壺　459は平底で体部は大きく内彎する。内外面ともナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。460は紡錘車である。円形で中央部に穿孔が１箇所見られる。全面にナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

鍋　461～463・465～468は鍋である。461は体部は外上方に延び、口縁部は逆Ｌ字状に外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面はナデ調整の後、細かい縦方向のハケ目調整を施す。体部外面はヨコナデ調整の後、粗い縦方向のハケ目調整を施す。色調はにぶい黄褐色を呈する。462は体部が内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部はＬ字状に屈曲して外方にひらく。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面はヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整の後、横方向のハケ目調整を施す。色調は黄灰色を呈する。463は器壁が比較的薄く、体部は内彎してほぼ直上に延びる。粘土紐巻上げ成形で、体部内面には板状工具によるナデ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は灰色を呈する。

465・466は陶器鍋である。465は体部が内彎し、口縁部は僅かに外傾する。口縁端部は外方に引き出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部内面には当て具痕が残り、体部外面には平行叩き目が残る。焼成は堅緻で色調は灰色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。466は器壁が比較的薄い。体部は内彎し、口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内面はヘラ状工具によるナデ調整、体部外面には平行叩き目が残る。色調は浅黄色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。467は体部が内彎し口縁部は僅かに外傾する。口縁端部は上面に水平な端面をもつ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部外面には平行叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。長谷川分類の播丹型Ⅳ類相当で15世紀前半～中頃に比定される。468は陶器鍋である。器壁は比較的厚い。頸部はほぼ直立し、口縁端部は若干外方に引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調はにぶい橙色を呈する。丹波焼に類例が見られる。

甕　464は体部が内彎し、口縁部は外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。焼成は堅緻で色調はにぶい黄橙色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。

鉢　469～472は鉢である。469は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部の断面は三角形状に肥厚し、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部外面は回転ナデ調整、体部内面は回転ナデの後、細かい横方向のハケ目調整を施す。色調は灰黄色を呈する。470は口縁部が上下に拡張して小さい縁帯をつくり、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内面は回転ナデ調整を施す。体部内面は回転ナデの後、細かい横方向のハケ目調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調はにぶい黄橙色を呈する。471は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。外面は回転ナデ調整、内面は回転ナデの後、横方向のハケ目調整を施す。色調は褐灰色を呈する。472は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部の端面に沈線が数条見られる。内外面ともナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

黒色土器　473～476は椀である。若干外方にひらく貼り付け高台をもち、体部は緩やかに外上方に延びる。体部内面は若干窪む。内外面ともナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。474は平高台で高台側面はナデ調整する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面に

は糸切痕が残る。色調は黒色を呈する。475は底部が剥落し、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部にはナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面は浅黄橙色を呈する。476は体部が内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器

椀　477～509・511は椀である。477は高台がやや外方にひらき比較的高い。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面に糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。478は断面台形状の比較的低い貼り付け高台をもち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。479は高台の断面は台形状で低い。内面は回転ナデ調整を施し、底部外面は回転糸切の後、ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。480は断面が台形状の低い貼り付け高台をもち、体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。481は断面が台形状の低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。482は断面が台形状で低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整を施す。底部外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。483は断面が台形状の低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、底部外面は回転ヘラ切の後、ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。484は断面が台形状の低い高台をもつ。内面は回転ナデ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。485は断面が台形状で低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整、底部内面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。486は断面が台形状で低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。487は断面が台形状の低い高台をもつ。体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、外面はヘラケズリ調整を施す。底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。488は断面が台形状で低い高台をもち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整、外面はヘラケズリ調整、底部外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。489は断面が台形状で低い高台をもち、体部は直線的に外上方に延びる。内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。490は高台の幅が広く低い。内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。491は高台の幅が広く低い。内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。492は平高台をもち、高台側面は丁寧にナデ調整する。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は僅かに外方にひらき、丸味をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。493は平高台をもち、高台側面は丁寧にナデ調整する。底部内面は若干窪む。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。494は平高台をもち、高台側面は不調整である。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。495は平高台をもち、高台側面は丁寧にナデ調整する。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。496は平高台をもち、高台側面はナデ調整する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。497は平高台をもち、高台側面はナデ調整を施す。底部内面は若干窪み、体部は内彎気味に

外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。498は平高台をもち、高台側面はナデ調整する。底部内面は窪み、体部は直線的に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。499は低い平高台をもち、高台側面は不調整である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。500は平高台をもち、高台側面はナデ調整する。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。501は退化した低い平高台をもち、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部内外面・底部内面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。502は平底で底部内面は僅かに窪む。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。503は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。504は体部が内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。505は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。506は体部がほぼ直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。色調は灰色を呈する。507は体部が内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。508は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。509は体部が中位で屈曲し、若干外反気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。511は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。

皿　510は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調は暗灰色を呈する。

鉢　512～518は鉢である。512は体部が内彎して外上方に延び、口縁端部は外方に若干引き出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。513は体部が内彎し、口縁部は若干外方にひらく。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部内面に胡麻状に灰被りが見られる。色調は黄灰色を呈する。514は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に水平な端面をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器である。515は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は斜め方向に切る。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。516は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。517は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。518は平底で体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面に僅かに糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。

壺　519は壺片である。体部外面に凸帯が２条巡る。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を

呈する。

甕　520は甕の胴部片である。内面はナデ調整を施し、外面には格子目状の叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。521は口縁部が大きく外方にひらき、口縁端部は下方に引き出す。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。体部外面には縦方向の平行叩き目が残る。色調は灰色を呈する。

無釉陶器　522は甕である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。体部内外面は回転ナデ調整を施す。体部外面下半はケズリ調整、底部内面はナデ調整を施す。焼成は堅緻で色調は灰褐色を呈する。備前焼と考えられる。

施釉陶器　523は灰釉陶器壺である。体部は大きく内彎し、外面に浅い沈線が２条巡る。外面は灰釉を施釉し、暗オリーブ灰色に発色する。内面は露胎である。窖窯期の古瀬戸と考えられる。524は緑釉陶器皿である。口縁部は外反気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも緑釉を施釉しオリーブ灰色に発色する。525は天目茶碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は外方にひらく。内外面とも鉄釉を施釉し、暗赤褐色に発色する。建窯産天目と考えられる。526は灰釉陶器椀である。断面は三角形状の比較的高い貼り付け高台をもち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、内面に灰釉を施釉する。底部外面に糸切痕が残る。東海系の灰釉陶器と考えられる。528は緑釉陶器椀である。高台の断面は長方形状で比較的低い。内外面とも緑釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。畳付～高台裏は露胎である。焼成は軟質である。

白磁　529～535は碗である。529は体部が内彎気味に外上方に延び、口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、黄灰色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅱ類で12世紀代に比定される。530は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。531は口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰黄色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。532は高台の断面が台形状で幅が広く比較的低い。体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。華南産白磁で12世紀～13世紀代に比定される。533・534は高台を浅く削り出す。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。底部外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。535は高台が比較的幅が広く低い。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも透明釉を施釉し、にぶい黄橙色に発色する。体部外面下半以下は露胎である。華南産白磁で12世紀～13世紀代に比定される。

青磁　527は碗である。底部の器壁は非常に厚く、高台は比較的細く高い。内外面とも青磁釉を施釉し、暗褐色に発色する。畳付～高台裏は基本的には露胎であるが、部分的に釉が附着する。高台裏にツクが付着する。龍泉窯系青磁で13世紀代の製品と考えられる。536は皿である。平底で体部は緩やかに外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内面は櫛描き施文し、内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。537は皿である。平底で、体部は直線的に短く外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも青磁釉を施釉しオリーブ灰色に発色する。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。538は碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面に鎬の無い蓮弁文を片切彫りで施文する。内外面とも青磁釉を施釉し緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で13世紀後半代に比定される。539は皿である。体部は外反気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部は稜花状に成形する。口縁部内

面に線描きで施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、暗緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁稜花皿で16世紀代に比定される。

青花磁器　540・541は碗の高台部でいずれも比較的細く高い。541は内面に人物文、外面に界線１条、542は内面に唐人図、外面に「天下太平」銘をそれぞれ描く。いずれも景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。542～545は皿である。542は底部片で、器壁は比較的厚く、高台は細く低い。内面には草花文、外面には唐草文を描く。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。543は平底で高台は断面が三角形状で比較的低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は水平に外方にひらく。内外面とも草花文を描く。底部外面にノミ跡が見られる。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。544は碁笥底で、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内面は細かい草花文、外面には牡丹文など描く。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。545は碁笥底で体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面に菊唐草花文を描く。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。

(2)石器（図版76　写真図版114・115）

石鏃 S7はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。基部の抉りは浅い。剥離面が表裏に残り、二次加工は側縁のみである。

砥石 S8～S10

S8は砂岩製の砥石で、折れている。砥面は６面あり、１面には深い砥溝が２条ある。S9は砂岩製のの砥石である。断面形は六角形であり、このうち３面を砥面として使用している。このうち１面は砥減りが著しい。S10は砂岩製の粗砥石で、折れている。砥面は２面あり、このうち１面が偏って砥減りしている。

(3)玉（図版76　写真図版114）

ガラス玉 J1は風化して白くなっている。成分分析により鉛ガラスと判明した。

(4)金属器（図版77・78　写真図版12・116・117）

釘は M17～M19がある。M17は頭部が扁平な形状の皆折釘である。長さ3.5cm である。M16は頭部が欠損しているが、頭巻釘と思われる。残存長は3.4cm を測る。M17は皆折釘である。残存長は2.9cm を測る。

刀子 M20は切先部と茎部の端を欠損している。残存長は5.5cm であるが、関の部分が欠損している。刀 M21は両関の小刀で切先部と茎部の端を欠損している。刃部の残りは5.6cm、茎部は3.5cm 残存している。

鋤先 M22は唐鋤の基部である。鋤の本体との固定のために、直径0.7cm の孔を穿孔している。穿孔場所は端に偏っているため、２箇所の孔で固定していたと考えられる。

鎌 M23は刃先と考えられる。残存長は5.8cm、厚さ0.3cm の両刃の鎌である。

不明鉄製品 M24は片側が直線、片側が弧をなしている形状で、弧を描いている側に厚みがある。残存長は7.2cm、最大幅2.3cm、厚み0.5cmを測る。鋤先の断片の可能性もある。

スラッグは M25～M29がある。M25の重量は83.1g で磁石によく付く。M26は重量が8.8g でケイ素が多い。M27は重量が84.4g でケイ素が多い。M28は椀形滓で重量が529.5g である。M29は椀形滓で重

量が374.5g である。

刀は M30・M31がある。M30は残存長24.2cm、幅2.5cm を測る。両関で茎の部分に目釘孔を１箇所穿孔しており、茎の先が欠損している。M31は残存長14.9cm、幅3.2cm を測る。両関で切先部と茎部が欠落している。刃部は著しく砥ぎ減っている。

鎌 M32は刃先と考えられる。残存長は25.3cm の両刃の鎌である。木質が残存しており、２本の目釘を、それぞれ互い違いに打ち込んでいる。

第５節　Ｅ地区の調査

１．調査の概要(写真図版20・118～120・132・133)

Ｅ地区は平成12年度の第１次確認調査においては遺構が確認できず、本発掘調査の予定はなかったが、平成13年度のＤ地区において遺構が東側へ広がることが明らかとなったため、平成14年度に確認調査を実施し、全域に遺構を確認した。そして、一部本発掘調査を実施した(Ｅ－２区)。

平成15年度には､確認調査の結果を受け､Ｄ地区とＥ－２区の間にある農道部分の本発掘調査を行い、Ｅ－３区(調査時はＤ－２区と呼称)とした。また、Ｅ－２区より東側についてはＥ地区と呼称した。

今回調査結果を集約するにあたり、Ｄ地区とＥ－３区の間において遺構の切れ目が存在することから、新たに、Ｅ－２区・Ｅ－３区・Ｅ地区をまとめ、Ｅ地区として成果を述べてゆくこととする。

各年度の概要を簡単に述べる。

14年度調査区の概要(Ｅ－２区)

水田造成による削平部分を挟み、柱穴・石組を検出した。

平成15年度調査(Ｅ－３区)の概要

平成14年度の確認調査結果を受け、平成13年度のＤ地区と平成14年度本発掘調査区の間をＤ－２区として本発掘調査を実施し、柱穴40個・溝１条を検出した。

平成15年度調査(Ｅ地区)の概要

平成15調査区は水田に設定された、南北幅短辺約36m・長辺約69m、東西長約61m の変形十角形の調査区である。

本地区は北から上段・中段・下段の水田３面部分に大きく分かれ、掘削前の高低差は各約２m であった。

調査の結果、各段(各水田面)の山側部分は圃場整備に伴い大きく削平を受けており、遺構の削平・消失が激しく、現耕作土・圃場整備時の盛土直下から地山面が出現していることが判明した。これに対して、各段の川側部分は削平が少なく、圃場整備前の堆積土が残存しており、比較的遺構が消失されずに残っていた。このため、柱穴を中心とする遺構は削平部分を間に挟み３本の帯状に検出されている。

調査の結果、堆積土が残存している部分では一部２面で遺構を検出し、地山面が出現している部分では１面で遺構を検出した。

遺構の時期は第１面が古代～中世(10世紀～13世紀)、第２面は古墳時代後期及び弥生時代前期のである。

２．層序

Ｅ地区は概ね圃場整備によって削平を受けており、いわゆる包含層や旧地表が残存する部分は少ない。削平を受けていない部分の堆積は、東壁の上段・中段において見れば、黄色地山層(４層・５層)・砂礫層(32層・34層)・黄色～褐色土(27層)・黒褐色土(中世～近世の土壌層)・灰色土(近世以降の耕作土)の順に堆積している。第１面は黒褐色土下から検出している。黒褐色土は遺構面に伴う土壌化した

層である。

黄色地山層（４層・５層）・砂礫層（32層・34層）・黄色～褐色土（27層）は田ノ口地遺跡の基盤層にあたり、これらは扇状地堆積物である。

以上の堆積は、同一地形に存在しているＦ地区の微高地（南半部）に続くもので、その東端をＦ地区北半部から流れでる旧河道によって限られている。

３．遺構

調査は、確認調査の結果を踏まえ、現耕土及びほ場整備時の盛土・旧耕土を機械力によって排除し、それ以下を人力によって掘削・精査を行った。調地点は、圃場整備により総じて大きく上段・中段・下段の３段の水田に造成されている。

このため、遺構の説明については、上段の遺構・中段の遺構・下段の遺構の順に述べる。

Ａ．古代～中世の遺構

第１面は主に古代中世（10世紀～13世紀）の遺構面である。

掘立柱建物跡33棟・柵列２条を含む柱穴約1000個、土坑７基・焼土坑３基などを検出した。中世前期を中心とした集落址の一画であったと考えられる。

(1)掘立柱建物群・柵列・柱穴群（写真図版121・122）

掘立柱建物跡を33棟復元した（SB001E～SB033E）。その大半は２間×３間を基本とする小規模な側柱建物である。３間四方を越える総柱建物跡は少ない。

柵列は２基復元しているが、柱穴の大半が消失した建物跡であった可能性も残る。

建物として復元できなかった柱穴は約600個あり、更に多くの建物が存在したと考えられる。

上段の掘立柱建物跡（SB001E～SB010E）

SB001E（図版86　写真図版123）

検 出 状 況　調査区上段中央東よりにおいて検出した。

形状・規模　桁行方位をN55°Eにとる建物跡である。桁行東西３間（6.80m）・梁行南北２間（4.50m）、床面積30.60m^{2}の規模である。建物の柱間は、2.25m前後が基本である。

柱列のなかで、南桁行きが直線を保っており、建築の基線になった可能性が高い。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm、深さは約15cmである。建物内にあるP4172は梁支えの柱穴と考えられる。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB002E（図版86　写真図版123）

検 出 状 況　調査区上段中央東よりにおいて検出した。SB001Eの東隣に位置し、SB004Bと重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　建物の方位をN39°Eにとる側柱建物跡である。北東・南西方向の桁行２間（5.00m）・北西・南東方向の梁行２間（4.80m）、床面積24.00m^{2}の規模である。建物の柱間は、梁行きの2.40m前後を基本にばらつきがある。

柱　　穴　円形を基本とし、掘方は径約30cm～40cm、深さ20cm～30cmを測る。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB003E（図版87　写真図版123）

検 出 状 況　調査区上段中央北よりにおいて検出した。SB005E・SB006E の西隣、SB002E・SB004E の北側に位置する。

形状・規模　桁行方位を N62°W にとる総柱建物跡である。桁行東西５間（7.70m）・梁行南北２間（3.70m）、床面積28.49m² の規模である。建物の柱間は、桁行1.30m・1.60m・1.90m とばらつきがある。梁行についても若干ばらつきがある。

柱　　穴　円形を基本とし、掘方は径約30cm～40cm、深さ20cm～40cm を測る。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB004E（図版87）

検 出 状 況　調査区上段中央東よりにおいて検出した。SB001E の東隣に位置し、SB002E と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　台形に近い平面プランをもつ南東に歪んだ側柱建物跡である。桁行方位を N62°W にとる、桁行東西３間（6.30m・7.00m）・梁行南北１間（3.20m・3.60m）、床面積22.60m² の規模である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約30cm、深さは約10cm を測る。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB005E（図版88　写真図版123・129）

検 出 状 況　調査区上段中央北よりにおいて検出した。SB006E と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N64°W にとる総柱建物跡である。桁行東西４間（6.10m）以上・梁行南北４間（5.20m）、床面積約31.72m² 以上の規模である。具体的には桁行東西３間（4.90m）以上・梁行南北２間（3.50m）の身舎に西梁行き・南桁行き及び北桁行きの一部に庇が巡る構造と考えられる。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約40cm、深さは深いもので70cm を測る。また、根石を埋め込んだ柱穴が１個存在する。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB006E（図版88）

検 出 状 況　調査区上段中央北よりにおいて検出した。SB005E と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N79°W にとる側柱建物跡である。桁行東西３間（5.4m）・梁行南北３間（4.5m）、床面積24.30m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は約1.6m、梁行は1.50m を測る。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径20cm～50cm、深さは約20cm である。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB007E（図版89）

検 出 状 況　調査区上段中央東よりにおいて検出した。SB004E の東隣に位置し、SB008E と切り合い先行する。

形状・規模　桁行方位を N23°E にとる側柱建物跡である。桁行南北３間（5.60m）・梁行東西２間（4.00m）、床面積22.40m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は1.00m・1.80m、梁行は2.00m を基本に北梁行きでは更に柱間に柱を加えている。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径25cm、深さは約20cm である。

出 土 遺 物　図化できた出土遺物はない。

SB008E(図版89)

検出状況　調査区上段中央東よりにおいて検出した。SB004Eの東隣に位置し、SB007Eと切り合い先行する。

形状・規模　桁行方位をN52°Wにとる建物跡である。規模は、北桁行で南北３間(5.30m)・南桁行では柱が多く南北５間(5.30m)・梁行南北２間(5.00m)、床面積26.5m²の規模である。

建物内の２個の柱穴は棟を支えるものと考えられる(Ａ－Ａ′)。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～40cm、深さは20cm～30cmである。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB009E(図版90　写真図版123)

検出状況　調査区上段東端よりにおいて検出した。SB006Eの南東に位置する。

形状・規模　桁行方位をN52°Wにとる総柱建物跡である。桁行南北４間(5.90m)・梁行東西３間(5.10m)、床面積30.09m²の規模である。建物の柱間は、桁行1.40m～1.50m、梁行では1.70mを測る。また、柱は北梁行きでは２個多く検出されている。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約40cmを測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

備　　考　南西半の柱を１個欠き、カマド(SF003E)が検出されている。この部分２間四方は土間として利用されていたと考えられる。

SB010E(図版90)

検出状況　調査区上段東端において検出した。SB009Eの南東に位置する。

形状・規模　桁行方位をN32°Eにとる側柱建物跡である。桁行南北４間(7.40m)・梁行東西３間(3.00m)、床面積22.20m²の規模である。建物の柱間は、桁行1.40m・2.00m、梁行では1.0mである。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約30cm、深さ30cmを測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB011E(図版91)

検出状況　調査区中段西端(Ｅ－３地区)において検出した。

形状・規模　桁行方位をN60°Wにとる側柱建物跡である。桁行東西２間6.00m・梁行南北２間4.30m、床面積25.80m²の規模が推定できるが、建物の歪みは激しく、使用された柱の本数・柱間など明確ではない。建物内の柱穴１個は梁・棟の通りにある。また、北桁行では小穴２個が検出されており、板壁などを支えたものと考えられる。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約30cm、柱痕は径約20cm、深さは25cm以上を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB012E(図版91)

検出状況　調査区中段西よりにおいて検出した。SB013Eの北西に位置する。

形状・規模　桁行方位をN60°Wにとる側柱建物跡である。桁行東西２間(6.00m)・梁行南北３間(5.50m)、床面積33m²の規模である。柱間は、桁行き3.00m、梁行き1.75m・2.00mである。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm、深さ約30cmの柱穴が多い。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB013E(図版92　写真図版124)

検出状況　調査区中段西よりにおいて検出した。SB012E の南東に位置する。SB014E と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N83°E にとる総柱建物跡である。桁行東西５間(10.50m)・梁行南北４間(8.20m)、床面積86.10m² の規模と考えられるが、南西隅の柱穴を一部欠いている。柱間はばらつきがあり、柱の通りにも歪みがあるが、東から１間目、３間目の梁行き、北から１間目と２間目の桁行きの通りは比較的整っている。基本的な柱間は１間約2.10m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～40cm、柱痕は不明である。深さは約20cm である。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

備　　考　南東隅の１間四方内からカマド(SF002E)が検出されている。本建物に伴う可能性がある。

SB014E(図版92　写真図版124)

検出状況　調査区中段西よりにおいて検出した。SB012E の南東に位置する。SB013E と重複するが、先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N70°W にとる側柱建物跡である。桁行東西６間(11.50m)・梁行南北２間(2.90m)、床面積約33.35m² の規模である。柱間は梁行きで1.20m・1.70m、桁行きでは1.80m もしくは2.10m を基本としている。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～50cm、深さは径約30cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

備　　考　カマド(SF002E)は、SB013E ではなく本建物に伴う可能性もある。

SB015E(図版93　写真図版125・127)

検出状況　調査区中段中央下段よりに位置する。SB016E の南側に位置し、SB021E・SB022E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N65°W にとる側柱建物跡である。桁行東西２間(7.70m)・梁行南北１間(5.00m)、床面積38.50m² の規模である。柱間は北桁行の柱 P4115E が中間にない。

柱　　穴　80cm×60cm の長方形の掘方を基本とし、深さ15cm と浅い。柱痕は径約30cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB016E(図版93　写真図版125)

検出状況　調査区中段中央に位置する。

形状・規模　桁行方位を N22°E にとる建物跡である。桁行南北２間(4.70m)・梁行南北２間(4.10m)、床面積19.27m² の規模である。の規模である。柱間は桁行2.35m、梁行では2.00m である。中央の柱穴は浅く不整形である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径25cm、深さ20cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB017E(図版94　写真図版125)

検出状況　調査区中段東よりに位置する。SB019E と軒・梁行きが並行する。SB018E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N062°W にとる建物跡である。桁行東西３間(5.80m)・梁行南北２間(4.20m)、床面積24.36m² の規模である。建物の柱間は、桁行2.10m・1.60m、梁行2.10m を測る。北東の隅が外

側に開き、平面プランはやや台形を呈する。総柱建物の可能性が高いが、梁行きの通りには歪みがある。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径30cm～40cm、柱痕は径約205cm を測る。深さは50cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB018E（図版94　写真図版125・128）

検出状況　調査区中段東よりに位置する。SB019E と切り合い新しい。SB017E とも重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N87°E にとる側柱建物跡である。桁行東西３間（5.30m）・梁行南北２間（3.90m）、床面積20.67m² の規模である。建物の柱間は、ばらつきがあり、柱穴 P4082が梁行きより外に出ていることから平面形は五角形を呈している。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約30cm～40cm、深さは平均約20cm を測るが40cm を超える深いものもある。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB019E（図版95　写真図版125・129）

検出状況　調査区中段東よりに位置する。SH001E と重複し新しい。SB017E と軒・梁行きが並行する。SB018E と切り合い先行する。SB020E とも重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N60°W にとる総柱建物跡である。桁行東西３間（6.60m）・梁行南北２間（4.80m）、床面積31.68m² の規模である。柱間は桁行2.00m・2.30m、梁行では2.40m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径40cm、深さ30cm～50cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB020E（図版95　写真図版125）

検出状況　調査区中段東よりに位置する。SH001E と重複し新しい。SB019E・SB21E・SB22E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N61°W にとる側柱建物跡である。北桁行きの柱穴が消失しているため明確ではないが、桁行東西３間（7.40m）・梁行南北２間もしくは３間（5.50m）、床面積40.70m² の規模と考えられる。柱間は桁行約2.40m、梁行では1.80m・2.75m である。梁行きの柱間は東では３間、西では２間と復元できる。また、建物の南東の一角に柱穴が集中しており、この部分が床張りであったと考えられる。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径50cm、柱痕は20cm、深さは15cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB021E（図版96　写真図版125）

検出状況　　調査区中段東よりに位置する。SH001E と重複し新しい。SB015E・SB019E・SB20E・SB22E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N33°E にとる側柱建物跡と推定される。桁行南北３間（8.50m）・梁行東西１間（南辺3.10m・北辺3.40m）、床面積27.2m² の規模である。柱間は桁行0.80m・1.00m・1.80m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～60cm を測る。深さ20cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB022E（図版96　写真図版125・128）

検出状況　調査区中段東よりに位置する。SH001E と重複し新しい。SB015E・SB019E・SB20E・

SB21E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N28°E にとる総柱建物跡と推定される。桁行南北３間(7.00m)・梁行東西３間(6.50m)、床面積45.5m² の規模である。柱間は桁行2.20m・2.60m、梁1.80m である。西梁行きには小規模な柱穴が多く見られ壁・間仕切りなどに使用された可能性がある。床面積45.50m² の規模である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～50cm を測る。深さについても30cm～50cm を測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

SB023E(図版97)

検出状況　調査区中段東端に位置する。SB024E・SB025E・SB26E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N68°W にとる総柱建物跡と推定される。桁行東西２間(5.20m)・梁行南北２間(4.20m)、床面積21.84m² の規模である。柱間は桁行2.60m、梁行き2.10m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径50cm、柱痕約25cm、深さ30cm を測る。

出土遺物　柱穴からは黒色土器椀548、須恵器椀550が出土している。

SB024E(図版97)

検出状況　調査区中段東端に位置する。SB023E・SB025E・SB26E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N21°E にとる総柱建物跡と推定される。桁行南北４間(9.60m)・梁行東西３間(7.00m)、床面積67.20m² の規模である。柱間は桁行1.50m・2.30m・2.60m・3.20m、梁行き2.00m・2.50m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm・深さ30cm を測るが、いくつかの柱穴では抜き取り、建て替えがある。

出土遺物　柱穴からは土師器皿551・552、椀553、壺554、黒色土器椀556、瓦皿557、須恵器椀558～560、白磁碗561・562が出土している。時期は12世紀後半～13世紀前半代である。

備　　考　北梁行きは２間分しかなく、幅も狭い。庇の可能性がある。西桁行きに沿う溝状遺構は建物に伴う区画溝と考えられる。SB025E と規模が類似しており建て替えが行われた可能性が高い。

SB025E(図版98　写真図版126)

検出状況　調査区中段東端に位置する。SB023E・SB024E・SB26E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N20°E にとる総柱建物跡と推定される。桁行きの一部は調査区外にある。桁行南北４間(9.30m)・梁行東西３間(7.80m)、床面積72.54m² の規模である。柱間は桁行1.90m・2.20m・3.00m、梁行き2.00m・2.80m・3.00m である。西側から１間目の柱の通りには密に柱穴が検出されており、棟であった可能性がある。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm・深さ30cm を測る。

出土遺物　柱穴からは土師器皿563が出土している。

備　　考　北梁行きは２間分しかなく、幅も狭い。庇の可能性がある。西桁行きに沿う溝状遺構は建物に伴う区画溝と考えられる。SB024E と規模が類似しており建て替えが行われた可能性が高い。

SB026E（図版98　写真図版126）

検出状況　調査区中段東端に位置する。SB023E・SB024E・SB025Eと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN70°Wにとる建物跡である。規模は桁行東西４間（5.70m）・梁行南北４間（5.40m）、床面積30.78m²の規模である。柱間にはばらつきがあるが、約1.5mを指向するものが多い。また、南梁行き２間分に柱穴が集中しており、この部分が床張りであったと考えられる。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～60cm・深さ20cm～30cmを測る。

出土遺物　柱穴からは土師器皿564、無釉陶器鍋565、黒色土器椀566、須恵器椀567・甕568が出土している。須恵器椀は東播系須恵器である。

SB027E（図版99　写真図版126）

検出状況　調査区中段東端に位置する。東側の柱穴は撹乱により消失している。SB024E・SB025E・SB026Eと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　軸方位をN18°Eにとる総柱建物跡と推定される。南北２間（4.50m）・東西２間（4.50m）、床面積20.25m²の規模である。柱間は2.25mである。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径40cm～50cm、深さ30cmを測る。

出土遺物　柱穴からは土師器569、瓦器皿571、白磁碗571、青磁碗572が出土している。時期は12世紀後半～13世紀前半代である。

SB028E（図版99　写真図版126・129）

検出状況　調査区下段東端に位置する。SB029E・SB030E・SB031E・SB032Eと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN19°Eにとる総柱建物跡と推定される。南東２間分は調査区外にある。桁行南北４間（9.10m）・梁行東西４間（8.20m）、床面積74.62m²の規模である。柱間は2.00m・2.35mである。また、西側の１間は庇であった可能性がある。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～50cm、柱痕径約20cm、深さ30cmを測る。

出土遺物　柱穴からは土師器皿573・椀574、須恵器椀575が出土している。

備　　考　この建物はSB029Eと規模が類似しており建て替えが行われた可能性が高い。

SB029E（図版100）

検出状況　調査区下段東端に位置する。SB028E・SB030E・SB031E・SB032Eと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN19°Eにとる総柱建物跡と推定される。南東２間分は調査区外にあると考えられる。南１間分は柱間にばらつきがあり、平面プランは歪みが激しい。桁行南北４間（8.55m前後）・梁行東西３間（7.00m前後）、床面積59.85m²の規模である。柱間は桁行き1.65m・2.10m・2.40m、梁行き2.30m～2.40mを測る。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm～40cm、深さ30cmを測る。

出土遺物　図化できた出土遺物はない。

備　　考　北梁行き２間分においては柱穴が揃っておらず、幅も狭い。庇の可能性がある。この建物はSB028Eと規模が類似しており建て替えが行われた可能性が高い。

SB030E（図版100）

検出状況　調査区下段東端に位置する。SB028E・SB029E・SB031E・SB032E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　建物の大半は調査区外にあると考えられ、明確ではない。桁行方位を N23°E にとる側柱建物跡と考えられる。規模は桁行南北４間(9.00m)・梁行南北１間(1.65m)以上の規模である。柱間は桁行1.65m・1.80m・3.70m である。梁行は１間1.65m である。3.70m の柱間は間に柱穴が１個欠失している可能性が高い。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm・深さ10cm を測る。

出土遺物　柱穴からは土師器皿577、須恵器皿578が出土している。

SB031E（図版101）

検出状況　調査区下段東端に位置する。SB028E・SB029E・SB030E・SB032E と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N66°W にとる建物跡である。７個の柱穴を検出している。東西３間(4.50m)・梁行南北１間(2.00m)、床面積9.00m² の規模である。建物の柱間は、桁行1.50m・3.00m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約20cm・深さ25cm である。

出土遺物　柱穴からの遺物の出土はない。

SB032E（図版101）

検出状況　調査区下段東端において検出した。建物の東・南半は水田造成のため削平されている。

形状・規模　桁行方位を N80°E にとる側建物跡である。桁行東西３間(4.50m)以上・梁行南北２間(3.60m)、床面積16.20m² の規模である。建物の柱間は、桁行1.50m、梁行1.80m を測る。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径25cm・深さ30cm を測る。また、北桁行の２個の柱は建て替えたと考えられ、柱穴の切り合いが存在する。

出土遺物　柱穴からの遺物の出土はない。

SB033E（図版101）

検出状況　調査区下段西半において検出した。建物の南半は水田造成のため削平されている。

形状・規模　軸方位を N66°W にとる側柱建物跡である。桁行南北１間(3.00m)以上・梁行東西２間(4.20m)の規模である。建物の柱間は、梁行では2.10m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方は径約30cm、深さは20cm を測る。

出土遺物　柱穴からの遺物の出土はない。

SA001E

検出状況　調査区上段東端において検出した。SB010E と重複する。

形状・規模　方位を N59°W にとる柵列跡である。規模は東西５間(7.00m)の規模である。柱間はばらつきがあり1.10m・1.40m・1.60m である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SA002E

検出状況　調査区中段東半、SH001E 東隣において検出した。

形状・規模　方位をN42°Wにとる柵列跡である。規模は東西４間(7.60m)である。柱間は2.00mと1.80m

の間隔である。

柱　　穴　円形を基本とし掘方径30cm を測る。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

(2)土　坑

7 基図示した。

SK006E（図版102　写真図版22）

検 出 状 況　SB023E の西隣に位置する。

形状・規模　円形を呈する。規模は径約95cm、深さ約35cm を測る。土坑底は平坦に近く、丸みをもつ。

堆　　積　3 層に堆積は分かれる。1 層は土坑が最終的に埋没した流土である。2 層は若干焼土を含む赤灰色土、3 層は焼土混じりの赤灰色土である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SK023E（図版102）

検 出 状 況　SB024E の南梁行き上にあり、SB024E の柱穴（抜き痕）の可能性が高い。

形状・規模　不整な卵形の土坑である。全長約70cm・横幅約53cm、深さ約25cm を測る。箱形に掘られ、土坑底は平坦である。

出 土 遺 物　黒色土器椀556が出土している。

SK065E（図版102）

検 出 状 況　SB024E の西桁行き上にあり、SB024E の柱穴（抜き痕）の可能性がある。

形状・規模　不整な卵形の土坑である。全長約70cm・最大幅約48cm、深さ約 8 cm を測る。皿形に掘られ、土坑底は平坦である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SK055E（図版102）

検 出 状 況　調査区中段東端において検出された。SB027E の南柱行き柱穴と切り合い新しいと考えられる。

形状・規模　不整な小判形の土坑である。全長約114cm・最大幅約85cm、深さ約18cm を測る。擂鉢形に掘られている。

出 土 遺 物　黒色土器椀612・613、須恵器鉢614・615、施釉陶器皿616が出土している。須恵器鉢の時期は14世紀代、東播系須恵器である。

SK72E（図版102）

検 出 状 況　調査区中段東端において検出された。SB027E の西柱行き柱穴と切り合い先行する。

形状・規模　不整な洋梨形の土坑である。全長約110cm・最大幅約85cm、深さ約 8 cm を測る。浅い皿形に掘られている。

出 土 遺 物　土師器皿617・618、須恵器椀619が出土している。須恵器椀は東播系須恵器である。

SK076E（図版102）

検 出 状 況　調査区中段中央下段よりに位置する。SB015E 内に位置するが、先後関係は不明である。

形状・規模　不整な卵形の土坑である。全長約95cm・最大幅約65cm、深さ約40cm を測る。断面形状は薬研形である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SK082E（図版102　写真図版22）

検 出 状 況　調査区中段東半、SH001E 南東、SA002E に近接して検出した。

形状・規模　外形は不整なハート形であるが、中段では円形となる土坑である。全長約140cm・最大幅約70cm、深さ約30cm を測る。中段の径は約70cm を測る。断面形状はＵ字形である。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

(3)焼土坑（カマド状遺構）

Ｅ地区で焼土坑を３基検出した。SF001E は後世の削平のため、被熱面しか残存しておらず、詳細は不明であるが、２基は、カマド状の土坑を検出した。特に、SF003E では周りは馬蹄形に赤褐色の被熱面が広がっている。土坑の中には炭が充満し、そこで火を受けた形跡が認められることからカマドの可能性がある SF002E は SB004E のプラン内にあり、建物内に設えたカマドの可能性もある。

SF001E（図版103　写真図版21・22）

検 出 状 況　調査区中段西端より検出した。SB013E もしくは SB014E に伴う可能性がある。

形状・規模　円形を呈する。規模は径約90cm、深さ約10cm を測る。土坑底は平坦になっており、炭・焼土更に５cm 前後の角礫が上部に散らばる。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF002E（図版103　写真図版22）

検 出 状 況　SB004E 内に位置する。

形状・規模　不整な楕円形の土坑である。規模は長径約90cm・短径約80cm、高さ20cmに盛り上がりをもつ。上部は擂鉢状に窪み、深さ約18cmを測る。窪み内には、炭・焼け土が堆積する。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

SF003E（図版103　写真図版22）

検 出 状 況　調査区下段西端において検出した。SB013E もしくは SB014E に伴うものと考えられる。

形状・規模　円形を呈する。規模は径約1.0m、馬蹄形に盛り上がり内部底には焼け土面が検出される。土坑は、火化面・炭層が２層ずつ見受けられ、複数回使用されたことが分かる。

出 土 遺 物　図示できる出土遺物はない。

Ｂ．古墳時代前期の遺構

(1)竪穴住居

竪穴住居は調査区中段の水田の中央よりに１棟検出した（SH001E）。この住居跡に近接して壁溝と考えられる溝を１条検出しており、もう１棟住居が存在したと推測される（SH002E）。

竪穴住居の時期は SH002E の出土土器から、古墳時代前期と考えられるが、図化可能な遺物が少なく不詳な点も多い。

Ｅ地区には建物に復元できなかった柱穴が多く、更に多くの竪穴住居が存在した可能性が高い。

SH001E（図版104　写真図版130）

検 出 状 況　中段中央西よりにおいて検出した。SH002E とは重複していると考えられるが、先後関係は不明である。

形状・規模　平面形状は隅丸方形、東西方向に若干長いプランをもつ。東西辺4.30m・南北辺4.00m、床面積は17.20m^{2}以上を測る。削平が激しく壁面の高さはない。

壁　　溝　幅25cm・深さ15cm、Ｕ字形の断面形状をもつ溝がコの字形に巡る。

柱　　穴　径30cmの柱穴を13個検出したが住居に伴うと確定できるものはない。

出土遺物　遺構に伴う出土遺物はない。

SH002E（図版104　写真図版130）

検出状況　中段中央西よりにおいて検出した。SH001Eとは重複していると考えられるが、先後関係は不明である。

形状・規模　壁溝の存在以外不明である。

壁　　溝　幅25cm・深さ10cmの溝が存在する。

出土遺物　土師器甕（664）が出土している。位置関係から壁溝に伴うものと考えられる。

時　　期　古墳時代前期である。

Ｃ．下層谷部の調査（縄文時代後期～弥生時代前期）（写真図版131）

検出状況　住居跡の西側において南向きに開く舌状の谷を検出している。この谷部は柱穴群・住居跡よりも下層に存在しており、扇状地が形成される過程で埋没してゆく谷部の最上部にあたる。

形状・規模　南向きに開く舌状の谷である。東西幅約18m、南北検出長約10m、深さ約0.5mを標準とし、緩やかに南へと傾斜している。

堆積状況　谷底の傾斜はほぼ平坦で、堆積は水平に近い。最下層の粗砂から上層の細砂へと漸移している。遺物は最下層の暗褐色粗砂中に多く含まれる。

出土遺物　縄文～弥生時代にかけての土器が出土した。縄文後期（北白川期）の深鉢の破片と底部に網代文がのこる縄文後期の深鉢の底部がみつかっているが、多くは、縄文晩期～弥生前期初頭にかけての突帯文土器である。

備　　考　谷筋が埋まる最終段階で流れ込んだものとも考えられるが、土器の状態が比較的よいことから、調査区北側の谷奥あるいはＥ地区内東半部の圃場整備によって削平を受けた地点など、きわめて近い場所にこれらの土器に伴う遺構が存在していた可能性がある。

Ｄ．遺構小結

第１面－中世（13世紀～16世紀）、第２面－縄文時代後期・弥生時代前期の２面で遺構を精査した。第１面の示す濃密な中世の遺構の分布は、調査地点周辺に存在した中世集落の存在を示している。この様相はＦ地区の南側に続く。

４．遺物

(1)土器（図版106～108　写真図版23・134～141）

SB023E

548は黒色土器椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する。549は瓦質土器鍋である。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は外方に大きく屈曲して外

上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。550は須恵器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は暗灰黄色を呈する。東播系須恵器である。

SB024E

土師器　551・552はいずれもロクロ成形の皿である。551は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。552は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。553は椀である。平底で器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。554は壺である。体部は内彎し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面はナデ調整、内面はヨコナデ調整を施す。色調は明褐灰色を呈する。

黒色土器　555は椀である。体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。556は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内面はナデ調整の後、ヘラミガキ調整、外面はナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

瓦器　557は皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

須恵器　558～560は椀である。558は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。559は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。560は体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。いずれも東播系須恵器である。

白磁　561は碗である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し灰黄色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。562は碗である。底部の器壁は厚く、高台は浅く削りだす。底部内面に沈線が１条巡る。底部内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。底部外面は露胎である。横田・森田分類白磁碗Ⅷ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SB025E

563はロクロ成形の土師器皿である。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

SB026E

土師器　564は非ロクロ成形の皿である。体部は緩やかに外上方に延び、口縁部は外方にひらく。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。

無釉陶器　565は鍋である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は若干外方につまみ出す。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調はにぶい赤褐色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。

黒色土器　566は椀で器壁は全体に比較的厚い。低い平高台を削り出し、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。

色調は内面が黒色、外面が黄灰色を呈する。

須恵器　567は椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。568は甕である。口縁部は大きく外方にひらき、口縁端部は側面に端面をもつ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。色調は灰黄色を呈する。

SB027E

土師器　569は非ロクロ成形の皿である。平底で器壁は比較的薄い。体部と底部の境は不明瞭で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

瓦器　570は皿である。平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

白磁　571は碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は若干外方につまみ出す。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅴ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

青磁　572は碗である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。外面は櫛描きの草花文を、内面は櫛描き雷光文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SB028E

573は土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。574は土師器椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。575は須恵器椀である。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

SB029E

576は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に若干肥厚する。端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

SB030E

577は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は灰黄褐色を呈する。578は須恵器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

ピット内

土師器

皿　579・587・590はロクロ成形である。579は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。587は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強い回転ナデ調整を施す。底部外面にはヘ

ラ切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。590は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

580～586・589は非ロクロ成形である。580は平底で体部と底部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。581は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。582は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。583は体部と底部の境は不明瞭で体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。584は平底で体部は短く緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。585は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は短く僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。586は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は強いヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。589は平底で口縁部は若干外方にひらく。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。

椀　588は平底で器壁は比較的厚い。内面はナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は明赤褐色を呈する。591は体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

黒色土器　592～595はいずれも椀である。592は体部が内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施す。体部内面はミガキ調整を加える。色調は内面が黒色、外面がにぶい橙色を呈する。593は口縁部が若干屈曲して外上方に延びる。外面はヨコナデ調整、内面はミガキ調整を施す。色調は内面が黒色、外面が浅黄色を呈する。594は平底で断面が台形状の比較的高い貼り付け高台をもつ。内外面ともナデ調整を施す。色調は黒褐色を呈する。595は底部片である。内面はナデ調整の後、ヘラミガキ調整を加え、底部外面には糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面が浅黄橙色を呈する。

瓦器　596・597は椀である。596は体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。体部内面には横方向のヘラミガキ調整を加える。色調は灰白色を呈する。597は断面が三角形状の比較的高い貼り付け高台をもつ。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整で、底部内外面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

須恵器

椀　598～605はいずれも東播系須恵器椀である。598は平底で体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。599は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。600は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。601は

体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。602は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。603は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰白色を呈する。604は平底で体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。口縁部外面には重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。605は体部が直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。

壺　606は壷である。体部は内彎し、外面に凸帯が１条巡る。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

白磁　607は碗である。底部の器壁は厚く、高台は浅く削り出す。内面は透明釉を施釉し、灰白色に発色する。外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

青花磁器　608は皿である。高台は断面が三角形状を呈する。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面は唐草文、内面は細かい草花文を描く。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。

SK006E

609は黒色土器椀である。平底で内面はミガキ調整、外面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面がにぶい橙色を呈する。

SK023E

610は黒色土器椀である。平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。外面は回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する。

SK065E

611は瓦器椀である。器壁は比較的厚く、体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面ともナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

SK055E

黒色土器　612・613はいずれも椀である。612は体部が直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する。613は平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は内面が黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

須恵器　614・615は鉢である。614は体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。内面全面に自然釉が掛かり、灰オリーブ色に発色する。615は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、口縁部内面に凹部をもつ。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で14世紀代に比定される。

施釉陶器　616は卸皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部内面には櫛描きで格子目状の擂目を施文する。内面全面に灰釉が付着し、オリーブ灰色に発色する。焼成は堅緻で色調はにぶい赤褐色を呈する。

SK072E

土師器　617はロクロ成形の皿である。平底で底部の器壁は厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。618

は非ロクロ成形の皿である。平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

須恵器　619は椀である。体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

SK077E

620は青花磁器碗である。器壁は比較的薄く、体部は内彎気味に外上方に延びる。外面には牡丹唐草文を描く。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。

包含層

土師器

皿　621・622・628はロクロ成形である。621は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調は橙色を呈する。622は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。628は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は橙色を呈する。

623～626は非ロクロ成形である。623は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともナデ調整を施し、底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。624は器壁が比較的薄い。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は淡橙色を呈する。625は平底で体部は緩やかに直線的に外上方に延びる。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。626は平底で器壁は全体に比較的厚く、体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

椀　627は平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、外面に粘土紐の単位が明瞭に残る。底部外面には糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

鉢　629は平底で器壁は全体に厚い。体部は直立する。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。底部外面にはヘラ切痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

甕　630～633はいずれも甕もしくは壺の口縁部片と考えられる。

鍋　634～636は鍋である。634は頸部がほぼ直立し、口縁部は若干外方につまみ出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調は浅黄色を呈する。635は播丹型鍋の体部片と考えられる。外面に平行叩き目が残る。色調は浅黄橙色を呈する。636は体部が内彎し、頸部はほぼ直立する。口縁端部は内側に若干引き出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は横方向のケズリを施す。体部外面には平行叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。播丹型Ⅳ類で15世紀前半～中頃に比定される。

黒色土器　637は椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内面は回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整、外面は回転ナデ調整を施す。色調は内面が黒色、外面が浅黄色を呈する。

瓦器　638は椀である。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は黒色を呈する。

瓦質土器　639は鍋である。体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は「Ｌ」字状に屈曲する。口縁端部は斜め上方につまみ上げる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調

は黒色を呈する。

須恵器

椀　640・644・645は椀である。640は高台の断面が長方形状で低い。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は回転ヘラケズリを加える。色調は灰色を呈する。644は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。645は平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内面に凹線が１条巡る。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は切り離しの後、ヘラケズリ調整を加える。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀代に比定される。

壺　641は平底で断面が方形の比較的低い貼り付け高台をもつ。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、内面にロクロ目が明瞭残る。色調は灰色を呈する。

皿　642・643は皿である。642は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。643は平底で、体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。いずれも東播系須恵器である。

鉢　646は体部が直線的に外上方に延びる。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

施釉陶器

卸皿　647は底部の器壁が厚い。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反気味に外方にひらく。底部内面に格子状の卸目を施文する。口縁部内外面に灰釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。瀬戸・美濃系灰釉陶器で15世紀代に比定される。648も同タイプの卸皿片である。

壺　649は外面に縦耳を貼り付ける。外面は施釉し暗灰色に発色する。中国産陶器の可能性が高い。

無釉陶器　650は擂鉢である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施し、体部内面に櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調はにぶい褐色を呈する。丹波焼で16世紀後半～17世紀前半に比定される。

白磁

碗　651～654・659・660は碗である。651は器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗Ⅱ類で12世紀代に比定される。652は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は細長い玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。653は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。いずれも横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。654は比較的幅の広い輪高台をもつ。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。華南産白磁と考えられる。659は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。華南産白磁と考えられる。660は高台が比較的細く、体部は外上方に立ち上がる。内外面とも透明釉を施釉し白色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。近世後半～近代の国産白磁と考えられる。

皿　655・658は皿である。655は高台の断面が三角形状で細く低い。内外面とも透明釉を施釉し、灰白

色に発色する。森田分類の皿Ｅ－２群で16世紀代に比定される。658は平底で底部の器壁は厚く、断面台形状の高台をもつ。体部は内彎気味に外上方に延び口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の白磁で18世紀前半代に比定される。

紅皿　661は型作り成形で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は上面に端面をもつ。外面は放射状に施文し、内面は透明釉を施釉して白色に発色する。外面は露胎である。肥前系白磁で19世紀前半代に比定される。

青磁　656・657はいずれも碗である。656は底部の器壁は比較的厚い。高台は断面が長方形状で比較的低い。外面に蓮弁文を施文する。内外面、更に高台畳付～高台裏まで青磁釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁で15世紀代に比定される。657は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。外面に線描きの剣頭と身の一致しない蓮弁文を描く。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で16世紀代に比定される。

青花磁器　663は碗の底部である。高台は細く高く、底部が上方に突出する饅頭心碗である。内面に牡丹唐草文、内面に「富貴□器」銘を描く。景徳鎮窯の製品で16世紀代に比定される。

石製品　662は断面が６角形を呈する石製品で用途は不明である。長方形の原石を割って成形する。色調は暗灰色を呈する。

(2)金属器（図版108　写真図版141）

釘（M33・M34）

M33は頭部が不明の釘である。残存長は6.7cm を測る。M34は頭巻釘で残存長は3.3cm を測る。

不明鉄製品（M35・M38）

M35は楔状の製品である。長さは6.2cm、最大幅は1.7cm、厚みは1.2cm を測る。M38は板状製品である。残存長は4.0cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm を測る。

小札（M36・M37）

２点とも碁石頭の伊予札である。M36は残存長が、6.0cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm を測る。M37は残存長が4.4cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm を測る。

(3)古墳時代以前の遺物（図版109～111　写真図版142～145）

SH002E

土師器甕664は体部上半から口縁部にかけての破片である。口頸部は外反し、口縁部は直立気味に立ち上がり、受け口状を呈する。体部内面は縦方向のケズリを行い、口頸部はヨコナデを行う。

包含層

古墳時代

土師器甕630・632・633はいずれも口縁部で、630は外反し、632・633は外傾している。土師器壺631は直口壺の口頸部で直立している。

須恵器坏Ｈ身665は小振りで、受部は斜め上方に短く伸び、立ち上がりは短く内傾する。

縄文土器

縄文土器深鉢666は外反する口頸部の破片である。口縁端部は肥厚し、口縁端面と口縁直下に沈線を

施文する。深鉢667は体部から頸部かけての破片である。地文に縄文を施文し、３本１単位の沈線を施文している。668は口縁部で外傾している。口縁部外面に細かい右上がりの縄文を施文している。

粗製の深鉢669～673は体部の破片で外面は縦方向の細密条痕を内面は横方向の細密条痕で調整している。674は体部下半部から底部にかけての破片である。平底で網代の圧痕がある。体部外面は縦方向の細密条痕を内面は横方向の細密条痕で調整している。

675は平底の深鉢の底部である。676は丸底の深鉢の底部である。

677・678は口縁部直下に突帯を貼り付け、ヘラによる押圧を行っている。

677は直立し口縁端部は外反している。頸部は縦方向の条痕文で調整している。678は外傾している。679・681・684は口縁部に突帯を貼り付け、棒による刺突を加えている。679は口縁端部に突帯を貼り付けている。681・684は口縁部直下に突帯を貼り付け、681の頸部は横方向の条痕文で調整している。680は口縁部直下に突帯を貼り付け、幅広の押圧を行っている。682・683は口縁部に突帯を貼り付け肥厚させ、半裁竹管をＣ形に押圧している。685は口縁部に突帯を貼り付けずに、半裁竹管をＣ形に押圧している。686・687は頸体部境の破片で、突帯を貼り付ける。686は突帯上をヘラによる押圧を行っている。687は突帯上と突帯下の体部に棒による刺突を加えている。

688～695は口縁部に無文の突帯を貼り付ける。688～690は直立し、口縁直下に突帯を貼り付ける。691は内傾し、口縁直下に２条の低い突帯を貼り付ける。692の頸部は横方向の条痕文で調整している。693は外傾し、口縁外面に低い突帯を貼り付ける。694・695は内傾し、口縁外面に低い突帯を貼り付ける。696は無頸壺で内傾する口縁部の外面に粘土紐を貼り付けている。

縄文の石器

石棒 S11は結晶片岩製で明瞭な加工痕は無い。

弥生土器

弥生土器壺697～713はいずれも小片である。

697・700は広口壺の口頸部で、いずれも頸部に４条以上のヘラ描沈線を巡らしている。698は広口壺の頸部から体部で、口頸境に２条のヘラ描沈線を巡らしている。頸体境は段を作り３条のヘラ描沈線を巡らしている。全体に横方向のミガキを施し丁寧に作っている。699は大形の広口壺で頸体部境にケズリ出し、低く幅広い突帯を作っている。

701・702は壺体部の破片で、ヘラ描沈線を巡らしている。703は壺体部の破片で、３条のヘラ描沈線の連弧文を施文している。704は大形の広口壺で頸体部境にヘラ描沈線を巡らしている。705は広口壺の口縁部で、口縁端部にヘラ描沈線を巡らしている。

706は貼付突帯の広口壺で口頸境に突帯を貼り付け、キザミを付けている。707～711は頸体境に突帯を貼り付け、キザミを付けている。

712は壺の口縁部である。713・717・718は壺の底部で調整は不明である。713は大形の壺である。714は甕の体部上半から口縁部の破片である。直線的に立ち上がる体部から短く外反する口縁部が付く。体部外面は縦方向のハケ調整の後、口縁部直下に２条のヘラ描沈線を巡らしている。口縁端部はキザミを付けている。715・716は甕の底部の一部である。

第６節　Ｆ地区の調査

１．調査の概要（図版79　写真図版146・147）

Ｆ地区はＥ地区の東側に設定した調査区である。平成12年度に実施した第１次確認調査では遺構の存在が明らかではなかったが、Ｅ地区の調査結果をもとに再度確認調査を実施したところ遺構の存在が明らかとなり、本発掘調査を実施した。

Ｆ地区は南北長約60m・東西最大幅約26m の台形を呈する調査区である。調査前の現況では３枚の水田であるが、圃場整備によって改変を受けており、圃場整備前の図面・空中写真からは、もともとは西半では５枚、東半では７枚の計12枚に分かれる水田であったことが判っている。

調査の結果、調査区の大半は圃場整備に伴い削平を受けており、Ｅ地区と同様に現耕作土・圃場整備時の盛土直下から地山面が出現していることが判明した。調査区の北半部分には旧河道が存在しており、埋没にともない複数の時期の遺構面が形成されていることが判明した。旧河道部分では２面、地山面が出現している部分では１面で遺構を検出・調査を実施した。遺構は調査区の南半部では建物群と井戸が、北半では水田遺構を検出した。

遺構の時期は13世紀～16世紀にかけてである。

２．遺構

Ｆ地区の遺構は、基本的には用水路において隔てられた西側のＥ地区から続く一連の遺構群である。検出できた遺構の大半は、掘立柱建群・柱穴群であり、これらは、Ｅ地区から広がる一連の建物群である。この観点から、建物跡の№は、Ｅ地区からの続き番号とした。建物群の分布は、調査区の南半部に集中しており、これらは、一部中段の延長上にある柱穴群を除けば、Ｅ地区の下段部分の延長にあたる。これに対して中段の延長上には南北に走る旧河道とその上層に構築された水田遺構が検出できた。即ち、中世に限れば、Ｆ地区は、Ｅ地区から延びる集落遺跡の東端にあたり、居住区に付随する生産領域の一部が検出できたことになる。

Ａ．南半部の遺構群ー集落遺構（図版112・113　写真図版147）

Ｅ地区下段の建物群から続く建物群に加え、井戸１基と井戸に伴うと考えられる石組み遺構を検出した。

(1)掘立柱建物群・柱穴群

柱穴は約300個検出しており、10棟の建物跡を復元した。復元した建物跡はすべて調査区の南半に集中しており、井戸や石組み遺構（水溜）と有機的に結びついていたと考えられる。復元に使用しなかった柱穴は多く、Ｅ地区同様、更に多くの建物が存在したと考えられる。

SB034F（図版114）

検出状況　調査区南半において検出した。SB035F と並行する。また、SB036F・SB038F・SB039F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N71°Ｅにとる総柱建物跡である。桁行東西４間（8.20m）・梁行南北３間（6.00m）、床面積49.20m² の規模である。建物の柱間は歪みが激しいが、総じて桁行では１間分は

1.80m・2.10m 前後に分かれる。梁行についても1.80m・2.10m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、深さ20cm を測る。

出土遺物　柱穴からは土師器鍋720が出土している。

備　　考　東１間の間には３個の柱穴が検出されており、張り床があった可能性がある。また、北から１間の桁行きと西から１間の梁行きは比較的柱通りに歪みがなく、建物を建てあげる際に何らかの基線となった可能性が高い。SB035F とは約50cm の間を空けて桁行きが並行しており、同時期に建てられていたと考えられる。

SB035F（図版114）

検出状況　調査区南半において検出した。SB034F と並行する。

形状・規模　桁行方位をN71°W にとる側柱建物跡である。桁行東西３間(5.90m)・梁行南北２間(3.40m)、床面積20.06m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は1.80m・2.10m 前後に分かれる。梁行は1.70m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、柱痕径約15cm、深さ20cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

備　　考　SB034F とは約50cm の間を空けて桁行きが並行しており、SB034F に付属する建物として同時期に建てられていたと考えられる。

SB036F（図版115）

検出状況　調査区南半において検出した。SB035F と並行する。また、SB034F・SB037F・SB038F・SB039F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN7°E にとる総柱建物跡である。桁行南北３間(6.20m)・梁行東西３間(5.40m)、床面積33.48m² の規模である。建物の柱間は歪みが激しいが、総じて桁行では１間分は1.80m。梁行についても1.80m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、柱痕径15cm、深さ15cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB037F（図版114）

検出状況　調査区南半において検出した。SB034F・SB036F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN70°E にとる総柱建物跡である。桁行東西３間(6.0m)・梁行南北２間(3.50m)、床面積21.0m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は2.2m・1.6m 前後に分かれる。梁行は1.70m・1.80m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径20cm～40cm、深さ20cm を測る。

出土遺物　柱穴からは土師器皿719が出土している。

SB038F（図版115）

検出状況　調査区南半において検出した。SB034F・SB037F・SB039F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN70°W にとる総柱建物跡である。南北２間(4.00m)・東西３間(4.40m)、床面積17.60m² の規模である。建物はＬ字形に検出されており、南東隅の柱穴は検出されなかった。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、深さ15cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB039F（図版115）

検出状況　調査区南半において検出した。SB034F・SB036F・SB037F・SB038F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N21°E にとる建物跡である。桁行南北７間（8.80m）・梁行東西２間（3.40m）、床面積29.92m² の規模である。建物の柱間は歪みが激しいが、総じて桁行では１間分は1.40m を基本とし、部分的に並んでもう１つ柱が立てられている。梁行については1.70m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、深さ35cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

備　　考　建物は、南北桁行きには柱が多く、板壁などの施設に伴う可能性がある。SD1027F は地桁もしくは間仕切りの痕跡と考えられる。中央の棟通りの柱列は若干蛇行している。柱穴 P1028F・P1030F よりも北側に棟通りの柱はなく、土間など、南側と利用形態が違っていた可能性が高い。

SB040F（図版115）

検出状況　SE001F を中心に持つ位置で検出した。

形状・規模　軸方位を N26°E にとる側建物跡である。南北１間（3.50m）・東西２間（3.10m）床面積10.85m² の規模である。建物の柱間は東西方向では1.80m と1.30m を測る。北辺には建て替えに伴うと考えられる柱穴が４個検出されている。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～40cm、深さ15cm を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

備　　考　SE001F に伴う覆い屋の可能性が高い。

SB041F（図版116）

検出状況　調査区南西隅において検出した。SB042F・SB043F・SB044F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N6°W にとる側柱建物跡である。桁行南北４間（6.60m）・梁行東西２間（4.40m）床面積29.04m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は1.2m 前後、他は1.8m、梁行は2.2m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径30cm～50cm、深さは20cm 以下の浅いものと50cm ほどの深いものがある。柱痕は約20cm である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

備　　考　柱穴 P2055F は小径であり、間仕切りなどの機能に伴ったと考えられる。

SB042F（図版116）

検出状況　調査区南西隅において検出した。SB041F・SB043F・SB044F と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位を N8°W にとる総柱建物跡である。桁行南北２間（5.0m）以上・梁行東西２間（3.80m）、床面積19.0m² の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は2.5m、梁行は2.0m・1.80m 前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径20cm～30cm、深さ30cm 前後である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB043F（図版116）

検出状況　調査区南西隅において検出した。SB041F・SB042F・SB044Fと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN22°Wにとる総柱建物跡である。桁行東西２間（3.60m）・梁行南北２間（3.20m）、床面積11.52m²の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は1.8m前後、梁行は1.6m前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径20cm～50cmとばらつきがある。深さもまた、深さは20cm以下の浅いものと50cmほどの深いものがある。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB044F（図版116）

検出状況　調査区南西隅において検出した。SB041F・SB042F・SB044Fと重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN56°Eにとる側柱建物跡である。桁行東西２間（3.20m）以上・梁行南北２間（3.60m）、床面積11.52m²の規模である。建物の柱間は、桁行では１間分は1.6m前後、梁行は1.8m前後の柱間をとる。

柱　　穴　円形を基本とし径20cm～30cm、柱痕径15cm、深さ20cmを測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

備　　考　北側の梁行きには２個の小径の柱穴が検出されている。性格は不明である。

(2)水溜め・井戸

Ｆ地区で、水田跡と柱穴群との間に井戸２基・水溜１基を検出した。

SE001F（図版117　写真図版148）

検出状況　Ｆ地区南半中央よりにおいて検出された石組の井戸である。

形状・規模　掘り方はやや不整な円形を呈し、径約2.4mを測る。井側は、隅丸長方形の平面形となっており、長辺約１m・短辺約80cmを測る。井側は一辺30cm前後の石を落とし積みによって積み上げて造られている。現存する石積みは13段を数え、やや胴が張る。その下に丸太材を方形に組みあわせた井桁がある。井側が、隅丸長方形に組み上げられているのは、方形の井桁に起因する。井桁内には水溜めなどの施設はない。残存する深さは、約2.3mを測る。

出土遺物　土器が全く出土していないため時期は不明である。

備　　考　井戸はSB040Fの中にあり、SB040Fは覆い屋の可能性が高い。SB040Fの柱穴は、井戸を中心に置かず、やや南西に寄る。井戸の南側・西側に使用上必要な空間を持たせていたと考えられる。

SX002F（図版118）

検出状況　井戸SE001Fの東隣において検出された集石を伴う土坑である。SB034F・SB035Fの北桁行きに並行している。

形状・規模　不整な隅丸方形を呈しているが南辺は直線的である。南北約3.1m・東西3.7m、深さ50cmを測る。土坑底は皿状を呈しており中央がやや窪む。土坑内には南辺を中心に１辺30cm前後の石が集まっている。

出土遺物　近現代の遺物が見つかっており、近年に撹乱された可能性が高い。

備　　考　集石は南辺及び東辺の一部に巡っていた石組が崩落した可能性が高く、中世中期～後期に類例が多い水溜め遺構であったと考えられる。位置的には井戸の隣にあり、関連する遺構であった可能性が高い。

２．北半部の遺構群－井戸・土坑・水田遺構・旧河道(写真図版149)

北半部では、井戸・土坑・水田遺構・旧河道、主に小区画の水田遺構を検出した。

(1)層　序

北半部では旧河道が埋没した上に数時期の水田が開かれており、最下層の水田(4a 層)を含め、４枚(1a 層～4a 層)の水田土壌を確認している。これらの水田は谷奥から供給される洪水砂(b 層)によって繰り返し埋没しており、最上層の水田(1a 層)の上層からも埋没した近代の石列が検出されている。

調査対象とした水田遺構は、埋没した旧河道上に開かれたもので、埋没した段丘崖の崖下を巡る位置に営まれている。水田一筆の規模は地形を反映し全体に狭小である。狭いもので１筆４m^2、広いものは12m^2 を超える規模である。

この水田の時期については、水田土壌層の下層(4b 層)から、13世紀後半以降の土師器鍋が出土し、また、水田土壌層(4a 層)及び被覆する洪水砂(3b 層)中からは、13世紀代の年代観をもつ青磁碗片、須恵器鉢片などが出土しており、上層水田(3a 層)からは16世紀後半以降の丹波焼が出土しており、14世紀以降(15世紀前半の可能性が高い)と考えている。

なお、水田を被覆する洪水砂中からは、奈良時代に遡る須恵器杯底部片が２点出土している。更に谷奥に奈良時代の遺構が存在する可能性がある。

土坑・井戸は水田土壌を掘り込んで造られている。

(2)井戸・土坑

SE003F(図版118　写真図版149)

検 出 状 況　Ｆ地区中央東端において検出された素掘りの漏斗状の井戸である。

形状・規模　上面形は卵形を呈し、下半部(水溜め)は不整な五角形に掘り込まれている。断面形状は漏斗状を呈する。

規模は上面では、長軸3.1m・短軸2.3m、底部では長軸1.5m・短軸1.2m、深さ1.3m を測る。

出 土 遺 物　出土していない。

備　　考　水田を埋没させた洪水砂層より後に掘られている。旧河道の肩に開けられ、現況では湧水点に達していることから、井戸と判断した。時期は、江戸時代に入る可能性が高い。

SX004F(図版119　写真図版149)

検 出 状 況　調査区北端において検出された土坑である。

形状・規模　平面形は円形を呈し、垂直に掘られている。径約1.2m、深さ90cm を測る。土坑内には径30cm 前後の巨礫が入っている。

出 土 遺 物　漆椀が出土している。

備　　考　水田土壌を掘り込んで造られている。上層の水田に伴う埋め桶の可能性が高い。

(3)水田遺構(図版119～121　写真図版149)

調査対象とした水田遺構は２枚存在する。重複関係から古いものを、水田遺構Ⅰ、新しいものを水田遺構Ⅱとする。

水田遺構Ⅰ

検出状況　旧河道の形状にしたがって水田区画が検出された。水田区画の大半は東辺が調査区外にあり規模は詳らかではない。水田区画は北半では２列検出されており、旧河道の肩よりにある西列は不整形で小さく、河道中央に近い東列は比較的長方形に近い区画形状をしており、規模も西列に比べ大きい。南半は区画の西辺を検出しており、東列に連なるものと考えられる。あわせて13区画前後を検出した。

形状・規模　西列は２ｍ四方(４m^2)から２ｍ×３ｍ(６m^2前後)の面積の区画を呈する。東列は幅２ｍ～３ｍ、全長４ｍ前後の規模があり８m^2～12m^2程度の水田区画を呈している。

出土遺物　4a層からは、土師器小皿739出土している。被覆する3b層からは16世紀後半代の土師器鉢が出土している。

備　　考　この水田に伴う土壌は4a層である。

水田遺構Ⅱ

検出状況　水田遺構Ⅰと重複し、上層の撹乱を受けほとんど残存していない。旧河道の形状に沿った区画ではなく、現在へと続く水田区画の方向に軸をもつと考えられる。微高地の縁辺をN22°E方向に直線的に開削しており、水田畦畔もまた、同方位で検出された。

形状・規模　南北方向の畦畔から４本の東西方向の畦畔が分岐しているが、遺存状態が悪く、個々の水田区画の状況は明らかではない。畦畔間の距離は６ｍ～８ｍである。

出土遺物　3a層からは16世紀後半～17世紀前半代の丹波焼盤が出土している。

備　　考　水田遺構Ⅰより新しく、洪水砂が被覆している。この水田に伴う土壌は3a層が含まれる可能性が高い。

旧河道(図版119～121　写真図版150・151)

検出状況　調査区東端で検出した。調査区の北北東にある谷奥から流れ出て、遠阪川へと注ぎこむ小河川である。調査区東辺に沿って南流しており、微高地の縁辺に沿って調査区外へと流れ出ている。

形状・規模　調査区の東辺に沿って約４ｍの幅で検出している。これは水田遺構の形成によって上部が削平されているためと考えられ、当初は、調査区の北端において幅６ｍ以上あり、深さ２ｍを測る。下流にゆくにしたがって広がりをみせていたと考えられる。

埋　　土　水田土壌4a層より下層にはオリーブ灰色の砂礫が堆積している。断面観察からは数度にわたって溝が流れていたことが判明した。

出土遺物　13世紀後半の土師器鍋743、白磁碗736が出土している。白磁は13世紀前半代のものである。

(4)小結

今回のＦ地区の調査によって、旧河道が埋没した後に水田が営まれていることが判明した。水田土壌の上下から出土した遺物は13世紀から16世紀の間の限定した時期を示しており、旧河道の埋没と水田化が主に14世紀から15世紀の限られた期間に行われた可能性が高い。

旧河道の埋没は段丘化によって引き起こされたと考えられ、内陸部の段丘化の時期を示す好資料としても注目できる。

３．遺物

(1)土器(図版122　写真図版16)

SB037F

719は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

SB034F

720は土師器鍋である。頸部は直立し、口縁部は外方につまみ出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

ピット内

土師器

皿　721・722・725は非ロクロ成形である。721は平底で体部は短く直立する。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈する。722は平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部～底部内外面はナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。725は体部が緩やかに外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈する。

鍋　723・724・726・727・729・730は鍋である。723は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。724は頸部が僅かに外傾し、口縁端部は若干外方につまみ出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。726は体部が内彎し、頸部はほぼ直立して、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内面は斜め方向のナデ調整を施し、当て具痕が残る。体部外面は不調整で、平行叩き目が残る。色調は明赤褐色を呈する。長谷川分類播丹型Ⅲ類で14世紀後半代に比定される。727は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。729は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調は褐色を呈する。播丹型と考えられる。730は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。播丹型と考えられる。

瓦器　728は椀である。高台の断面は三角形状で比較的高く、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部～体部内外面はヨコナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

須恵器　731・732・734・735はいずれも鉢である。731は体部が直線的に外上に延び、口縁端部の断面は三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に煤が付着する。色調は暗灰色を呈する。732は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は若干上下に拡張して小さい縁帯を形成する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。734は体部が直線的に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。口縁部内外面は強い回転ナデ調整、体部内外面は回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。いずれも東播系須恵器である。735は体部が直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。

青磁　733は青磁碗である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内面は片切彫りで草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し灰オリーブ色に発色する。龍泉窯系青磁劃花

文碗で13世紀前半代に比定される。

旧河道

736は白磁の碗も若くは皿片である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。内外面とも透明釉を施釉し、白色に発色する。華南産白磁で13世紀代に比定される。

水田面

須恵器　737は鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。色調は灰色を呈する。東播系須恵器である。

無釉陶器　738は甕である。口縁部は大きく外方にひらき、内外面とも強い回転ナデ調整を施す。内面に胡麻状に灰被りが見られる。色調は暗褐色を呈する。16世紀代の丹波焼と考えられる。741は盤である。体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁端部は上面に端面をもつ。内外面とも強い回転ナデ調整を施し、外面は胡麻状に灰被りが見られる。色調は外面がにぶい褐色、内面が黄灰色を呈する。丹波焼と考えられる。

染付磁器　739・740はいずれも碗である。739は体部が僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面は界線１条と草花文を描き、外面は無文である。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。740は高台の断面が台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚く、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内面は草花文、外面は簡易な草花文を描くが生掛けのため釉のノリが悪い。高台裏は露胎である。肥前系で18世紀代に比定される。

土師器

皿　742・744はいずれも非ロクロ成形である。742は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。744は平底で底部と体部の境は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施す。色調は褐灰色を呈する。

擂鉢　743は擂鉢である。口縁端部を上方につまみ上げる。内外面とも強いヨコナデ調整を施し、体部内面には横方向の粗いハケ目調整を施す。色調はにぶい黄褐色を呈する。16世紀代に比定される。

鍋　746は頸部がほぼ直立し、口縁端部は外方に引き出す。内外面とも強いヨコナデ調整を施し、色調はにぶい赤褐色を呈する。

包含層

土師器　747は非ロクロ成形の皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。748は皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整、体部内外面はヨコナデ調整を施す。体部外面は一部ミガキ調整、底部内外面はナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。

無釉陶器　749は擂鉢である。口縁部の断面は長方形状に成形し、口縁部内面に凹線が１条巡る。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、体部内面は６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。色調は暗オリーブ灰色を呈する。17世紀前半代の丹波焼と考えられる。

(2)木器（図版122　写真図版16）

漆椀（W1）はブナ属性の漆椀である。漆が剥離した木地にはロクロ加工痕が残る。塗の残りは悪いが、

内外に一部に赤漆が残っている。高台内面のみ黒漆が塗られている。

(3)石器(図版122　写真図版16)

砥石(S12)はシルト岩製の小形の仕上げ砥で、原面の一部が３面残るが折れと剥離が著しい。砥面には微細な砥傷が存在する。

(4)金属器(図版122　写真図版16)

銭(M39)は寛永通寶である。直径は2.4cm を測る。

第７節　Ｇ地区の調査

１．調査の概要（図版123　写真図版25・155）

田ノ口遺跡のなかでも、最も北西側に位置する。他の地区が平坦地にあったのに対して、当地区は小尾根の先端斜面上に立地している。斜面の傾斜が30°と、大変急勾配な斜面である。調査は、土器の散布及び円礫の集中が確認された２地点（北側から、Ｇ－１区・Ｇ－２区）を対象とした。それぞれの調査面積は、25m²・16m²である。最も高所に位置するＧ－１区中央部の標高は206mで、南側平坦部との比高は約25mである。

調査地は、急斜面に立地することに加え、遺物・円礫が露出していたことから、すべて人力により調査を進めていった。また、Ｇ－２区で検出された鏡については、それが収められていた須恵器甕を土砂が入った状態で持ち帰り、調査事務所内にて取上げたものである。

２．Ｇ－１区

(1)遺構（図版124　写真図版26・156～158）

墓（ST001G）を１基検出した。調査を開始する段階で、地表面に円礫と土師器（堝）の小片の散乱が認められる状況であった。表土を掘削した段階で、30cm×10cm大の亜角礫の集石が認められた。その集石は、1.30m×1.10mの方形の範囲である。

集石を取り除いた段階で、尾根筋山側を中心にカットする土坑が認められた。その範囲は、尾根筋方向（北東－南西方向）で90cm、その直交方向で１mを測る。土坑内には、上面とほぼ同規模の亜角礫が中心部にむかって落ち込んだ状態で検出された。この亜角礫を取上げた段階で、中心部に土堝が検出された。破片での出土であるが、比較的全体の形態が理解できる状況であった。土堝は、図化と写真撮影を繰り返し、取上げていったところ、数個体からなることが理解できた。

結果として、上側の堝は口縁部を下側にして、下層の堝については口縁部を上側にして置かれていた。この出土状況をもとに復元したのが、第23図である。

最下層の堝は、土坑掘削後、一端整地し、その上に置かれていることが明らかとなった。土坑の横断面はＵ字形をなし、検出面から土坑底までの深さは54cmを測る。土坑底から約12cm埋められたところで堝が据えられていた。

(2)遺物（図版126　写真図版26・159）

土師器の堝３個体（750～752）と土師器の皿（753）・須恵器の杯Ｂ（754）が出土している。

土師器堝は、３個体とも基本的な特徴を同じくするもので、ほぼ完存する。いわゆる播丹型堝に分類されるもので、口縁部外面は平行叩きにより仕上げられ、内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。ハケ目は上半部を中心に残存する傾向にあるが、751はほぼ全面に残存する。最後に口縁部が内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。３個体の堝は、口縁端部の特徴がわずかに異なる。まず、750は、端部が外方にわずかにつまみ出されている。751は、肥厚傾向にあり、玉縁状をなす。752は、750と751の中間形態をなす。この他、752の底部中央部には、径1.2cmの穿孔が焼成後に行われている。

753は、ほぼ完存する小皿で、手づくねにより整形されている。全体的に歪みが顕著である。このた

め、底部外面を中心に指頭圧痕が顕著に認められる。口縁部は上方につまむような横ナデ調整により仕上げられ、わずかに外端面が認められる。

754は、底部を中心に残存する。底部を回転ヘラ削りにより成形後、外方に踏ん張るように高台が貼り付けられ、回転ナデ調整により仕上げられている。

３．Ｇ－２区

(1)遺構(図版125　写真図版27・160～163)

経塚 SX001G を１基検出した。当地は、調査を開始する段階で、地表面に角礫の散乱が認められる状況であった。この角礫と土砂を掘り下げた段階で、隅丸長方形の土坑を検出した。その主軸方向は尾根筋ラインとほぼ一致し、規模は1.73m を測る。また、その直交方向で1.34m を測る。底部は比較的平坦で、その深さは山側掘り方から92cm、下側掘り方から12cm を測る。土坑底部の規模は、底部で1.36m、その直交方向で90cm である。土坑底部の標高は、201.36m である。

土坑の山側隅で、完存する須恵器甕と蓋に転用された捏鉢がセットで検出された。調査の結果、この須恵器のセットを下側(南西側)から固定するように亜角礫が積まれていたことが明らかとなった。甕の据え付けは、特に穴を掘り据えたのではなく、先の亜角礫の積み上げによって固定されていた。

甕の中には、和鏡が鈕を下側にし鏡面をほぼ水平にして、収められていた。なお、甕を取上げるにあたっては､中に混入した土砂を残した状態で持ち帰り､兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所内にて、Ｘ線透過撮影を行い、その後混入した土砂を取り除いていった。和鏡は、このＸ線透過撮影により、その存在が判明したものである。

(2)遺物(図版126　写真図版27・28・164)

外容器として転用された須恵器の捏鉢(755)と甕(756)、甕内に収められた和鏡(M40)が出土している。いずれも完存する。

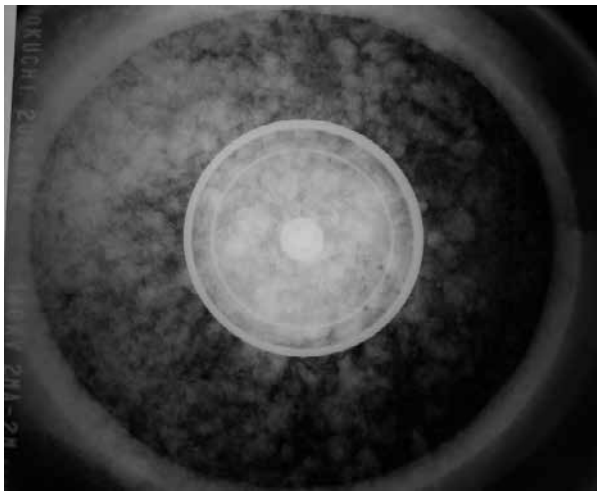
捏鉢は、口縁端部を肥厚させるとともに、上方に拡張させている。１箇所、片口が認められる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は未調整である。内面に使用痕は認められない。

甕は、外反する口縁部の端部を横ナデによりわずかに上方につまみあげられている。体部外面は叩き成形、内面はナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部外面肩部では、部分的にヘラナデが縦方向に施されている。

第１図　蓋取上げ後

第２図　和鏡検出後

和鏡は、青銅製で、山吹蝶鳥鏡に分類されるものである。鈕の周囲には鳥・蝶・山吹が配され、その外側には水波文が描かれている。水波文帯の幅は1.05cm、水波文と鈕との間は2.80cm である。鏡径は10.30cm を測る。外縁の高さは1.00cm で、外縁幅は３㎜である。鈕には径４㎜の穴が開けられ、鈕の径は1.95cm、鏡背面からの高さは４㎜である。また、鏡面の厚さは２㎜である。なお、鏡面上に繊維が遺存しており、紙の繊維と考えられる。



第３図　Ｘ線透過写真（上：上から　下：横から）

引用・参考文献

大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布―発掘資料を中心として―」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館

岡田章一　長谷川　眞　2003 「兵庫津出土の土製煮炊具」『研究紀要』第 3 号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

長谷川　眞　2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入―杉本捷夫氏採集資料の再検討に向けて」『中世土器の基礎研究』ⅩⅦ　日本中世土器研究会

兵庫県教育委員会　2004 『兵庫津遺跡Ⅱ』

藤澤良祐　1995 「(生産 3)瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界―その生産と流通―』資料集

横田賢次郎　森田　勉　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―形式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

山本信夫　2000 「磁器の分類」『大宰府条坊跡Ⅴ―陶磁器分類編―』 太宰府市教育委員会

第 4 章　自然科学的調査の成果

第 1 節　田ノ口遺跡における放射性炭素年代(AMS 測定)

(株)加速器分析研究所

1．測定対象試料

田ノ口遺跡は、兵庫県丹波市青垣町遠阪(北緯35°17′26″、東経134°58′23″)に所在する。測定対象試料は、P0198Dの木炭(01：IAAA-83004)、P0160Dの木炭(02：IAAA-83005)、P0297Dの木炭(03：IAAA-83006)、SK103D の木炭(04：IAAA-83007)、SK153D の木炭(05：IAAA-83008)、合計 5 点である。

2．測定の意義

遺構の時期を特定する。

3．化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2)　酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA：Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1 N の塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1 N の水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1 N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1 N の塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3)　試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で 2 時間加熱する。

(4)　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO_2) を精製する。

(5)　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

(6)　グラファイトを内径 1 mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4．測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5．算出方法

(1)　年代値の算出には、Libby の半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

(2)　^{14}C 年代(Libby　Age : yrBP)は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、δ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差(±1σ)は、試料の^{14}C 年

代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　$\delta^{13}C$ は、試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により$^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4)　pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。

(5)　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは２標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

６．測定結果

^{14}C 年代は、P0198D の木炭(01)が870±30yrBP、P0160D の木炭(02)が1130±30yrBP、P0297D の木炭(03)が1090±30yrBP、SK103D の木炭(04)が890±30yrBP、SK153D の木炭(05)が400±30yrBP である。

各遺構から出土した木炭の年代は異なり、暦年較正年代(1σ)から判断すると、９世紀末～17世紀初頭までの時期幅がある。試料の炭素含有率はすべて60%以上であり、十分な値であった。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

参考文献

Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion：Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration,0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第 1 表　測定試料及び処理

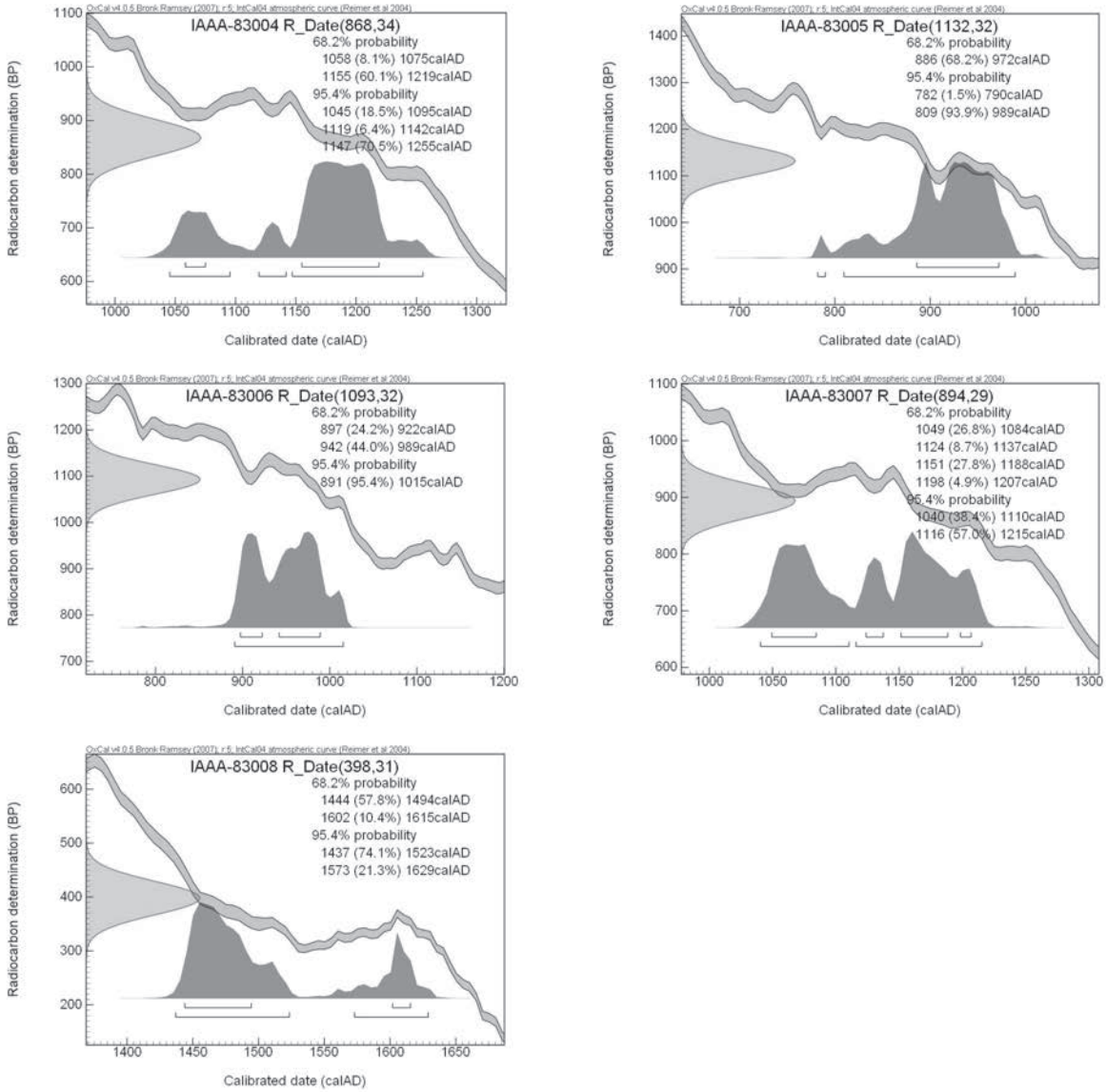
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-83004	01	遺構：P0198D	木炭	AAA	−26.50±0.87	870±30	89.75±0.38
IAAA-83005	02	遺構：P0160D	木炭	AAA	−32.80±0.64	1,130±30	86.86±0.35
IAAA-83006	03	遺構：P0297D	木炭	AAA	−24.90±0.47	1,090±30	87.27±0.36
IAAA-83007	04	遺構：SK103D	木炭	AAA	−31.36±0.59	890±30	89.46±0.33
IAAA-83008	05	遺構：SK153D	木炭	AAA	−28.09±0.66	400±30	95.16±0.38

［＃2791］

第 2 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-83004	890±30	89.48±0.34	868±34	1058AD-1075AD (8.1%) 1155AD-1219AD (60.1%)	1045AD-1095AD (18.5%) 1119AD-1142AD (6.4%) 1147AD-1255AD (70.5%)
IAAA-83005	1,260±30	85.47±0.33	1,132±32	886AD-972AD (68.2%)	782AD-790AD (1.5%) 809AD-989AD (93.9%)
IAAA-83006	1,090±30	87.29±0.35	1,093±32	897AD-922AD (24.2%) 942AD-989AD (44.0%)	891AD-1015AD (95.4%)
IAAA-83007	1,000±30	88.30±0.31	894±29	1049AD-1084AD (26.8%) 1124AD-1137AD (8.7%) 1151AD-1188AD (27.8%) 1198AD-1207AD (4.9%)	1040AD-1110AD (38.4%) 1116AD-1215AD (57.0%)
IAAA-83008	450±30	94.56±0.35	398±31	1444AD-1494AD (57.8%) 1602AD-1615AD (10.4%)	1437AD-1523AD (74.1%) 1573AD-1629AD (21.3%)

［参考値］


IAAA-83004 R_Date(868,34)
68.2% probability
1058 (8.1%) 1075calAD
1155 (60.1%) 1219calAD
95.4% probability
1045 (18.5%) 1095calAD
1119 (6.4%) 1142calAD
1147 (70.5%) 1255calAD
IAAA-83005 R_Date(1132,32)
68.2% probability
886 (68.2%) 972calAD
95.4% probability
782 (1.5%) 790calAD
809 (93.9%) 989calAD
IAAA-83006 R_Date(1093,32)
68.2% probability
897 (24.2%) 922calAD
942 (44.0%) 989calAD
95.4% probability
891 (95.4%) 1015calAD
IAAA-83007 R_Date(894,29)
68.2% probability
1049 (26.8%) 1084calAD
1124 (8.7%) 1137calAD
1151 (27.8%) 1188calAD
1198 (4.9%) 1207calAD
95.4% probability
1040 (38.4%) 1110calAD
1116 (57.0%) 1215calAD
IAAA-83008 R_Date(398,31)
68.2% probability
1444 (57.8%) 1494calAD
1602 (10.4%) 1615calAD
95.4% probability
1437 (74.1%) 1523calAD
1573 (21.3%) 1629calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

第４図　暦年較正結果

第２節　田ノ口遺跡および土井遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査地区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、遠阪川流域に位置する田ノ口遺跡と土井遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、各遺跡の調査地区で堆積物の観察を実施した。地形分類は5,000分の１空中写真を用いて行った。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査地区付近における地形環境の考察を行った。

２．遠阪川流域の地形分布

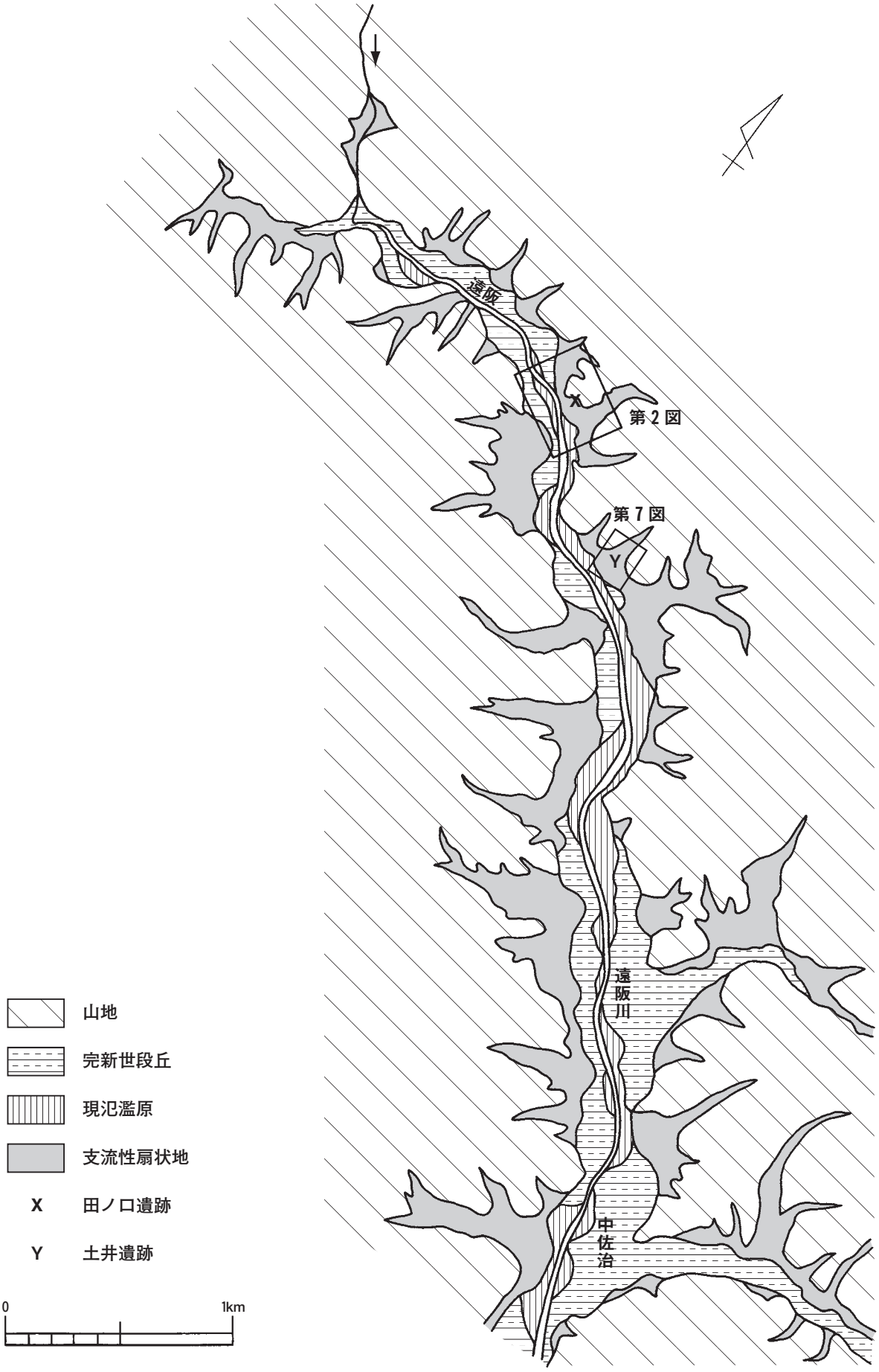
田ノ口遺跡と土井遺跡の調査地区は加古川の支流である遠阪川の平野に位置する。周辺には、標高500～650m の山地が分布し、これらは中国山地の東縁にあたる。丘陵はみられず、山地を刻んでつくられた平野は幅が最大で約300m の狭長なものである。平野には、沖積低地と支流性扇状地が認められ、更新世段丘は存在しない。沖積低地は完新世段丘と現氾濫原に分けられ（第５図）、これらは加古川と遠阪川の合流点より下流に広がる氷上盆地に向かって連続してみられる。こうした地形のうち、田ノ口遺跡と土井遺跡の調査地区は遠阪川左岸の支流性扇状地に位置する。

遠阪川の平野で認められる地形の特徴は次のとおりである。

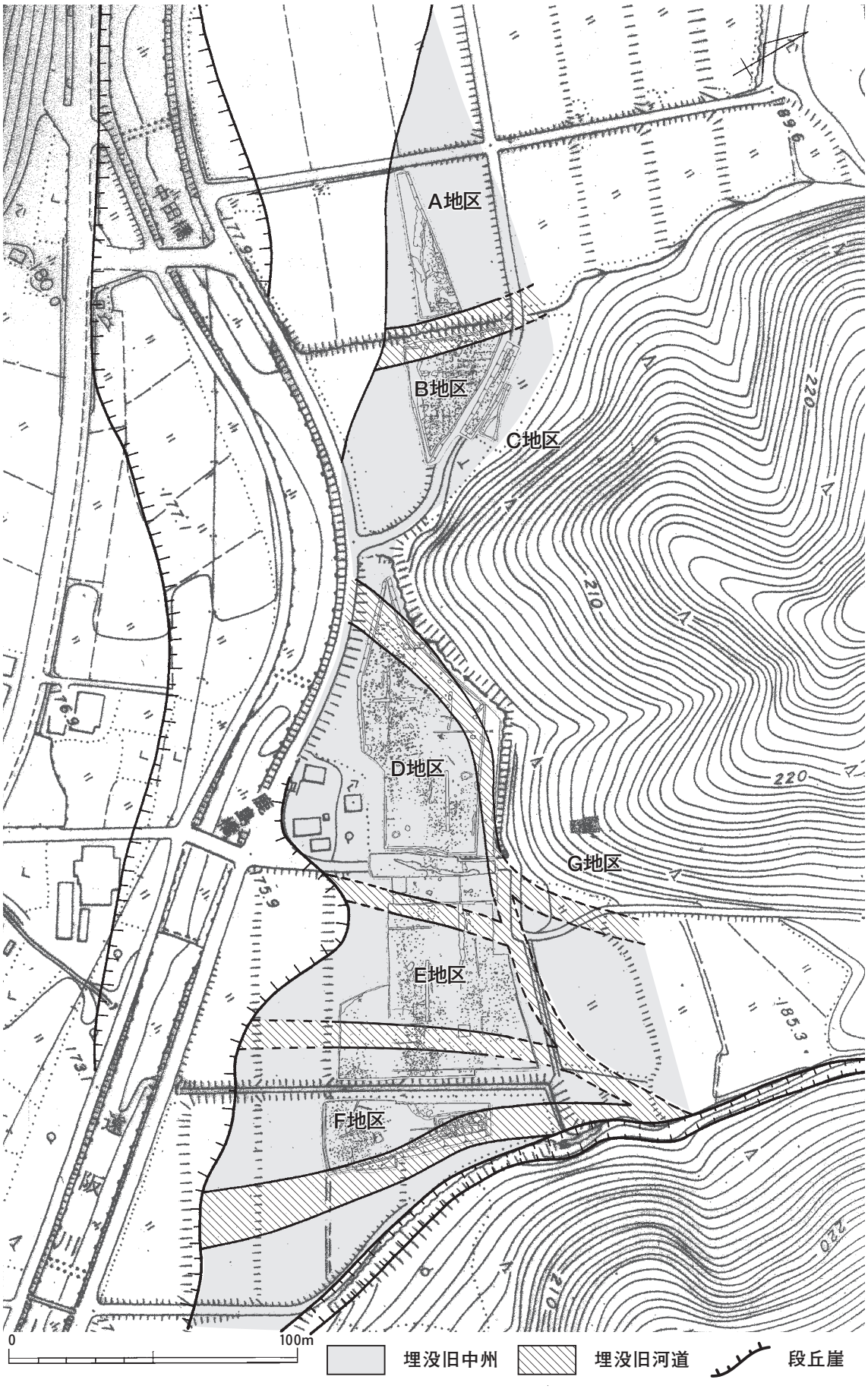
〔完新世段丘〕　これは遠阪川の上流部から下流部までやや断続的ながらよく発達する。段丘崖の比高は、50cm～1.5m で、上流部ほど大きくなる。完新世段丘は遠阪川によって形成された本流性の扇状地が段丘化したものである。

〔現氾濫原〕　この地形は遠阪川の現流路に沿って細長く延びる。これは最も低い地形面で、遠阪川の氾濫時には冠水する危険性が高い。遠阪川沿いの現氾濫原は本流性の扇状地にあたる。

〔支流性扇状地〕　この扇状地は遠阪川の両岸に位置する山地から堆積物が供給されてできたもので、山地を刻む谷の中から遠阪川の平野に向かって発達する。これは、山麓に数多く分布し、複合扇状地をなすことが多い。地表傾斜は6.7～16.0％と急で、完新世段丘と傾斜変換線で接する。現氾濫原とは段丘崖で境される。



第 5 図　遠阪川流域の地形分類図



第 6 図　田ノ口遺跡調査地区付近の微地形

３．田ノ口遺跡における微地形と堆積物

(1)調査地区付近の微地形

本遺跡の調査地区（Ａ～Ｆ地区）は２つの支流性扇状地に位置する。これらは、異なる河川によって形成された扇状地で、山地の尾根によって隔てられる。いずれも、山地を刻む谷の中から発達し、遠阪川の平野では扇形に広がる。調査地区はこのように広がった箇所に位置し、尾根の北西側に分布する支流性扇状地にはＡ～Ｃ地区、また南東側のそれにはＤ～Ｆ地区が存在する（第６図）。

Ａ～Ｃ地区は支流性扇状地の南東端にみられる。支流性扇状地の前面には完新世段丘が存在し、両者は傾斜変換線で接する。Ａ地区、Ｂ地区の中央部～南東部、およびＣ地区は扇状地の微高地である埋没旧中州上に位置し、Ｂ地区の北西部には埋没旧河道がほぼ南北に延びる。埋没旧河道は北方の谷から流下する小規模な支流の流路跡にあたる。Ａ～Ｃ地区の埋没旧中州上には、11世紀中ごろ～13世紀中ごろの掘立柱建物跡が約30棟みられ、埋没旧河道上でも同時期の掘立柱建物跡が数棟検出されている。また、古墳時代前期の鍛冶炉がこれらの境界付近に認められる。

一方、Ｄ～Ｆ地区は支流性扇状地を横断するように位置する。この支流性扇状地は、Ｄ～Ｆ地区の北東にみられる谷から発達しており、遠阪川沿いでは現氾濫原と比高１～1.5m の段丘崖で接している。これに対応して、支流性扇状地を流れる小支流も現地表を約１m 穿って流れる。こうした支流の埋没旧河道はＤ地区の北東端から北西端にかけて、Ｅ地区の北西部と南東部、ならびにＦ地区東部に認められる。とくに、Ｆ地区東部の埋没旧河道は明瞭である。それら以外の箇所には、埋没旧中州が分布する。

Ｄ地区の埋没旧中州上では、古墳時代前期の土坑、11世紀中ごろ～13世紀中ごろの掘立柱建物と鍛冶炉、12世紀後半～13世紀前半の墓跡、ならびに16世紀の掘立柱建物跡などが検出され、Ｅ地区のそれでは、古墳時代前期の竪穴住居跡や12世紀後半～14世紀中ごろの掘立柱建物跡などが認められる。また、Ｆ地区東部の旧河道では、14世紀後半と16世紀の水田跡が２面確認されている。

(2)調査地区における堆積物の特徴

ａ）Ｂ地区の堆積物

この地区における遺構検出面以深には、大きくみて砂礫とその上位にのる細粒堆積物が認められる（第７図）。砂礫は扇状地の旧中州堆積物に相当する。これは、黄灰色の砂礫（第７図の堆積物14）と灰色の砂礫（同堆積物11）に細分され、その間に灰黄色のシルト質砂（同堆積物12）がレンズ状にはさまれる。黄灰色の砂礫は、径３～８cm の角～亜角礫を主体とし、最大で径15cm の大礫を含む。灰色の砂礫は、それより粒径の小さい礫からなり、径１～６cm の亜角礫が主体である。

その上位に位置する細粒堆積物は、旧中州を被覆するもので、30cm～１m の厚さをもつ。この堆積物は基本的に下位から黄褐色の砂質シルト（第７図の堆積物10）、黄褐色のシルト（同堆積物５）、暗黄褐色のシルト（同堆積物４）、および黄褐色のシルト（同堆積物３）に分けられる。これらには径７cm 以下の礫が混入し、また細粒堆積物の下部には灰色の砂礫がレンズ状にはさまれる。最上位にみられる黄褐色シルト（同堆積物３）の上面からは旧河道が切り込まれる。旧河道は、Ｂ地区北方の谷から流れる遠阪川の支流跡で、Ｂ地区北西部をほぼ南北に延びる。これは、1.7m 以上の深さと８m 以上の幅をもち、主に暗褐灰色の砂礫（同堆積物２）に埋積されている。

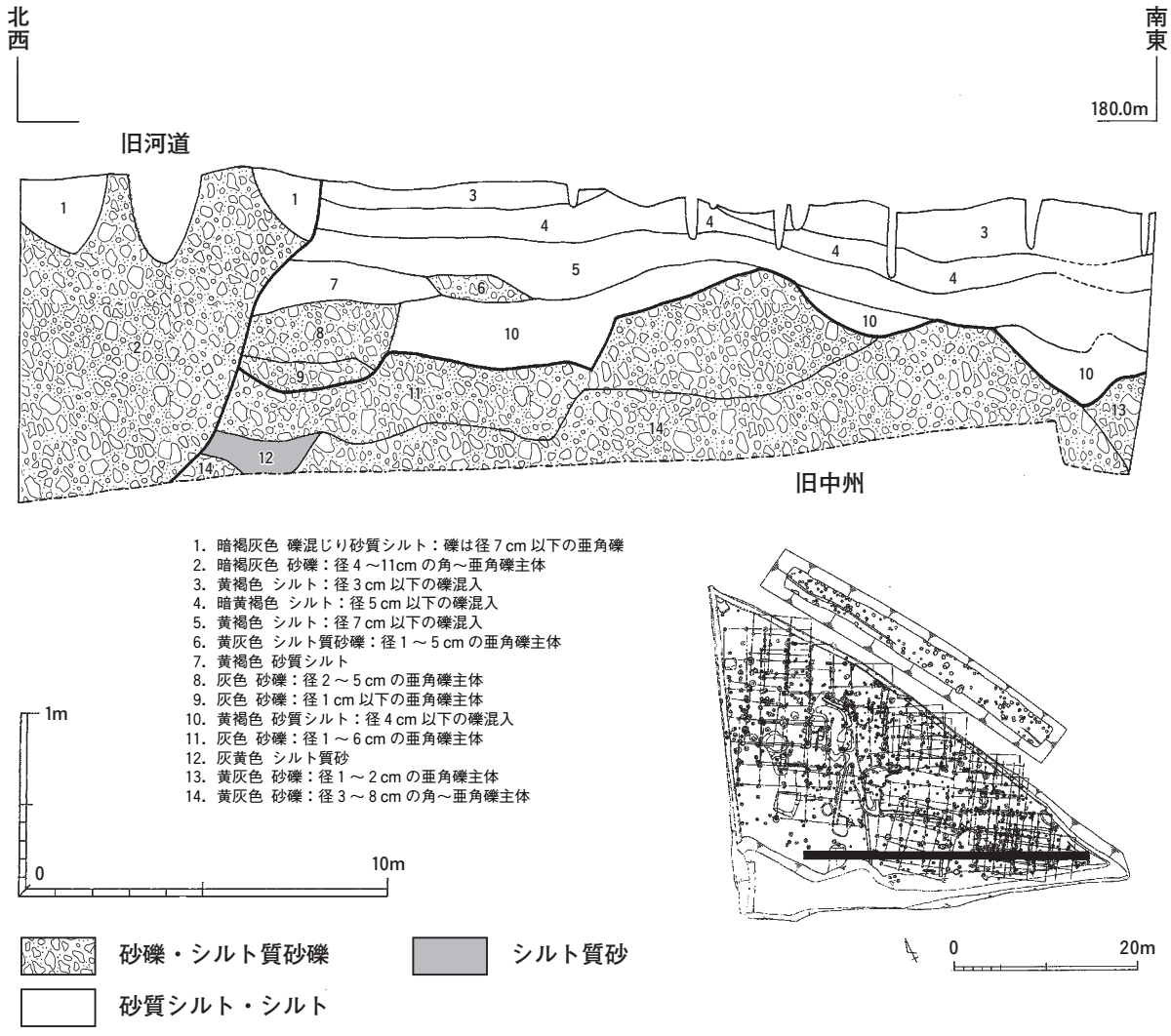
遺構検出面より上位の基本的な堆積物は、黒褐色のシルトとその上にみられる表土である。黒褐色のシルトには主に11世紀中ごろ～13世紀中ごろの遺物が含まれ、その下面からは同時期の掘立柱建物跡な

どが検出されている。

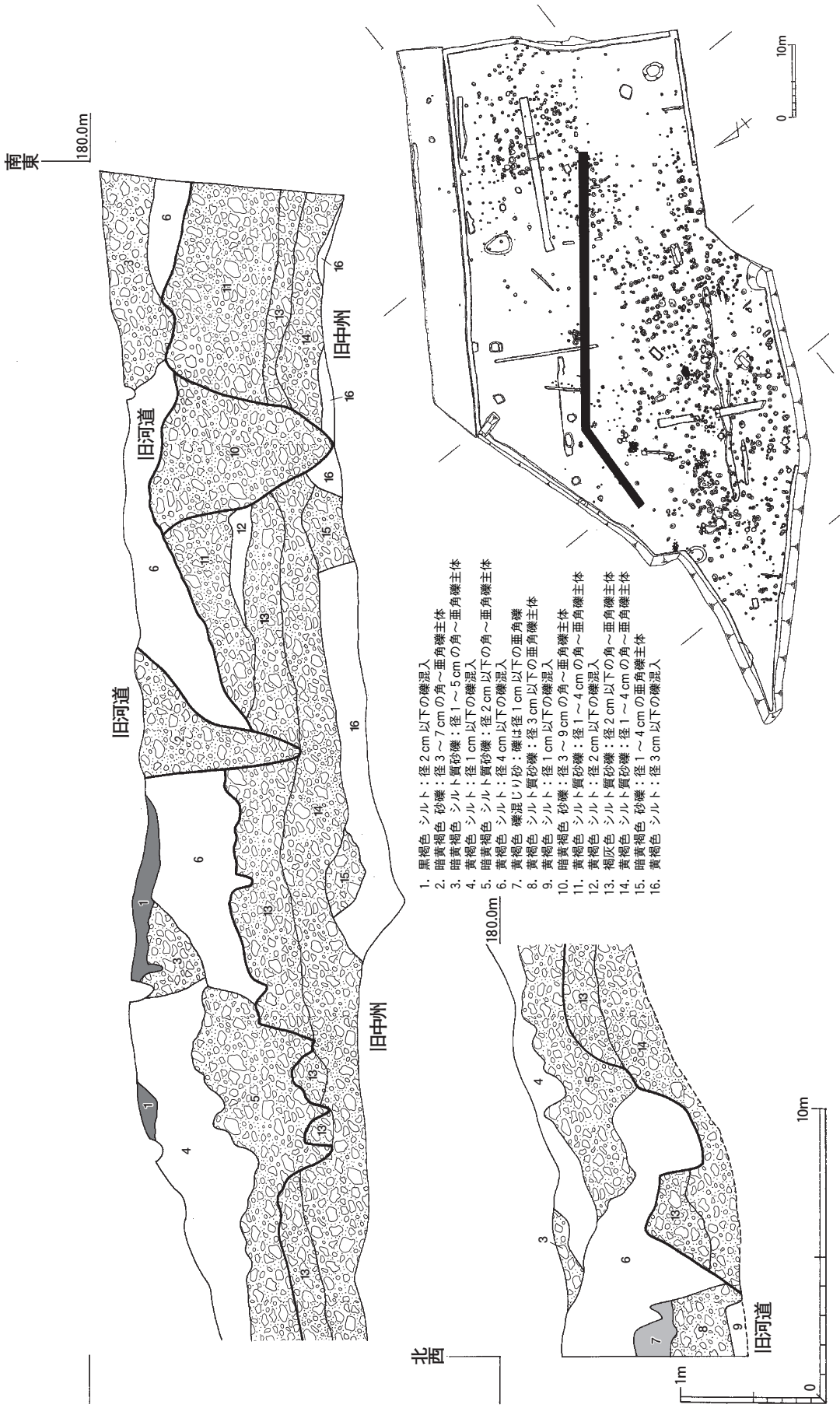
ｂ）Ｄ～Ｆ地区の堆積物

これらの地区で観察される遺構検出面より下位の堆積物は、Ｂ地区と同様にシルト質砂礫とそれを被覆する堆積物に大きく分けられる（第８図・第９図）。シルト質砂礫は扇状地の旧中州堆積物に該当する。これは褐灰～黄灰色のシルト質砂礫（第８図の堆積物13・14と第９図の堆積物14）とその上位にみられる黄褐～黄灰色のシルト質砂礫（第８図の堆積物11と第９図の堆積物12）などに分けられ、各堆積物の間には黄褐～褐黄色のシルト（第８図の堆積物12・16と第９図の堆積物15）がレンズ状にはさまれる。シルト質砂礫を構成する礫は、Ｄ地区で径１～４cmであるのに比べて、Ｅ地区では径３～８cmと大きい。これは、Ｄ地区の北東（上流側）に山地が存在するため、Ｄ地区では背後の谷から及んだ洪水が大きく屈曲し、流速が減小したことに起因する。

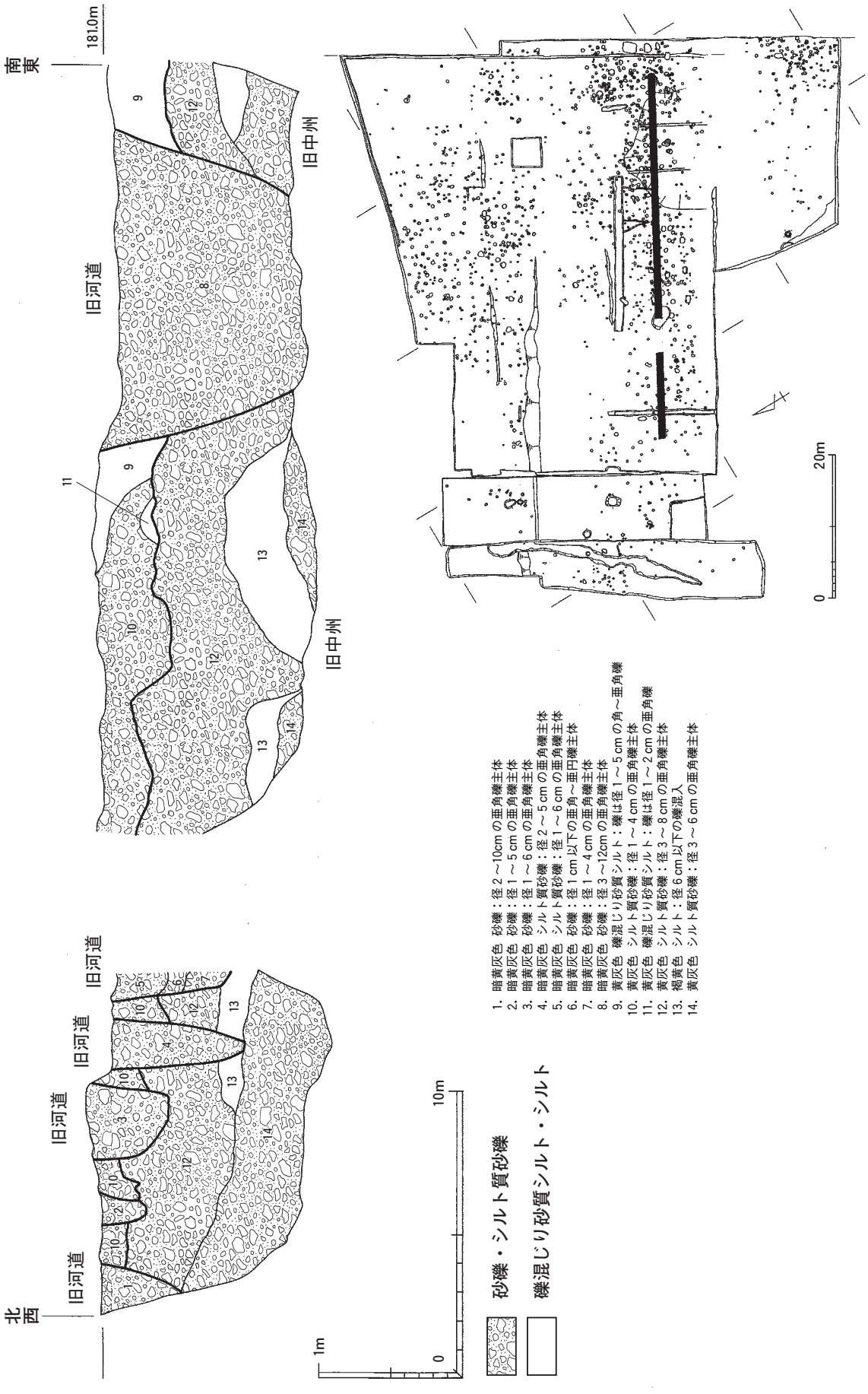
Ｆ地区では、褐灰～黄灰色のシルト質砂礫（第９図の堆積物14）と黄褐～黄灰色のシルト質砂礫（第９図の堆積物12）がＥ地区から連続して認められ、それらの間に姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ火山灰）と推定される黄褐色の火山灰がはさまれる。この火山灰は南北およそ10mにわたって５cm前後の厚さで観察される。これは扇状地を構成するシルト質砂礫がＡＴ火山灰の降灰期前後に堆積したことを示す。



第７図　田ノ口遺跡Ｂ地区におけるトレンチ断面図



第８図　田ノ口遺跡Ｄ地区におけるトレンチ断面図

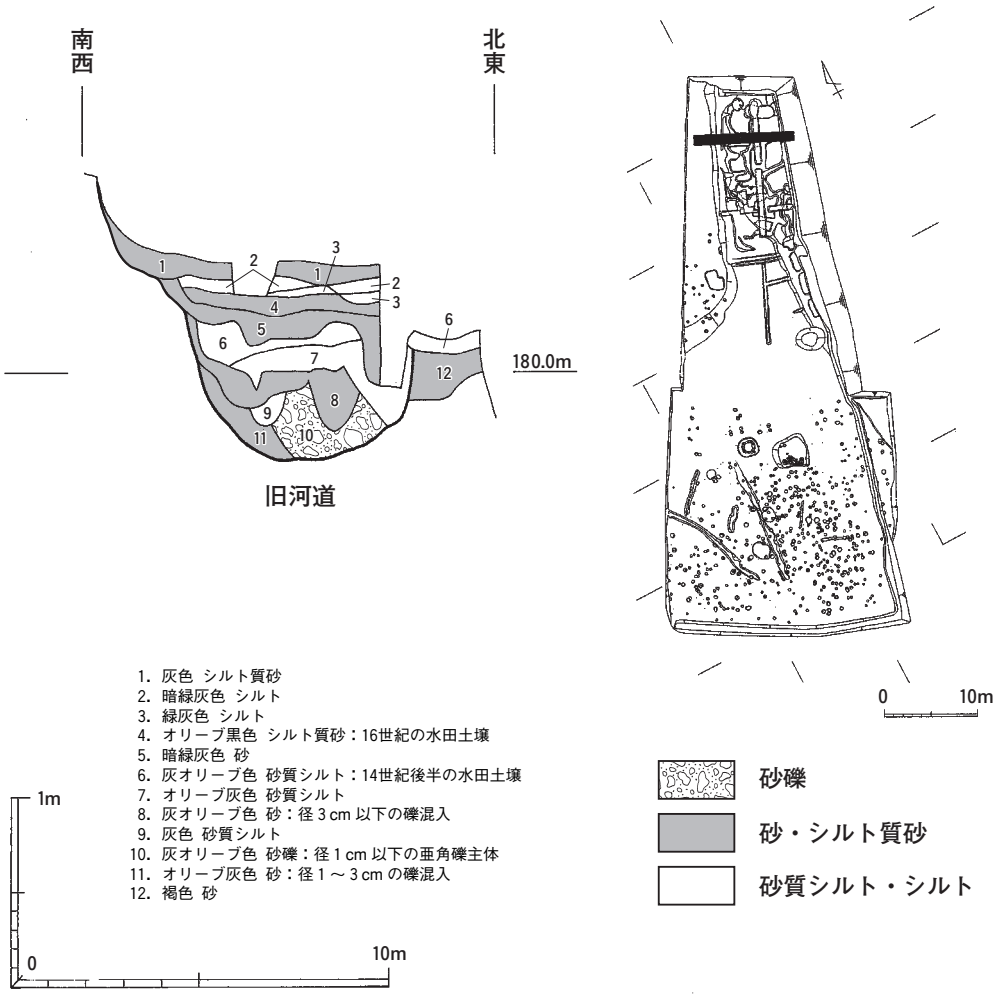


第 9 図　田ノ口遺跡 E 地区におけるトレンチ断面図

こうしたシルト質砂礫の上位にみられる堆積物は20cm～1.2m の厚さで旧中州を覆う。この堆積物は、基本的に下位から黄褐～黄灰色のシルトや砂質シルト（第８図の堆積物６と第９図の堆積物11）、暗黄褐色のシルト質砂礫（第８図の堆積物５）、黄褐色のシルト（第８図の堆積物４）、暗黄褐～黄灰色のシルト質砂礫（第８図の堆積物３と第９図の堆積物10）、ならびに黄灰色の礫混じり砂質シルト（第９図の堆積物９）に細分される。これらのうち、暗黄褐色のシルト質砂礫と暗黄褐～黄灰色のシルト質砂礫は径１～５cm 程度の角～亜角礫を主体とし、中でも後者はＤ地区東部からＥ地区中央部まで比較的連続して認められる。

旧河道は、３つの層位から切り込まれる。それは黄褐色のシルト質砂礫（第８図の堆積物11）、暗黄褐～黄灰色のシルト質砂礫（第８図の堆積物３と第９図の堆積物10）、および黄灰色の礫混じり砂質シルト（第９図の堆積物９）の上面にあたる。黄褐色シルト質砂礫の上面から切り込まれる旧河道は、Ｄ地区で認められ、とくに北西端のものが大規模である。これらは支流性扇状地が形成されていた時期の流路跡に相当する。

暗黄褐～黄灰色のシルト質砂礫を切ってつくられた旧河道は数多く、中でもＥ地区北西部に集中してみられる。いずれも規模が小さく、幅が１～2.5m、深さが20cm～１m である。これらは短期間にみら



第10図　田ノ口遺跡Ｆ地区におけるセクション断面図

れた水流の跡と考えられる。黄灰色礫混じり砂質シルトの上面から切り込まれる旧河道はＥ地区南東部に分布する。規模は比較的大きく、６ｍ以上の幅と1.2m 以上の深さをもつ。このような３つの層位から切り込まれる旧河道は主に砂礫またはシルト質砂礫に埋積されている。

遺構検出面より上位には、旧河道が分布するＦ地区東部を除いて、下位から灰黄褐色の砂質シルト、盛土、および表土が認められる。これらのうち、灰黄褐色の砂質シルトは縄文時代後期～晩期以降の遺物を含む堆積物である。埋没旧中州上では、その下面から古墳時代前期の竪穴住居跡と土坑、11世紀中ごろ～13世紀中ごろ、12世紀後半～14世紀中ごろ、および16世紀の掘立柱建物跡、12世紀後半～13世紀前半の墓跡などが検出されている。

他方、Ｆ地区東部の旧河道はＥ地区から連続する遺構検出面以深の堆積物を切るものである。そこでは、流路の形成と埋積が数度なされ、旧河道が重複して認められる（第10図）。これらは砂（第10図の堆積物５・８・11・12）またはシルト質砂（同堆積物１・４）と砂質シルト（同堆積物６・７・９）やシルト（同堆積物２・３）との互層によって埋積されている。中でも、最後の流路跡を埋積する灰オリーブ色の砂質シルト（同堆積物６）は14世紀後半の水田土壌に相当し、それより上位に位置するオリーブ黒色のシルト質砂（同堆積物４）は16世紀の水田土壌にあたる。

４．土井遺跡における微地形と堆積物

(1)調査地区付近の微地形

本遺跡の調査地区（Ａ～Ｄ地区）は、田ノ口遺跡より約700m 南東の支流性扇状地に位置する。これは、山地を刻む谷から南に向かって発達し、谷の出口以南では扇形に広がる。そこでは、他の谷から発達する支流性扇状地が東西に隣接しており、これらは複合扇状地をなす。調査地区が位置する支流性扇状地の南側には現氾濫原が分布し、その境界にはおよそ１ｍの比高をもつ段丘崖が認められる。

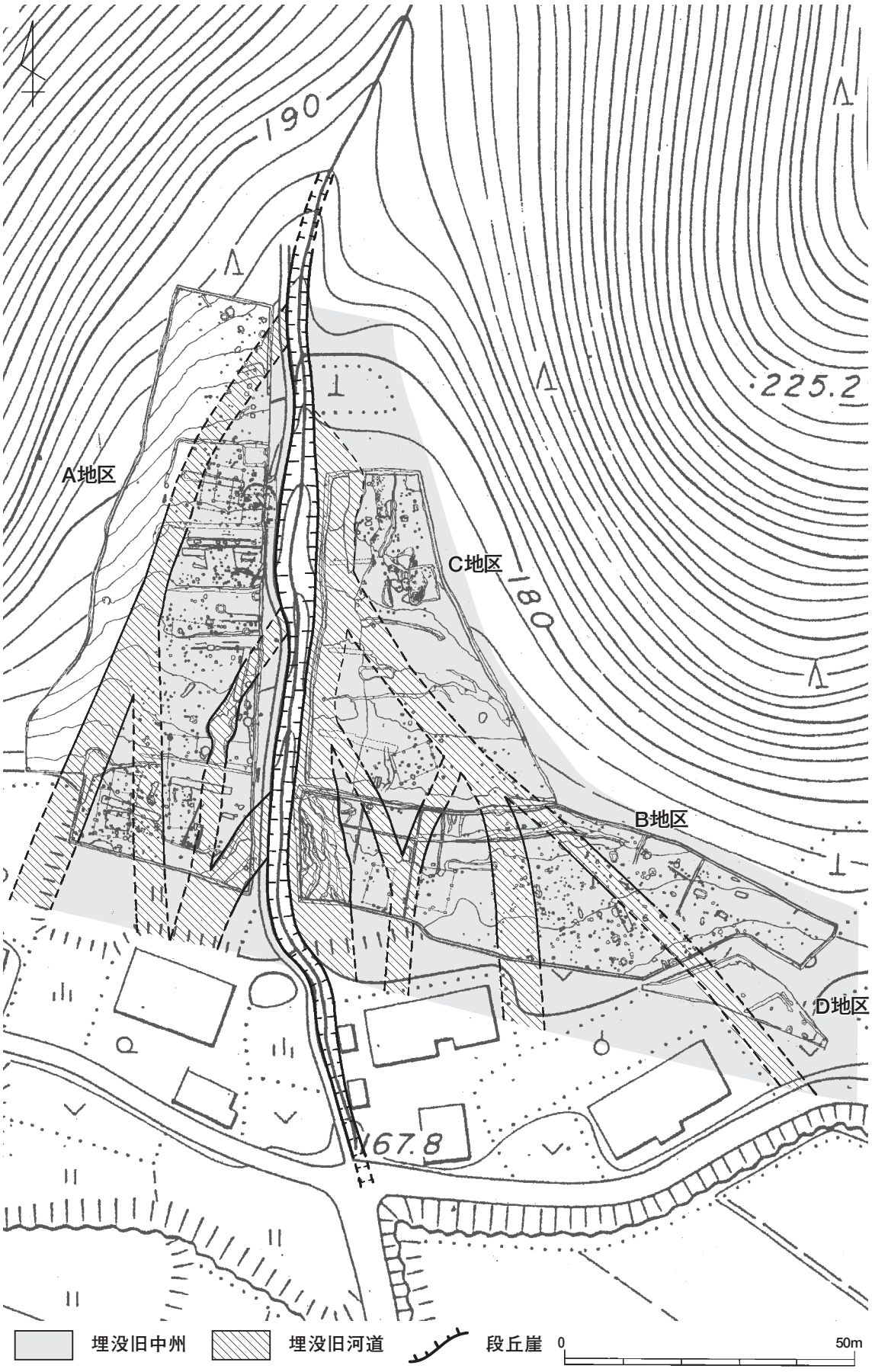
調査地区は谷の出口付近に位置し、支流性扇状地を形成させた遠阪川の小支流がそのほぼ中央を南へ流れる。この支流は地表を約１ｍ下刻して流れ、その西岸にＡ地区、東岸にＢ～Ｄ地区が位置する（第11図）。Ａ地区では、支流の埋没旧河道が４つ前後存在し、その間に埋没旧中州が認められる。Ｂ～Ｄ地区では、５つ程度の埋没旧河道がみられ、それらにはさまれて埋没旧中州が分布する。Ａ～Ｄ地区の埋没旧河道は網状を呈している。

こうした微地形のうちＡ地区の埋没旧中州上では、縄文時代の陥穴、弥生時代中期後半と古墳時代後期、飛鳥時代の竪穴住居跡、ならびに平安時代前半と９世紀前半の掘立柱建物跡などがみられる。また、Ｂ～Ｄ地区の埋没旧中州上からは、弥生時代中期の木棺墓や８世紀後半の掘立柱建物跡、10世紀後半の竪穴住居跡などが検出されている。

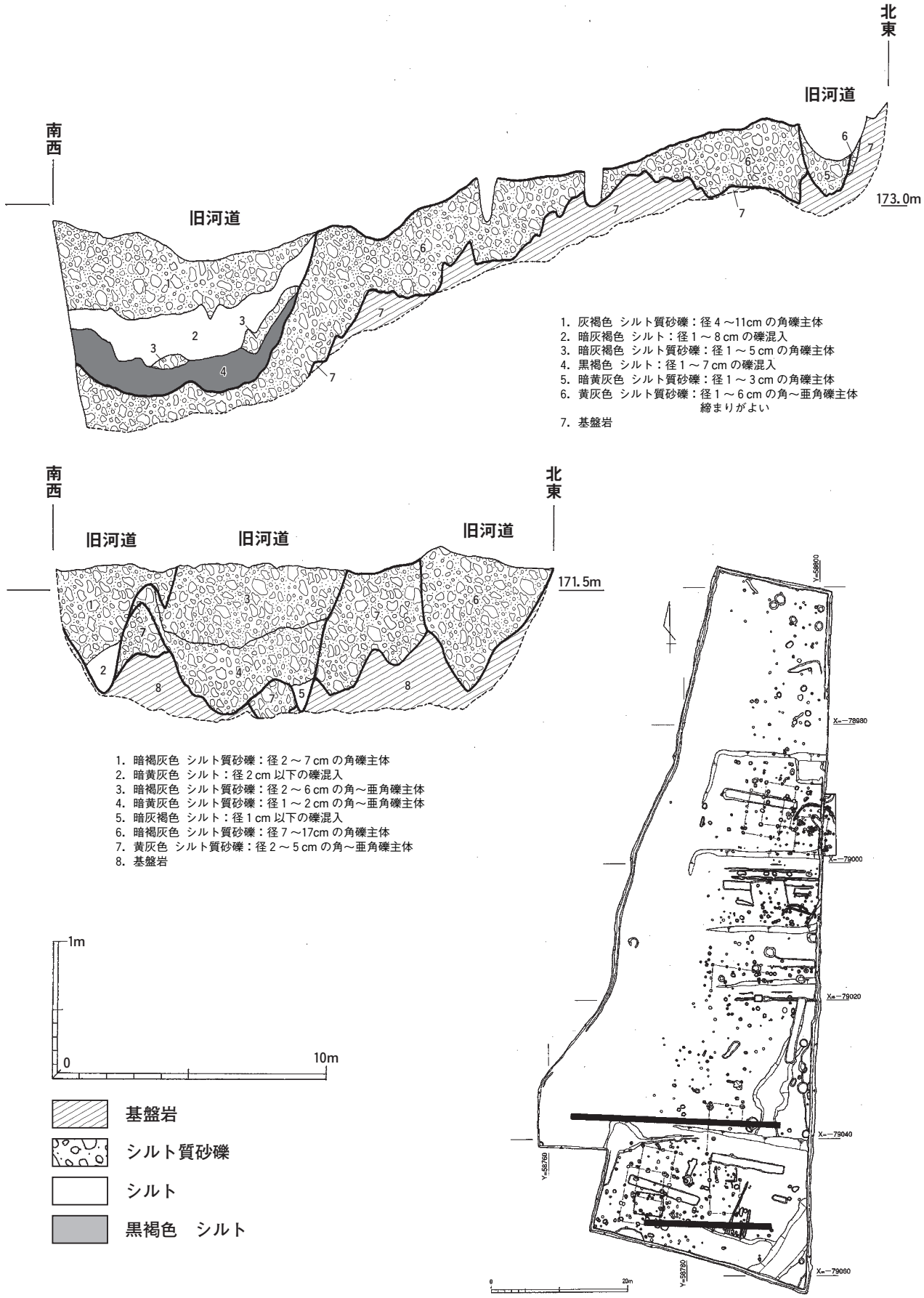
(2)調査地区における堆積物の特徴

調査地区の遺構検出面以深には、大きくみて下位から基盤岩、シルト質砂礫、およびそれを覆う堆積物が認められる（第12図・第13図）。基盤岩上で観察される堆積物の層序は田ノ口遺跡Ｂ・Ｄ・Ｅ地区と同じである。基盤岩（第12図上段の堆積物７・下段の堆積物８と第13図の堆積物19）は調査地区の東西にみられる山地の岩盤に連続する。これは、Ａ地区東端で現地表下50cm 前後の浅所にみられ、西へ上面高度を下げる。東側のＢ地区では、その上面が深く、現地表下およそ1.5m 以深となる。

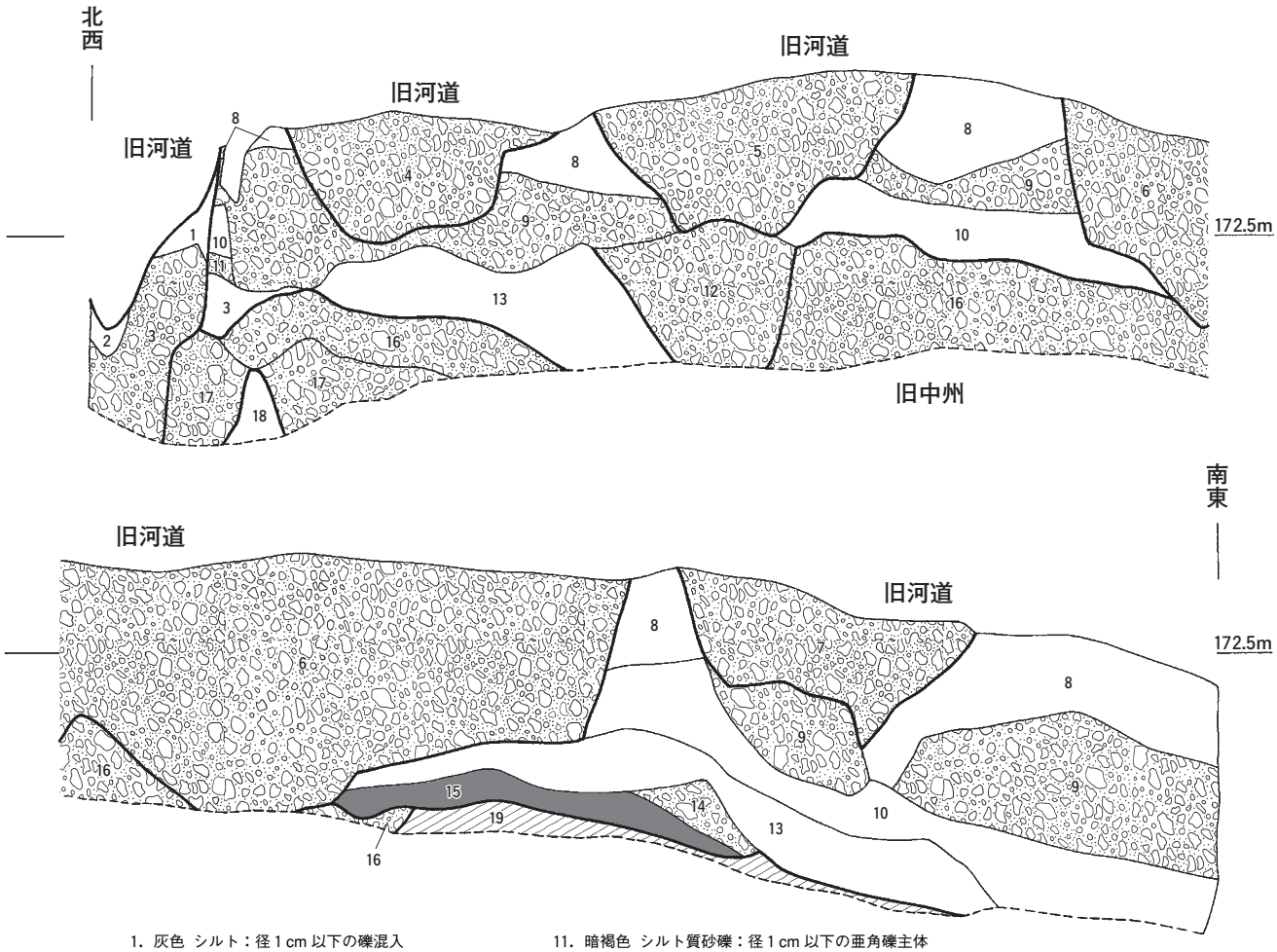
基盤岩の上位に位置するシルト質砂礫（第12図上段の堆積物６・下段の堆積物７と第13図の堆積物



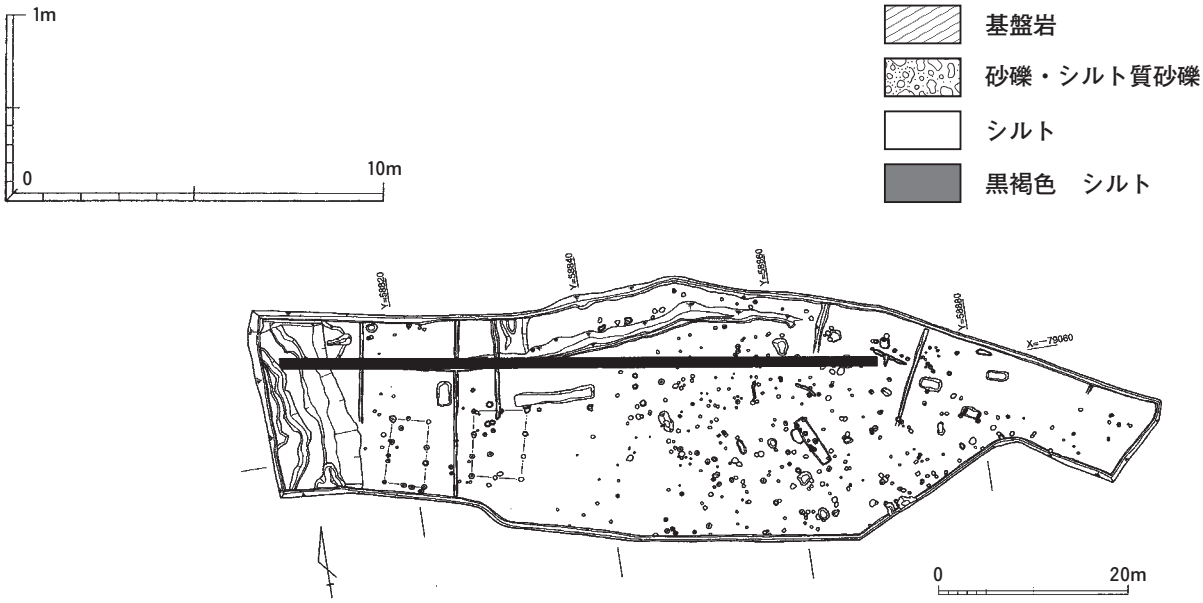
第11図　土井遺跡調査地区付近の微地形



第12図　土井遺跡 A 地区におけるトレンチ断面図



1. 灰色　シルト：径１cm 以下の礫混入
2. 青灰色　シルト：径１cm 以下の礫混入
3. 青灰～赤灰色　砂礫：径３～10cm の角礫主体
4. 褐灰色　シルト質砂礫：径３～８cm の角礫主体
5. 灰色　シルト質砂礫：径５～13cm の角礫主体
6. 褐灰色　シルト質砂礫：径６～14cm の角礫主体
7. 褐灰色　シルト質砂礫：径２～６cm の角礫主体
8. 暗褐色　シルト：径３cm 以下の礫混入
9. 暗褐色　シルト質砂礫：径１～３cm の角～亜角礫主体
10. 暗褐色　シルト：径２cm 以下の礫混入
11. 暗褐色　シルト質砂礫：径１cm 以下の亜角礫主体
12. 暗黄灰色　シルト質砂礫：径４～７cm の角礫主体
13. 暗褐色　シルト：径３cm 以下の礫混入
14. 暗黄灰色　シルト質砂礫：径２～４cm の亜円礫主体
15. 黒褐色　シルト：径３cm 以下の礫混入
16. 黄灰色　シルト質砂礫：径２～５cm の角～亜角礫主体
17. 青灰色　シルト質砂礫：径１cm 以下の亜角礫主体
18. 灰黄色　シルト：径１cm 以下の礫混入
締まりが非常によい
19. 基盤岩



第13図　土井遺跡Ｂ地区におけるトレンチ断面図

16・17)は河成の扇状地堆積物にあたる。これは、黄灰～青灰色を呈し、径１～６cmの角～亜角礫を主体とする。層厚は最大で約１mと薄く、基盤岩の上面が高いＡ地区東端やＢ地区東部ではこの堆積物が認められない。

シルト質砂礫を被覆する堆積物はＢ～Ｄ地区に分布する。これは下位から黒褐色のシルト(第13図の堆積物15)、暗褐色のシルト(同堆積物10・13)、暗褐色のシルト質砂礫(同堆積物９)、ならびに暗褐色のシルト(同堆積物８)などに細分される。これらのうち黒褐色のシルトは、土壌化の進んだ堆積物で、局所的にみられる。また、暗褐色のシルト質砂礫は径１～３cmの小さい角～亜角礫を主体とする。

こうした堆積物のうち３つの層位で旧河道が認められる。旧河道は、シルト質砂礫(第12図上段の堆積物６・下段の堆積物７)の上面と、それを覆う堆積物の中でも暗褐色を呈する２つのシルト(第13図の堆積物８・13)上面から切り込まれる。シルト質砂礫の上面から切り込まれる旧河道は、Ａ地区に４つみられる[1)]。とくにＡ地区西端の旧河道は、比較的大規模で、幅が9.5m以上、深さが約1.2mである。これは、主に灰褐色や暗灰褐色を呈するシルト質砂礫とシルトに埋積され、底には低湿な環境下で生成された黒褐色のシルトが堆積する。他の旧河道はこれに比べると小規模であり、比較的短い期間に形成された流路跡と考えられる。これらは暗褐灰色のシルト質砂礫によって埋積されている。なお、Ａ地区にはシルト質砂礫を覆う堆積物がみられないため、以上の旧河道はシルト質砂礫の堆積直後にできた流路跡でない可能性がある。

他方、暗褐色シルトの上面から切り込まれる旧河道はＢ～Ｄ地区で認められる。これらのうち、下位の暗褐色シルト(第13図の堆積物13)を切る旧河道は１つで、他の５つは上位の暗褐色シルト(同堆積物８)から切り込まれる。中でも、Ｂ地区の西端と中央部に分布する旧河道は、1.5m前後の深さをもち、比較的大きい規模を有する。

遺構検出面より上位の基本的な堆積物は下位からにぶい赤褐色のシルト、盛土、および表土である。これらのうちにぶい赤褐色のシルトには、主として弥生時代中期、古墳時代後期、および８世紀後半～11世紀の遺物が混入する。その下面からは弥生時代中期後半と10世紀後半、古墳時代後期の竪穴住居跡、８世紀後半と９世紀前半の掘立柱建物跡、ならびに弥生時代中期の木棺墓などが検出されている。

５．調査地区付近における地形環境の変遷

田ノ口遺跡と土井遺跡の調査地区付近における地形環境は、これまで述べた事柄から次のように考察される。

〔ステージ１〕　両遺跡の調査地区付近では、遠阪川の支流によって背後の山地から砂礫やシルト質砂礫が運搬され、土井遺跡Ｂ地区の東部を除いて堆積した。これに伴って、扇状地が谷中から遠阪川の近辺まで発達し、そこでは旧中州が形成された。このような支流性扇状地の形成はＡＴ火山灰の降灰期前後になされたと推定される。流路は、当時田ノ口遺跡Ｄ地区の西端や土井遺跡Ａ地区にみられ、その後主に砂礫によって埋積された。

〔ステージ２〕　扇状地の形成後、支流が数度氾濫し、土井遺跡Ａ地区以外の扇状地が洪水堆積物に被覆されていった。この時期は、緩やかな洪水が多く、主にシルトや砂質シルトが扇状地を覆ったものの、田ノ口遺跡Ｄ・Ｅ地区と土井遺跡Ｂ地区では、流速の大きい洪水が１～２度及び、砂礫やシルト質砂礫の堆積が比較的広範囲でみられた。これらの堆積によって扇状地は30cm～１mの深さに埋没した。

〔ステージ３〕　扇状地の埋没後縄文時代後期までの間には、支流の流路変更が比較的頻繁にみられた。

田ノ口遺跡Ｂ地区の北西部やＥ地区の南東部、および土井遺跡Ｂ地区などでは、支流が比較的長期間にわたって流れ、大規模な流路跡が形成された。他方、田ノ口遺跡Ｄ地区の中央部やＥ地区の北西部、土井遺跡Ｂ地区などでは、短期間の水流に伴って小規模な流路の形成が行われた。いずれの流路も主に砂礫やシルト質砂礫によって埋積された。

〔ステージ４〕　支流性扇状地では、その後水害の危険性があるにもかかわらず、実際には洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が訪れた。人間はこうした支流性扇状地で遅くとも縄文時代後期～晩期に活動をはじめた。田ノ口遺跡の埋没旧中州上では、古墳時代前期に竪穴住居（Ｅ地区）が、また11世紀中ごろ～13世紀中ごろ（Ａ・Ｂ・Ｄ地区）と12世紀後半～14世紀中ごろ（Ｅ地区）に掘立柱建物が建てられ、12世紀後半～13世紀前半には墓（Ｄ地区）がつくられた。とくに、Ａ・Ｂ・Ｄ地区に建てられた11世紀中ごろ～13世紀中ごろの掘立柱建物は非常に多く、Ｂ地区ではその一部が埋没旧河道上にもみられた。他方、土井遺跡の埋没旧中州上では、弥生時代中期に木棺墓（Ｂ地区）がつくられ、竪穴住居が弥生時代中期後半（Ａ地区）、古墳時代後期（Ａ地区）、飛鳥時代（Ａ地区）、および10世紀後半（Ｃ地区）に、また掘立柱建物跡が８世紀後半（Ｂ地区）や平安時代前半（Ａ地区）、９世紀前半（Ａ地区）に建てられた。

〔ステージ５〕　14世紀ごろには、田ノ口遺跡Ｆ地区の東部を支流が数度流下した。その後、最後に形成された流路の下半部が砂や砂質シルトなどによって埋積され、14世紀後半にはそこに水田がつくられた。

〔ステージ６〕　田ノ口遺跡Ｆ地区における旧河道の埋積はその後も進行し、16世紀ごろまでにそのほとんどが埋積された。16世紀には、周囲よりわずかに低かったこの旧河道で再び水田稲作が営まれ、隣接する田ノ口遺跡Ｄ地区の埋没旧中州上では掘立柱建物が建てられた。旧河道が埋積された後、遠阪川の平野では段丘化が起こり、完新世段丘が形成された。これに伴って支流性扇状地を流れる支流も当時の地表を下刻し、そこはさらに安定した環境となった。

６．おわりに

田ノ口遺跡Ａ～Ｃ地区とＤ～Ｆ地区、および土井遺跡Ａ～Ｄ地区は遠阪川流域に分布する３つの支流性扇状地に位置する。これらの支流性扇状地は、背後の山地から砂礫やシルト質砂礫が供給された結果発達し、その際旧中州も形成された。こうした扇状地の形成はＡＴ火山灰の降灰期前後であったと推定される。その後各扇状地は、シルトや砂質シルト、シルト質砂礫などの洪水堆積物に覆われ、地下浅所に埋没した。このようにして形成された支流性扇状地には、流路変更の激しかった時期を経て、遅くとも縄文時代後期までに洪水のほとんど発生しない安定した環境が訪れた。

人間はこの環境下で支流性扇状地の微地形を利用して生活を行った。田ノ口遺跡の埋没旧中州上は、古墳時代前期、11世紀中ごろ～13世紀中ごろ、12世紀後半～14世紀中ごろ、ならびに16世紀に居住域となり、12世紀後半～13世紀前半には墓もつくられた。他方、土井遺跡での埋没旧中州上では、弥生時代中期に土坑墓がつくられ、居住は弥生時代中期後半、古墳時代後期、８世紀後半、９世紀前半、および10世紀後半などの多様な時期になされた。これは、埋没旧中州上がわずかに高いため、排水の便がよく比較的高燥であることに起因する。

ただし、11世紀中ごろ～13世紀中ごろには、田ノ口遺跡Ｂ地区付近の集落が大規模化したため、埋没旧河道上にまで一部の掘立柱建物が建てられた。これを除くと、埋没旧河道上は居住域や墓域に使われなかった。周囲より低く、水を入手しやすい旧河道は、田ノ口遺跡Ｆ地区のように、その埋積過程であっ

た14世紀後半や16世紀などに水田稲作に利用された。田ノ口遺跡と土井遺跡の調査地区では、以上のような地形環境と人間生活との関係が認められるのである。

第３節　田ノ口遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、田ノ口遺跡から出土した、中世の土師器を中心として、縄文土器および古墳時代の土師器も交えた各時期の土器について、その材質(胎土)の特性を明らかにする。

１．試料

試料は、田ノ口遺跡から出土した土器片22点である。内訳は、中世の土師器14点、中世の瓦器３点、中世の黒色土器および古墳時代の土師器各２点ずつ、縄文時代後期とされた縄文土器１点である。中世の土師器には鍋や皿、碗などがあり、瓦器および黒色土器はいずれも碗、古墳時代の土師器はいずれも甕、縄文土器は深鉢である。各試料の資料№、器種、時期、出土遺構などは一覧表にして第３表に示す。

２．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

第３表　胎土分析試料一覧

資料№	報告№	実側№	種別	器種	時期	地区	報告遺構１	報告遺構２	胎土分類														
									鉱物・岩石組成					粒径組成					砕屑物の割合				
									A1	A3	C	D2	F	c	m	f	vf	cs	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1	102	078	土師器	皿	中世	Ｂ地区	P0914B				■						■					■	
2	108	120	土師器	皿	中世	Ｂ地区	P0547B			■								■				■	
3	120	115	土師器	鍋	中世	Ｂ地区	P0393B						■		■						■		
4	179	272	土師器	皿	中世	Ｂ地区	SK161B				■						■					■	
5	188	095	瓦器	椀	中世	Ｂ地区	SK213B					■				■		●				■	
6	222	250	土師器	甕	中世	Ｂ地区	包含層					■					■					■	
7	233	236	瓦器	椀	中世	Ｂ地区	包含層					■				■						■	
8	288	093	土師器	甕	古墳	Ｂ地区	SB201B	SF111B			■			■					■				
9	303	377	土師器	皿	中世	Ｄ地区	SB001D	P0318D			■					■					■		
10	318	371	黒色土器	椀	中世	Ｄ地区	SB003D	P0325D				■				■							■
11	323	427	土師器	鍋	中世	Ｄ地区	SB007D	P0252D					■		■					■			
12	332	413	土師器	皿	中世	Ｄ地区	SB008D	P0087D			■						■					■	
13	363	407	土師器	皿	中世	Ｄ地区	P0227D									■		●					
14	366	428	土師器	皿	中世	Ｄ地区	P0036D			■					●		■			■			
15	401	329	土師器	皿	中世	Ｄ地区	SK162D				■						■					■	
16	415	326	土師器	鍋	中世	Ｄ地区	SK103D			■						■						■	
17	463	528	土師器	鍋	中世	Ｄ地区	包含層			■				■						■			
18	610	635	黒色土器	椀	中世	Ｅ地区	SK023E				■					■						■	
19	664	677	土師器	甕	古墳	Ｅ地区	SH002E					■					■					■	
20	674	562	縄文土器	深鉢	縄文後期	Ｅ地区	包含層			■					■					■			
21	728	747	瓦器	椀	中世	Ｆ地区	P1042F.P1043F		■								■				■		
22	751	760	土師器	鍋	中世	Ｇ－１地区	集石①			■				■									

A1：岩石片の種類構成が主にチャートなどの堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類からなる。
A3：岩石片の種類構成が主に堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類、さらに珪化岩、変質岩類を含む。
C：鉱物片ではカリ長石が比較的多く含まれ、岩石片は花崗岩類を主体とする。
D2：チャート主体の堆積岩類と多結晶石英を主要な岩石片とし、試料によっては微量の凝灰岩や花崗岩類なども含む。
F：凝灰岩および流紋岩・デイサイトが多い組成を示す。
砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径：c;粗粒砂　m;中粒砂　f;細粒砂　vf;極細粒砂　cs;粗粒シルト　●;第二のピーク
砕屑物の割合　Ⅰ:40%前後　Ⅱ:30%前後　Ⅲ:25%前後　Ⅳ:20%前後　Ⅴ:15%前後

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結果

観察結果を第４表、第14～16図に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、試料間で類似する組成があり、それが複数あることも看取された。これまでに兵庫県下各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較し、ここでは、それらを踏襲した分類を示す。なお、当社では田ノ口遺跡から遠阪川沿いに約１km下流に位置する土井遺跡から出土した弥生土器や古墳時代および平安時代の土師器の胎土分析を行っている。土井遺跡とは同じ地質学的背景を有することから、そこでの分析例も参照し、今回の22点の試料から、以下に示す５分類の鉱物・岩石組成が認められた。

Ａ１類：Ａ類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類の３者からなることである。それ以外に特徴ある岩石片を伴わない組成をＡ１類としている。今回の分析では、資料№21の１点がこれに分類される。

Ａ３類：Ａ類の特徴とした３種類の岩石片に加えて、珪化岩および変質岩類も比較的多く含む組成をＡ３類とする。この組成は、土井遺跡出土土器にも比較的多く認められており、今回の試料でも、資料№２、№14、№16、№17、№20、№22の７点が分類される。

Ｃ類：花崗岩類を主体とする岩石片組成をＣ類としており、鉱物片においては石英や斜長石よりは少ないもののカリ長石が比較的多く含まれことも特徴である。これまでに、角閃石や黒雲母の量比からＣ類を細分しているが、今回の試料では、これらの鉱物が少ないため、細分は行わない。資料№１、№４、№８、№９、№12、№13、№15、№18の８点がＣ類に分類される。

Ｄ２類：チャート主体の堆積岩類と多結晶石英を主要な岩石片とし、試料によっては微量の凝灰岩や花崗岩類なども含む。これまでの分析例では、加古川市溝之口遺跡において頁岩の卓越する組成をＤ類としたが、今回の試料では頁岩よりもチャートが多いことからＤ２類としている。資料№５～№７、№10、№19の５点がＤ２類に分類される。

Ｆ類：凝灰岩および流紋岩・デイサイトを主体とする岩石片組成を示す。土井遺跡の胎土分析で設定した分類であるが、今回の試料では、微量のチャートや花崗岩類および珪化岩なども伴っている。資料№３と№11の２点がこれに分類される。

粒径組成(第15図)をみると、試料によってモードとなる粒径も異なり、また、ヒストグラムの形状も鋭いピークを示すものやなだらかなピークを示すもの、複数のピークを持つものなど様々である。

各試料の砕屑物・基質・孔隙の割合(第16図)をみると、試料によって砕屑物の割合が15～40%までを示す。まとまりを見出すならば、20%前後と25%前後の値を示す試料が多い。このことから、ここでは、Ⅰ～Ⅴ類までの分類を設定した。Ⅰ類は砕屑物の割合が40%前後、Ⅱ類は同30%前後、Ⅲ類は同25%前

第４表　薄片観察結果(1)

資料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																																						合計
		鉱物片											岩石片																							その他					
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	はんれい岩	珪長岩	結晶片岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物片	植物珪酸体							
1	細礫																																							0
	極粗粒砂	2		1															2																					5
	粗粒砂	10	3															1	5																					19
	中粒砂	13	4	6															1										1	1										26
	細粒砂	12	3	8				2											1											1										27
	極細粒砂	11	3	12																										2										28
	粗粒シルト	2		4																																				6
	中粒シルト																																							0
	基質																																							444
	孔隙																																							5
2	細礫																																							0
	極粗粒砂																												1											1
	粗粒砂											1						1																						2
	中粒砂			1								1			1			1							2															6
	細粒砂	4	1	1								1						1	1											2										11
	極細粒砂	7		2								3																												12
	粗粒シルト	10	1	1								1																												13
	中粒シルト	3																																						3
	基質																																							231
	孔隙																																							3
3	細礫																																							0
	極粗粒砂															1																								1
	粗粒砂		1	1											3	6		1											1											13
	中粒砂	6	1	10											4	5		3	2											1										32
	細粒砂	11	1	9											5			1											1	3										31
	極細粒砂	7	2	9			1					1						1												1										22
	粗粒シルト	4	1	2							1	1																												9
	中粒シルト	2																																						2
	基質																																							305
	孔隙																																							8
4	細礫																																							0
	極粗粒砂																																							0
	粗粒砂	2	1																3																					6
	中粒砂	3	3	2														1	2																					11
	細粒砂	5	7	4					1																															17
	極細粒砂	5	5	12					1																															23
	粗粒シルト	5	4	4																																				13
	中粒シルト	3	1																																					4
	基質																																							243
	孔隙																																							5
5	細礫																																							0
	極粗粒砂																																							0
	粗粒砂																																							0
	中粒砂			1																																				1
	細粒砂	1		1	2													1												2										7
	極細粒砂			2																										1										3
	粗粒シルト	3																																				3		6
	中粒シルト	1																																						1
	基質																																							78
	孔隙																																							2
6	細礫											1																												1
	極粗粒砂	2																1																						3
	粗粒砂	4										5						4								3														16
	中粒砂	6		1								1		1	1	1		13	1							1														26
	細粒砂	12		2								2						9																						25
	極細粒砂	17	1	3	3							4	1					1																				2		32
	粗粒シルト	10	1	1																																		17		29
	中粒シルト	3		1																																		1		5
	基質																																							524
	孔隙																																							16
7	細礫																																							0
	極粗粒砂																																							0
	粗粒砂	1						1				1	1																											4
	中粒砂	1						3				7						1																						12
	細粒砂	7						1				8	1					4																						21
	極細粒砂	8		5								4																												17
	粗粒シルト	8		1																																				9
	中粒シルト	2																																						2
	基質																																							306
	孔隙																																							1
8	細礫																																							0
	極粗粒砂	1																	2																					3
	粗粒砂	4	2	2										1					12																					21
	中粒砂	9	5	3															5																					22
	細粒砂	10	1	4	1														1																					17
	極細粒砂	5	4	7		1	1																																	18
	粗粒シルト	4	3	2			2																																	11
	中粒シルト	1																																						1
	基質																																							143
	孔隙																																							4

第４表　薄片観察結果(2)

資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																合計
			鉱物片										岩石片																		その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	はんれい岩	珪長岩	結晶片岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
9	砂	細礫																																	0
9	砂	極粗粒砂																		1															1
9	砂	粗粒砂		1	1															5															7
9	砂	中粒砂	4	6	6											1				8								1							26
9	砂	細粒砂	21	5	11				1					1					4	5							1				1				50
9	砂	極細粒砂	17	10	17			1					1	1																					47
9	砂	粗粒シルト	20	2	18			1																											41
9	砂	中粒シルト	8	2																															10
9	基質																																		523
9	孔隙																																		16
10	砂	細礫																																	0
10	砂	極粗粒砂																																	0
10	砂	粗粒砂												1					1							1							1		4
10	砂	中粒砂								1									1							1									3
10	砂	細粒砂	1										5	1					6																13
10	砂	極細粒砂	11		1														1																13
10	砂	粗粒シルト	10																																10
10	砂	中粒シルト	3																																3
10	基質																																		262
10	孔隙																																		13
11	砂	細礫																																	0
11	砂	極粗粒砂	1																																1
11	砂	粗粒砂	4	1	1								1			5			1					1						3					17
11	砂	中粒砂	4	2	4								1	1		14	1							2				7		2	1				39
11	砂	細粒砂	12		8								1			3												2			2				28
11	砂	極細粒砂	11		2	1							1			1																			16
11	砂	粗粒シルト	4		2																														6
11	砂	中粒シルト																																	0
11	基質																																		223
11	孔隙																																		11
12	砂	細礫																																	0
12	砂	極粗粒砂																																	0
12	砂	粗粒砂		1																															1
12	砂	中粒砂	1	4	3														2	1															11
12	砂	細粒砂	8	1	17			1				1																							28
12	砂	極細粒砂	10	3	15			1				2																							31
12	砂	粗粒シルト	6		13							1																							20
12	砂	中粒シルト	2		1																														3
12	基質																																		345
12	孔隙																																		2
13	砂	細礫																																	0
13	砂	極粗粒砂																	1																1
13	砂	粗粒砂	1					1											1																3
13	砂	中粒砂	7	2																															9
13	砂	細粒砂	14	5	1			1	2	1									1	1															26
13	砂	極細粒砂	15	2	2																														19
13	砂	粗粒シルト	17	3	4																														24
13	砂	中粒シルト	7																																7
13	基質																																		355
13	孔隙																																		18
14	砂	細礫																																	0
14	砂	極粗粒砂																																	0
14	砂	粗粒砂																											1						1
14	砂	中粒砂			1								1	1		2			1	2									1						9
14	砂	細粒砂			2										1	1				1															5
14	砂	極細粒砂		1	5		1						2	1																					10
14	砂	粗粒シルト	2		2																														4
14	砂	中粒シルト																																	0
14	基質																																		70
14	孔隙																																		1
15	砂	細礫																																	0
15	砂	極粗粒砂	1																	1															2
15	砂	粗粒砂	1	2	1															3											1				8
15	砂	中粒砂	2	4	4									1																					11
15	砂	細粒砂	5	3	7							1			1				2	1						1									21
15	砂	極細粒砂	8	2	17							4	1																						32
15	砂	粗粒シルト	5		9			2																											16
15	砂	中粒シルト	1		2																														3
15	基質																																		329
15	孔隙																																		14
16	砂	細礫											1													1	1								3
16	砂	極粗粒砂			2							1							1	1		1					5		2	5					18
16	砂	粗粒砂			1							1	1		2						1						3		2	2		1			14
16	砂	中粒砂	1		4	1	1						1						2	2						1			4						17
16	砂	細粒砂	9		5	5		1				2							2										2						26
16	砂	極細粒砂	8	1	2	3		2				2																							18
16	砂	粗粒シルト	12		5			1																											18
16	砂	中粒シルト	4		1																														5
16	基質																																		498
16	孔隙																																		17

第４表　薄片観察結果(3)

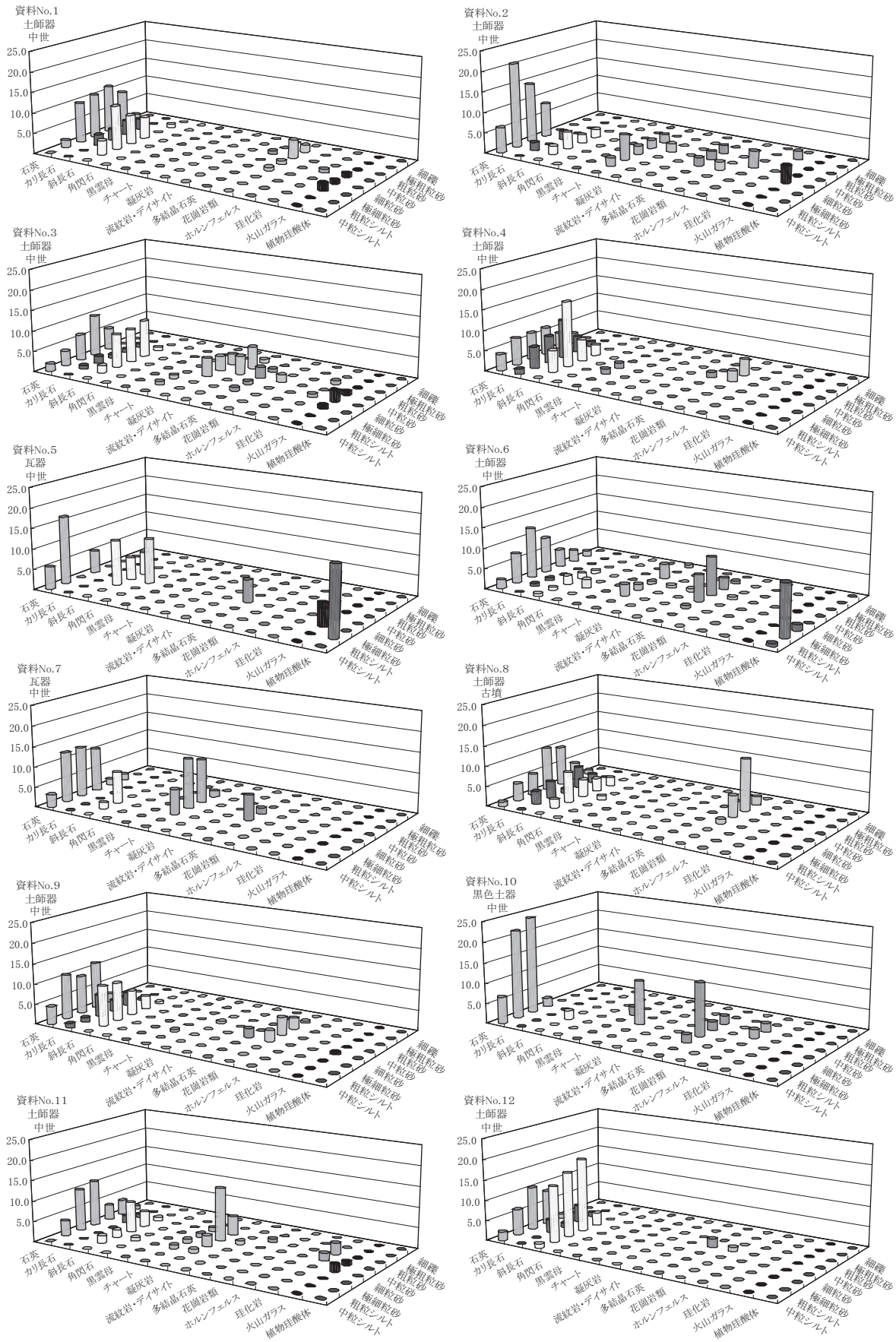
資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																合計
			鉱物片										岩石片																		その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	はんれい岩	珪長岩	結晶片岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
17	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂	1	1	1								1	6		3			1											3					17
		中粒砂	4												1	1	1		1											1					9
		細粒砂	3		1	1								1		1																2				9
		極細粒砂			1																										1				2
		粗粒シルト	1		1																														3	5
		中粒シルト	1																																1	2
	基質																																		105
	孔隙																																		4
18	砂	細礫																														1			1
		極粗粒砂	1	1																														2
		粗粒砂	4	6	2																														12
		中粒砂	4	4	2																										1			11
		細粒砂	9	5	6					1																										21
		極細粒砂	8	6	5					1																										20
		粗粒シルト	3	1	3						1																									8
		中粒シルト																																	0
	基質																																		325
	孔隙																																		11
19	砂	細礫											1																						1
		極粗粒砂													1													1							2
		粗粒砂											2	4					2				1				1								10
		中粒砂	1										2	1					2									1			1				8
		細粒砂	2	1	4								4	2					2												2				17
		極細粒砂	5	3	2								3	3					2												1				19
		粗粒シルト	9	2	3																														14
		中粒シルト	5		1																														6
	基質																																		328
	孔隙																																		5
20	砂	細礫			1																														1
		極粗粒砂																1	2					1	1									5
		粗粒砂	1		3					1				8	1				13	5		1		1		11	4		7	2					58
		中粒砂	11	3	14					7			2	4		1			8	7					3	1	1		5	2					69
		細粒砂	7		7	1		2		1			2	3				1	3	1									2						30
		極細粒砂	11		3		1	1		1			1																						18
		粗粒シルト	7		8																														15
		中粒シルト	2	1	1																														4
	基質																																		467
	孔隙																																		18
21	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂																																	0
		中粒砂	1		2					1				5		1		1		3															14
		細粒砂	12	3	10	1				3				5					1																35
		極細粒砂	20	2	25	2		2		2		1	2	2																					58
		粗粒シルト	20	2	10	2		1				1																							36
		中粒シルト	6		2																														8
	基質																																		456
	孔隙																																		12
22	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂																																	0
		粗粒砂	1		1									6		4	1			1										3					17
		中粒砂	6		2							1			4	1	1	1											1					17
		細粒砂	1		3		1								4			1												1				11
		極細粒砂	3		2																										1				6
		粗粒シルト	5		5		1																								2			2	15
		中粒シルト	1																																1
	基質																																		198
	孔隙																																		8

後、Ⅳ類は同20％前後、Ⅴ類は同15％前後とする。今回の試料では半数の11点がⅣ類となり、次いでⅢ類が５点、Ⅱ類が４点であり、Ⅰ類とⅤ類は１点ずつである。

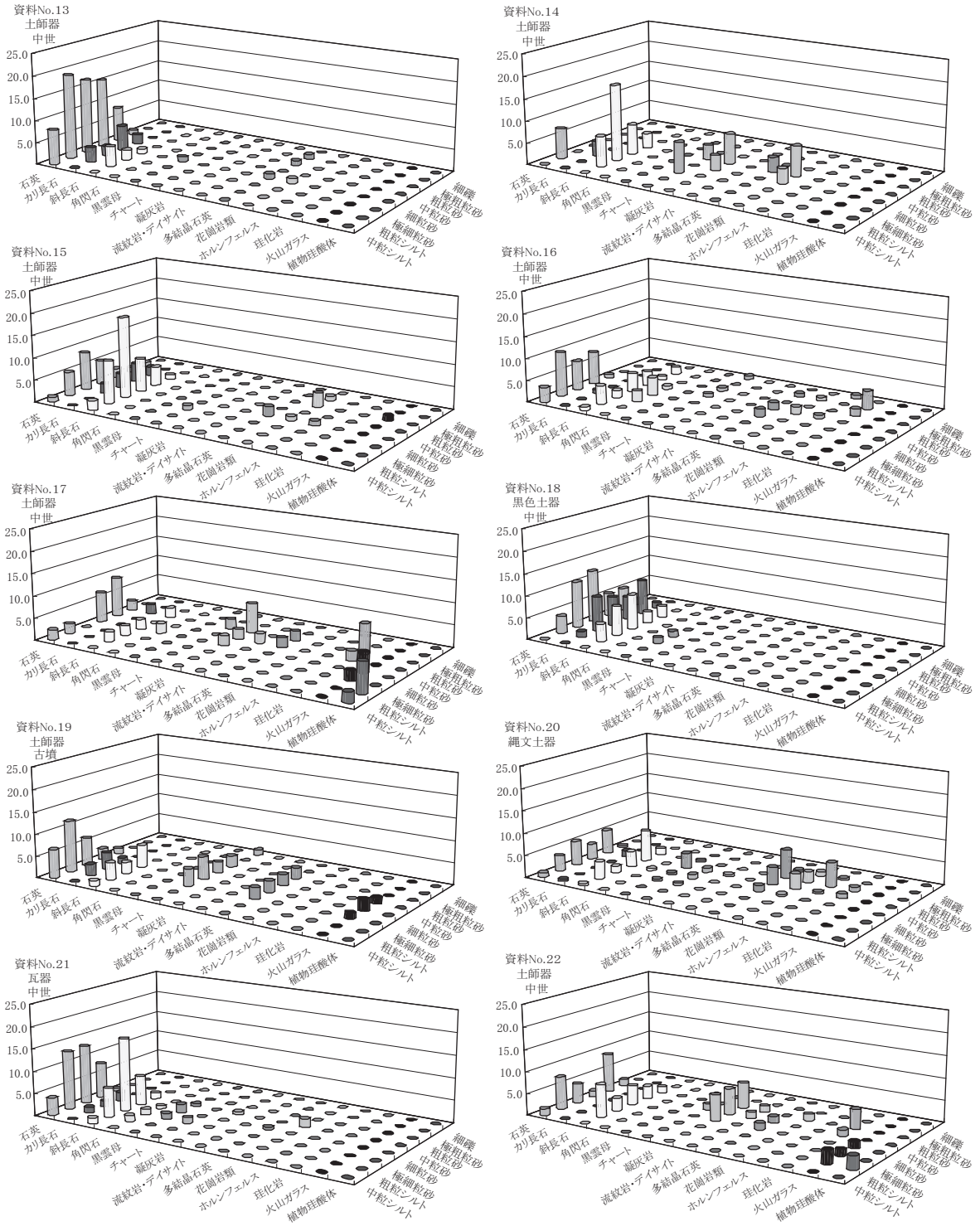
以上述べた試料の胎土分類をまとめて第３表に併記する。各時期各種類の土器胎土の状況は以下のようになる。

１)縄文土器

資料№20の１点のみである。鉱物・岩石組成はＡ３類、粒径組成は中粒砂をモードとし、砕屑物の割合はⅡ類である。



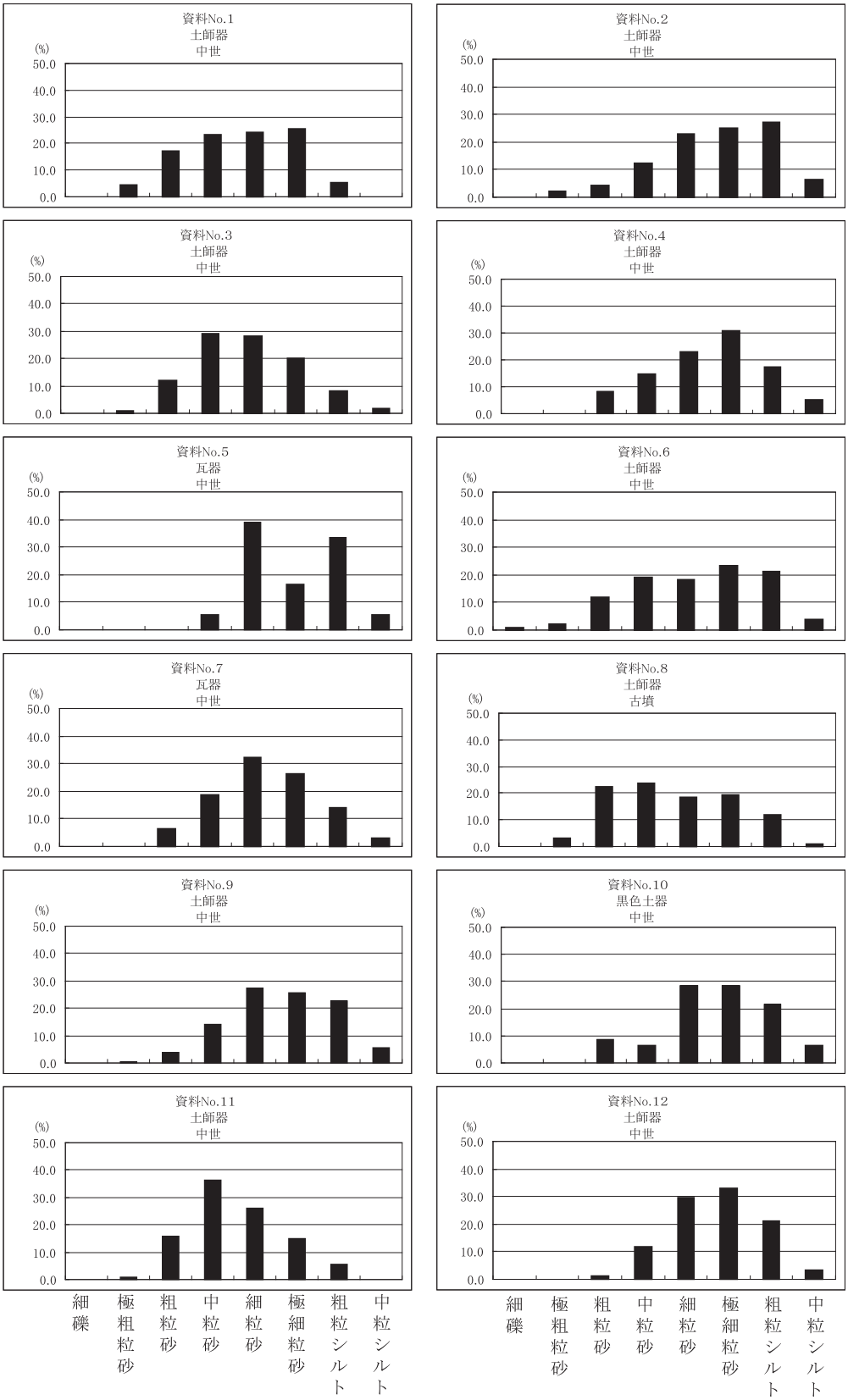
第14図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



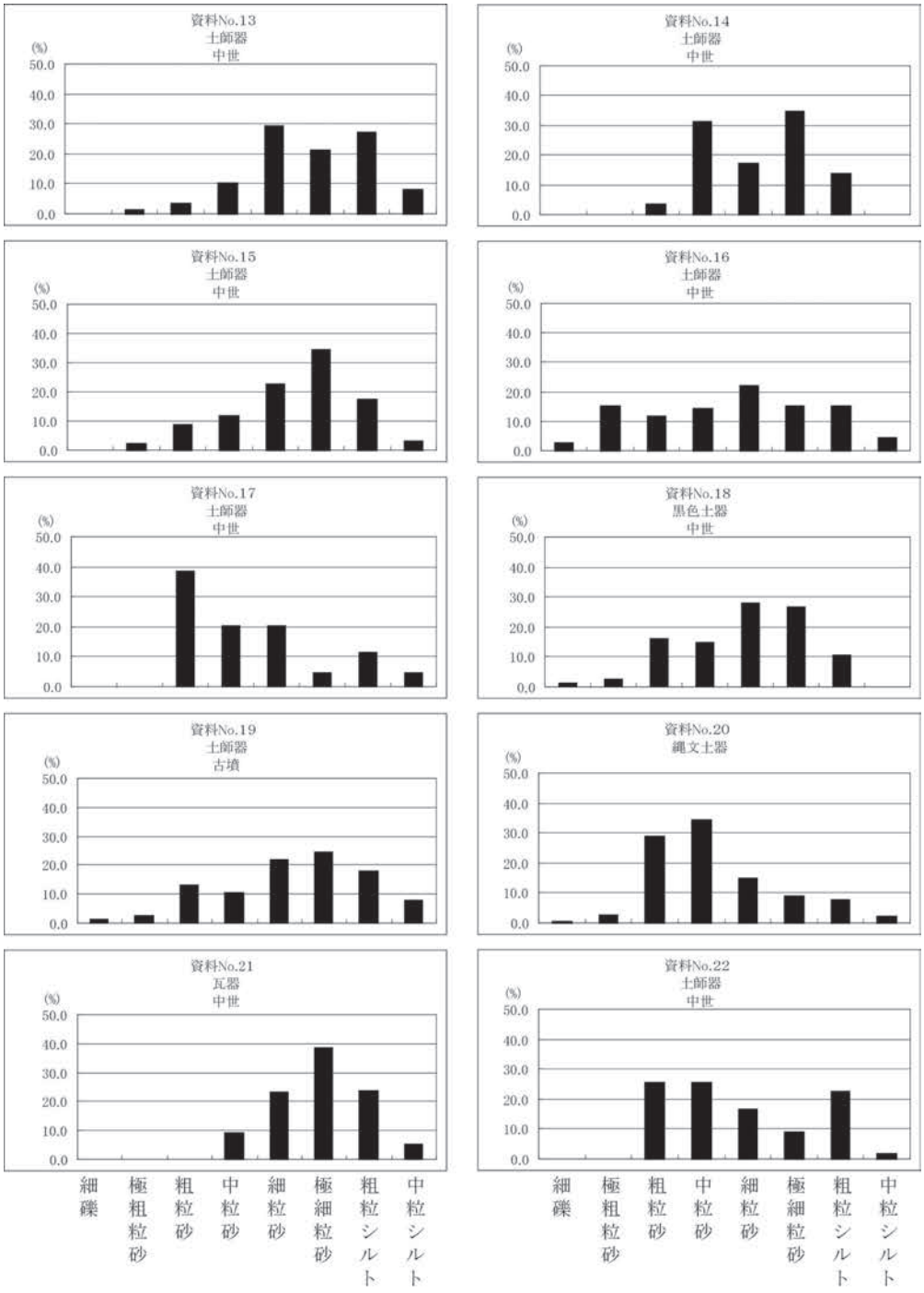
第14図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

２)古墳時代土師器

資料№８と№19の２点のみであり、ともに甕である。鉱物・岩石組成は、資料№８がＣ類、資料№19がＤ２類であり、粒径組成では、資料№８は粗粒砂、資料№19は極細粒砂にそれぞれモードがある。砕屑物の割合は、資料№８は今回の試料では唯一のⅠ類であり、資料№19は今回の試料では最も多いⅣ類である。



第15図　胎土中の砂の粒径組成(1)



第15図　胎土中の砂の粒径組織(2)

３)中世土師器

・鍋

全６点のうち、鉱物・岩石組成は、Ａ３類が３点、Ｄ２類が１点、Ｆ類が２点である。粒径組成は、Ａ３類３点のうち、２点が粗粒砂をモードとし、１点は細粒砂をモードとする。Ｄ２類１点とＦ類２点は、それぞれ、極細砂と中粒砂をモードとする。砕屑物の割合は、鉱物・岩石組成および粒径組成とは対応せず、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの各類が２点ずつに分かれる。

・Ⅲ

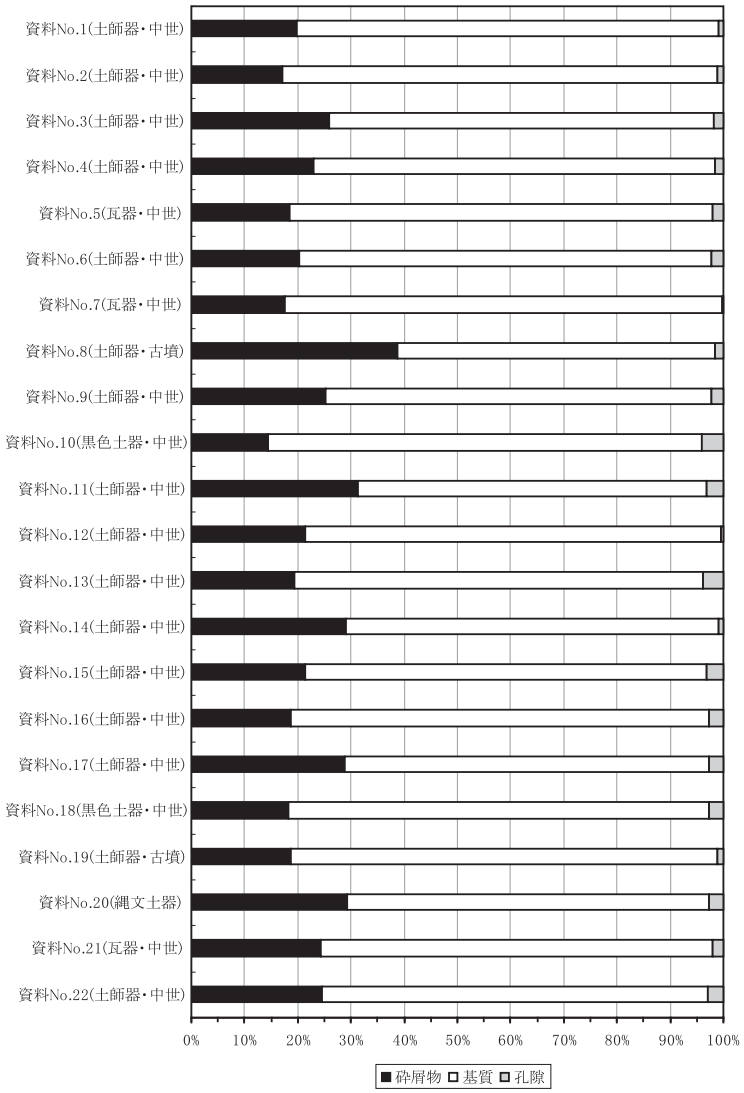
６点の試料のうち、鉱物・岩石組成は、資料№２がＡ３類であるほかは、いずれもＣ類に分類された。粒径組成では、資料№２が粗粒シルト、資料№13が細粒砂にそれぞれモードがあるほかは、いずれも極細粒砂にモードがある。砕屑物の割合は、資料№４がⅢ類であるほかは、いずれもⅣ類に分類された。

・椀

試料は２点のみである。鉱物・岩石組成はＡ３類とＣ類に分かれ、粒径組成は極細粒砂と細粒砂にそれぞれモードがあり、砕屑物の割合はⅡ類とⅢ類である。

４）中世瓦器碗

３点の試料のうち、資料№５と７は、鉱物・岩石組成はＤ２類、粒径組成は細粒砂をモードとし、砕屑物の割合はⅣ類であるが、資料№21は、それぞれＡ１類、極細粒砂、Ⅲ類を示す。



第16図　砕屑物・基質・孔隙の割合

５）中世黒色土器椀

試料は２点のみである。そのうち、資料№10は、鉱物・岩石組成はＤ２類、粒径組成は細粒砂をモードとし、砕屑物の割合はⅤ類であるが、資料№18は、それぞれＣ類、細粒砂、Ⅳ類を示す。

４．考察

⑴胎土の由来する地域について

前述したように当社では、田ノ口遺跡から約１km下流の土井遺跡出土土器の胎土分析を行っている（矢作・石岡，2008）。土井遺跡と田ノ口遺跡とは同一の地質学的背景を有することから、今回の各胎土分類の地域性については、土井遺跡の胎土分析の場合とほぼ同様に考えることができる。なお、参照する地質記載は、猪木(1981)や河田ほか(1986)および日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などである。

田ノ口遺跡と土井遺跡の立地する遠阪川の両岸に迫る山地は、中生代白亜紀～新生代古第三紀に形成された安山岩～流紋岩の溶岩や火砕岩からなる相生層群により構成されている。この地質は遠阪川の源流においても分布している。したがって、田ノ口遺跡周辺の堆積物中に含まれる岩石片は、ほとんどが

相生層群に由来する火山岩や凝灰岩であると考えられる。土井遺跡の分析例では、凝灰岩を主体とする組成のＦ類を周辺堆積物に由来する胎土としたが、今回の分析におけるＦ類は、微量でも堆積岩類や花崗岩類も含まれている組成としたために、周辺堆積物に由来を求めることは難しい。今回のＦ類も他の胎土分類と同様に田ノ口遺跡の地質学的背景と異なる組成であることから、遺跡周辺で作製された可能性は低いと考えられる。

今回のＦ類は、出現した岩石の種類だけをみれば、Ａ類のそれともほぼ同様である。土井遺跡における報告では、Ａ類の由来する地域として、佐治川源流域から朝来町にかけて分布する堆積岩類からなる丹波帯と凝灰岩・流紋岩からなる相生層群および山東町に分布する山陰帯の花崗岩(和田山花崗岩)の３者の分布を流域に併せ持つ和田山町付近より下流の円山川の流域に想定した。そして、Ａ３類の特徴である珪化岩や変質岩の由来を円山川流域の生野や朝来地域に分布する金属鉱床の熱水変質物であると考えた。今回の試料におけるＡ３類の地域性も同様であると考えて良い。なお、Ａ３類とした試料例えば資料№20には、はんれい岩や千枚岩、ホルンフェルス、粘板岩などの岩石も含まれている。これらのうち、はんれい岩については、朝来町付近の円山川流域に分布する夜久野複合岩体に含まれ、千枚岩や粘板岩は丹波層群中に含まれている。ホルンフェルスについては、和田山花崗岩の分布域北部に、舞鶴帯と呼ばれる堆積岩類と接している範囲があり、そこに由来する可能性がある。したがって、Ａ３類に出現するほとんどの岩石は、上記で想定したＡ３類の地域性と矛盾しない。また、今回の試料ではＡ１類が瓦器碗に１点認められている。Ａ１類については、これまでの兵庫県内各地における胎土分析例で認められており、円山川流域の可能性もあるが、それ以外の地域の可能性もあると考えられる。

Ｆ類については、珪化岩も含むことから、和田山町付近より下流の円山川流域に想定することができる。凝灰岩や流紋岩・デイサイトが多い組成は、和田山町付近より下流の円山川流域の中でも相生層群の分布域に近いやや上流側の地域に由来する可能性があると考えられる。

Ｃ類については、花崗岩類を主体とすることから、土井遺跡の報告でも述べたように、最も近い地域としては、上述した和田山花崗岩からなる山地に囲まれた和田山町付近の地域が想定される。実際に、和田山町に所在する筒江浦石遺跡から出土した古墳時代の土師器では、今回のＣ類に近似した組成が認められている。ただし、より広い地域に広げた場合には、花崗岩類の分布は広範な地域に及ぶため、特定することはできない。

Ｄ２類の堆積岩類の卓越する胎土については、両岸の山地を構成する地質が丹波層群からなる遠阪川と佐治川の合流する付近から下流の加古川上流域に由来する可能性がある。凝灰岩や流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類が微量混在している状況は、氷上町付近に分布する相生層群と石英閃緑岩からなる小規模な岩体の分布を反映している可能性がある。

以上述べた各胎土の由来する地域から、田ノ口遺跡においては土器はあまり作られず、山を越えた円山川流域や下流の加古川上流域から持ち込まれたものが多いという状況が想定される。この状況は、土井遺跡の弥生土器や古墳時代および平安時代の土師器においても同様であった。今後も遠阪川沿いの遺跡における土器胎土分析例を蓄積することができれば、この地域の事情に係わる有意な資料が得られることが期待される。

⑵土器の種別による胎土の違いについて

結果の項で記載したように、今回の試料では、土器の時代(縄文・古墳・中世)による胎土の違いは明瞭ではない。一方、中世の土器の中でも土師器と瓦器、黒色土器の間で、さらに土師器における器種の

違いによって胎土の傾向が異なっている状況が窺える。

中世の土師器全体としては、Ａ３類とＣ類を主体とする傾向が看取され、これに対して、瓦器はＤ２類とＡ１類という構成であり、黒色土器は２点のうち１点はＡ３類であるがもう１点はＤ２類であった。瓦器や黒色土器の点数が少ないこともあり、今回の結果がそれら全体の傾向となるかは不明であるが、現時点での結果として示しておきたい。

中世の土師器の中では、鍋はＡ３類とＦ類とに分かれ、皿はＣ類を主体とする傾向が比較的明瞭である。上述したように土師器全体ではＡ３類とＣ類を主体とするとしたが、これは、器種による違いを反映している可能性がある。

これらの状況は、搬入品が多いと推定される今回の分析結果とも関連している可能性があり、同時代における器種別の胎土という視点からの分析例の蓄積と検討も必要と考えられる。

（矢作健二・石岡智武）

引用文献

猪木幸男，1981，20万分の１地質図幅「姫路」．地質調査所．

河田清雄・宮村　学・吉田史郎，1986，20万分の１地質図幅　京都及大阪．地質調査所．

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121．

日本の地質「近畿地方」編集委員会，1987，日本の地質６　近畿地方．共立出版，297p．

矢作健二・石岡智武，2008，土井遺跡出土土器の胎土分析．兵庫県文化財調査報告第341冊　丹波市土井遺跡　一般国道483号北近畿　豊岡自動車道(春日・和田山道路Ⅰ)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ．兵庫県教育委員会，51-58．

第４節　田ノ口遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、漆椀１点（資料№１）と井戸材４点（資料№２～５）の合計５点である。

３．方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

４．結果

樹種同定結果を第５表に示し、顕微鏡写真を第17図に掲げる。木製品は針葉樹１分類群（マツ属複維管束亜属）と広葉樹１分類群（ブナ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第５表　樹種同定結果

資料№	報告№	器種	出土地区	遺構	樹種
1	W1	漆椀	F	北端　土坑	ブナ属
2		井戸材	F	井戸SE001FN	マツ属複維管束亜属
3		井戸材	F	井戸SE001FE	マツ属複維管束亜属
4		井戸材	F	井戸SE001FS	マツ属複維管束亜属
5		井戸材	F	井戸SE001FW	マツ属複維管束亜属

・マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、１分野に１個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ブナ属(*Fagus*)　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

５．考察

漆椀はブナ属に同定された。ブナ属は、比較的強度が高く、乾燥は難しいが、加工は容易である。漆器の木地としてはトチノキやケヤキと共によく利用される樹種の一つである。兵庫県内の事例をみると、中世の資料ではケヤキ、トチノキ、クリ等の利用が目立つが、ブナ属は入佐川遺跡で中世および中世の可能性があるとされる事例が２例報告されている程度であり、利用が少ない(伊東，2002)。一方、近世では、明石城武家屋敷跡、有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ、入佐川遺跡で11例の報告があるが、逆にケヤキやトチノキの利用例は少ない(島地，1992；伊東，2000，2002)。このことから、時期によって木材利用が異なっていた可能性がある。

井戸材は、全て複維管束亜属に同定された。複維管束亜属は、比較的強度が高く、松脂を多く含むために耐水性もあり、こうした材質から利用されたことが推定される。４点全てが複維管束亜属であることから、特定の木材を選択・利用したことが推定される。兵庫県内の古代における井戸材の樹種をみると、スギ、コウヤマキ、ヒノキ、モミ属等の利用が多い。複維管束亜属が主体となる例は、二葉町遺跡第８－３次の９世紀とされる事例や上沢遺跡第16次の12世紀とされる事例等がある(松葉，2001；神戸市教育委員会，2002)。

(高橋　敦)

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫，2000，伊丹郷町遺跡出土木製品の樹種.「有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ　都市計画道路伊丹飛行場線(中工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」，兵庫県文化財調査報告第207冊，兵庫県教育委員会，63-64.

伊東隆夫，2002，入佐川遺跡出土木製品の樹種.「入佐川遺跡　小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅲ)」，兵庫県文化財調査報告第229冊，兵庫県教育委員会，109-125.

神戸市教育委員会，2002，上沢遺跡　第33次調査.「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」，291-299.

松葉礼子，2001，二葉町遺跡出土木製品の樹種同定.「二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・12次調査」，神戸市教育委員会，141-166.

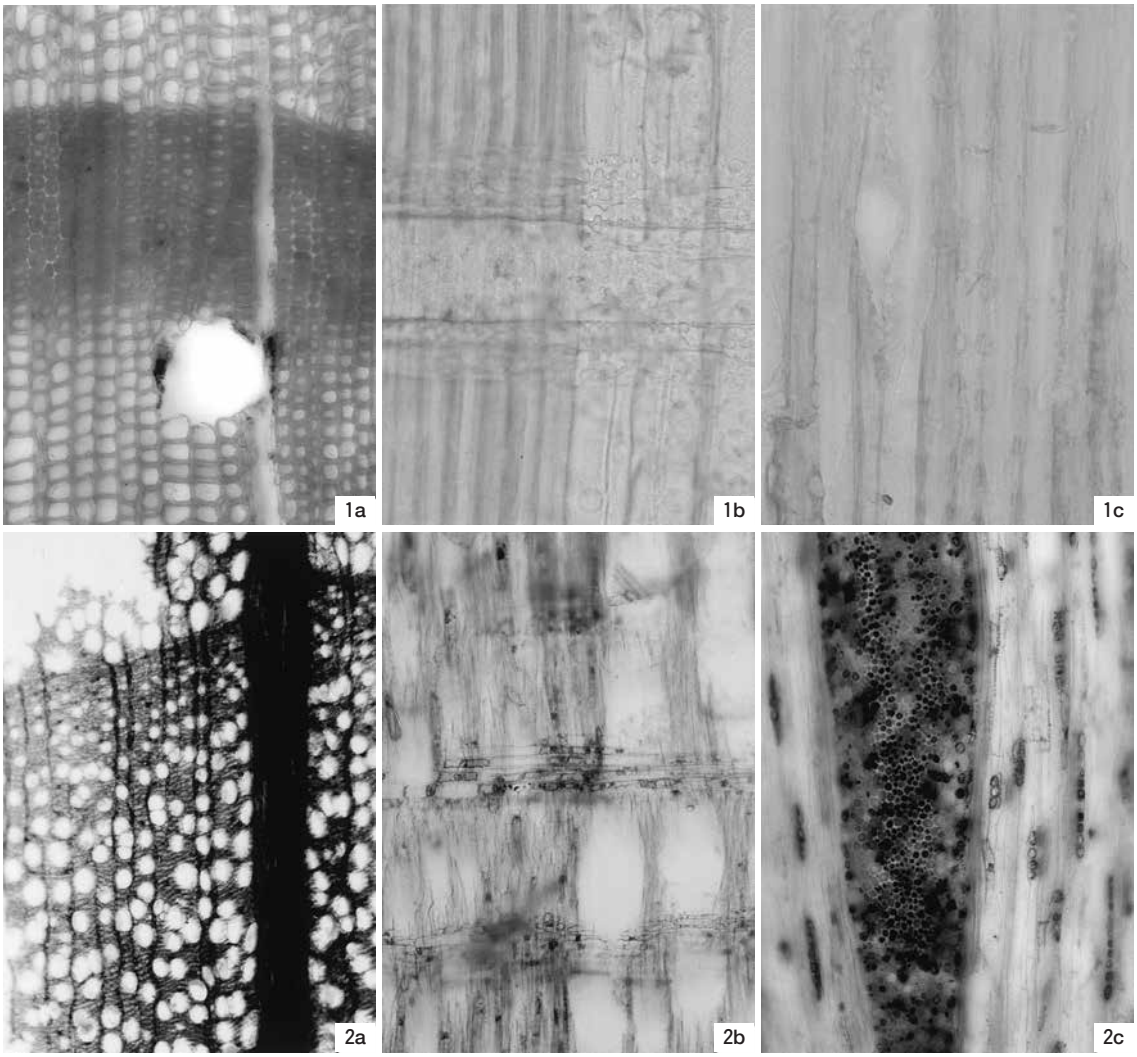
Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.(編)，2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.

［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙，1992，明石城武家屋敷跡出土木製品の樹種.「明石市　明石城武家屋敷跡　山陽電鉄連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書」，兵庫県文化財調査報告第109冊，兵庫県教育委員会，103-119.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.(編)，1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修)，海青社，122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1．マツ属複維管束亜属(仮資料№２)
2．ブナ属(仮資料№１)
　a：木口，b：柾目，c：板目

300□m : 2a
200□m : 1a，2b，c
100□m : 1b，c

第17図　木材組織の顕微鏡写真

第５節　田ノ口遺跡出土ガラス玉の材質分析

１．はじめに

田ノ口遺跡より出土したガラス玉について顕微鏡による構造調査と、蛍光Ｘ線分析装置による材質の調査を行った。

２．試料

分析の対象とする試料は、Ｄ地区の SB008D の柱穴 P0075D から出土した１点(J1)である。

３．試料の観察と分析

実体顕微鏡による観察

最初に実体顕微鏡で観察し、デジタルカメラで記録をとった。使用した装置は(株)ニコン製 SMZ-1500 である。表面の風化の状態の観察を目的とし、落射光により観察した(写真図版34)。

蛍光Ｘ線分析装置による分析

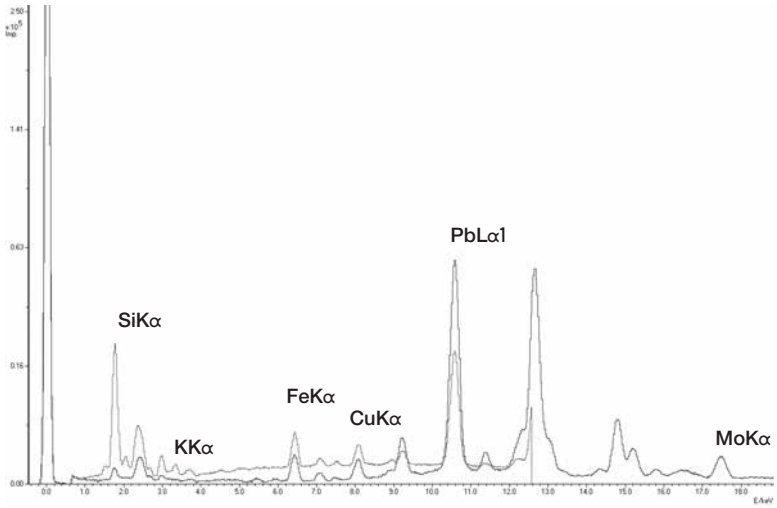
蛍光Ｘ線分析は、スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 MIDEX-M を用いて行った。分析の条件は電圧45kV、電流0.25mA、測定時間180秒、軽元素側は電圧19kV、電流0.3mA、測定時間300秒で、コリメータ径は2.0㎜で測定した。検出器はペルチェ冷却 SDD(液体窒素不要)。測定雰囲気は、軽元素の検出感度を上げるためにヘリウムガスパージを行い測定した。

今回の測定の結果は、表面の非破壊測定によるため、表面の風化や形状が影響し、必ずしも試料内部の正確な化学組成を示すものにはならないが、大まかなガラスの材質を判断することは可能である。

４．分析結果と考察

顕微鏡による観察では、表面が著しく風化し、白い粉状の物質で覆われているため、内部の気泡などの観察はできなかったが、一部にガラスが露出している部分がありガラスの色調は確認できた。ガラスは淡緑色を呈している。

蛍光Ｘ線分析の結果 SiO、K_2O、Fe_2O_3、CuO、PbO の元素が検出されたことから、アルカリ鉛珪酸塩ガラスに属するものであることが判明した。



第18図　田ノ口遺跡出土ガラス玉蛍光Ｘ線定性分析スペクトル

第５章　まとめ

第１節　田ノ口遺跡の遺物の検討

１．土器・陶磁器の分類

田ノ口遺跡から出土した土器・陶磁器には種別では土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、無釉陶器、施釉陶器、白磁、青磁、青花磁器、染付磁器などがある。

ここでは、それぞれを器種ごとに分類し、さらにそれぞれの器種について、若干分類を試みたい。

(1)土師器

土師器には器種別では皿、鍋、椀、甕、壺、焙烙、鉢、紡錘車などがある。

Ａ　皿

皿は今回の調査では最も多く出土している。これらは、大きくロクロ土師器と非ロクロ土師器に大別される。

ロクロ土師器

ロクロ土師器は底部の切り離し技法から、ヘラ切によるⅠ類(107・329・343・344・587・621)、糸切によるⅡ類(36・306・307・327・331・339・342・352・353・359・360・363・412・413・414・419・441・442・443・444・448・449・552・617)に大別される。このほか、切り離しの後、底部外面にナデ調整を施し、切り離し痕が不明瞭なもの(39・44・83・97・214・308・326・340・346・362・406・420・421・445・446・447・450・451・551・579・590・627)がある。

Ⅰ類は平底で体部が短く外上方に延びるⅠＡ類のみで占められる。Ⅱ類は平底で体部が直線的に外上方に延びるⅡＡ類(36・306・307・327・352・353・363・413・414・419・443・444・448・449・617)、平底で体部が内彎気味に外上方に延びるⅡＢ類(331・342・441・442)、平底で体部が非常に短いⅡＣ類(326・339・412・552)に細分される。同様に切り離し技法の不明瞭なものにも、平底で体部が直線的に外上方に延びるもの(44・83・97・214・302・346・362・406・445・446・447・450・451・590)、平底で体部が内彎気味に外上方に延びるもの(305・420)、平底で体部の非常に短いもの(39・421・579)などがある。

非ロクロ土師器

非ロクロ土師器の皿は155点図化しており、土器・陶磁器に占める比率が最も高く、全体の23.5%を占めている。形態には様々なものが含まれるが、底部から口縁部まで残るものを対象にして、主にその形態から以下のＡ～Ｇの６型式に分類する。

Ａ類　平底で体部が直線的に外上方に延びるもの(42・70・103・106・109・112・113・160・161・162・163・164・179・192・216・218・219・220・221・325・332・333・364・365・435・586・589・618・622・623・624・744・747)。

Ｂ類　平底で体部が内彎気味に外上方に延び、底部と体部の境が不明瞭なもの(15・18・30・67・69・76・84・87・91・93・94・95・102・104・108・115・116・157・158・159・180・181・182・183・184・191・198・199・200・201・202・203・204・210・211・212・213・215・290・303・309・354・355・356・357・358・433・434・436・439・440・569・580・583・585)。

Ｃ類　平底で体部が短く直線的に外方に延びるもの(５・７・12・14・24・40・41・43・47・75・86・

88・90・92・96・98・99・100・101・105・189・190・191・205・206・207・208・209・328・577・581・582・584・721・722)。

Ｄ類　体部が外反し、口縁部が外方にひらくもの(25・31・114)。

Ｅ類　体部が内彎し口縁部が外方にひらくもの。いわゆるての字状口縁のⅢ(310・338)。

Ｆ類　体部が直線的に外上方にのび口縁部が大きく外方にひらくもの(564)。

Ｇ類　深身で体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部が若干外方にひらく椀形のもの(366)。

Ｂ　鍋

鍋は全部で42点図化しているが、その中では播丹型鍋(82・121・165・185・187・195・224・226・227・291・372・467・635・636・726・729・730)が最も多く出土している。

播丹型鍋はその形態から､体部からやや緩やかに外反する口縁端部が外方につまみ出されるⅠ類(82・121・165・185・195・226・227)、体部から緩やかに外反する口縁端部の断面が三角形状につまみだされるⅡ類(187)、体部から緩やかに外反する口縁端部が玉縁状を呈するⅢ類(726)、口縁部は体部から直立気味に立ち上がり口縁端部が丸く収まるⅣ類(291・467・636)､体部が扁平な形状を呈するⅤ類(224・372)に細分される。播丹型以外の鍋には、播丹型に先行する甕形鍋(323・371・405・415・463・464)、口縁部がＬ字状に屈曲する鉄鍋形鍋(461・462)などがある。

Ｃ　椀

椀は破片が多く、口縁部から底部まで残るものは少ないが、底部の形態から、輪高台を貼り付けるⅠ類(２・410)、平高台をもつⅡ類(118・454・456・457・458)、平底のⅢ類(311・453・627)に分類される。

Ｄ　甕

甕と鍋とは、用途から見れば煮炊具であり、形態的には分類しにくいものを含むが、ここでは、内外面に刷毛目調整を施すもの及び体部外面に縦方向の叩き目が残る煮炊具としてはやや古相を示すものを甕とした。

甕は口縁部が大きく水平方向に外方にひらき､体部が長胴のⅠ類(368・369)､口縁部が外方にひらき、長胴のⅡ類(426・427)、口縁部が外方にひらき外面に縦方向の叩き目が残るⅢ類(222)、口縁部がＬ字形に屈曲するⅣ類(312)に分類される。

Ｅ　壺

壺としたものには348・459・554の３点があるが、554以外は細片で全体の器形は不明である。

Ｆ　鉢

鉢には口縁部の形態から口縁端部を上方につまみ上げるⅠ類(37)、口縁端部が玉縁状に肥厚するⅡ類(469)、端部の断面が三角形状に肥厚するⅢ類(470・472)、口縁端部がくの字状に屈曲するⅣ類(409)がある。

Ｇ　杯

杯はいずれも平底で体部は直線的に外上方に延びる｡体部と底部の境が明瞭なⅠ類(60・65・81・335)と丸味をもつⅡ類(111・112・113・217)とがある。

Ｈ　羽釜

羽釜は１点(231)出土している。口縁部は若干内傾し、外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。

Ｉ　紡錘車

紡錘車が１点(460)出土している。

(2)黒色土器

黒色土器には椀と皿がある。

Ａ　椀

椀は底部の形態から輪高台を貼り付けるⅠ類(473・594)、平高台をもつⅡ類(294・317・318・377・416・422・423・424・474)、平底のⅢ類(125・127・128・336・475・610・613)に分類される。

Ｂ　皿

皿は３点図化している。体部が直線的に外上方に延びるもの(124)と内彎気味に延びるもの(123・170)とがある。

(3)瓦器

瓦器には椀と皿がある。

Ａ　椀

瓦器椀は24点図化しているが、口縁部のみの破片が多く、底部を含めた全体の器形の分かるものはほとんど見られない。断面が三角形状の低い高台をもち、体部は内彎気味に外上方に延び、器高の低いⅠ類(378)、断面が三角形状の低い高台をもち、体部は内彎気味に外上方に延び、器高の比較的高いⅡ類(728)、比較的細く高い高台をもち、体部は直線的に外上方に延び、器高が比較的高いⅢ類(188・597)がある。

Ｂ　皿

瓦器皿は８点図化している。平底で体部が短く直線的に外上方に延びるⅠ類(130・136・557・570)と平底で体部が内彎気味に外上方に延びるⅡ類(38・235・407)に分類される。

(4)瓦質土器

瓦質土器には鍋、羽釜、壺がある。

Ａ　鍋

鍋は４点図化している(236・374・549・639)。いずれも口縁部が大きく外方にひらき、端部を上方につまみあげる鉄鍋形鍋である。

Ｂ　羽釜

羽釜(169)は比較的幅の短い鍔を貼り付け、口縁部はほぼ直立する。

Ｃ　壺

壺(237)は口縁部の細片である。口縁端部が玉縁状に肥厚する。

(5)須恵器

須恵器には椀、皿、鉢、甕、壺、杯がある。

Ａ　椀　椀は底部の形態から輪高台を貼り付けるⅠ類(238・477・478・480・481・483・640)、平高台をもつⅡ類(143・242・381・382・397・400・430・431・482・487・492・493・494・495・496・497・

498・499・500・501)、平底のⅢ類(21・49・241・337・387・429・438・502・598・604・645)に大きく分類される。

Ｂ　皿

Ⅲは深身のⅠ類(55)と浅身のⅡ類に大別される。Ⅱ類はさらに体部が直線的に外上方に延びるⅡＡ類(322・578・642・643)と体部が僅かに内彎するⅡＢ類(510)に細分される。

Ｃ　鉢

鉢は56点図化しており、土器・陶磁器の中で占める割合は8.4%である。ただ、底部から口縁部まで残存し、全体の器形の分かるものは少ない。ここでは、最も残存度の高かった口縁部の形態を中心に分類する。

Ａ類　体部が大きく内彎し、口縁部が外方ひらくもの(513)。

Ｂ類　体部が内彎し、口縁部が若干外方にひらき、端部を水平にひきだすもの(512)。

Ｃ類　体部が内彎し、口縁端部が水平に端面をもつもの(514)。

Ｄ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁端部が斜め方向に端面をもつもの(57・186・251・389)。

Ｅ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁部を若干上方にひき上げるもの(253・516)。

Ｆ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁部の断面が三角形状を呈するもの(73・145・147・175・515)。

Ｇ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁端部を下方にひきだすもの(146・731・732・737)。

Ｈ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁部が玉縁状に肥厚するもの(77・247・248・250・256・576・734)。

Ｉ類　体部が直線的に外上方に延び、口縁部が上下に拡張して縁帯をもつもの(28・615)。

Ｄ　甕

甕はいずれも口縁部の破片のみが出土し、全体の器形が分かるものはほとんどない。

口縁部の形態からは、口縁部が外方に大きくひらくⅠ類(154)と、口縁部が「く」の字状に外方にひらくⅡ類に分けられる。Ⅱ類は口縁端部の形状から、端部を引き出さないⅡ１類(64・174・259)、上方に若干引き出すⅡ２類(265・391・568)、端部を上下に引き出すⅡ３類(521)に分類される。

Ｅ　壺

壺は７点図化しているがいずれも破片である。194・246・641は輪高台を貼り付ける底部片、519・606は体部外面に凸帯を巡らせるものである。

Ｆ　杯

杯には輪高台をもつ底部片(239・380)と平底で体部が直線的に外上方に延びるもの(428・511)とがある。

(6)無釉陶器

無釉陶器には甕、擂鉢、鍋がある。

Ａ　甕

甕には常滑焼(266)、備前焼(522)と丹波焼(298・392・738)とがある。

Ｂ　擂鉢

擂鉢は２点見られ、いずれも丹波焼である(650・749)。

C　鍋

鍋(122・167・168・228・229・373・565)はいずれも播丹型土師器鍋と形態的には酷似するが、焼成が堅緻で土師器というよりはむしろ陶器の範疇で捉え得るものである。三本峠北窯出土遺物に類例が見られることから、その一部は丹波焼の窯で焼成された可能性が考えられる。

(7)施釉陶器

施釉陶器には椀、皿、壺がある。

A　椀

椀には緑釉椀(528)、灰釉椀(526)、天目茶碗(525)、近世の京焼系陶器椀(297)などがある。

B　皿

皿には緑釉皿(267・524)、瀬戸・美濃系灰釉陶器卸皿(647・648)がある。

C　壺

壺には古瀬戸壺(268・523)、中国産灰釉陶器壺(176)・耳付壺(649)がある。

(8)白磁

白磁には器種別では碗・皿・壺が含まれる。

A　碗

碗は横田・森田分類のⅡ類(29・273・274・529・651)、Ⅳ類(35・66・155・156・177・269・270・275・276・299・393・395・530・531・561・607・652・653)、Ⅴ類(571)、Ⅷ類(71・562)の他、近世のもの(660)が若干含まれるが、圧倒的にⅣ類碗の占める割合が高い。

B　皿

皿は碗に比べて出土量が少ない。山本分類Ⅲ類(271)、森田分類Ｅ－２群(655)の他、近世の波佐見産の粗製白磁皿(658)、肥前産の紅皿(661)などが見られる。

C　壺

壺は四耳壺の底部片(279)が１点出土している。

(9)青磁

青磁には碗、皿がある。

A　碗

碗には同安窯系青磁(178・282・572)と龍泉窯系青磁とがある。龍泉窯系青磁には無文碗(22・300・396・527)、劃花文碗(283・733)、蓮弁文碗が見られる。さらに蓮弁文碗は蓮弁の形から鎬蓮弁文碗(284・285・286・538)、広形蓮弁文碗(656)、細蓮弁文碗(657)に細分される。

B　皿

皿は碗に比べて出土量が少なく同安窯系青磁(536・537)と龍泉窯系青磁稜花皿(539)とがある。

(10)青白磁

青白磁には水滴(280)と合子(281)がある。

(12)青花磁器

白磁に呉須で文様を描くもので、中国製のものを青花磁器、日本製のものを染付磁器とした。青花磁器には碗、皿がある。

Ａ　碗

碗は底部の形態から、蓮子碗(347)、饅頭心碗(663)、平底碗(540・541)に分類される。

Ｂ　皿

皿は底部の形態から平底で細く低い輪高台をもつもの(404・542・543・608)、碁笥底のもの(544・545)に分類される。

(13)染付磁器

極少量であるが、肥前系の碗が出土している。

Ａ　碗

碗には外面に簡易な草花文を描く肥前系碗(301)、肥前系波佐見産のくらわんか手碗(739・740)がある。

２．土器・陶磁器組成の変遷

田ノ口遺跡から出土した土器・陶磁器類について、ここでは、ある程度その編年観が示されている須恵器椀・鉢を基準にして、平安時代～室町時代までの時期をⅠ期～Ⅵ期までの６時期に、さらに近世の１時期を加えて計７期に区分して、土器・陶磁器組成の変遷についてその概要を述べたい。

Ⅰ期(10世紀～11世紀前半)

須恵器椀Ⅰ類、須恵器鉢Ａ類、土師器椀Ⅱ類、土師器甕Ⅲ類、黒色土器椀Ⅰ類などで構成される時期である。

Ⅱ期(11世紀中頃～12世紀前半)

須恵器椀Ⅱ類、須恵器鉢Ｂ類・Ｃ類、土師器椀Ⅱ類、黒色土器椀Ⅱ類・Ⅲ類、白磁碗Ⅱ類などで構成される時期である。また、土師器皿Ｅ類もこの時期に比定される。

Ⅲ期(12世紀後半～13世紀中頃)

須恵器椀Ⅱ類・Ⅲ類、須恵器鉢Ｄ類・Ｅ類・Ｆ類、瓦器椀、白磁碗Ⅳ類・Ⅴ類、白磁四耳壺、白磁皿、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁劃花文碗、青白磁合子などで構成される時期である。

Ⅳ期(13世紀後半～14世紀中頃)

須恵器椀Ⅲ類、須恵器鉢Ｈ類・Ｆ類、土師器鍋播丹形Ⅰ類・Ⅱ類、瓦質土器鉄鍋形鍋、常滑焼甕、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗などで構成される時期である。

Ⅴ期(14世紀後半～15世紀中頃)

須恵器鉢Ⅰ類、土師器鍋播丹型Ⅲ類・Ⅳ類、中Ⅳ期の瀬戸灰釉小壺などで構成される時期である。

Ⅵ期(15世紀後半～16世紀末)

土師器鍋播丹型Ⅴ類、丹波焼櫛描き擂鉢、後Ⅳ期の瀬戸・美濃系灰釉陶器卸皿、白磁皿Ｅ－２群、青磁稜花皿、青花磁器碗・皿で構成される時期である。

Ⅶ期(近世　17～18世紀)

丹波焼櫛描き擂鉢、肥前系磁器碗などが見られる。

３．小結

田ノ口遺跡の土器・陶磁器組成の変遷について、平安時代から室町時代については、Ⅰ期からⅥ期の６時期に分けて概要を述べた。

Ⅰ期は古代に区分される時期で、須恵器椀Ⅰ類、須恵器鉢Ａ類など古代的土器組成で構成される時期である。また、変遷表には掲載しなかったが、少量の緑釉陶器、灰釉陶器などの出土も見られる。

しかし、出土量はごく僅かで、集落の形成はまだ行われていないものと考えられる。

Ⅱ期は平高台をもつ須恵器椀Ⅱ類、須恵器鉢Ｂ類・Ｃ類、白磁碗Ⅱ類などが出現し、土器・陶磁器組成の様相が古代的土器組成から中世的土器組成に移行する時期である。

さらに、変遷表には掲載していないが、土師器皿Ｇ類もこの時期の所産と考えられ、土師器、須恵器、黒色土器、貿易陶磁などの土器・陶磁器組成が出揃う時期である。

Ⅲ期に入ると、Ⅱ期同様、須恵器椀Ⅱ類に加えて、この時期の後半には須恵器椀Ⅲ類が出現する。また、須恵器鉢もＤ類・Ｅ類・Ｆ類が出現し、種類、量ともに増大する。貿易陶磁もⅣ類の白磁碗を中心に青磁碗、青白磁が少量出土している。

Ⅳ期は土師器鍋では播丹型Ⅰ類・Ⅱ類が出現する。また、瓦質土器鉄鍋形鍋も極少量見られる。また、須恵器ではこの時期の前半まで、須恵器椀Ⅲ類が使用されている。須恵器鉢はＨ類が出現する。貿易陶磁では白磁は見られず、青磁蓮弁文碗が主体を占めるようになる。

Ⅴ期には須恵器では、椀はすでに見られなくなり、須恵器鉢Ⅰ類がごく少量見られる。

また、土師器鍋も播丹型Ⅲ類・Ⅳ類が極少量見られるのみで、土器・陶磁器の出土量はⅣ期と比較して急速に減少する。

Ⅵ期は土師器鍋では、播丹型Ⅴ類が極僅か見られる。また、丹波焼擂鉢、瀬戸・美濃系灰釉陶器卸皿、青磁細蓮弁文碗・稜花皿、青花碗・皿などが見られるが、量的には極少量である。

これらの結果から、当遺跡の集落の形成はⅡ期に開始され、Ⅲ期がその中心時期であり、Ⅳ期以降衰退して行くものと考えられる。

引用・参考文献

大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布―発掘資料を中心として―」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館

岡田章一　長谷川　眞　2003 「兵庫津出土の土製煮炊具」『研究紀要』第３号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

長谷川　眞　2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入―杉本捷夫氏採集資料の再検討に向けて―」『中世土器の基礎研究』ⅩⅦ　日本中世土器研究会

兵庫県教育委員会　1992 『初田館跡』

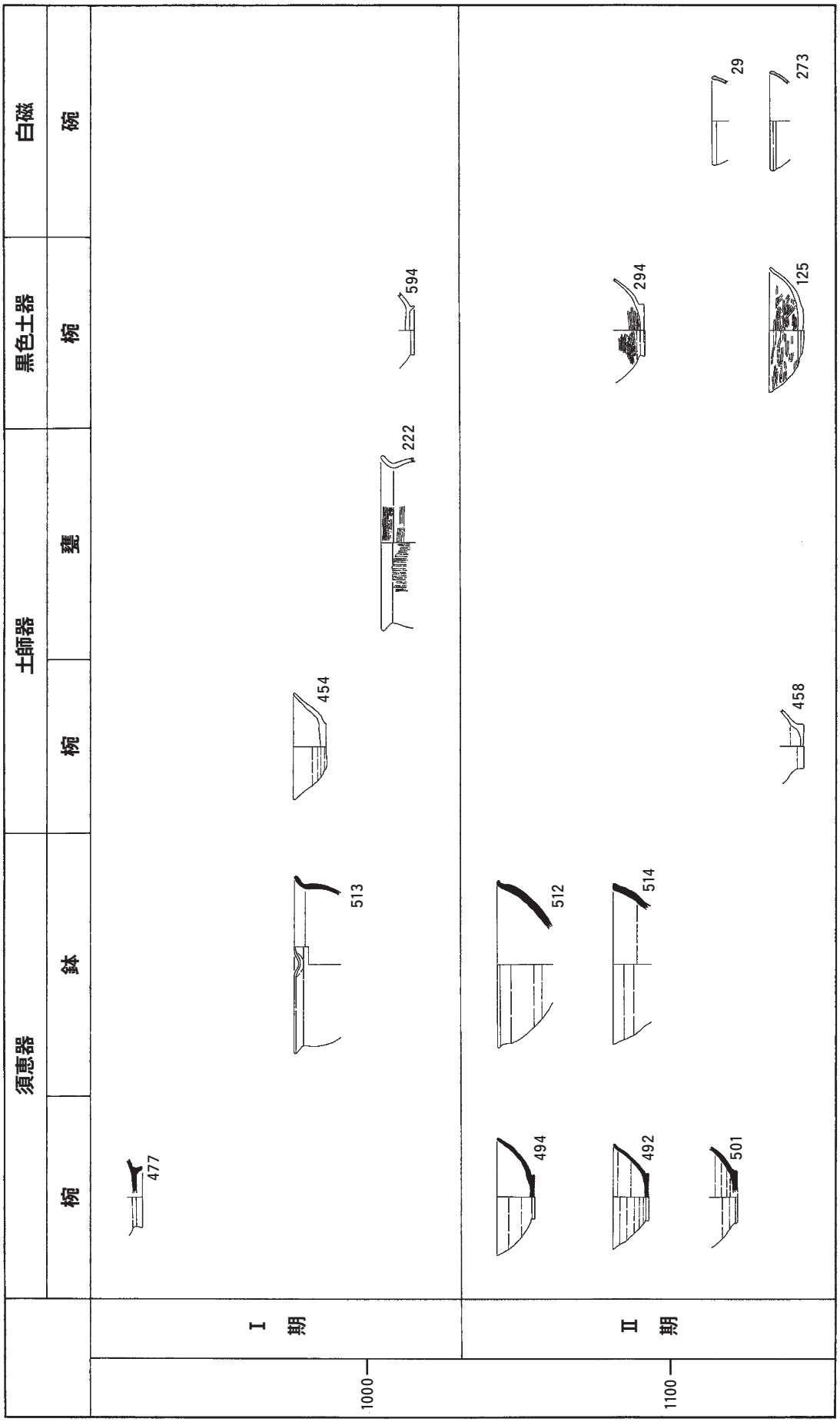
兵庫県教育委員会　2004 『兵庫津遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会　2010 『大野遺跡』

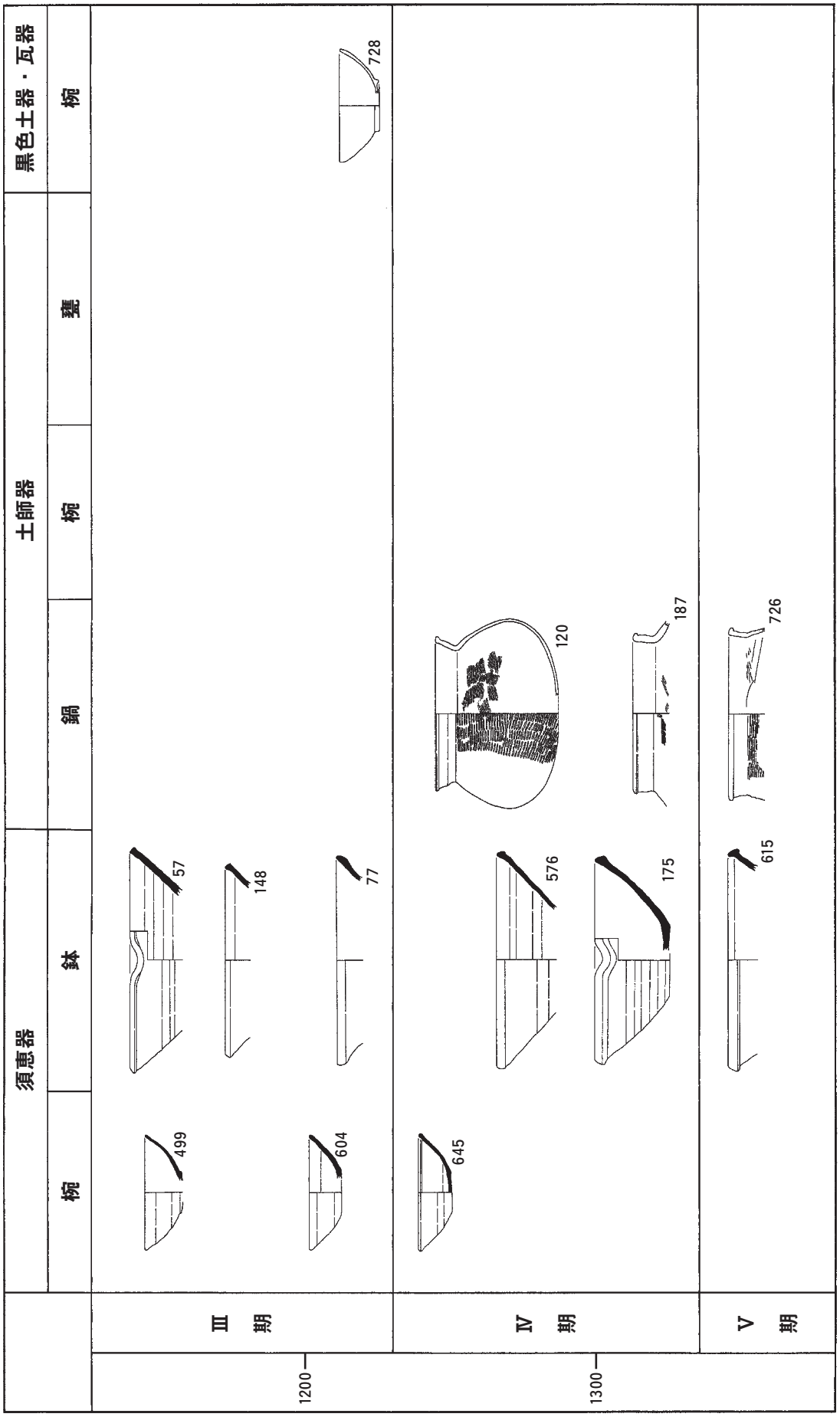
藤澤良祐　1995 「(生産３)瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界―その生産と流通―』資料集

横田賢次郎　森田　勉　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―形式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

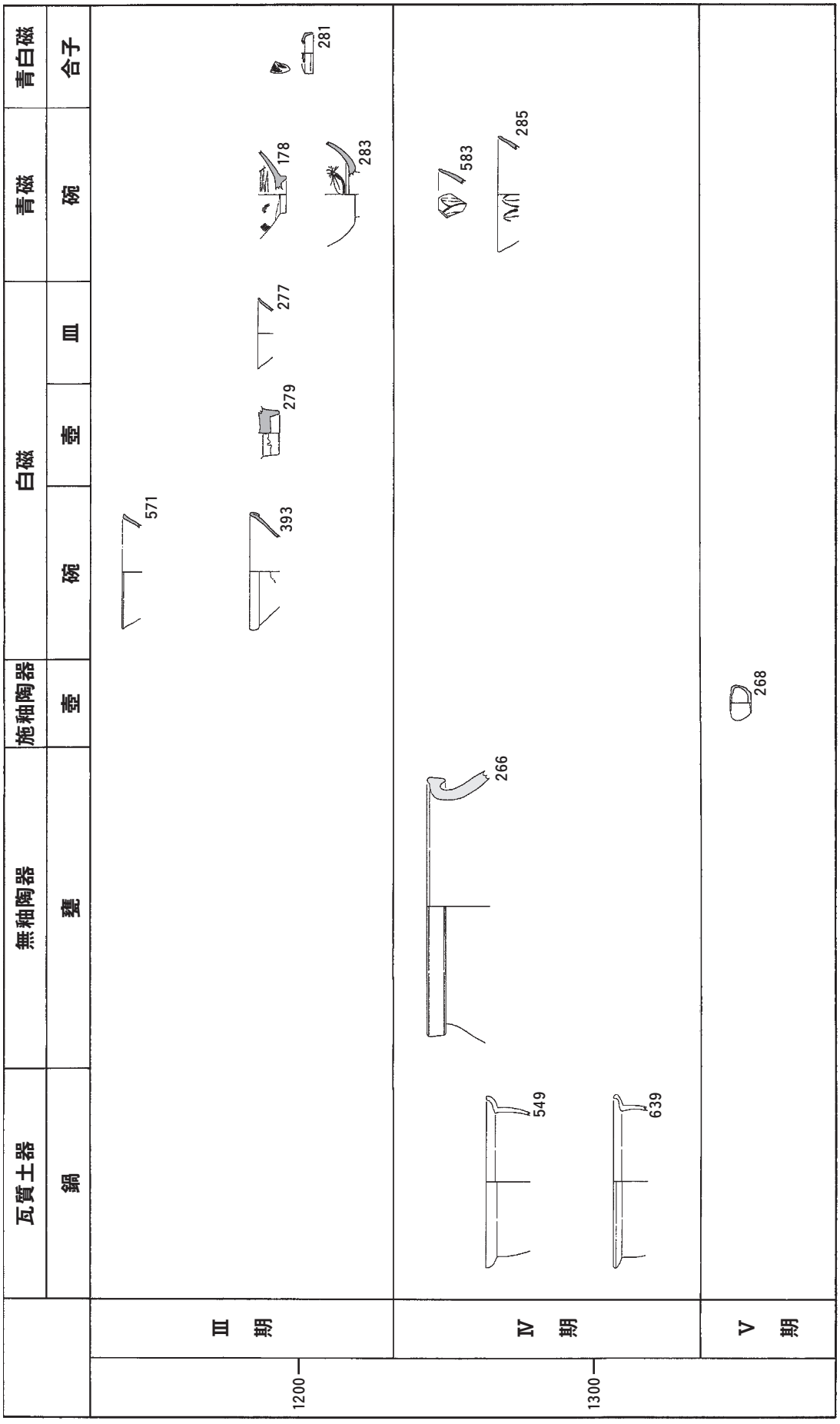
山本信夫　2000 「磁器の分類」『大宰府条坊跡Ⅴ―陶磁器分類編―』 太宰府市教育委員会



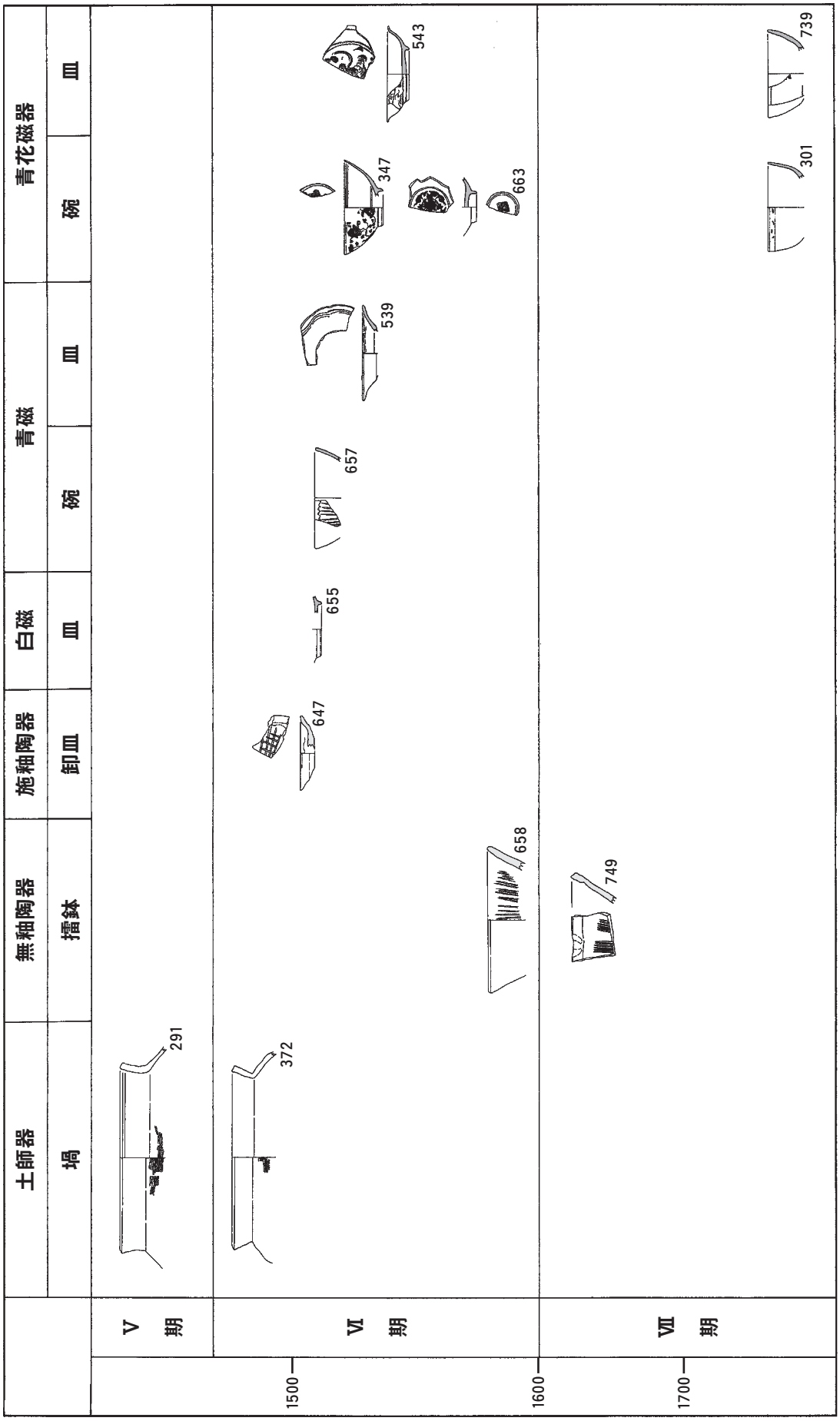
第19図　土器・陶磁器変遷表(1)



第20図　土器・陶磁器変遷表(2)



第21図　土器・陶磁器変遷表(3)



第22図　土器・陶磁器変遷表(4)

第２節　中世の遺構について

古代～中世の遺構については主に、12世紀～16世紀にかけての集落遺構と経塚、中世墓群が検出されている。

今回はＡ～Ｇの７地区を調査しているが、経塚・中世墓地のＧ地区を除き、６地区が集落遺構を検討する対象となる。これらは、調査の都合によって地区名が割り振られており、地形からは、田ノ口城跡から張り出す尾根の北側にあるＡ・Ｂ・Ｃ地区で１つの遺構群が形成されるグループ。南側に所在する尾根下のＤ地区及び後背のＧ地区で１つの遺構群が形成されるグループ、更に南側の谷部－扇状地上に乗るＥ・Ｆ地区で１グループが存在すると認識できる。

ここでは、まず建物方位から簡単な分類を行い、更に各集落遺構のグループごと、即ちＡ・Ｂグループ、Ｄ・Ｇグループ、Ｅ・Ｆグループの３グループを俎上にあげ、それぞれの建物のグルーピングを行い、更に建物規模から変遷と性格、更に遺物から集落の継続時期について触れてゆくこととする。

１．建物群の分析

今回の調査ではＡ～Ｆ地区において総計96棟の建物及び３基の柵列を復元した。

建物はその方位から以下の建物群に分けることが可能である。

Ａ群　建物の軸方位をN10°Ｅ前後にとるもの

Ｂ群　建物の軸方位をN20°Ｅ前後(主として15°寄り)にとるもの

Ｃ群　建物の軸方位をN25°Ｅ前後にとるもの

Ｄ群　建物の軸方位をN30°Ｅ前後にとるもの

Ｅ群　建物の軸方位をN35°Ｅ前後にとるもの

Ｆ群　建物の軸方位をN40°Ｅ前後にとるもの

Ｇ群　建物の軸方位をN50°Ｅ前後にとるもの

Ｈ群　建物の軸方位をN70°Ｅ(N20°Ｗ)前後にとるもの

Ｉ群　建物の軸方位をN85°Ｅ(N10°Ｗ)前後にとるもの

以上の分類をもとに各地区における建物群の変遷を検討する。

２．Ａ・Ｂ地区の建物群

Ａ・Ｂ地区では、掘立柱建物33棟を復元しており、29棟が総柱建物である。

Ａ群－SB007Ａ

Ｂ群－SB006Ａ

Ｃ群－SB001Ａ・SB002Ａ・SB003Ａ・SB005Ａ・SB008Ａ・SB009Ａ・SB002Ｂ・SB004Ｂ・SB007Ｂ・SB011Ｂ・SB013Ｂ・SB019Ｂ

Ｄ群－SB004Ａ・SB001Ｂ・SB003Ｂ・SB005Ｂ・SB006Ｂ・SB008Ｂ・SB009Ｂ・SB010Ｂ・SB012Ｂ・SB014Ｂ・SB015Ｂ・SB017Ｂ・SB018Ｂ・SB020Ｂ・SB021Ｂ・SB022Ｂ

Ｅ群－SB023Ｂ・SB024Ｂ

Ｆ群－SB016Ｂ

以上の分類から、建物はＣ・Ｄ群に分類されるものが多く、他は極めて少ないことが分かる。

以下、建物の先後関係・柱穴の出土遺物の時期を参考に各群の時期について考察する。

Ｃ群のSB02BがⅡ期～Ⅲ期にかけて出現し、Ⅲ期にはＣ群のSB011BやSB013B、Ｄ群のSB005B・SB017B、Ｅ群のSB024Bなどが出現する。Ⅳ期にはＤ群のSB022B、Ｅ群のSB023Bが出現するがその他の群を含めⅣ期と確定できる建物はない。

各時期の建物の床面積を見ると、Ⅱ期ではSB002Bが61.64m²、Ⅲ期ではSB005Bの73.00m²、Ⅳ期ではSB022Bの52.08m²が大きく、それぞれが中心的建物であったと考えられる。

建物に復元した遺物以外の柱穴・土坑あるいは包含層からＡ・Ｂ地区の時期を考えた場合、Ⅲ期を中心にⅡ期～Ⅳ期の遺物が多く、Ⅳ期ではSK130B・SK161B・SK537BはⅣ期の土坑と考えられる。

また、Ⅰ期・Ⅴ期・Ⅶ期の遺物が極少量出土している。

集落の形成はⅡ期に始まりⅣ期までで終息したと考えられる。

３．Ｄ地区の建物群

Ｄ地区では、掘立柱建物19棟を復元しており、18棟が総柱建物である。

Ａ群－SB003Ｄ

Ｂ群－SB001D・SB002D・SB006D・SB009D・SB014D

Ｃ群－SB007D・SB008D・SB011D・SB012D・SB013D

Ｄ群－SB004D・SB005D・SB015D・SB016D・SB017D・SB018D・SB019D

Ｆ群－SB010D

以上の分類から、建物はＢ・Ｃ・Ｄ群に分類されるものが多く、他は極めて少ないことが分かる。

以下、建物の先後関係・柱穴の出土遺物の時期を参考に各群の時期について考察する。

Ⅱ期にはＡ群のSB003D、Ｂ群のSB009Dが出現し、少し遅れてＣ群のSB008D、Ⅲ期のＣ群SB007Dが出現する。

SB003Dは床面積128.26m²、SB008Dは床面積188.16m²と大きく、それぞれが中心的建物であったと考えられる。

Ｄ地区では柱穴から建物の時期を決定することが難しく、建物群の多くを占めるＤ群については時期を決定する資料を持たない。但し、Ｄ群SB005DはⅡ期に入るＡ群のSB003Dに切られており、Ⅱ期もしくはそれより古くＤ群の建物が存在した可能性も考えられる。

それは、Ｄ地区の時期を概観した場合、建物に復元できない柱穴からは、Ⅱ期の遺物の出土が多く、SK154D・SK213D・SK226D・SF187D・SK103D・SS108D・SS007DなどⅡ期の遺構が大半を占めており（墓ST215Dもまた Ⅱ期～Ⅲ期にかけての副葬品を持っている。）、Ｄ地区では盛期がⅡ期にあったことが確実と考えられるからで、Ｄ群の建物の大半はⅡ期に建てられた可能性が高いと考えられるのである。

加えて包含層出土の遺物の時期は、Ⅱ期に入る遺物が圧倒的に多くⅢ期に入る遺物は極少ない。このことからもＤ地区ではⅡ期に急速に集落が発展し、Ⅲ期に入って急速に衰微した可能性が考えられる。

また、Ⅰ期の遺物が出土しており、Ⅱ期の集落の萌芽がⅠ期に遡る可能性もある。

Ｄ地区ではⅣ期・Ⅴ期の遺構・遺物は乏しくⅥ期に入ってＦ群SB010Dが出現する。この建物はＤ地区内では前代からの継続性はなく。次に述べるＥ・Ｆ地区の遺構と関連すると考えられる。

第６表　田ノ口遺跡掘立柱建物・柵一覧(1)

遺構名	建物形式	規模		床面積(㎡)	軸方位	時期	備考
		桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)				
A地区							
SB001A	総柱建物	3×3以上	5.8×6.35	36.83以上	N25°E	Ⅲ期	C群
SB002A	総柱建物	3×2以上	9.0×5.7	51.30以上	N25°E		C群
SB003A	総柱建物	3×2	6.5×5.3	34.45	N25°E		C群
SB004A	総柱建物	3×2	6.9×5.25	36.23	N29°E	Ⅲ期	D群
SB005A	総柱建物	2以上×1以上	4.6×2.0	9.20以上	N26°E	Ⅱ期カ	C群
SB006A		2以上×1以上	3.4×—		N17°E		B群
SB007A		1×1	1.4×2.2	3.08	N12°E		A群
SB008A		1以上×2以上	2.5×3.7	9.25以上	N25°E		C群
SB009A		2×2	5.1×4.2	21.42	N23°E		C群
SA010A	柵列	東西2	3.6		N28°E		D群
B地区							
SB001B	総柱建物	3以上×3	6.4×6.3	40.32以上	N30°E		D群
SB002B	総柱建物	2×4	6.7×9.2	61.64	N27°E	Ⅱ～Ⅲ期	C群
SB003B	総柱建物	2×2以上	5.5×4.8	26.40以上	N28°E	Ⅲ期	D群
SB004B	総柱建物	1以上×3以上	2.6×6.9	17.94以上	N26°E		C群
SB005B	総柱建物	3×4	7.3×10.0	73.00	N28°E	Ⅲ期	D群
SB006B	総柱建物	2×3	4.4×7.2	31.68	N30°E		D群
SB007B	総柱建物	3×2	8.0×5.4	43.20	N27°E		C群
SB008B	総柱建物	3×2	6.8×5.5	37.40	N32°E	Ⅲ期	D群
SB009B	総柱建物	2×3	2.8×3.1	8.68	N29°E	Ⅲ期	D群
SB010B	総柱建物	2×4	4.5×8.7	39.15	N30°E		D群
SB011B	総柱建物	3×4	7.0×8.0	56.00	N22°E	Ⅲ期	C群
SB012B	総柱建物	2×3	4.6×6.3	28.98	N28°E		D群
SB013B	総柱建物	2×3	5.1×7.3	37.23	N26°E		C群
SB014B	総柱建物	2×3	4.5×6.5	29.25	N28°E		D群
SB015B	総柱建物	3×3	7.0×8.0	56.00	N32°E	Ⅲ期	D群
SB016B	総柱建物	3×3	7.35×6.9	50.72	N40°E	Ⅲ期	F群
SB017B	総柱建物	5×3	10.2×5.8	59.16	N32°E		D群
SB018B	総柱建物	1以上×3以上	2.2×6.0	13.20以上	N30°E		D群
SB019B	総柱建物	3以上×2以上	6.7×7.2	48.24以上	N27°E		C群
SB020B	総柱建物	3×3	7.2×6.9	49.68	N32°E		D群
SB021B	総柱建物	2×3	4.0×5.4	21.60	N30°E		D群
SB022B	総柱建物	3×4	6.2×8.4	52.08	N29°E	Ⅳ期	D群
SB023B	総柱建物	3×4	4.9×8.1	39.69	N34°E	Ⅳ期	E群
SB024B	総柱建物	2×3	4.1×6.2	25.42	N35°E	Ⅲ期	E群
D地区							
SB001D	総柱建物	3×2	8.3×5.4	44.82	N18°E		B群
SB002D	総柱建物	4×4	10.8×9.9	106.92	N17°E		B群
SB003D	総柱建物	4×4	12.1×10.6	128.26	N14°E	Ⅱ期	A群
SB004D	総柱建物	2×3	4.9×6.6	32.34	N28°E		D群
SB005D	総柱建物	2×3	6.1×6.7	40.87	N28°E		D群
SB006D	総柱建物	1以上×3	2.1×7.8	16.38以上	N17°E		B群
SB007D	総柱建物	4×3	10.8×8.0	86.40	N23°E	Ⅲ期	C群
SB008D	総柱建物	5×5	14.7×12.8	188.16	N24°E	Ⅱ～Ⅲ期	C群
SB009D	総柱建物	4×3	11.4×7.8	88.92	N19°E	Ⅱ期	B群
SB010D	総柱建物	3×5	6.2×10.0	62.00	N41°E	Ⅵ期	F群
SB011D	総柱建物	4×3	10.6×7.0	74.20	N24°E	Ⅱ期カ	C群
SB012D	総柱建物	2以上×5	5.0×10.3	51.50以上	N24°E		C群
SB013D		1以上×3	—×8.0		N27°E		C群
SB014D	総柱建物	1以上×2	1.9×5.0	9.50以上	N17°E		B群
SB015D	総柱建物	2以上×1以上	4.3×2.2	9.46以上	N29°E		D群
SB016D	総柱建物	3×2	9.3×4.5	41.85	N28°E		D群
SB017D	総柱建物	3×4	8.4×9.7	81.48	N30°E		D群
SB018D	総柱建物	3×4	10.2×11.9	121.38	N30°E		D群
SB019D	総柱建物	2×3	5.5×7.0	38.50	N28°E		D群

第６表　田ノ口遺跡掘立柱建物・柵一覧(2)

遺構名	建物形式	規模		床面積(㎡)	軸方位	時期	備考
		桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)				
E地区							
SB001E	側柱建物	3×2	6.8×4.5	30.60	N55°E		G群
SB002E	側柱建物	2×2	5.0×4.8	24.00	N39°E		F群
SB003E	総柱建物	5×2	7.7×3.7	28.49	N62°W		D群
SB004E	側柱建物	3×1	6.3×3.2	22.60	N62°W		D群
SB005E	総柱建物	4以上×4	6.1以上×5.2	31.72以上	N64°W		C群
SB006E	側柱建物	3×3	5.4×4.5	24.30	N79°W		A群
SB007E	側柱建物	3×2	5.6×4.0	22.40	N23°E		C群
SB008E		5×2	5.3×5.0	26.50	N52°W		F群
SB009E	総柱建物	4×3	5.9×5.1	30.09	N52°W		F群
SB010E	側柱建物	4×3	7.4×3.0	22.20	N32°E		D群
SB011E	側柱建物	2×2	6.0×4.3	25.80	N60°W		D群
SB012E	側柱建物	2×3	6.0×5.5	33.00	N60°W		D群
SB013E	総柱建物	5×4	10.5×8.2	86.10	N83°E		I群
SB014E	側柱建物	6×2	11.5×2.9	33.35	N70°W		B群
SB015E	側柱建物	2×1	7.7×5.0	38.50	N65°W		C群
SB016E		2×2	4.7×4.1	19.27	N22°E		C群
SB017E	総柱建物	3×2	5.8×4.2	24.36	N62°W		D群
SB018E	側柱建物	3×2	5.3×3.9	20.67	N87°E		I群
SB019E	総柱建物	3×2	6.6×4.8	31.68	N60°W		D群
SB020E	側柱建物	3×2	7.4×5.5	40.70	N61°W		D群
SB021E	側柱建物	3×1	8.5×3.1	27.20	N31°E		D群
SB022E	総柱建物	3×3	7.0×6.5	45.50	N28°E		D群
SB023E	総柱建物	2×2	5.2×4.2	21.84	N68°W	Ⅳ期	B群
SB024E	総柱建物	4×3	9.6×7.0	67.20	N21°E	Ⅲ期	B群
SB025E	総柱建物	4×3	9.3×7.8	72.54	N20°E		B群
SB026E		4×4	5.7×5.4	30.78	N70°W	Ⅳ期	B群
SB027E	総柱建物	2×2	4.5×4.5	20.25	N18°E	Ⅲ期	B群
SB028E	総柱建物	4×4	9.1×8.2	74.62	N19°E	Ⅲ期	B群
SB029E	総柱建物	4×3	8.55×7.0	59.85	N19°E	Ⅲ期	B群
SB030E	側柱建物	4×1以上	9.0×1.65以上	14.85以上	N23°E		C群
SB031E	側柱建物	3×1	4.5×2.0	9.00	N66°W		C群
SB032E	側柱建物	3以上×2	4.5以上×3.6	16.20以上	N80°E		A群
SB033E	側柱建物	1×2	3.0×4.2	12.60	N66°W		C群
SA001E	柵列	全長5	全長7.0		N59°W		D群
SA002E	柵列	全長4	全長7.6		N42°W		G群
F地区							
SB034F	総柱建物	4×3	8.2×6.0	49.20	N71°E	Ⅳ期	H群
SB035F	側柱建物	3×2	5.9×3.4	20.06	N71°W		B群
SB036F	総柱建物	3×3	6.2×5.4	33.48	N17°E		B群
SB037F	総柱建物	3×2	6.0×3.5	21.00	N70°E		H群
SB038F	総柱建物	2×3	4.0×4.4	17.60	N70°W		B群
SB039F		7×2	8.8×3.4	29.92	N21°E		B群
SB040F	側柱建物	1×2	3.5×3.1	10.85	N26°E		C群
SB041F	側柱建物	4×2	6.6×4.4	29.04	N6°W		I群
SB042F	総柱建物	2以上×2	5.0以上×3.8	19.00以上	N8°W		I群
SB043F	総柱建物	2×2	3.6×3.2	11.52	N22°W		H群
SB044F	側柱建物	2以上×2	3.2以上×3.6	11.52以上	N56°E		G群

４．Ｅ・Ｆ地区の建物群

Ｅ・Ｆ地区では、掘立柱建物44棟を復元しており、19棟が総柱建物である。

Ａ群－SB006E・SB032E

Ｂ群－SB014E・SB023E・SB024E・SB025E・SB026E・SB027E・SB028E・SB029E・SB035F・SB036F・SB038F・SB039F

Ｃ群－SB005E・SB007E・SB015E・SB016E・SB030E・SB031E・SB033E・SB040F

Ｄ群－SB003E・SB004E・SB010E・SB011E・SB012E・SB017E・SB019E・SB020E・SB021E・SB022E

Ｆ群－SB002E・SB008E・SB009E

Ｇ群－SB001E・SB044F

Ｈ群－SB034F・SB037F・SB043F

Ｉ群－SB018E・SB041F・SB042F

以上の分類から、建物はＢ・Ｃ・Ｄ群に分類されるものが多く、他は極めて少ないことが分かる。但し、少数ながら、Ｇ・Ｈ・Ｉ群というＡ～Ｄ地区では出現しない建物群が存在する。

Ｅ・Ｆ地区では柱穴から建物の時期を決定することが難しく、時期が特定できた建物は６棟にとどまる。これらは何れもＢ群に属するもので、Ⅲ期にはSB024E・SB027E・SB028E・SB029Eが存在し、Ⅳ期にはＢ群のSB023E・SB026Eに加えＨ群のSB034Fが出現する。

検出できた建物はⅢ期ではSB028Eが床面積74.62m²、Ⅳ期ではSB034Fが床面積49.20m²を測り、Ａ・Ｂ地区とほぼ同規模の建物が存在したと考えられる。

Ｅ・Ｆ地区の時期は、建物以外の遺構ではSK023EからⅡ期の黒色土器が出土している以外にⅡ期に遡る遺構はなく、包含層の遺物からもⅠ期の須恵器椀が１点(640)出土する他はない。また、建物に復元できない柱穴や土坑からもⅢ期・Ⅳ期更にⅥ期の遺物が出土している。

また、時期が確定できない建物群のうち、Ｃ群・Ｄ群については棟数が多く、また多くの遺物がⅢ～Ⅳ期に属している点から見て、Ⅲ期～Ⅳ期に建てられた可能性が高いと考えられる。

以上の点からＥ・Ｆ地区ではⅢ期に入って集落が形成され、Ⅳ期まで継続する。Ⅴ期には遺物は若干出土するが、遺構は乏しく、Ⅵ期に入って再び建物が建てられたと考えられる。

しかし、Ｆ地区の水田部分からはⅣ期～Ⅶ期にかけての遺物が出土しており、Ⅴ期にも集落が存続し耕作されていた可能性は残る。

５．遺跡の変遷

今回の調査結果では、各地区での建物群の時期については一様ではない可能性が残るが、概ねＣ・Ｄ群がⅡ期からⅢ期を中心に一部Ⅳ期にかかること、更にＢ群がⅡ期・Ⅲ期・Ⅳ期に跨ること、Ｅ群がⅣ期にあること、Ｆ群がⅥ期に下る可能性が高いことが指摘できる。

また、Ｅ・Ｆ地区のみに出現するＧ・Ｈ・Ｉ群については、Ｈ群がⅣ期に出現することから、概ね集落の衰微する時期に出現する可能性が高いことが指摘できる。

各地区の建物の変遷から推して、Ａ・Ｂ地区及びＤ地区ではⅡ期に集落の形成が本格的に始まり、Ｄ地区では大型の掘立柱建物が出現する。Ⅲ期に入ってＡ・Ｂ地区では集落は成長するが、Ｄ地区では衰退し、代わって東隣のＥ・Ｆ地区において建物群が形成され始め、Ａ・Ｂ地区、Ｅ・Ｆ地区ともにⅣ期

に入って衰退したと捉えることができる。

ここでは、遺物から導きだされた遺跡の時期区分をもとに建物に加え、墓・経塚・水田を加えた田ノ口遺跡の古代末～近世の変遷をまとめておく。

Ⅰ期(10世紀～11世紀)

Ｄ地区周辺に緑釉陶器など官衙的性格をもつ遺構が存在した可能性がある。

Ⅱ期(11世紀中頃～12世紀前半)

Ａ・Ｂ地区及びＤ地区では集落の形成が本格的に始まる。

Ｄ地区では大型建物が出現する。

Ⅲ期(12世紀後半～13世紀中頃)

Ｄ地区ではSB003Dに伴う屋敷墓が造られる。

Ｄ地区では集落が衰退してゆく。

Ｅ・Ｆ地区ではⅢ期に入って集落が形成され始める。

Ⅳ期(13世紀後半～14世紀中頃)

Ｇ地区において経塚・中世墓地が営まれる。

Ａ・Ｂ地区、Ｅ・Ｆ地区において集落が営まれる。

Ｄ地区では集落が営まれなくなる。

Ｆ地区の旧河道が洪水砂で埋没する。

Ⅴ期(14世紀後半～15世紀中頃)

Ａ・Ｂ地区において若干生活痕跡がある。

Ｆ地区において谷水田が耕作される。

Ⅵ期(15世紀後半～16世紀末)

Ｄ・Ｅ・Ｆ地区において小規模な集落が形成される。

Ｆ地区において谷水田が耕作される。

Ⅶ期(近世　17～18世紀)

Ａ～Ｆ地区が水田化する。

６．おわりに

今回の調査では、遠阪谷に存在する、扇状地に展開した大規模な集落遺跡を調査することができた。

青垣町域での律令期に出現する集落遺跡の例として、田ノ口遺跡のほか、土井遺跡・山垣地区の城ノ腰遺跡、中佐治地区の平野遺跡があげられる。遺跡の規模の大小はあるが、立地の点からは、その何れもが、大規模な扇状地を避け、隣接する山麓に開いた小規模な扇状地にある点は興味深い。規模の大きな扇状地は８世紀代に至っても安定せず、特に遠阪谷は急峻な山に囲まれ、洪水起源の土砂が活発に供給されていたために、居住地としては適さなかったことがその要因と考えられる。

大規模な扇状地が安定し開発されるのは中世を待たなければならず、積極的な土地利用は段丘化が終了した遠阪川周辺の低地から(例えば山垣館周辺)と捉えることもできよう。

例えば、城ノ腰遺跡が存在するヲニ山の山麓には、古代の遺物が採取される小規模な扇状地がもう１箇所在する。大規模な扇状地を挟み、山垣城を西側にみる地点にある無名の古代遺物散布地は氷上郡埋蔵文化財分布調査(1996年)によってその存在が明らかとなったが、城ノ腰遺跡と同様の小規模な律令期

の集落が存在する可能性は高い。少し推測を広げてみるならば、遠阪谷に存在した律令期の集落遺跡は、山麓に点在する小規模な扇状地に立地しており、その多くが複合遺跡として、前代からの立地を引き継いで存在していると捉えることができる。これらの遺跡は一様に（途中で途絶える期間があっても）10世紀代まで存続し、廃絶あるいは10世紀を境に拡大してゆくのである。

今回報告した田ノ口遺跡や土井遺跡は10世紀代－Ⅰ期に入って拡大、あるいは遺跡の始まりを迎え、中世へと継続してゆく遺跡であり、これらの遺跡は佐治郷の再開発に関わった開発領主や有力農民（田堵や富豪層）の住居・集落と考えられる。

この様な有力な集落に対して小規模な、城ノ腰遺跡の様な集落は有力者に従属する立場となり、吸収されるか、廃絶して早い時期に廃絶する。

例えば、初期に官衙的な遺物を伴う平野遺跡は、城ノ腰遺跡に比べ規模が大きく、中世に入る直前まで続くが、最終的には廃絶する集落と捉えられるのである。

田ノ口遺跡は、復元できた建物が100棟近くあり大規模な古代・中世集落である。遺構・遺物の考察から、集落の本格的な稼働は11世紀中頃から12世紀中頃－Ⅱ期と考えられ、そのピークはⅡ期から12世紀後半から13世紀中頃－Ⅲ期であることが明らかとなった。

この田ノ口遺跡の性格については、立地・搬入される遺物から「宿」の可能性が調査時から指摘されていた。近接する地点に古代山陰道の佐治駅家の存在を考えた場合、田ノ口遺跡の役割を駅家廃絶後の「宿」と捉えることも不可能ではない。今後考慮すべき視点の一つであろう。

次に建物の規模から集落の性格を推測すると、田ノ口遺跡が構成する集落の中でもＤ地区では床面積約107m²のSB002Dや床面積188m²のSB008Dや床面積121m²のSB018Dといった非常に大きな総柱建物が各時期に出現している。広瀬和雄・橘田正徳の研究を考慮するならば、そこからは、非常に有力な（郷全体に影響力が及ぶ）在地領主クラスの存在が想定できる。

また、在地領主クラスの存在は、SB003Dと重複する屋敷墓ST215Dの存在からも考えることができる。丹波地域における屋敷墓の導入は、これまでの研究から造墓主体が在地領主層であり、導入時期がおおよそ11世紀後半から12世紀ということが明らかとなっている。ST215Dの時期はⅡ期もしくはⅢ期であり、齟齬をきたさない。

また、屋敷墓を構築した在地領主の多くは次の段階に一族墓を経塚とともに営んでいる例がある。その点についても、今回の調査例はその標識的な例として捉えることができる。

大型建物をもつＤ地区に対して、Ａ・Ｂ地区では各時期に床面積が60～70m²前後の建物が１棟ずつ出現しており、建物規模の点からは有力百姓クラスを考えることができる。

Ｅ・Ｆ地区では70～80m²の建物が建て替えを伴って出現しているが、集落全体では総柱建物が少なく、側柱建物が多い点はＡ・Ｂ地区よりも更に規模の小さい集落の存在が想定される。

Ｅ・Ｆ地区の棟数が多い点については、遺跡の継続期間が長く、Ｇ・Ｈ・Ｉ群といった他の地区では存在しない建物群が、Ａ～Ｄ地区が衰弱した後において出現し、集落が継続したために起こった可能性も残る。

さて、この集落は13世紀後半から14世紀中頃（Ⅳ期）を境に急速に衰退するが、その原因として２つの可能性を指摘して本稿の終わりとしたい。

１つは、西遷御家人足立氏の佐治郷への登場である。時期的に符合しており、今後更に考察を加えなければならない事柄である。

今１つは、遠坂川の段丘化である。今回、青木哲哉氏に考察をいただいているが、Ｆ地区の調査結果から、遠坂川に流れ込むＦ地区の小河川が、13世紀代のおそらく後半、Ⅳ期を境に埋没し以降水田化してゆく状況が明らかとなっている。

水田化した時期の遺構は、Ｅ・Ｆ地区に限定されていった可能性が高く、Ｇ・Ｈ・Ｉ群といった建物群が水田に伴う小規模な集落として機能していた可能性が考えられるのである。

今回明らかとなった段丘化は少なくとも遠坂地区における水利灌漑システムに大きな影響をもたらしたと考えられ、用水路の再構築や労働力集約に伴う集村化の必要といった現象を含め、田ノ口遺跡の衰退に影響した可能性が考えられるのではないだろうか。これは以後の課題としておきたい。

Ⅵ期に出現するＦ群の建物は背後の田ノ口城跡の存在を含め在地勢力足立氏との関わりが考えられる。周辺には同時代の足立(堀)正利の位牌(位牌は近世のもの)を守る平等寺の存在や同氏に由来すると考えられる「堀殿」の小字名が存在しており足立氏の当地への影響の強さが考古資料以外からも感じとることができるのである。

参考文献

橘田正徳　1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会

西口圭介　2009 「近畿の中世墓」『日本の中世墓』 高志書院

広瀬和雄　1986 「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学６ 変化と画期』 岩波書店

第３節　田ノ口遺跡Ｇ地区のまとめ

１．Ｇ－１区の検討

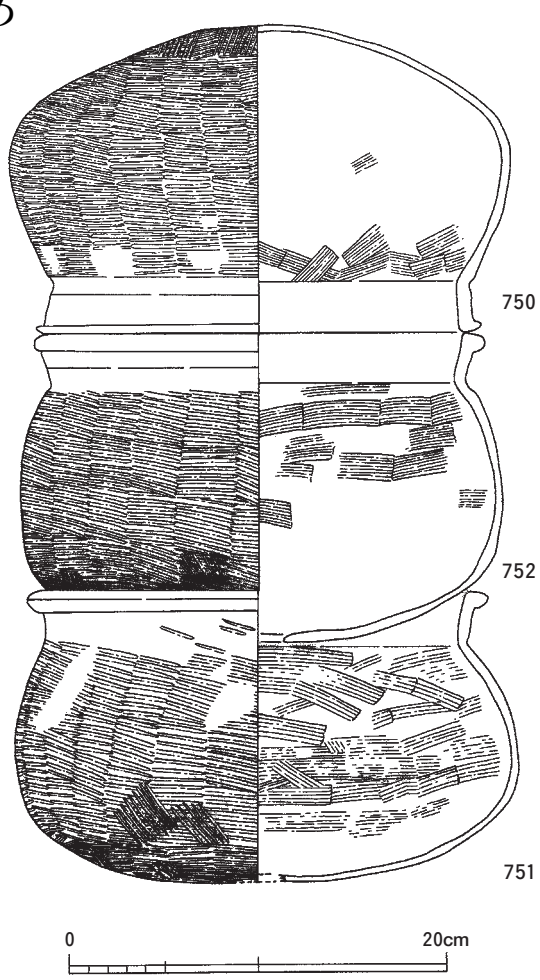
当地区では、土坑内から土師器の塝が３個体(750～752)出土した。３個体の塝はいずれも同タイプに分類されるもので、３個体が押し潰された状態で出土している。

これら３個体の塝をその出土状況をもとに当初の状態を復元すると、第23図のようになる。２個の塝(751・752)を正位に重ね、さらにその上に塝(750)が蓋として重ねられている。また、２段に重ねられた塝のうち、上段の塝(752)の底部には穿孔が認められる。

なお、これら３段に重ねられた塝の周囲は、礫により固定されていたものと考えられる。

上記のように復元される塝については、骨蔵器として使用されたものと考えられる。しかし、上記のように復元される類例は管見の限り認められない。

なお、この骨蔵器の時期については、土師器の塝の特徴から､14世紀前半に位置付けられる｡これは、後述するＧ－２区と時期的に同時期である。



第23図　骨蔵器の復元

２．Ｇ－２区の検討

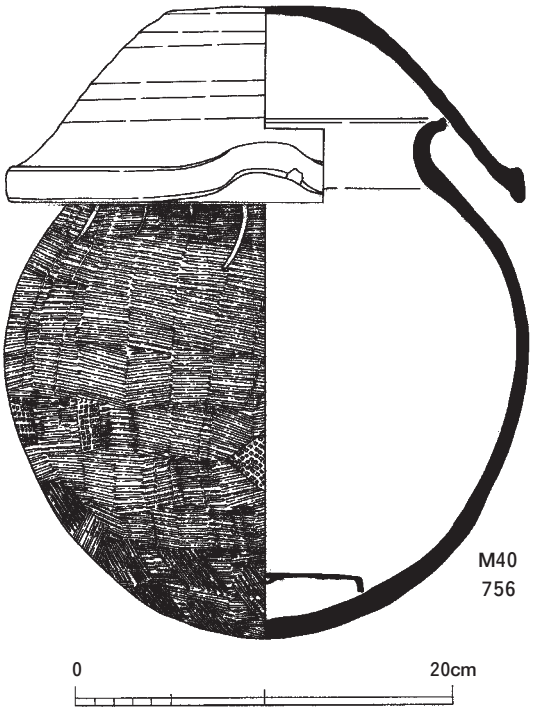
⑴遺構の性格

当地区で検出した遺構は、内側に和鏡が入れられた須恵器甕の存在から、経塚と考えられる。須恵器甕を経筒に、捏鉢をその蓋に転用したものである(第24図)。須恵器甕・捏鉢ともに東播系に分類されるもので、その特徴から14世紀前半に位置付けられる。

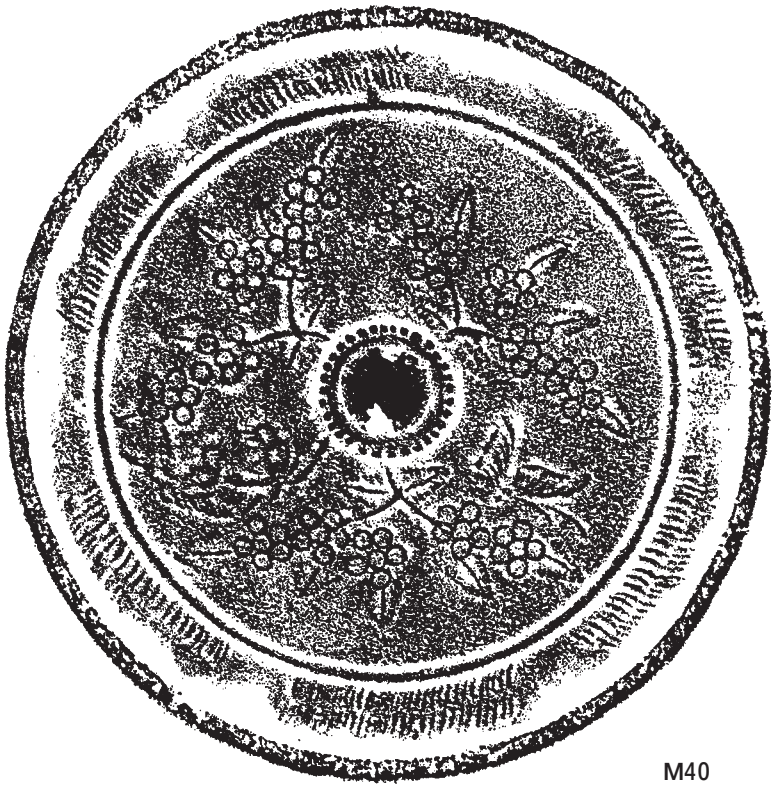
⑵和鏡について

須恵器甕内から出土した和鏡(第25図)は、山吹蝶鳥鏡に分類されるもので、副納品として入れられたものと考えられる。この和鏡については、以下の特徴が認められる(第25図)。

①鳥が左下に描かれているが、この構図は13世紀後半に確立するものである。②水波文が形



第24図　経塚容器の復元



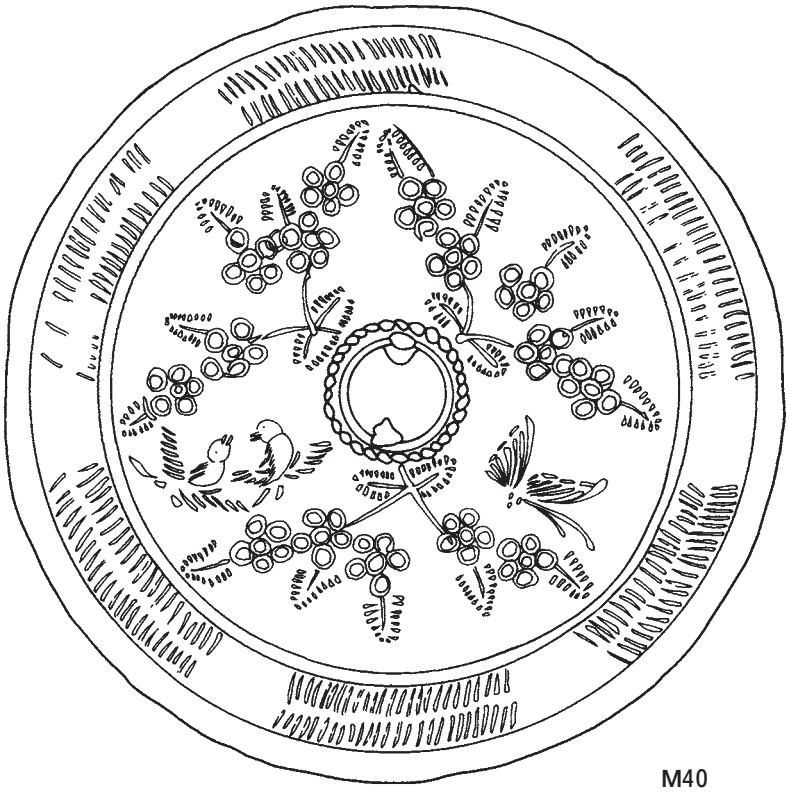
第25図　出土和鏡

骸化している、つまり波表現の幅が狭まっている。これは、13世紀末に見られる特徴である。③鈕が直立鈕縁である。つまり、鏡面から鈕への立ち上がりが急である。花蕊座鈕に分類されるもので、蕊頭が連珠文化している。つまり、縦線がない。以上の特徴から、13世紀末～14世紀初頭と考えられる。④蝶が大きく表現されているが、これは13世紀後半～14世紀にみられるものである。⑤山吹を小ぶりな輪郭で表現し、折枝散らし文構図となっている。これは11世紀後半以降にみられる特徴である。

以上の点から、13世紀末～14世紀初頭に位置付けられるものと考えられる。なお、構図には古い要素が認められるが、天地がある構図で、これは新しい要素と考えられる。

⑶まとめ

このように、経筒に転用された須恵器甕・捏鉢、中に収められた和鏡ともに、ほぼ同様の年代観を示すものである。したがって、当地区で検出した経塚の年代は、14世紀前半に位置付けることができる。



第26図　和鏡の復元

この年代は、丹波においては最終末に位置付けられるものと考えられる。

ところで、今回報告する経塚については、杉原和雄の経塚分類によると、土坑内に須恵器甕を容器として据えるＥ類型に該当するものである。Ｅ類型のなかでも、須恵器甕を容器とし須恵器捏鉢で蓋をするタイプの類例としては、江ノ上経塚(兵庫県加西市)・大道寺遺跡(京都府福知山市)・薬師前遺跡(兵庫県朝来市)などがあげられる。ただし、いずれも本遺跡例よりも古く位置付けられている。

註

⑴杉原和雄「経塚と墳墓－丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について－」『考古学雑誌』第74巻第４号　1989

⑵堤圭三郎他「豊富谷丘陵遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第１冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983

⑶鎌木義昌・亀田修一・白石　純『播磨江ノ上経塚発掘調査報告書』瀬戸内考古学研究所　1988

⑷山上雅弘『薬師前遺跡』兵庫県教育委員会　2002

なお、和鏡の記述は、京都国立博物館久保智康氏の御教示によるものである。

第 4 節　田ノ口遺跡の総括

1．田ノ口遺跡の概要

田ノ口遺跡は丹波市青垣町遠阪字田ノ口に所在する。加古川支流の遠阪川の急峻な谷間に立地している。このような谷間にありながらも、比較的日当たりの良好な場所に田ノ口遺跡は立地している。標高は180m～207m を測る。

発掘調査は一般国道483号春日和田山道路Ⅰの建設に伴い、平成13年度・14年度・15年度・16年度に本発掘調査を実施した。A地区・B地区・C地区・D地区・E地区・F地区・G地区の大きく 7 地区に分けられる。

各地区の調査概要は第 3 章で述べているので、ここでは田ノ口遺跡の時間的変遷をまとめて、総括とする。田ノ口遺跡からは縄文時代後期から近世にわたる幅広い遺物が出土している。

以下、時代ごとに概要を述べる。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてと飛鳥時代から平安時代前期にかけては、遺物も遺構も存在していない。

縄文時代後期

E地区の下層谷部で北白川下層式の土器が僅かに出土している。

縄文時代晩期

E地区の下層谷部で突帯文土器が出土しているが、突帯が退化しているため、弥生時代前期の土器と共伴する可能性がある。

弥生時代前期

E地区の下層谷部で前期後半もしくは中期初頭の土器が僅かに出土している。

古墳時代前期

B地区の SB201B とそれに伴う SF111B が存在する。

E地区の竪穴住居 SH001E・SH002E は遺物がほとんど無いが、この時期に位置付けられる。

古墳時代中期

D地区の土坑 SK207D が存在する。

古墳時代後期

E地区で須恵器が出土している。

平安時代中期（古代・中世Ⅰ期）

D地区で緑釉陶器などが出土しているが、この時期に確実に位置付けられる建物は不明である。

平安時代後期（古代・中世Ⅱ期）

A・B・D地区では新たに掘立柱建物が出現し、以後継続して掘立柱建物が作られ続ける。

鎌倉時代前期（古代・中世Ⅲ期）

E・F地区では新たに掘立柱建物が出現し、A・B・D地区では継続して掘立柱建物が存在する。D地区では掘立柱建物の周囲に鍛冶炉群が存在し、屋敷墓 ST215D が作られる。

鎌倉時代後期（古代・中世Ⅳ期）

A・B・E・F地区の掘立柱建物群が存在するが、D地区では作られなくなる。北側の尾根上のG地区において経塚 SX001G、墓 ST001G が営まれる。

室町時代（古代・中世Ⅴ期）

Ａ・Ｂ地区において遺物が出土しているが、この時期に確実に位置付けられる建物は不明である。Ｆ地区の谷地形で水田が耕作される。

戦国・安土桃山時代（古代・中世Ⅵ期）

Ｄ地区のSD010Dをはじめとして Ｄ・Ｅ・Ｆ地区において掘立柱建物が僅かに存在する。

このように、田ノ口遺跡は丹波地域最西端にあり、加古川水系最上部に位置付けられる遺跡である。縄文時代から近世初頭にかけて幅広い遺物・遺構が出土している。

２．田ノ口遺跡周辺の遺跡動態

以上、田ノ口遺跡の時間的変遷を見てきたが、田ノ口遺跡周辺の遺跡も含めて遺跡の動態をまとめてみる。対象とするのは遠阪川上流にある、調査が行われた、詳細がわかる遺跡である。田ノ口遺跡の他には土井遺跡と伝平等寺跡が該当する。ただし、路線部分のみの調査のため、周囲に遺跡が広がっているが詳細は不明である。

一番古い痕跡は、土井遺跡で出土した縄文時代中期後半の土器である。縄文時代後期や晩期になると田ノ口遺跡Ｅ地区と土井遺跡で土器が出土しているが、生活に関連する遺構は認められない。唯一、土井遺跡で陥穴を検出しているが、遺物が出土していないため、時期は不明である。

弥生時代になると、田ノ口遺跡Ｅ地区で前期から中期初頭にかけての土器が出土しているが、遺構は認められない。中期後半には土井遺跡で竪穴住居や土坑と木棺墓を検出している。

弥生時代後期は遺構・遺物ともに出土していない。

古墳時代前期は田ノ口遺跡Ｂ地区とＥ地区で遺構を検出している。Ｂ地区では鍛冶炉を伴う掘立柱建物を検出し、Ｅ地区では竪穴住居を調査した。古墳時代中期はＤ地区で土坑を検出しているのみである。古墳時代後期は土井遺跡で竪穴住居を検出している。田ノ口遺跡ではＥ地区で遺物が僅かに出土している。

奈良時代に土井遺跡で竪穴住居や掘立柱建物を検出しており、以降小規模ながら平安時代中期まで継続して掘立柱建物が作り続けられる。奈良時代から平安時代前期には田ノ口遺跡は遺構・遺物ともに空白である。

平安時代後期には土井遺跡では掘立柱建物が建てられなくなり、土坑のみになる。変わって、田ノ口遺跡Ａ・Ｂ地区やＤ地区で掘立柱建物が建てられるようになる。以後、鎌倉時代後期に至るまで田ノ口遺跡内で中心を移動しながら、継続して掘立柱建物が建てられている。鎌倉時代前期には建物に加えてＤ地区で屋敷墓ST215Dが存在するとともに、Ｄ地区で鍛冶遺構が展開する。鎌倉時代後期には尾根上のＤ地区で墓ST001Gと経塚SX001Gを検出している。建物は鎌倉時代後期までで、一旦途絶える。

室町時代にはＦ地区で水田を検出している以外は、僅かに遺物が出土しているが、居住にかかる遺構は検出していない。

戦国時代から安土桃山時代にかけてはＤ地区とＥ地区で遺構を検出している。Ｄ地区では掘立柱建物や土坑が存在しており、輸入磁器の出土量も多い。Ｅ地区でも掘立柱建物を検出しており、Ｆ地区は谷地形に水田が存在している。

近世以降は江戸時代初期の土坑を土井遺跡で検出しているが、居住にかかる遺構は検出していない。

第７表　田ノ口遺跡周辺の遺跡動態

	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	奈良	平安前期	平安中期	平安後期	鎌倉前期	鎌倉後期	室町	戦国安土
												Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期
田ノ口遺跡A・B・C							住						住坑	住坑	住坑		
田ノ口遺跡D								坑					住坑	住墓鍛			住坑
田ノ口遺跡E・F							住							住坑	住坑	田	住田
田ノ口遺跡G															墓経		
土井遺跡					住墓坑				住	住	住	住坑	坑				坑
伝平等寺跡													寺				

以上、加古川水系最上流の遠阪谷の遺跡動態を概観してきた。

縄文時代中期から弥生時代中期初頭にかけての遺物は出土しているが、遺構は検出していない。調査区外に存在している可能性がある。弥生時代中期後半には住居と墓が存在しているが、一時的であり前後の弥生時代中期前半や弥生時代後期には遺構・遺物ともに検出していない。

古墳時代前期になると僅かに住居は存在するが疎らであり、中期には土坑のみである。後期になると住居が存在するが、疎らである。古墳時代の集落のあり方としては、遠阪流域の最奥部の古墳が土井遺跡の約１km 下流の堀殿古墳であることから、居住域の中心は平野が開けたやや下流に存在していたと考えられる。

奈良時代から平安時代中期にかけて土井遺跡では継続して住居が存在している。遺跡の南側を通過していた「山陰道」の影響であろう。以後、平安時代後期から鎌倉時代後期にかけては田ノ口遺跡で継続して住居が存在している。平安時代中期から後期にかけては、土井遺跡から田ノ口遺跡に住居が移動しており、土井遺跡と田ノ口遺跡は補完関係を持った遺跡であるといえよう。

室町時代に一旦途絶えていた居住の痕跡は、戦国時代から安土桃山時代にかけて再び出現する。これは田ノ口遺跡の北側の山上に存在する田ノ口城跡に伴うものであると考えられる。

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(1)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
1	11	40	須恵器	鉢	口縁部	2001100	A地区	SB001A	P0008A	(23.6)	3.2+				018
2	11	39	土師器	椀	高台部	2001100	A地区	SB001A	P0010A	―	1.7+	(8.0)			021
3	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB001A	P0010A	(9.7)	1.7+				020
4	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB001A	P0056A	11.8	2.0	4.4			030
5	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB002A	P0003A	8.3	1.3	4.3	―		014
6	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB005A	P0003A	8.1	1.3	4.9	―		015
7	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB005A	P0009A	(6.8)	0.8	(6.2)			019
8	11	39	土師器	椀	口縁部	2001100	A地区	SB007A	P0029A	(12.8)	3.7+				024
9	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB003A	P0070A	6.8	1.2+				032
10	11	39	土師器	鍋	口縁部	2001100	A地区	SB004A	P0030A	(26.5)	2.8+				025
11	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	SB009A	P0045A	(10.8)	1.7	(6.1)			028
12	11	39	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	A地区	P0004A		7.8	1.2	5.3	―		017
13	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	P0004A		8.4	1.4+	―			016
14	11	39	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	A地区	P0062A		6.7	1.4	3.8			031
15	11	39	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	A地区	P0028A		7.8	2.0	2.2			023
16	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	P0047A		(8.8)	1.4+				029
17	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	P0038A		(8.7)	1.8+				027
18	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	P0038A		(9.8)	1.7	(5.1)			026
19	11	39	土師器	皿	破片	2001100	A地区	P0085A		長2.8	幅2.9	厚2.1			033
20	11	40	須恵器	椀	口縁部	2001100	A地区	P0089A		(12.0)	2.2+				034
21	11	40	須恵器	椀	底部	2001100	A地区	P0013A		―	1.6+	6.8			022
22	11	40	青磁	碗	高台部	2001100	A地区	P0046A		―	3.3+	5.6			035
23	11	39	土師器	椀	口縁部	2001100	A地区	包含層		(11.9)	3.8+	―			009
24	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	包含層		(8.9)	1.4	―			006
25	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	包含層		(10.0)	1.6+	―			007
26	11	40	瓦器	椀	底部	2001100	A地区	包含層		―	3.0+	(8.2)	―		001
27	11	40	須恵器	鉢	底部	2001100	A地区	包含層		―	2.1+	(11.0)			005
28	11	40	須恵器	鉢	口縁部	2001100	A地区	包含層		(29.0)	3.8+	―			003
29	11	40	白磁	碗	口縁部	2001100	A地区	包含層		(11.8)	2.2+				008
30	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	撹乱		13.9	2.2+	―			011
31	11	39	土師器	皿	口縁部	2001100	A地区	撹乱		12.8	2.3+	―			012
32	11	40	須恵器	椀	口縁部	2001100	A地区	撹乱		(13.6)	2.7+	―			002
33	11	39	須恵器	鉢	口縁部	2001100	A地区	撹乱		(28.0)	3.0+	―			010
34	11	40	須恵器	甕	口縁部	2001100	A地区	撹乱		(35.0)	5.4+	―			004
35	11	40	白磁	碗	底部	2001100	A地区	撹乱		―	2.2+	7.2			013
36	31	62	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SB003B	P0723B	(9.8)	1.8	(7.0)			067
37	31	63	土師器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SB003B	P0725B	(17.8)	3.3+	―	―		123
38	31	64	瓦器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB003B	P0725B	8.2	1.9+				083
39	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0013B	(7.8)	0.7				060
40	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0278B	(7.8)	1.1+	―			144
41	31	62	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SB002B	P0010B	7.8	1.4	7.2			058
42	31	62	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SB002B	P0010B	8.0	1.5	4.2			057
43	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0013B	9.4	1.5	7.8			061
44	31	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0374B	8.8	1.1+	―			135
45	31	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0278B	11.8	2.3+	―	―		131
46	31	64	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	SB002B	P0010B	16.8	4.0+				059
47	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB008B	P0741B	9.0	1.5	7.4	―		125
48	31	64	黒色土器	椀	底部	2001100	B地区	SB008B	P0037B	―	3.4	4.6			066
49	31	65	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	B地区	SB002B	P0724B	16.4	4.2	6.7	―		129
50	31	65	須恵器	鉢or壺	底部	2001100	B地区	SB008B	P0741B	―	5.1+	8.6	―		124

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(2)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
51	31	4	白磁	碗	底部	2001100	B地区	SB008B	P0037B	—	2.5+	5.9			152
52	31	4	白磁	皿	口縁部	2001100	B地区	SB008B	P0601B	(10.4)	2.2+	—			156
53	31	63	土師器	椀	底部	2001100	B地区	SB005B	P0744B	—	1.2+	9.2			100
54	31	64	瓦器	椀	底部	2001100	B地区	SB005B	P0749B		1.8	6.0	—		092
55	31	65	須恵器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB005B	P0753B	(7.8)	2.2	4.4			143
56	31	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	SB005B	P0748B	(16.2)	3.0+	—	—		127
57	31	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SB005B	P0747B	(30.0)	7.3+	—	—		130
58	31	66	須恵器	壺	口縁部	2001100	B地区	SB005B	P0743B	(23.8)	3.9+	—	—		126
59	31	4	白磁	皿	口縁部	2001100	B地区	SB005B	P0151B	(12.0)	1.1+	—			154
60	31	61	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	SB006B	P0751B	(14.8)	2.8+				046
61	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB006B	P0752B	(12.8)	1.7+	—			136
62	31	74	須恵器	椀	口縁部～体部	2001100	B地区	SB006B	P0753B	(17.4)	4.8+	—			094
63	31	74	須恵器	甕	破片	2001100	B地区	SB006B	P0751B		4.3+				186
64	31	65	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	SB009B	P0491B	(20.8)	4.9+	—			114
65	31	62	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	SB012B	P0552B	(12.8)	2.3	(8.4)	—		122
66	31	4	白磁	碗	底部	2001100	B地区	SB016B	P0267B	—	1.6+	7.1			155
67	31	60	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB013B	P0082B	8.2	1.6				044
68	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB013B	P0100B	9.6	1.5+				041
69	31	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB011B	P0101B	8.8	1.6+				049
70	31	60	土師器	皿	ほぼ完存	2001100	B地区	SB011B	P0101B	12.0	2.3				050
71	31	4	白磁	碗	底部	2001100	B地区	SB011B	P0367B	—	3.5+	7.0			153
72	31	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	SB015B	P0768B	(15.8)	3.4+	—			148
73	31	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SB015B	P0768B	(28.6)	3.2+	—			147
74	31	60	須恵器	鉢	口縁部～底部	2001100	B地区	SB015B	P0769B	29.0	11.5	10.9			072
75	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB018B	P0902B	(10.3)	1.4				075
76	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB020B	P0316B	7.8	1.5+	—	—		133
77	32	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SB024B	P0513B	(28.5)	3.5+	—			111
78	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SB007B	P0242B	13.8	2.6+	—			104
79	32	63	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SB022B	P0490B	(15.4)	3.7+	—			112
80	32	62	土師器	椀	口縁部	2001100	B地区	SB019B	P0179B	11.4	3.3+				084
81	32	60	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	SB004B	P0062B	13.8	2.6+				043
82	32	63	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SB023B	P0519B	21.6	4.4+	—			116
83	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0068B		7.8	1.5+	(5.6)			039
84	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0441B		(7.8)	1.7+	—			107
85	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0090B		7.8	1.5+				038
86	32	61	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	P0294B		7.7	1.3				276
87	32	60	土師器	皿	完存	2001100	B地区	P0353B		7.2	1.7	—			145
88	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0541B		7.9	1.5+	5.6			119
89	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0356B		(7.8)	1.5+	—			139
90	32	60	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0088B		7.8	1.2+	3.8			045
91	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0084B		7.8	1.3+				037
92	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0206B		7.8	1.4+				087
93	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0088B		7.4	1.3+				047
94	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0926B		7.8	1.2				074
95	32	60	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	P0225B		8.4	1.3	7.3			097
96	32	60	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0135B		7.4	1.5+	6.0			040
97	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0290B		7.8	1.3	6.4	—		132
98	32	61	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	P0225B		7.8	1.6+	7.0			096
99	32	61	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	P0043B		7.8	1.5	6.2			068
100	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0066B		7.8	1.5				051

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(3)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
101	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0227B		8.5	1.4	7.0			098
102	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0914B		8.8	1.3			1	078
103	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0136B		8.0	1.5+				036
104	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0088B		8.6	1.5+				042
105	32	60	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0075B		8.3	1.7+				048
106	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0227B		8.1	1.3	7.0			099
107	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0547B		8.2	1.5	6.7	—		121
108	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0547B		8.2	1.4	7.0		2	120
109	32	61	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0209B		11.8	2.5+				086
110	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0016B		12.8	2.7+				062
111	32	60	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	P0180B		12.6	3.2	7.2			090
112	32	62	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	P0185B		11.6	3.1+				085
113	32	62	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	P0189B		11.8	2.8+				088
114	32	60	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0443B		14.2	2.8+	—			109
115	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0357B		13.8	2.2+	—	—		134
116	32	62	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0381B		13.9	1.8				073
117	32	63	土師器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0240B		(14.6)	3.8+	—			101
118	32	63	土師器	椀	底部	2001100	B地区	P0901B		—	2.2+	7.6			076
119	32	63	土師器	椀	底部	2001100	B地区	P0341B		—	3.7+	6.8			138
120	32	60	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	P0393B		21.2	16.9+	—		3	115
121	32	63	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	P0022B		(22.0)	4.3+				064
122	32	63	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	B地区	P0903B		(29.4)	4.5+				082
123	33	64	黒色土器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0053B		7.8	1.7+				069
124	33	64	黒色土器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	P0901B		(9.9)	1.6	6.7			077
125	33	60	黒色土器	椀	口縁部～底部	2001100	B地区	P0032B P0060B		17.0	4.8	6.2			070
126	33	64	黒色土器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0341B		15.8	3.6+	—			137
127	33	64	黒色土器	椀	底部	2001100	B地区	P0546B		—	3.6+	6.0	—		128
128	33	64	黒色土器	椀	体部～底部	2001100	B地区	P0058B		—	3.8+	(5.9)			071
129	33	64	黒色土器	椀	底部	2001100	B地区	P0241B		—	1.5+	5.8			103
130	33	64	瓦器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0033B		8.4	2.0				065
131	33	64	瓦器	椀	底部	2001100	B地区	P0184B			1.7+	3.6			091
132	33	64	瓦器	椀	底部	2001100	B地区	P0395B		—	3.3+	6.7			110
133	33	64	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0276B		(17.8)	3.5+	—			141
134	33	64	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0243B		15.0	4.2+	—			105
135	33	64	瓦器	椀	底部	2001100	B地区	P0456B		—	1.9+	7.5			108
136	33	64	須恵器	皿	口縁部	2001100	B地区	P0349B		7.8	1.3	5.8			142
137	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0073B		15.6	3.8+				053
138	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0281B		(15.8)	3.8+	—			149
139	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0398B		16.3	2.8+	—			106
140	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0094B		15.8	3.3+				054
141	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0241B		15.4	2.4+	—			102
142	33	65	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	P0019B		(20.0)	3.5+				063
143	33	63	須恵器	椀	底部	2001100	B地区	P0351B		—	2.8+	6.2			140
144	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0914B		(20.3)	4.1				079
145	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0075B		(22.8)	2.7+				052
146	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0913B		(29.9)	4.6+				080
147	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0156B		(24.3)	2.3+				089
148	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0920B		(26.0)	3.4+				081
149	33	66	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	P0460B		—	5.0+	—			113
150	33	66	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	P0358B		—	5.2+	9.0			146

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(4)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
151	33	66	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	P0376B		—	3.9+	9.9			150
152	33	66	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	P0004B		—	5.9+	10.7			056
153	33	66	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	P0066B		—	2.2	7.8			055
154	33	65	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	P0525B		(23.6)	2.9+	—			117
155	33	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	P0349B		(14.9)	3.6+	—			157
156	33	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	P0401B		(15.9)	4.0+				160
157	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		7.8	1.5	7.0			172
158	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		8.4	1.7+				187
159	34	68	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SK130B		7.2	1.4	6.2			178
160	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		8.8	1.7	6.6			179
161	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(9.8)	2.3+				189
162	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		10.6	2.3	2.7			177
163	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(14.4)	1.4	(9.8)			171
164	34	68	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(17.1)	2.3	(12.6)			181
165	34	68	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(22.0)	5.9+				190
166	34	68	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(29.2)	6.3+				192
167	34	68	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(18.9)	4.5+	—			175
168	34	68	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK130B		22.9	6.0+				193
169	34	68	瓦質土器	羽釜	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(27.8)	4.7				191
170	34	69	黒色土器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK130B		8.0	2.0	3.4			174
171	34	69	瓦器	椀	高台部	2001100	B地区	SK130B		—	1.5+	6.6			180
172	34	69	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	SK130B		17.0	5.5	4.6			173
173	34	68	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(27.5)	3.3+				188
174	34	69	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	SK130B		15.8	4.1+	—			176
175	34	69	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	SK130B		27.5	10.3+				194
176	34	5	施釉陶器	壺	頸部～肩部	2001100	B地区	SK130B		—	9.8+	—			161
177	34	5	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	SK130B		(16.0)	2.8+	—			158
178	34	5	青磁	碗	底部	2001100	B地区	SK130B		—	3.8+	5.1			159
179	34	67	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SK161B		13.8	2.7			4	272
180	34	67	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SK161B		7.7	1.2				278
181	34	67	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK161B		8.4	1.4				273
182	34	67	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SK161B		7.8	1.5				274
183	34	67	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	SK161B		8.8	1.3				277
184	34	67	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SK161B		8.8	1.4				275
185	34	67	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK161B		22.2	10.2+				279
186	34	67	須恵器	鉢	口縁部～底部	2001100	B地区	SK161B		19.2	6.9	7.0			271
187	34	63	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SK537B		21.0	5.0+	—			118
188	34	64	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	SK213B		(14.2)	4.3+			5	095
189	35	69	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SD132B		7.2	1.5	6.6			165
190	35	69	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SD132B		7.6	1.4	7.0			164
191	35	69	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SD132B		8.8	1.9	7.0			167
192	35	69	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SD132B		10.9	2.7	7.4			166
193	35	69	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SD132B		21.0	3.4+	—			162
194	35	69	須恵器	壺	底部	2001100	B地区	SD132B		—	3.0+	7.0			163
195	35	69	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	SD143B		21.2	8.9+	—			170
196	35	69	須恵器	壺	底部	2001100	B地区	SD143B		—	3.3+	5.6			168
197	35	69	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	SD145B		7.2	1.0	3.8			169
198	35	70	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		7.5	1.9				257
199	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.6	1.9				259
200	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.0	2.0+				238

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(5)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
201	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		6.8	1.6+				285
202	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.2	2.2+				232
203	35	71	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		8.0	1.6				256
204	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.8	1.9+				239
205	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		8.1	1.3				252
206	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		8.0	1.6+				229
207	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.8	1.5+				282
208	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		8.3	1.3+		4.6		228
209	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		8.5	2.8				253
210	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		11.8	2.7+				255
211	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		(11.6)	2.8+				254
212	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		12.0	3.0+				230
213	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		10.8	2.1+				293
214	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		11.8	2.6+				284
215	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		12.8	2.5+				263
216	35	70	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		11.4	3.1				258
217	35	70	土師器	杯	口縁部	2001100	B地区	包含層		12.4	3.3+				288
218	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		(12.8)	2.1+				233
219	35	71	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		13.2	3.0+				283
220	35	71	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		13.0	2.3				262
221	35	70	土師器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		13.8	2.4+				286
222	35	72	土師器	甕	口縁部	2001100	B地区	包含層		(23.8)	4.7+		頸径(22.1)	6	250
223	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		26.0	16.2+		頸径(22.6)		251
224	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(22.7)	4.8+				235
225	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(22.0)	4.3+				298
226	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(26.0)	5.8+				295
227	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(25.6)	5.8+				296
228	35	71	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(28.0)	4.8+				245
229	35	71	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(21.8)	5.3+				301
230	35	72	土師器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(35.8)	2.5+				234
231	35	72	土師器	羽釜	口縁部	2001100	B地区	包含層		(26.8)	4.1+				247
232	36	72	黒色土器	椀	口縁部	2001100	B地区	包含層		(15.8)	4.4				290
233	36	72	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	包含層		14.8	4.7+			7	236
234	36	72	瓦器	椀	口縁部	2001100	B地区	包含層		(16.0)	2.7+				241
235	36	72	瓦器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		7.8	1.8+				289
236	36	72	瓦質土器	鍋	口縁部	2001100	B地区	包含層		(24.4)	3.9+				300
237	36	72	瓦質土器	壺	口縁部	2001100	B地区	包含層		—	2.4+				268
238	36	74	須恵器	椀	口縁部	2001100	B地区	包含層		—	1.2+	7.8			287
239	36	74	須恵器	杯	底部	2001100	B地区	包含層		—	2.6+	11.4			260
240	36	74	須恵器	椀	底部	2001100	B地区	包含層		—	2.5+	(5.8)			294
241	36	74	須恵器	椀	底部	2001100	B地区	包含層		—	3.0+	5.6			291
242	36	74	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		(15.6)	4.6+	5.6			242
243	36	73	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	包含層		—	4.8+	8.8			299
244	36	73	須恵器	鉢	底部	2001100	B地区	包含層		—	4.4+	8.2			264
245	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		—	2.9+	9.0			240
246	36	74	須恵器	壺	口縁部	2001100	B地区	包含層		—	3.1+	4.6			249
247	36	72	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(20.2)	4.4+				231
248	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(28.0)	6.0+				237
249	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		28.0	5.8+				243
250	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(31.6)	5.3				292

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(6)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
251	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(27.8)	5.7+				244
252	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(29.4)	5.0+				265
253	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(29.4)	5.2+				267
254	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(30.7)	4.6+				261
255	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(28.0)	5.5+				297
256	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(30.0)	6.2+				269
257	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(30.0)	3.7+				270
258	36	73	須恵器	鉢	口縁部	2001100	B地区	包含層		(29.2)	5.9+				266
259	36	74	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	包含層		(18.4)	3.8+				248
260	36	74	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	包含層		—	3.3+				246
261	36	74	須恵器	甕	破片	2001100	B地区	包含層			3.1+				185
262	36	74	須恵器	甕	破片	2001100	B地区	包含層			5.7+				183
263	36	74	須恵器	甕	破片	2001100	B地区	包含層			4.6+				184
264	36	74	須恵器	甕	破片	2001100	B地区	包含層			7.0+				182
265	36	74	須恵器	甕	口縁部	2001100	B地区	包含層		(34.8)	5.8+				302
266	37	74	無釉陶器	甕	口縁部	2001100	B地区	包含層		(35.8)	8.6+				303
267	37	7	緑釉陶器	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		8.4	1.7+				210
268	37	5	灰釉陶器	壺	口縁部～底部	2001100	B地区	包含層		1.1	2.9	2.6	4.8		217
269	37	4	白磁	碗	底部	2001100	B地区	包含層		—	3.5+	7.2			226
270	37	4	白磁	碗	高台部	2001100	B地区	包含層		—	2.9+	6.8			207
271	37	4	白磁	皿	底部	2001100	B地区	包含層		—	1.9+	3.4			227
272	37	4	白磁	碗	底部	2001100	B地区	包含層		—	2.1+	5.0			219
273	37	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(13.4)	2.7+				215
274	37	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(13.9)	2.8+				212
275	37	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		14.4	4.2+				214
276	37	4	白磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(18.8)	3.2+				221
277	37	4	白磁	皿	口縁部	2001100	B地区	包含層		9.6	2.1+				213
278	37	4	白磁	皿	底部	2001100	B地区	包含層		—	0.8+	6.1			209
279	37	4	白磁	壺	高台部	2001100	B地区	包含層		—	2.9+	5.5			211
280	37	6	青白磁	水滴	口縁部	2001100	B地区	包含層		1.1	1.0+				220
281	37	6	青白磁	合子	口縁部	2001100	B地区	包含層		(5.4)	1.6+				225
282	37	7	青磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		17.8	2.7+				224
283	37	7	青磁	碗	体部	2001100	B地区	包含層		—	4.3				223
284	37	7	青磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(16.5)	2.6+				218
285	37	7	青磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(17.8)	2.7+				222
286	37	7	青磁	碗	口縁部	2001100	B地区	包含層		(15.8)	2.0+				216
287	37	4	白磁	皿	底部	2001100	B地区	包含層		—	1.7+	4.1			208
288	37	70	土師器	甕	口縁～体部	2001100	B地区	SB201B	SF111B		9.6+	—	24.0	8	093
289	40	77	土師器	皿	口縁部	2001100	C地区	包含層		(8.0)	1.1+				200
290	40	77	土師器	皿	口縁部	2001100	C地区	包含層		(9.0)	1.4+				201
291	40	77	土師器	鍋	口縁部	2001100	C地区	包含層		(24.6)	6.3+		頸径(25.4)		206
292	40	77	土師器	鍋	口縁部	2001100	C地区	包含層		(24.2)	4.0+				205
293	40	77	黒色土器	椀	口縁部	2001100	C地区	包含層		(15.0)	2.5+				199
294	40	77	黒色土器	椀	底部	2001100	C地区	包含層		—	4.3+	7.1			204
295	40	77	瓦質土器	鍋	口縁部	2001100	C地区	包含層		(24.2)	3.9+				202
296	40	77	須恵器	椀	口縁部	2001100	C地区	包含層		(15.6)	3.4+				203
297	40	77	施釉陶器	椀	底部	2001100	C地区	包含層		—	1.8+				198
298	40	78	無釉陶器	甕	底部	2001100	C地区	包含層			31.3+	20.6			552
299	40	77	白磁	碗	口縁部	2001100	C地区	包含層		(16.0)	4.8+				197
300	40	77	青磁	碗	口縁部	2001100	C地区	包含層		(15.0)	5.1+				196

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(7)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
301	40	77	染付磁器	碗	口縁部	2001100	C地区	包含層		(12.0)	5.0+				195
302	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB001D	P0024D	9.0	1.8	5.4			430
303	68	100	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB001D	P0318D	(14.8)	3.3+			9	377
304	68	113	須恵器	甕	破片	2001100	D地区	SB001D	P0318D		6.5+				381
305	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0071D	7.8	1.6	4.4			437
306	68	96	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0071D	9.0	1.9	5.0			436
307	68	99	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB003D	P0231D	9.2	1.6	6.2			409
308	68	99	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0334D	8.6	1.5	5.4			404
309	68	96	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB003D	P0218D	8.6	2.1	4.8			402
310	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0071D	—	1.9	—			438
311	68	96	土師器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0326D	14.7	4.2+				376
312	68	99	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0217D	41.2	7.2+				401
313	68	96	土師器	鍋	頸部～体部	2001100	D地区	SB003D	P0071D		25.0		頸径16.8		342
314	68	96	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0334D	15.8	5.1+	—			410
315	68	100	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0587D	13.6	2.4+				309
316	68	100	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0071D	15.2	4.5+	—			435
317	68	100	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	SB003D	P0235D	—	3.5+	5.8			387
318	68	100	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	SB003D	P0325D	—	3.5+	6.8		10	371
319	68	100	瓦器	椀	底部	2001100	D地区	SB003D	P0334D	—	1.7+	5.1			403
320	68	102	須恵器	長頸壺	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0228D	12.6	3.7+				408
321	68	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB003D	P0235D	(15.8)	4.9+				386
322	68	102	須恵器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB009D	P0092D	9.4	1.6+	—			419
323	68	99	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	SB009D	P0252D	27.0	6.4+	—		11	427
324	68	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB009D	P0204D	15.8	4.5+				336
325	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0063D	(6.8)	1.5+	(5.4)			434
326	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0075D	(8.2)	1.1+	(7.0)			439
327	68	99	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB010D	P0146D	(7.8)	1.3	5.4			423
328	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0259D	8.4	1.0				393
329	68	96	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0134D	8.2	1.3	6.0			422
330	68	96	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0339D	8.2	2.2				368
331	68	98	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB010D	P0087D	9.3	1.4	6.2			414
332	68	98	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB010D	P0087D	(13.6)	2.0	—		12	413
333	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0075D	(12.2)	3.1+	(7.0)			440
334	68	100	土師器	脚部	底部	2001100	D地区	SB010D	P0094D	—	2.4+	4.6			426
335	68	98	土師器	杯	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0087D	13.7	3.0+	—			412
336	68	96	黒色土器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SB010D	P0258D	16.0	4.7	5.6			388
337	68	102	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SB010D	P0198D	(15.8)	4.5	4.5			337
338	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB012D	P0089D	(6.8)	1.4+	—			415
339	68	97	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB012D	P0089D	7.5	1.1	5.2			417
340	68	97	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB012D	P0089D	8.0	1.8	5.2			441
341	68	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB012D	P0089D	8.8	1.3+	—			411
342	68	99	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB012D	P0089D	8.6	1.8	4.7			416
343	68	99	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB012D	P0563D	7.6	1.4	5.0			314
344	68	97	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB012D	P0257D	8.2	1.6+	4.4			369
345	68	100	瓦器	椀	底部	2001100	D地区	SB012D	P0139D	—	1.9+	6.0			424
346	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0551D	(8.6)	1.5	(5.8)			312
347	69	13	青花磁器	碗	口縁部	2001100	D地区	SB010D	P0184D	13.0	5.3	4.8			349
348	69	100	土師器	壺	底部	2001100	D地区	SB014D	P0199D	—	2.6+	6.0			339
349	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB014D	P0392D	(15.7)	4.3+				389
350	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SB014D	P0388D	13.6	3.8+				306

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(8)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
351	69	102	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	SB014D	P0388D	20.1	7.6+				304
352	69	96	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SB018D	P0575D	8.4	1.8	4.8			315
353	69	99	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SB013D	P0580D	8.6	1.9	5.2			316
354	69	98	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	P0174D		7.0	1.5				340
355	69	98	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	P0368D		7.8	1.6+				372
356	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0114D		(7.8)	1.4+	—			421
357	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0389D		7.8	1.5	6.4			308
358	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0113D		8.3	1.3	—			420
359	69	13･97	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0544D		8.4	1.7	5.4			311
360	69	99	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0603D		8.0	2.0	5.1			319
361	69	97	土師器	皿	完存	2001100	D地区	P0234D		9.4	1.7				383
362	69	99	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0389D		10.7	1.5	7.8			307
363	69	97	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	P0227D		9.6	1.7	5.0		13	407
364	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0344D		14.4	2.4+				370
365	69	98	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0057D		(15.6)	2.6+	(10.2)			432
366	69	102	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	P0036D		15.6	3.9+	—		14	428
367	69	100	土師器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0350D		12.8	4.8+				373
368	69	99	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	P0081D		17.4	5.0+	—			443
369	69	99	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	P0036D		16.2	6.0+	—			429
370	69	99	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	P0311D		(20.0)	4.5+	—			327
371	69	99	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	P0234D		(25.2)	8.0+				391
372	69	99	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	P0057D		(24.0)	6.0+	—			431
373	69	99	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	D地区	P0057D		(21.0)	5.2+	—			433
374	69	100	瓦質土器	鍋	口縁部	2001100	D地区	P0081D		(25.0)	5.6+	—			442
375	69	100	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0301D		(14.8)	4.0+				392
376	69	100	黒色土器	杯	口縁部	2001100	D地区	P0248D		(14.8)	3.5+				385
377	69	100	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	P0361D		—	3.0+	6.0			380
378	69	102	瓦器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	P0361D		10.4	3.8	5.6			379
379	69	100	瓦器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0172D		14.6	3.0+				341
380	69	101	須恵器	杯	底部	2001100	D地区	P0594D		—	1.7+	10.6			317
381	69	101	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	P0361D		—	1.6+	4.8			375
382	69	101	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	P0160D		13.8	4.8	7.0			335
383	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0557D		(17.2)	3.0+	—			313
384	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0297D		(15.8)	5.5+				366
385	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0384D		(15.2)	4.5+				305
386	69	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	P0598D		14.6	8.3+				318
387	69	101	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	P0234D		—	2.5+	6.0			390
388	69	101	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	P0316D		—	2.5+	5.7			378
389	70	102	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	P0344D		24.4	7.1+				374
390	70	102	須恵器	広口壺	口縁部	2001100	D地区	P0250D		(37.8)	10.0+				394
391	70	102	須恵器	甕	口縁部	2001100	D地区	P0543D		(18.8)	3.1+				310
392	70	102	無釉陶器	甕	底部	2001100	D地区	P0179D		—	5.9+	(23.7)			338
393	70	14	白磁	碗	口縁部	2001100	D地区	P0062D		(16.0)	4.1+				344
394	70	14	白磁	碗	口縁部	2001100	D地区	P0098D		(16.0)	3.0+				345
395	70		白磁	碗	底部	2001100	D地区	P0559D		—	2.7+	5.6			350
396	70	14	青磁	碗	口縁部	2001100	D地区	P0013D		—	1.9+	5.9			343
397	70	106	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SK154D		15.4	5.6	6.5			332
398	70	106	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SK154D		15.7	4.7+				331
399	70	106	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SK213D		13.8	3.7	7.4			396
400	70	103	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SK214D		14.1	4.4	6.3			334

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(9)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
401	70	106	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SK162D		(13.8)	2.9+	—		15	329
402	70	14	青磁	碗	底部	2001100	D地区	SK153D		—	2.5+	7.4			347
403	70	14	白磁	碗	底部	2001100	D地区	SK153D		—	2.5+	6.4			348
404	70	14	青花磁器	碗	底部	2001100	D地区	SK153D		—	1.0+	(7.0)			346
405	70	99	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	SK226D		(27.4)	6.0+				384
406	70	106	土師器	皿	完存	2001100	D地区	SK226D		9.6	1.7	6.0			382
407	70	106	瓦器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SK226D		10.2	1.8	5.4			406
408	70	101	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SK226D		15.2	4.1+	—			405
409	70	104	土師器	鉢	口縁部	2001100	D地区	SF187D		40.6	19.8				489
410	70	104	土師器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SF187D			5.8+	(6.0)			490
411	70	101	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SF187D		(16.6)	6.1	6.6			367
412	71	103	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SK103D		8.5	1.3				321
413	71	103	土師器	皿	完存	2001100	D地区	SK103D		9.5	1.8	5.5			322
414	71	103	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SK103D		10.2	1.6	6.8			323
415	71	103	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	SK103D		(43.0)	15.8+	—		16	326
416	71	103	黒色土器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SK103D		15.2	1.9	6.1			324
417	71	103	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	SK103D		(15.0)	4.4+				325
418	71	103	須恵器	甕	口縁部	2001100	D地区	SK103D		(20.9)	1.6+				320
419	71	105	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	SS108D		10.1	2.2	5.1			463
420	71	105	土師器	皿	ほぼ完存	2001100	D地区	SS108D		9.1	1.7	5.3			465
421	71	104	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	SS108D		10.4	1.2	7.2			467
422	71	100	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	SS108D		—	2.6+	5.8			425
423	71	104	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	SS108D			4.8+				466
424	71	104	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	SS108D			4.2+	6.1			468
425	71	104	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	SS108D		(15.6)	5.2+				464
426	71	104	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	SS007D		13.6	10.2				460
427	71	104	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	SS007D		13.3	8.2+				461
428	71	105	須恵器	杯	口縁部	2001100	D地区	SS007D		12.8	3.0	7.8			459
429	71	105	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SS007D		13.2	3.5	7.0			458
430	71	105	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	SS007D		16.6	5.1	6.6			456
431	71	105	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	SS007D			4.1+	7.2			457
432	71	105	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	SS007D		16.2	3.7+				462
433	71	12･106	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	ST215D		7.3	2.0	3.0			397
434	71	12･106	土師器	皿	完存	2001100	D地区	ST215D		8.3	1.8	2.4			400
435	71	12･106	土師器	皿	ほぼ完存	2001100	D地区	ST215D		8.1	1.9	2.8			399
436	71	12･106	土師器	皿	完存	2001100	D地区	ST215D		8.2	2.1	4.0			398
437	71	106	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	ST215D		(14.7)	4.0+	—			330
438	71	106	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	ST215D		—	2.3+	7.4			333
439	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		7.6	1.8	4.0			491
440	72	107	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		8.2	2.0	5.6			498
441	72	108	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		7.4	1.5	4.6			493
442	72	107	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		9.4	1.8				472
443	72	108	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		8.6	2.0	4.6			451
444	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		8.8	1.5	4.8			470
445	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		9.0	1.7	5.2			450
446	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		4.8	2.1	6.0			487
447	72	108	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		9.4	1.9	6.4			495
448	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		8.9	1.4	5.6			488
449	72	108	土師器	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		10.1	2.0	6.4			499
450	72	107	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		9.8	1.3	5.2			469

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(10)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
451	72	108	土師器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		10.8	1.5	6.0			507
452	72	108	土師器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.2+	7.1			522
453	72	107	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		11.8	3.5	6.6			508
454	72	108	土師器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		14.7	4.6	6.3			521
455	72	109	土師器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.1+	7.0			478
456	72	108	土師器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.2+	6.4			471
457	72	108	土師器	椀	完存	2001100	D地区	包含層			2.5+	5.5			500
458	72	108	土師器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			3.2+	6.0			479
459	72	114	土師器	小壺	底部	2001100	D地区	包含層			1.6+				524
460	72	114	土製品	紡錘車	完存	2001100	D地区	包含層		長4.8	幅4.9	厚1.0			504
461	72	110	土師器	鍋	体部	2001100	D地区	包含層		(41.0)	5.4+				526
462	72	110	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	包含層		(30.8)	9.6+				518
463	72	109	土師器	鍋	体部	2001100	D地区	包含層			12.5+		28.8	17	528
464	72	109	土師器	甕	口縁部	2001100	D地区	包含層		(26.0)	6.7+				516
465	72	109	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	D地区	包含層		26.0	7.7+				477
466	72	109	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	D地区	包含層		30.6	5.2+				494
467	72	109	土師器	鍋	口縁部	2001100	D地区	包含層		21.6	4.9+				509
468	72	109	無釉陶器	鍋	口縁部	2001100	D地区	包含層		(32.4)	5.7+				482
469	72	110	土師器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		(23.8)	4.9+				520
470	72	110	土師器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		(24.6)	3.3+				523
471	72	110	土師器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		(22.6)	3.6+				517
472	72	110	土師器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層			8.7+				525
473	73	111	黒色土器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.4	6.4			473
474	73	111	黒色土器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		17.0	5.5	6.4			454
475	73	107	黒色土器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		14.6	4.7	5.0			481
476	73	111	黒色土器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		(14.2)	4.6+				484
477	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.1+	8.3			476
478	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			1.9	6.2			513
479	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.0+	8.6			365
480	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.6+	6.8			352
481	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	3.3+	7.1			357
482	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	3.3+	7.4			362
483	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.9+	6.8			351
484	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.1+	6.8			361
485	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.9+	6.8			364
486	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.1+	7.4			363
487	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.2+	(7.6)			359
488	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.5+	7.0			360
489	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.6+	7.0			358
490	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.6+	6.8			354
491	73	113	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	1.6+	7.6			353
492	73	112	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		(14.4)	4.9	6.4			448
493	73	112	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		13.8	4.8	5.8			445
494	73	112	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		16.0	5.2	6.0			502
495	73	112	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		14.6	4.0	5.9			447
496	73	112	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		14.2	5.4	5.0			503
497	73	112	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			3.7+	6.8			511
498	73	112	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		—	2.7+	6.8			444
499	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		15.8	5.2+				486
500	73	112	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		14.6	5.1	6.2			446

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(11)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
501	73	112	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			4.9+	6.8			510
502	73	111	須恵器	椀	底部	2001100	D地区	包含層		(17.2)	5.0	7.0			449
503	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		(16.8)	5.2+				485
504	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		(15.6)	2.8+				356
505	73	111	須恵器	碗	口縁部	2001100	D地区	包含層		(14.2)	4.3+				483
506	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		14.0	4.0				474
507	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		14.4	4.3				515
508	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		(16.8)	3.0+				355
509	73	111	須恵器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層		13.3	3.3+				512
510	73	112	須恵器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		8.8	1.7	4.8			492
511	74	111	須恵器	椀	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		13.2	3.5	8.0			514
512	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		22.0	7.6+				501
513	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		24.9	6.4+				480
514	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		(21.9)	5.2				506
515	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		2.9	4.2				452
516	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		(30.4)	7.4+				497
517	74	113	須恵器	鉢	口縁部	2001100	D地区	包含層		30.4	4.5+				496
518	74	110	須恵器	鉢	底部	2001100	D地区	包含層			2.7+	(13.6)			475
519	74	110	須恵器	壺	体部	2001100	D地区	包含層			5.0				505
520	74	113	須恵器	甕	破片	2001100	D地区	包含層			4.6+				455
521	74	113	須恵器	甕	口縁部	2001100	D地区	包含層		32.7	7.8+				453
522	74	110	無釉陶器	甕	底部	2001100	D地区	包含層			6.4+	18.4			519
523	74	15	施釉陶器	壺	体部	2001100	D地区	包含層			6.2+				547
524	74	15	緑釉陶器	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層			1.3+				545
525	74	15	施釉陶器	椀	口縁部	2001100	D地区	包含層			2.4+				548
526	74	15	灰釉陶器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			2.6+	7.3			550
527	74	16	青磁	碗	底部	2001100	D地区	包含層			2.4+	5.3			531
528	74	15	緑釉陶器	椀	底部	2001100	D地区	包含層			1.3+	7.2			549
529	74	13	白磁	碗	口縁部	2001100	D地区	包含層		(16.0)	2.7+				538
530	74	13	白磁	碗	口縁部	2001100	D地区	包含層		18.0	2.8+				529
531	74	13	白磁	碗	口縁部	2001100	D地区	包含層		(16.0)	2.0+				539
532	74	13	白磁	碗	底部	2001100	D地区	包含層			2.5+	6.9			546
533	74	13	白磁	碗	底部	2001100	D地区	包含層			1.8+	6.1			544
534	74	13	白磁	碗	底部	2001100	D地区	包含層			2.2+	6.9			543
535	74	13	白磁	碗	底部	2001100	D地区	包含層			2.2+	6.2			542
536	75	16	青磁	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		(12.0)	2.6+				540
537	75	16	青磁	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		(10.0)	1.6+				551
538	75	16	青磁	碗	口縁部	2001100	D地区	包含層			3.7+				537
539	75	16	青磁	皿	口縁部	2001100	D地区	包含層		12.8	2.2+				536
540	75	17	青花磁器	碗	底部	2001100	D地区	包含層			1.4+	4.4			532
541	75	17	青花磁器	碗	底部	2001100	D地区	包含層			1.4+	4.3			530
542	75	17	青花磁器	皿	底部	2001100	D地区	包含層			1.1+	4.8			541
543	75	17	青花磁器	皿	口縁部～底部	2001100	D地区	包含層		(12.8)	2.9	7.2			533
544	75	17	青花磁器	皿	底部	2001100	D地区	包含層			1.8+	6.8			534
545	75	17	青花磁器	皿	底部	2001100	D地区	包含層			2.3+	6.0			535
546	75	114	土師器	小壺	口縁～体部	2001100	D地区	SK207D		8.7	8.3	8.8			328
547	75	102	須恵器	杯蓋	口縁部	2001100	D地区	P0083D		(12.6)	3.7+	―			418
548	106		黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB023E	P4010E	16.8	4.0+				657
549	106	134	瓦質土器	鍋	口縁部	2003090	E地区	SB023E	P0003E	(23.9)	6.0+				640
550	106	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB023E	P0001E	(15.6)	4.0				630

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(12)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
551	106	139	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	SB024E	P0023E	7.8	1.2	6.0			623
552	106	134	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	SB024E	P4018E	7.8	1.0	5.6			654
553	106	134	土師器	椀	底部	2003090	E地区	SB024E	P0114E		2.3+	7.0			694
554	106	134	土師器	壺	口縁部～底部	2003090	E地区	SB024E	P0011E	6.2	3.9+				636
555	106	136	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0069E (P0070E)		4.0+				664
556	106	136	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0009E	(15.5)	3.0+				622
557	106	136	瓦器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0069E	8.3	1.1+				667
558	106	139	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0023E	(16.8)	2.2+				624
559	106	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0069E	(15.8)	3.1+				666
560	106	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0069E	(15.8)	2.8+				662
561	106	137	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0023E	(14.6)	2.4+				626
562	106	137	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	SB024E	P0007E		4.3+	6.4			637
563	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB025E	P4023E	14.0	3.2+				656
564	106	139	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB026E	P0109E	(14.6)	3.2+				693
565	106	134	無釉陶器	鍋	口縁部	2003090	E地区	SB026E	P0106E		4.1+				672
566	106	135	黒色土器	椀	口縁部～底部	2003090	E地区	SB026E	P0018E	16.8	4.4	7.0			629
567	106	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB026E	P0018E	(15.8)	2.7+				620
568	106	134	須恵器	甕	口縁部	2003090	E地区	SB026E	P0071E	19.8	3.2+				668
569	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB027E	P0054E	7.8	1.5+				618
570	106	135	瓦器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB027E	P4025E	(8.0)	1.7	6.3			659
571	106	137	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	SB027E	P4025E	15.2	2.6+				658
572	106	137	青磁	碗	底部～体部	2003090	E地区	SB027E	P4019E		4.8				655
573	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB028E	P4180E		1.6+				685
574	106	134	土師器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB028E	P4180E	(15.8)	2.8+				690
575	106	137	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SB028E	P4183E	(14.8)	2.5+				689
576	106	137	須恵器	鉢	口縁部	2003090	E地区	SB029E	P4182E	(29.4)	8.3+				707
577	106	134	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	SB030E	P0098E	6.6	1.4	8.1			681
578	106	135	須恵器	皿	口縁部	2003090	E地区	SB030E	P0098E	8.4	1.7	5.0			682
579	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0059E		5.8	1.0+				619
580	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0063E		7.8	1.4+				633
581	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0064E		(7.8)	1.2+				660
582	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0064E		(7.8)	1.3+				661
583	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0096E		(7.2)	1.2+				680
584	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P3003E		7.0	1.0				701
585	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0102E		7.9	1.2+				670
586	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P3014E		7.5	1.3				691
587	106	134	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	P0056E		8.0	1.4	6.2			700
588	106	134	土師器	椀	底部	2003090	E地区	P0017E			1.4+	7.0			697
589	106	134	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	P0042E		(12.8)	1.9+				627
590	106	134	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	P0046E		(14.4)	2.5	8.0			692
591	106	134	土師器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0056E			5.3+				696
592	107	136	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0102E		(15.6)	4.2+				669
593	107	136	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0026E			4.2+				639
594	107	136	黒色土器	椀	底部	2003090	E地区	P1034E			2.2+	6.7			674
595	107	136	黒色土器	椀	底部	2003090	E地区	P0056E			1.1+	6.0			703
596	107	134	瓦器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0039E		14.8	4.2+				634
597	107	135	瓦器	椀	口縁部～底部	2003090	E地区	P0102E		14.4	5.4	6.4			671
598	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0102E		(15.8)	4.0	6.0			673
599	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0064E		15.7	2.9+				663
600	107	139	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0017E		(15.8)	4.5+				625

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(13)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
601	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0026E		15.8	4.1+				638
602	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0100E		15.2	3.7+				684
603	107	139	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0017E		15.6	3.5+				631
604	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0102E		15.6	15.6	4.4	6.5		665
605	107	135	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	P0100E		15.6	2.8+				683
606	107	134	須恵器	壺	体部	2003090	E地区	P0048E			3.8+				705
607	107	137	白磁	碗	底部	2003090	E地区	Pit			2.2+	7.0			632
608	107	137	青花磁器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	P0143E		11.6	2.7	6.8			687
609	107	138	黒色土器	椀	底部	2003090	E地区	SK006E			1.3+	5.0			628
610	107	136	黒色土器	椀	底部	2003090	E地区	SK023E			1.7+	6.4		18	635
611	107	138	瓦器	椀	口縁部	2003090	E地区	SK065E		(16.0)	3.6+				649
612	107	138	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	SK055E		(13.8)	2.4+				688
613	107	138	黒色土器	椀	底部	2003090	E地区	SK055E			2.2+	5.2			646
614	107	23･138	須恵器	鉢	口縁部	2003090	E地区	SK055E		(16.6)	4.6+				699
615	107	23･138	須恵器	鉢	口縁部	2003090	E地区	SK055E		(25.4)	4.2+				648
616	107	23･138	施釉陶器	卸皿	口縁部～底部	2003090	E地区	SK055E		(22.2)	4.6	(11.0)			647
617	107	138	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	SK072E		(8.8)	1.8	5.7			652
618	107	138	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	SK072E		7.8	1.8	6.7			651
619	107	23･138	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	SK072E		(16.8)	2.9+				650
620	107	23･138	青花磁器	碗	口縁部	2003090	E地区	SK077E			3.4+				679
621	107	139	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		(7.8)	1.4				719
622	107	139	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		7.6	1.4				709
623	107	139	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		8.7	1.6				712
624	107	139	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		14.0	2.1				711
625	107	139	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	包含層		12.5	1.9+				716
626	107	139	土師器	皿	口縁部	2003090	E地区	包含層		13.8	2.1+				698
627	107	139	土師器	椀	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		14.8	3.9	6.8			676
628	107	139	土師器	皿	底部	2003090	E地区	包含層			1.9+	7.0			621
629	107	141	土師器	鉢	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		7.1	3.2				710
630	108	145	土師器	甕	口縁部	2003090	E地区	包含層		(24.0)	4.6+				573
631	108	145	土師器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層		(13.2)	4.3+				577
632	108	145	土師器	甕	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.6+				575
633	108	145	土師器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層			3.4+				580
634	108	139	土師器	鍋	口縁部	2003090	E地区	包含層			3.7+				704
635	108	139	土師器	鍋	体部	2003090	E地区	包含層			2.8+				582
636	108	139	土師器	鍋	口縁部	2003090	E地区	包含層		(20.0)	7.4+				645
637	108	136	黒色土器	椀	口縁部	2003090	E地区	包含層		(14.8)	3.6+				641
638	108	136	瓦器	椀	口縁部	2003090	E地区	包含層		15.6	4.5+				720
639	108	136	瓦質土器	鍋	口縁部	2003090	E地区	包含層		(23.1)	4.6+				715
640	108	141	須恵器	椀	底部	2003090	E地区	包含層			1.5+	7.8			721
641	108	141	須恵器	壺	底部	2003090	E地区	包含層			3.7+	4.6			653
642	108	141	須恵器	皿	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		8.1	1.4	6.5			713
643	108	139	須恵器	皿	口縁部	2003090	E地区	包含層		8.0	1.4+				714
644	108	139	須恵器	椀	口縁部	2003090	E地区	包含層		15.9	4.8+				718
645	108	141	須恵器	椀	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層		15.7	4.6	6.3			717
646	108	139	須恵器	鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層		(25.4)	6.8+				643
647	108	141	施釉陶器	卸皿	口縁部	2002155	E地区	包含層		(10.2)	2.0	(4.2)			768
648	108	141	施釉陶器	卸皿	口縁部	2002155	E地区	包含層			1.5+				769
649	108	141	施釉陶器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			3.6+				678
650	108	140	無釉陶器	擂鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層		19.6	5.2+				675

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(14)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
651	108	140	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	包含層		(13.7)	3.2+				722
652	108	140	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	包含層		(16.0)	3.4+				729
653	108	140	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	包含層		15.6	4.0+				724
654	108	140	白磁	碗	底部	2003090	E地区	包含層			2.2+				644
655	108	140	白磁	皿	底部	2003090	E地区	包含層			1.2+	7.5			728
656	108	140	青磁	碗	底部	2003090	E地区	包含層			1.8+	6.2			730
657	108	140	青磁	碗	口縁部	2003090	E地区	包含層		(13.6)	3.5+				725
658	108	23	白磁	皿	口縁～底部	2003090	E地区	包含層		9.1	2.3	3.0			686
659	108	140	白磁	碗	口縁部	2003090	E地区	包含層			1.6+				642
660	108	140	白磁	碗	底部	2003090	E地区	包含層			2.4+	3.0			727
661	108	140	白磁	紅皿	口縁部	2003090	E地区	包含層		3.8	1.0				726
662	108	141	石製品	不明		2003090	E地区	包含層		長4.5	幅2.2	厚2.1			723
663	108	17	青花磁器	碗	底部	2002156	E地区	包含層			2.0+	4.0			767
664	109	145	土師器	甕	口縁部～頸部	2003090	E地区	SH002E		(15.4)	5.7+			19	677
665	109	145	須恵器	杯	受部	2003090	E地区	包含層			2.7+				708
666	109	142	縄文土器	深鉢	口頸部	2003090	E地区	包含層			2.2+				583
667	109	142	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層			3.8+				561
668	109	142	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			4.0+				560
669	109	142	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			4.6+				616
670	109	142	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層							617
671	109	142	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層			5.6+				568
672	109	142	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層			5.9+				570
673	109	142	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層			7.1+				569
674	109	142	縄文土器	深鉢	底部	2003090	E地区	包含層			10.6+	9.5		20	562
675	109	142	縄文土器	深鉢	底部	2003090	E地区	包含層			1.9+	4.6			601
676	109	142	縄文土器	深鉢	底部	2003090	E地区	包含層			3.3+				593
677	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			4.1+				563
678	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.2+				564
679	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.6+				589
680	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.3+				585
681	110	143	縄文土器	鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			4.0+				609
682	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			1.3+				614
683	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			1.6+				591
684	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			4.5+				566
685	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.9+				598
686	110	143	縄文土器	深鉢	体部	2003090	E地区	包含層			3.6+				615
687	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部～底部	2003090	E地区	包含層			2.0+				594
688	110	143	縄文土器	鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			5.5+				610
689	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			3.4+				600
690	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			1.6+				592
691	110	143	縄文土器	深鉢	頸部	2003090	E地区	包含層			3.4+				586
692	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			3.7+				599
693	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.7+				597
694	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.2+				602
695	110	143	縄文土器	深鉢	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.7+				613
696	110	143	縄文土器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.4+				565
697	111	144	弥生土器	壺	頸部	2003090	E地区	包含層			5.3+				608
698	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			7.1+				605
699	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			4.2+				574
700	111	144	弥生土器	壺	口頸部	2003090	E地区	包含層			3.6+				572

別表１　田ノ口遺跡土器一覧(15)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
701	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			1.7+				603
702	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			2.3+				584
703	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			2.8+				579
704	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			3.8+				576
705	111	144	弥生土器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層		(19.4)	1.6+				595
706	111	144	弥生土器	壺	頸部	2003090	E地区	包含層			5.7+				607
707	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			5.1+				604
708	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			1.3+				606
709	111	144	弥生土器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層			2.0+				581
710	111	144	弥生土器	壺	体部	2003090	E地区	包含層			2.4+				596
711	111	144	弥生土器	壺	肩部	2003090	E地区	包含層			3.0+				567
712	111	145	弥生土器	壺	口縁部	2003090	E地区	包含層			1.4+				612
713	111	145	弥生土器	壺	底部	2003090	E地区	包含層			6.3+	10.3			587
714	111	145	弥生土器	甕	口縁部	2003090	E地区	包含層		27.6	5.0+				611
715	111	145	弥生土器	甕	底部	2003090	E地区	包含層			3.4+	(7.8)			571
716	111	145	弥生土器	甕	底部	2003090	E地区	包含層			3.9+	7.6			590
717	111	145	弥生土器	壺	底部	2003090	E地区	包含層			1.6+	6.6			578
718	111	145	弥生土器	壺	底部	2003090	E地区	包含層			3.2+	8.6			588
719	122	152	土師器	皿	口縁部	2003090	F地区	SB037F	P1014F	(12.0)	1.5+				749
720	122	152	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	SB034F	P2024F	(21.6)	3.2+				756
721	122	152	土師器	皿	口縁～底部	2003090	F地区	P1034F		(7.2)	1.5	4.6			745
722	122	134	土師器	皿	口縁部	2003090	F地区	P1005F		7.8	1.2+				702
723	122	134	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1005F		20.4	4.1+				706
724	122	134	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1011F			3.4+				695
725	122	152	土師器	皿	口縁部	2003090	F地区	P1023F		13.0	1.8+				744
726	122	152	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1060F		(22.2)	5.0+				751
727	122	152	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1077F		?	3.4+				754
728	122	152	瓦器	椀	口縁部～底部	2003090	F地区	P1042F P1043F		15.7	5.5	7.2		21	747
729	122	152	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1069F		(25.2)	2.6+				753
730	122	152	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	P1038F		(25.7)	2.8+				746
731	122	152	須恵器	鉢	口縁部	2003090	F地区	P1038F		(20.0)	3.5+				748
732	122	152	須恵器	鉢	口縁部	2003090	F地区	P1033F P1066F		22.8	3.7+				752
733	122	152	青磁	碗	口縁部	2003090	F地区	P2029F		(15.0)	5.2+				758
734	122	152	須恵器	鉢	口縁部	2003090	F地区	P2022F		(27.0)	6.1+				757
735	122	152	須恵器	鉢	体部	2003090	F地区	P1052F			7.0+				750
736	122	152	白磁	碗or皿	口縁部	2003090	F地区	旧河道		(10.0)	2.0+				755
737	122	153	須恵器	鉢	口縁部	2003090	F地区	水田			3.3+				732
738	122	153	無釉陶器	甕	口縁部	2003090	F地区	水田			4.0+				733
739	122	153	染付磁器	碗	口縁部	2003090	F地区	水田		(12.0)	4.9+				731
740	122	153	染付磁器	碗	底部	2003090	F地区	水田			2.5+	4.6			734
741	122	153	無釉陶器	盤	口縁部	2003090	F地区	水田			3.3+				735
742	122	153	土師器	皿	口縁部	2003090	F地区	水田			2.4+				736
743	122	153	土師器	擂鉢	口縁部	2003090	F地区	水田			2.8+				737
744	122	153	土師器	皿	口縁部	2003090	F地区	水田		9.0	2.0				739
745	122	153	青磁	碗	口縁部	2003090	F地区	水田			2.5+				740
746	122	153	土師器	鍋	口縁部	2003090	F地区	水田		(24.0)	3.2+				743
747	122	153	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	F地区	包含層		12.6	2.5	7.8			741
748	122	153	土師器	皿	口縁部～底部	2003090	F地区	包含層		16.0	4.0	9.0			742
749	122	153	無釉陶器	擂鉢	口縁部	2003090	F地区	包含層			6.0+				738
750	126	26・159	土師器	鍋	ほぼ完存	2004012	G地区	集石①		21.7	16.2		26.4		763

別表 1　田ノ口遺跡土器一覧(16)

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				胎土分析	実測No.
										口径	器高	底径	腹径		
751	126	26･159	土師器	鍋	ほぼ完存	2004012	G地区	集石①		22.5	15.5	(頸径)22.3	26.6	22	760
752	126	26･159	土師器	鍋	ほぼ完存	2004012	G地区	集石①		22.0	16.4	(頸径)22.0	25.4		762
753	126	―	土師器	小皿	口縁部	2004012	G地区	集石①		7.4	1.8				765
754	126	―	須恵器	底部	底部	2004012	G地区	集石①			1.7+	7.8			764
755	126	27･28･164	須恵器	捏鉢	完存	2004012	G地区	集石①		26.8	20.3	10.4			761
756	126	27･28･164	須恵器	甕	ほぼ完存	2004012	G地区	集石②		18.9	27.3	(頸径)17.3	27.7		766
757	―	40	瓦質土器？	擂鉢		2001100	A地区	包含層							
758	―	40	青磁			2001100	A地区	包含層							
759	―	6	白磁	碗		2001100	B地区	P0401B							
760	―	6	白磁	碗or皿		2001100	B地区	P0051B							
761	―	6	青磁	碗		2001100	B地区	P0076B							
762	―	6	青磁	碗		2001100	B地区	P0057B							
763	―	6	青磁	碗		2001100	B地区	P0144B							
764	―	6	白磁	碗or皿		2001100	B地区	SK131B							
765	―	6	青磁	碗		2001100	B地区	SK130B							
766	―	6	白磁	壺		2001100	B地区	SK133B							
767	―	6	青磁	碗		2001100	B地区	SK132B							
768	―	105	須恵器	椀		2001100	D地区	SS007D							
769	―	114	？			2001100	D地区	包含層							
770	―	139	土師器	鍋		2003090	E地区	P0103E							
771	―	140	無釉陶器	擂鉢		2003090	E地区	包含層							
772	―	140	無釉陶器	擂鉢		2003090	E地区	包含層							
773	―	140	青磁			2003090	E地区	包含層							
774	―	140	青花磁器			2003090	E地区	包含層							
775	―	140	青花磁器			2003090	E地区	包含層							
776	―	153	須恵器	甕		2003090	F地区	旧河道							

別表 2　田ノ口遺跡木器一覧

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	調査番号	調査区	遺構	法　量(cm)			分析No.	実測No.
								口径	器高	底径		
W1	122	154	木器	漆椀	2003090	F地区	包含層	12.0	8.7	5.9	1	W1

別表 3　田ノ口遺跡石製品一覧

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	石材	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量				実測No.
										長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
S1	38	75	石器	石鏃	サヌカイト	2001100	B地区	包含層		2.0	1.5	0.4	0.8	S4
S2	38	75	石器	砥石	砂岩	2001100	B地区	P0276B		3.3	2.1	0.4	2.8	S8
S3	38	75	石器	砥石	シルト岩	2001100	B地区	包含層		3.9	2.3	1.3	18.0	S3
S4	38	75	石器	砥石	シルト岩	2001100	B地区	SB019B	P0179B	8.5	4.3	2.3	110.2	S5
S5	38	76	石器	砥石	砂岩	2001100	B地区	SB003B	P0722B	1.3	10.0	8.5	1246.1	S6
S6	40	78	石器	砥石	砂岩	2001100	C地区	包含層		7.5	3.0	1.0	36.8	S7
S7	76	114	石器	石鏃	サヌカイト	2001100	D地区	P0160D		3.1	1.7	0.5	2.0	S11
S8	76	114	石器	砥石	砂岩	2001100	D地区	P0570D		10.8+	5.8	3.9	292.9	S12
S9	76	115	石器	砥石	砂岩	2001100	D地区	P0021D	P0021D	15.0	7.2	5.2	712.6	S10
S10	76	115	石器	砥石	砂岩	2001100	D地区	包含層		14.2	6.7	5.5	523.2	S9
S11	110	145	石器	石棒	結晶片岩	2003090	E地区	包含層		22.0	6.7	5.6	1348.0	S1
S12	122	154	石器	砥石	シルト岩	2003090	F地区	SB039F	P1048F	8.5	3.9	1.0	28.2	S2

別表 4　田ノ口遺跡玉一覧

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	材質	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量				分析	実測No.
										長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
J1	76	114	玉製品	丸玉	鉛硝子	2001100	D地区	SB008D	P0075D	1.0	1.0	0.9	1.3	○	J1

別表 5　田ノ口遺跡金属器一覧

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量				実測No.
									長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
M1	11	40	鉄器	不明	2001100	A地区	SB005A	P0003A	9.9	6.6	0.7	63.9	1T36
M2	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	SK131B		2.6+	0.7	0.4	1.3	1T14
M3	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	包含層		3.0+	0.8	0.6	3.5	1T08
M4	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	SD113B		3.7+	0.7	0.5	3.0	1T12
M5	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	P0015B		4.8	1.5	0.9	10.1	1T11
M6	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	P0911B		6.1	0.8	0.7	14.4	1T17
M7	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	SK161B		6.2+	0.8	0.4	3.6	1T15
M8	39	76	鉄製品	釘	2001100	B地区	包含層		7.5+	1.6	1.0	36.7	1T07
M9	39	76	鉄製品	鏃	2001100	B地区	P0393B		8.0	3.6	0.6	16.8	1T16
M10	39	76	鉄製品	鏃	2001100	B地区	包含層		5.3+	2.9	0.5	12.9	1T09
M11	39	76	鉄製品	不明	2001100	B地区	包含層		5.0	2.8	0.6	15.5	1T10
M12	39	76	銅銭	景徳元寶	2001100	B地区	P0136B		2.5	2.5	0.2	2.3	1T02
M13	39	76	銅銭	景祐元寶	2001100	B地区	包含層		2.6	1.75+	0.1	1.3	1T01
M14	40	78	鉄器	鍋	2001100	C地区	包含層		口径 40.0	器高 7.0+		80.3	1T20
M15	40	78	鉄製品	釘	2001100	C地区	包含層		4.7	1.0	0.6	3.0	1T19
M16	40	78	鉄製品	釘	2001100	C地区	包含層		3.0	0.4	0.4	0.7	1T18
M17	77	116	鉄器	釘	2001100	D地区	包含層		3.5+	0.9	0.4	1.3	1T35
M18	77	116	鉄製品	釘	2001100	D地区	P0253D		3.4+	0.5	0.4	1.5	1T30
M19	77	116	鉄製品	釘	2001100	D地区	P0263D		2.9+	0.7	0.5	2.2	1T29
M20	77	116	鉄製品	刀子	2001100	D地区	包含層		5.5+	1.2	0.4	5.1	1T26
M21	77	116	鉄器	刀子	2001100	D地区	P0297D		9.1+	1.9	5.0	13.7	1T31
M22	77	116	鉄製品	鍬	2001100	D地区	包含層		6.1+	4.8+	1.8	63.8	1T23
M23	77	116	鉄器	鎌or包丁	2001100	D地区	包含層		5.8+	3.1	0.3	12.5	1T22
M24	77	116	鉄器	不明	2001100	D地区	P0357D		7.2+	2.3	0.5	21.3	1T33
M25	77	116	鉄器	鉄滓	2001100	D地区	包含層		4.3	3.8	3.1	83.1	1T39
M26	77	116	鉄器	鉄滓	2001100	D地区	包含層		2.5	1.9	1.7	8.8	1T40
M27	77	116	鉄器	鉄滓	2001100	D地区	包含層		5.5	6.5	2.0	84.4	1T38
M28	77	116	鉄器	椀形滓	2001100	D地区	包含層		11.0	11.7	4.1	529.5	1T37
M29	77	116	鉄器	椀形滓	2001100	D地区	包含層		8.5	11.7	4.2	374.5	1T45
M30	78	12・117	鉄器	刀子	2001100	D地区	ST215D		24.2+	2.5	1.0	100.3	1T28
M31	78	117	鉄器	刀子	2001100	D地区	包含層		14.9+	3.2	0.8	104.3	1T27
M32	78	117	鉄器	鎌	2001100	D地区	包含層		25.3+	3.4		77.6	1T25
M33	108	141	鉄製品	釘	2003090	E地区	SB015E	P5117E	6.7	0.6	0.4	3.6	3T08
M34	108	141	鉄製品	釘	2003090	E地区	SK077E		3.3+	0.4	0.4	1.2	3T11
M35	108	141	鉄製品	不明	2003090	E地区	P0110E		6.2+	1.7	1.2	28.0	3T13
M36	108	141	鉄製品	小札	2003090	E地区	包含層		6.0+	2.4	0.3	6.1	3T05
M37	108	141	鉄製品	小札	2003090	E地区	包含層		4.4+	2.4	0.3	5.1	3T03
M38	108	141	鉄製品	不明	2003090	E地区	SK076E		4.0+	2.9+	0.4	6.9	3T09
M39	122	154	銅銭	寛永通寶	2003090	F地区	包含層		2.4	2.4	0.1	2.0	3T01
M40	第25図	27・28	銅製品	鏡	2004012	G－2地区	経筒		10.3	10.3	1.0	97.6	4T01

報　告　書　抄　録

ふりがな	たのくちいせき
書名	田ノ口遺跡
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅰ)建設に伴う発掘調査報告書Ⅹ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第408冊
編著者名	篠宮　正(編)・西口圭介・山田清朝・岡田章一・岡本一秀・青木哲哉・㈱加速器分析研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１－１　　℡079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１　　℡078-341-7711
発行年月日	2011(平成23)年３月22日

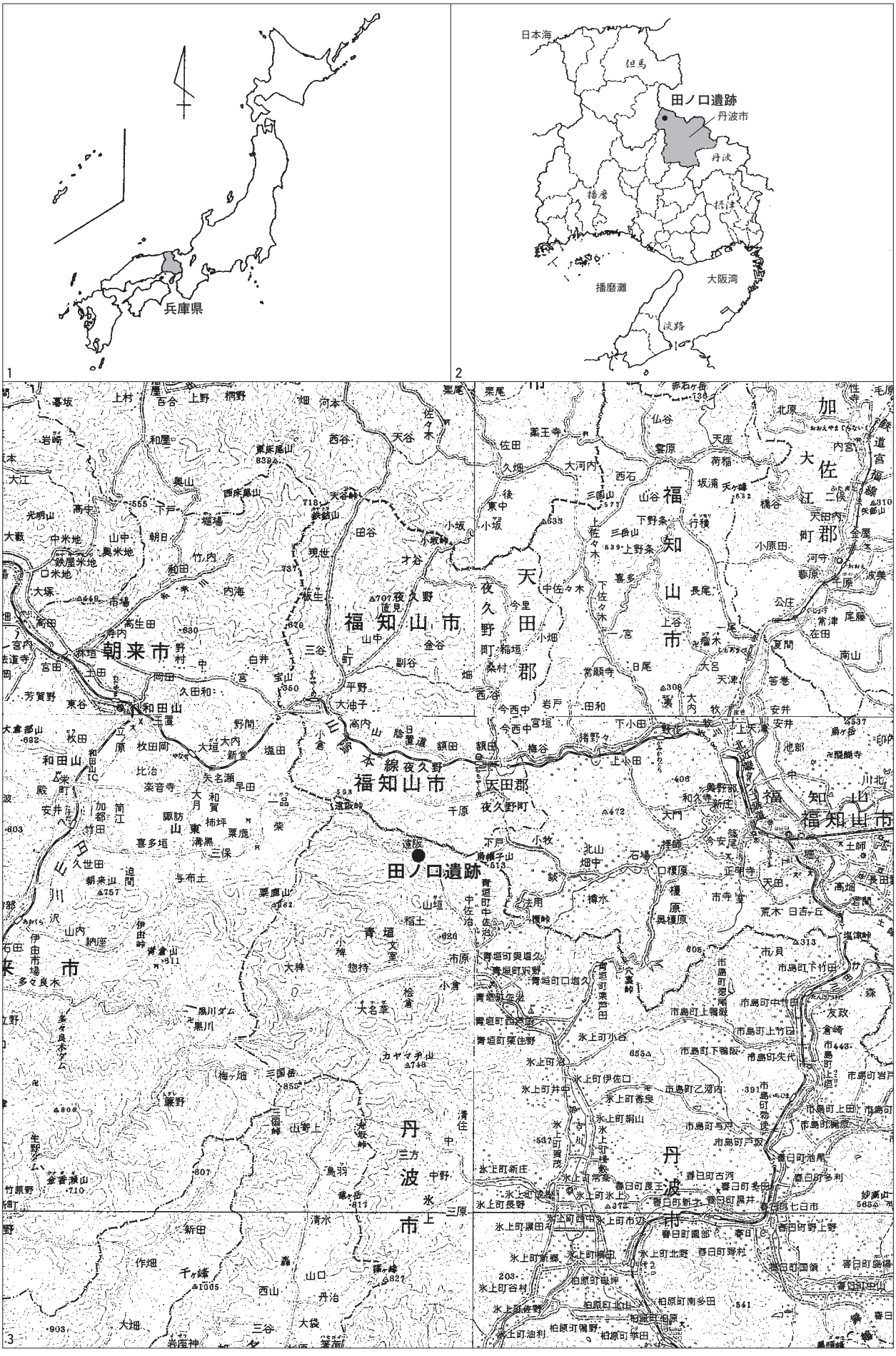
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
田ノ口遺跡	兵庫県(ひょうごけん) 丹波市(たんばし) 青垣町(あおがきちょう) 遠阪(とおさか)	28223	780057	35度 17分 26秒	134度 58分 23秒	確認調査 2000年11月６日～ 2001年１月19日	520㎡	一般国道483号 北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅰ)建設
						本発掘調査・確認 2001年８月29日～ 12月８日	4,113㎡	
						本発掘調査・確認 2001年８月29日～ 12月８日	324㎡	
						本発掘調査・確認 2003年８月22日～ 2004年２月25日	4,410㎡	
						本発掘調査 2004年７月12日～ ８月14日	296㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田ノ口遺跡	集落	縄文～ 弥生時代 古墳時代 平安時代～ 安土桃山時代	落ち込み 竪穴住居・土坑・掘立柱建物 掘立柱建物・土坑・集石・溝・鍛冶炉・墓・経塚・水田	縄文土器(後期・晩期)・石鏃・石棒 弥生土器(前期) 土師器・須恵器 土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器・磁器 木器(漆椀) 石器(砥石) 鉄器(鍋・刀子・鋤先・釘・小札) 青銅器(山吹蝶鳥鏡・銭)	

調査概要	田ノ口遺跡は主として11世紀から16世紀にかけて継続する集落で、平地部分では掘立柱建物　棟、土坑、集石、溝、鍛冶炉、墓と水田、山の尾根部分では経塚、墓を検出した。特に掘立柱建物の重複が著しい。経塚からは東播系須恵器甕と鉢の外容器から和鏡が出土した。古代山陰道沿いの丹波国最西端の集落の位置づけができる。 古墳時代の遺構は希薄であるが竪穴住居と土坑を検出した。 縄文時代晩期から弥生時代にかけての落ち込みからは、最終末の突帯文土器と弥生前期土器が伴って出土している。加古川水系の最も上流である。

＊緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

図版

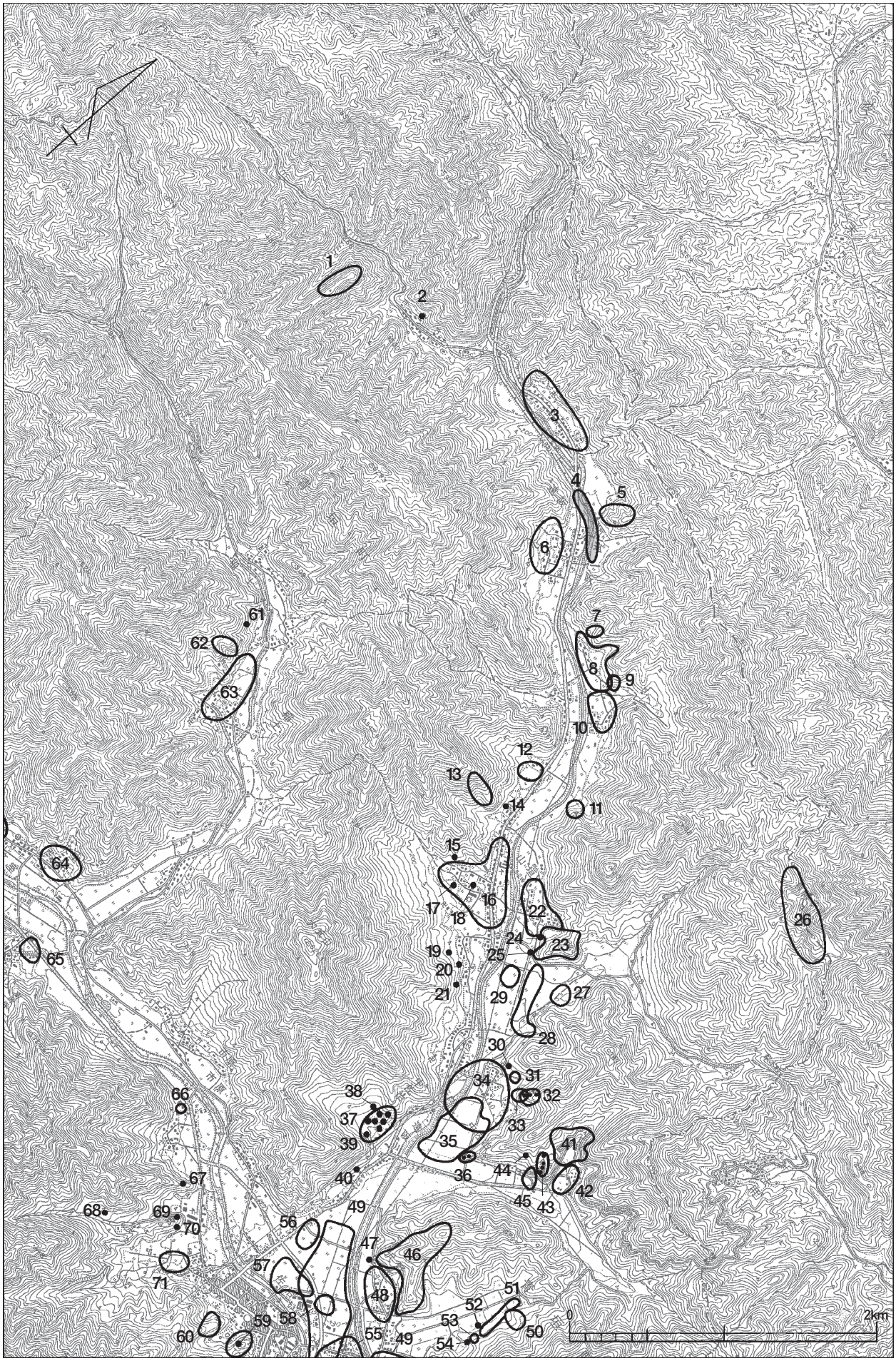


1 兵庫県の位置　　2 丹波市の位置　　3 田ノ口遺跡の位置(1/200,000)

図版2 遺跡

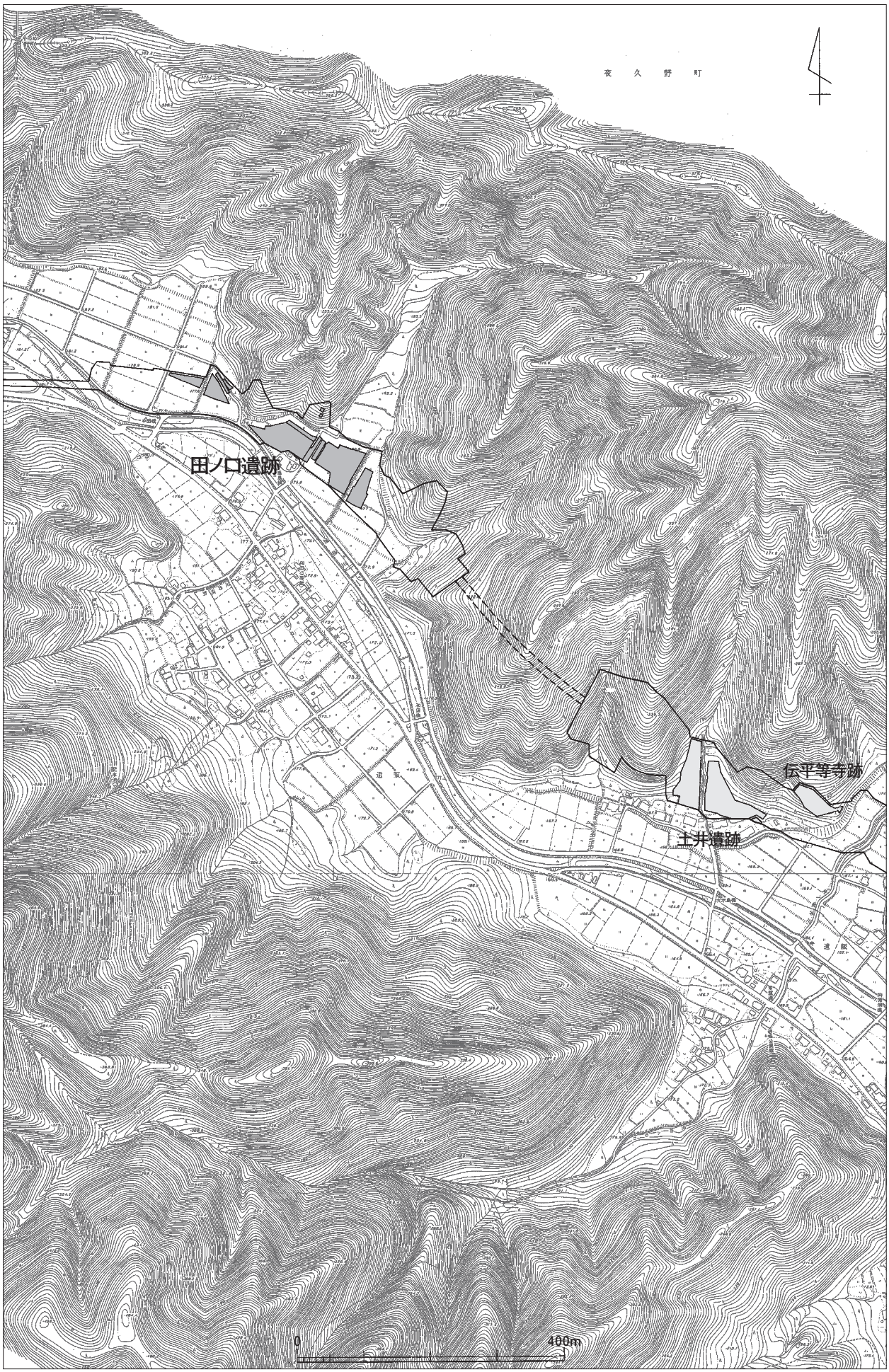
田ノ口遺跡周辺の主要遺跡一覧

図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	780054	遠阪城跡	丹波市青垣町遠阪	中世	城館
2	780055	鶏足寺経塚	丹波市青垣町遠阪	中世	経塚
3	780056	町上･町並遺跡	丹波市青垣町遠阪	近世	散布地
4	780057	田ノ口遺跡	丹波市青垣町遠阪	縄文～中世	集落・墳墓・経塚
5	780037	田ノ口城跡	丹波市青垣町遠阪字田ノ口奥山	中世	城館
6	780058	ザイノ遺跡	丹波市青垣町遠阪	中世～近世	散布地
7	780059	湯落城跡	丹波市青垣町遠阪	中世	城館
8	780060	土井遺跡	丹波市青垣町遠阪	縄文～近世	集落・墳墓
9		伝平等寺跡	丹波市青垣町遠阪	中世	集落
10	780061	西ノ上遺跡	丹波市青垣町遠阪	中世	散布地
11	780063	中ヶ谷城跡	丹波市青垣町山垣	古墳～近世	城館
12			丹波市青垣町山垣	中世	散布地
13	780036	松倉城跡	丹波市青垣町山垣寺奥山	中世	城館
14	780017	堀殿古墳	丹波市青垣町山垣字堀殿	古墳	古墳
15	780016	唐鍬古墳	丹波市青垣町山垣字唐鍬	古墳	古墳
16	780064	遠阪遺跡	丹波市青垣町山垣	古墳～近世	散布地
17	780013	横薮古墳	丹波市青垣町山垣字横薮	古墳	古墳
18	780014	上地前古墳	丹波市青垣町山垣字上地前	古墳	古墳
19	780015	西落古墳	丹波市青垣町山垣字西落	古墳	古墳
20	780068	荒神ヶ谷古墳	丹波市青垣町山垣	古墳	古墳
21	780028	天福寺跡	丹波市青垣町山垣字白石	中世	寺院
22	780065	山垣遺跡	丹波市青垣町山垣	奈良～近世	散布地
23	780035	山垣城跡	丹波市青垣町山垣字城山	中世	城館
24	780012	鉢ノ木田古墳	丹波市青垣町山垣字針ノ木田	古墳	古墳
25	780066	東寺古墳	丹波市青垣町山垣	古墳	古墳
26	780062	烏帽子山城跡	丹波市青垣町山垣	中世	城館
27			丹波市青垣町山垣	奈良	散布地
28	780067	城ノ腰遺跡	丹波市青垣町山垣	奈良～中世	集落
29	780042	山垣館跡	丹波市青垣町山垣字堀の内	中世	城館
30	780070	見勢ノ尾古墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
31	780071	東寺遺跡	丹波市青垣町中佐治	古墳～中世	散布地
32	780072・780137・780138	中佐治1～3号墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
33	780073	中佐治城跡	丹波市青垣町中佐治	中世	城館
34	780069	中佐治遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良～近世	散布地
35	780039	中佐治条里	丹波市青垣町中佐治	中世	条里
36	780074・780139	ビハクビ1・2号墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
37	780053	応相寺遺跡	丹波市青垣町応相寺	古墳・中世	集落
38	780027	応相寺跡	丹波市青垣町中佐治字応相寺	近世	寺院
39	780003・780128～780133	応相寺1～7号墳	丹波市青垣町中佐治応相寺	古墳	古墳
40	780041	代官屋敷跡	丹波市青垣町中佐治字田辺	中世	城館
41	780011	早坂古墳	丹波市青垣町山垣字早坂	古墳	古墳
42	780075	有河内遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良～近世	散布地
43	780076・780140～780142	平野1～4号墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
44	780077	針ノ木田古墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
45	780078	平野遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良・平安	散布地
46	780034	寺内城跡(小和田城跡)	丹波市青垣町澤野字谷替	中世	城館
47	780026	極楽寺跡	丹波市青垣町澤野字寺山	近世	寺院
48	780086	小和田遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～近世	散布地
49	780038	沢野条里	丹波市青垣町澤野条里	中世	条里
50	780088	沢野城跡	丹波市青垣町沢野	中世	城館
51	780087	今村谷古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
52	780089	沢野奥古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
53	780090	オオサルタ城跡	丹波市青垣町沢野	中世	城館
54	780091	オオサルタ古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
55	780052	沢野遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	集落
56	780079	大海遺跡	丹波市青垣町沢野	古墳～平安	散布地
57	780080	中市場遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	散布地
58	780081	カシヤカイ遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良・平安	散布地
59	780018	佐治丸山古墳	丹波市青垣町佐治字丸山	古墳	古墳
60	780033	佐治城跡	丹波市青垣町佐治字丸山	中世	城館
61	780029	常光院跡	丹波市青垣町稲土字香野	近世	寺院
62	780121	稲土城跡	丹波市青垣町稲土	中世	城館
63	780122	稲土遺跡	丹波市青垣町稲土	奈良～近世	散布地
64	780123	文室遺跡	丹波市青垣町文室	奈良・平安	散布地
65	780043	檜倉製銅遺跡	丹波市青垣町檜倉字大道端	近世	製銅
66	780082	佐治神社祭祀遺跡	丹波市青垣町小倉	奈良～近世	祭祀
67	780010	段ヶ谷古墳	丹波市青垣町小倉字段ヶ谷	古墳	古墳
68	780084	石仏山大通寺跡	丹波市青垣町小倉	近世	寺院
69	780083	段ヶ端古墳	丹波市青垣町小倉	古墳	古墳
70	780023	光明寺跡	丹波市青垣町小倉字ボウケ谷	近世	寺院
71	780085	梅ノ本遺跡	丹波市青垣町佐治	奈良～中世	散布地



田ノ口遺跡周辺の主要遺跡（1/35,000）

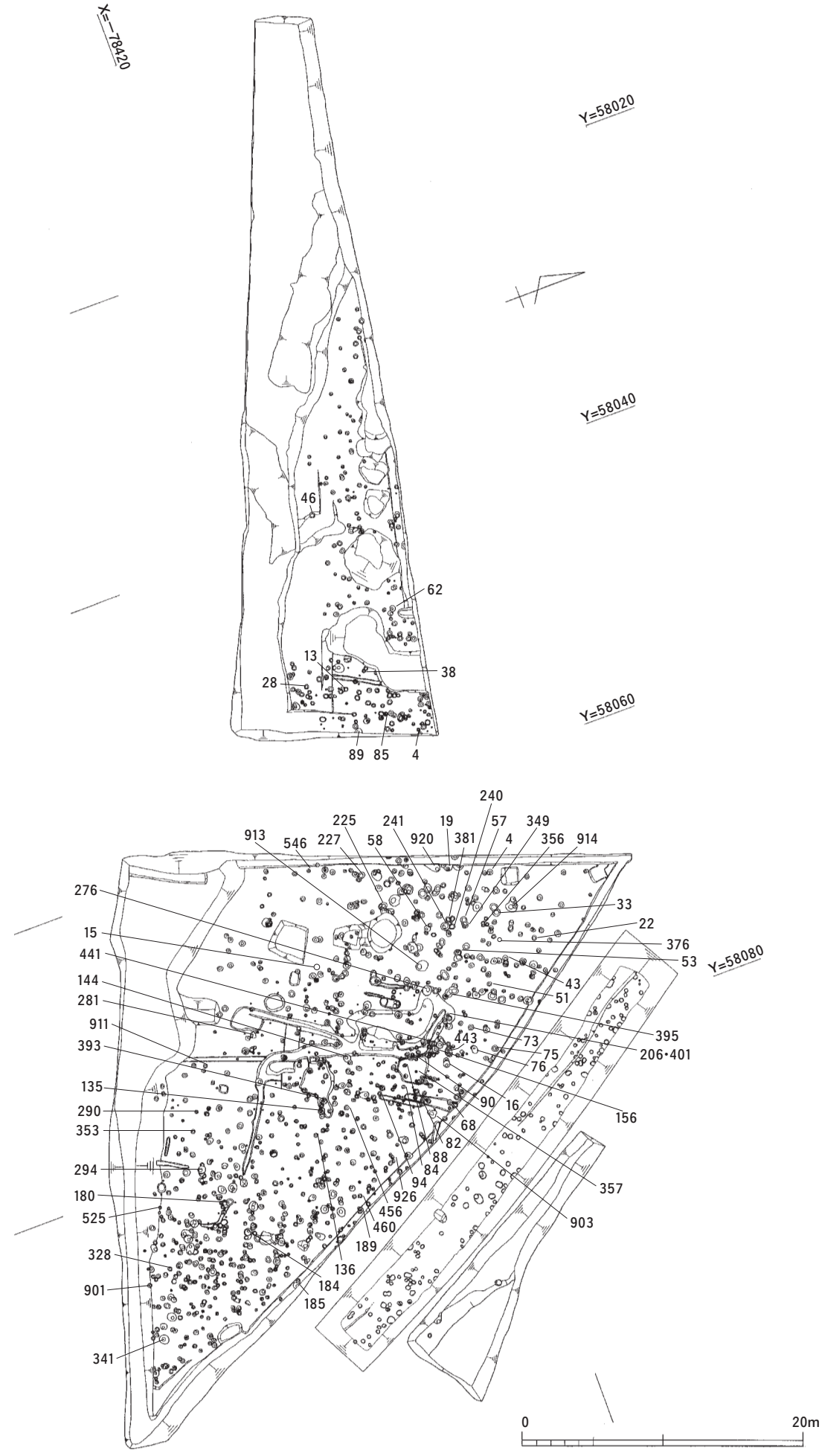
図版4　遺跡



道路計画と田ノ口遺跡の位置(1/8,000)

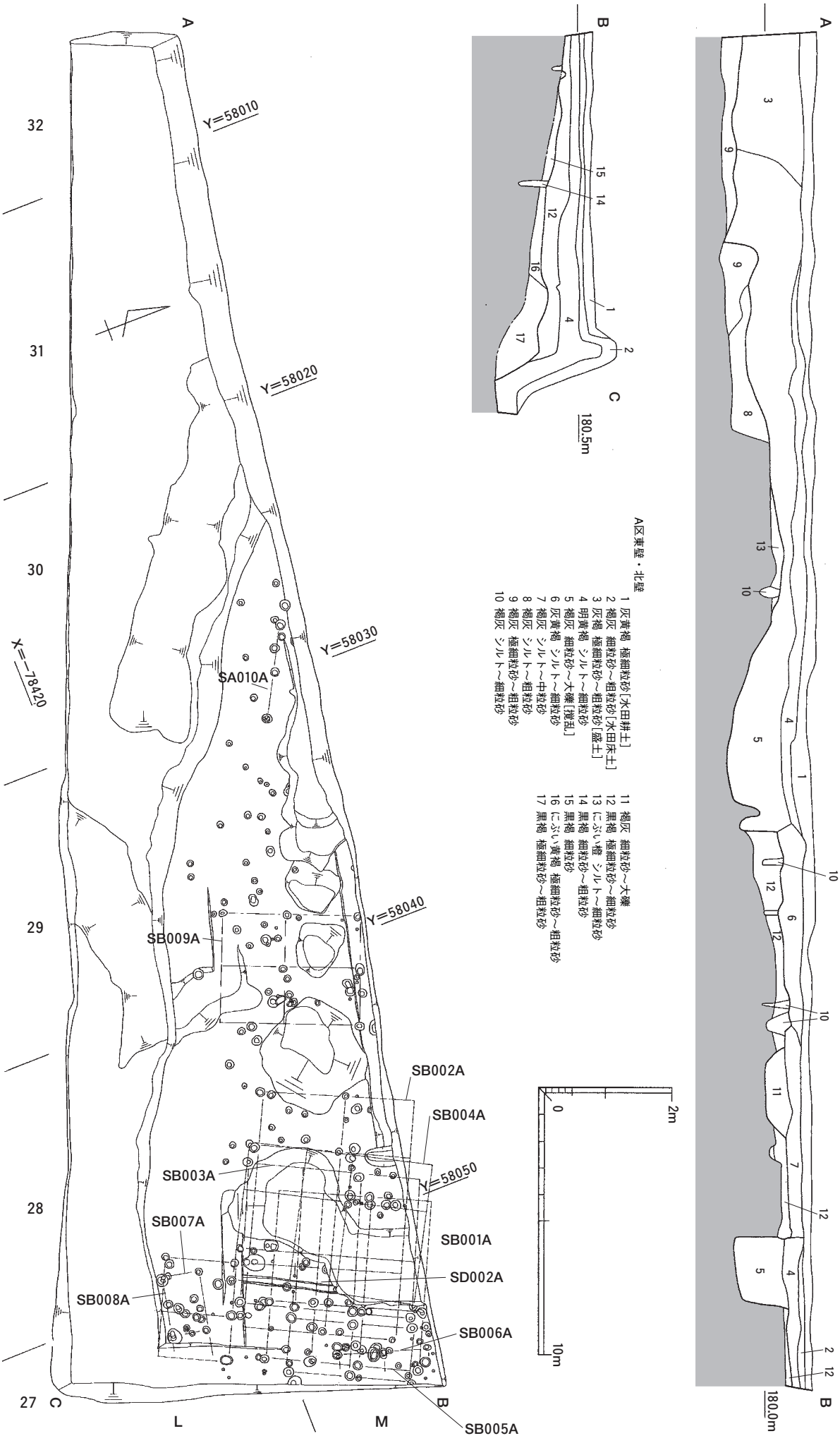
確認調査と本発掘調査の位置(1/2,000)

図版6　A・B・C地区　遺構



調査区全体図(1/400)

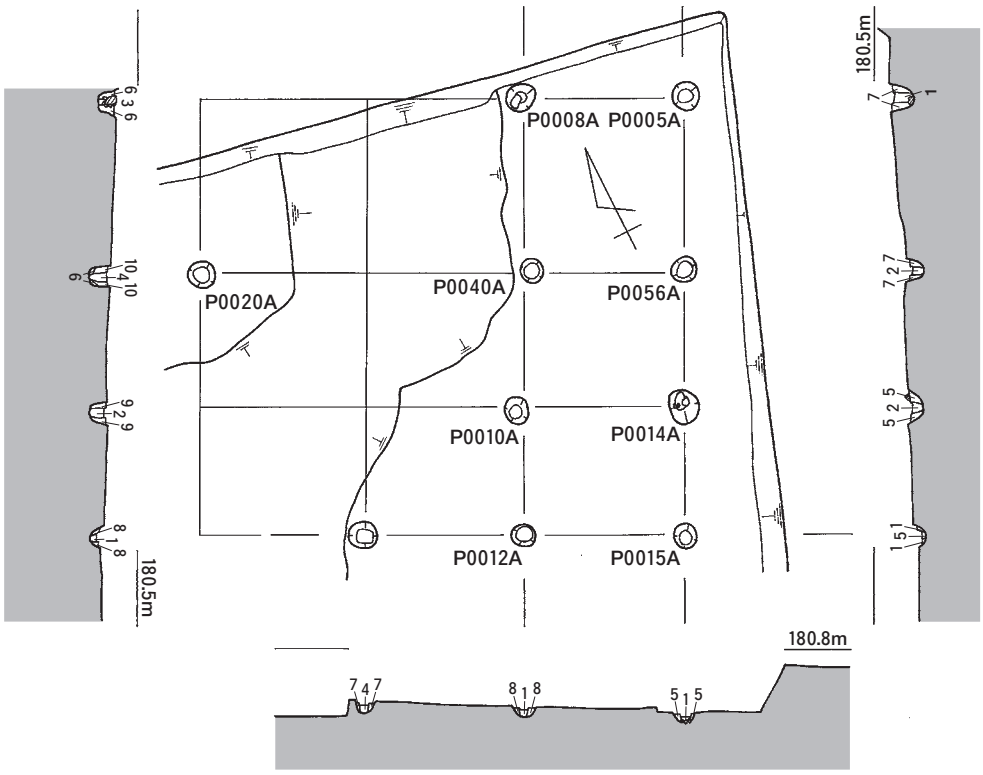
図版7　A地区　遺構



遺構配置図・土層断面(1/200・1/80)

図版8　A地区　遺構

SB001A



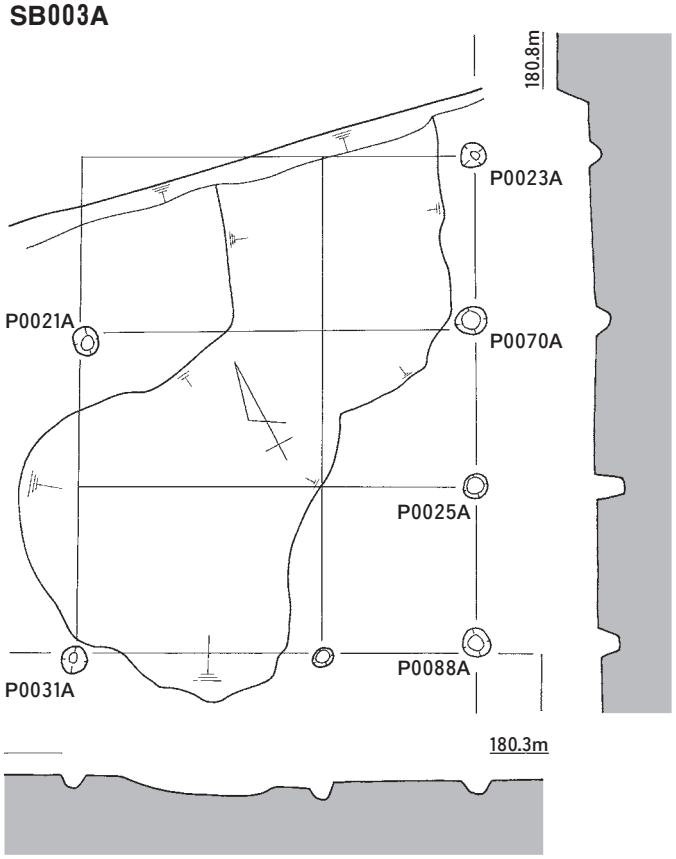
1 褐灰　シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
2 灰黄褐　シルト質極細砂～中粒砂(中礫少量・炭含む)
3 灰黄褐　シルト質極細砂～細砂
4 黒褐　シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
5 褐灰　シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
6 褐灰　シルト質極細砂～細砂(大礫含む)
7 灰褐　シルト質極細砂～中粒砂(中礫少量・炭含む)
8 灰黄褐　シルト質細砂～中粒砂
9 にぶい黄褐　シルト質極細砂～中粒砂
10 黒褐　シルト質極細砂～中粒砂(中礫少量含む)

SB002A

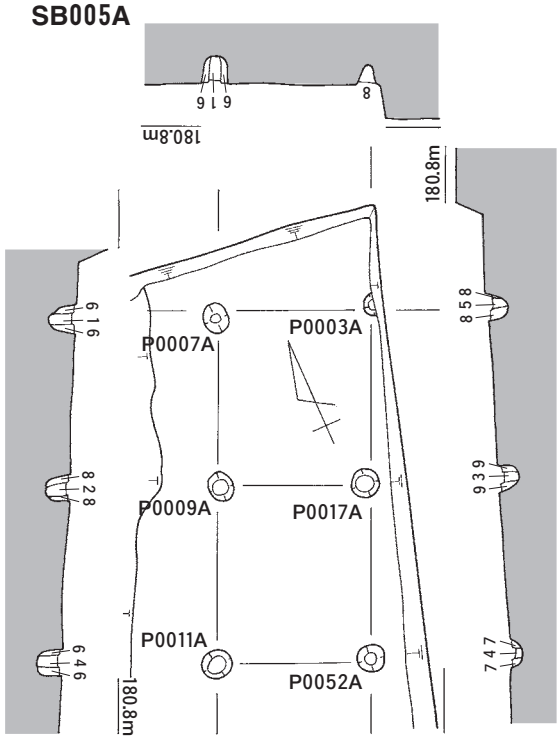
掘立柱建物SB001A(1/100)　　掘立柱建物SB002A(1/100)

図版9 A地区 遺構

SB003A

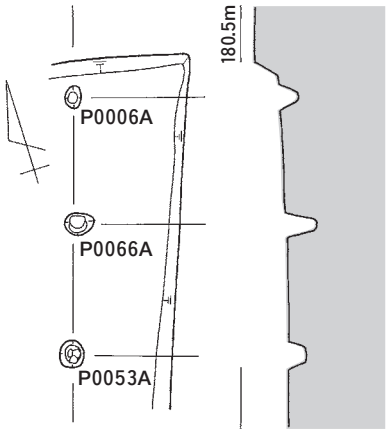


SB005A

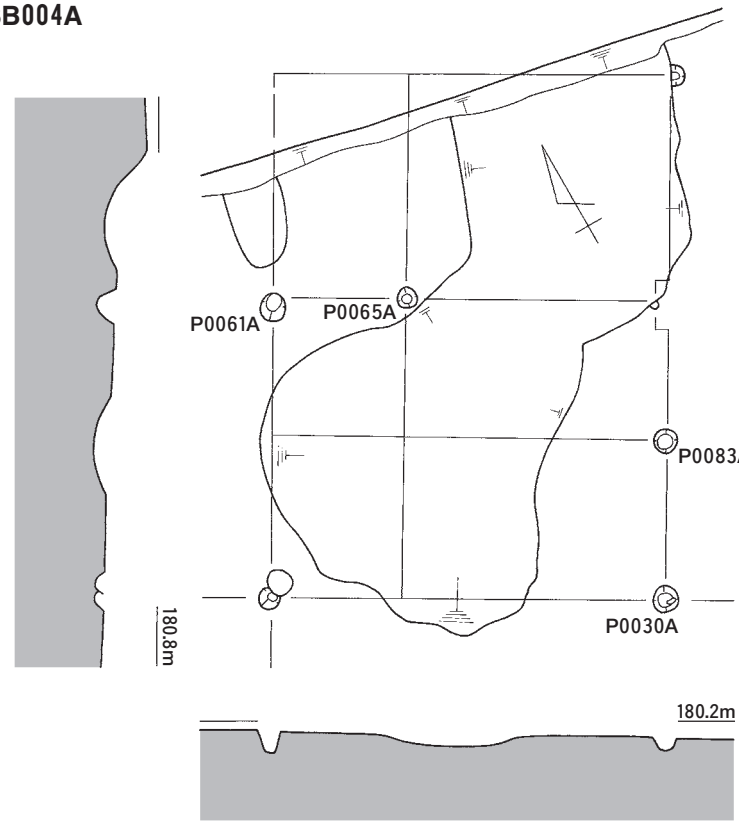


1 灰褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
2 褐灰 シルト質極細砂～細砂
3 灰黄褐 シルト質極細砂～細粒砂
4 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭少量含む)
5 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
6 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂
7 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭少量含む)
8 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂

SB006A



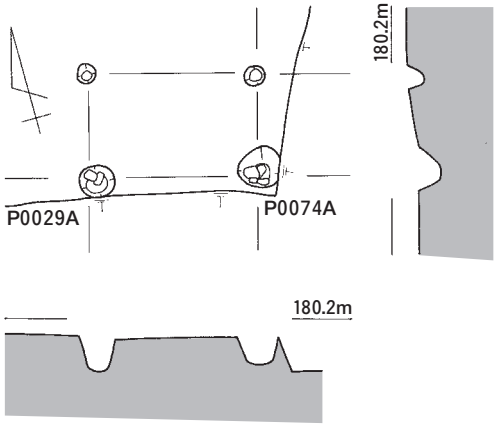
SB004A



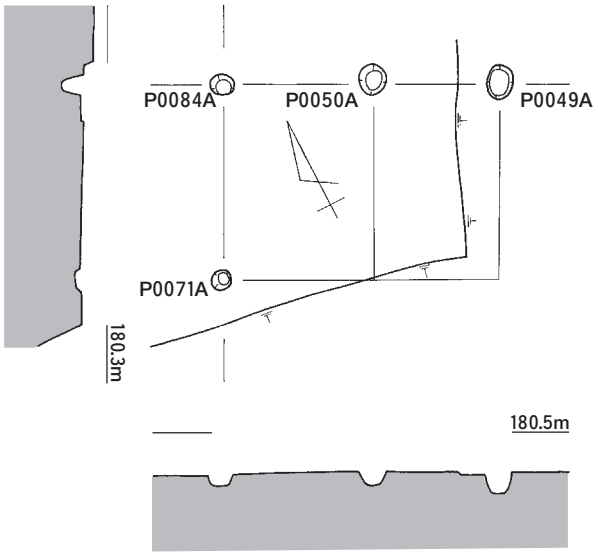
掘立柱建物SB003A(1/100)　掘立柱建物SB004A(1/100)
掘立柱建物SB005A(1/100)　掘立柱建物SB006A(1/100)

図版10　A地区　遺構

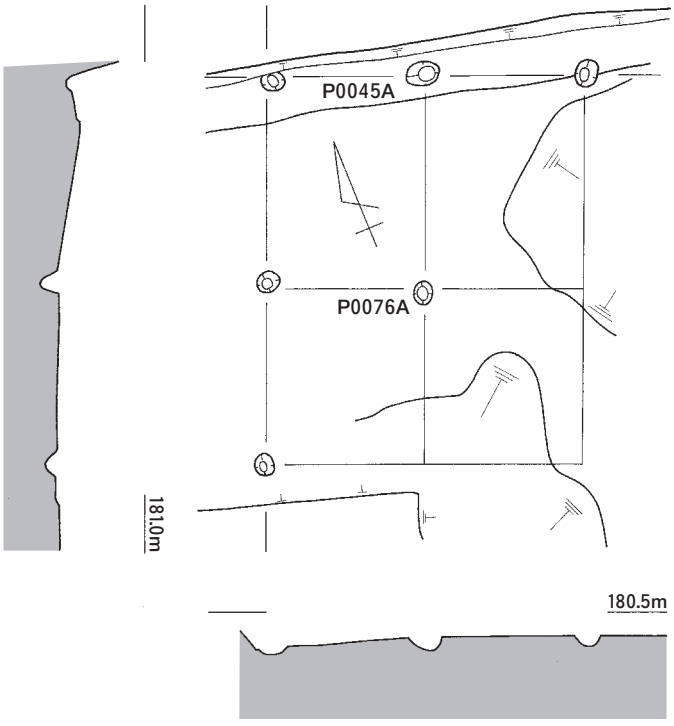
SB007A



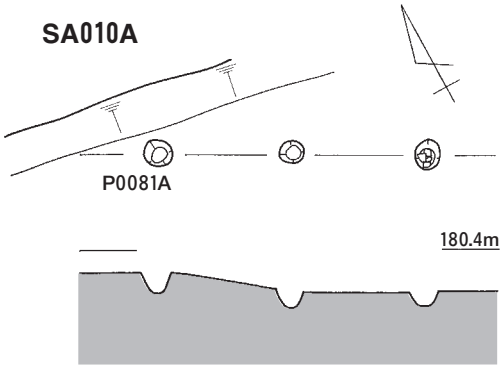
SB008A



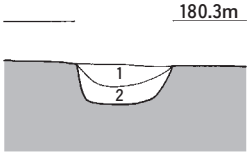
SB009A



SA010A

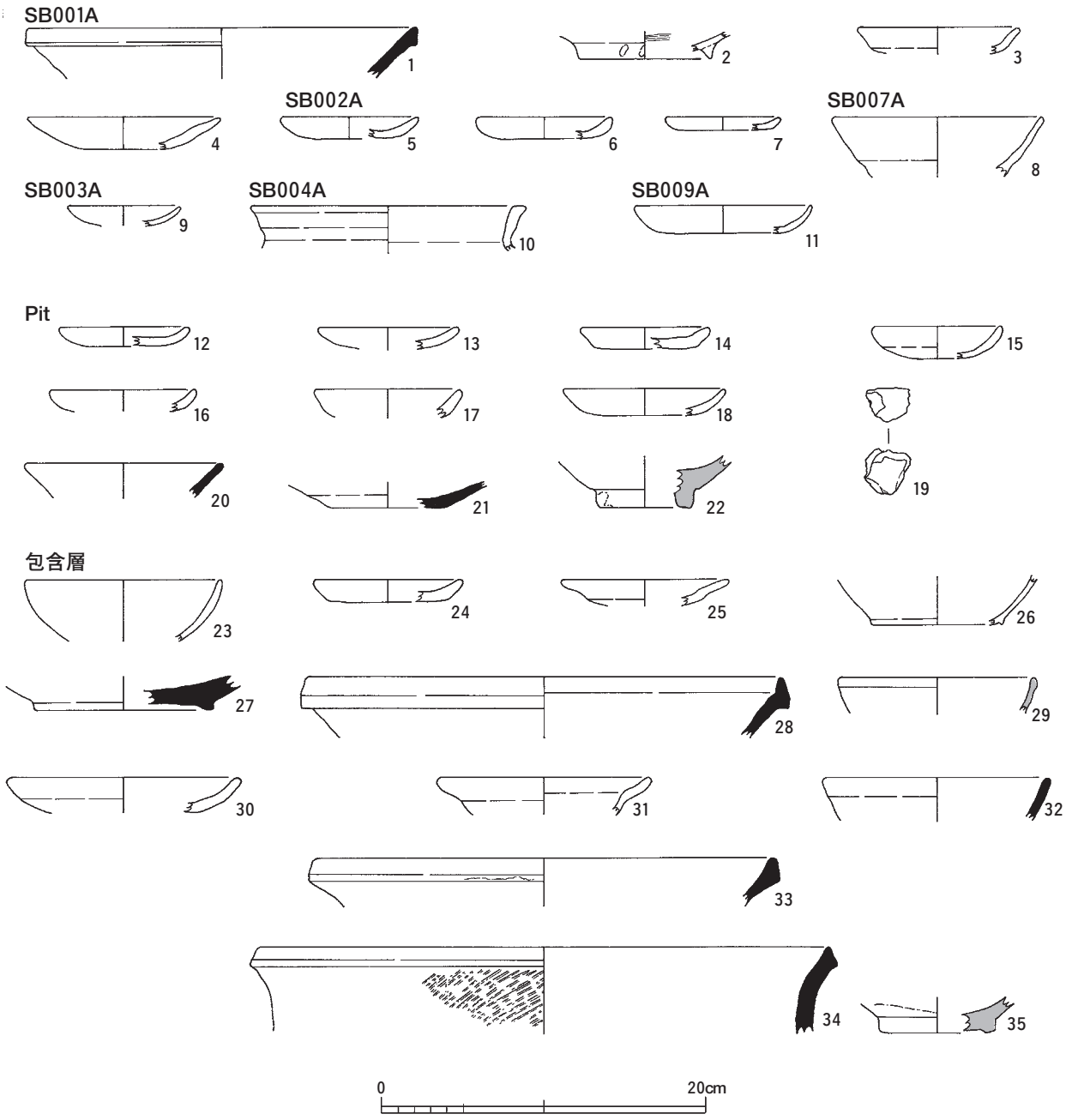


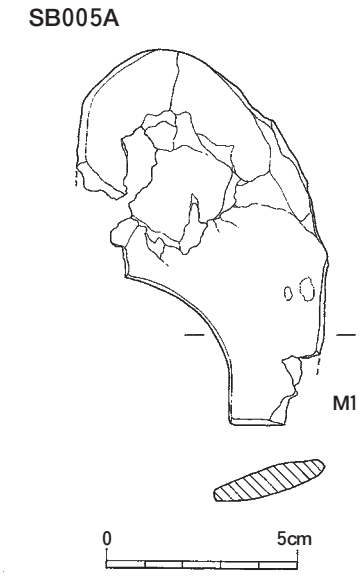
SD002A



1 灰黄褐 シルト～中粒砂(細礫～中礫含む)
2 褐灰 シルト～中粒砂(細礫～中礫含む)

掘立柱建物SB007A(1/100)　掘立柱建物SB008A(1/100)　掘立柱建物SB009A(1/100)
掘立柱建物SA010A(1/100)　溝SD002A(1/20)


SB001A
1
2
3
SB002A
4
5
6
7
SB007A
8
SB003A
9
SB004A
10
SB009A
11
Pit
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
包含層
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
20cm


SB005A
M1
0
5cm

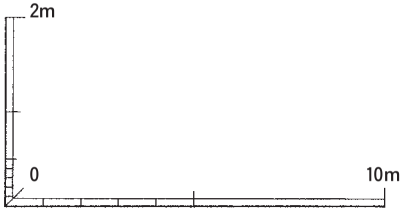
土器・金属器(1～35・M1)

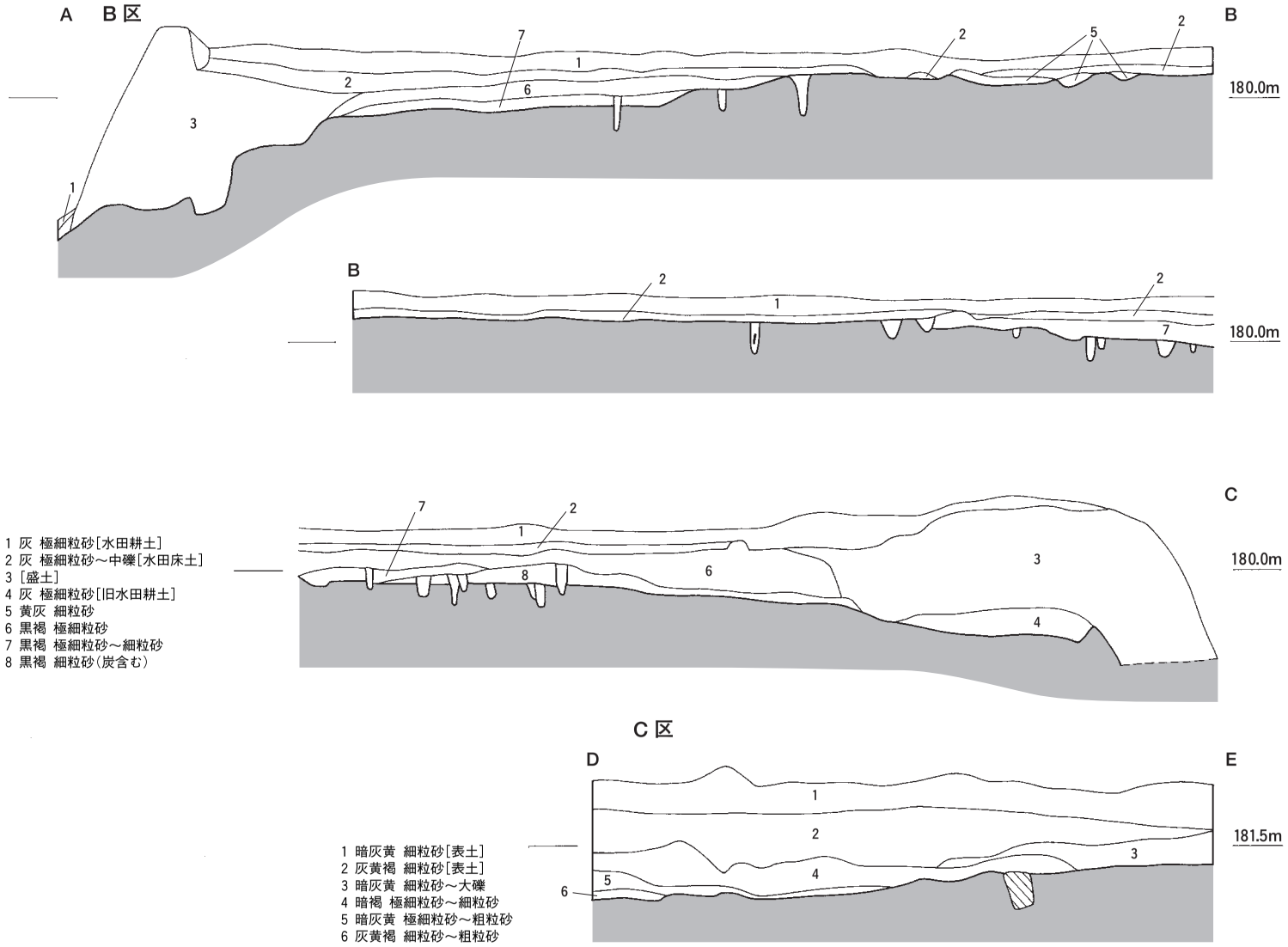
図版12 B・C地区 遺構

遺構配置図(1/250)

図版13　B・C地区　遺構

土層断面(1/200・1/80)

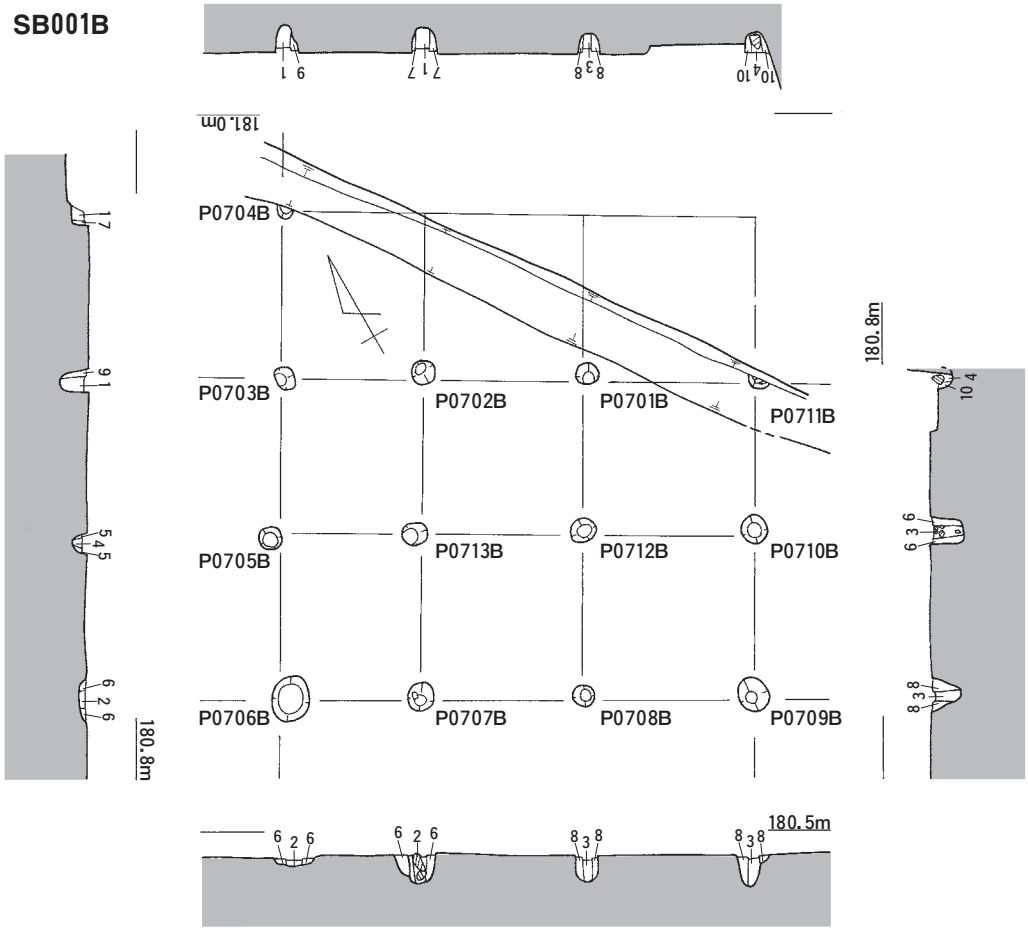




図版14　B地区　遺構

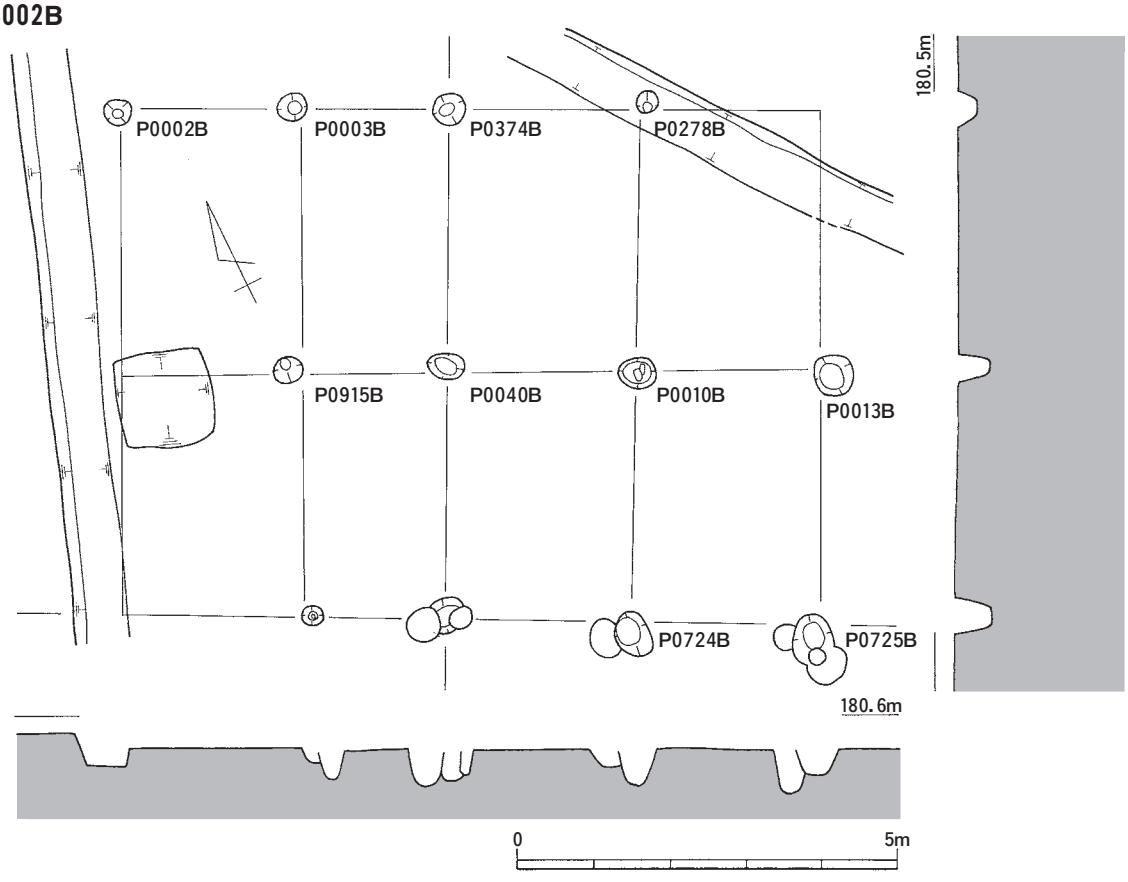
遺構配置図(1/200)

SB001B



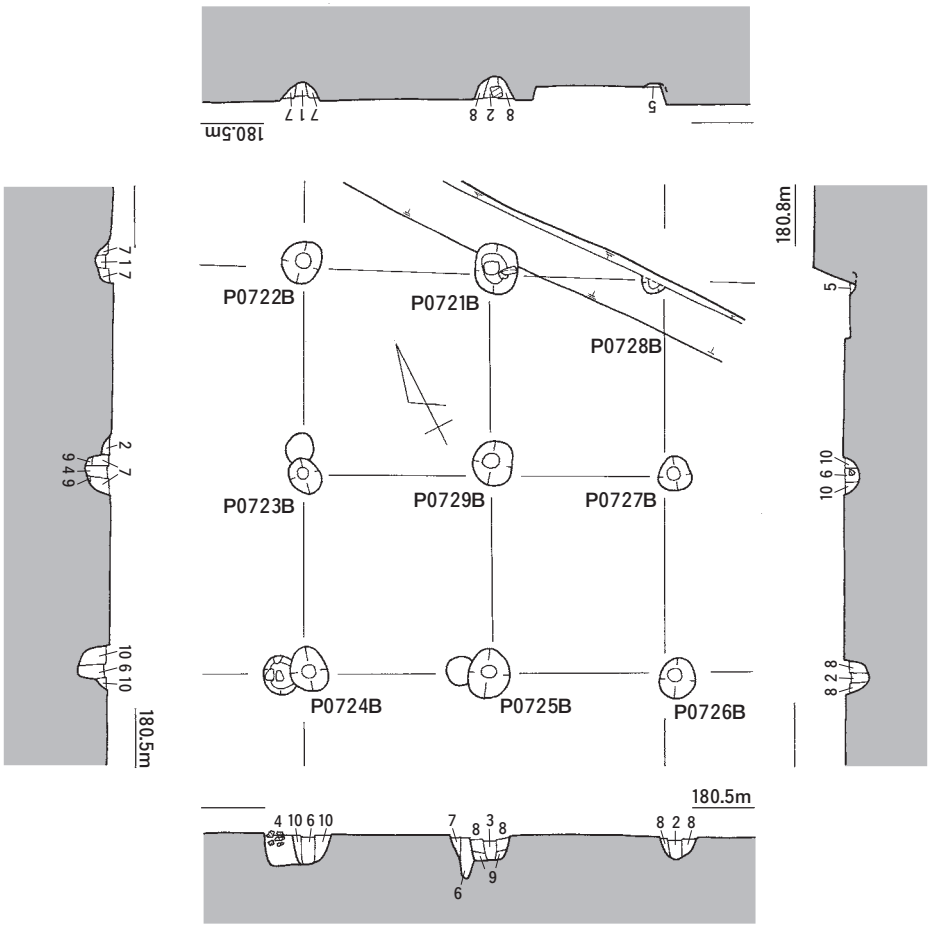
1 褐灰 シルト質極細砂～細砂(中礫少量・炭・焼土少量含む)
2 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭少量含む)
3 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
4 黒褐 シルト質極細砂～細砂(中礫・炭少量含む)
5 褐灰 シルト質極細砂～細砂(中礫・炭少量含む)
6 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
7 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂
8 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭少量含む)
9 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒多く含む)
10 暗褐 シルト質極細砂～細砂(中礫少量含む)

SB002B



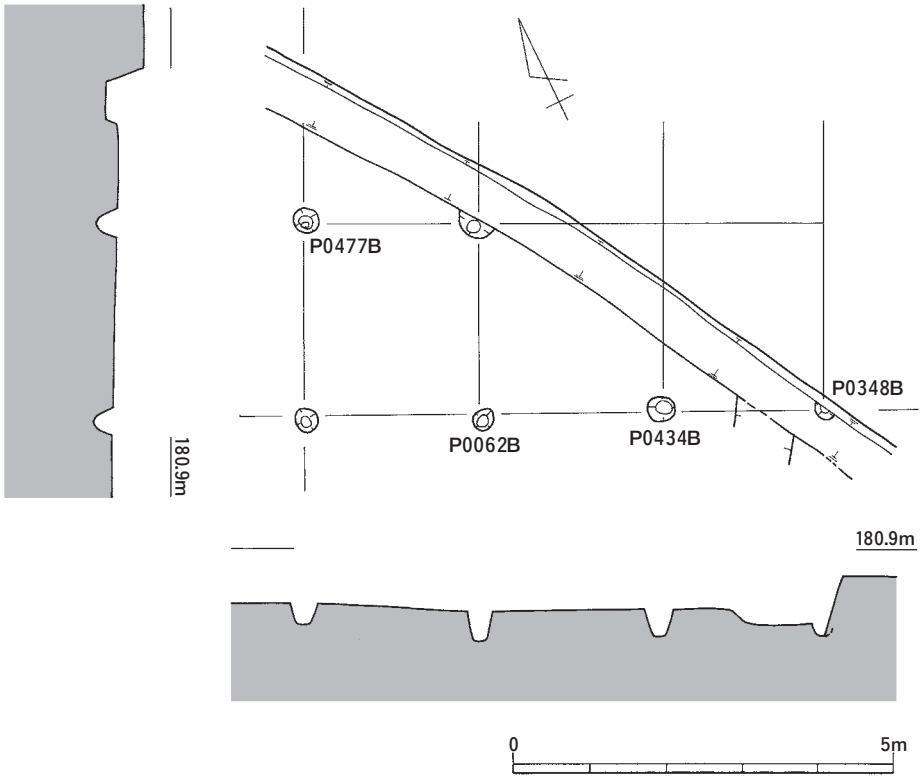
掘立柱建物SB001B(1/100)　掘立柱建物SB002B(1/100)

SB003B



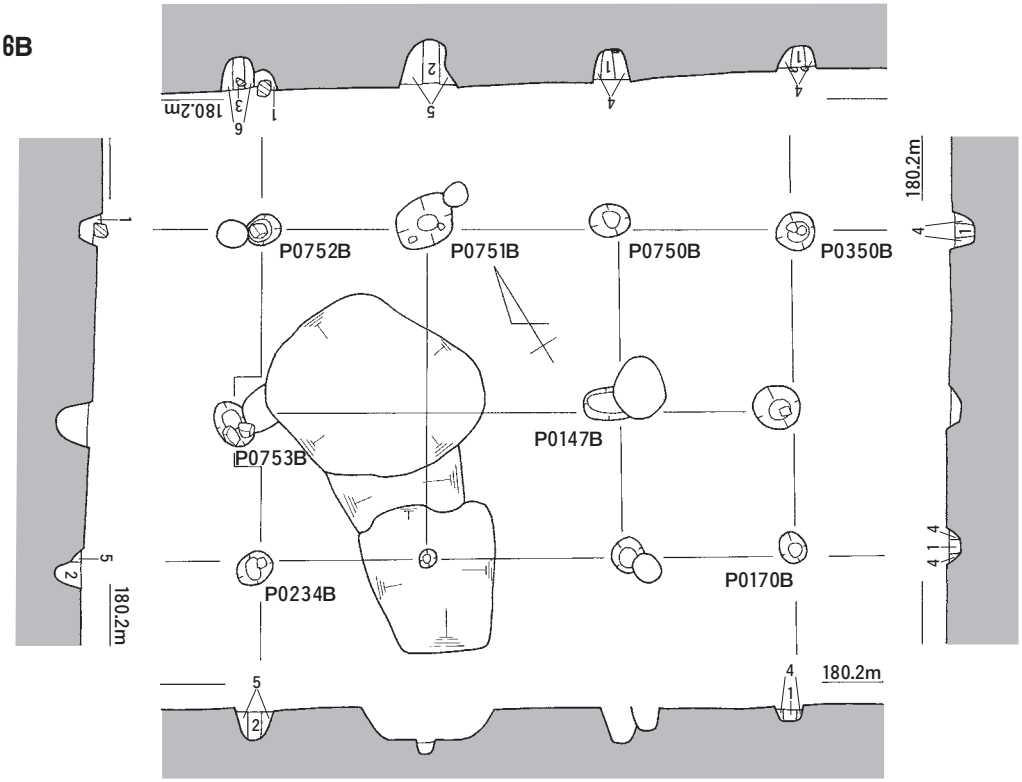
1 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒多量・細礫～中礫・炭含む)
2 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
3 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭少量含む)
4 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
5 灰黄褐 極細砂～細砂(中礫含む)
6 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
7 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒・細礫～中礫・炭含む)
8 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
9 褐灰 シルト質極細砂～細砂
10 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)

SB004B



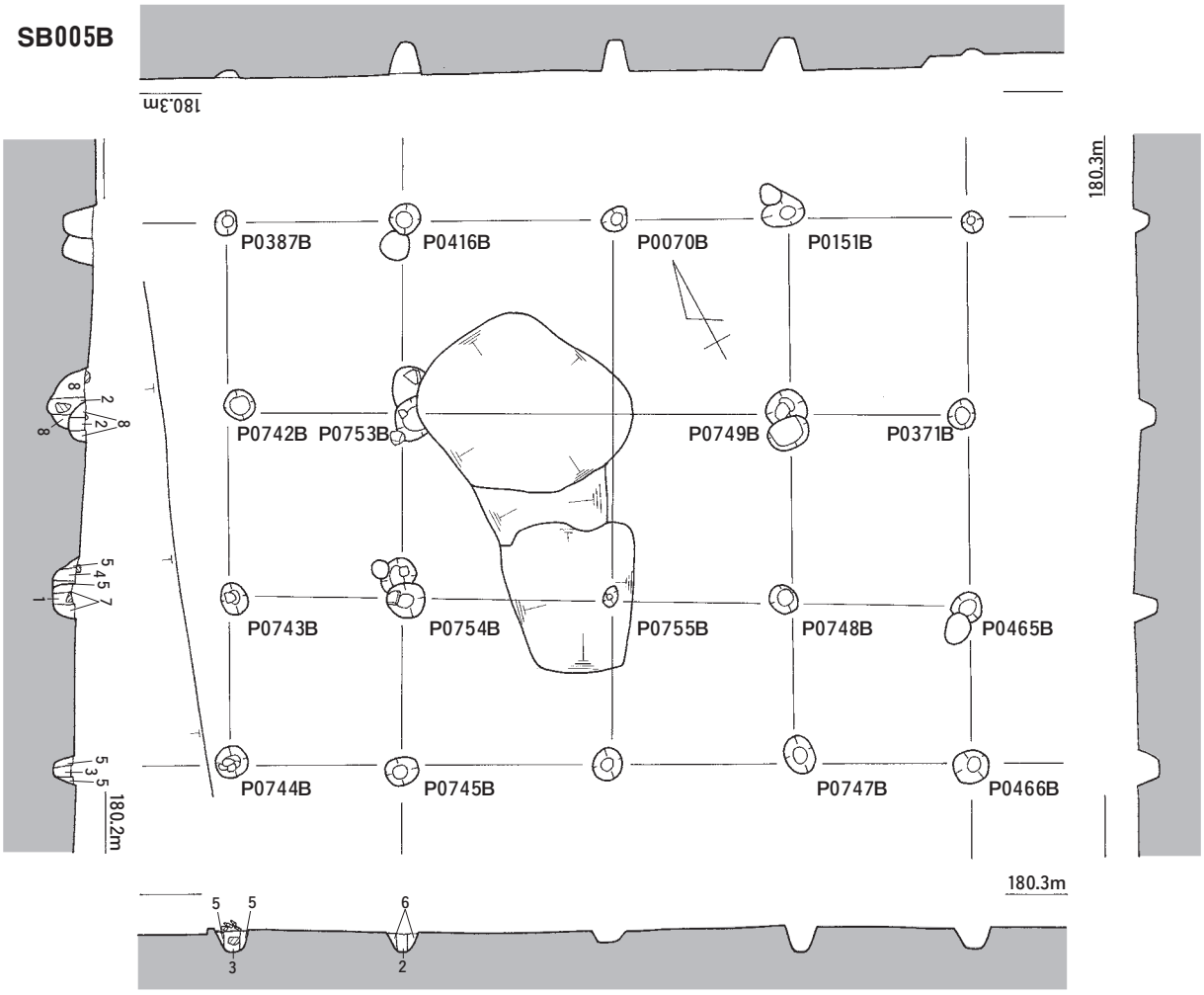
掘立柱建物SB003B(1/100)　　掘立柱建物SB004B(1/100)

SB006B



1 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
2 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
3 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐土粒・中礫・炭含む)
4 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
5 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐土粒・中礫～大礫・炭含む)
6 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂

SB005B



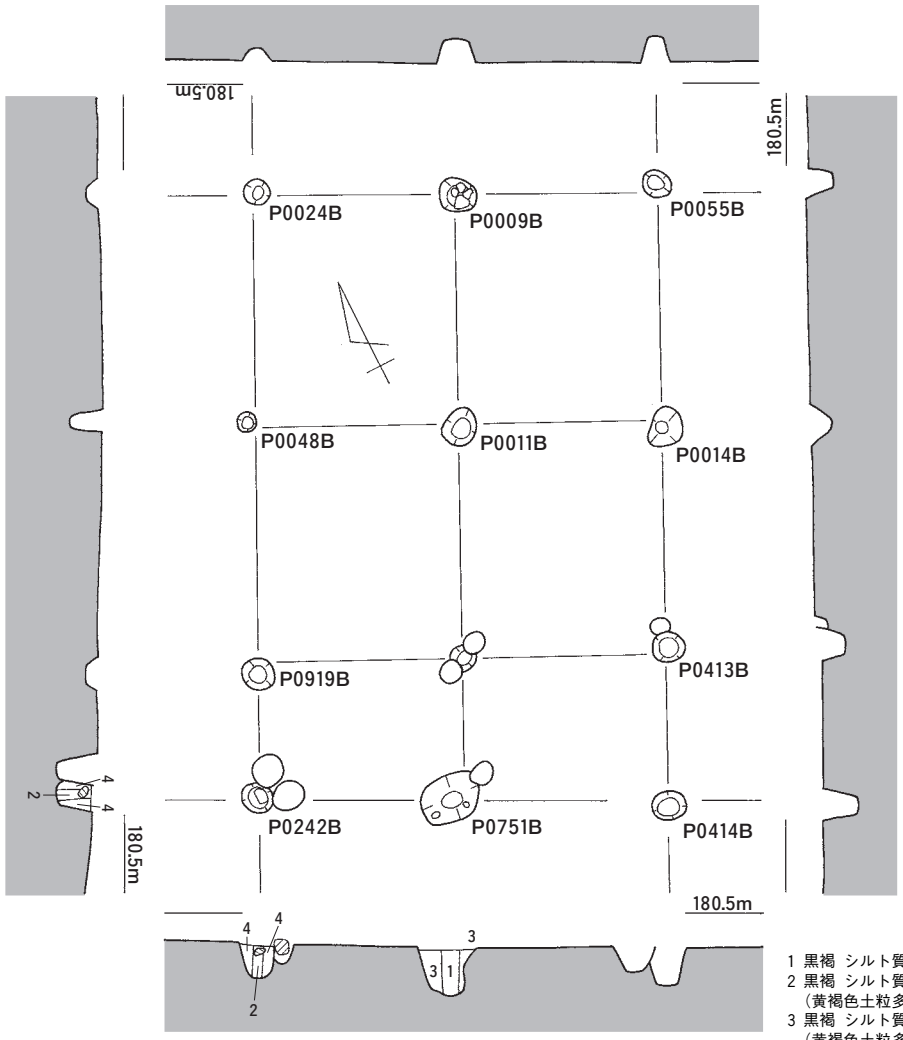
1 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫少量・炭含む)
2 黒褐 シルト質極細砂～細砂(中礫少量・炭含む)
3 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
4 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫含む)
5 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
6 暗褐 シルト質極細砂～中砂(黄褐土粒・中礫・炭含む)
7 黒褐 シルト質極細砂～細砂(中礫少量含む)
8 黒褐 シルト質極細砂～細砂(中礫・炭含む)

0 5m

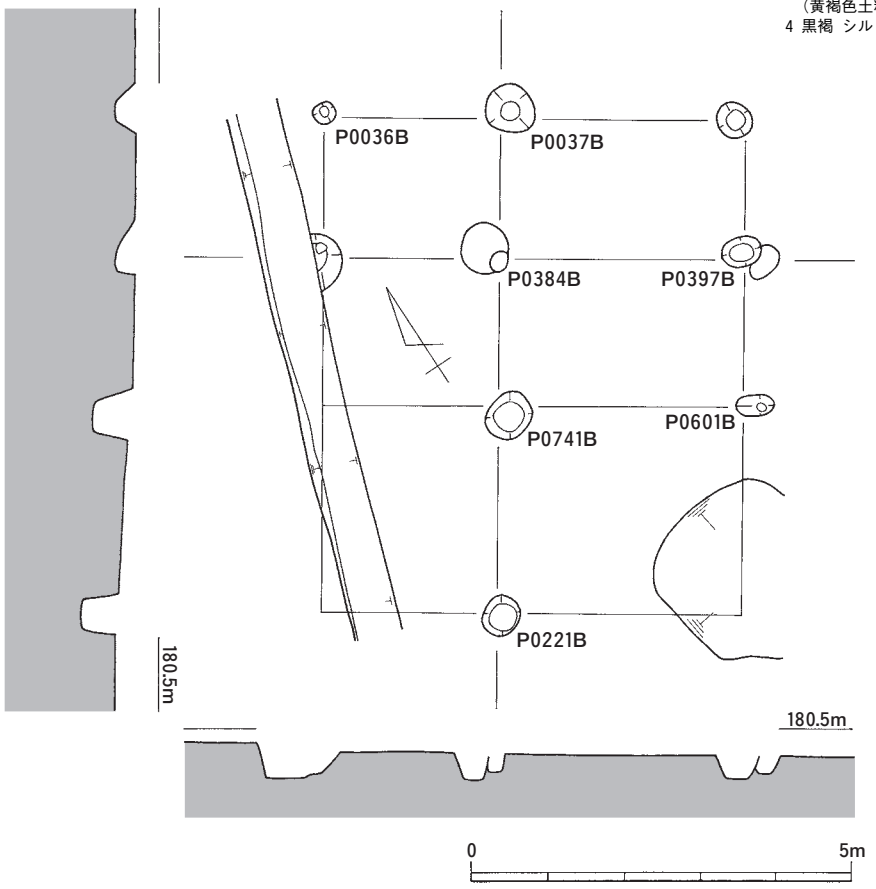
掘立柱建物SB005B(1/100)　掘立柱建物SB006B(1/100)

図版18　B地区　遺構

SB007B

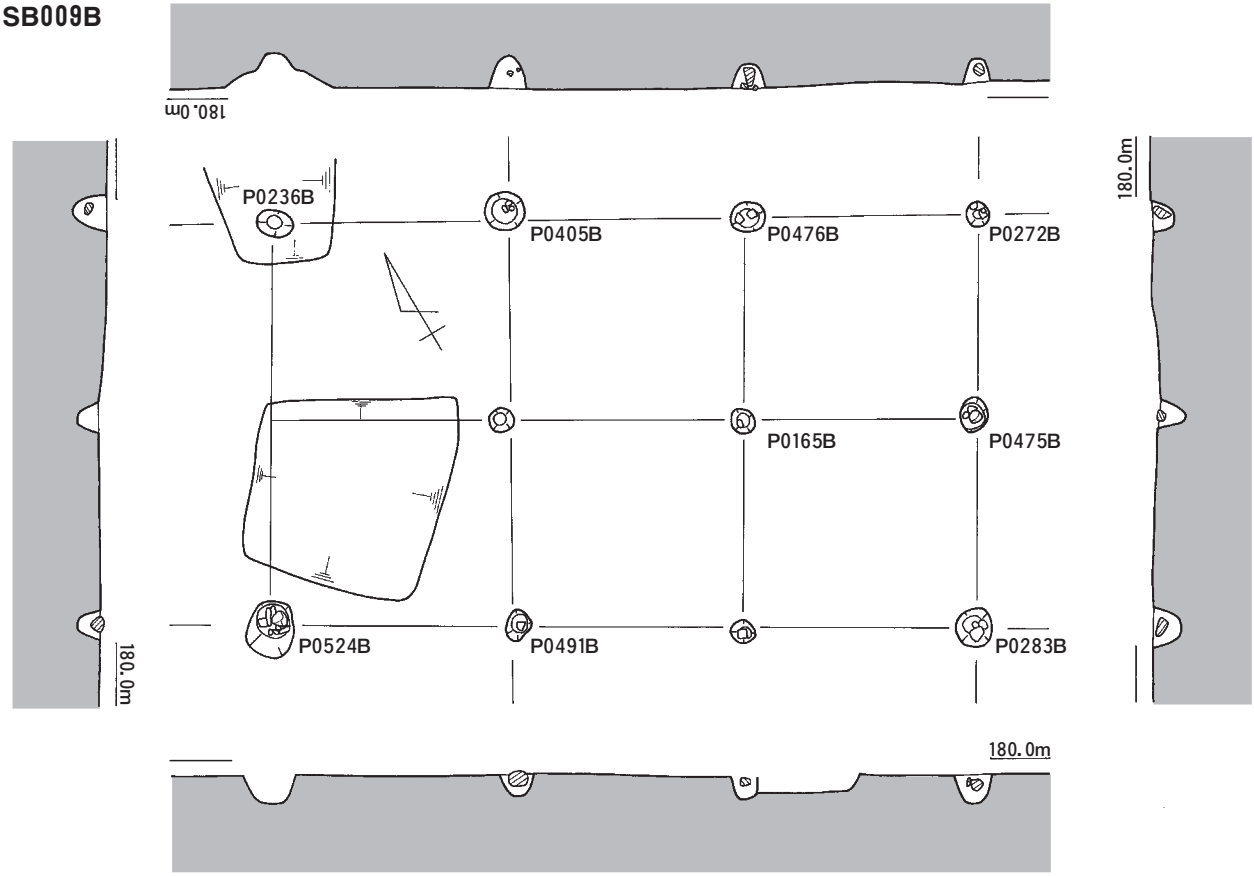


SB008B

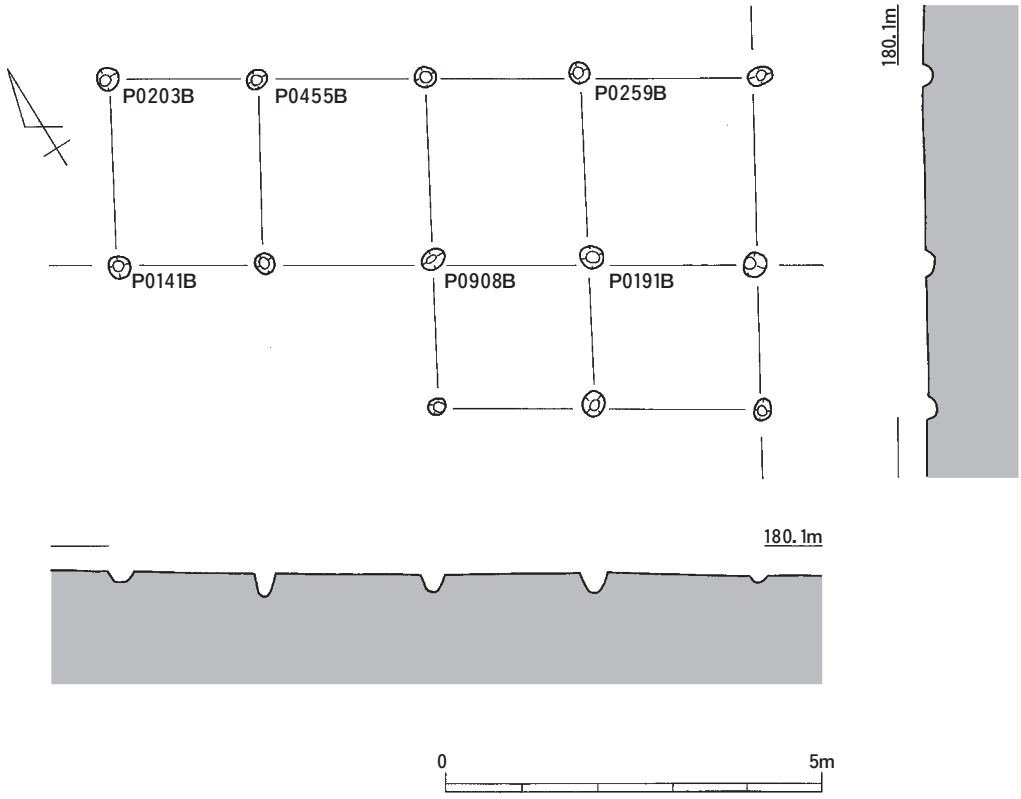


掘立柱建物SB007B(1/100)　　掘立柱建物SB008B(1/100)

SB009B

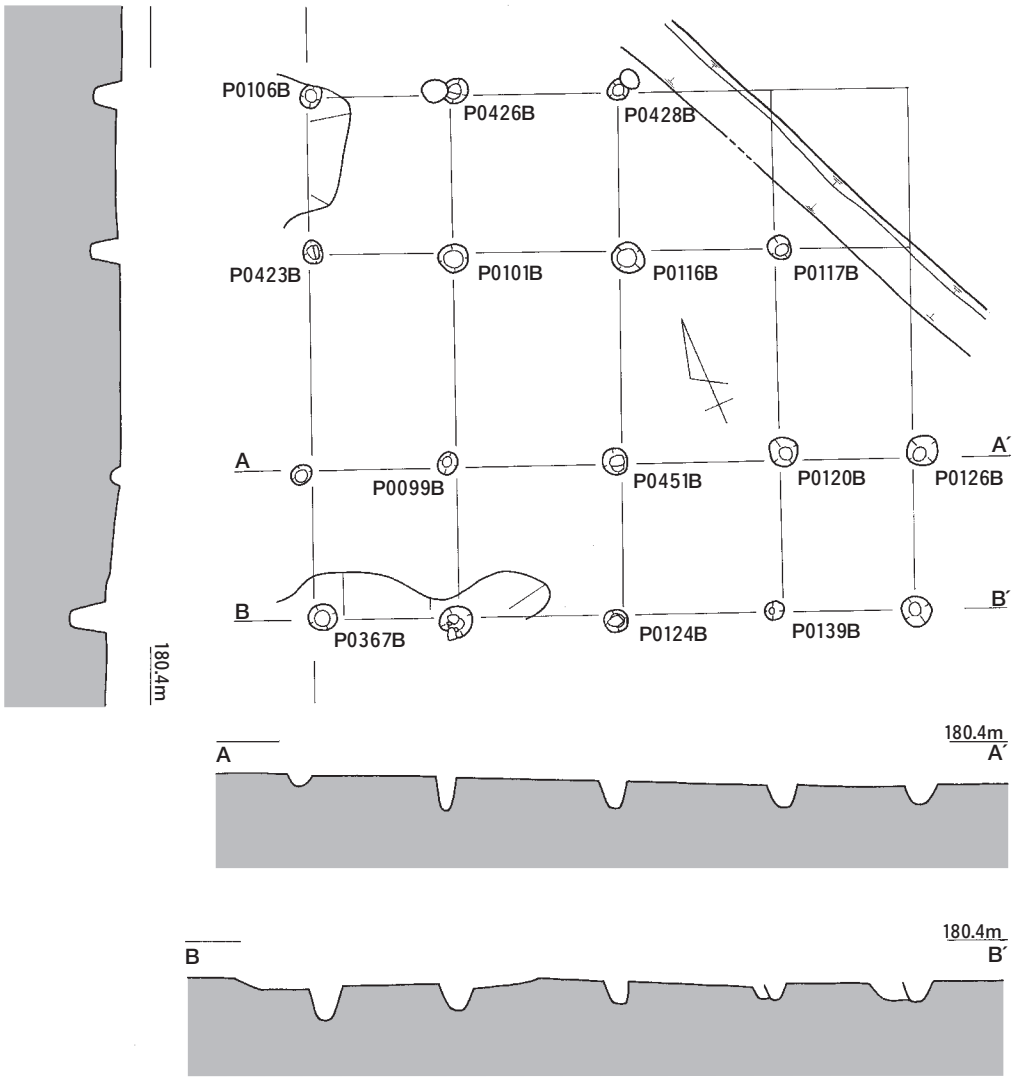


SB010B

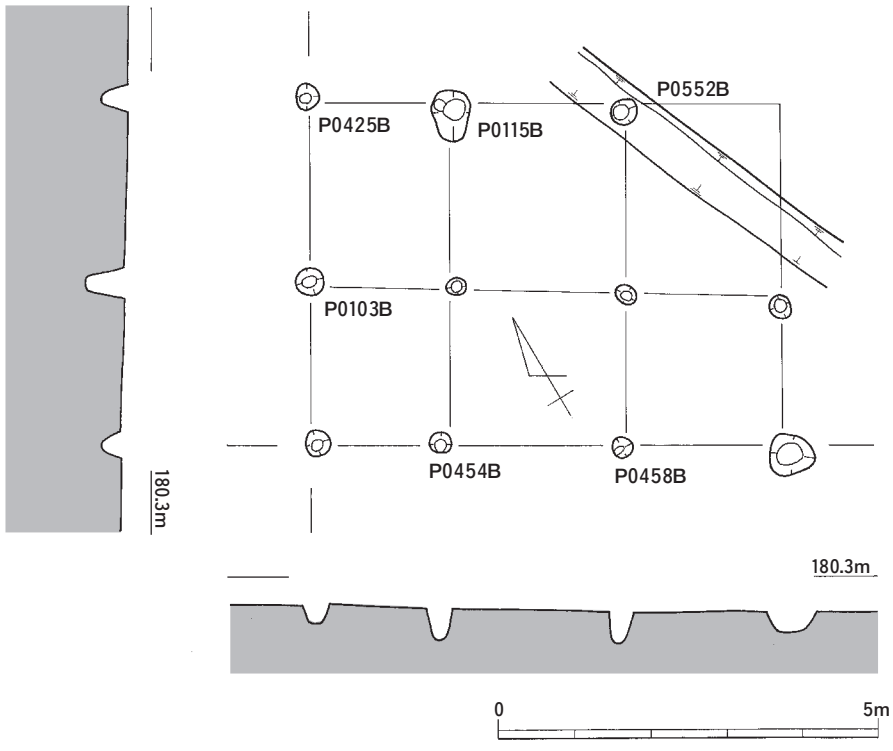


掘立柱建物SB009B(1/100)　　掘立柱建物SB010B(1/100)

SB011B

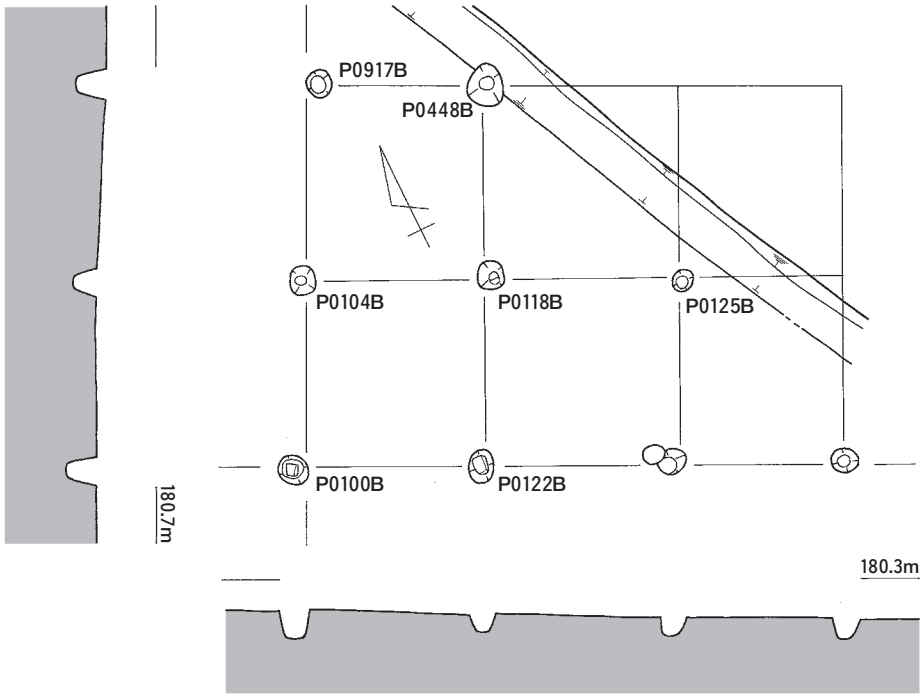


SB012B

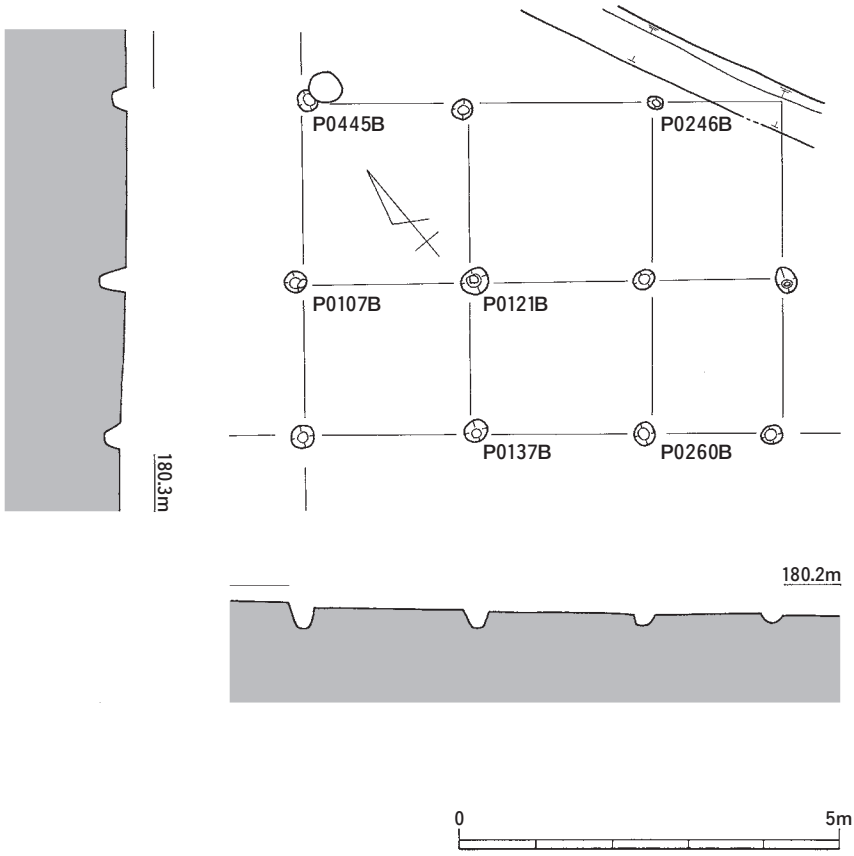


掘立柱建物SB011B(1/100)　　掘立柱建物SB012B(1/100)

SB013B



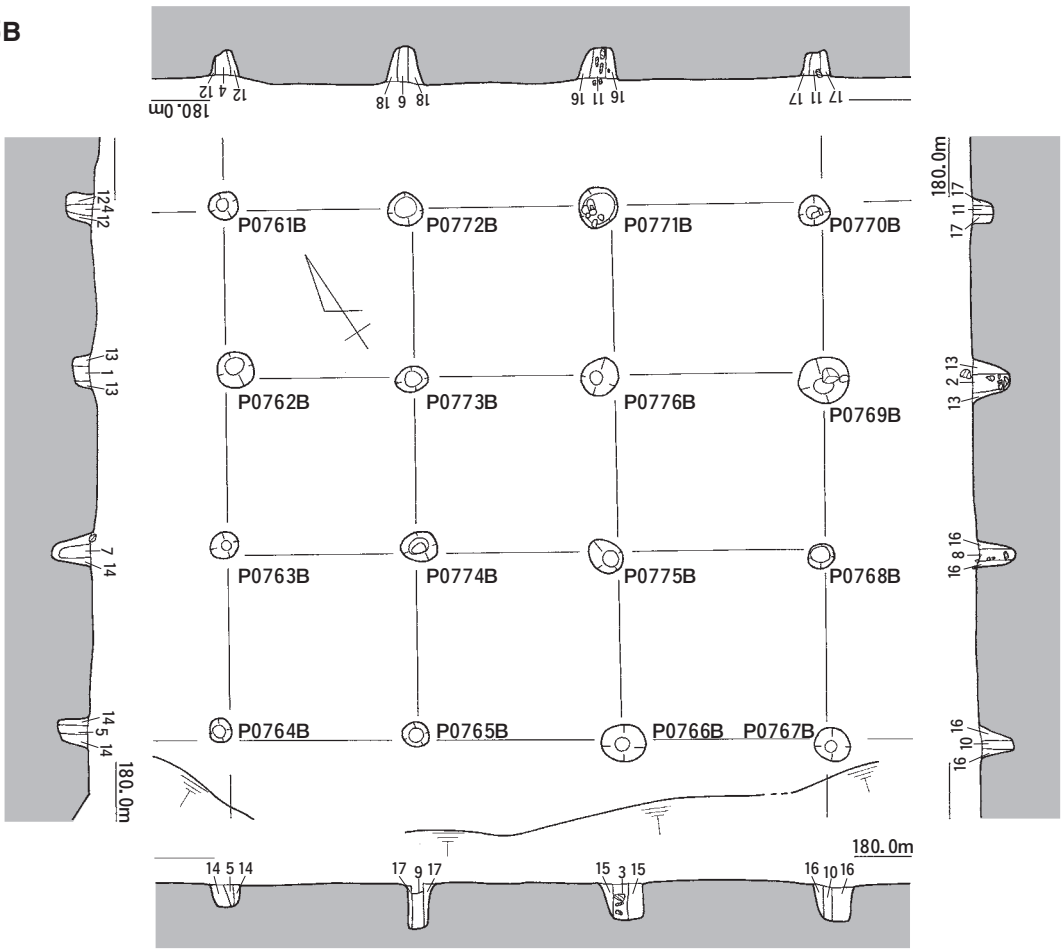
SB014B



掘立柱建物SB013B(1/100)　　掘立柱建物SB014B(1/100)

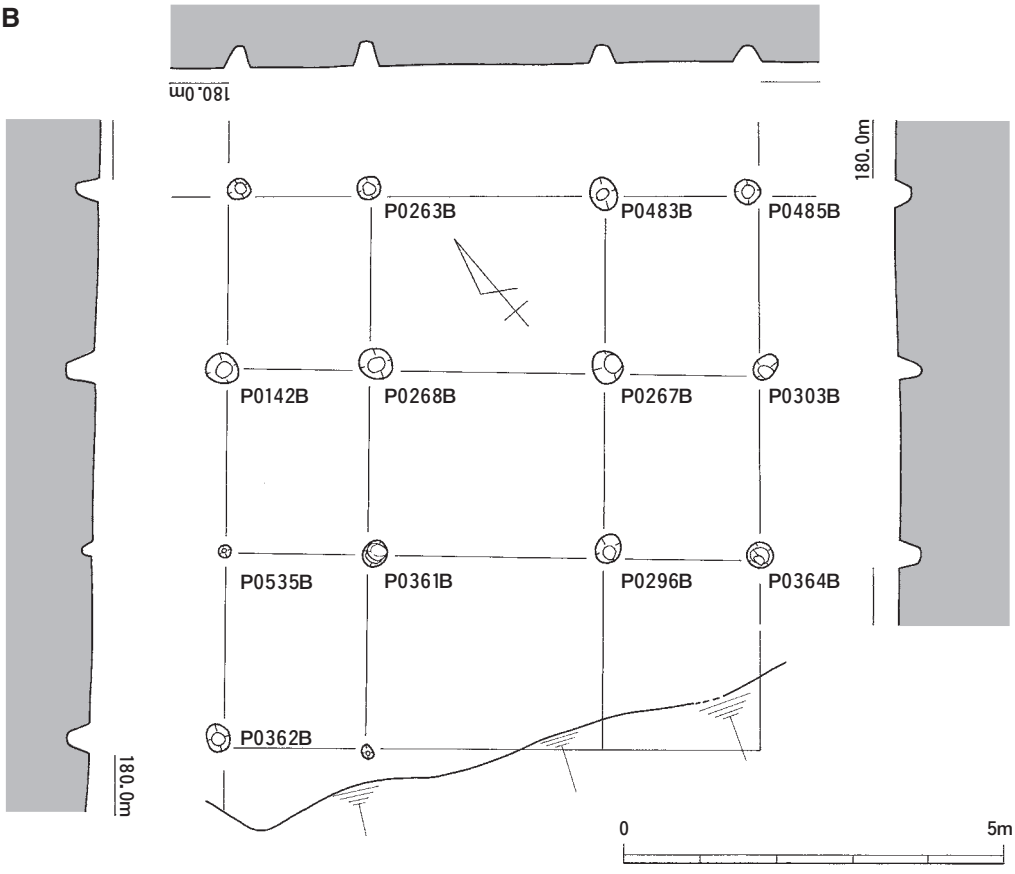
図版22 B地区 遺構

SB015B



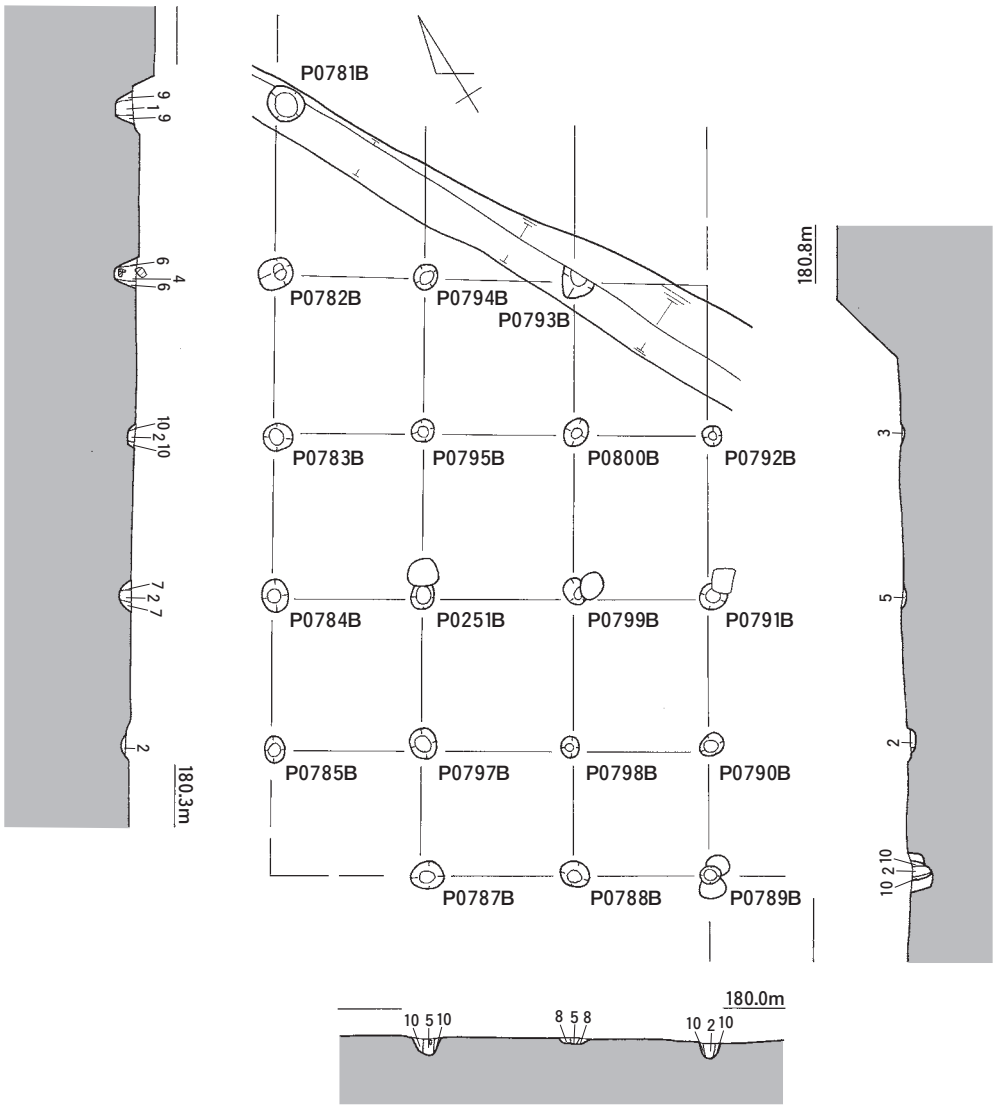
1 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂(中礫少量含む)
2 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂(細礫～中礫少量含む)
3 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫少量含む)
4 灰黄褐 シルト質極細砂～中砂
5 灰黄褐 シルト質極細砂(中礫少量含む)
6 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
7 にぶい黄褐 シルト質極細砂(黄褐土粒多量含む)
8 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫少量含む)
9 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒少量・中礫含む)
10 黒褐 シルト質極細砂～細粒砂(中礫少量含む)
11 黒褐 シルト質極細砂～細粒砂(中礫・炭含む)
12 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐土粒・中礫含む)
13 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂(黄褐土粒・中礫少量含む)
14 灰黄褐 シルト質極細砂(黄褐土粒・中礫少量含む)
15 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐土粒・中礫少量含む)
16 灰黄褐 シルト質極細砂～細粒砂(黄褐土粒・中礫含む)
17 黒褐 シルト質極細砂～細粒砂(中礫少量含む)
18 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐・褐灰土粒・細礫～中礫・炭含む)

SB016B



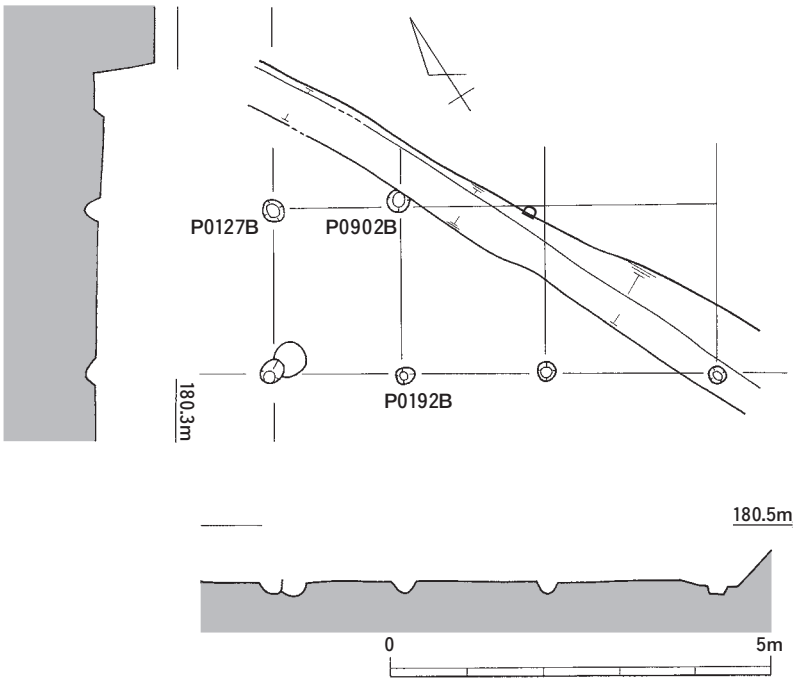
掘立柱建物SB015B(1/100)　掘立柱建物SB016B(1/100)

SB017B



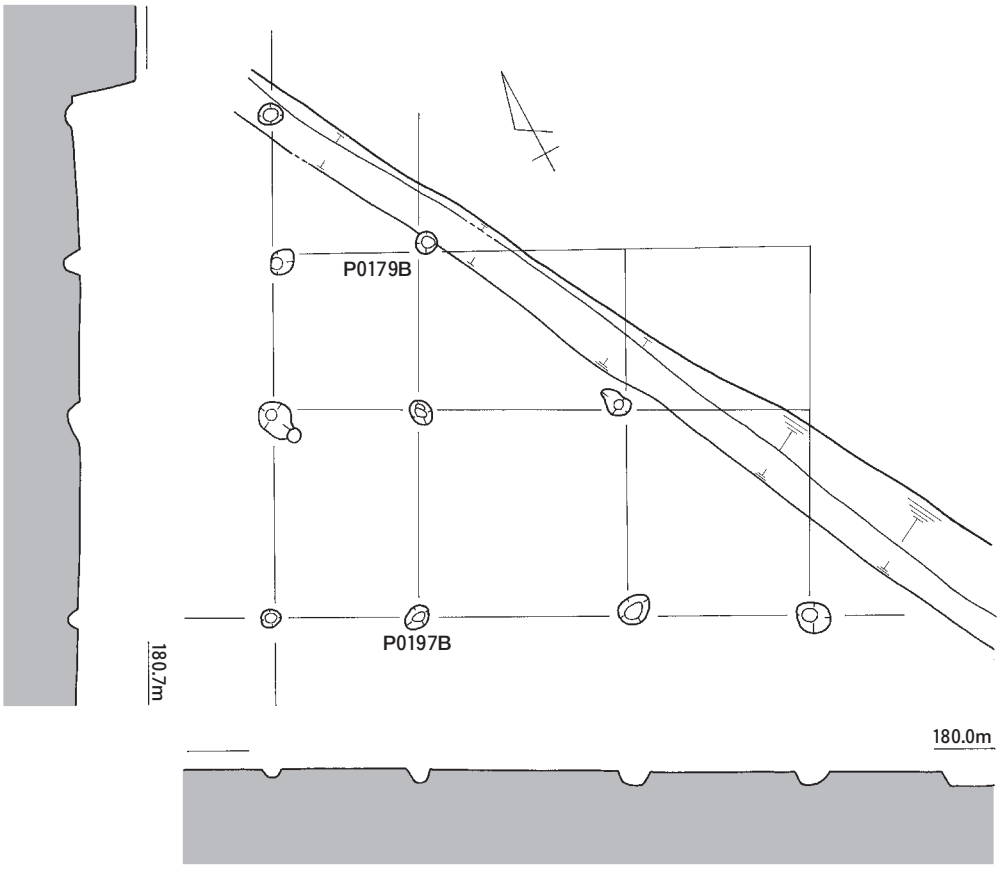
1 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂
2 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
3 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒・中礫含む)
4 灰黄褐 シルト質極細砂～細粒砂(中礫・炭含む)
5 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
6 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂(黄褐色土粒・細礫～中礫・炭含む)
7 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒・中礫含む)
8 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
9 灰黄褐 シルト質極細砂～細粒砂
10 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(黄褐色土粒・中礫・炭含む)

SB018B

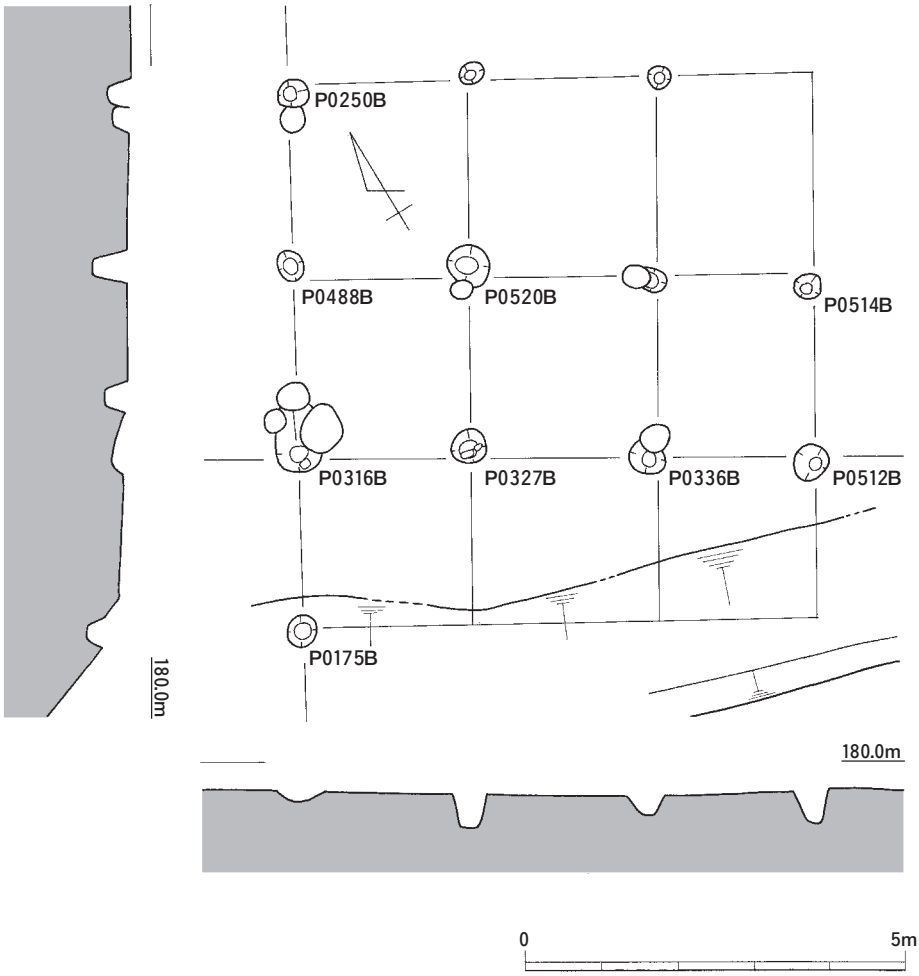


掘立柱建物SB017B(1/100)　　掘立柱建物SB018B(1/100)

SB019B

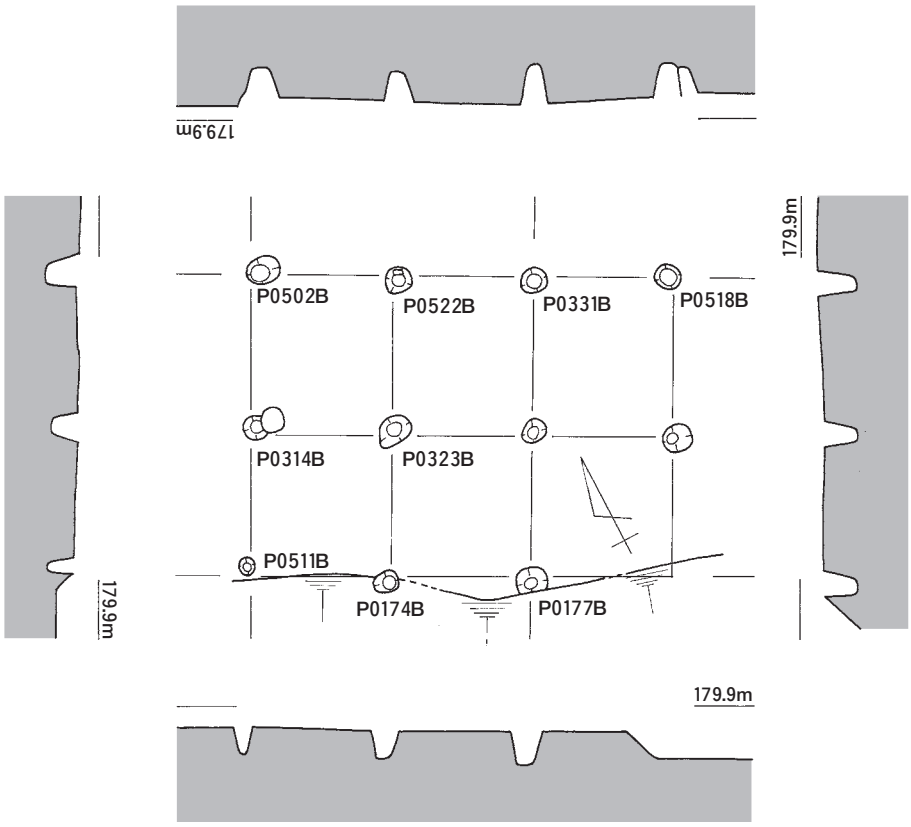


SB020B

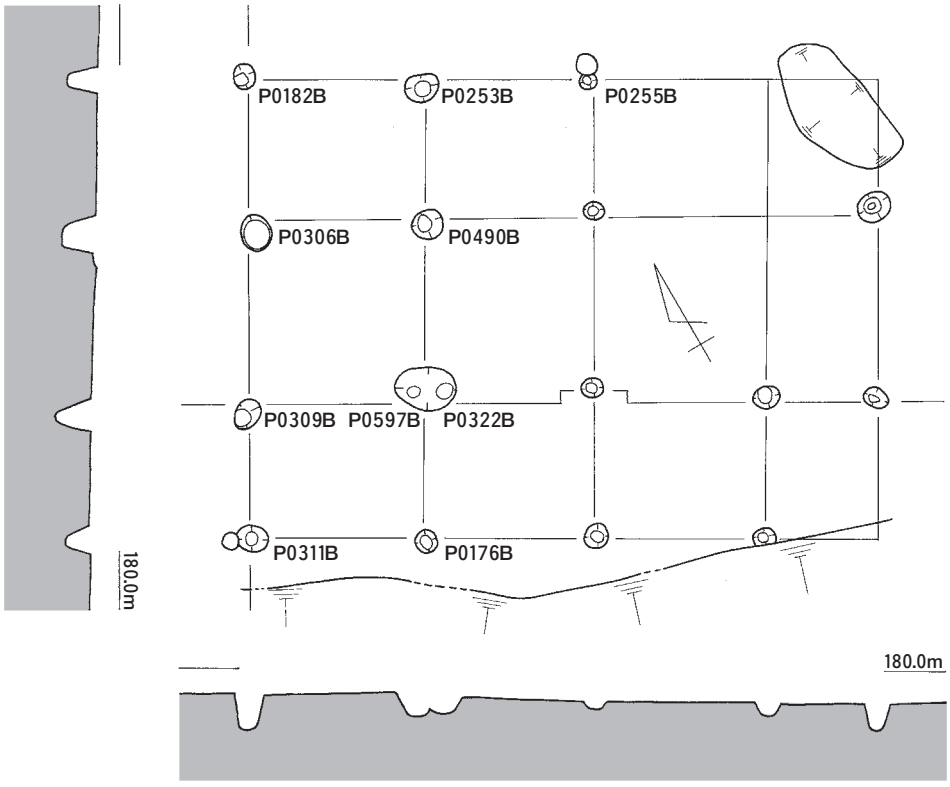


掘立柱建物SB019B(1/100)　　掘立柱建物SB020B(1/100)

SB021B



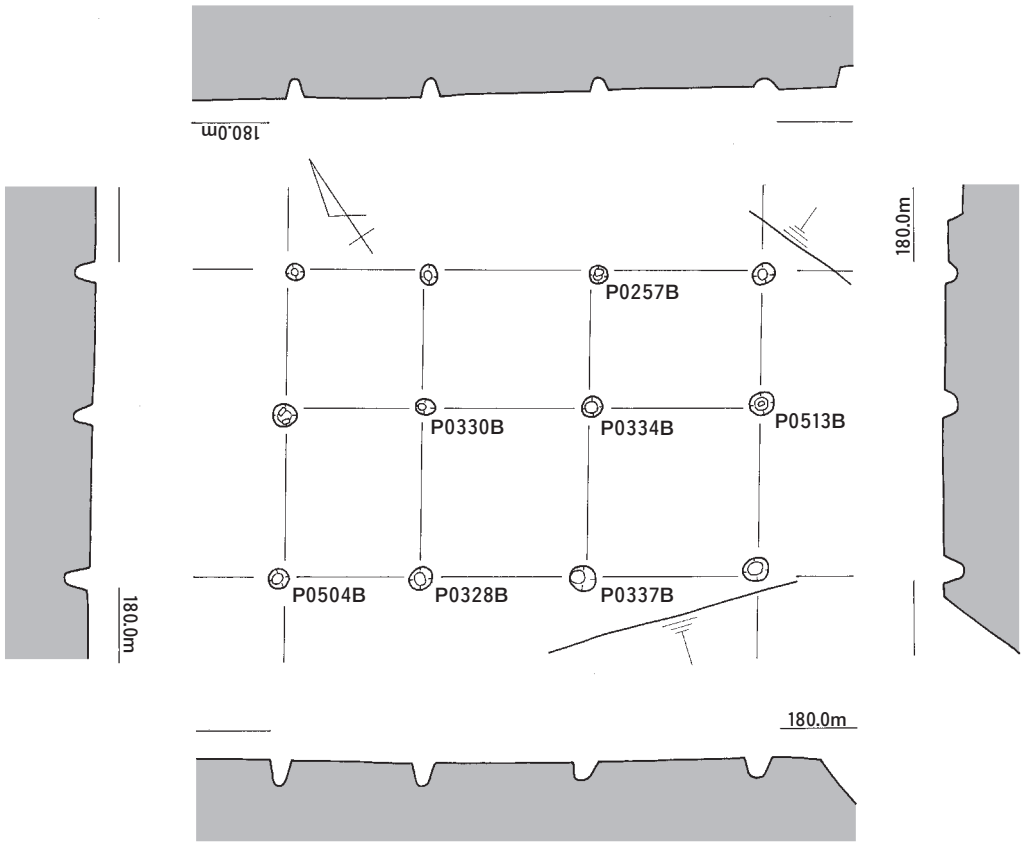
SB022B



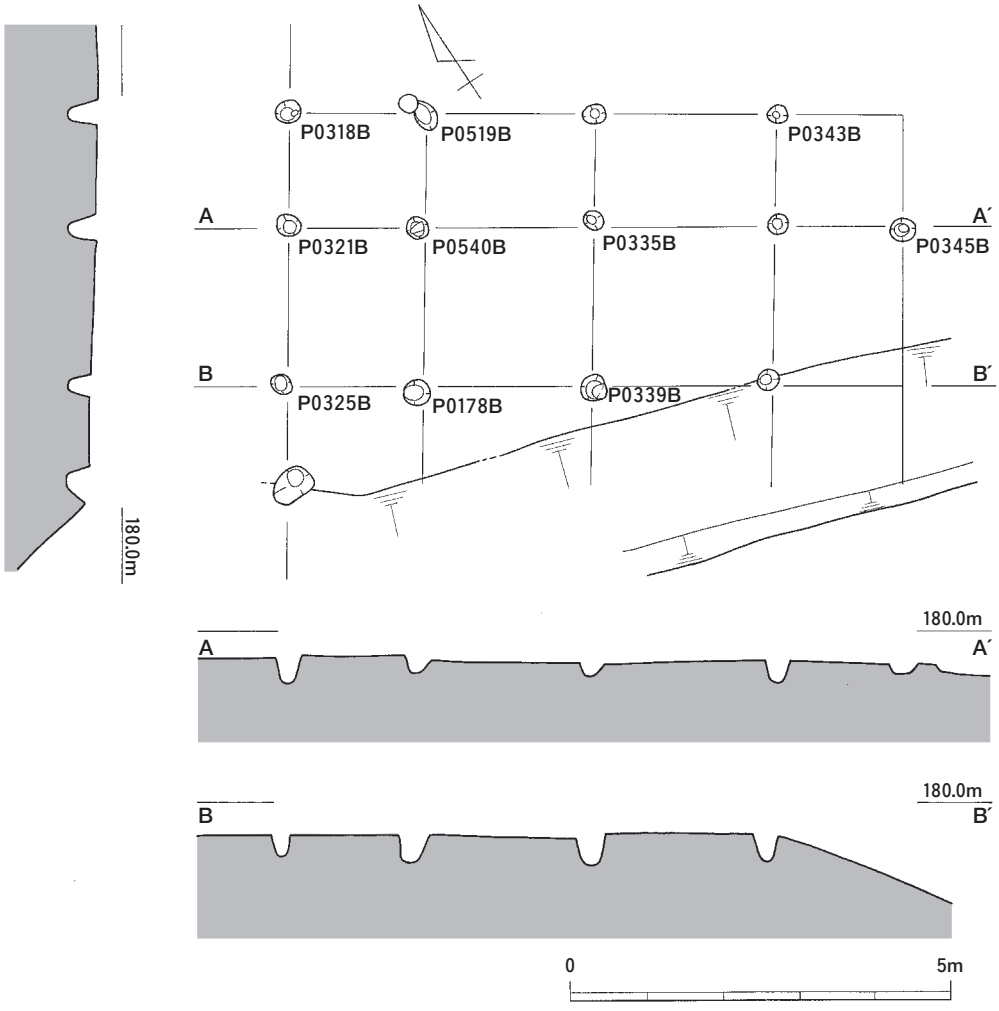
掘立柱建物SB021B(1/100)　掘立柱建物SB022B(1/100)

図版26 B地区 遺構

SB024B

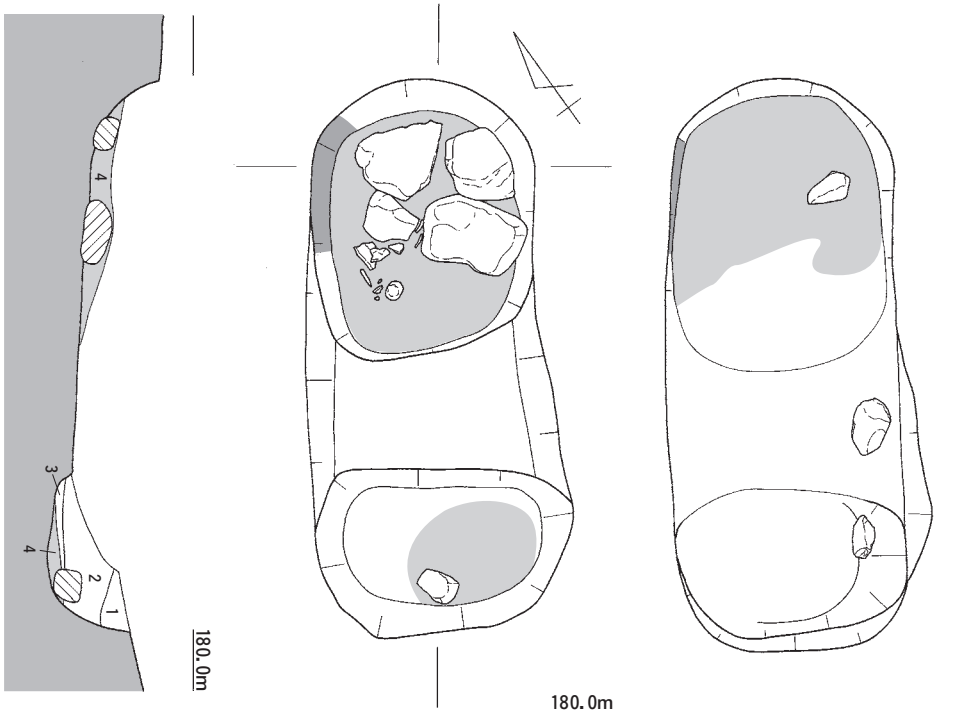


SB023B



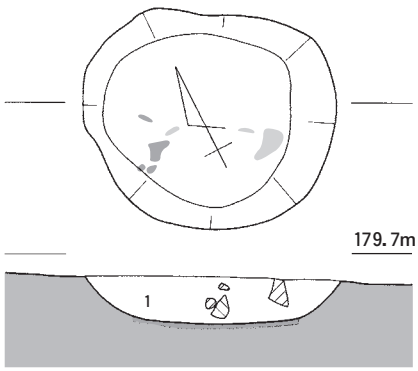
掘立柱建物SB023B(1/100)　　掘立柱建物SB024B(1/100)

SK213B



1 黒褐 シルト質極細砂(焼土粒・炭粒含む)
2 黄褐 シルト質極細砂(粗砂含む)
3 灰黄褐 粗砂
4 黒［炭］

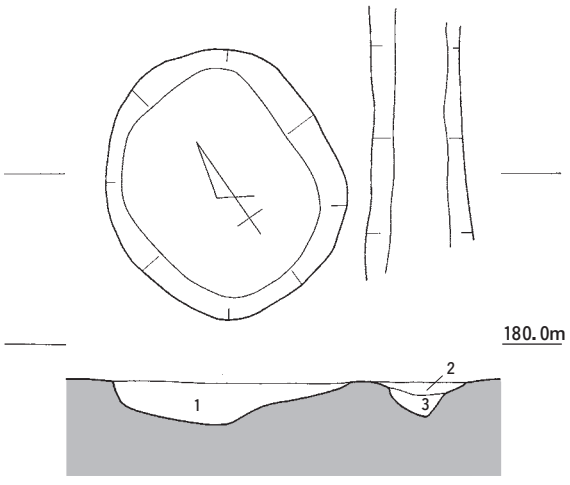
SK537B



1 極暗赤褐 シルト質～極細砂(中礫僅かに含む)

0 1m

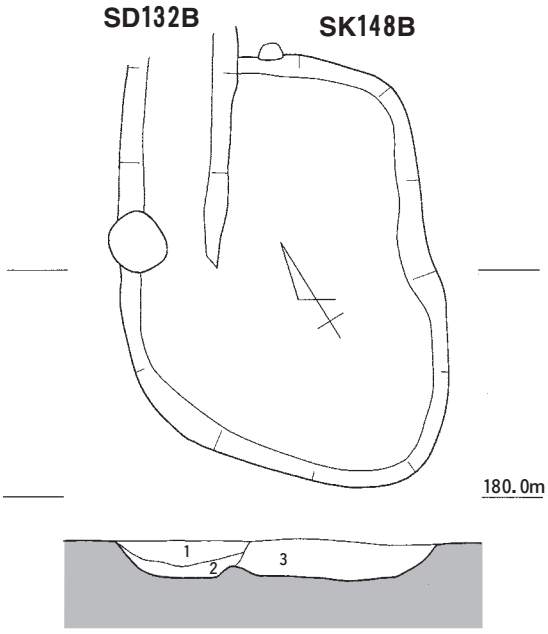
SK131B　SD132B



1 黒褐 小礫混じり、シルト質極細砂(炭含む)
2 暗褐 シルト質極細砂(炭含む)
3 暗褐 シルト質極細砂

0 2m

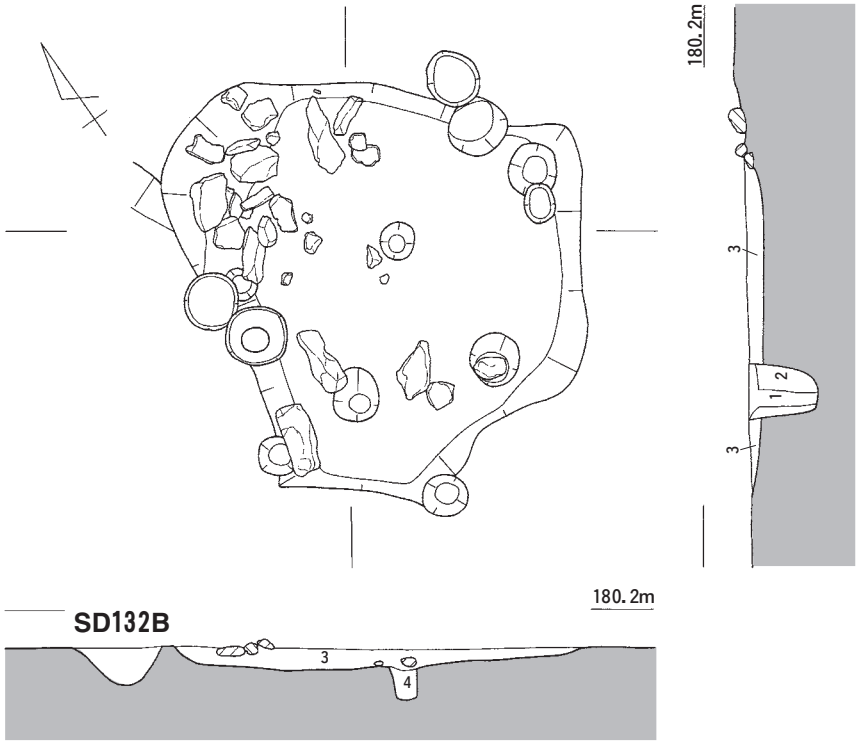
SD132B　SK148B



1 暗褐 シルト質極細砂(炭少量含む)[SD132B]
2 暗褐 シルト質極細砂[SD132B]
3 灰黄褐 シルト質極細砂(小礫含む)

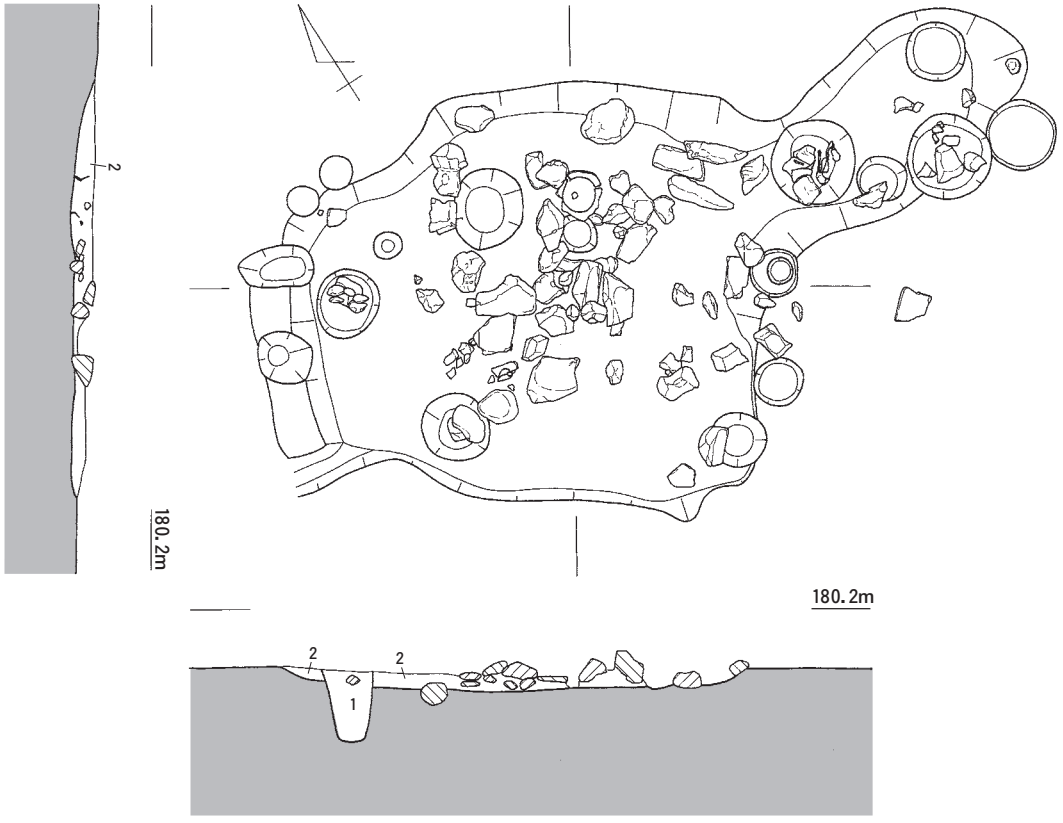
土坑SK213B(1/20)　土坑SK537B(1/20)　土坑SK131B(1/40)　土坑SK148B(1/40)

SK160B



1 黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
2 褐 シルト質極細砂(小礫含む)
3 黒褐 極細砂(小礫含む)
4 暗褐 シルト質極細砂(炭僅かに含む)[P0357B]

SK161B



1 暗褐 シルト質極細砂(中礫含む)[ピット]
2 暗褐 シルト質極細砂(中礫～大礫含む)

0　2m

土坑SK160B(1/40)　　土坑SK161B(1/40)

SK130B

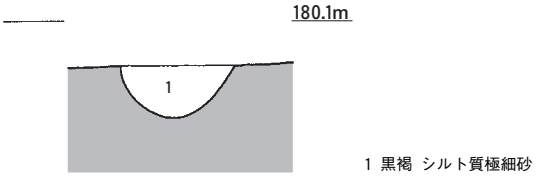
1［ピット］
2［SD132B］
3 暗褐 シルト質極細砂（焼土粒・炭粒含む）
4 にぶい黄褐 シルト質極細砂
5［SK213B］

0 2m

土坑SK130B（1/40）

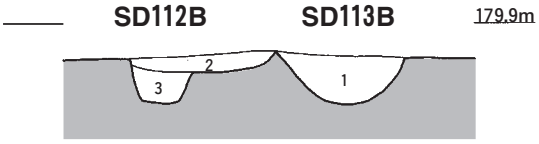
図版30 B地区 遺構

SD113B



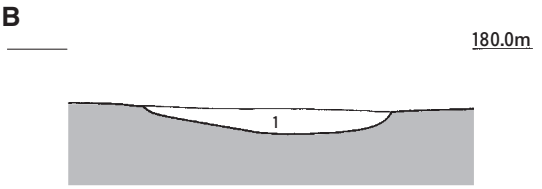
1 黒褐 シルト質極細砂

SD112B　SD113B



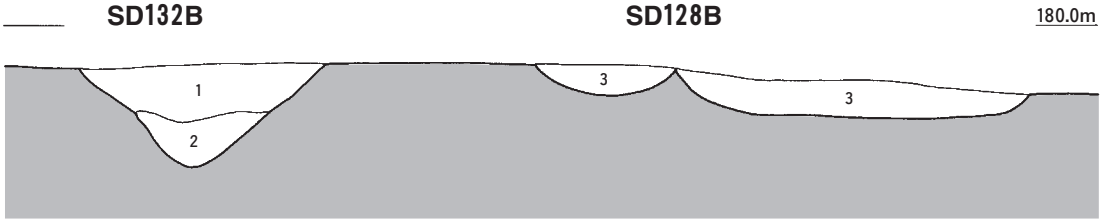
1 黒褐 シルト質極細砂
2 褐 シルト質極細砂
3 暗褐 シルト質極細砂

SD112B



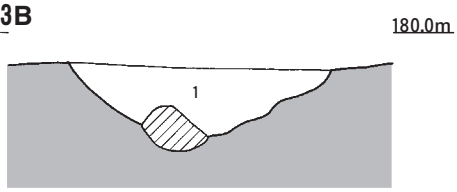
1 褐 シルト質極細砂

SD132B　SD128B



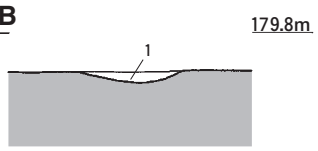
1 暗褐 シルト質極細砂(炭含む)
2 暗褐 シルト質極細砂
3 黒褐 シルト質極細砂(小礫混じり)

SD143B



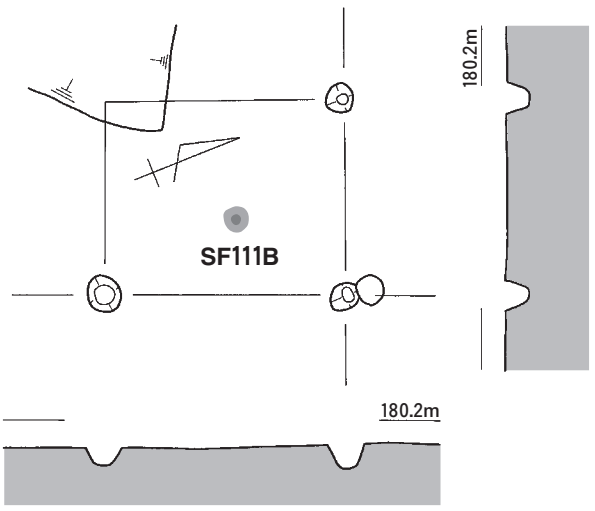
1 黒褐 シルト質極細砂(小礫混じり)

SD171B

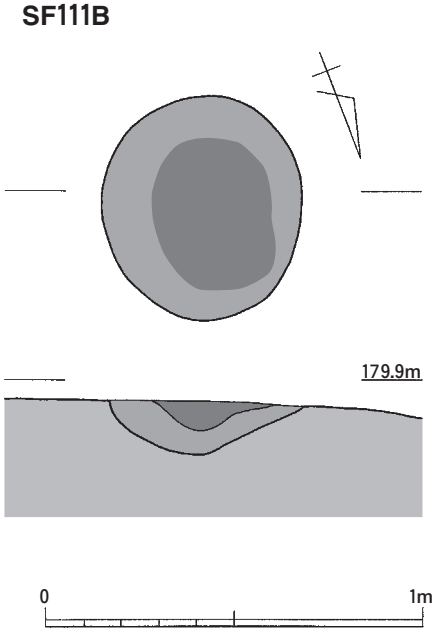


1 黒褐 シルト質極細砂(炭僅かに含む)

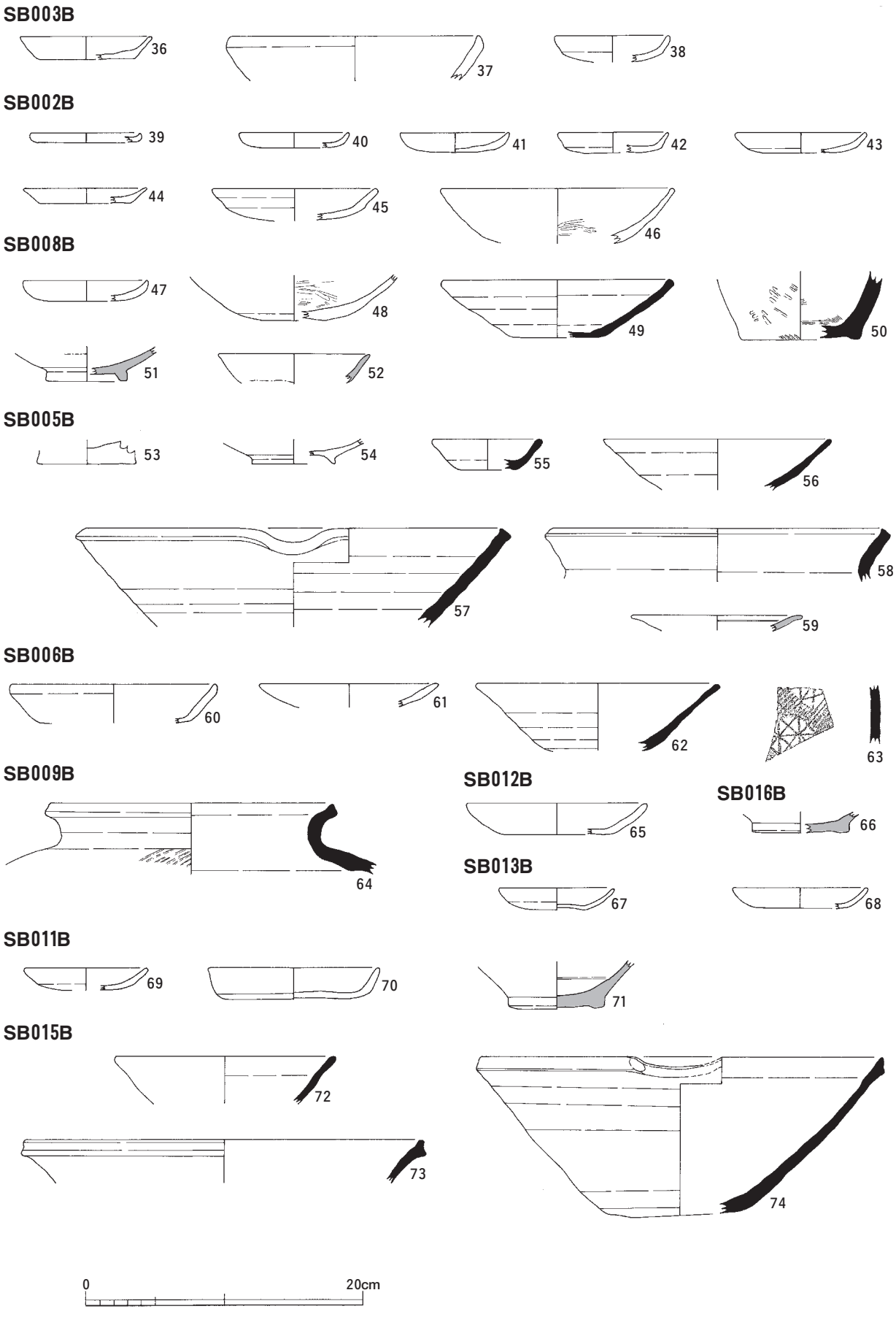
SB201B



SF111B

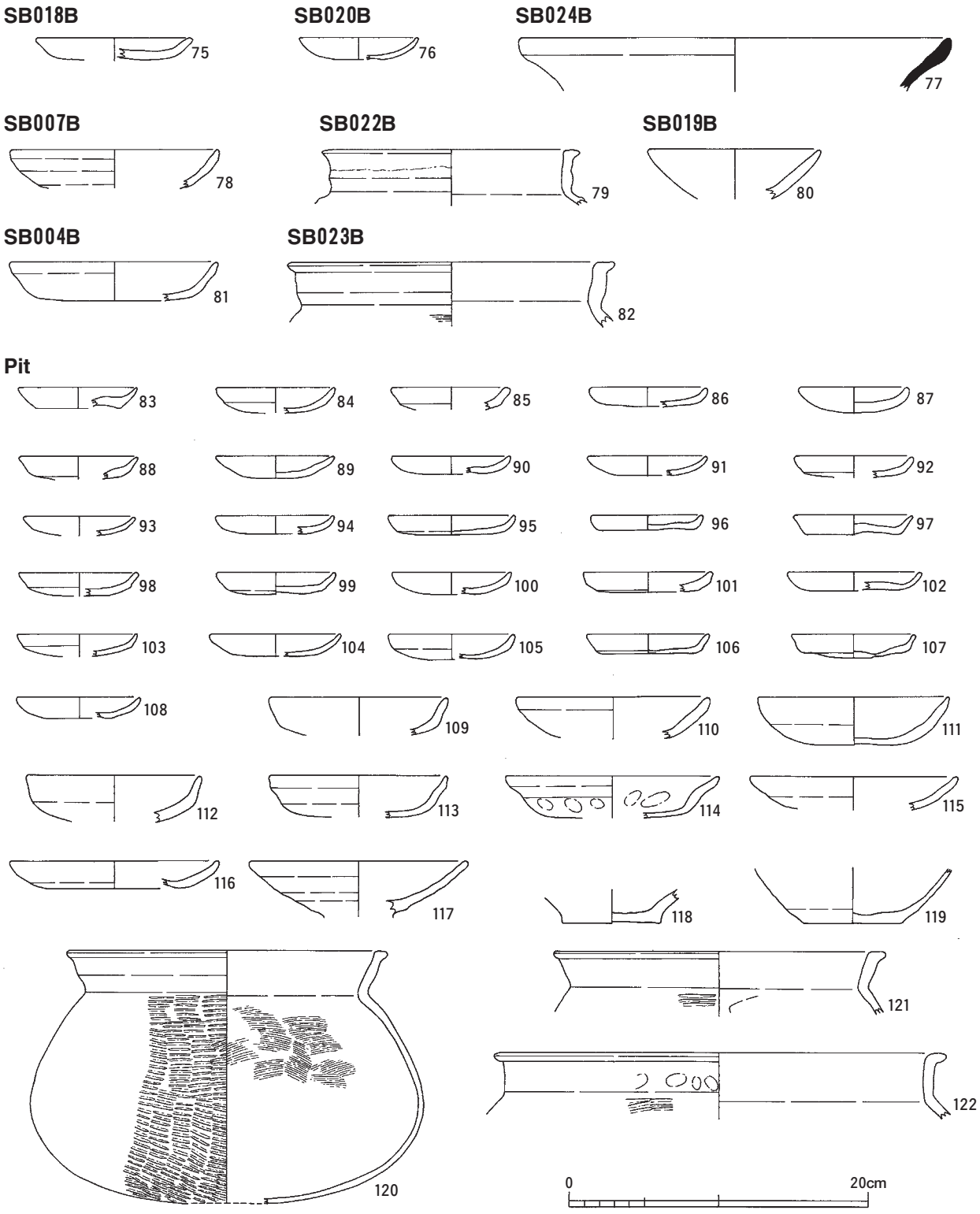


溝SD113B(1/20)　溝SD112B・SD113B(1/20)　溝SD112B(1/20)　溝SD132B・SD128B(1/20)
溝SD143B(1/20)　溝SD171B(1/20)　掘立柱建物SB201B(1/100)　焼土SF111B(1/20)


SB003B
36
37
38
SB002B
39
40
41
42
43
44
45
46
SB008B
47
48
49
50
51
52
SB005B
53
54
55
56
57
58
59
SB006B
60
61
62
63
SB009B
64
SB012B
65
SB016B
66
SB013B
67
68
SB011B
69
70
71
SB015B
72
73
74
0
20cm

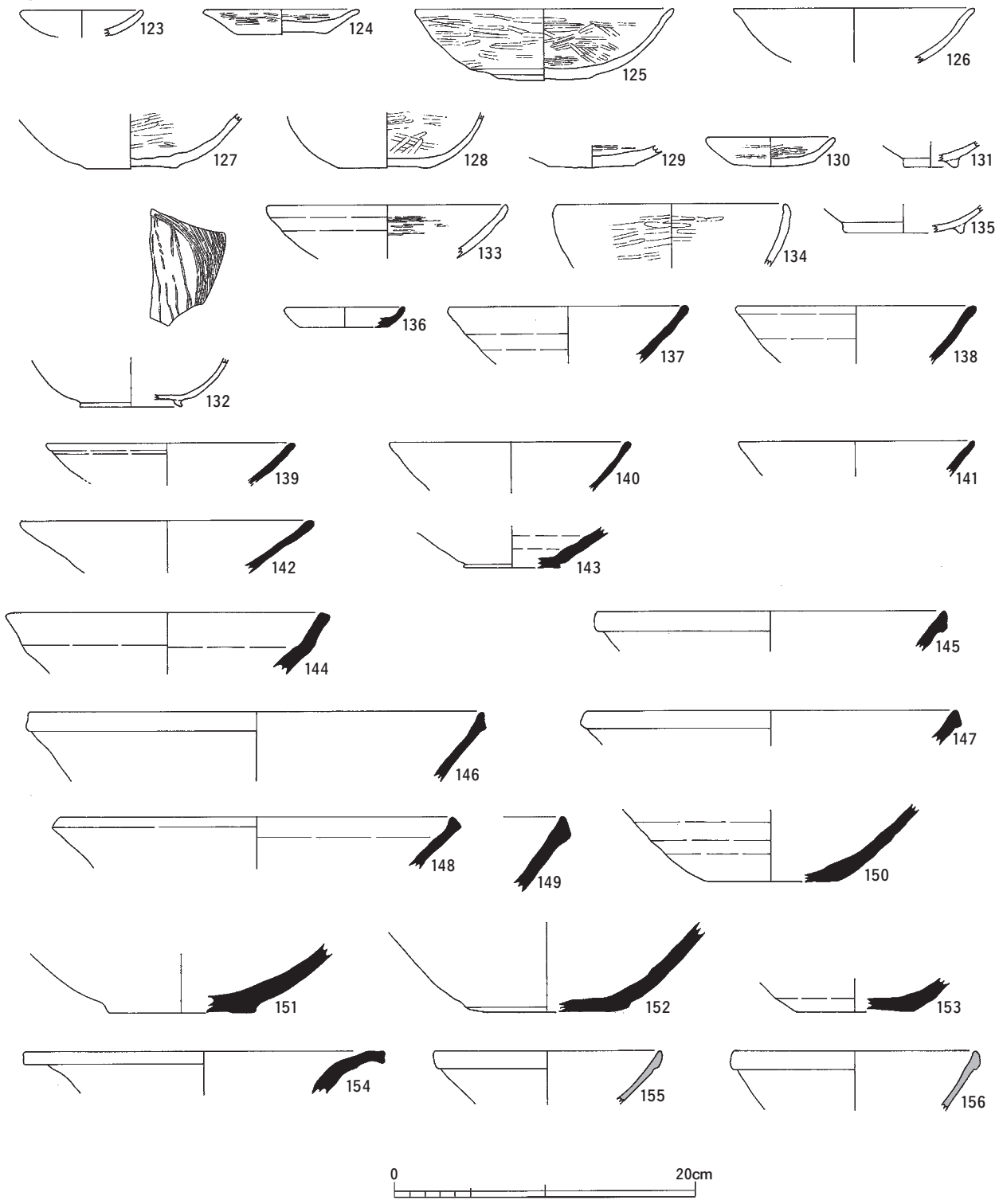
土器1（36～74）

図版32 B地区 遺物



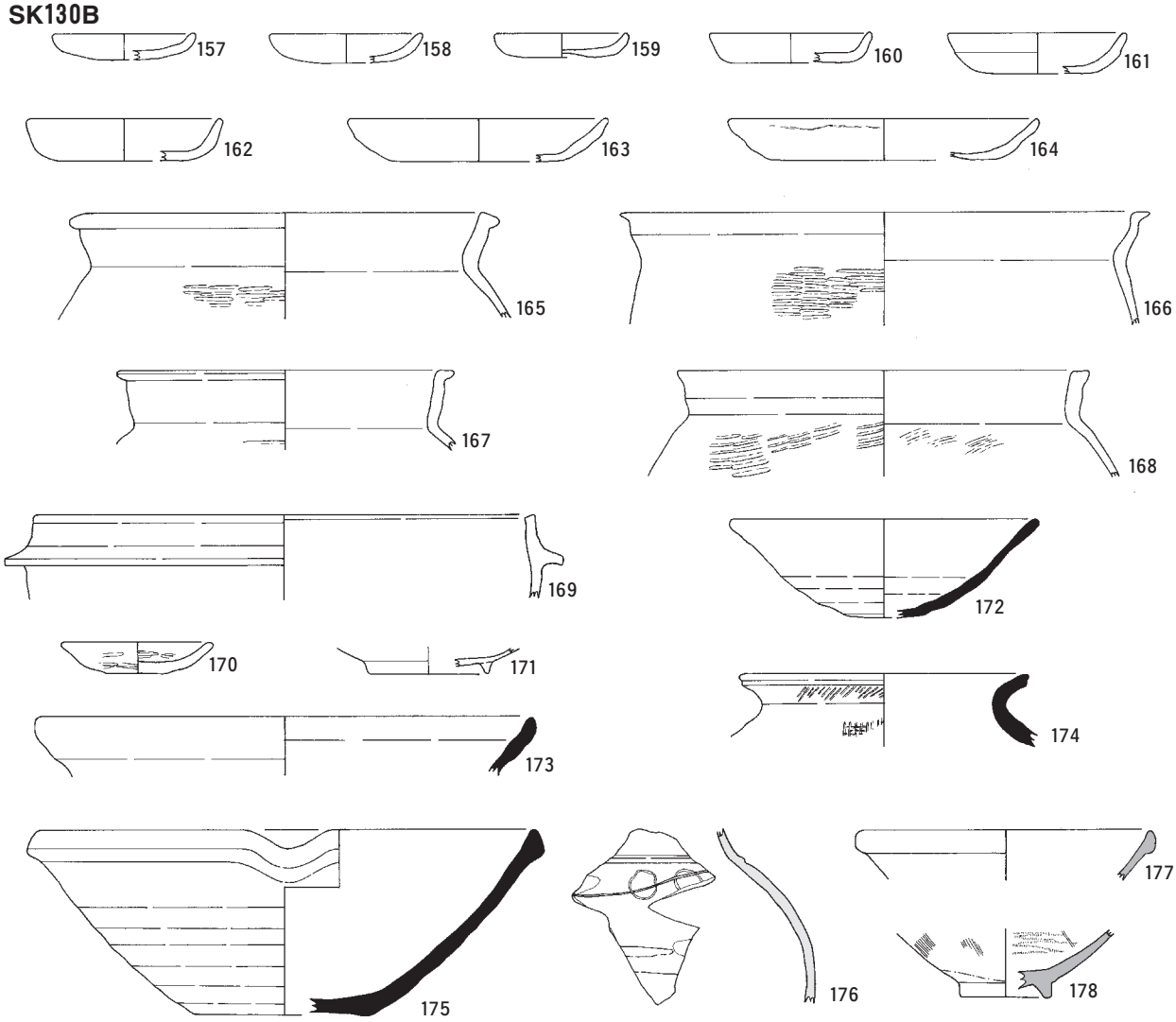
土器 2 (75～122)

Pit

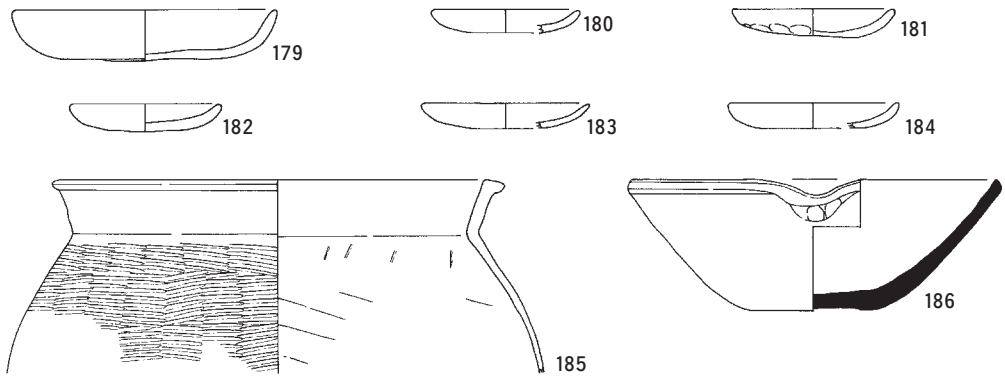


土器 3 (123～156)

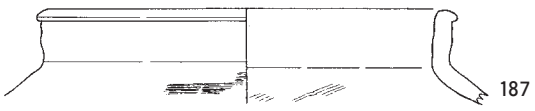
SK130B



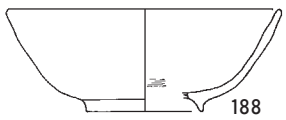
SK161B

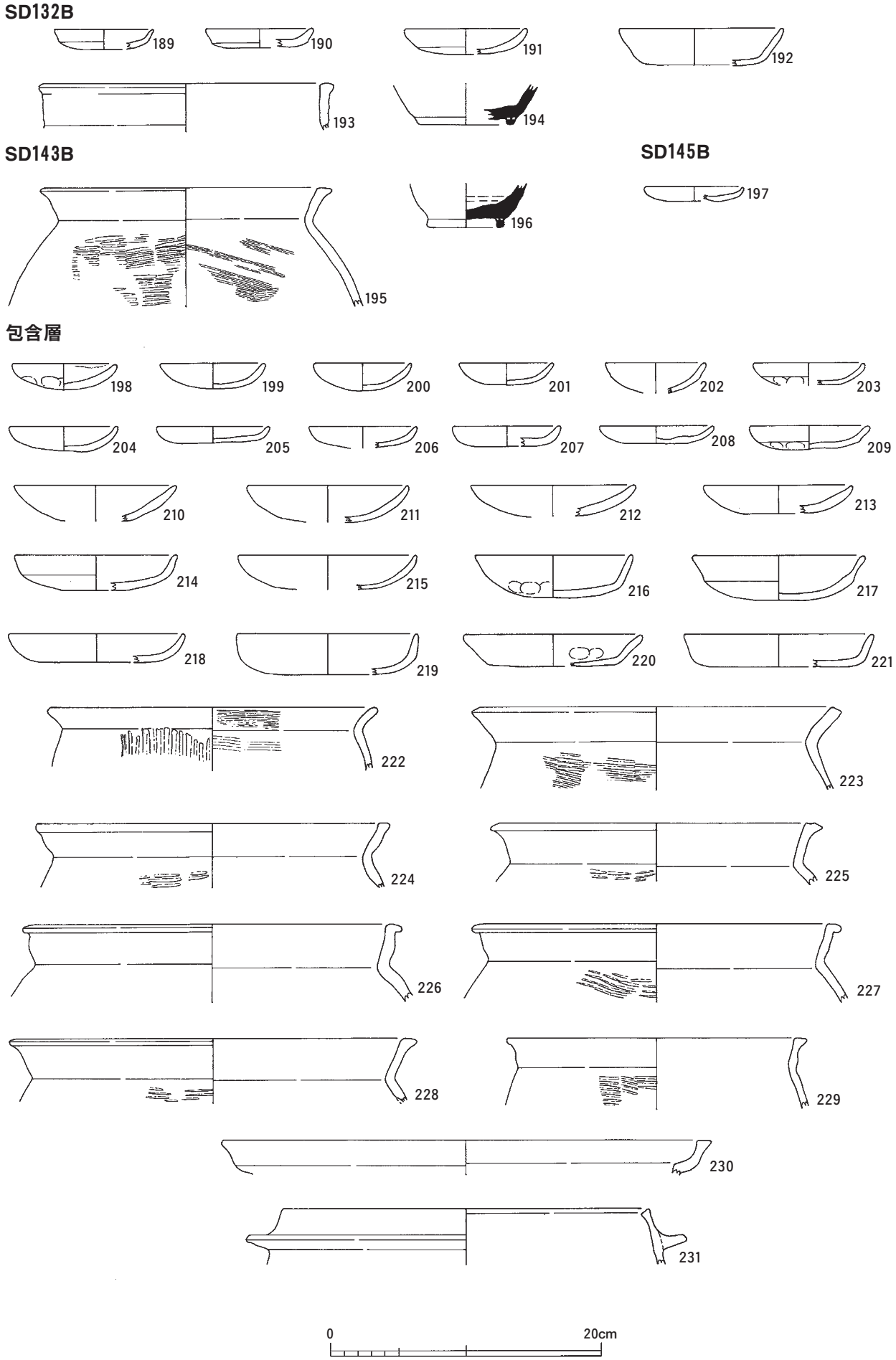


SK537B



SK213B



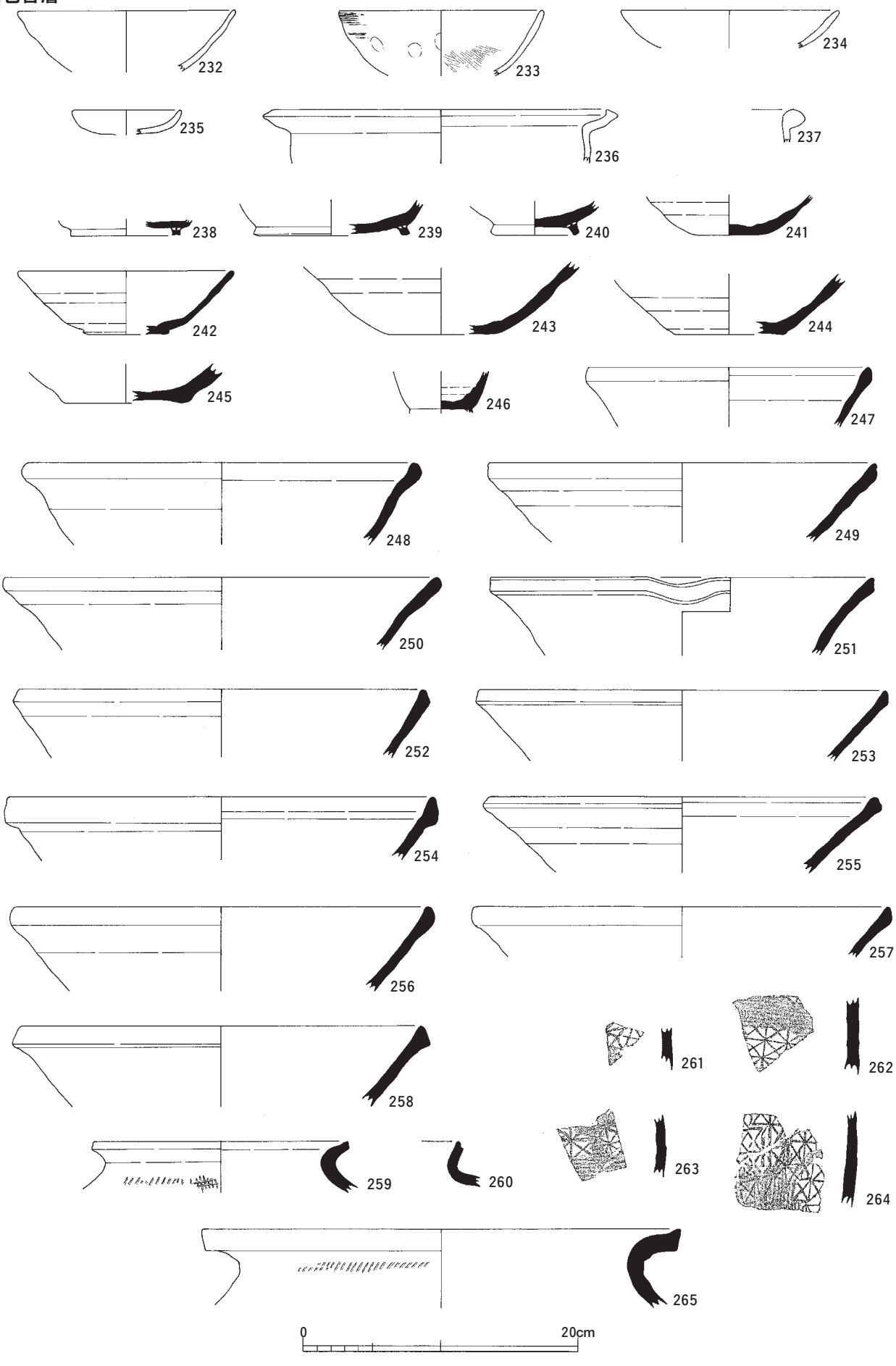

SD132B
189
190
191
192
193
194
SD143B
195
196
SD145B
197
包含層
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
0
20cm

土器5（189～231）

図版36

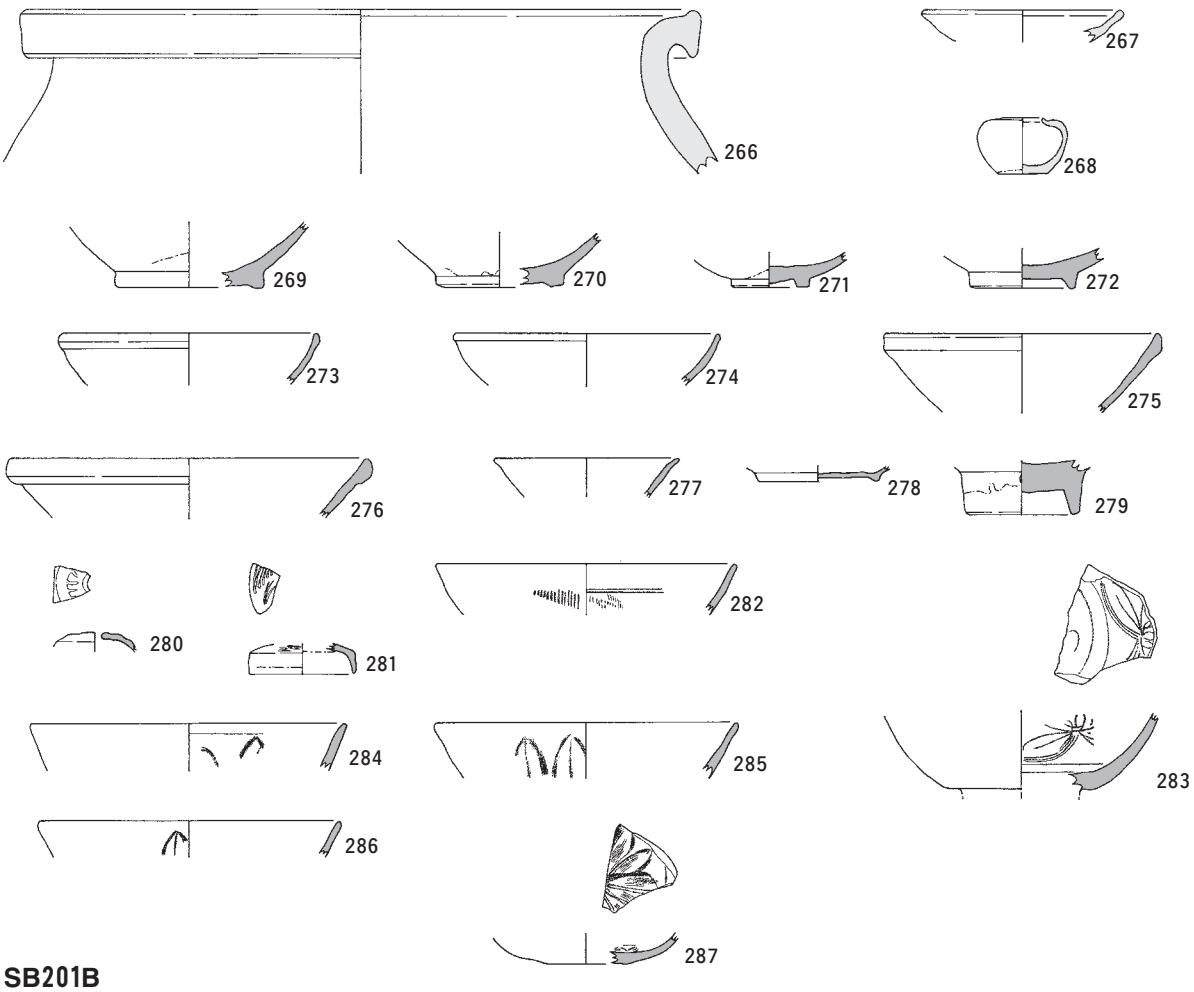
B地区　遺物

包含層

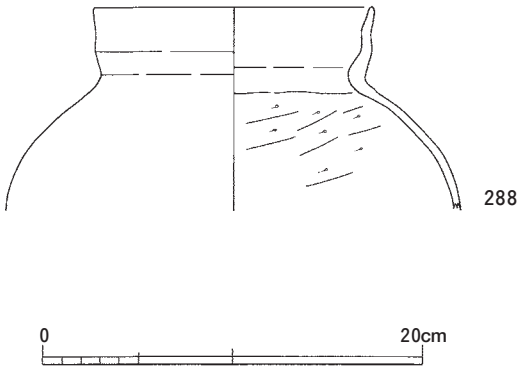


土器 6 (232～265)

包含層

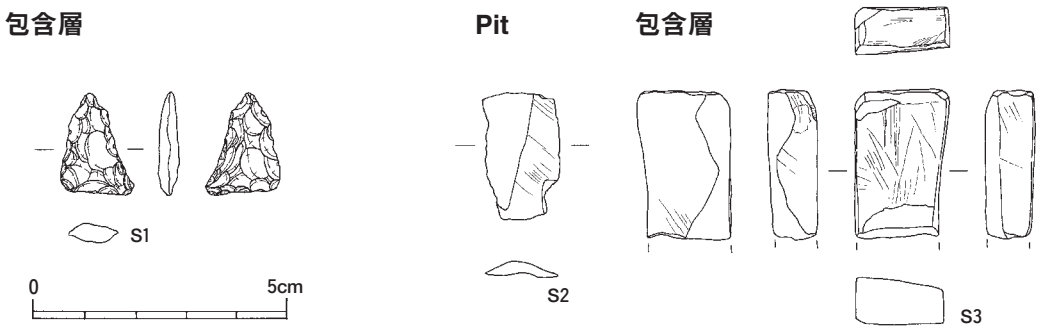


SB201B
SF111B

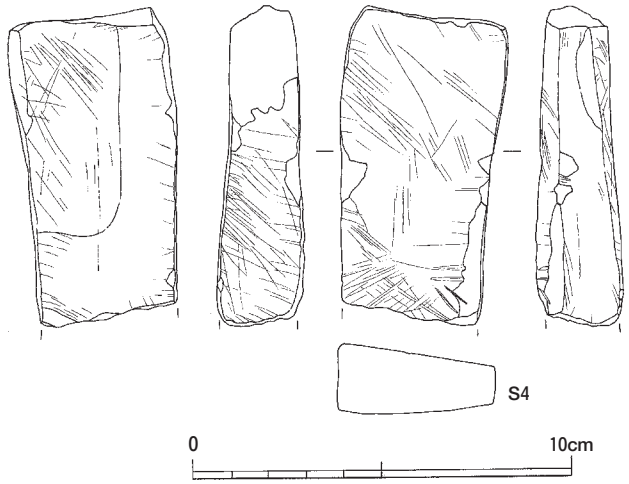


土器 7 (266～288)

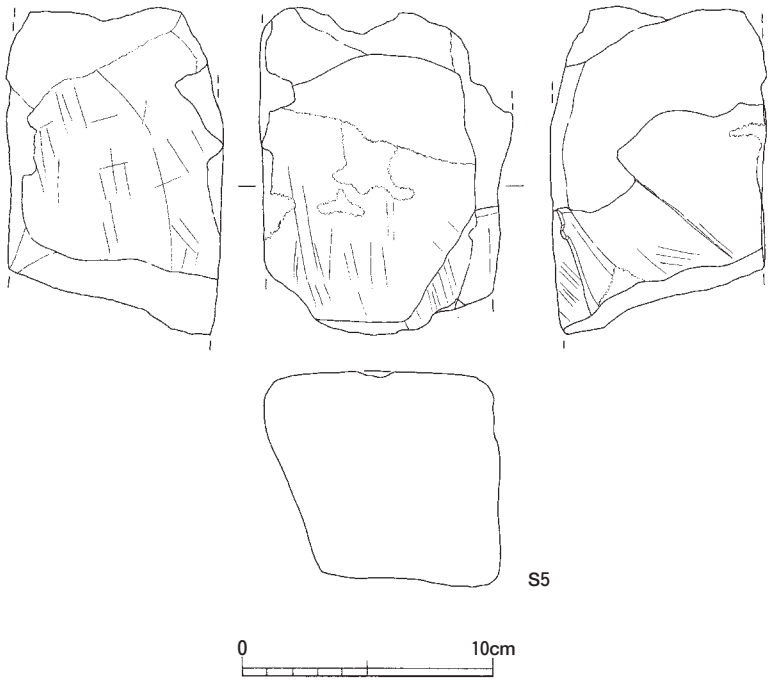
図版38　B地区　遺物



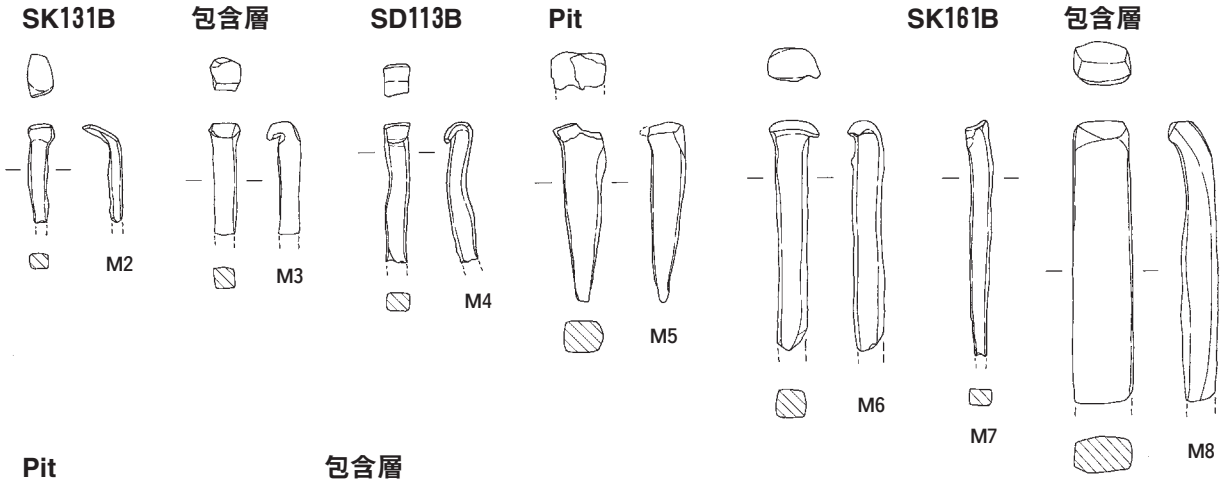
SB019B

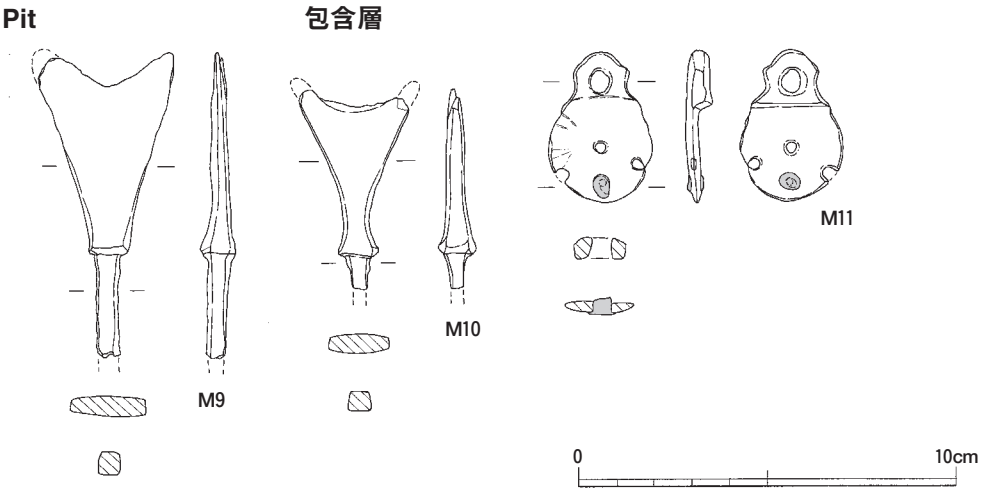


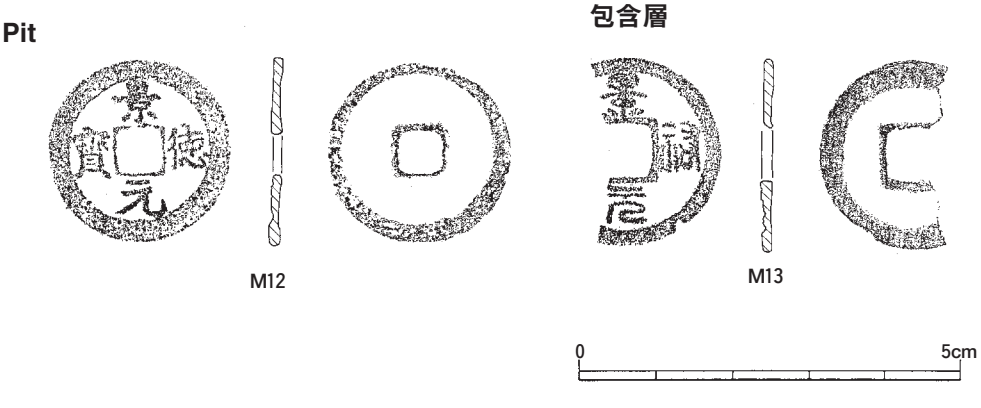
SB003B



石器（S1～S5）

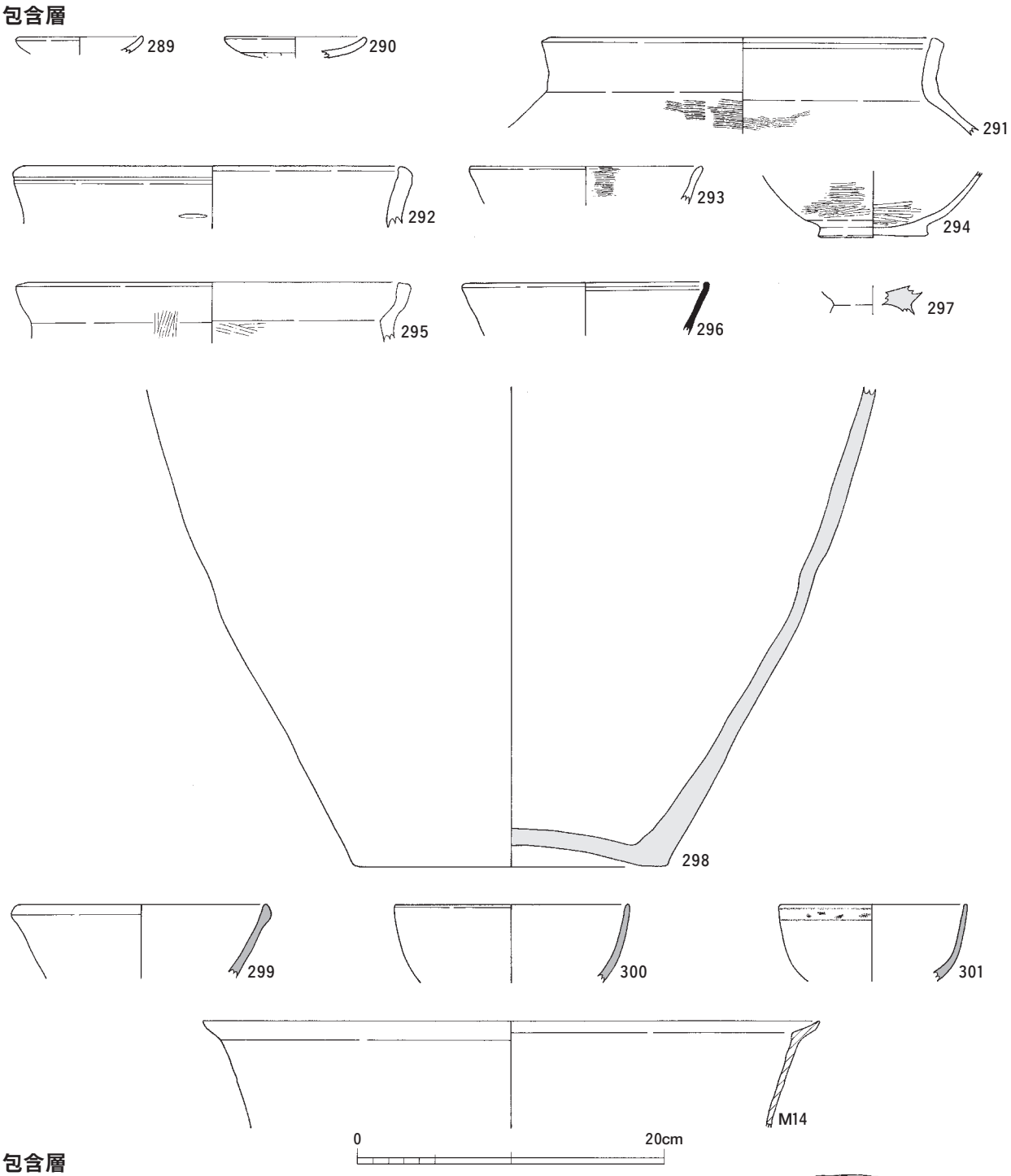

SK131B
包含層
SD113B
Pit
SK161B
包含層
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8

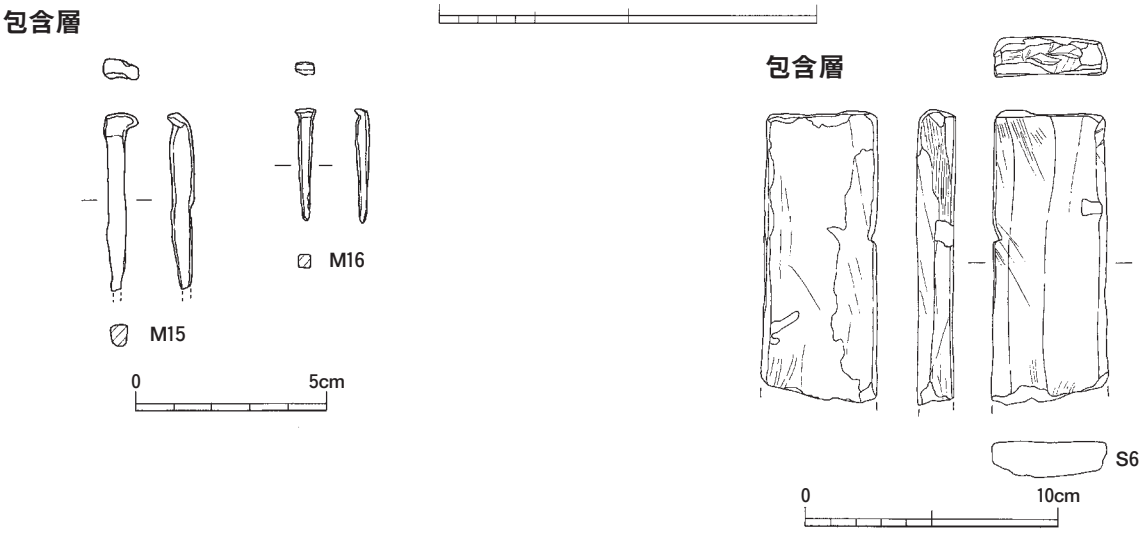

Pit
包含層
M9
M10
M11
0
10cm


Pit
包含層
M12
M13
0
5cm

金属器(M2～M13)

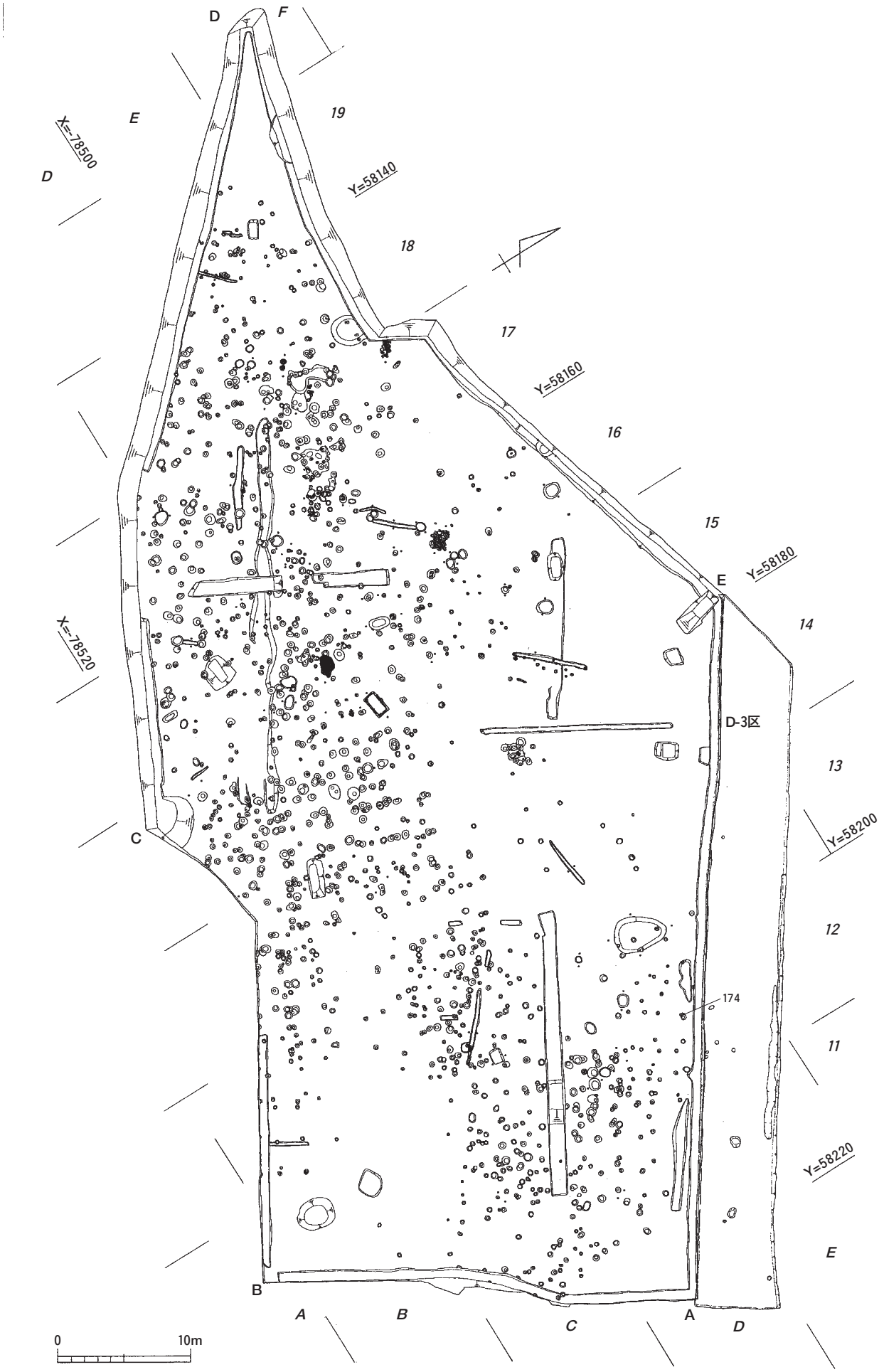
図版40 C地区 遺物





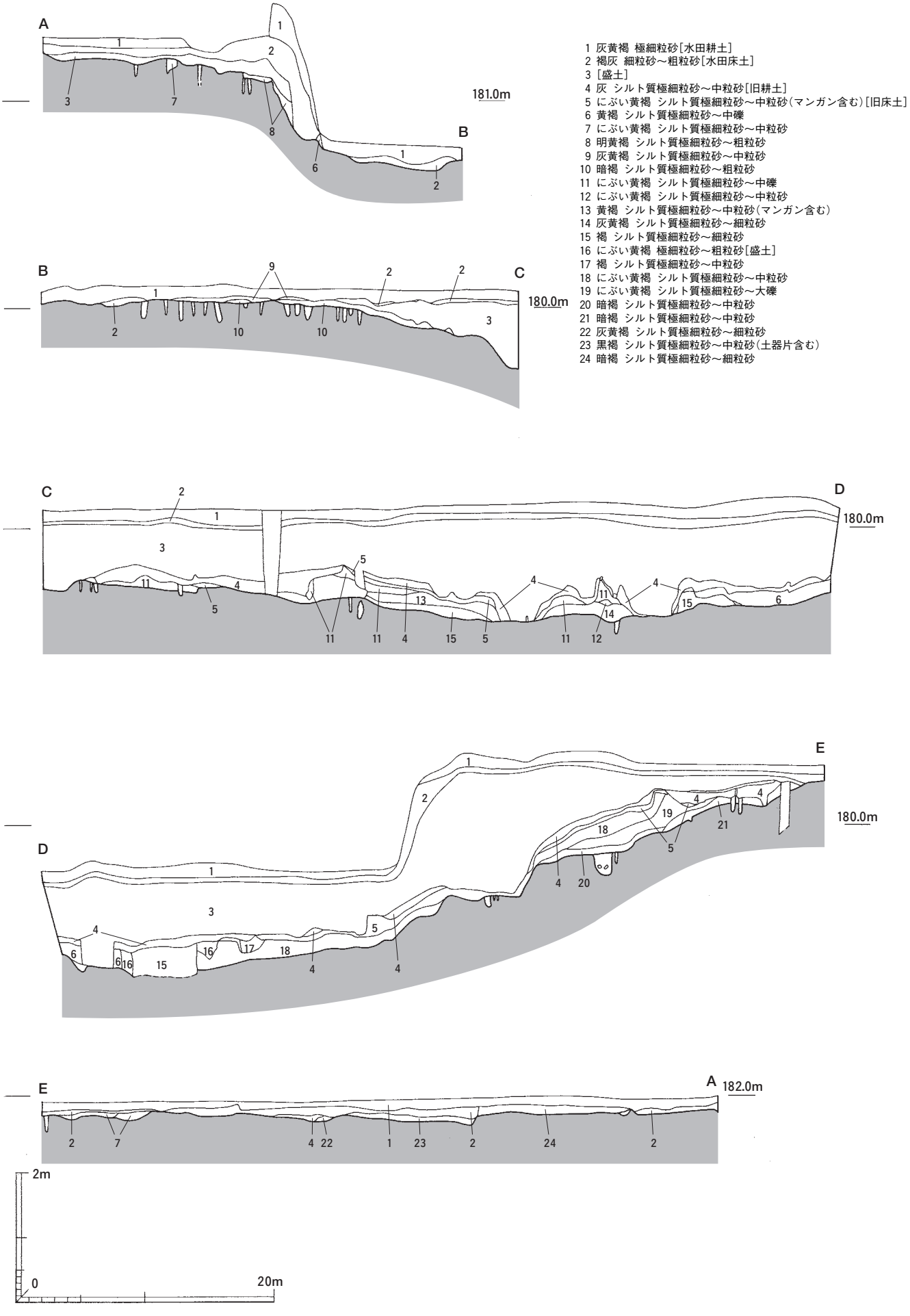
土器・石器・金属器(289～301・M14～M16・S6)

図版41 D地区 遺構



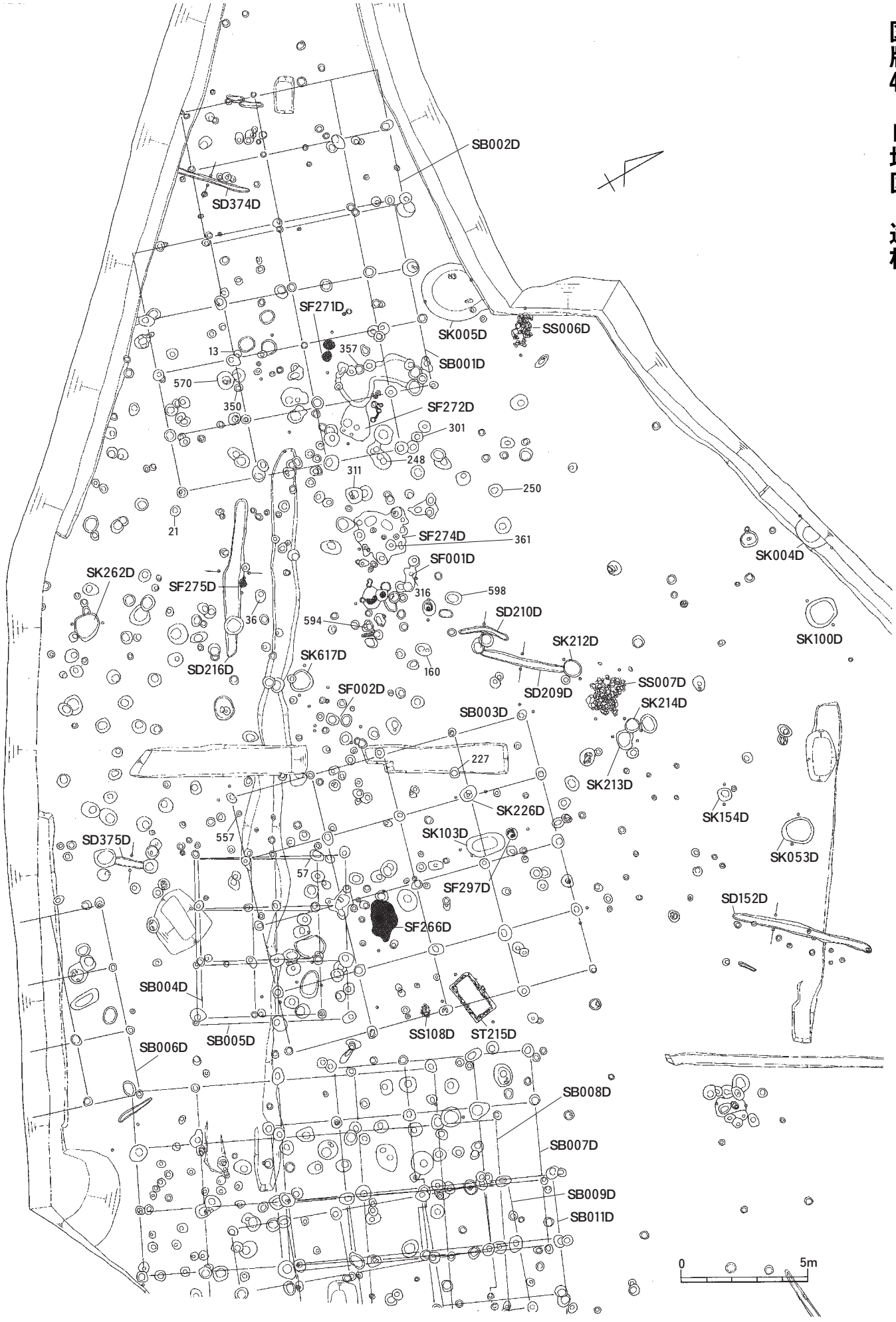
遺構配置図(1/400)

図版42　D地区　遺構



1 灰黄褐 極細粒砂[水田耕土]
2 褐灰 細粒砂～粗粒砂[水田床土]
3 [盛土]
4 灰 シルト質極細粒砂～中粒砂[旧耕土]
5 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂(マンガン含む)[旧床土]
6 黄褐 シルト質極細粒砂～中礫
7 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
8 明黄褐 シルト質極細粒砂～粗粒砂
9 灰黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
10 暗褐 シルト質極細粒砂～粗粒砂
11 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～中礫
12 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
13 黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂(マンガン含む)
14 灰黄褐 シルト質極細粒砂～細粒砂
15 褐 シルト質極細粒砂～細粒砂
16 にぶい黄褐 極細粒砂～粗粒砂[盛土]
17 褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
18 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
19 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂～大礫
20 暗褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
21 暗褐 シルト質極細粒砂～中粒砂
22 灰黄褐 シルト質極細粒砂～細粒砂
23 黒褐 シルト質極細粒砂～中粒砂(土器片含む)
24 暗褐 シルト質極細粒砂～細粒砂

土層断面(1/400・1/80)

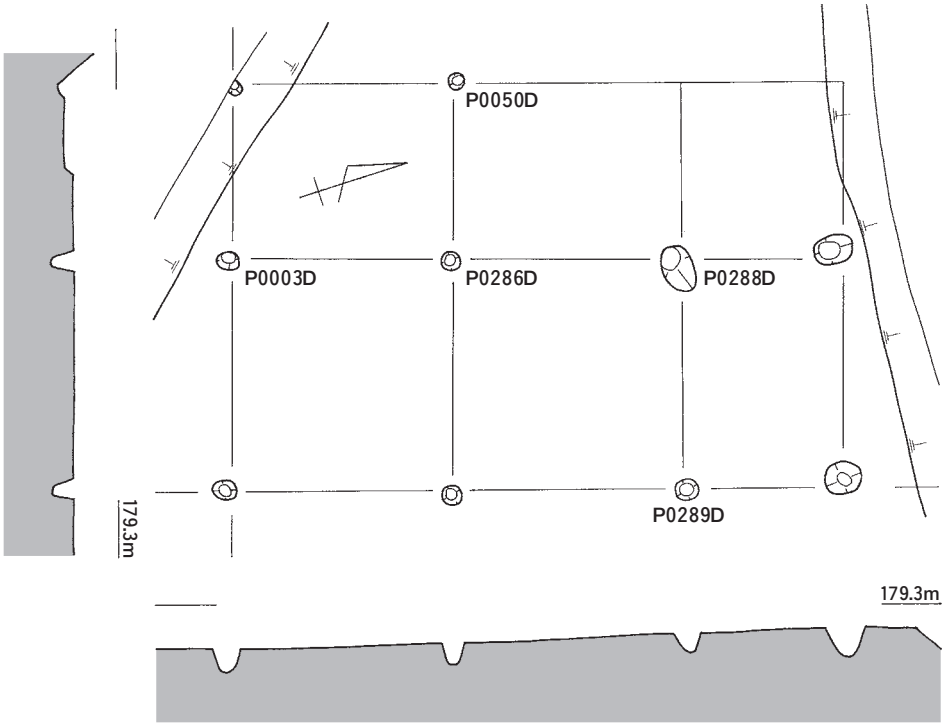

SB002D
SD374D
SF271D
SK005D
SS006D
13
357
SB001D
570
350
SF272D
301
248
311
250
21
SF274D
361
SK004D
SF001D
SK262D
SF275D
316
598
SD210D
36
594
SK212D
SK100D
SK617D
160
SD216D
SF002D
SS007D
SD209D
SK214D
SB003D
227
SK213D
SK226D
SK154D
SD375D
557
SK103D
SK053D
57
SF297D
SD152D
SF266D
SB004D
SS108D
ST215D
SB005D
SB006D
SB008D
SB007D
SB009D
SB011D
0
5m

遺構配置図(1/200)

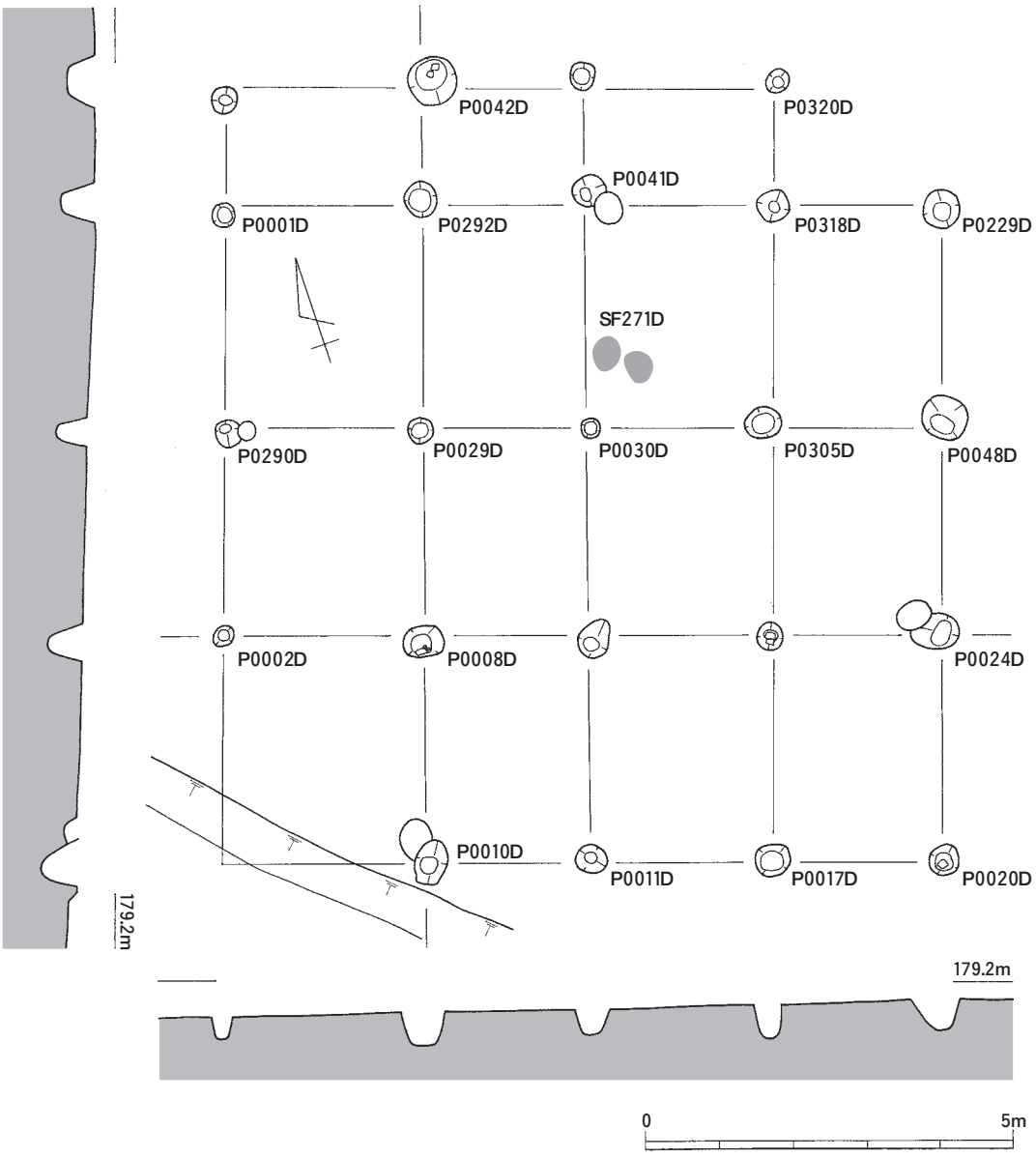
図版44　D地区　遺構

遺構配置図(1/200)

SB002D

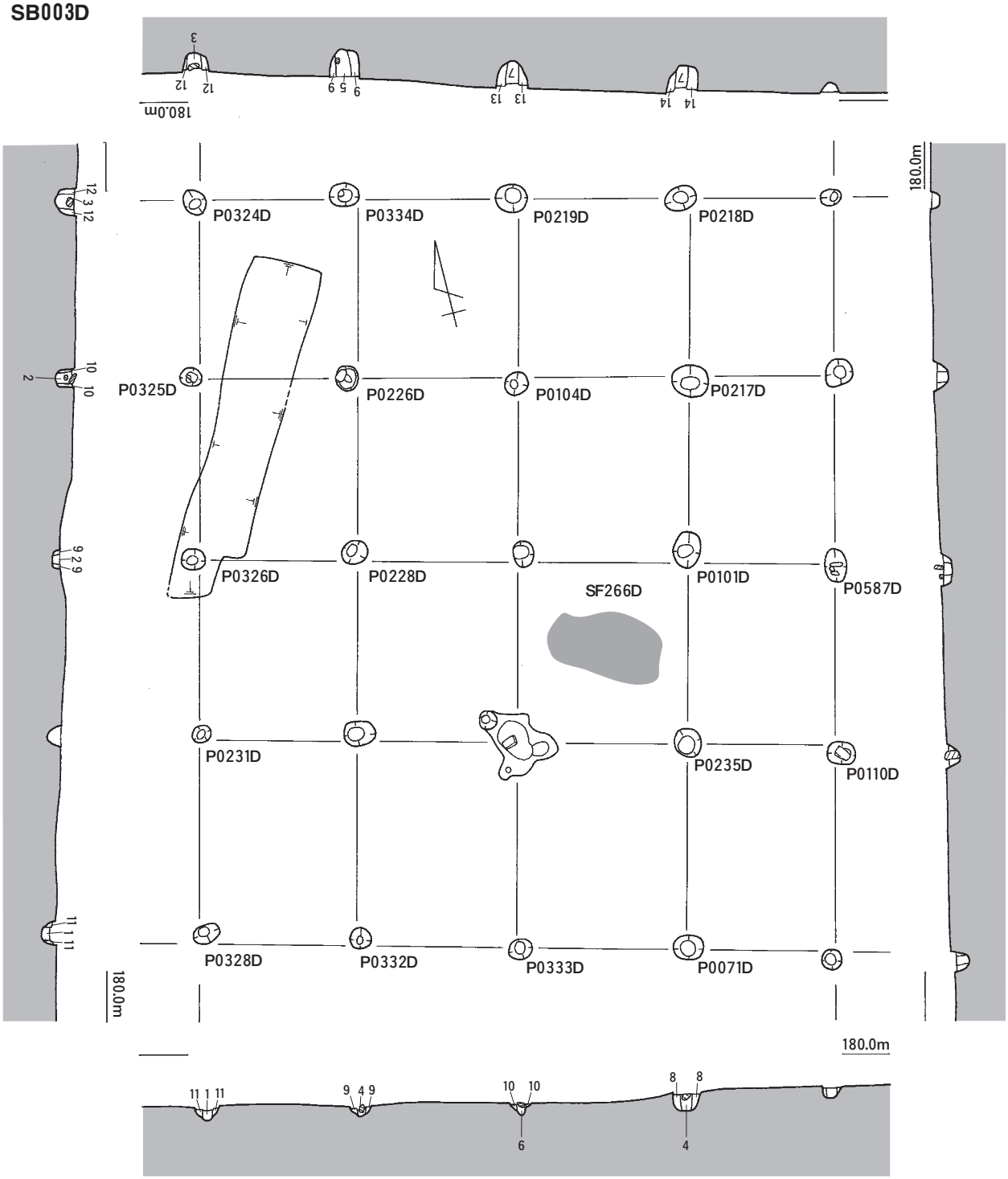


SB001D



掘立柱建物SB001D(1/100)　掘立柱建物SB002D(1/100)

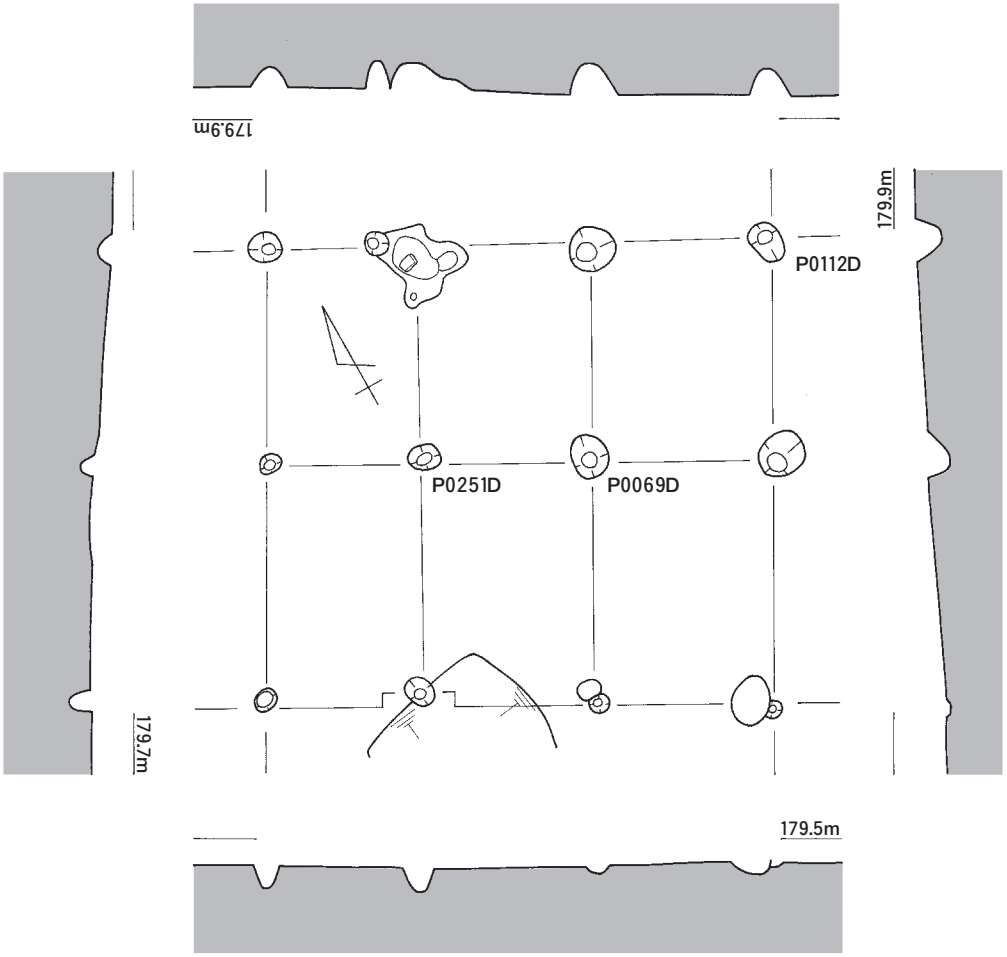
SB003D



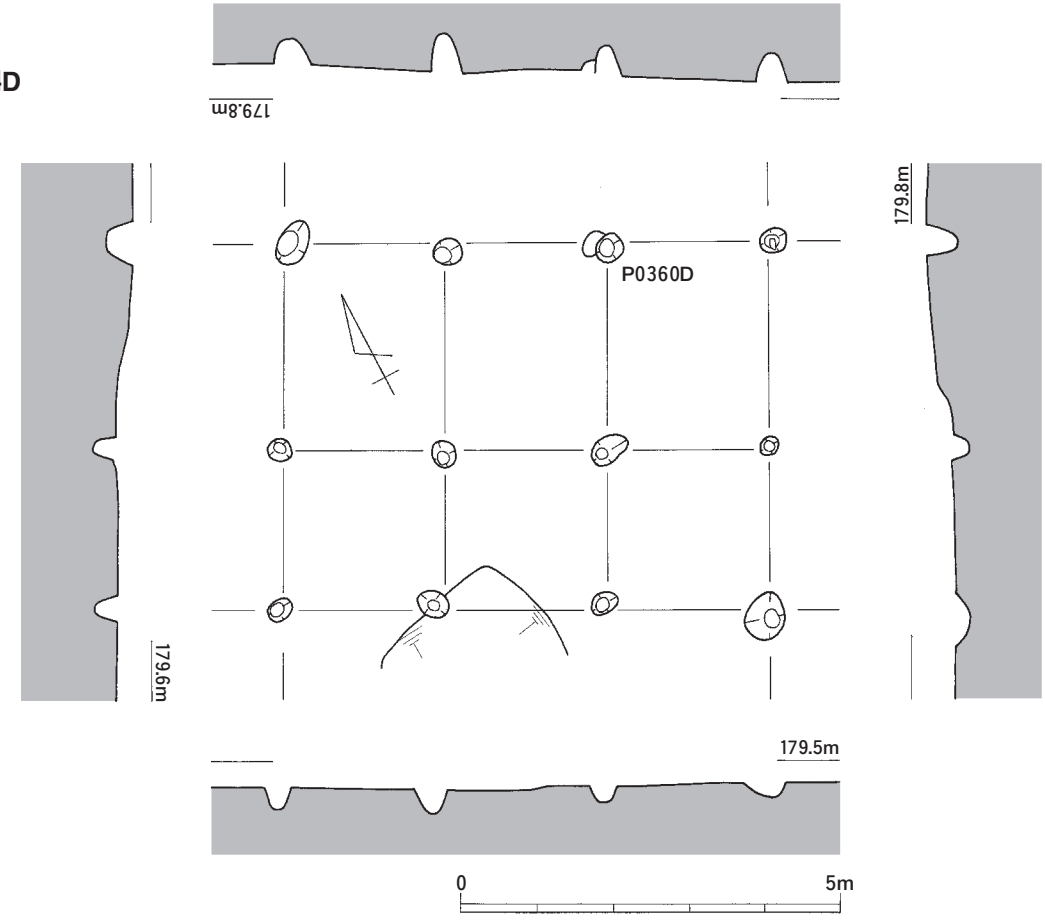
1 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
2 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫少量・炭含む)
3 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂
4 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
5 灰黄褐 シルト質極細砂～粗粒砂(細礫～中礫・炭・焼土含む)
6 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
7 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
8 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂
9 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
10 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
11 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
12 灰黄褐 シルト質極細砂～細粒砂(褐色土粒・細礫～中礫含む)
13 暗褐 シルト質極細砂～粗粒砂(細礫～中礫含む)
14 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
15 黄褐 シルト質極細砂(中礫少量含む)

掘立柱建物SB003D(1/100)

SB005D

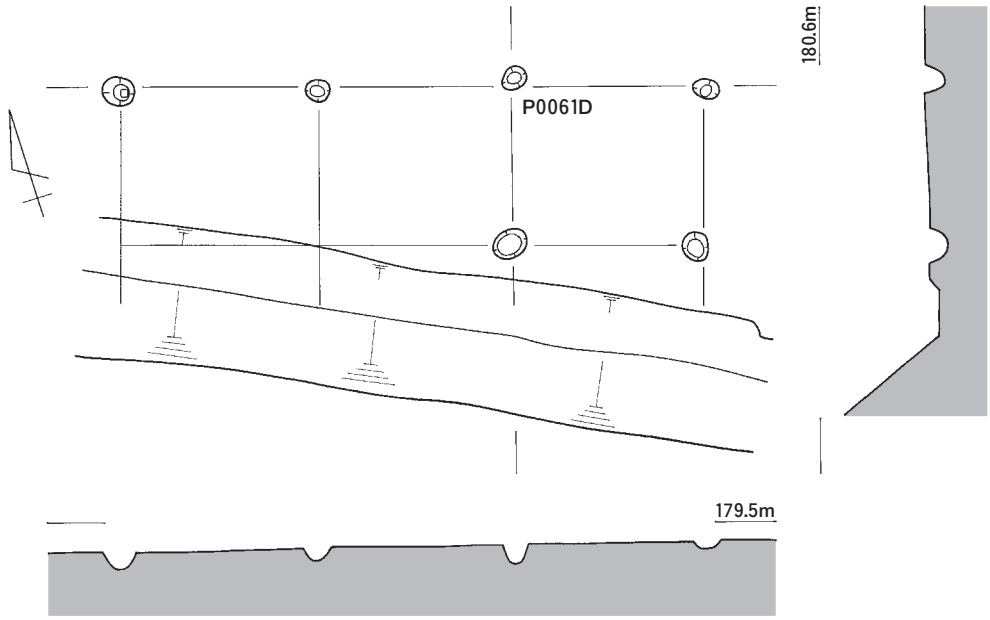


SB004D

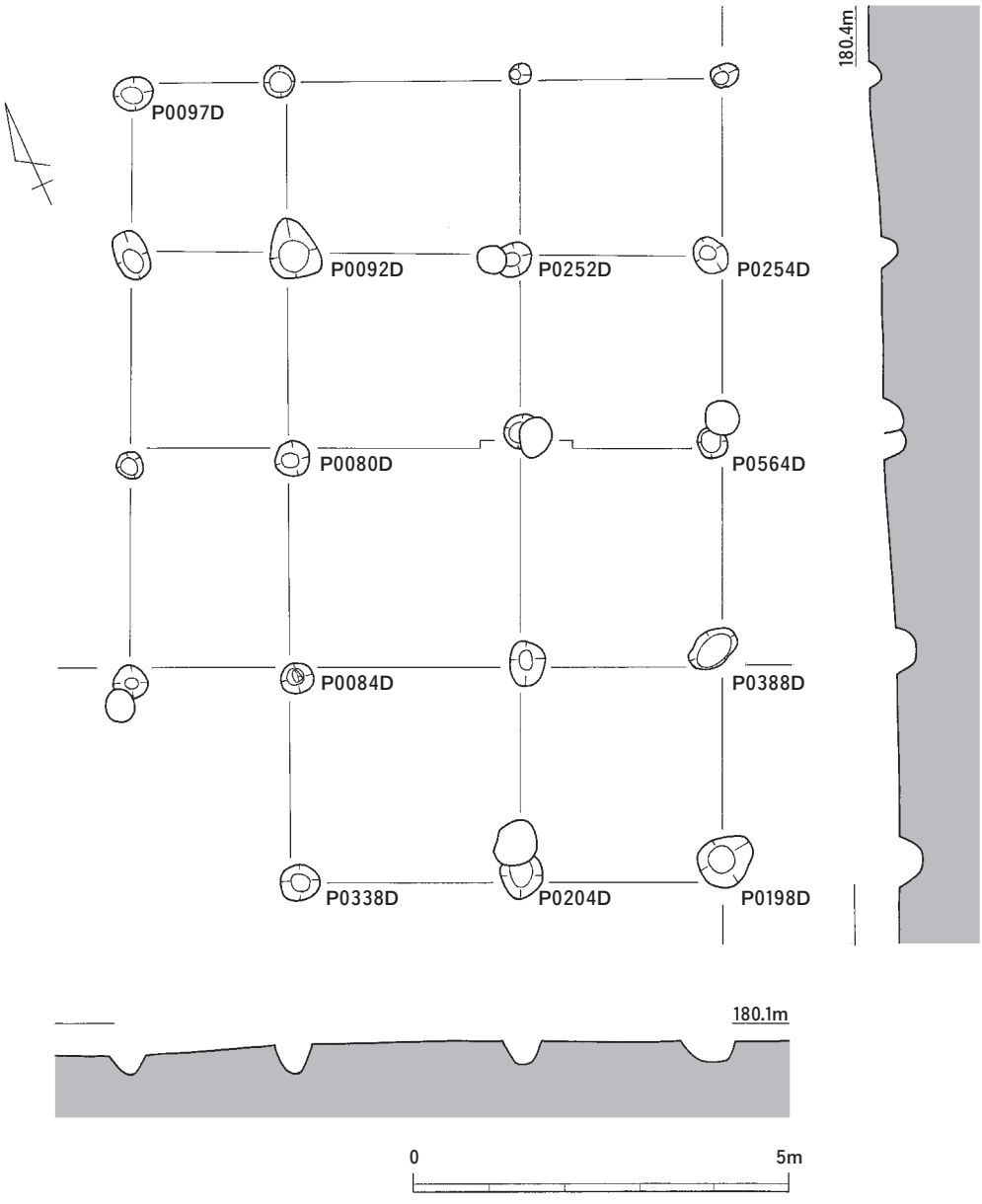


掘立柱建物SB004D(1/100)　掘立柱建物SB005D(1/100)

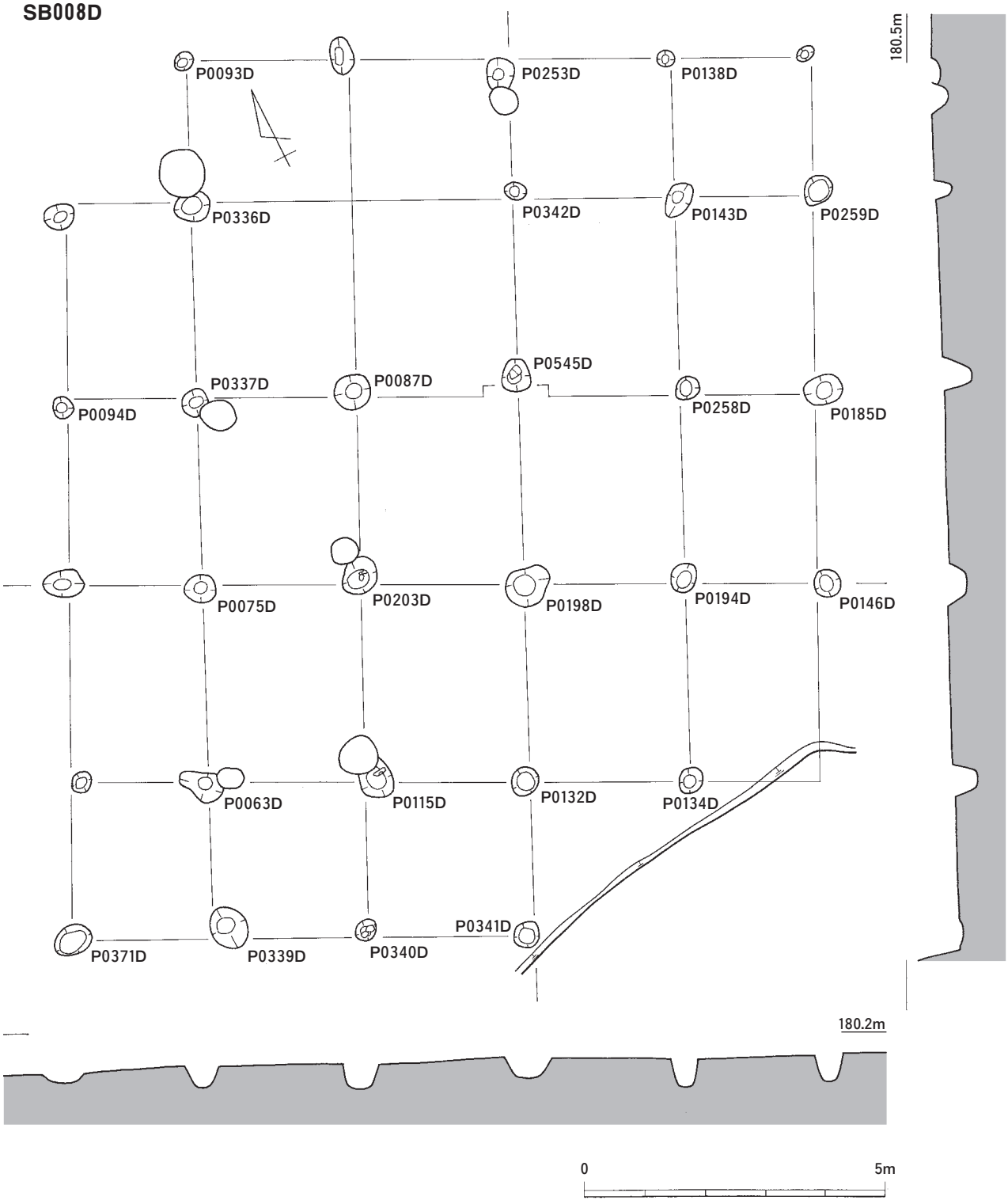
SB006D



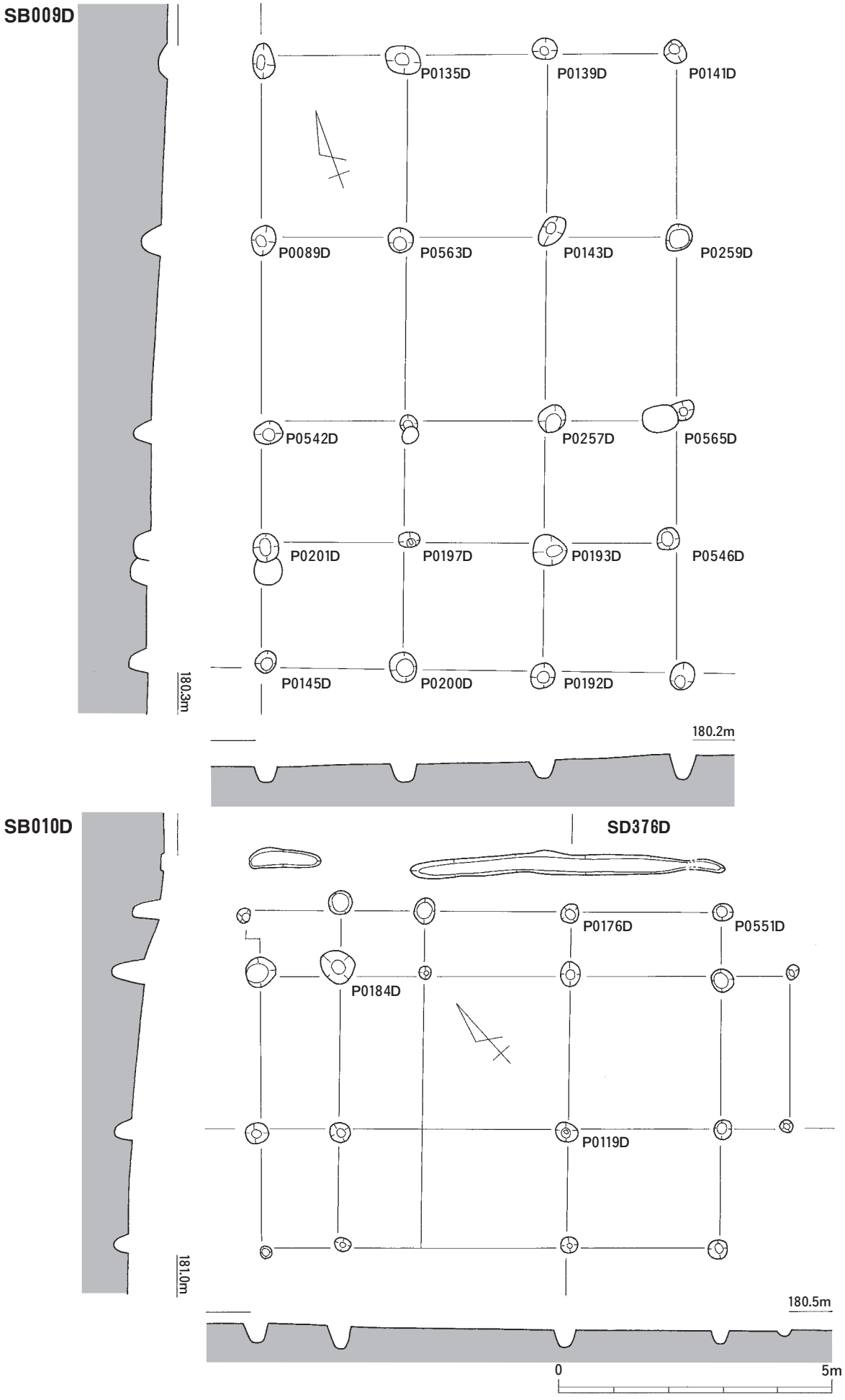
SB007D



掘立柱建物SB006D（1/100）　掘立柱建物SB007D（1/100）

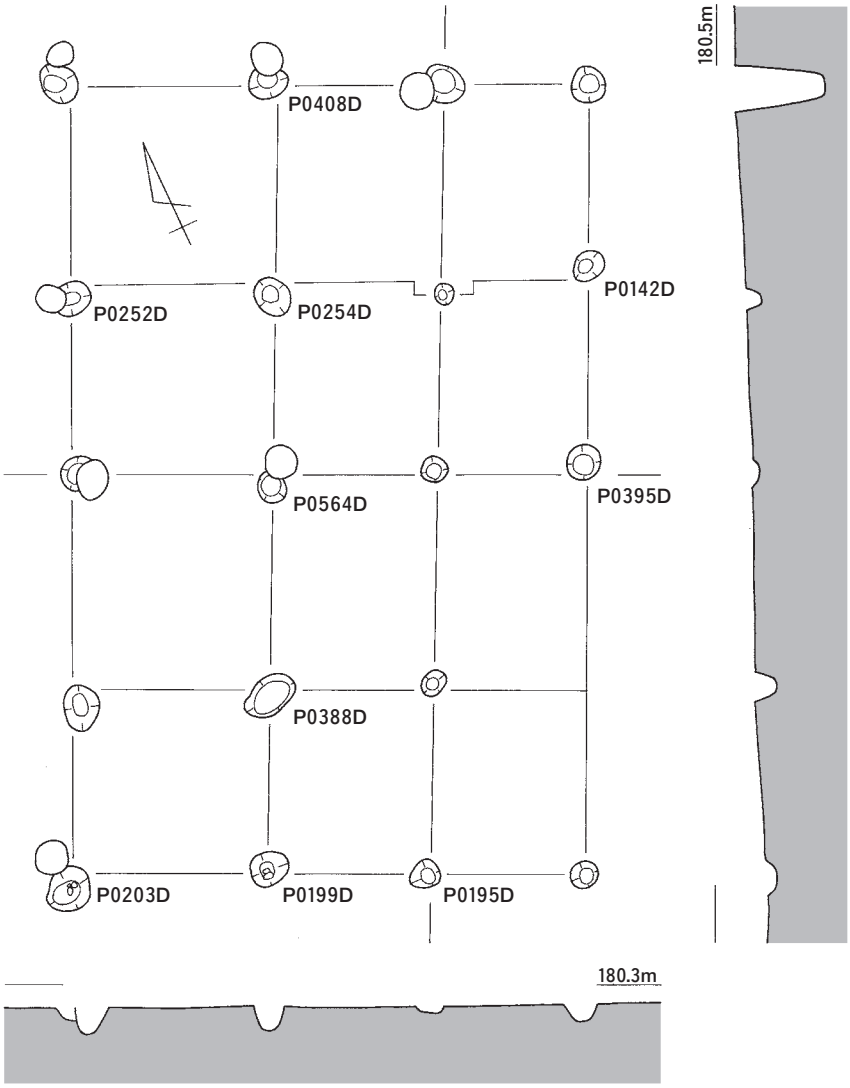


掘立柱建物SB008D(1/100)

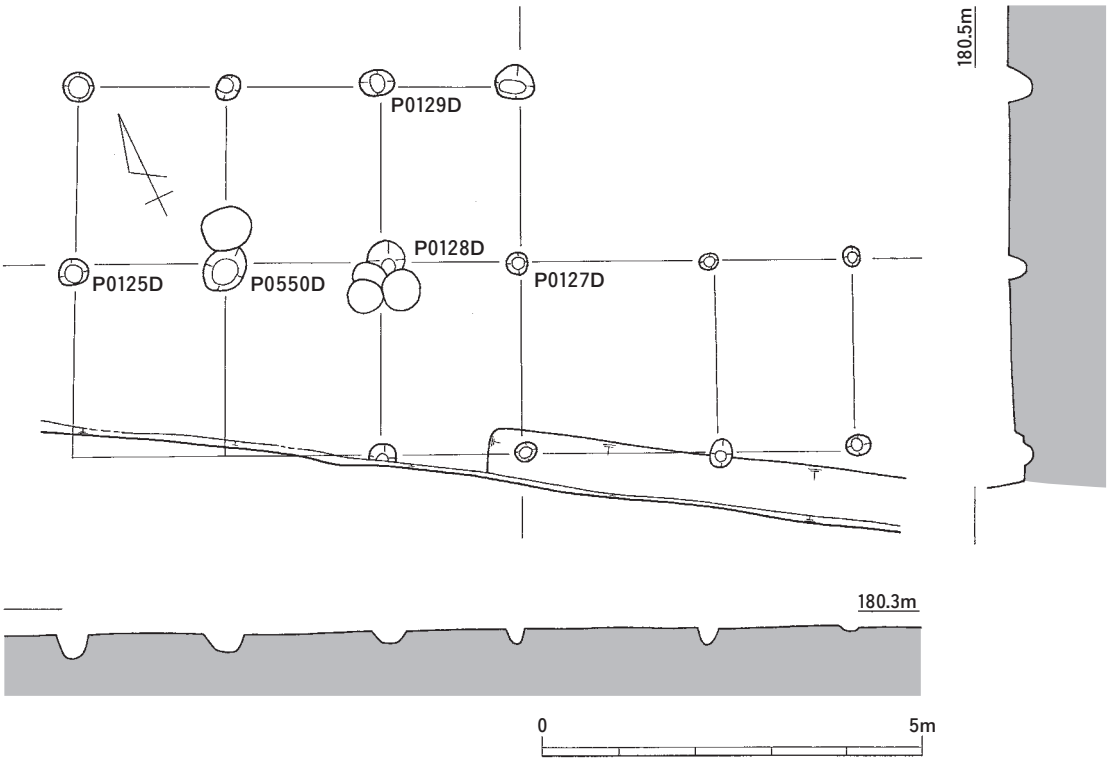


掘立柱建物SB009D(1/100)　　掘立柱建物SB010D(1/100)

SB011D

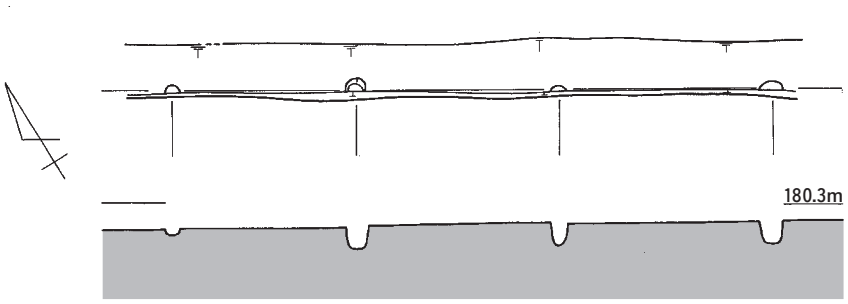


SB012D

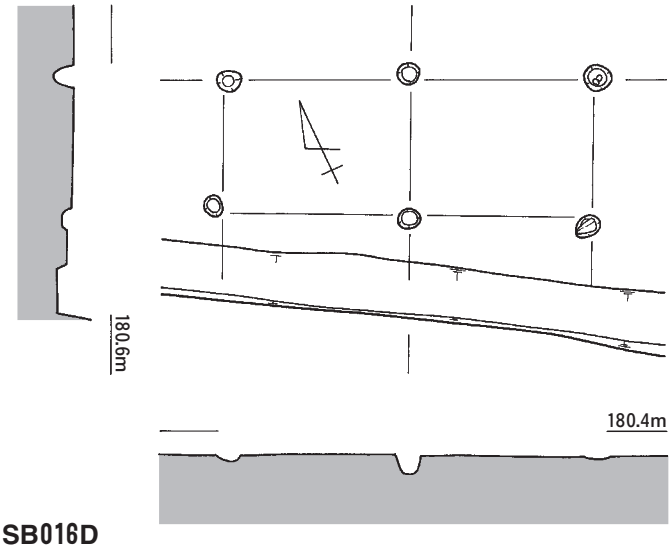


掘立柱建物SB011D(1/100)　　掘立柱建物SB012D(1/100)

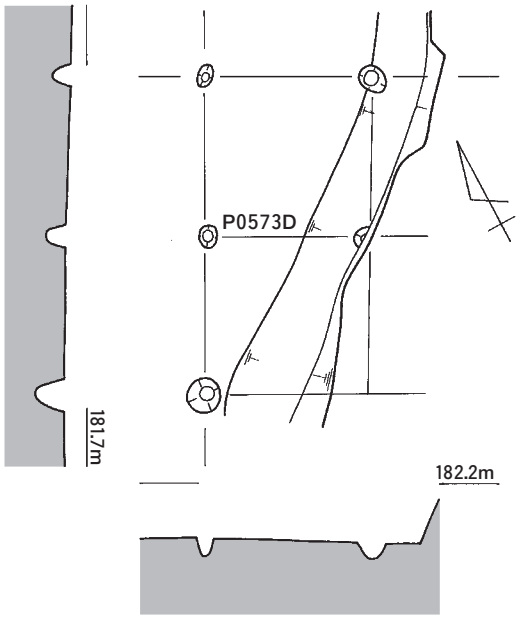
SB013D



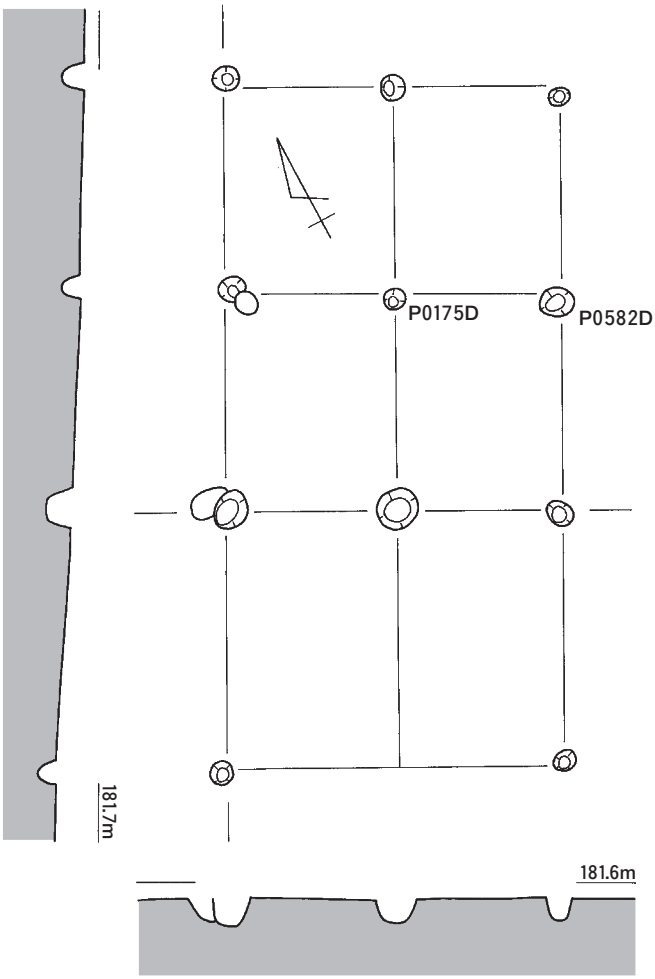
SB014D

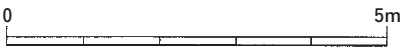


SB015D

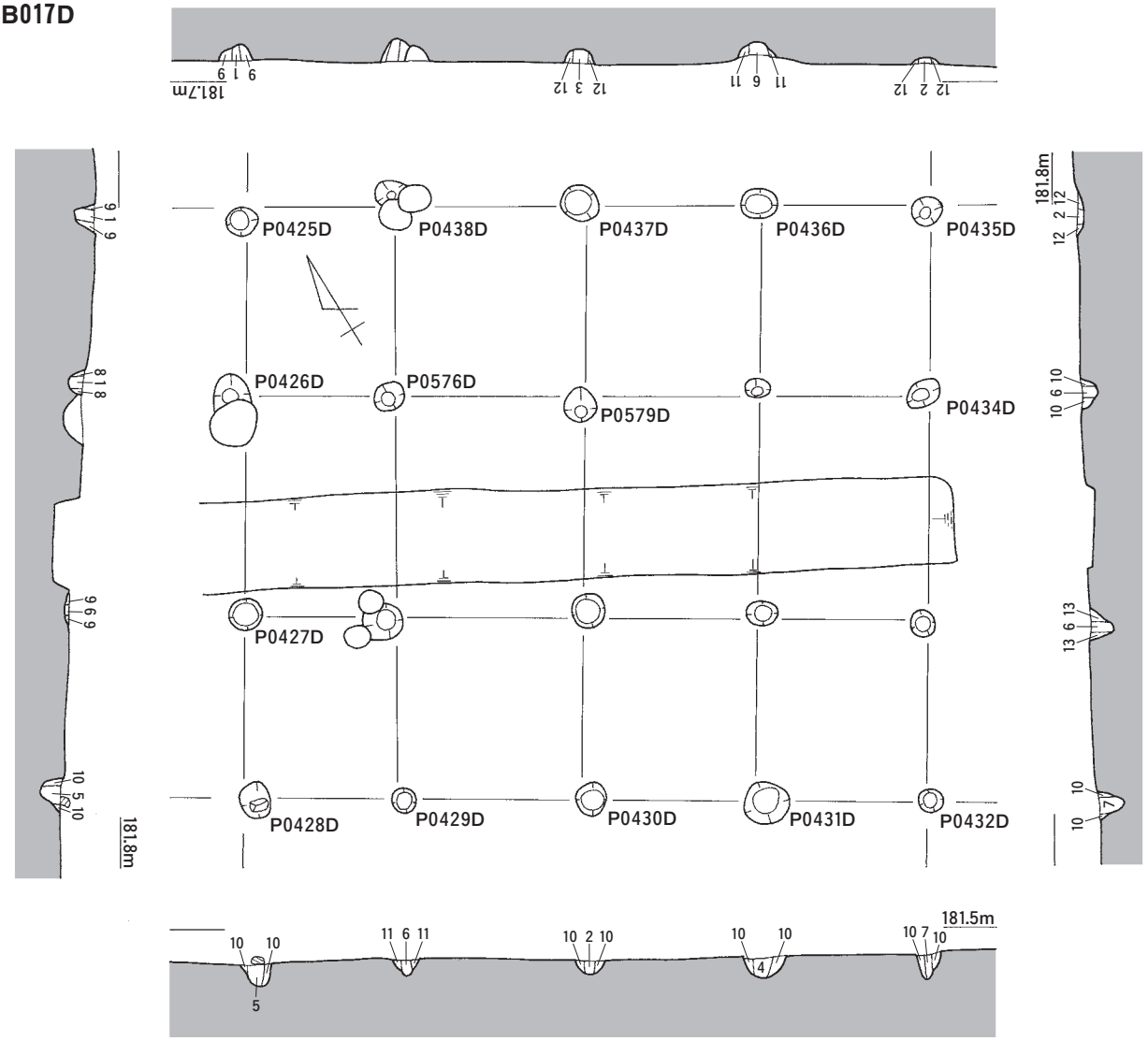


SB016D





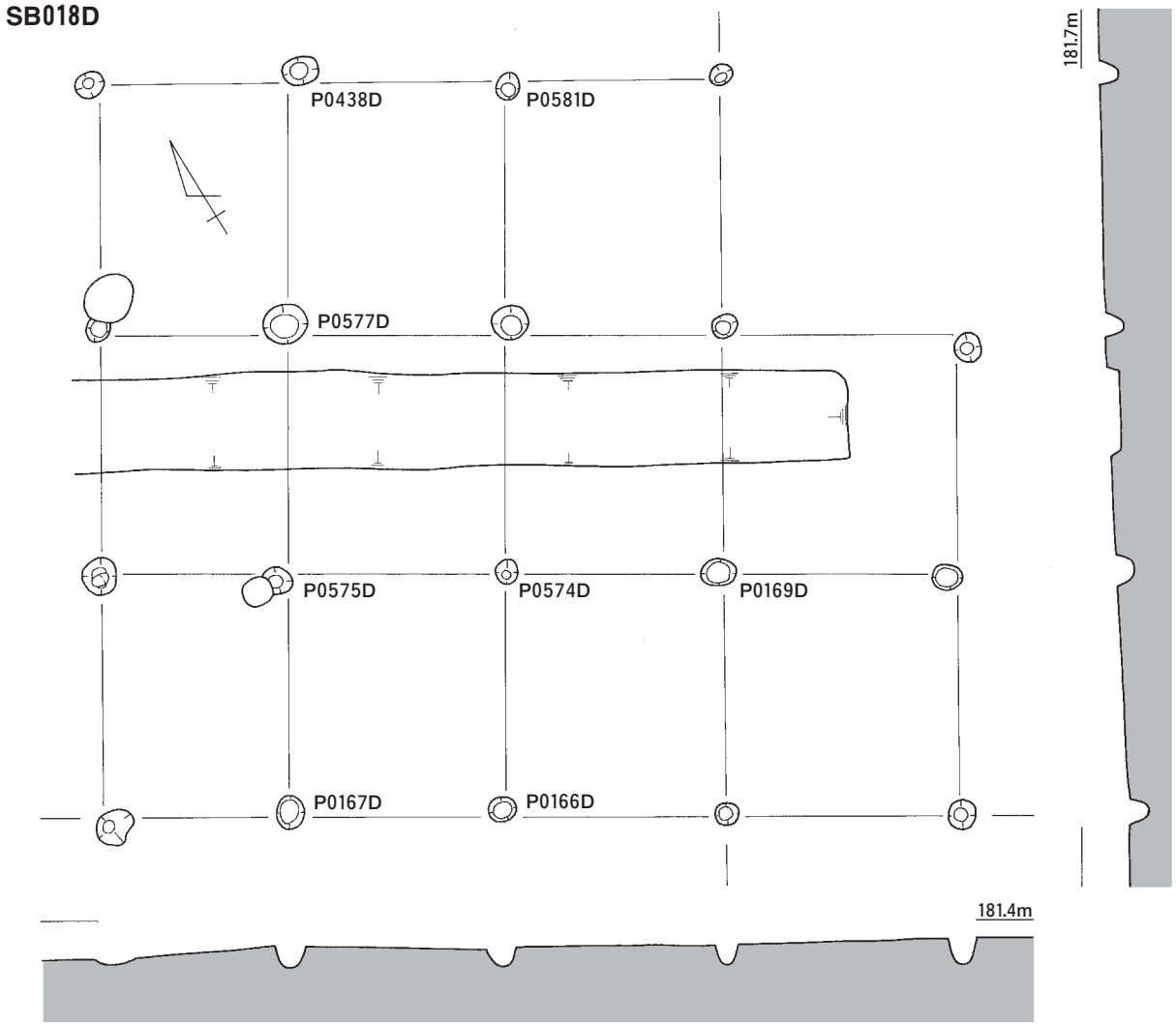
掘立柱建物SB013D(1/100)　掘立柱建物SB014D(1/100)
掘立柱建物SB015D(1/100)　掘立柱建物SB016D(1/100)

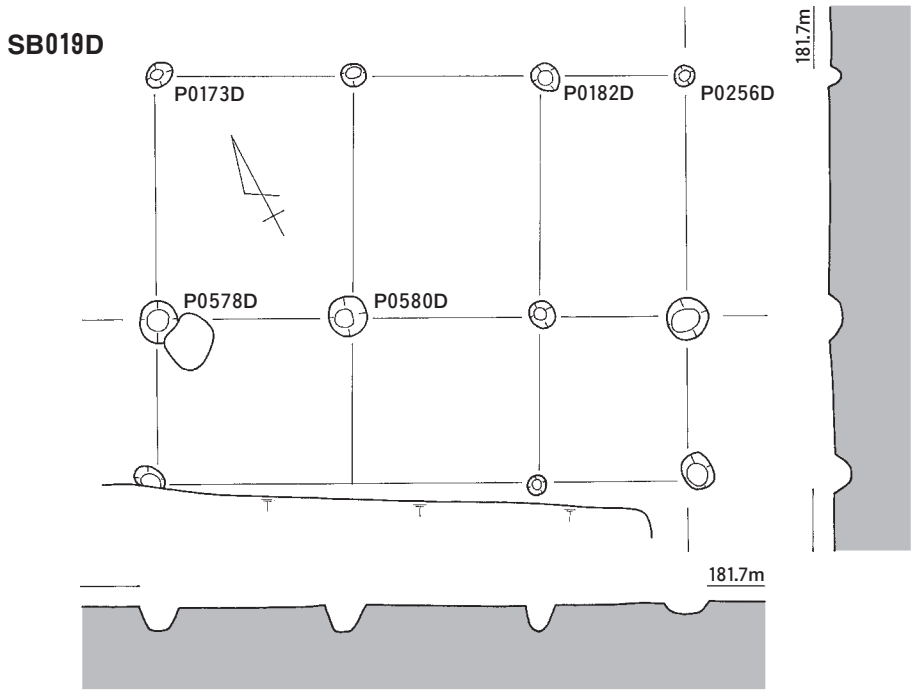


1 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
2 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
3 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～大礫含む)
4 灰褐 シルト質極細砂～粗粒砂(中礫～大礫含む)
5 灰褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
6 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
7 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫少量含む)
8 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫少量含む)
9 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫含む)
10 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
11 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)
12 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)
13 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中粒砂

0 5m

掘立柱建物SB017D(1/100)

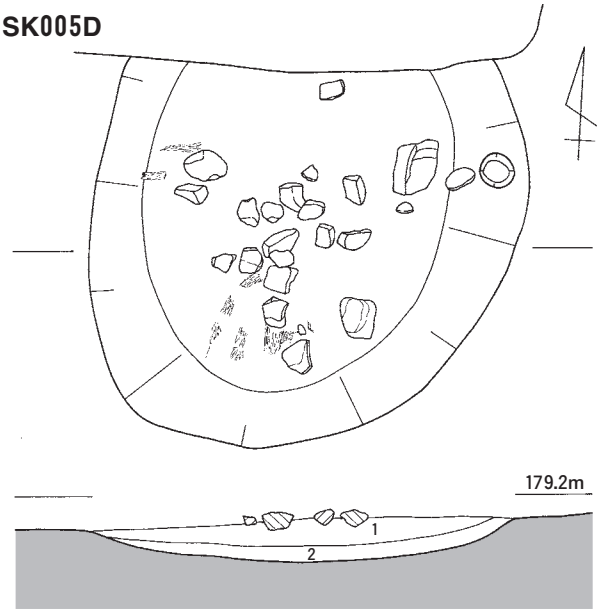




0　5m

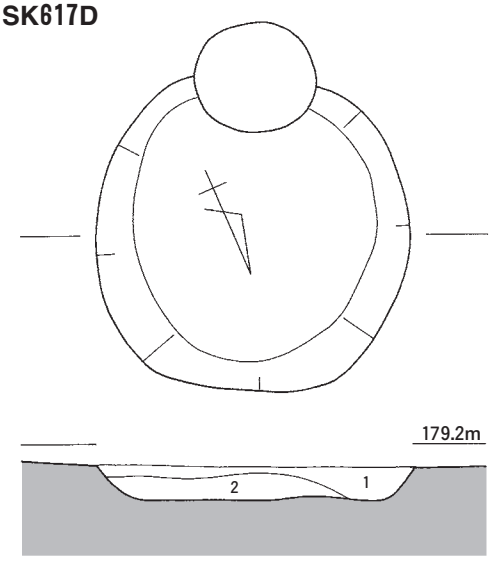
掘立柱建物SB018D(1/100)　　掘立柱建物SB019D(1/100)

SK005D



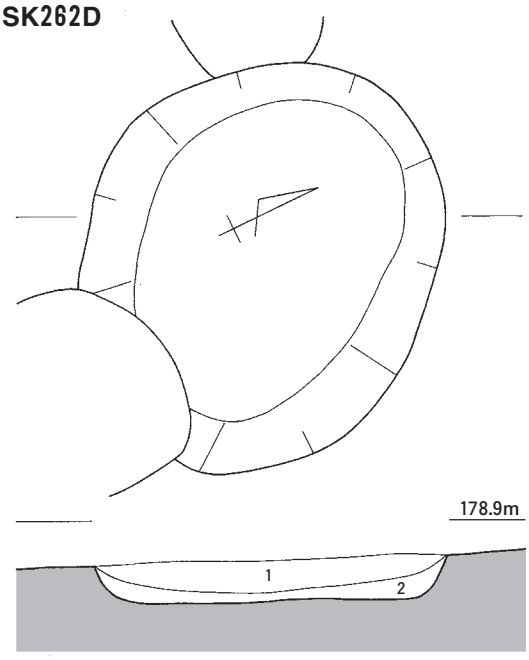
1 褐灰 細粒砂～粗粒砂(中礫含む)
2 灰褐 シルト～粗粒砂

SK617D



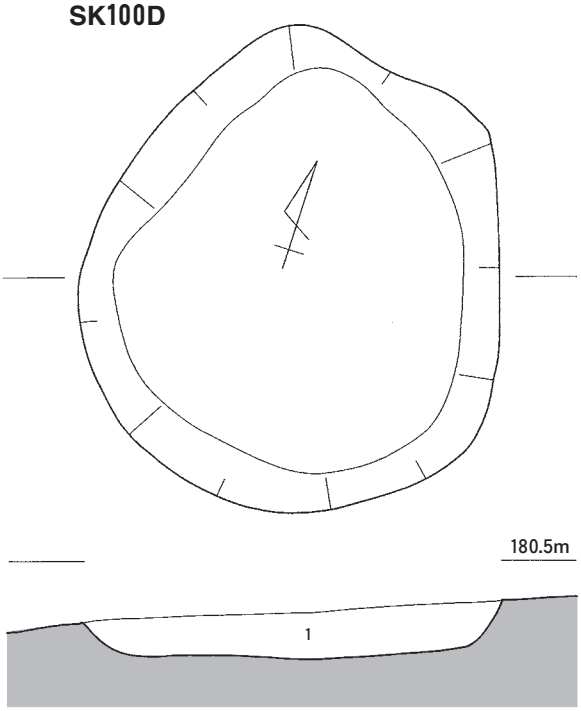
1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)
2 黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～大礫多量に含む)

SK262D



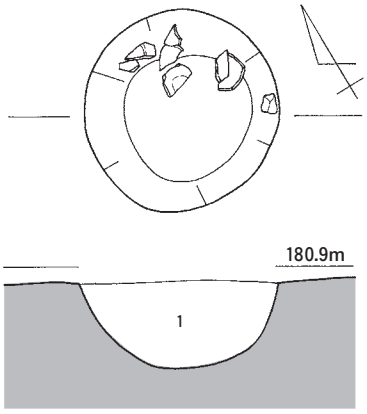
1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫含む)
2 灰黄褐 (1より明るめ) シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)

SK100D



1 褐灰 シルト質極細砂～細礫(中礫・炭僅かに含む)

SK154D



1 褐灰 シルト質極細砂～中砂

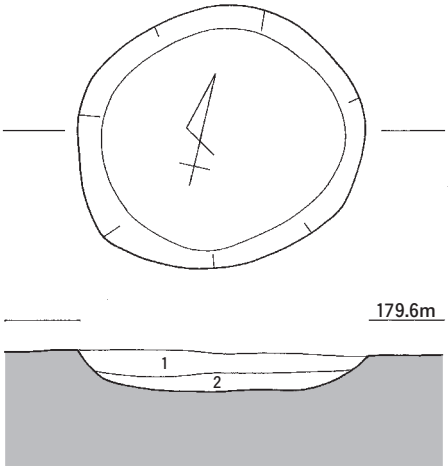
0 2m

0 1m

土坑SK005D(1/40) 土坑SK617D(1/20) 土坑SK262D(1/20) 土坑SK100D(1/20) 土坑SK154D(1/20)

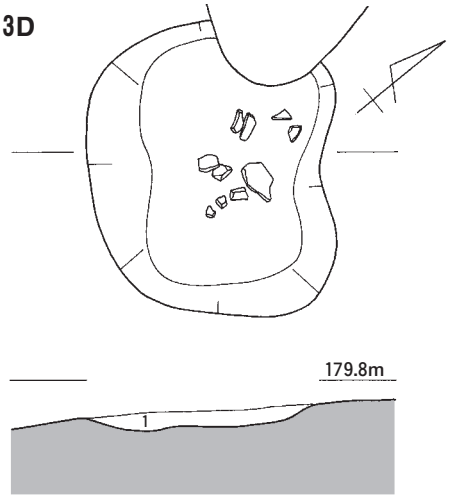
図版56　D地区　遺構

SK212D



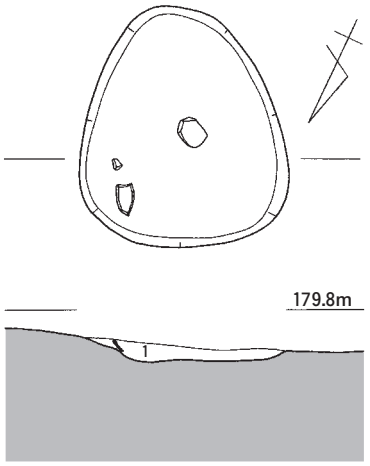
1 褐灰 中粒砂～粗粒砂(中礫含む)
2 にぶい橙 細粒砂～極細粒砂(細礫～中礫礫含む)

SK213D



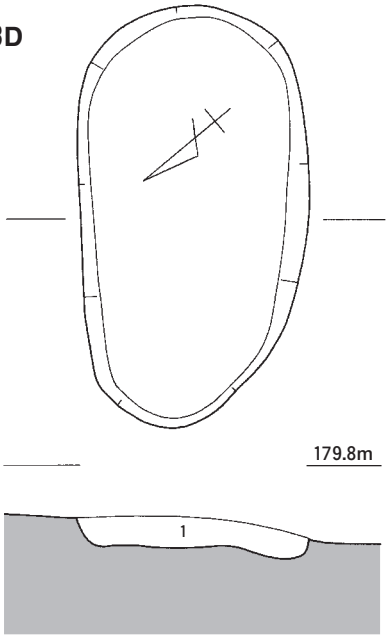
1 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)

SK214D



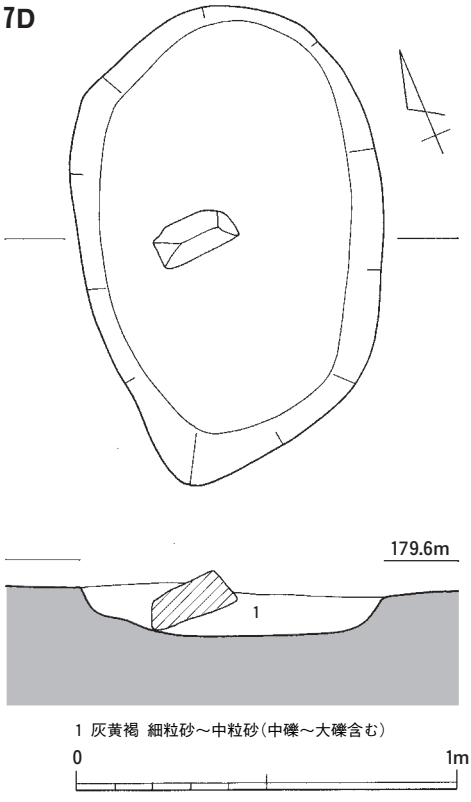
1 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫含む)

SK218D



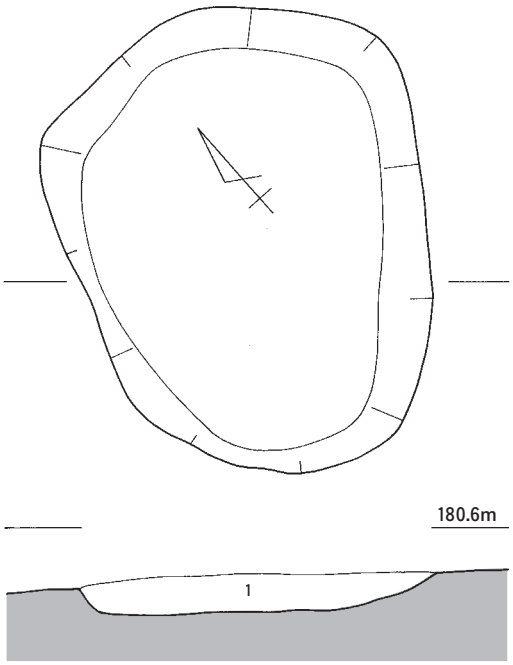
1 褐 中粒砂～細粒砂(細礫～中礫・炭化物含む)

SK217D



1 灰黄褐 細粒砂～中粒砂(中礫～大礫含む)

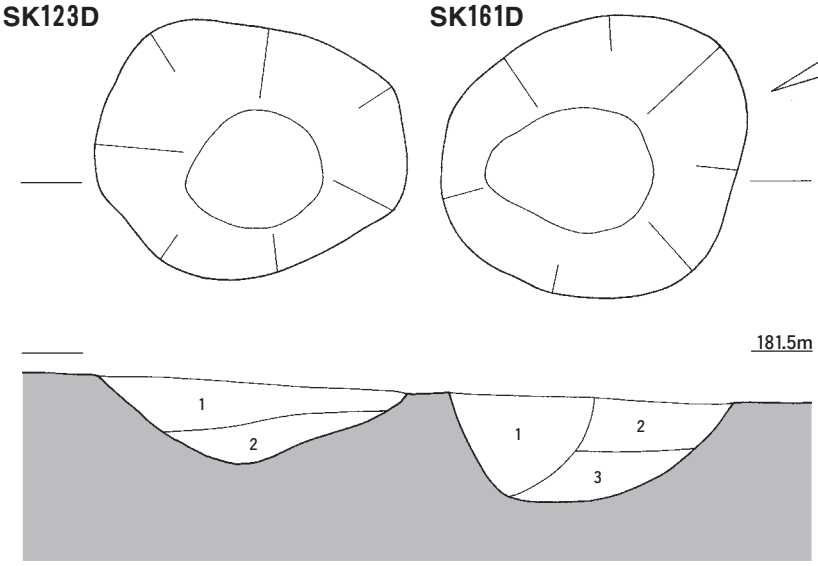
SK053D



1 黒褐 シルト質極細砂～粗粒砂(中礫含む)

土坑SK212D(1/20)　土坑SK213D(1/20)　土坑SK214D(1/20)
土坑SK218D(1/20)　土坑SK217D(1/20)　土坑SK053D(1/20)

SK123D

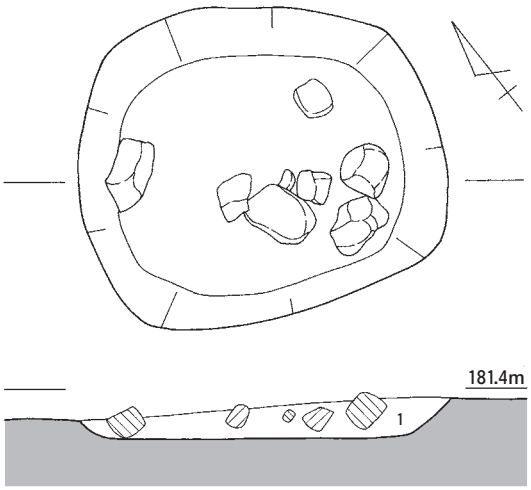


1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～大礫・炭含む)
2 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫・炭含む)

SK161D

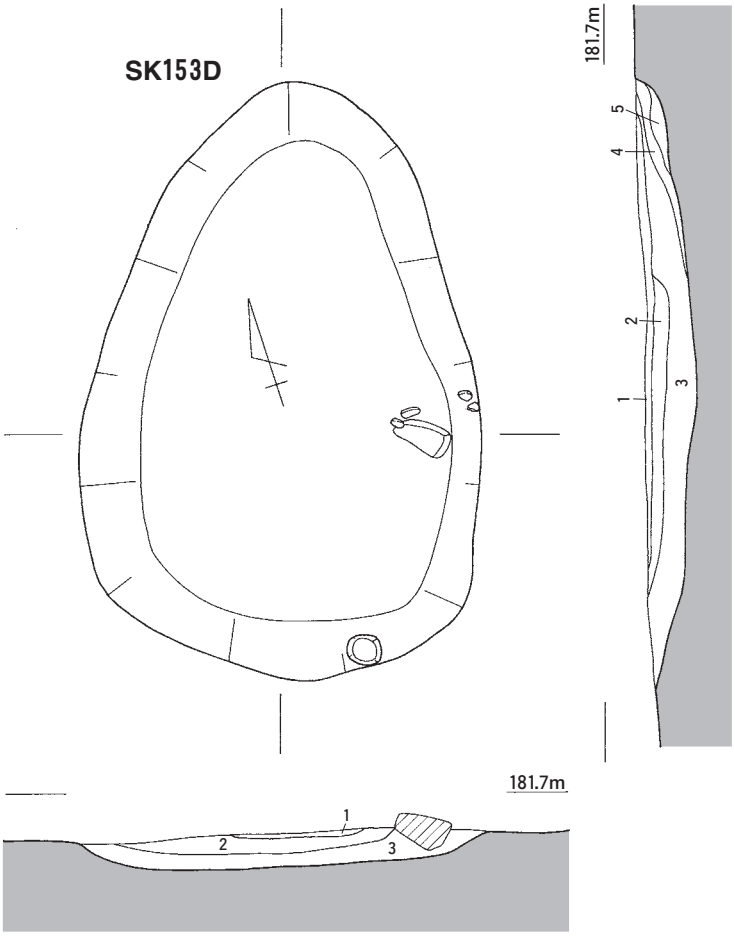
1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多量・炭含む)
2 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
3 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)

SK122D



1 灰褐 シルト質極細砂～中砂(焼土ブロック含む)

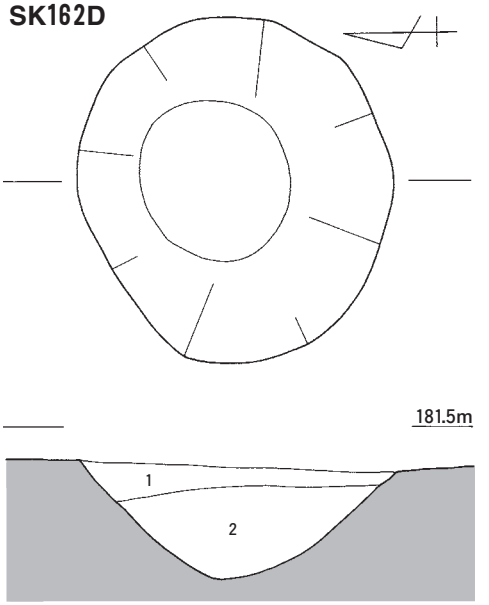
SK153D



1 褐灰 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭多く含む)
2 黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫・炭含む)
3 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多量・炭少量含む)
4 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多量・炭含む)
5 褐灰 シルト質極細砂～細粒砂(中礫～大礫含む)

0 2m

SK162D

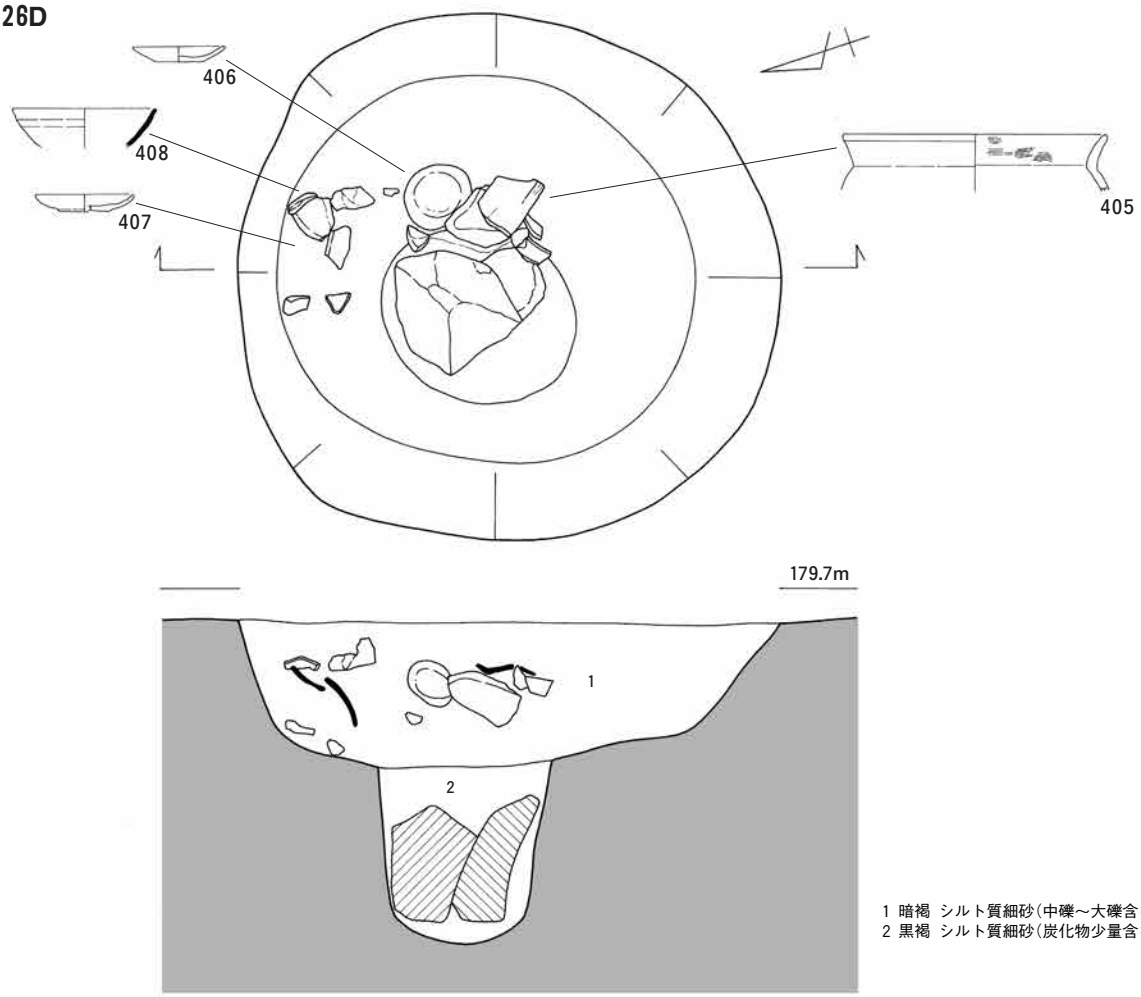


1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多量・炭含む)
2 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多量に含む)

0 1m

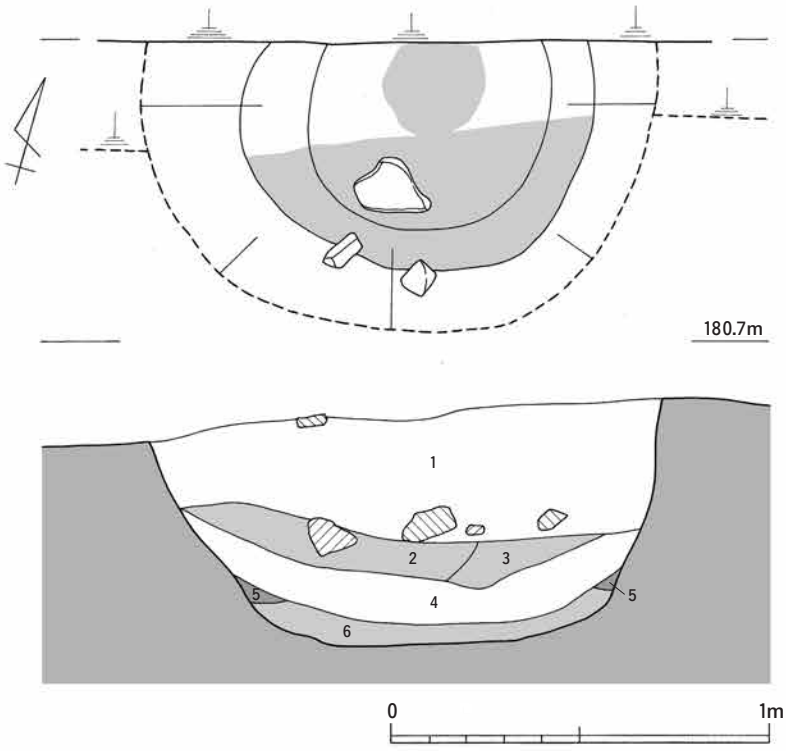
土坑SK123・161D(1/20)　土坑SK122D(1/20)　土坑SK162D(1/20)　土坑SK153D(1/50)

SK226D



1 暗褐 シルト質細砂(中礫～大礫含む)
2 黒褐 シルト質細砂(炭化物少量含む)[SB003DP000D]

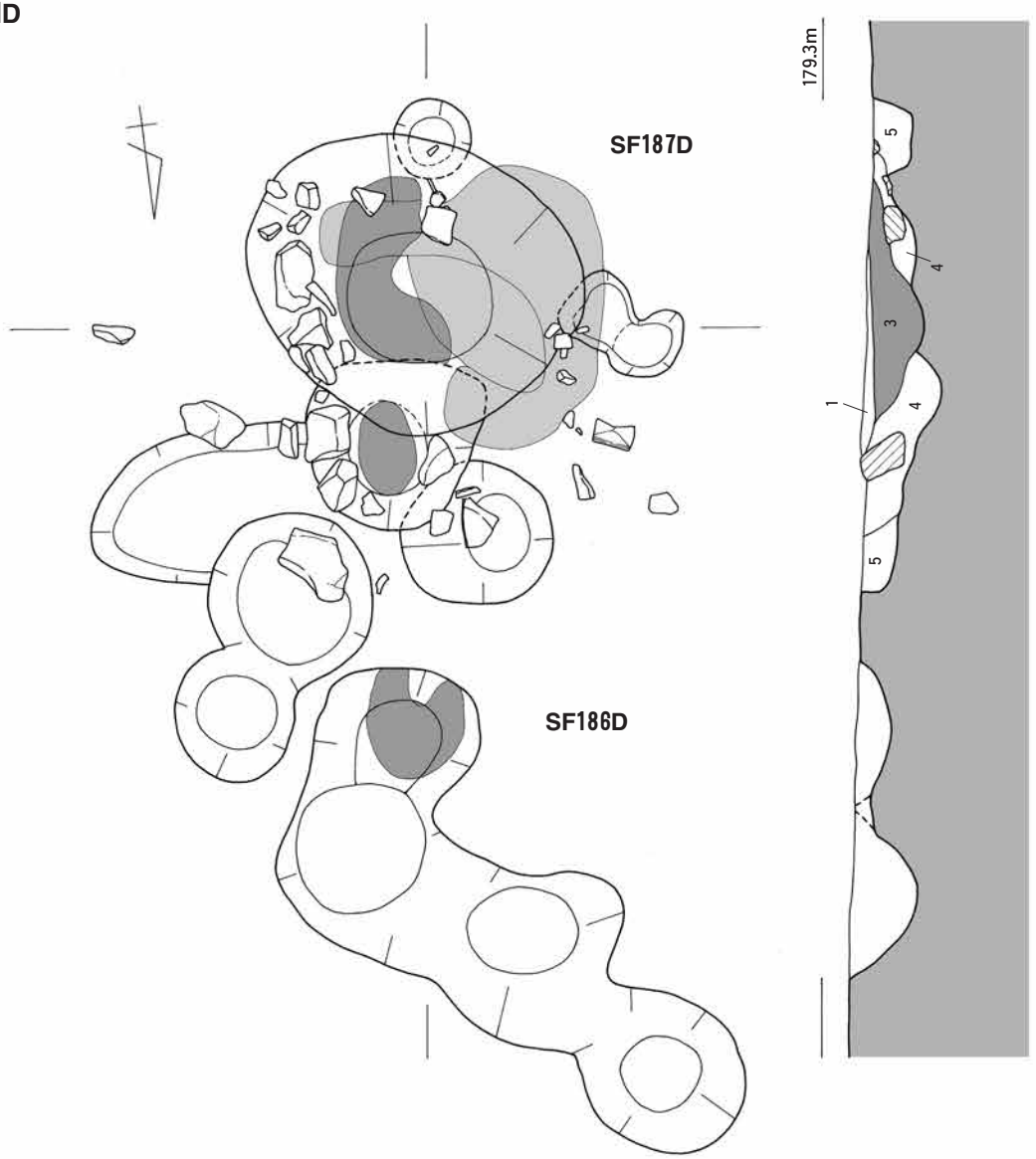
SK004D



1 灰黄褐 シルト～細砂
2 にぶい橙 シルト質極細砂
3 暗灰 シルト～細砂(炭多く含む)
4 灰褐 シルト～細砂
5 にぶい橙 シルト質極細砂
6 暗灰 シルト質極細砂(炭多く含む)

土坑SK226D(1/20)　　土坑SK004D(1/20)

SF001D

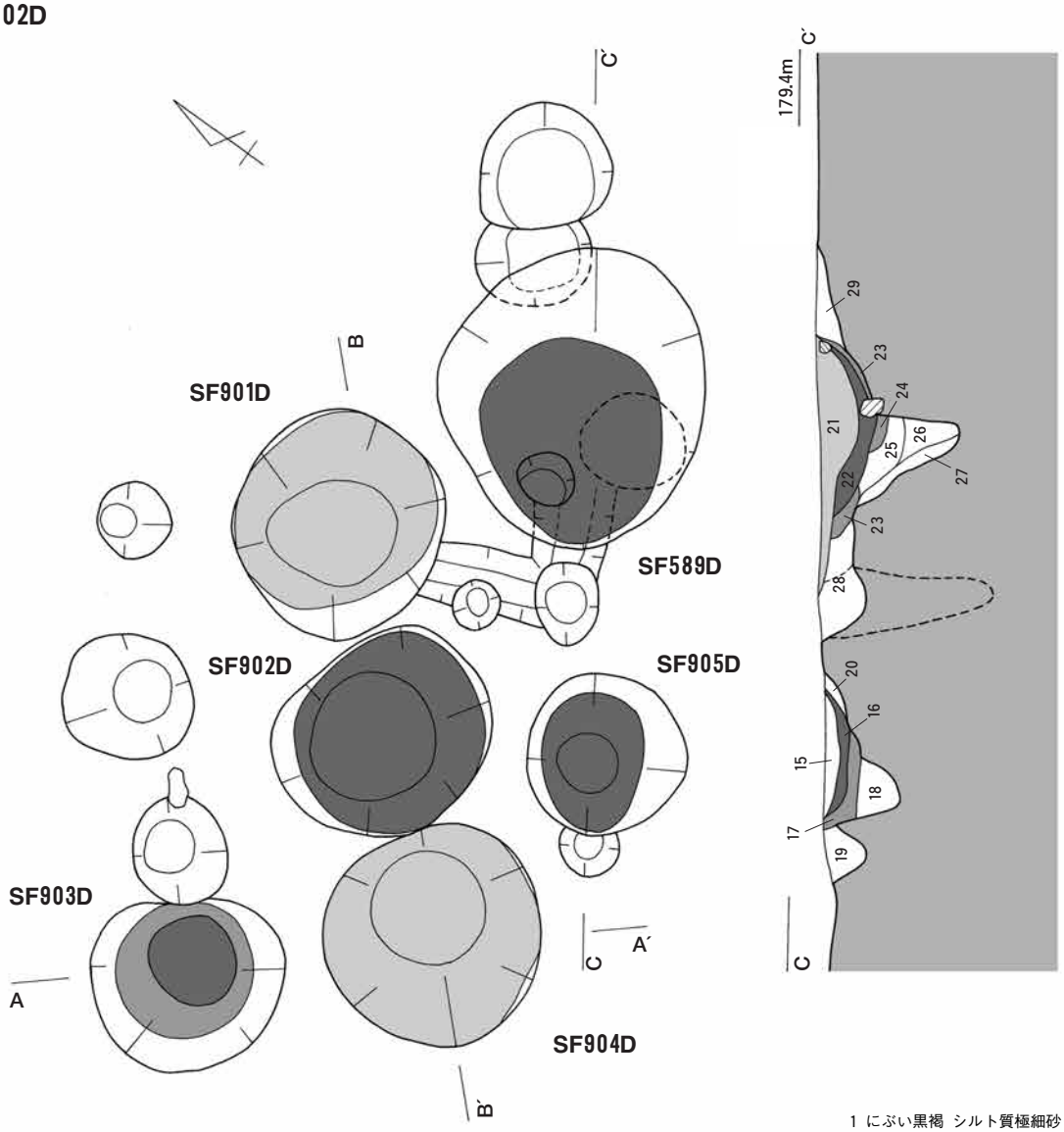


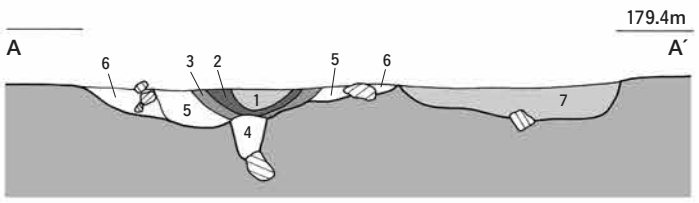
1 灰黄褐 シルト～細粒砂(中礫含む)
2 灰黄褐 細砂～粗砂(炭化物含む)[焼土]
3 橙 シルト～極細砂[焼土]
4 灰褐 細砂～中砂(中礫～大礫含む)
5 灰褐 細砂～中砂(中礫含む)[ピット]

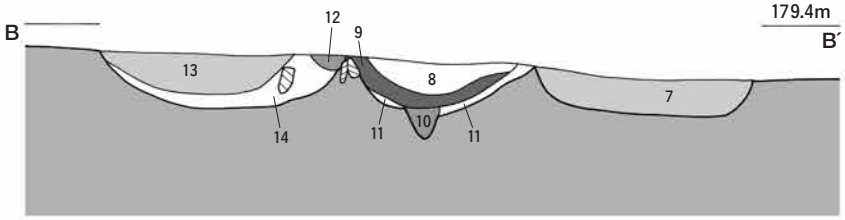
0　1m

鍛冶炉群SF001D(1/20)

SF002D







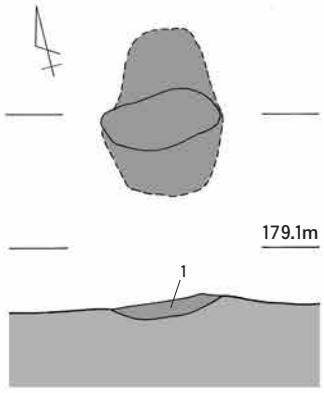
1 にぶい黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
2 黒 被熱黒変
3 赤褐 被熱赤変
4 褐灰 シルト質極細砂(中礫含む)
5 褐灰 シルト質極細砂(中礫含む)
6 褐灰 シルト質極細砂(中礫含む)
7 黒 シルト質極細砂(炭含む)
8 にぶい黒褐 シルト質極細砂
9 黒 シルト質極細砂(炭含む)
10 赤褐 被熱赤変
11 にぶい黒褐 シルト質極細砂
12 にぶい橙 極細砂～粗粒砂[焼土]
13 黒 シルト質極細砂(炭含む)
14 灰黄褐 シルト質極細砂(中礫含む)
15 にぶい黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
16 黒 被熱黒変
17 赤褐 被熱赤変
18 灰黄褐 シルト質極細砂
19 にぶい褐 細砂(Pit)
20 褐灰 シルト質極細砂
21 にぶい黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
22 (炭多量に含む)
23 にぶい赤褐 シルト質極細砂
24 赤褐 被熱赤変
25 にぶい褐 シルト質極細砂(炭含む)
26 にぶい褐 シルト質極細砂
27 にぶい黄橙 細砂～粗粒砂
28 灰黄褐 シルト質極細砂
29 灰黄褐 細砂

鍛冶炉群SF002D(1/20)

SF274D

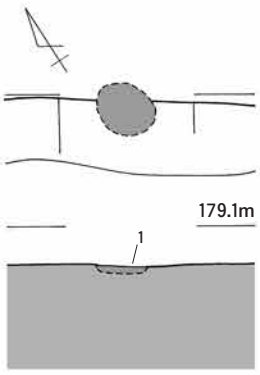
1［焼土］
2 灰黄褐 シルト～細粒砂(中礫含む)

SF999D



1 橙 シルト質極細砂(細礫～中礫多く含む)［焼土］

SF275D

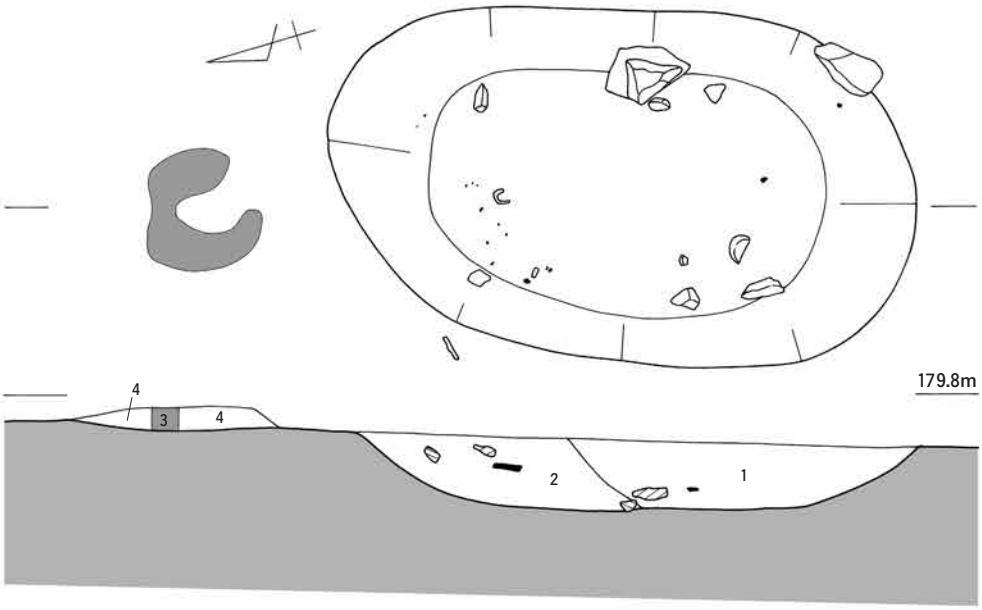


1 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)［焼土］

焼土SF274D(1/20)　焼土SF999D(1/20)　焼土SF275D(1/20)

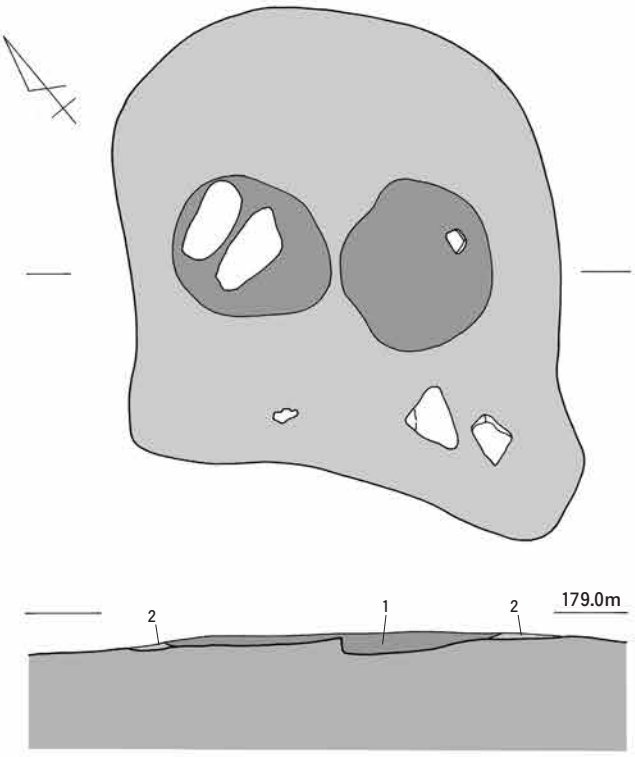
SF297D

SK103D



1 灰黄褐 極細砂～中粒砂(中礫・炭・焼土含む)
2 褐灰 極細砂～粗粒砂(中礫含む)
3 にぶい赤褐 シルト質極細砂[焼土]
4 灰褐 極細砂～中粒砂(中礫含む)

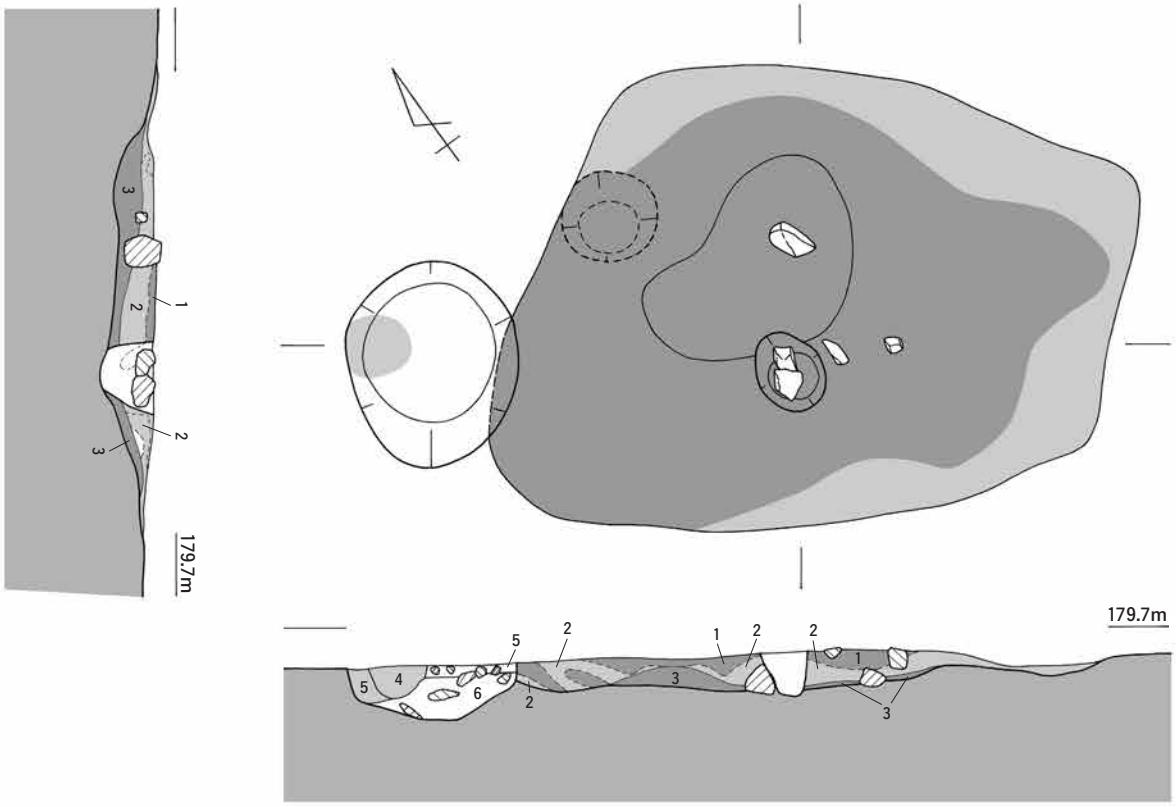
SF271D



1 にぶい赤褐 極細砂～粗粒砂[焼土]
2 灰黄 褐極細砂～細砂

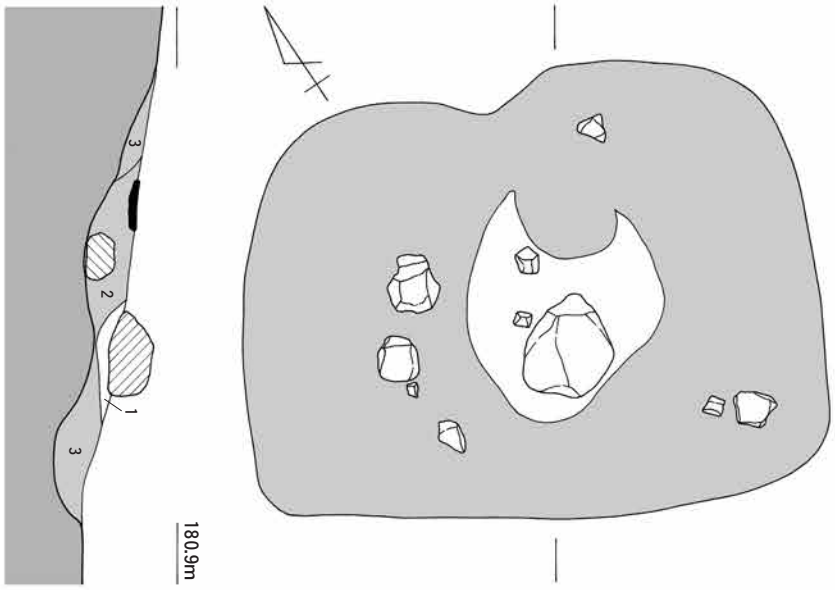
焼土SF297D・土坑SK103D(1/20)　　焼土SF271D(1/20)

SF266D



1 橙　シルト質極細砂～粗砂[焼土]
2 黒褐　シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫・炭含む)
3 明赤褐　シルト質極細砂[焼土]
4 黒褐　シルト質極細砂～中粒砂(炭多く含む)
5 暗灰黄　シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫・炭含む)
6 黄褐　シルト質極細砂～粗砂(上部に中礫多く含む)

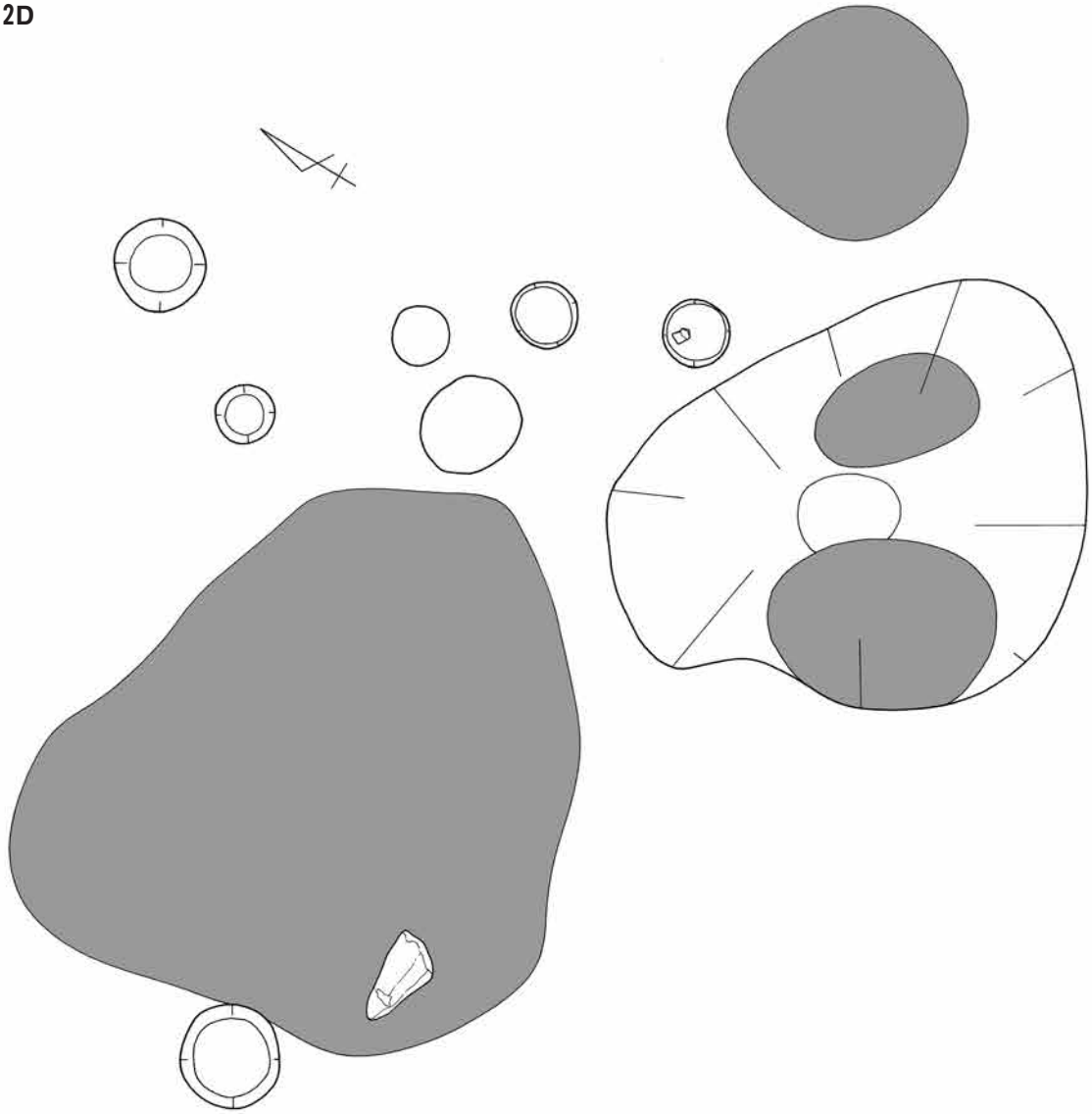
SF279D



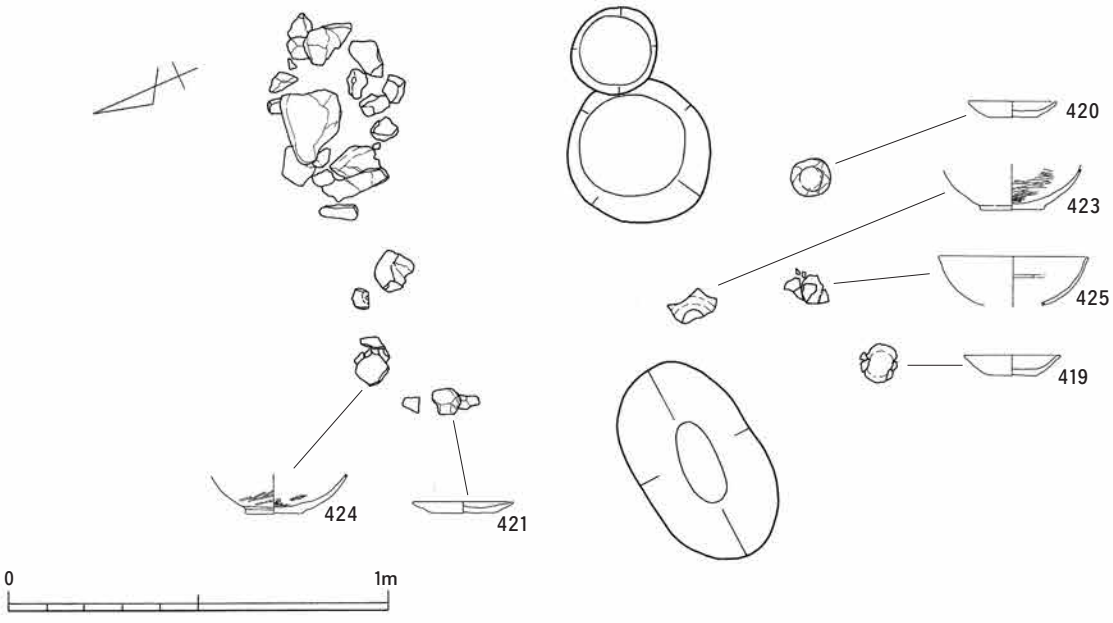
1 灰黄褐　シルト質極細砂～細砂(細礫～中礫・炭含む)
2 シルト質極細砂～細砂(細礫～中礫多量・炭塊含む)
3 灰褐　シルト質極細砂～細砂(中礫・炭含む)

焼土SF266D(1/20)　　焼土SF279D(1/20)

SF272D

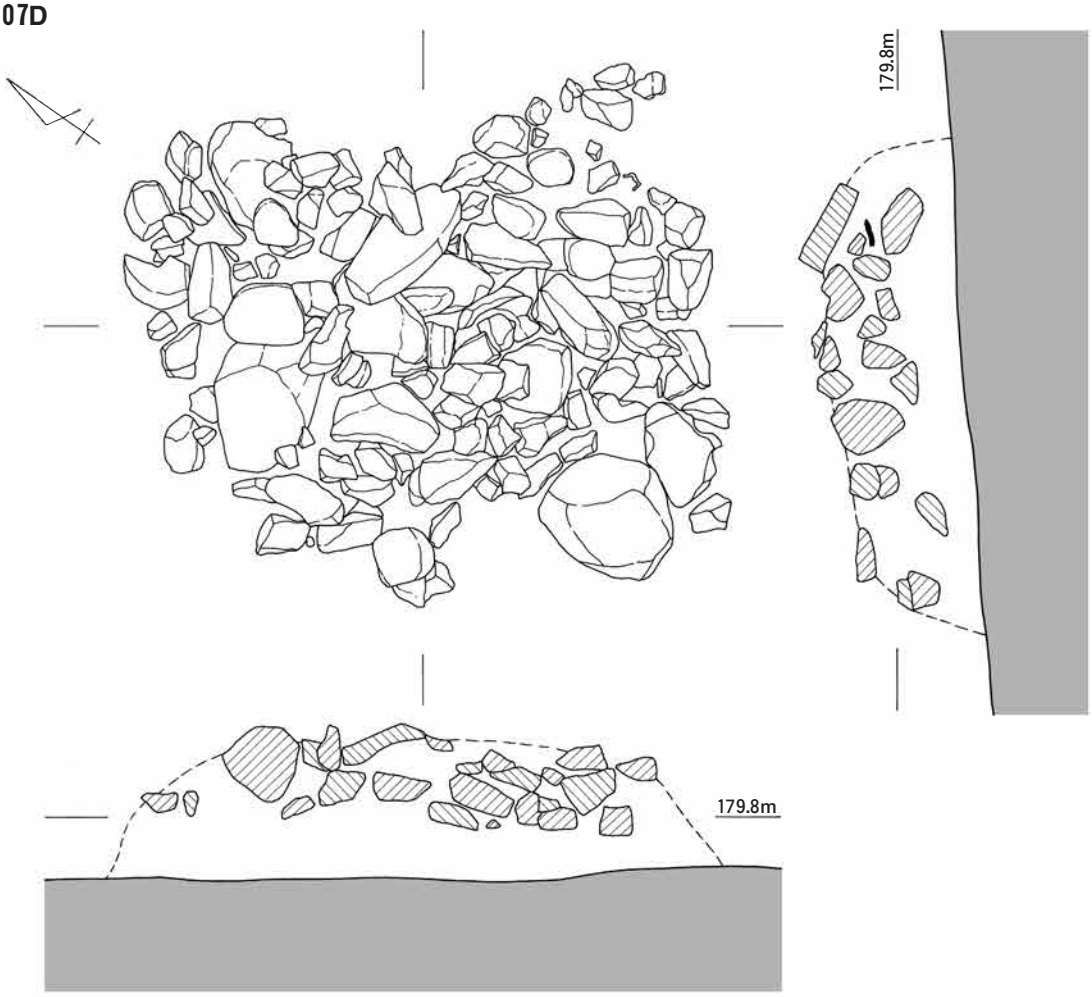


SS108D



焼土SF272D(1/20)　　集石SS108D(1/20)

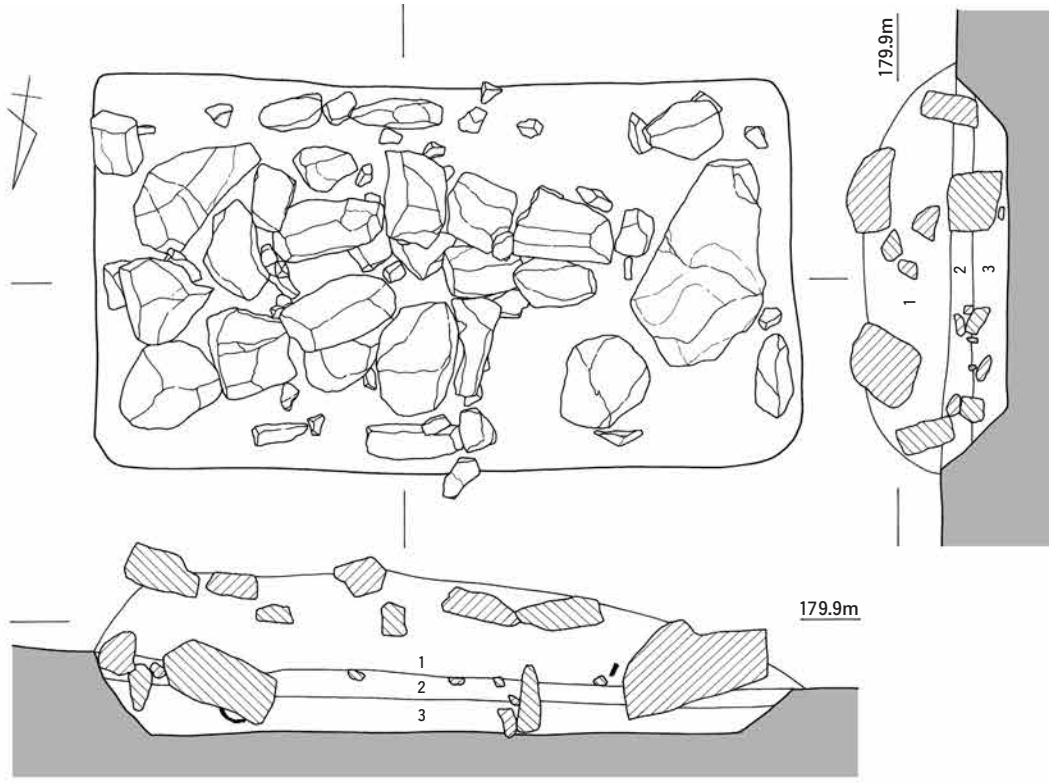
SS007D



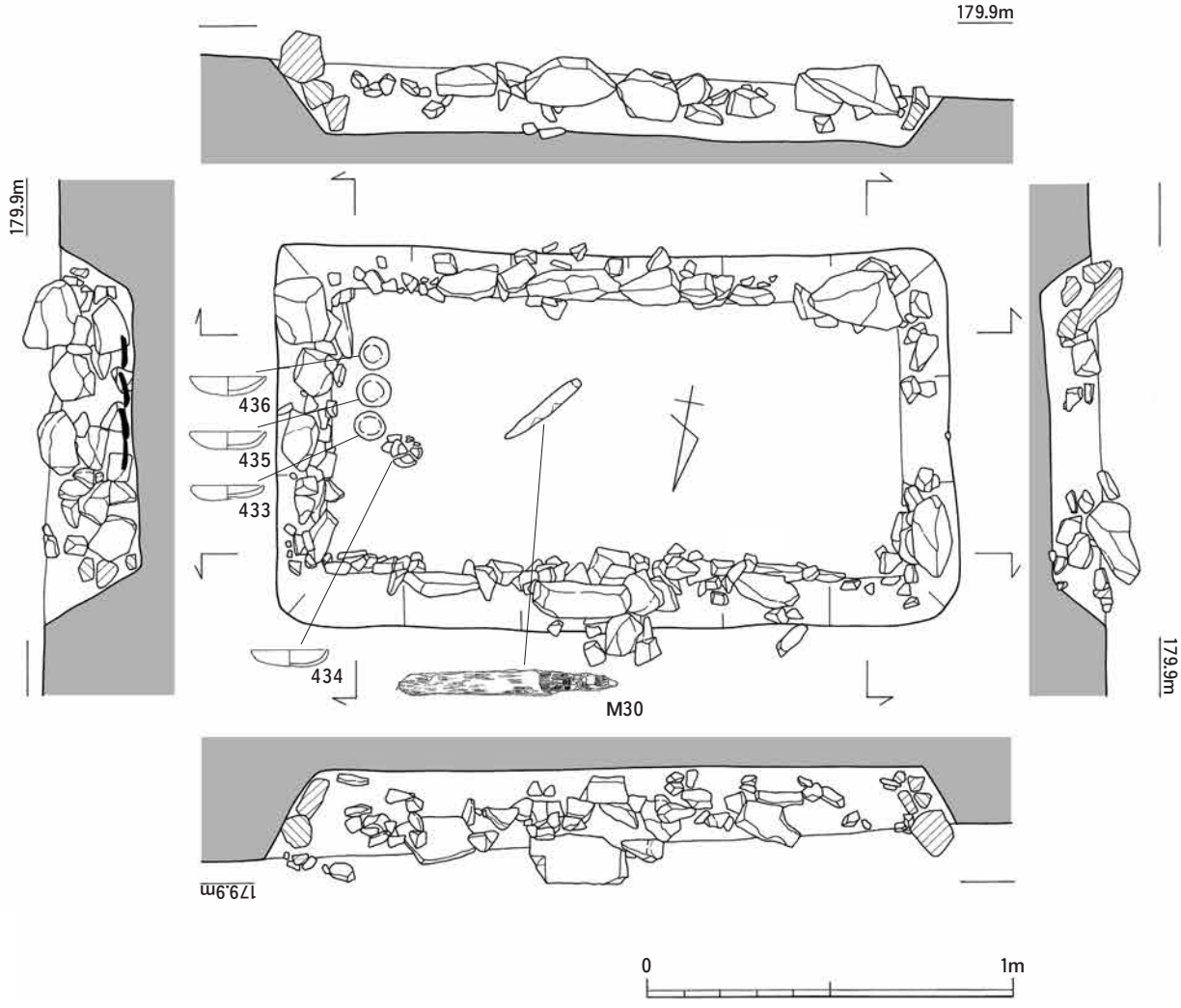
SS006D

集石SS007D（1/20）　集石SS006D（1/20）

ST215D

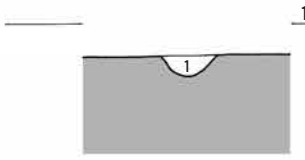


1 灰黄褐 細粒砂～粗粒砂(中礫多量に含む)
2 灰黄褐 シルト～粗粒砂(中礫少量含む)
3 にぶい黄橙 細粒砂～粗粒砂(中礫～大礫多量含む)



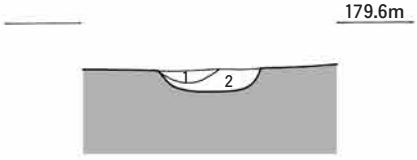
木棺墓ST215D(1/20)

SD374D



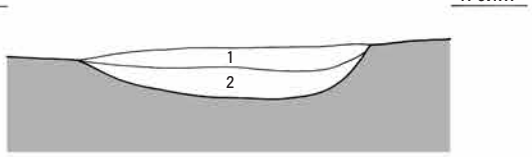
1 暗褐 シルト質極細砂(細礫～中礫少量・炭僅かに含む)

SD209D



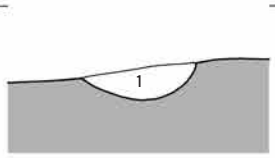
1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫炭少量含む)
2 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)

SD216D



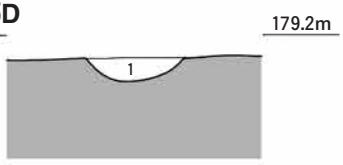
1 暗褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～大礫多量に含む)
2 褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～中礫多量に含む)

SD152D



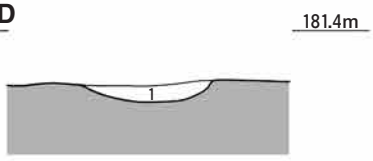
1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)

SD375D



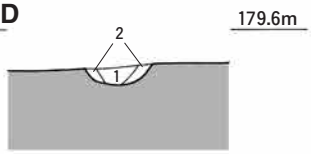
1 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫含む)

SD189D



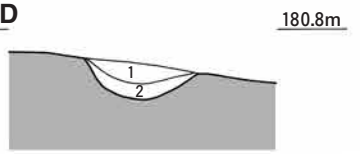
1 灰褐 極細砂～粗粒砂(中礫含む)

SD210D



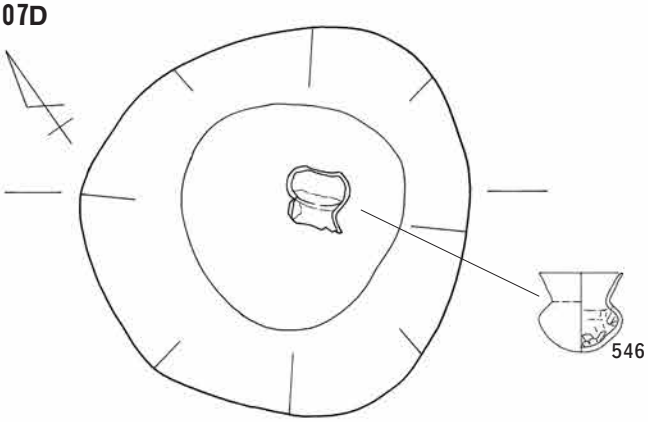
1 黒褐 シルト質極細砂～中粒砂(細礫～大礫・炭含む)
2 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂

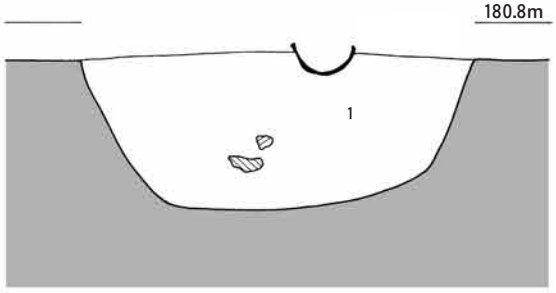
SD376D



1 灰黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫含む)
2 にぶい黄褐 シルト質極細砂～中粒砂(中礫～大礫多く含む)

SK207D

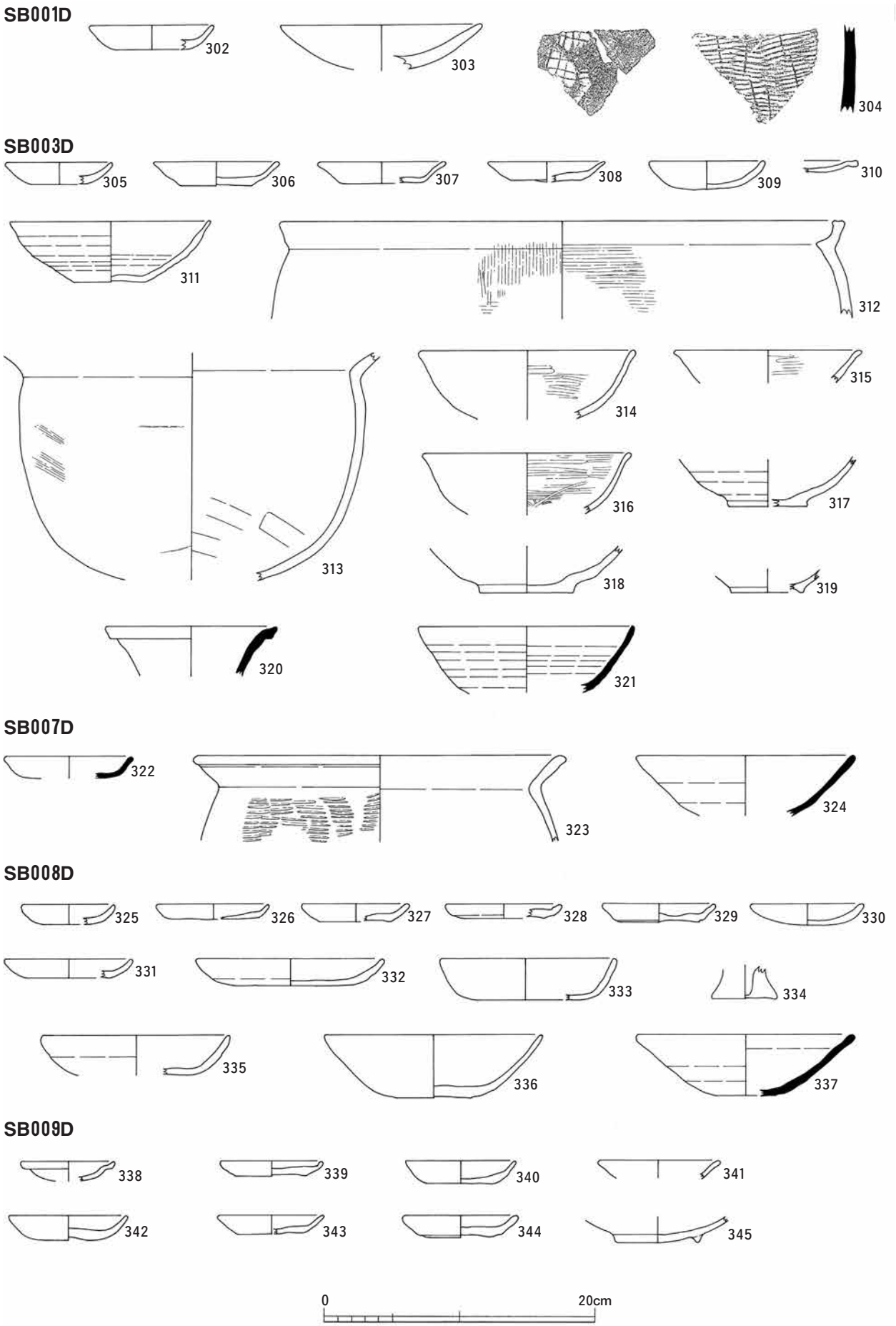




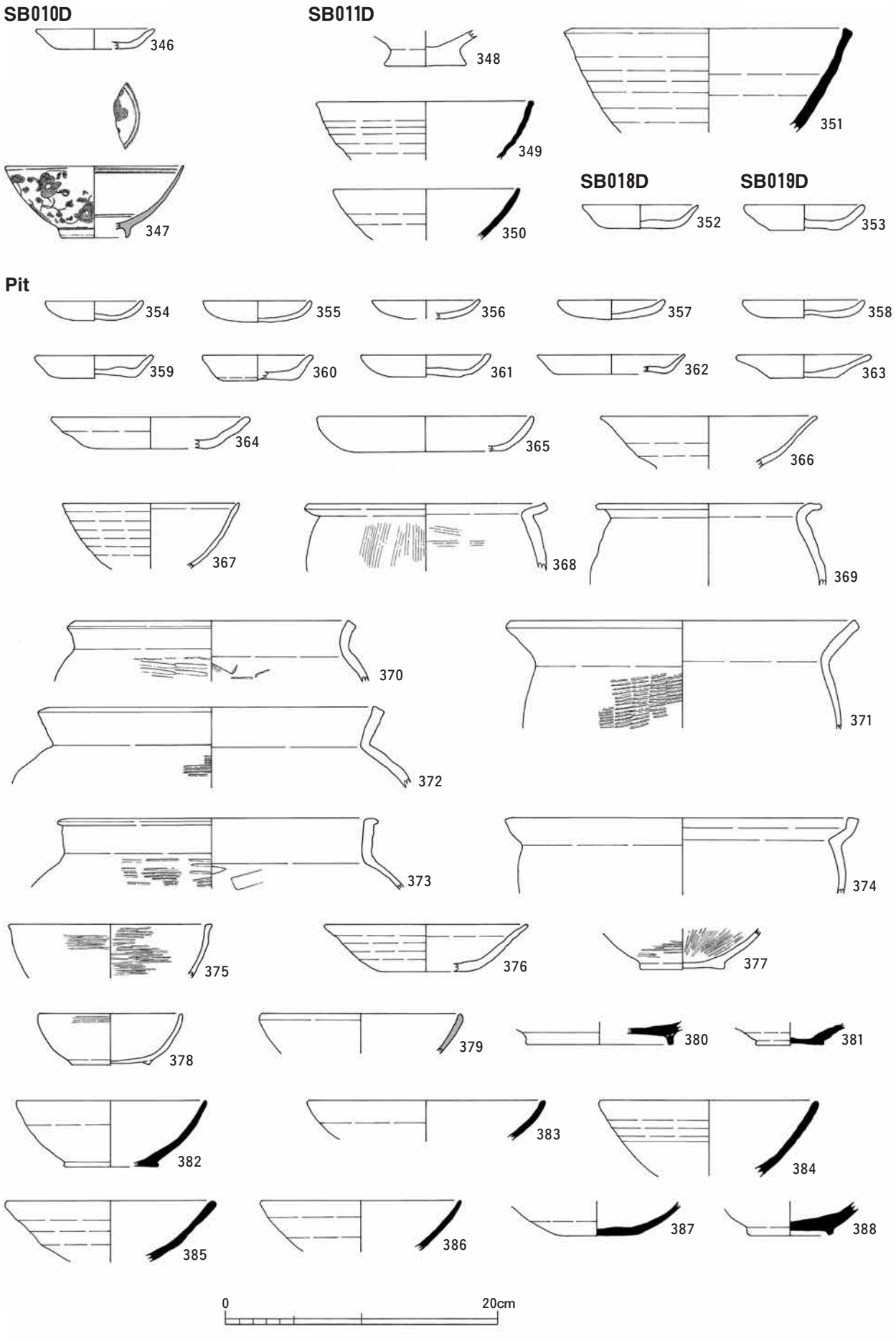
1 にぶい褐 シルト～細砂(細礫～中礫含む)

溝SD374D(1/20)　溝SD216D(1/20)　溝SD375D(1/20)　溝SD210D(1/20)　溝SD209D(1/20)
溝SD152D(1/20)　溝SD189D(1/20)　溝SD376D(1/20)　土坑SK207D(1/10)

図版68 D地区 遺物

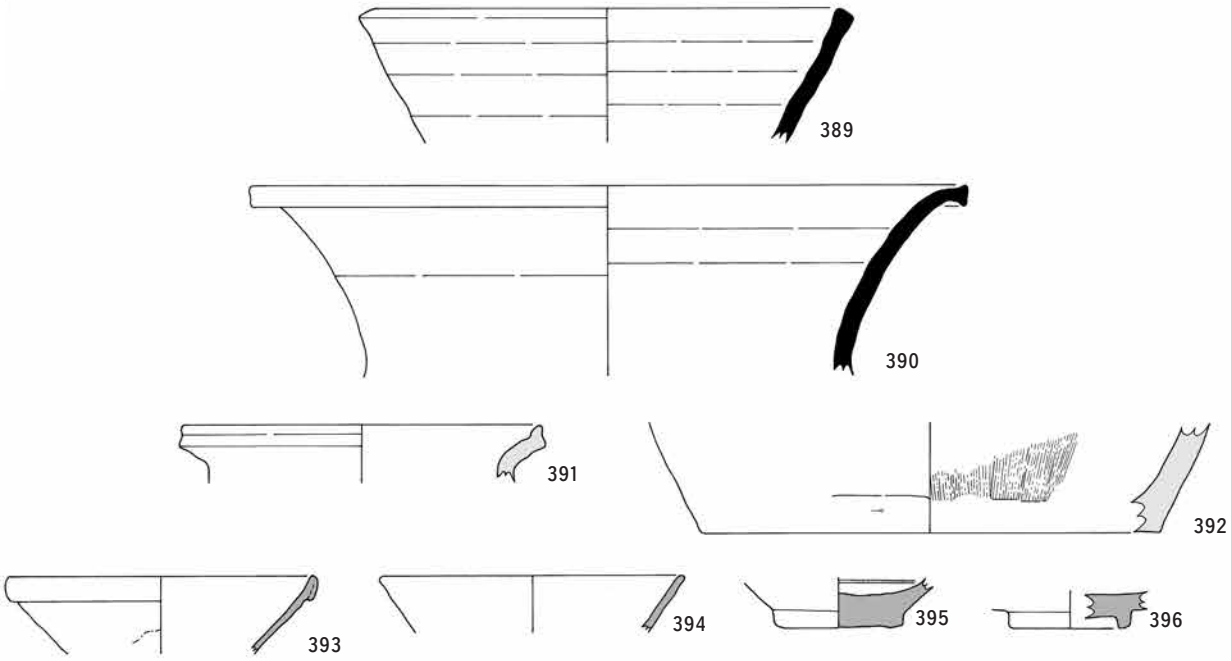


土器1（302～345）


SB010D
SB011D
SB018D
SB019D
Pit
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
0
20cm

土器 2 (346～388)

Pit

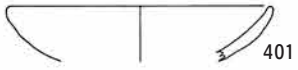


SK154D

SK213D

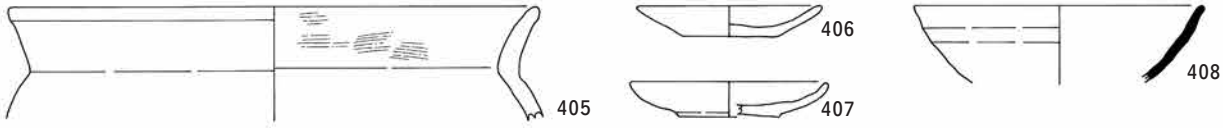
SK214D

SK162D

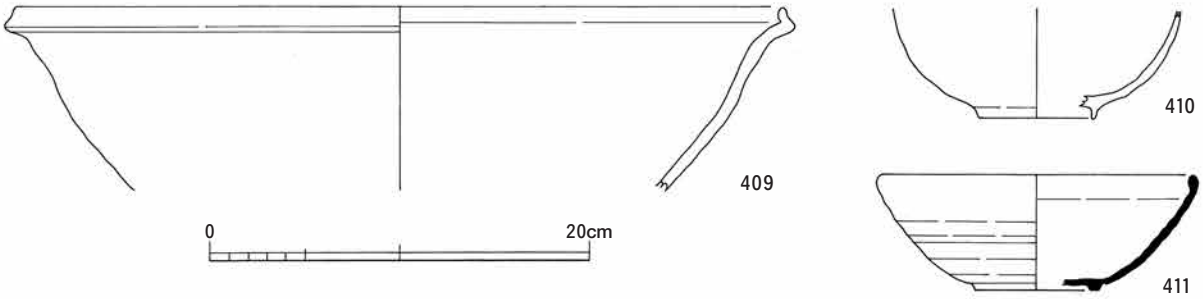


SK153D

SK226D

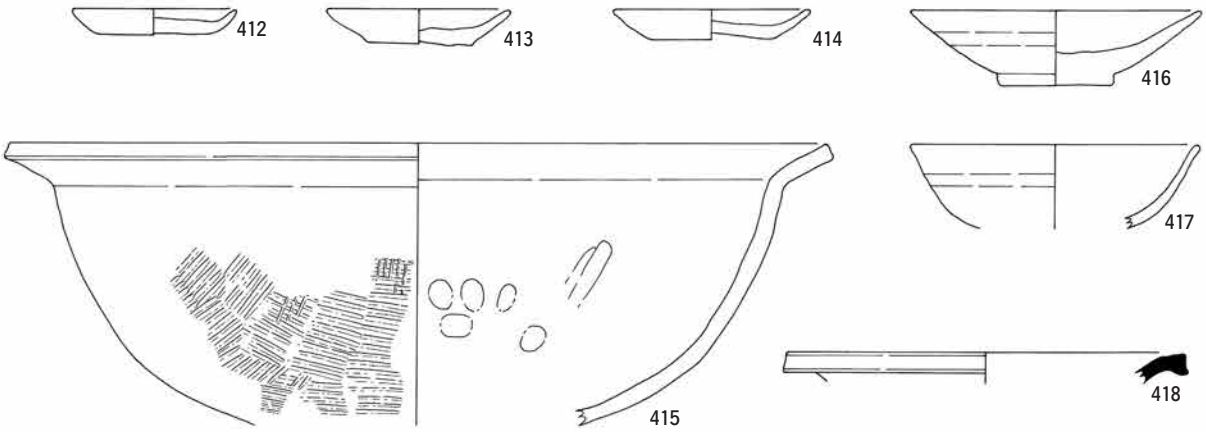


SF187D

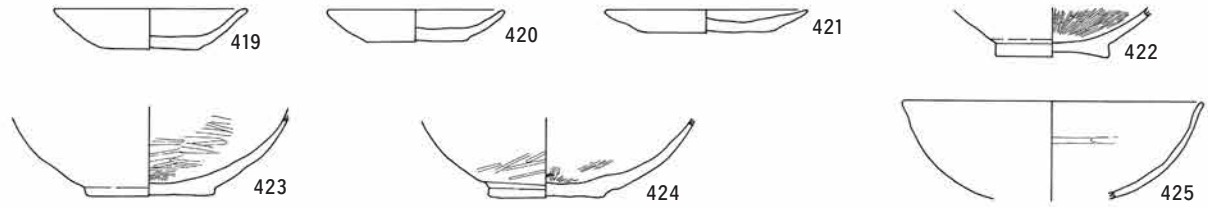


土器 3（389～411）

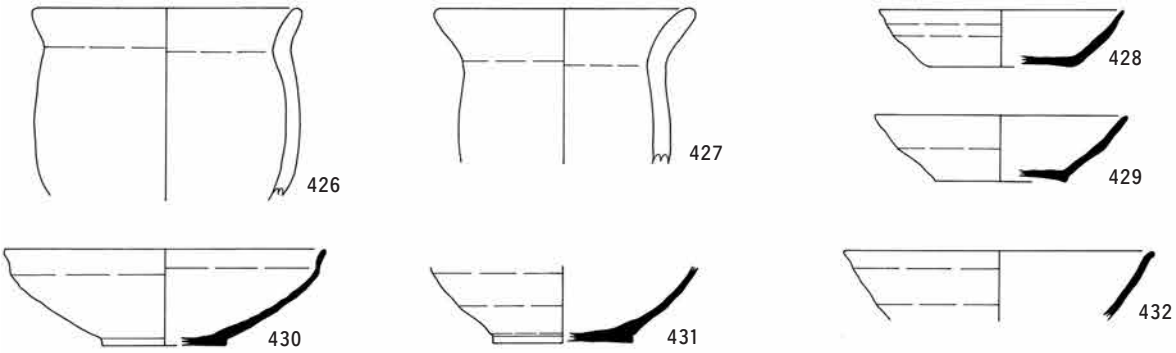
SK103D



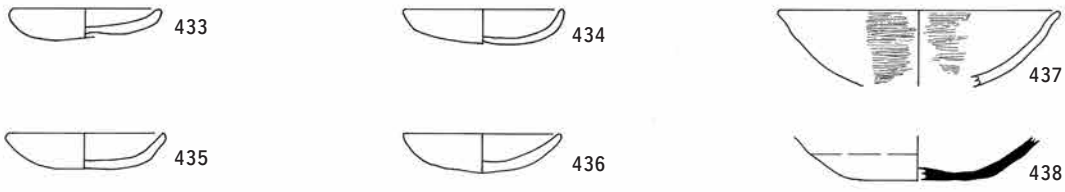
SS108D



SS007D

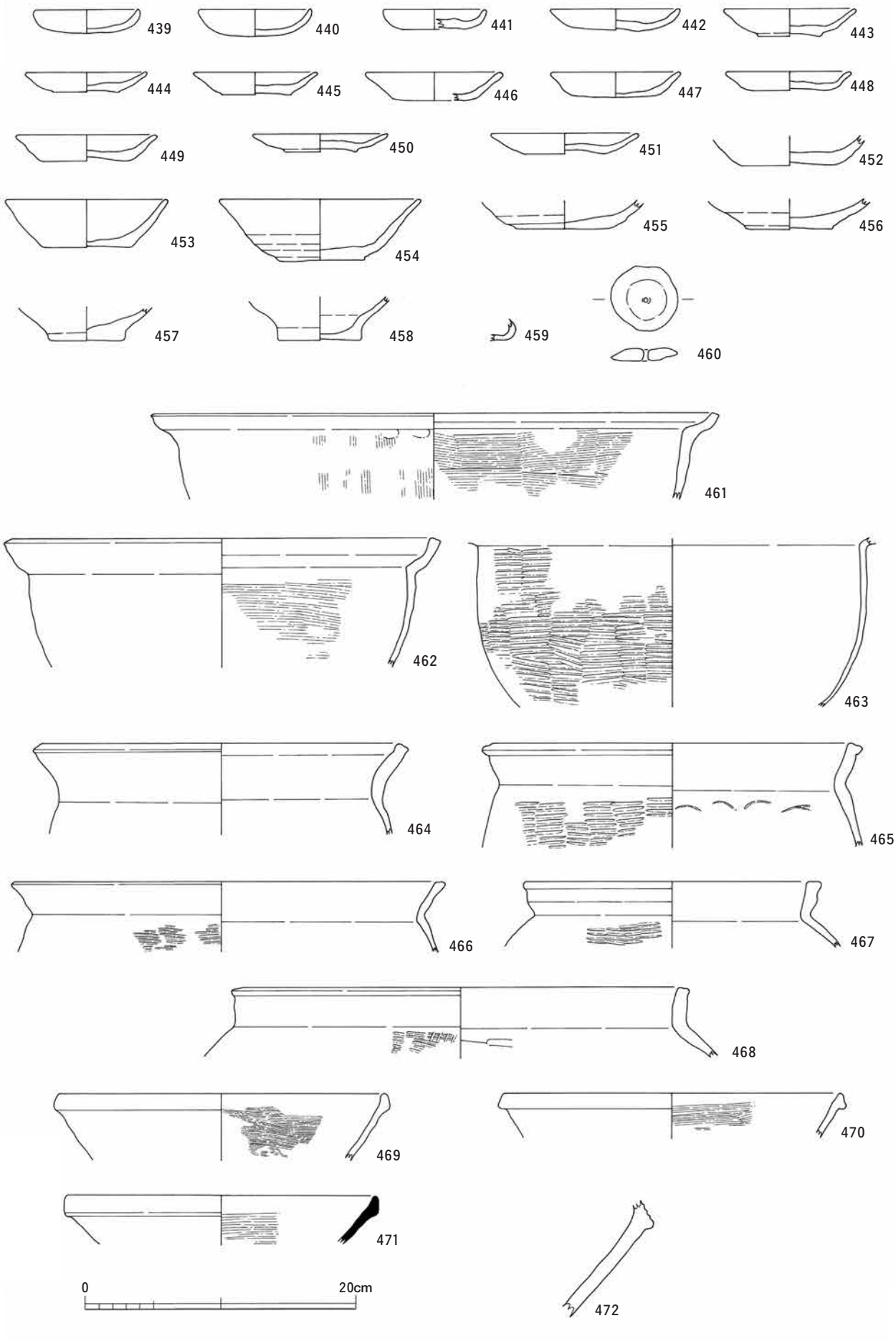


ST215D



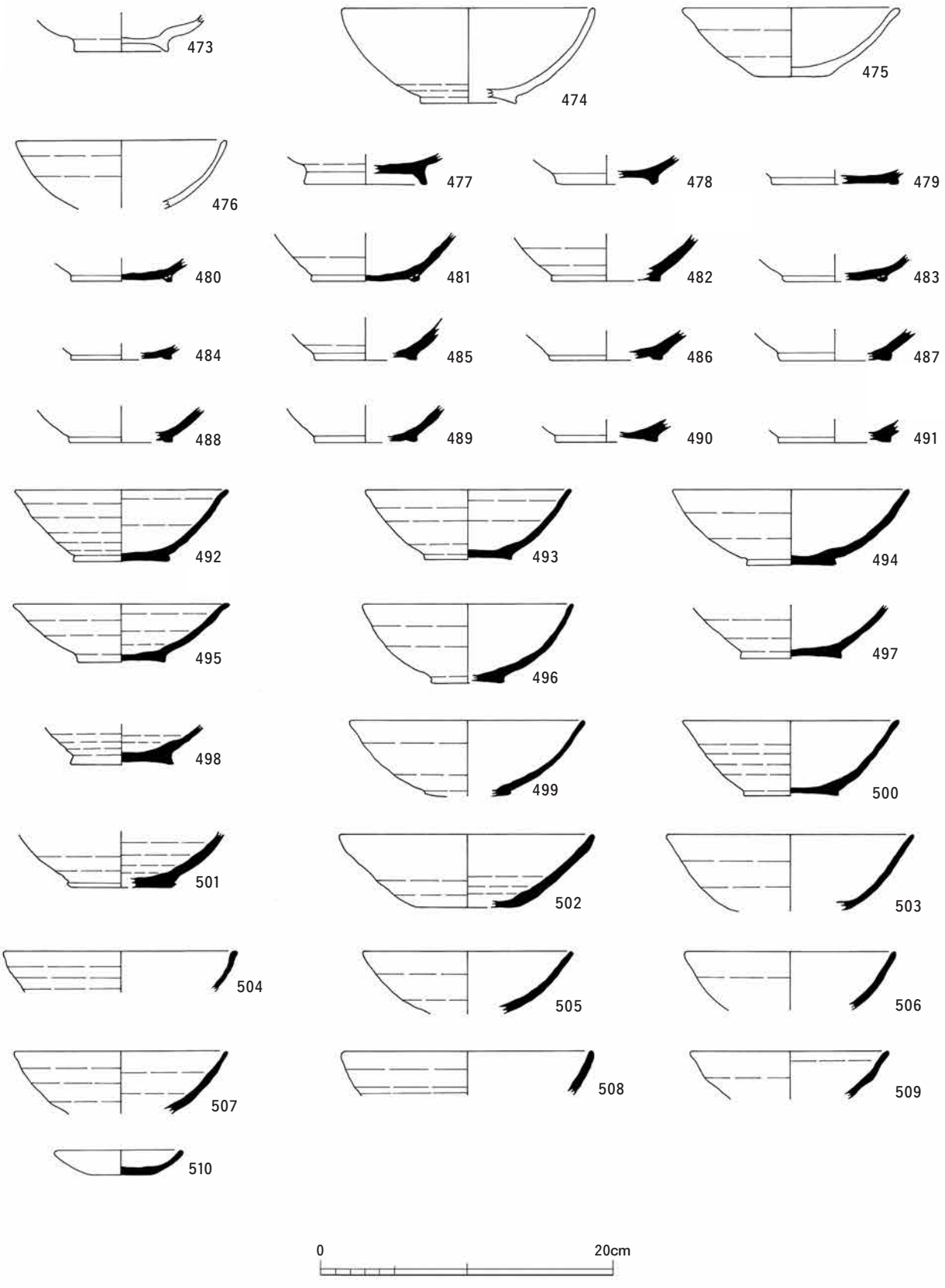
土器 4 (412～438)

包含層



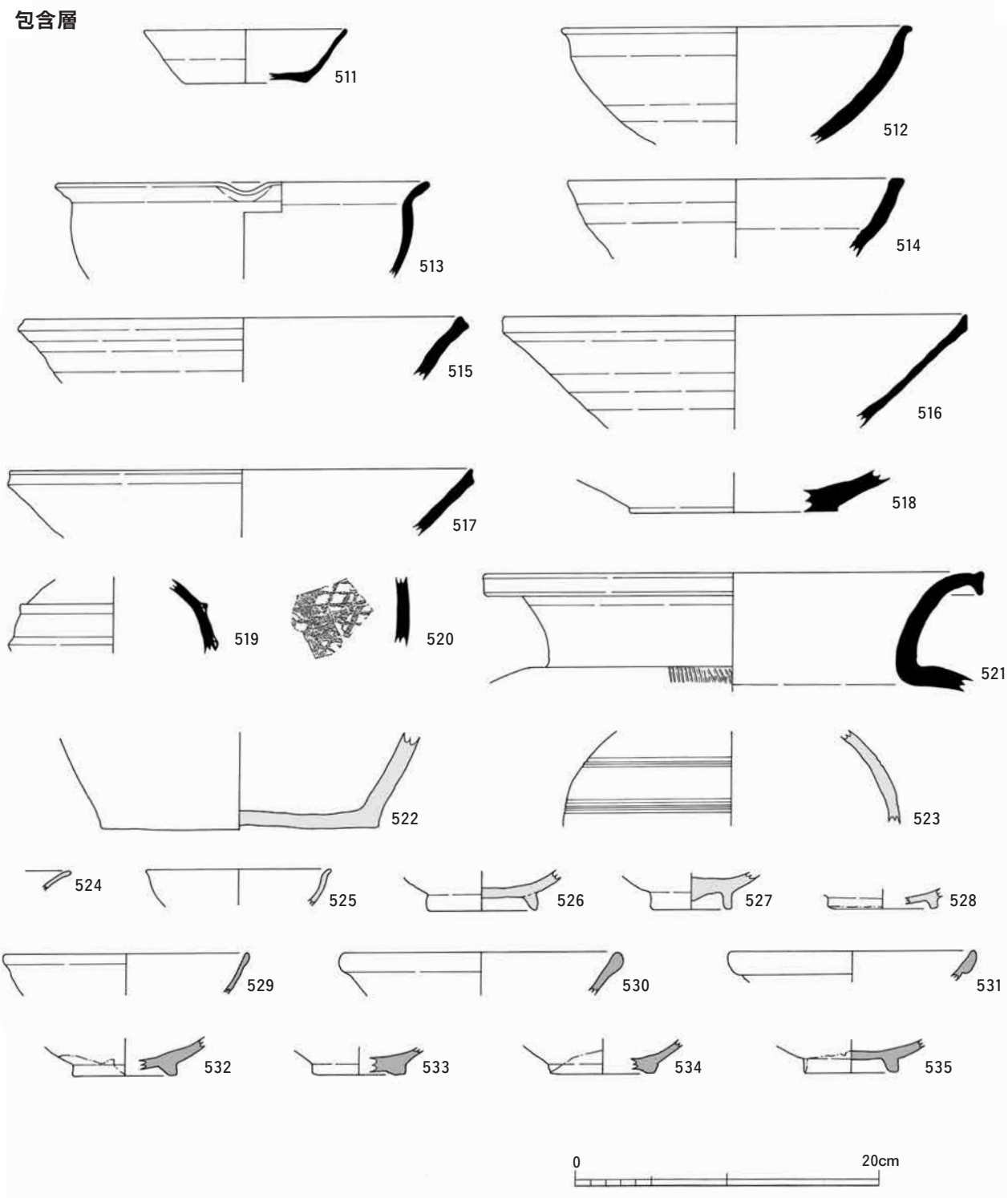
土器 5（439～472）

包含層



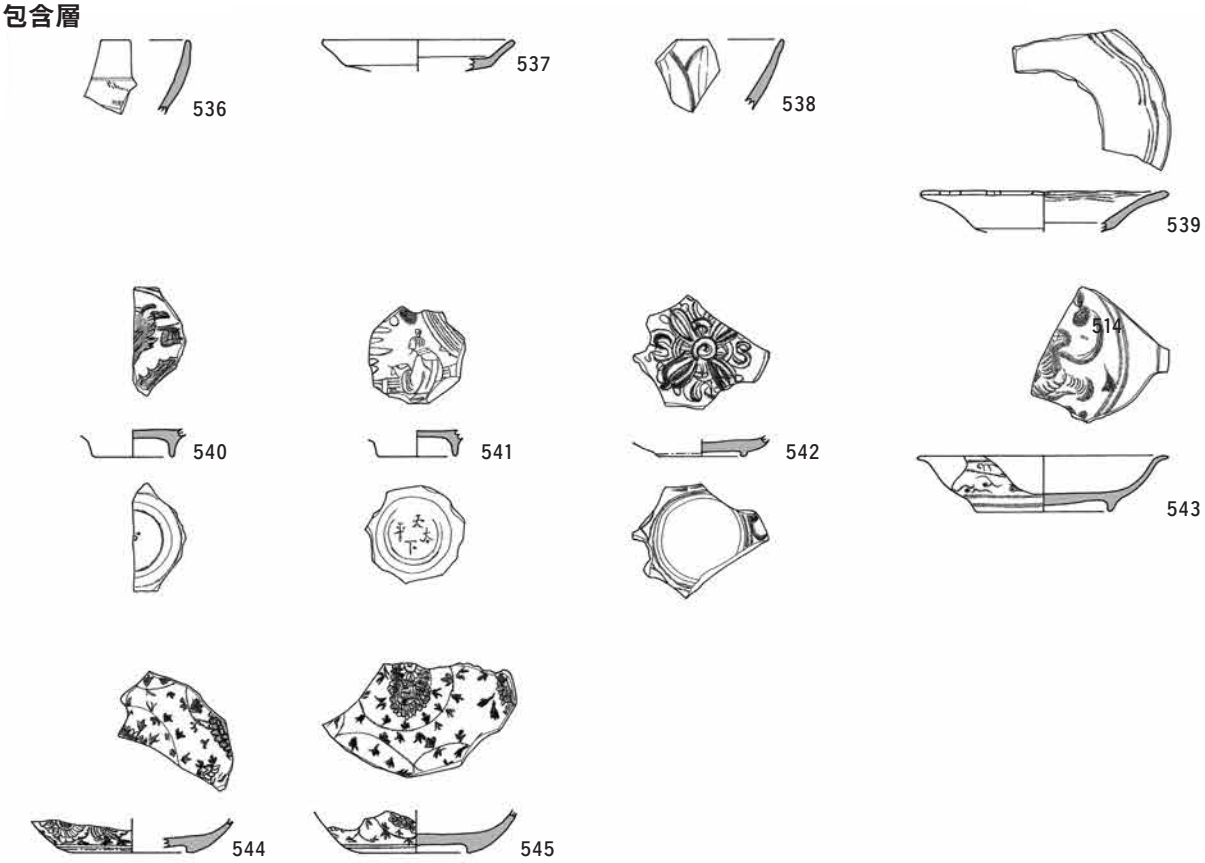
土器 6 (473～510)

包含層



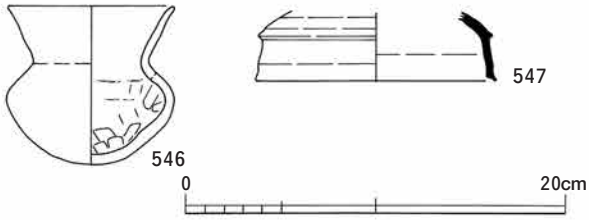
土器 7 (511～535)

包含層



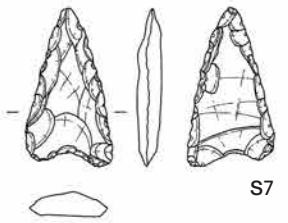
SK207D

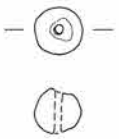
P0083D

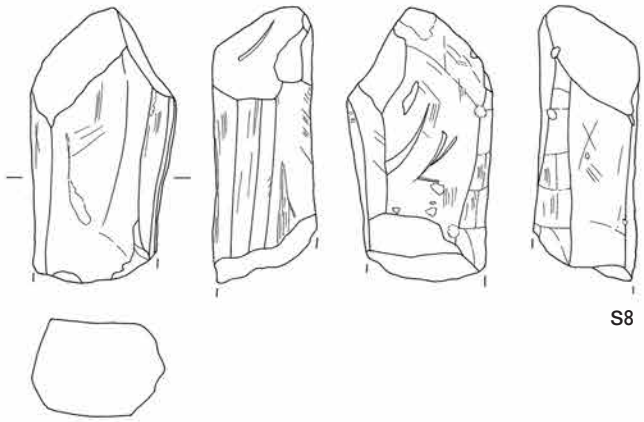


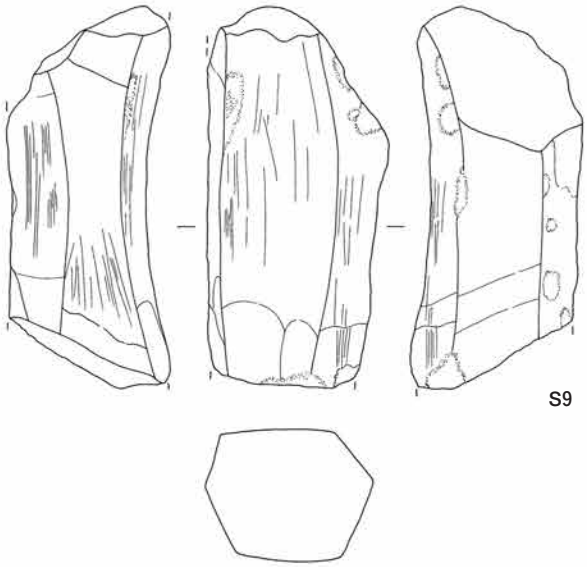
土器 8（536～547）

Pit

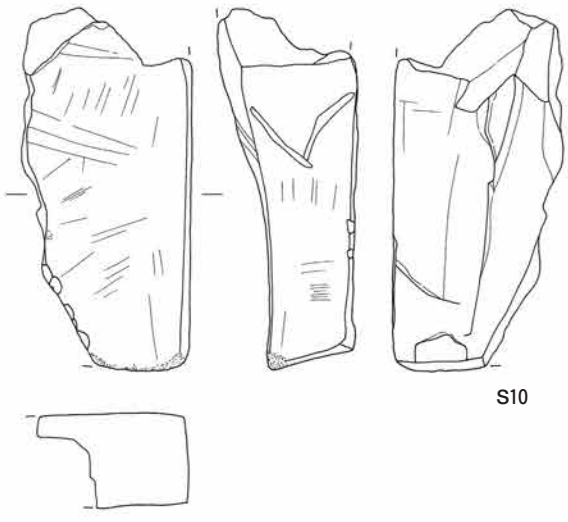




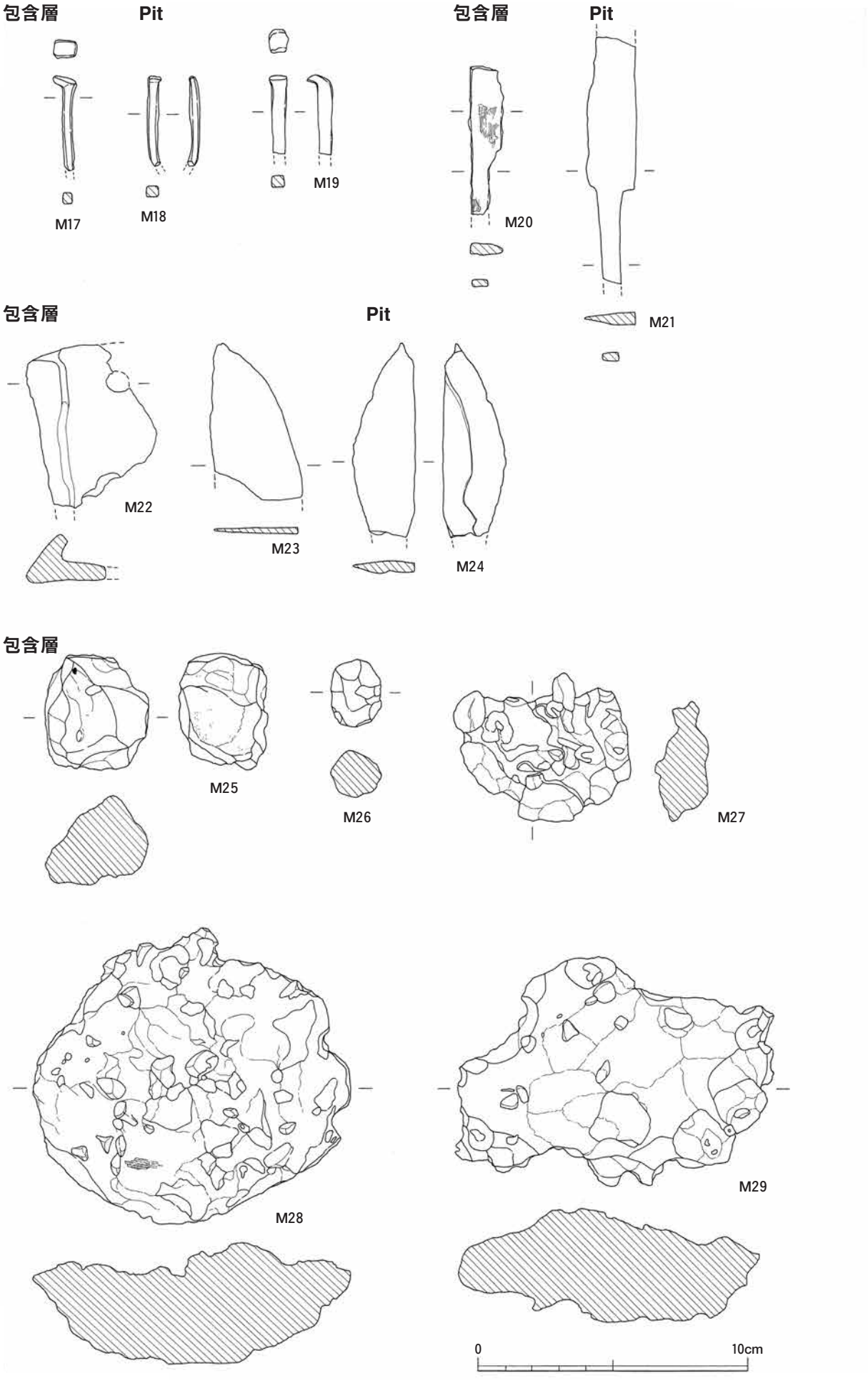




包含層

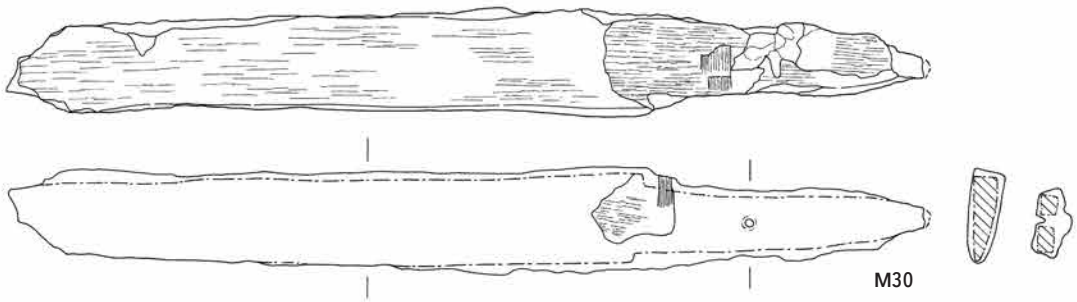


石器・玉（S7～S10・J1）


包含層
Pit
M17
M18
M19
包含層
Pit
M20
M21
包含層
Pit
M22
M23
M24
包含層
M25
M26
M27
M28
M29
0
10cm

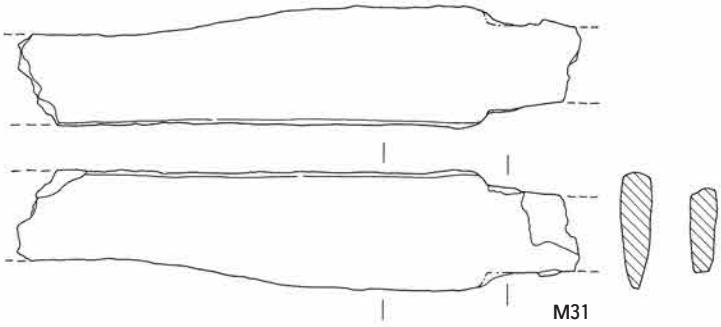
金属器 1（M17～M29）

ST215D

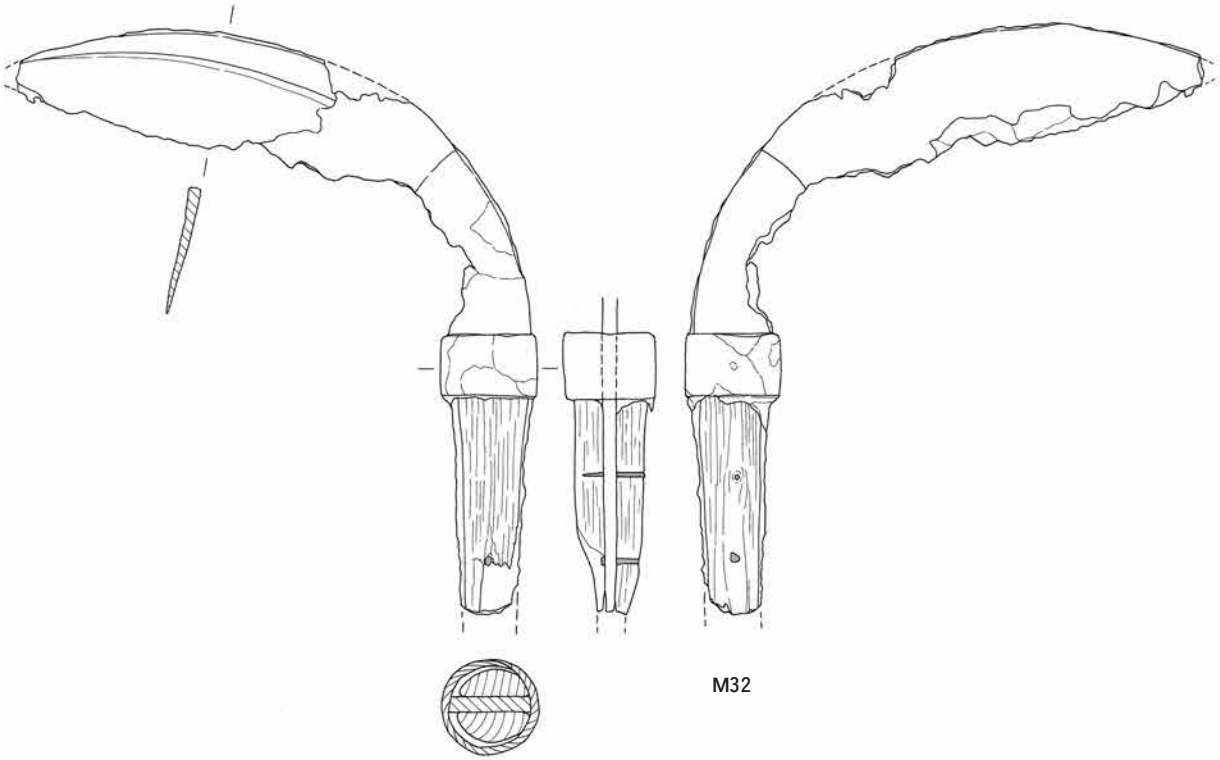


M30

包含層



M31



M32

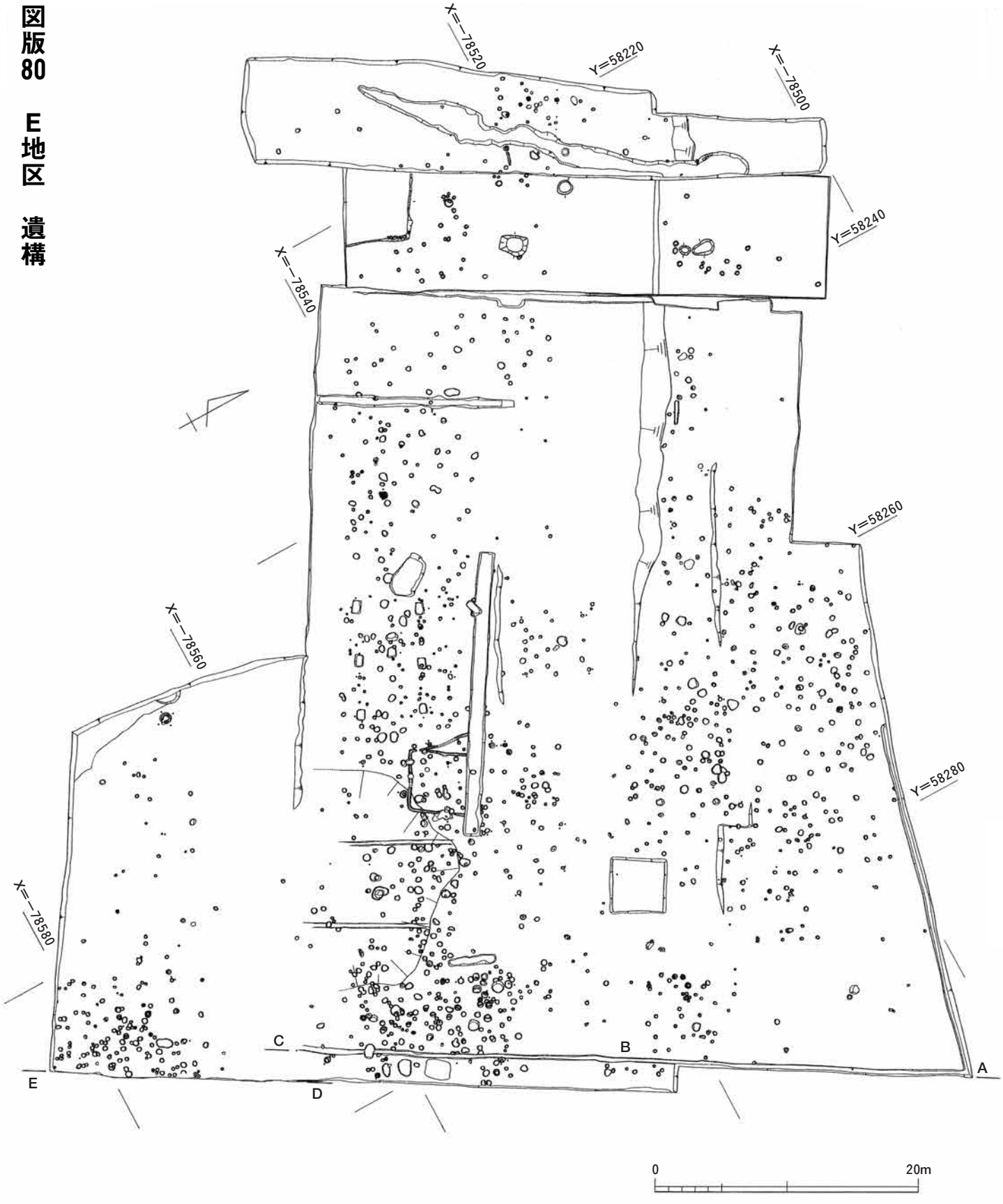
0　10cm

金属器 2（M30～M32）

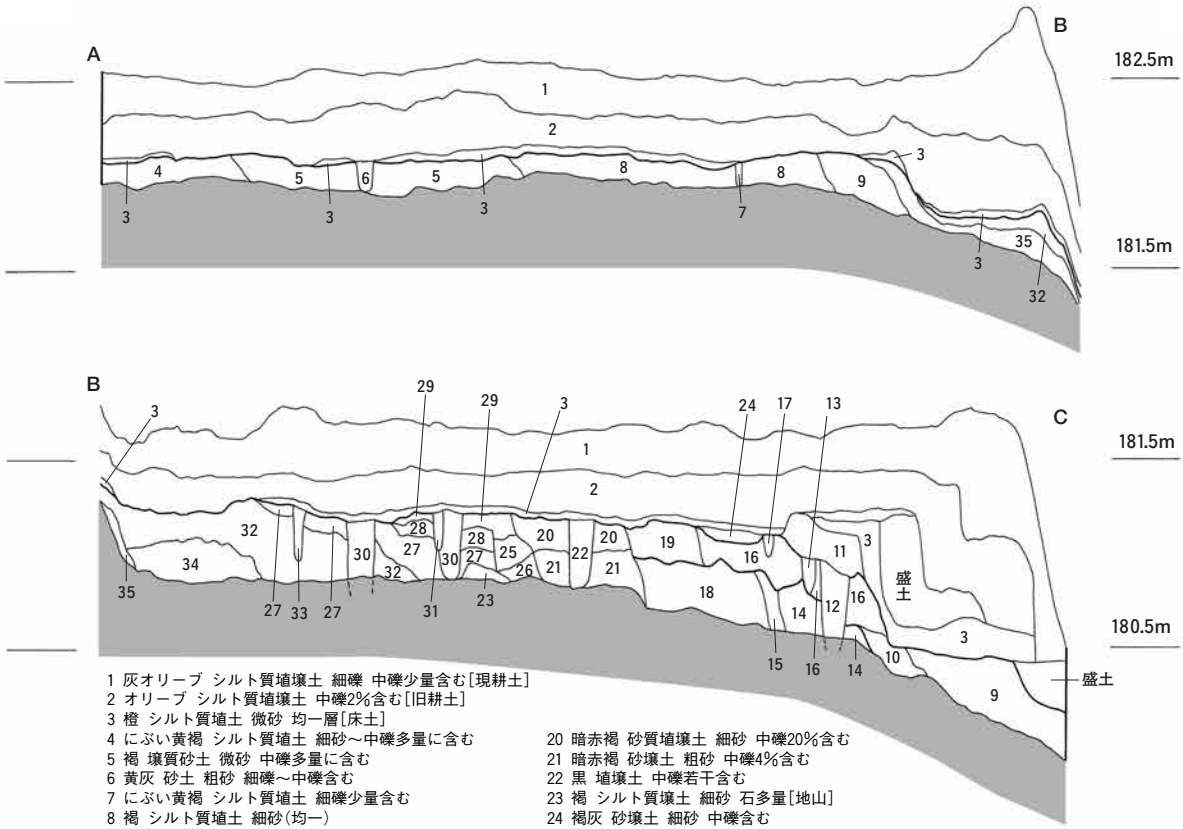
図版79　E・F地区　遺構

遺構配置図(1/500)

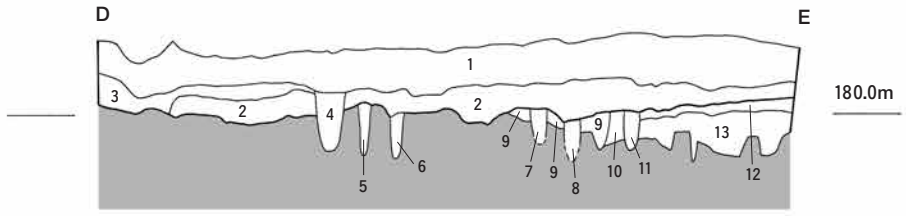
図版80　E地区　遺構



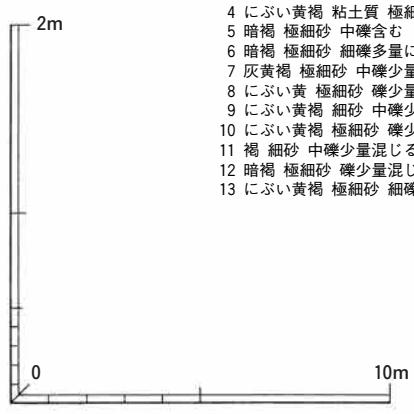
遺構配置図(1/400)



1 灰オリーブ シルト質埴壌土 細礫 中礫少量含む[現耕土]
2 オリーブ シルト質埴壌土 中礫2%含む[旧耕土]
3 橙 シルト質埴土 微砂 均一層[床土]
4 にぶい黄褐 シルト質埴土 細砂～中礫多量に含む
5 褐 壌質砂土 微砂 中礫多量に含む
6 黄灰 砂土 粗砂 細礫～中礫含む
7 にぶい黄褐 シルト質埴土 細礫少量含む
8 褐 シルト質埴土 細砂(均一)
9 褐灰 シルト質埴土 細砂 中礫2%含む
10 にぶい黄褐 シルト質埴土 細砂～粗砂 中礫多量に含む
11 灰黄褐 シルト質埴土 細砂(ほぼ均一)
12 シルト質埴土 細砂 炭化材少量含む
13 灰黄褐 シルト質埴土 細砂 中礫少量含む
14 褐灰 砂質埴壌土 中礫30%含む
15 暗褐 砂壌土 細礫～中礫多量に含む
16 黒褐 シルト質埴土 細礫 細礫～中礫多量に含む
17 黒 埴壌土 細砂均一土
18 黒褐 壌質砂土 細礫～中礫多量に含む
19 黒褐 シルト質埴土 細砂 中礫4%程含む
20 暗赤褐 砂質埴壌土 細砂 中礫20%含む
21 暗赤褐 砂壌土 粗砂 中礫4%含む
22 黒 埴壌土 中礫若干含む
23 褐 シルト質壌土 細砂 石多量[地山]
24 褐灰 砂壌土 細砂 中礫含む
25 灰褐 壌質砂土 中礫少量含む
26 灰褐 砂壌土 極細砂 中礫多量に含む
27 にぶ黄褐 シルト質埴土 細砂 中礫10%含む
28 にぶ黄褐 シルト質埴土 細砂 中礫10%含む
29 にぶ黄褐 シルト質埴土 細砂 中礫10%含む
30 褐灰 砂壌土 粗砂 中礫～大礫多量に含む
31 褐灰 砂土 粗砂 均一層
32 灰黄褐 砂壌土 粗砂 細礫～大礫多量に含む[砂礫層]
33 黒褐 シルト質埴壌土 細砂 均一層
34 褐 砂壌土 粗砂 中礫多量に含む
35 褐灰 シルト質埴壌土 中礫多量に含む



1 盛土[現代水田層]
2 にぶい黄褐 細砂 小礫～中礫 多量に含む 砂壌土[旧耕土]
3 床土
4 にぶい黄褐 粘土質 極細砂[旧水路]
5 暗褐 極細砂 中礫含む
6 暗褐 極細砂 細礫多量に含む
7 灰黄褐 極細砂 中礫少量混じる しまりよい 密
8 にぶい黄 極細砂 礫少量混じる しまりよい 密
9 にぶい黄褐 細砂 中礫少量含む
10 にぶい黄褐 極細砂 礫少量混じる
11 褐 細砂 中礫少量混じる しまりよい 密
12 暗褐 極細砂 礫少量混じる
13 にぶい黄褐 極細砂 細礫～大礫少量混じる



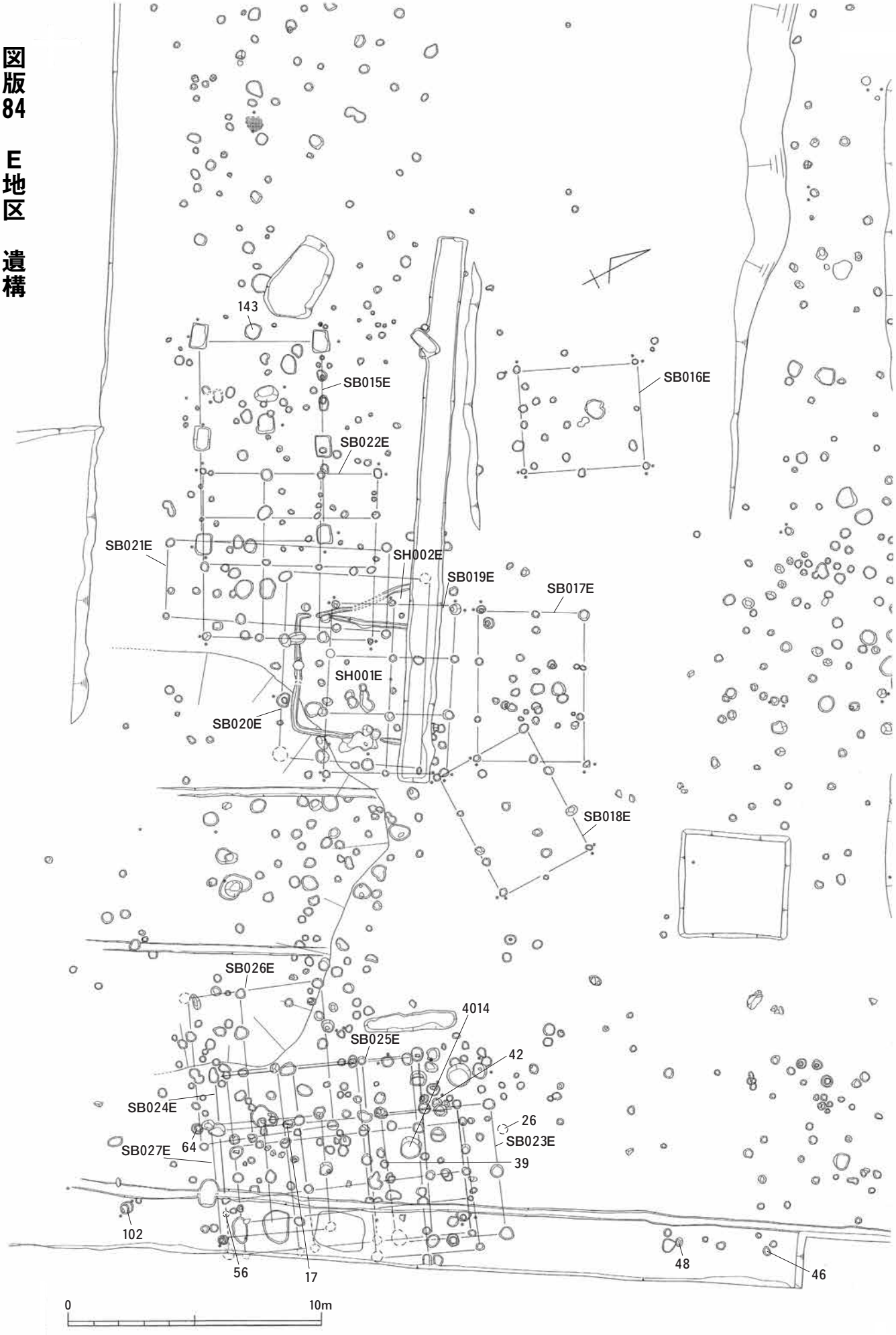
土層断面(1/200・1/40)

図版82　E地区　遺構

遺構配置図(1/200)

遺構配置図(1/200)

図版84　E地区　遺構

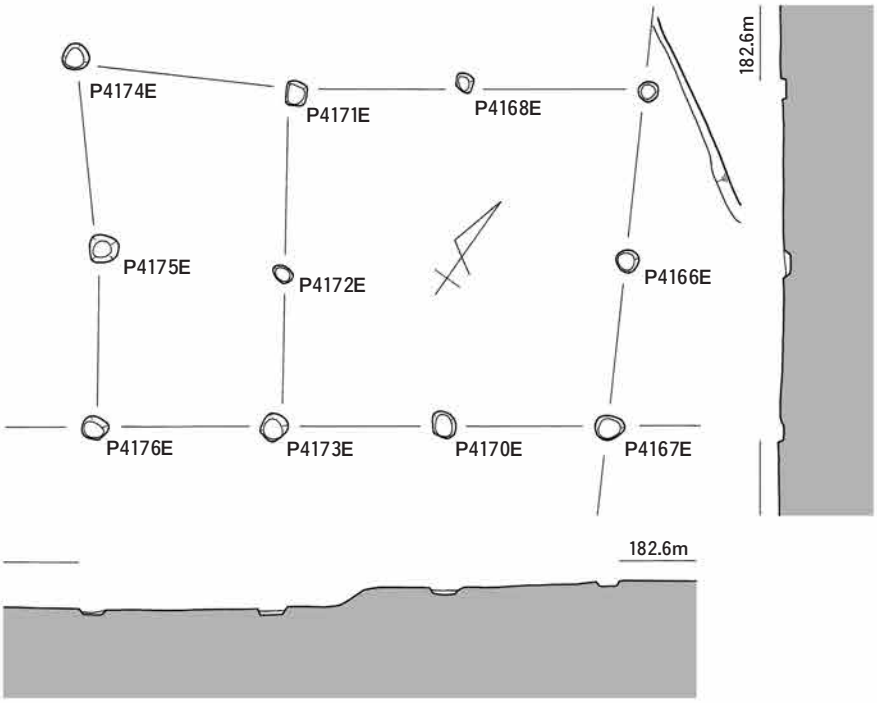


遺構配置図(1/200)

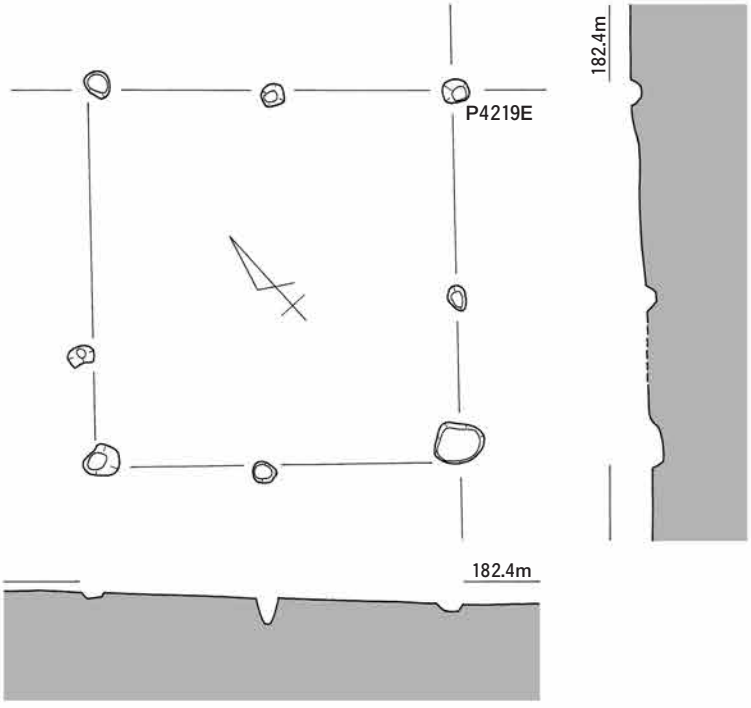
図版85　E地区　遺構

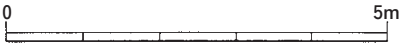
遺構配置図(1/200)

SB001E



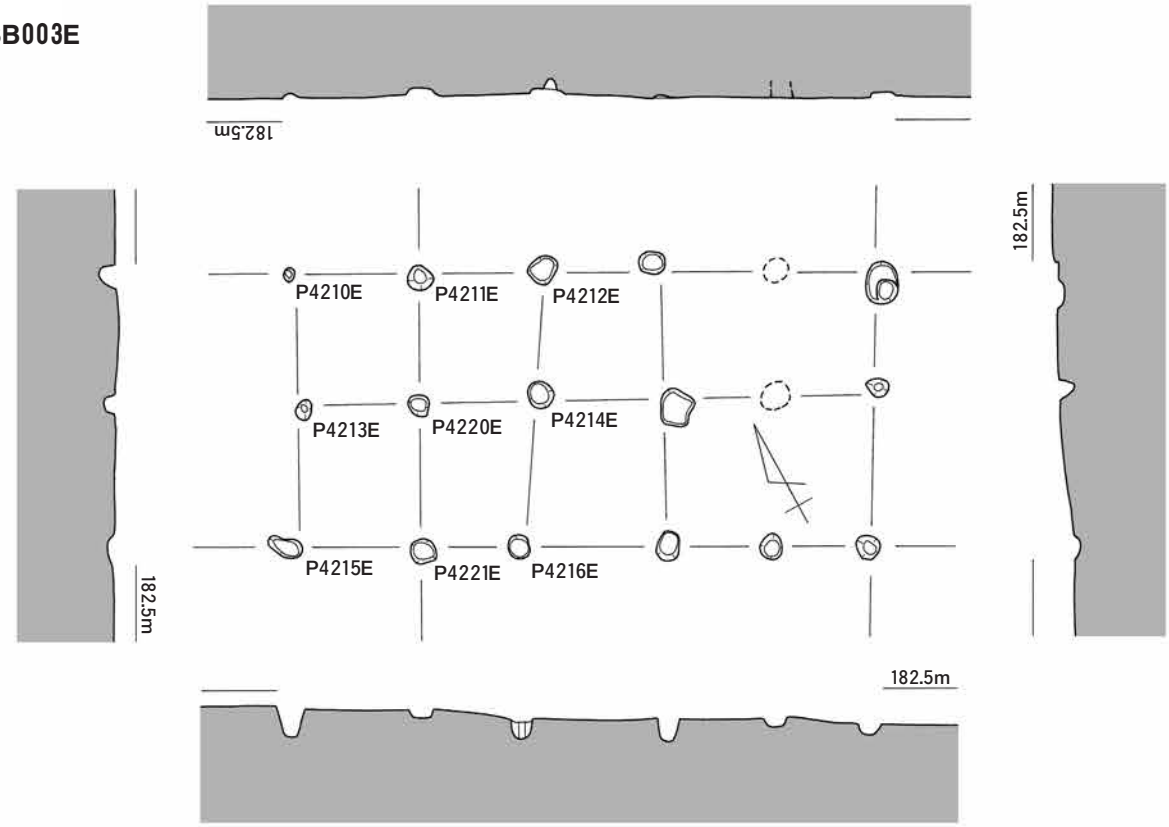
SB002E



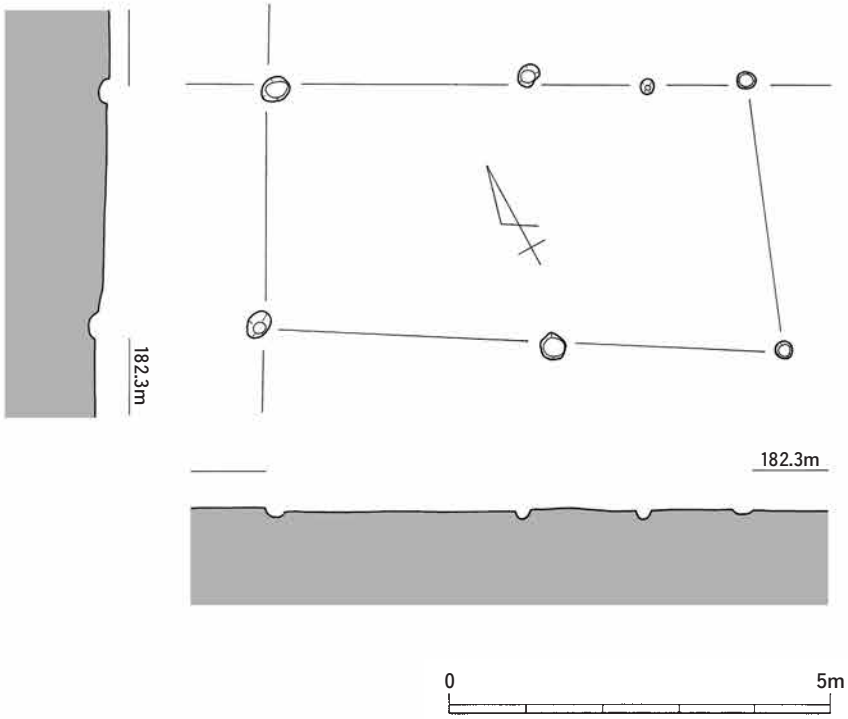


掘立柱建物SB001E(1/100)　　掘立柱建物SB002E(1/100)

SB003E

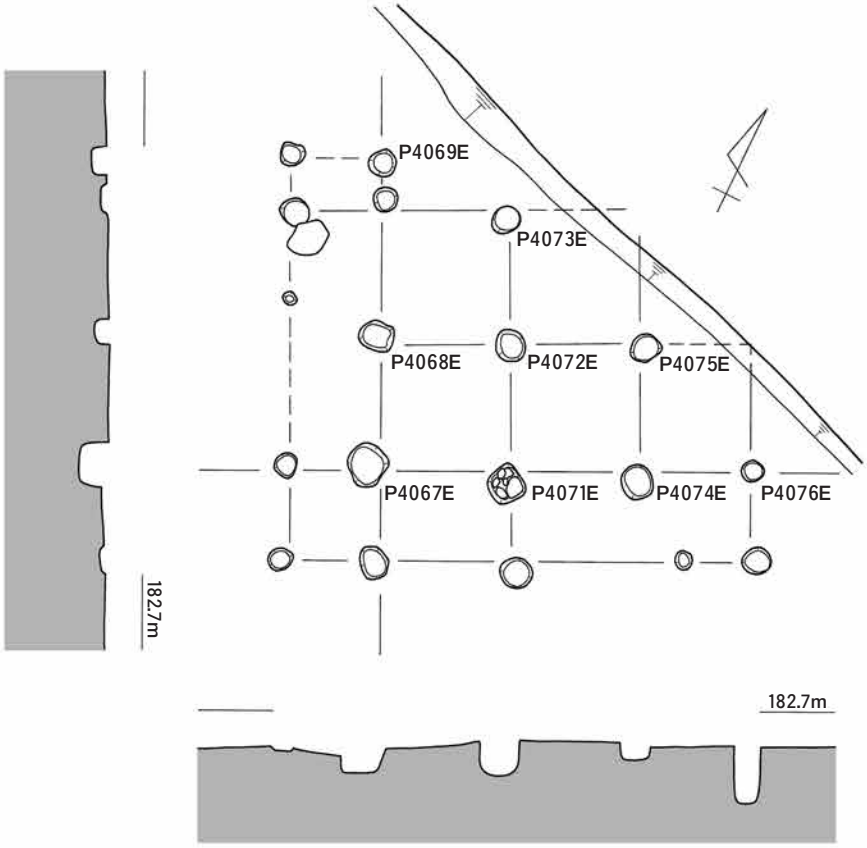


SB004E

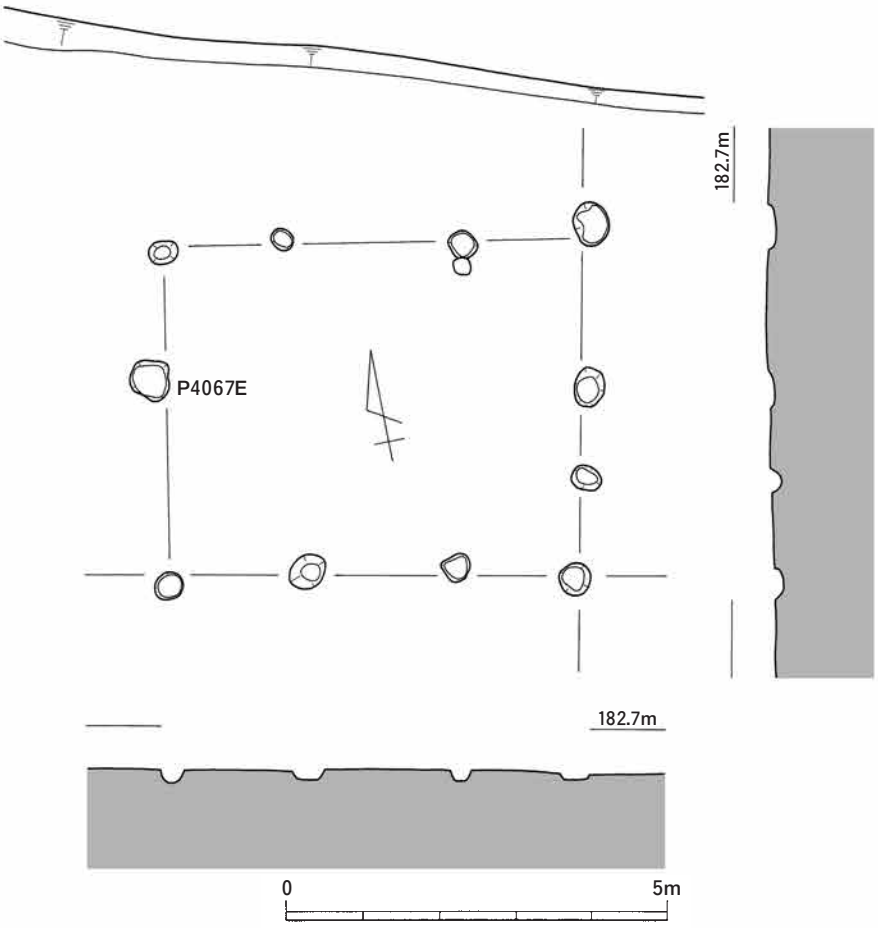


掘立柱建物SB003E(1/100)　　掘立柱建物SB004E(1/100)

SB005E

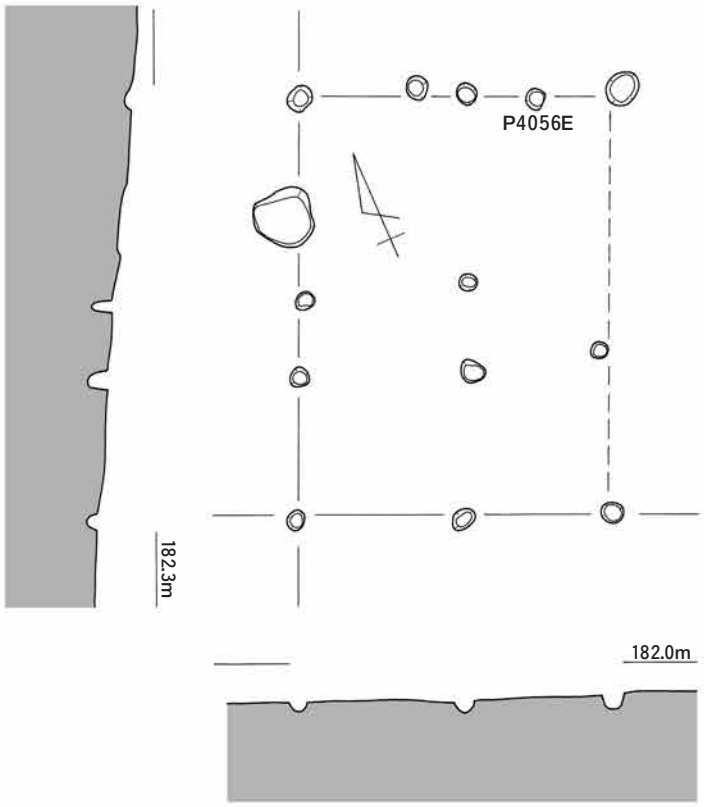


SB006E

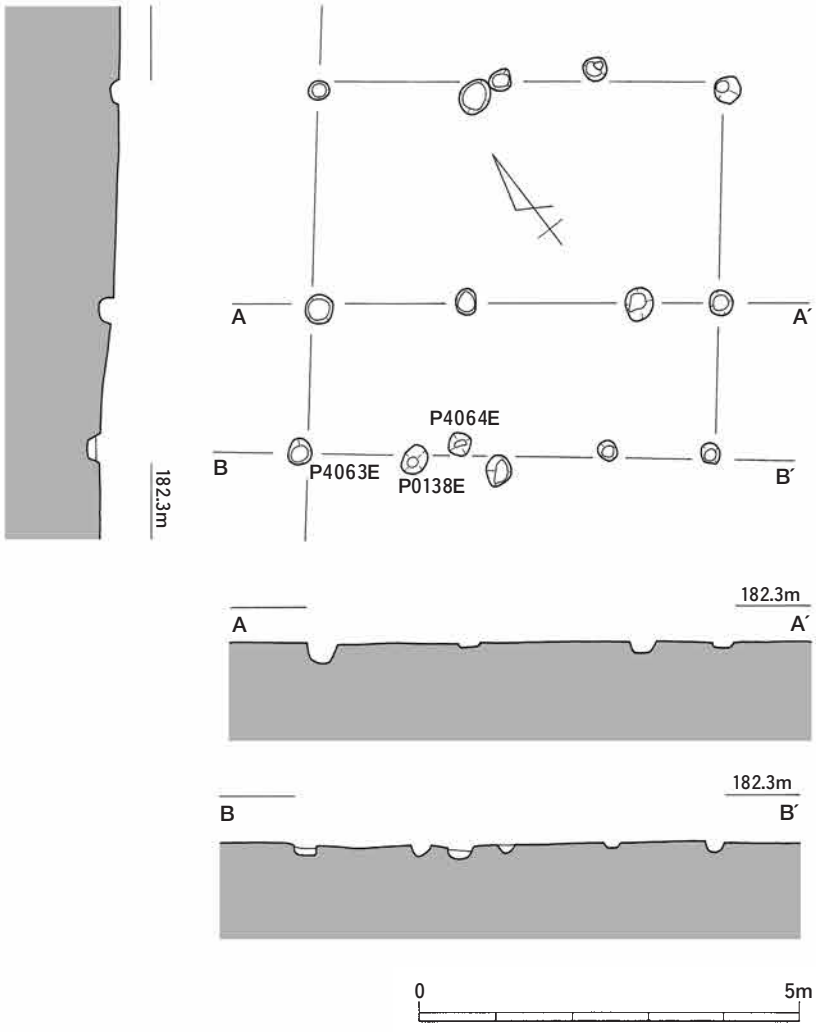


掘立柱建物SB005E(1/100)　　掘立柱建物SB006E(1/100)

SB007E

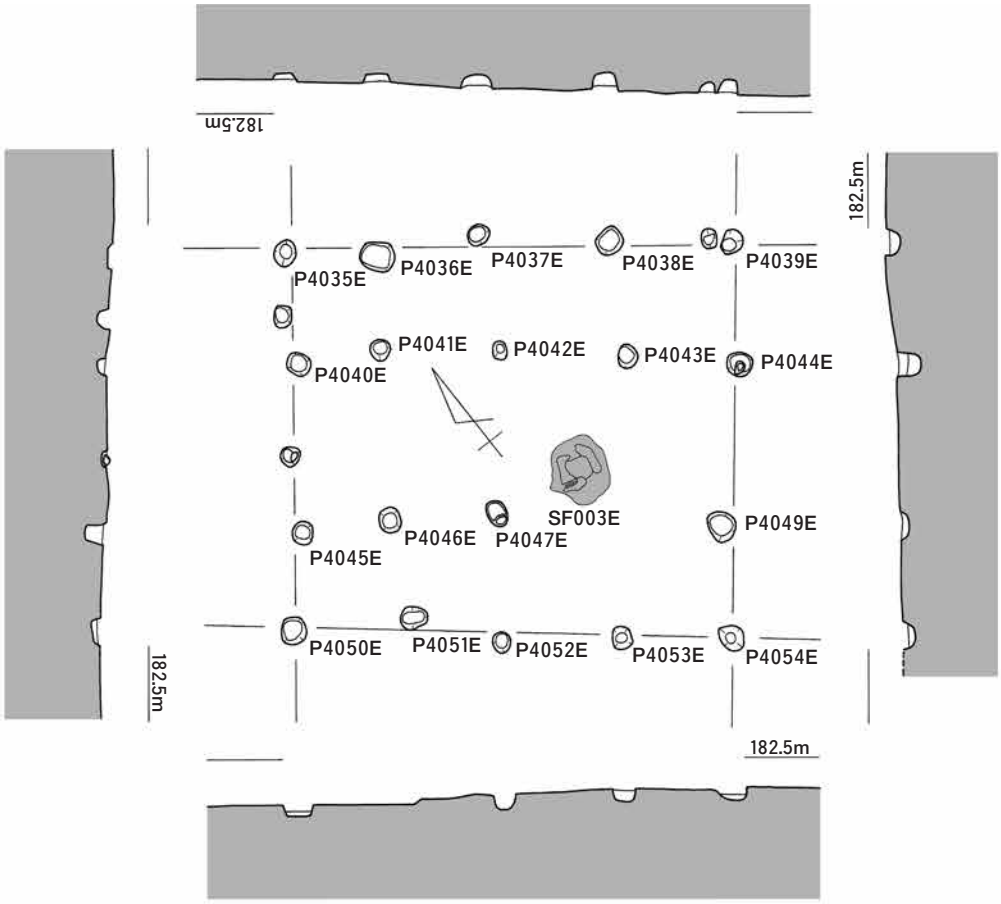


SB008E

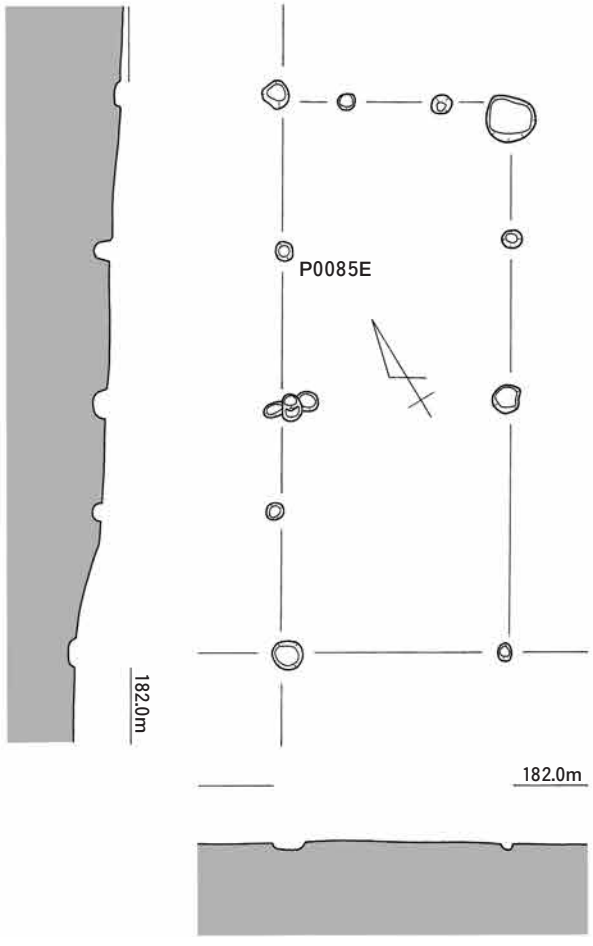


掘立柱建物SB007E(1/100)　　掘立柱建物SB008E(1/100)

SB009E

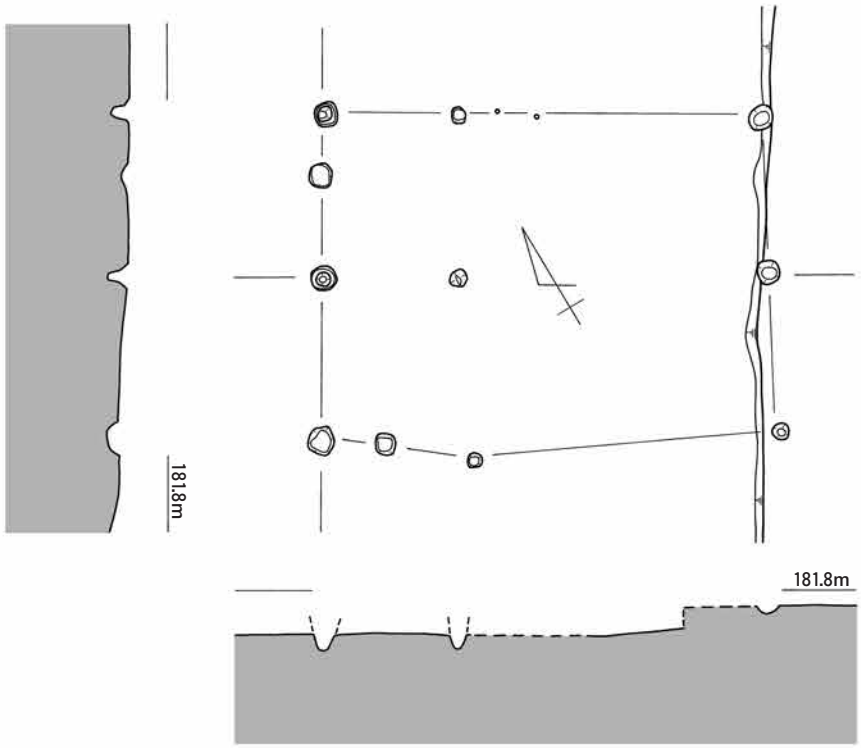


SB010E

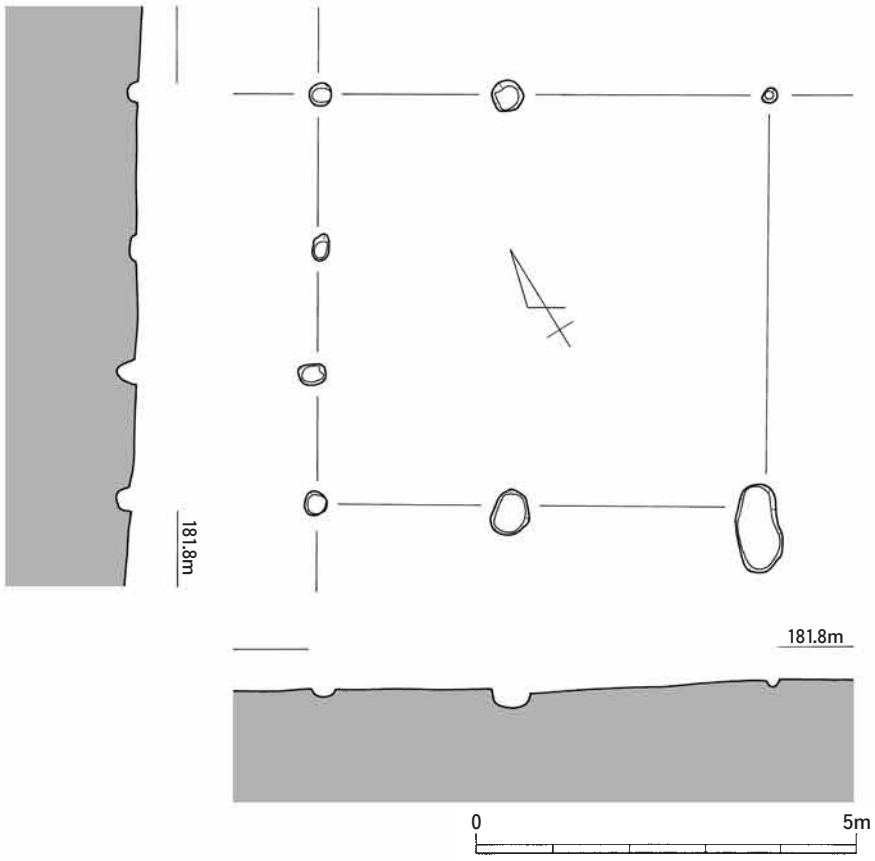


掘立柱建物SB009E(1/100)　　掘立柱建物SB010E(1/100)

SB011E

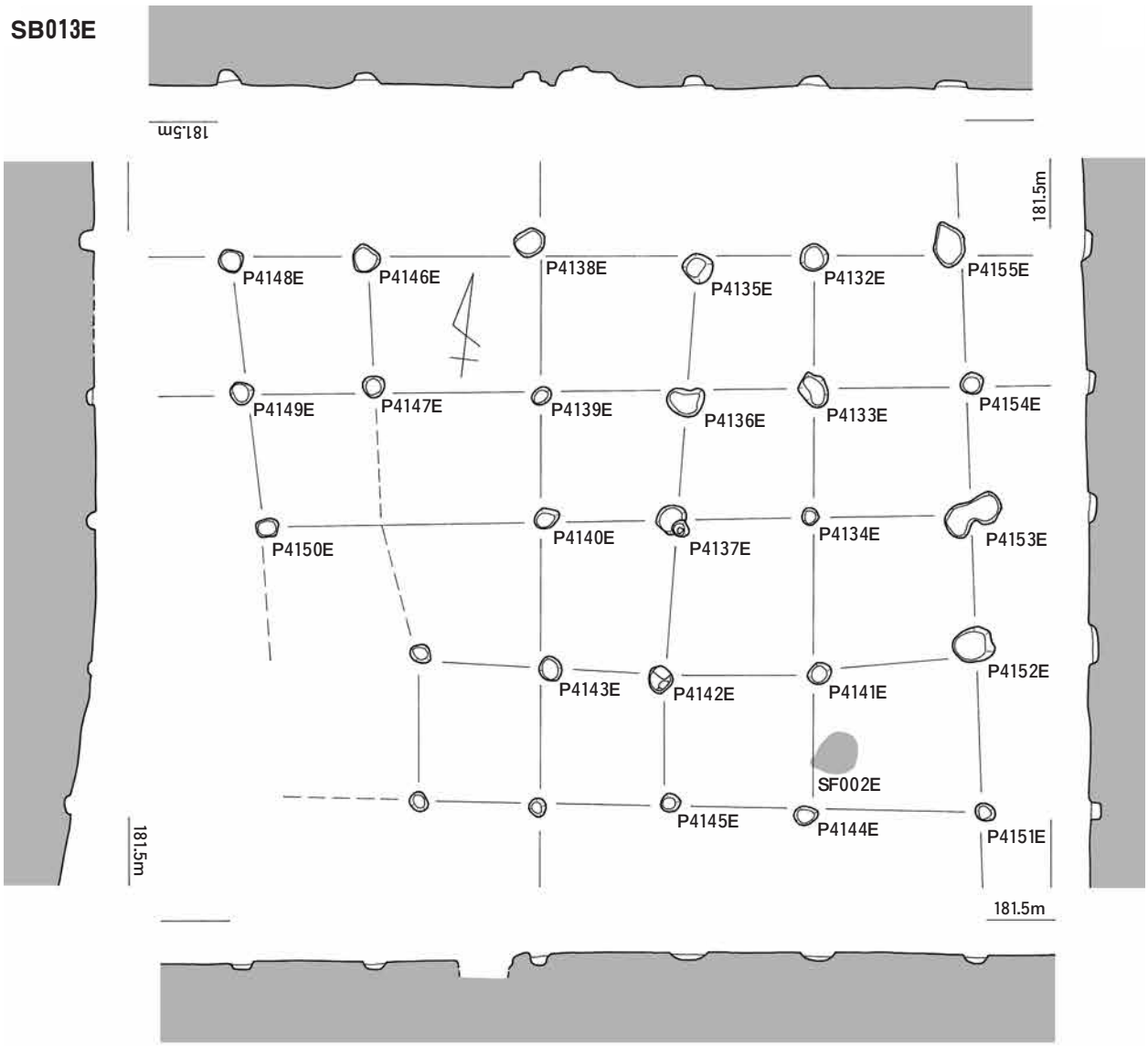


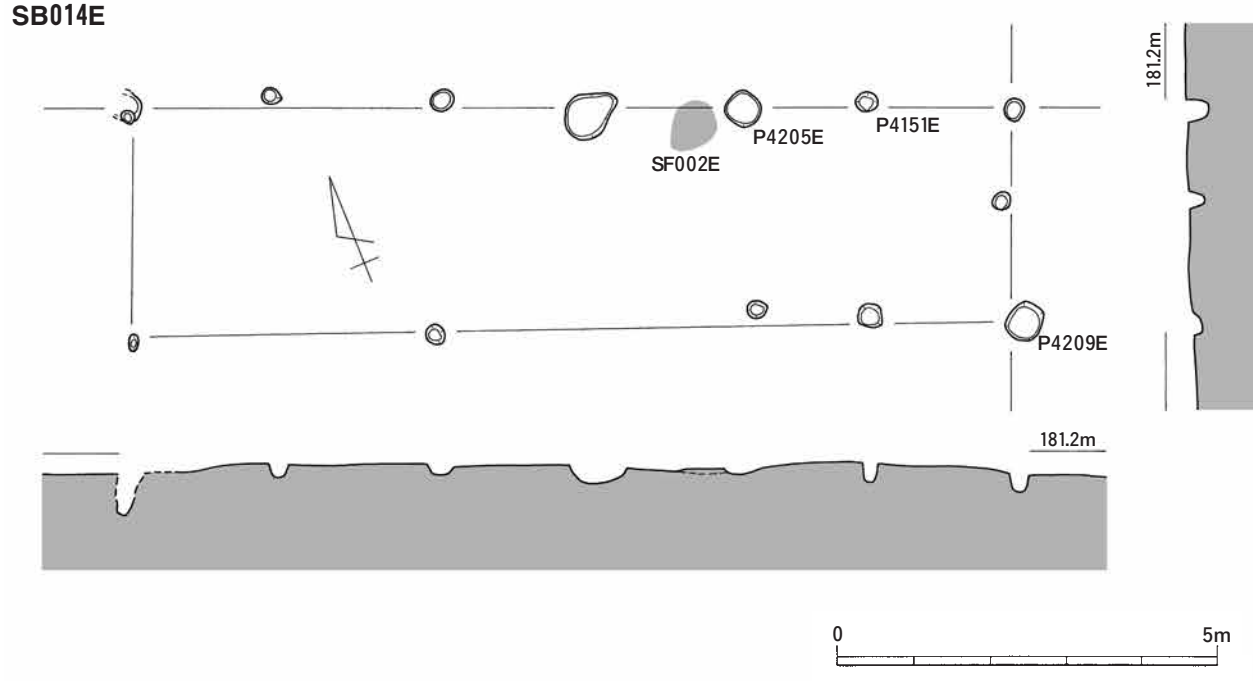
SB012E



掘立柱建物SB011E(1/100)　　掘立柱建物SB012E(1/100)

図版92 E地区 遺構

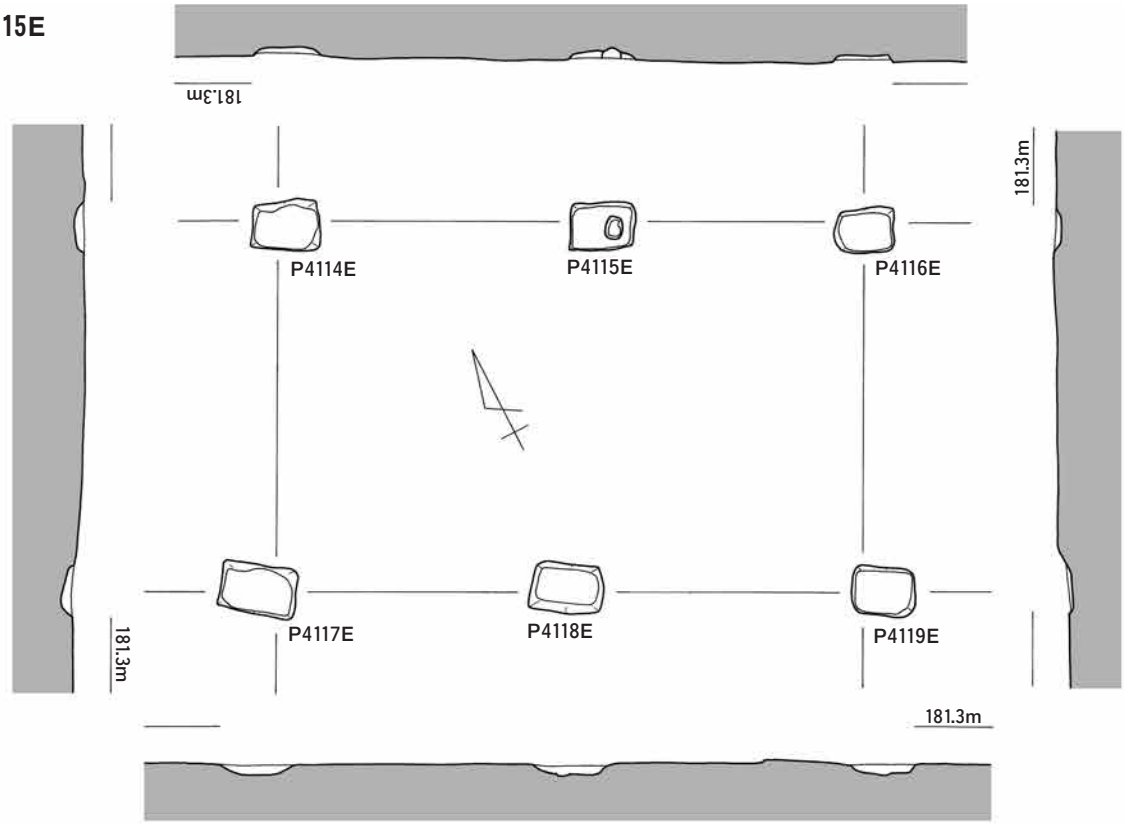




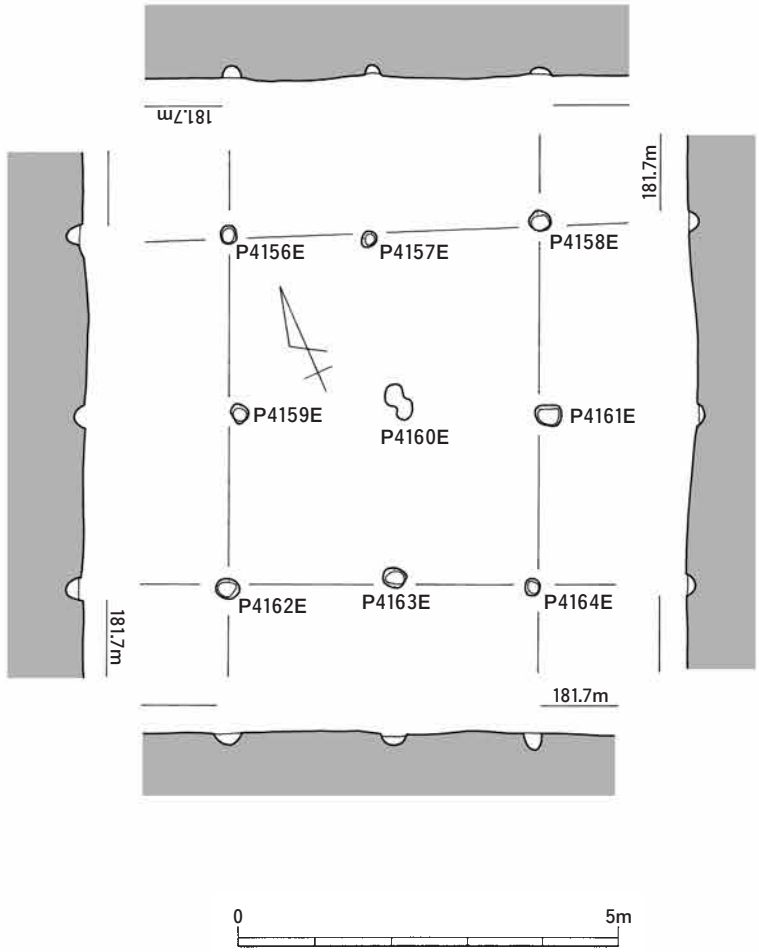
0 5m

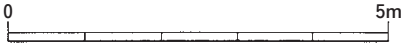
掘立柱建物SB013E(1/100)　掘立柱建物SB014E(1/100)

SB015E



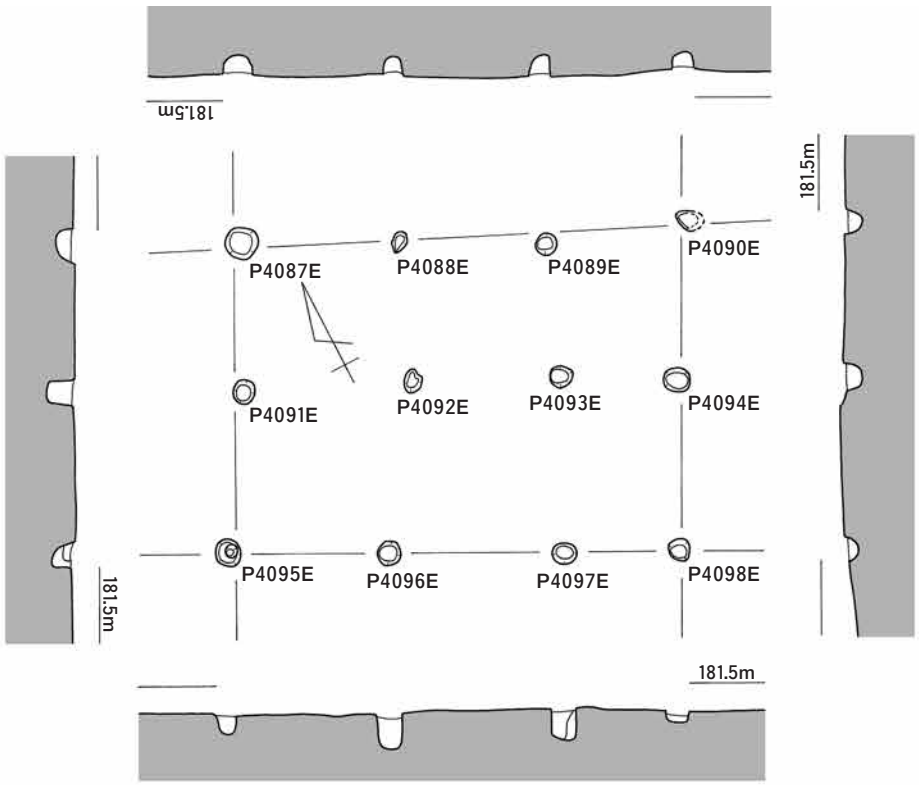
SB016E



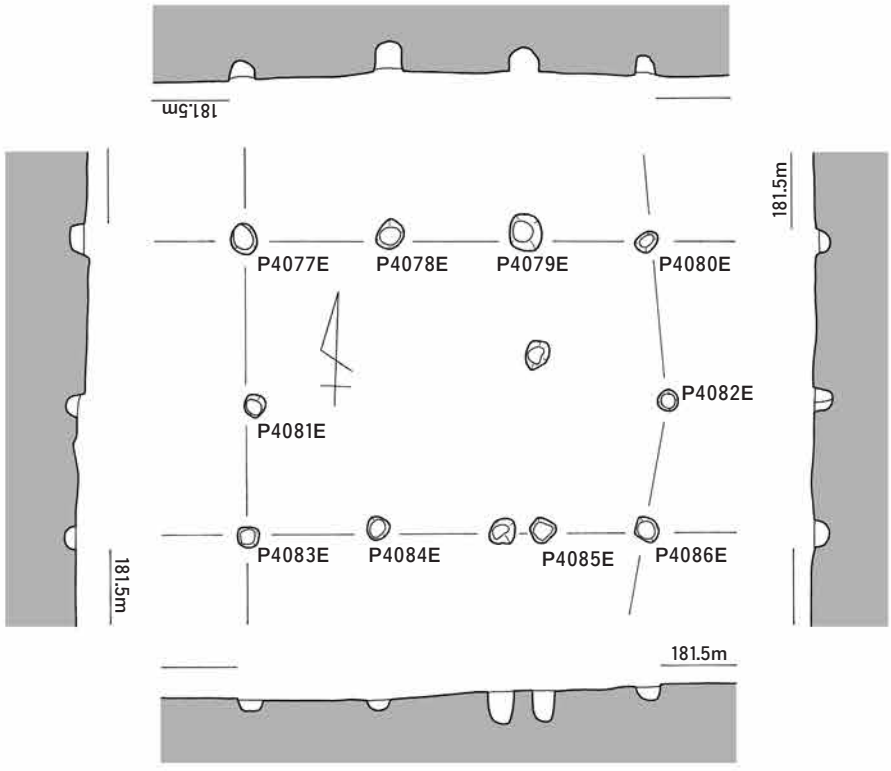


掘立柱建物SB015E(1/100)　　掘立柱建物SB016E(1/100)

SB017E

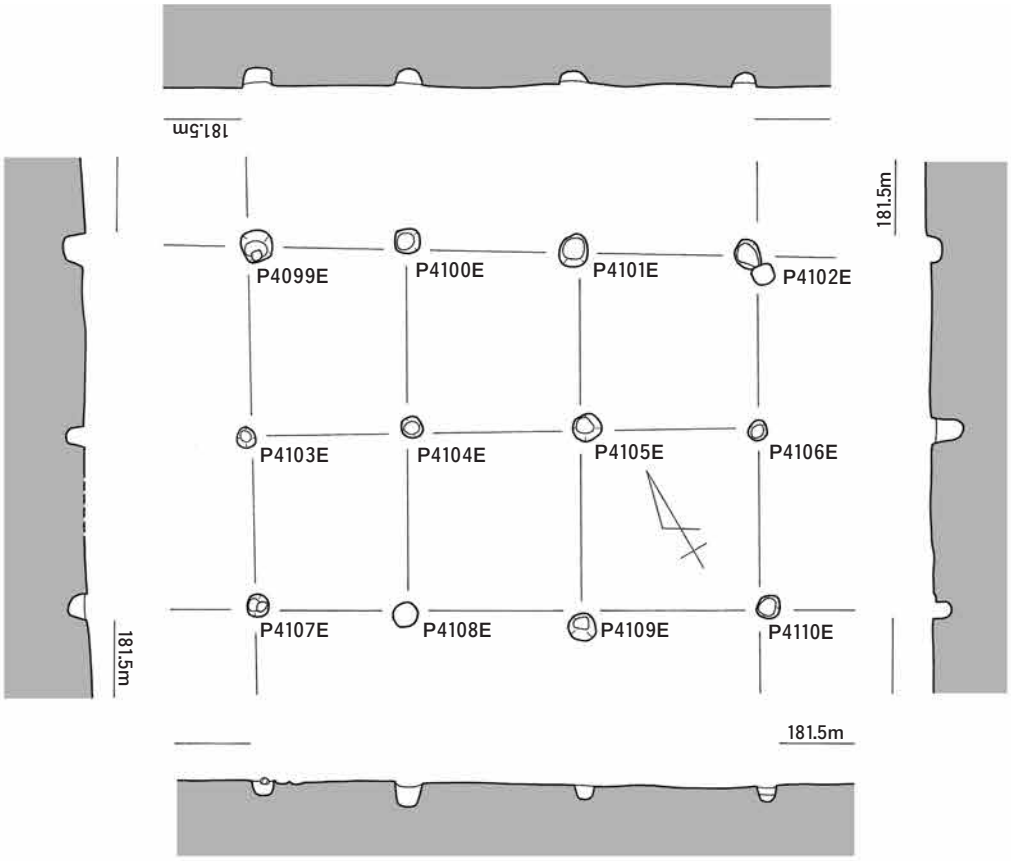


SB018E

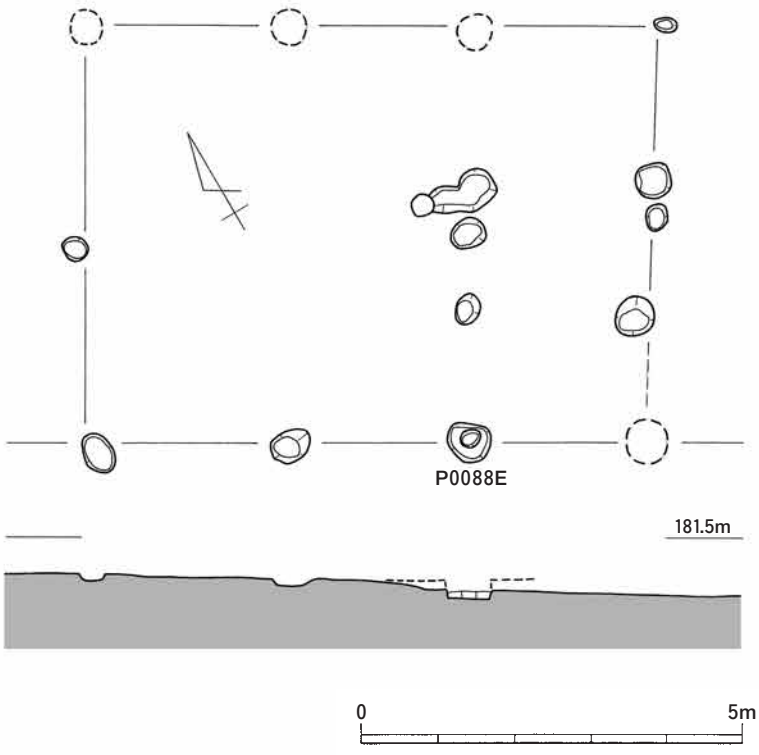


掘立柱建物SB017E(1/100)　　掘立柱建物SB018E(1/100)

SB019E

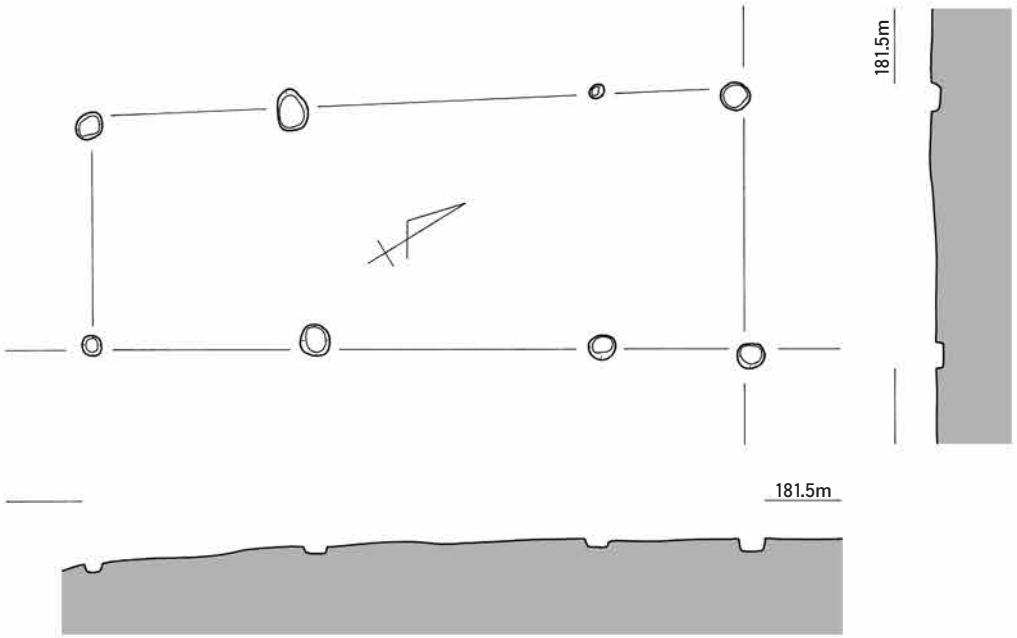


SB020E

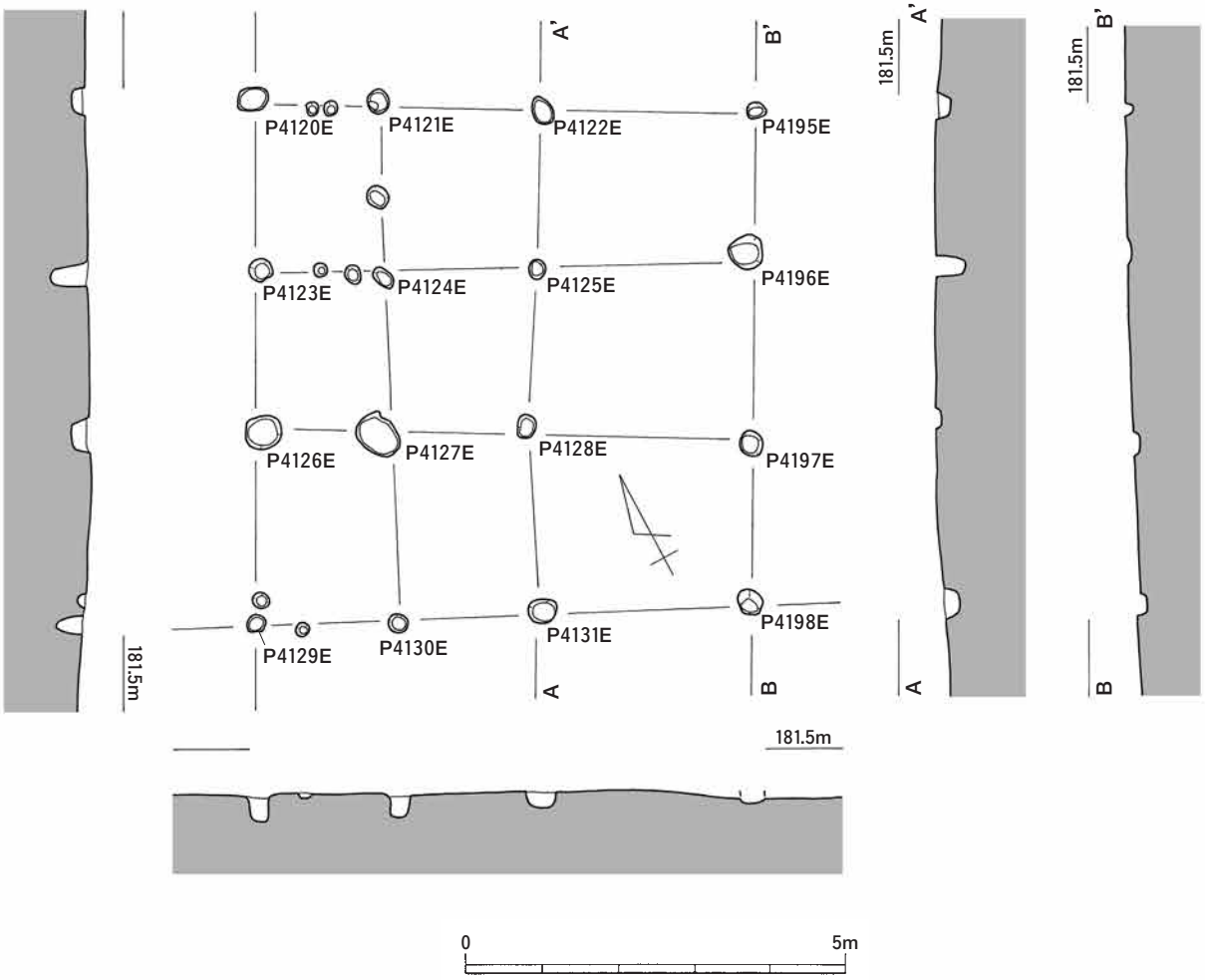


掘立柱建物SB019E(1/100)　掘立柱建物SB020E(1/100)

SB021E

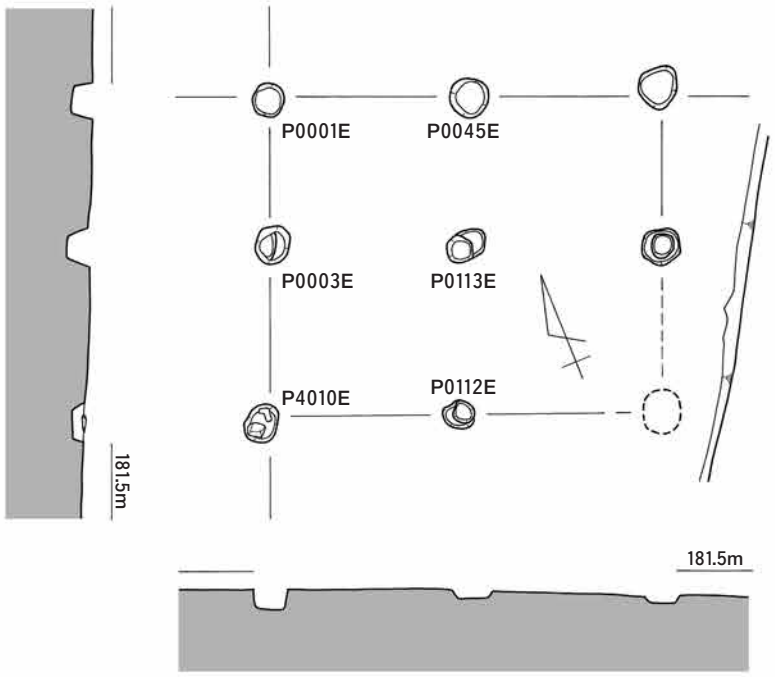


SB022E

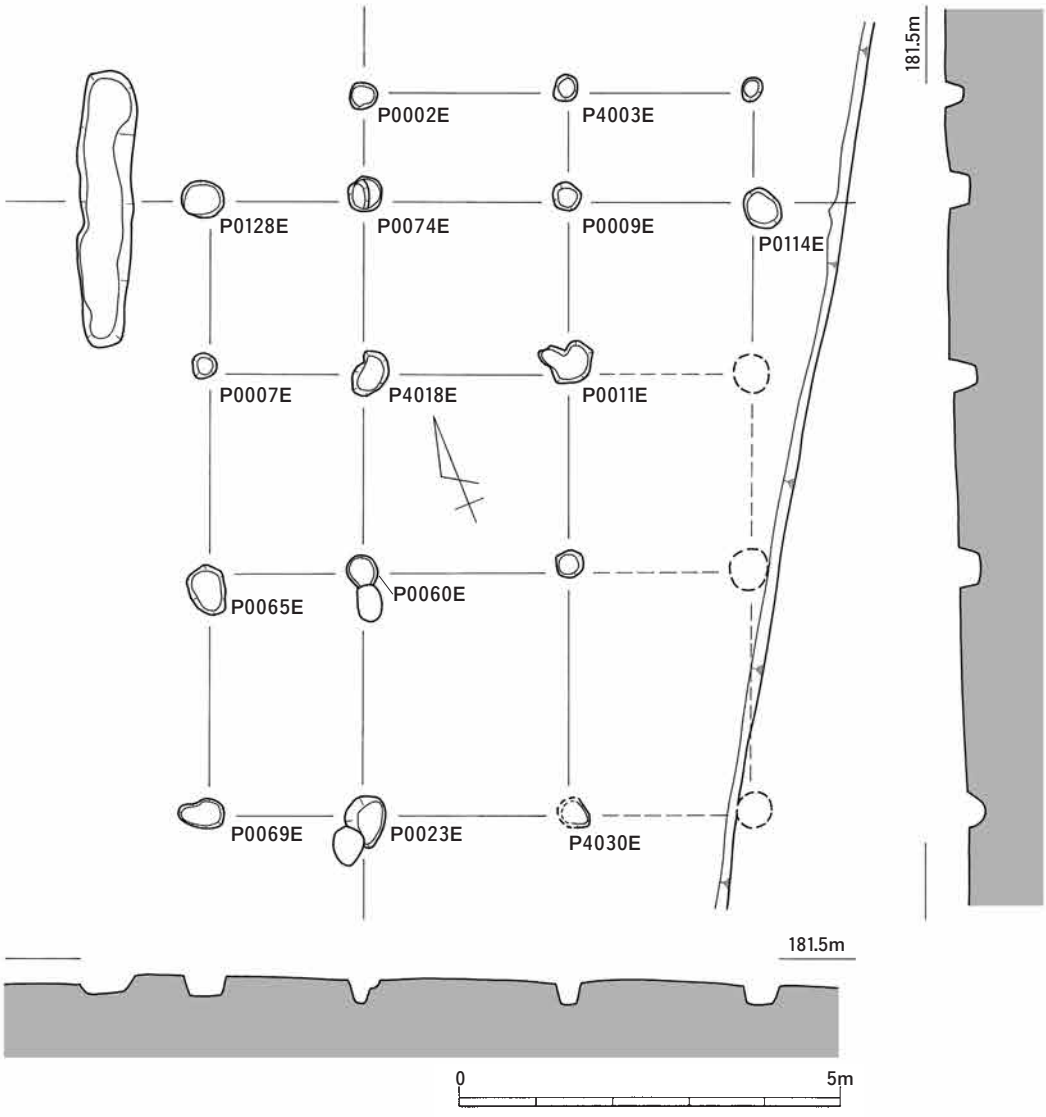


掘立柱建物SB021E(1/100)　　掘立柱建物SB022E(1/100)

SB023E

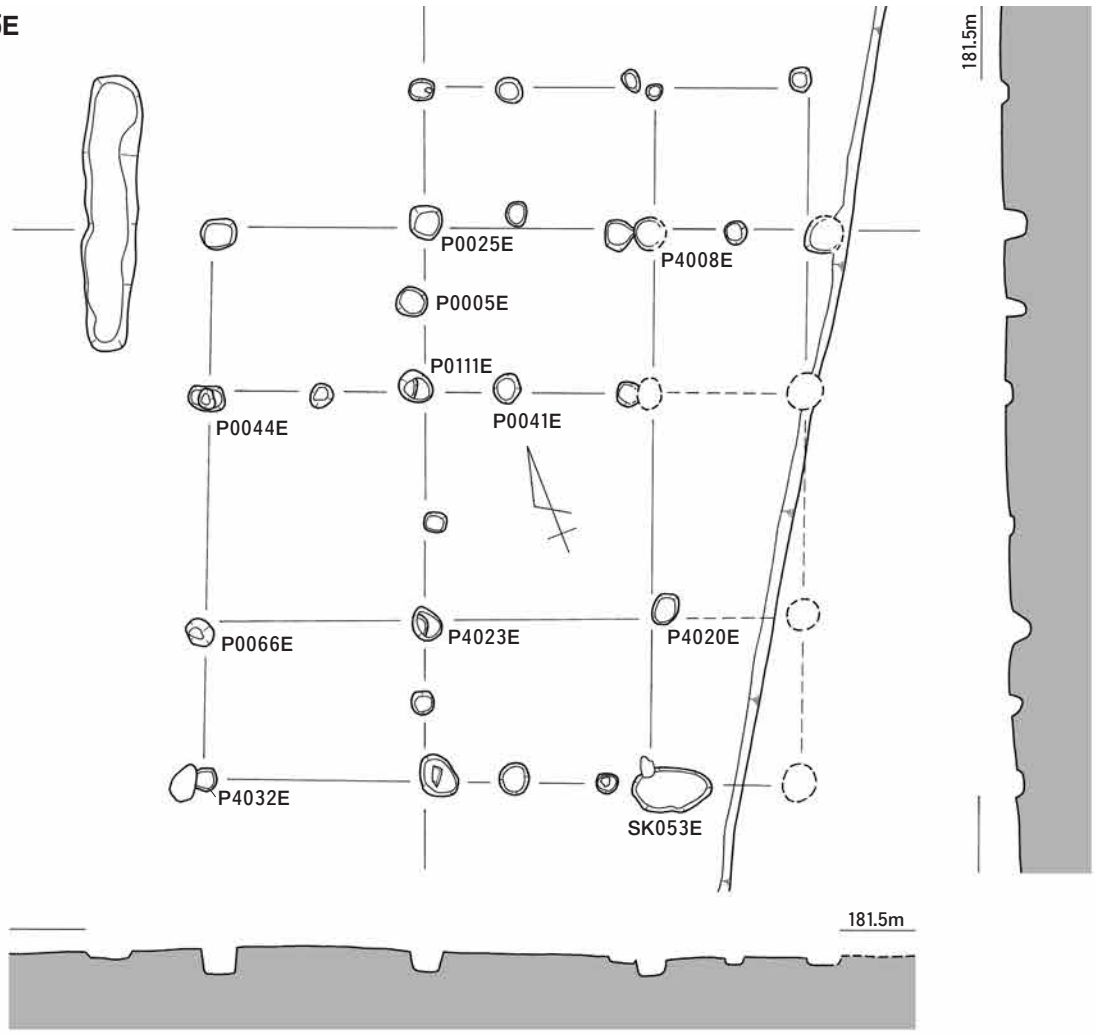


SB024E

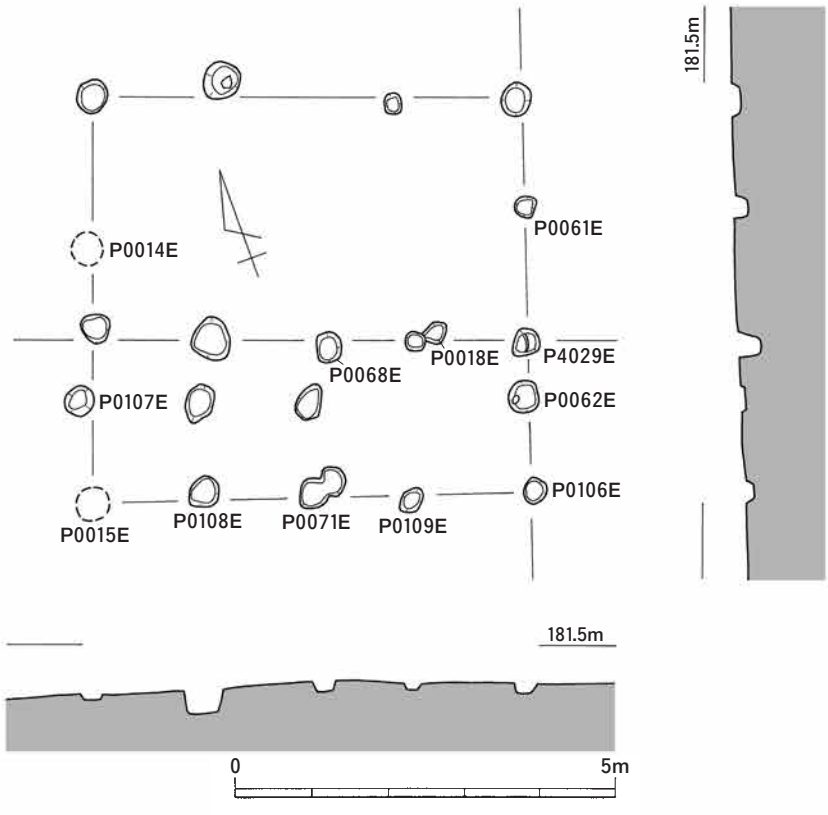


掘立柱建物SB023E(1/100)　　掘立柱建物SB024E(1/100)

SB025E

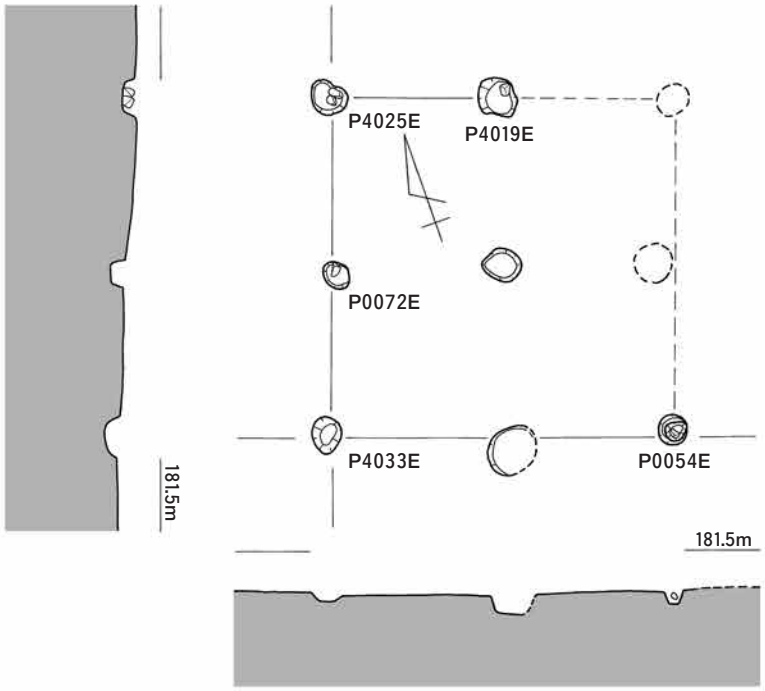


SB026E

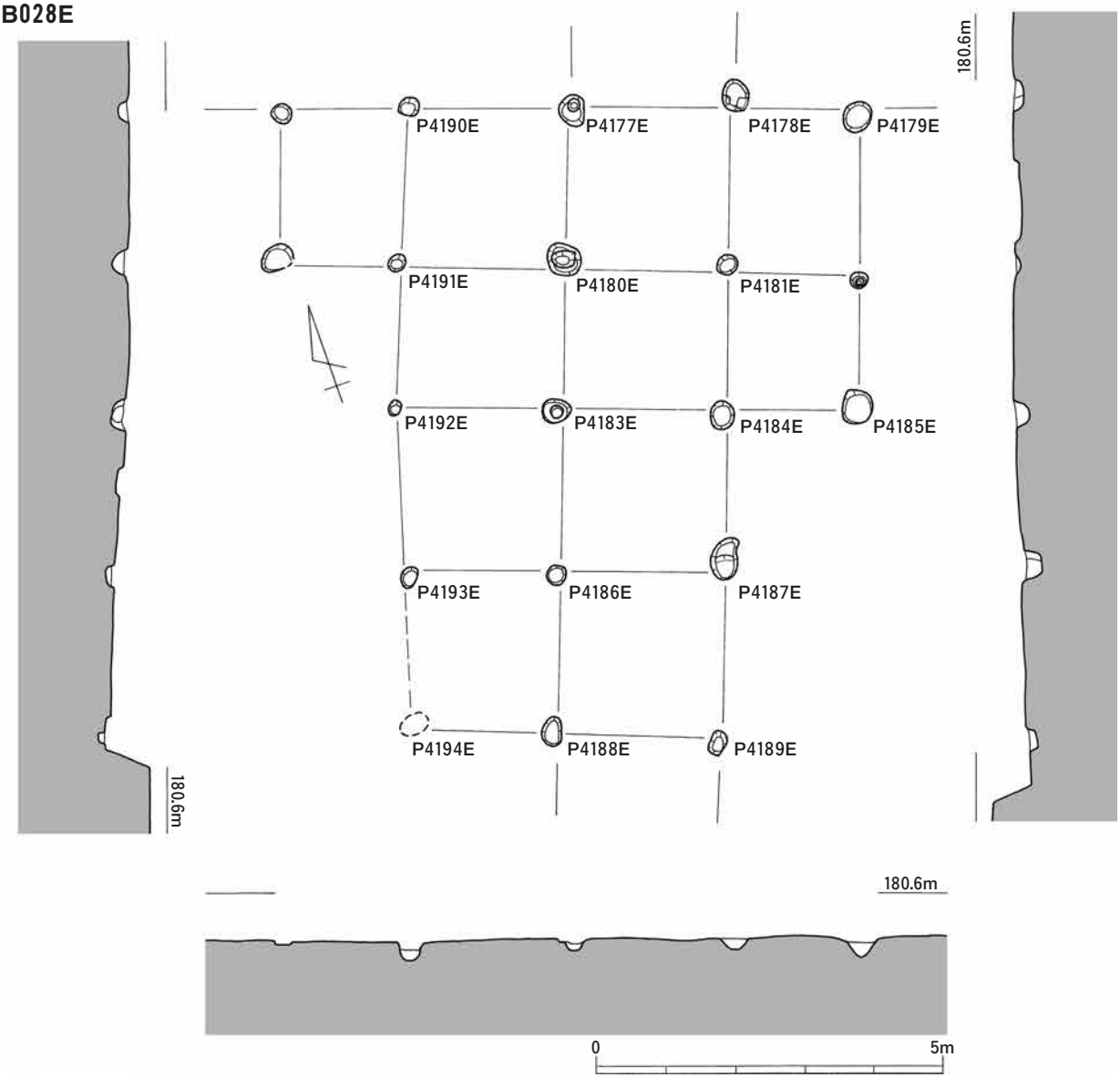


掘立柱建物SB025E(1/100)　　掘立柱建物SB026E(1/100)

SB027E



SB028E

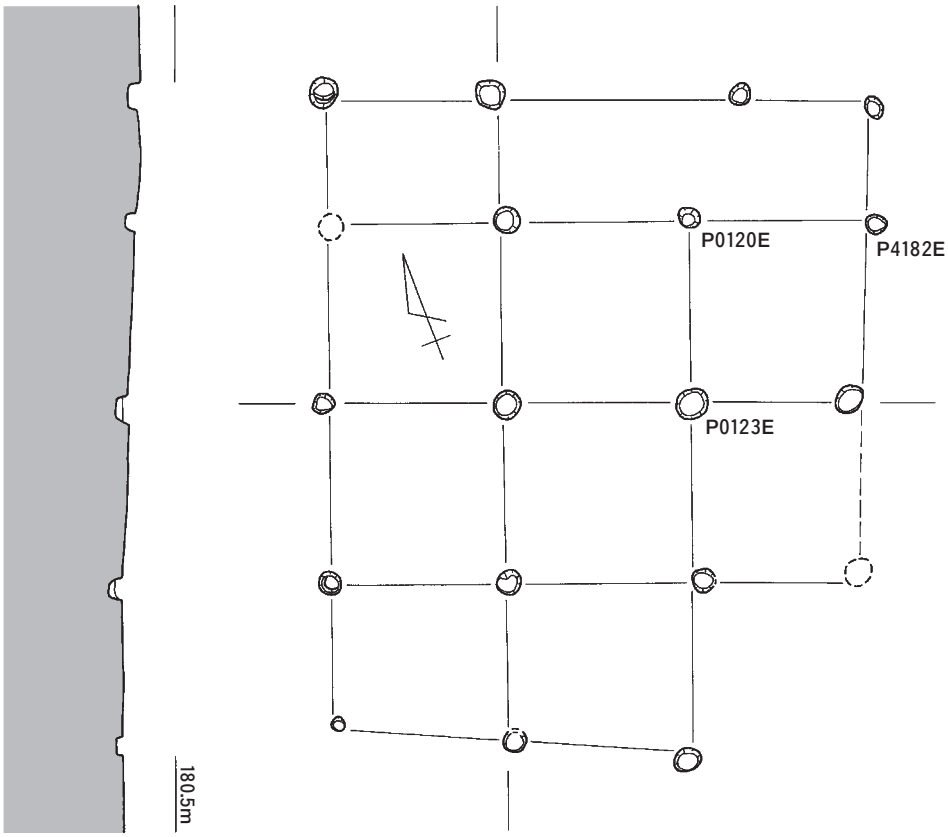


掘立柱建物SB027E(1/100)　　掘立柱建物SB028E(1/100)

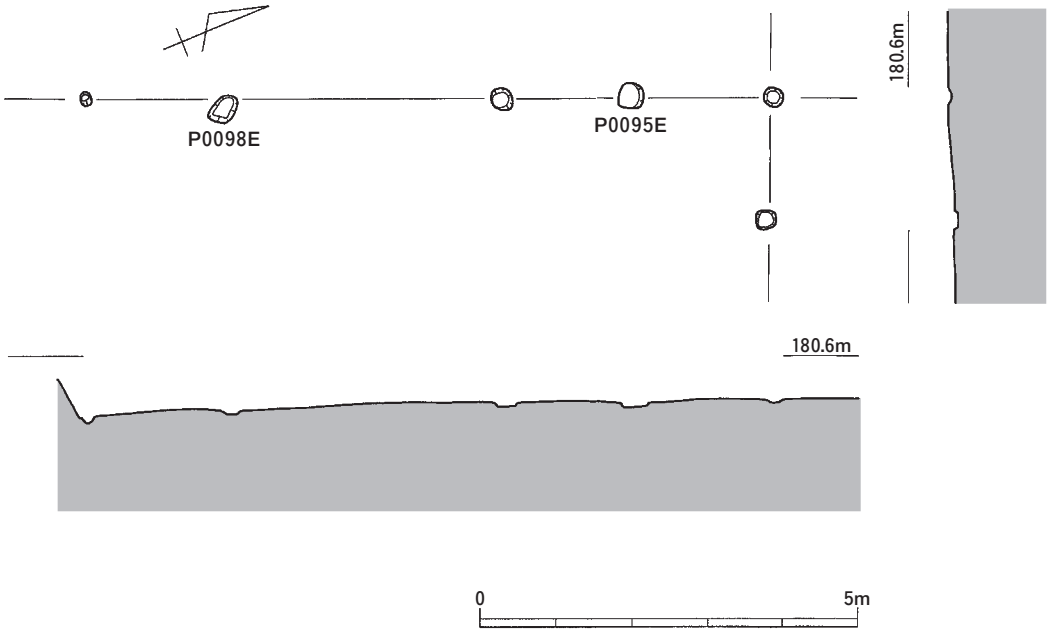
図版100

E地区　遺構

SB029E

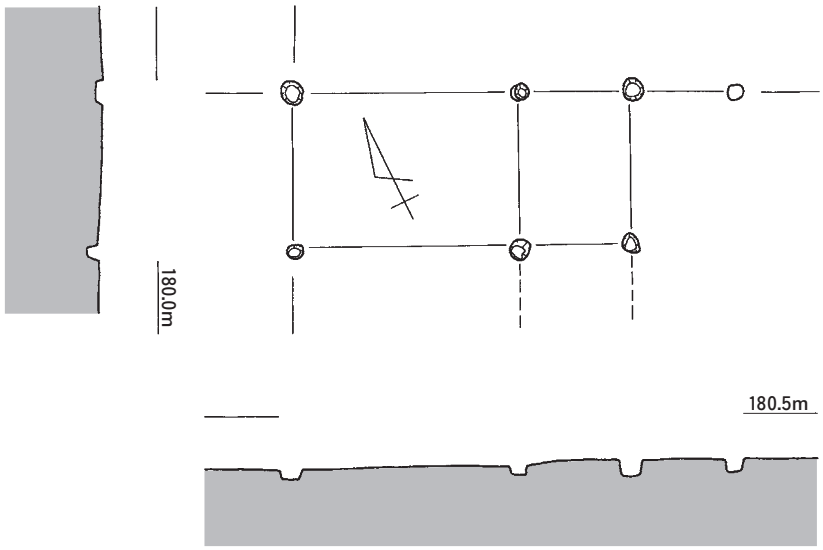


SB030E

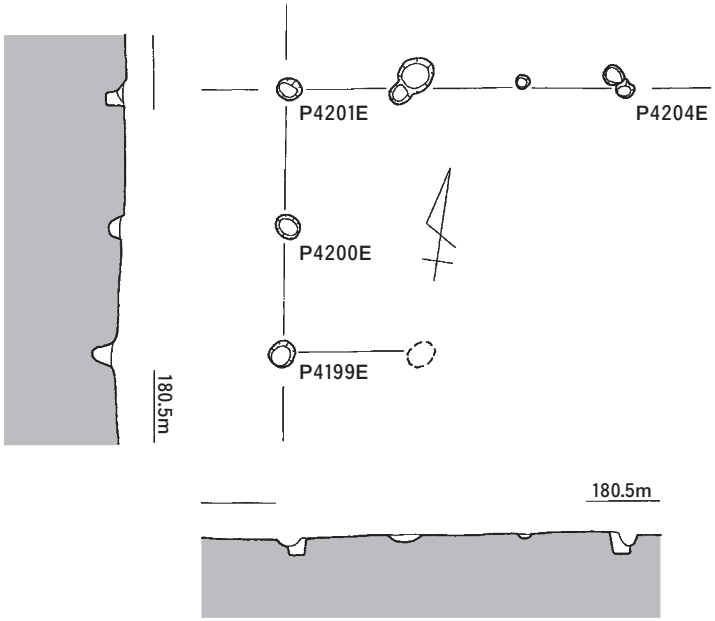


掘立柱建物SB029E(1/100)　　掘立柱建物SB030E(1/100)

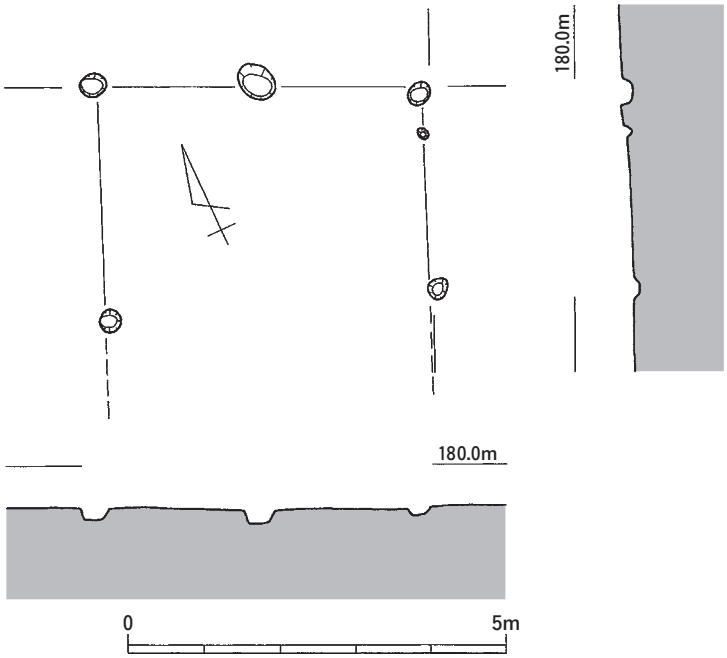
SB031E



SB032E

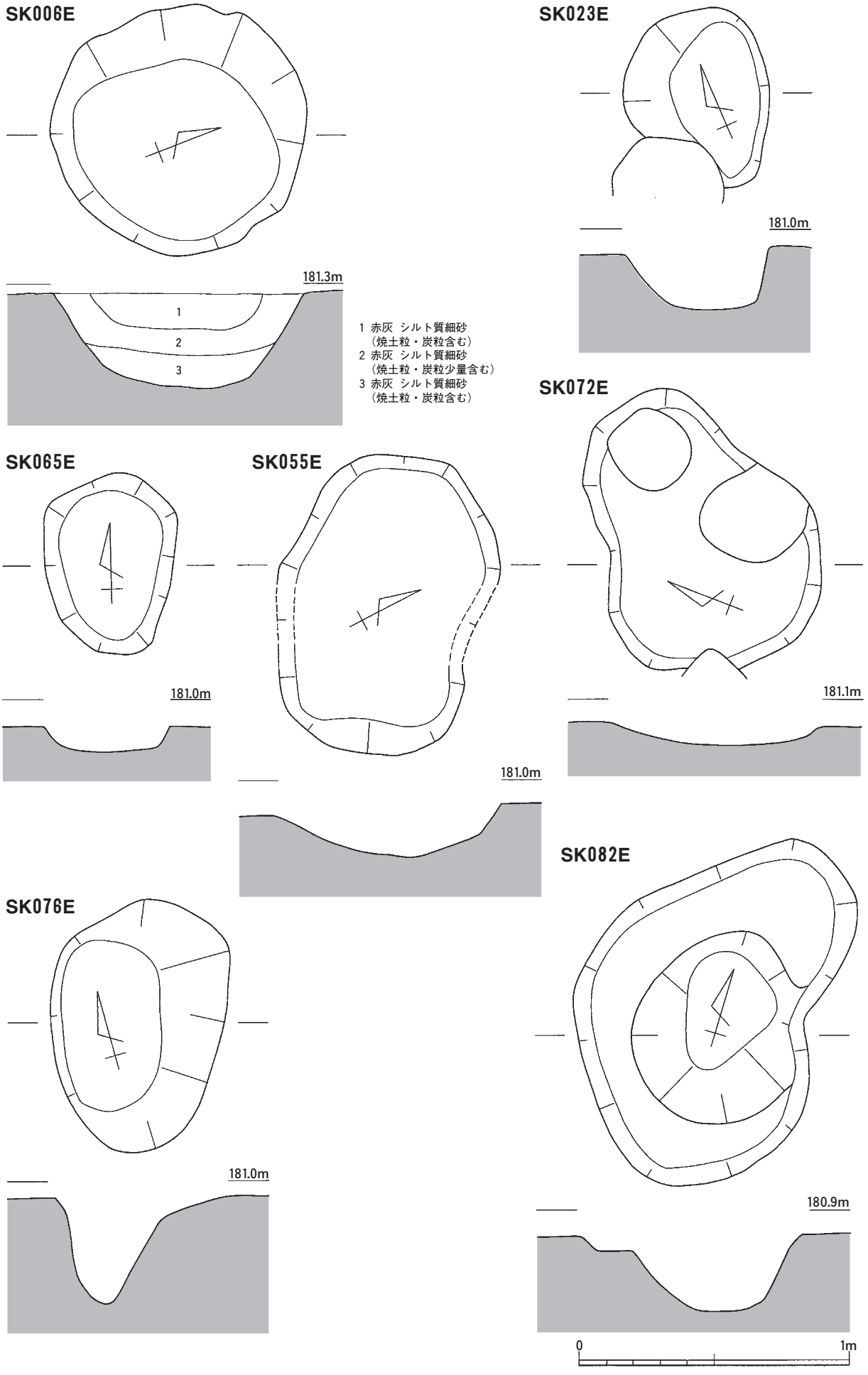


SB033E



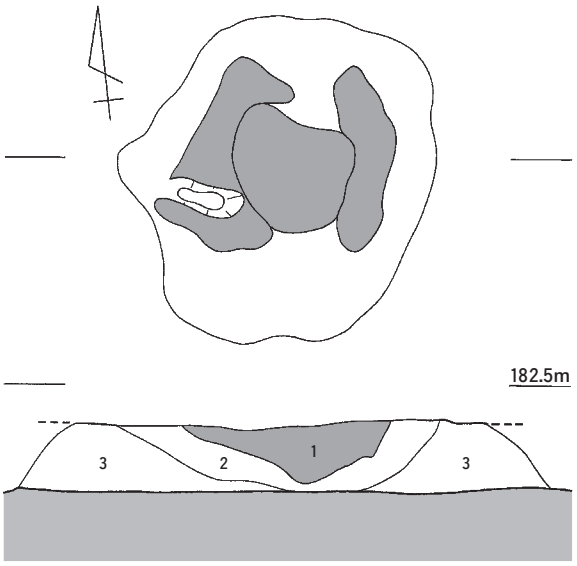
掘立柱建物SB031E(1/100)　掘立柱建物SB032E(1/100)　掘立柱建物SB033E(1/100)

図版102 E地区 遺構



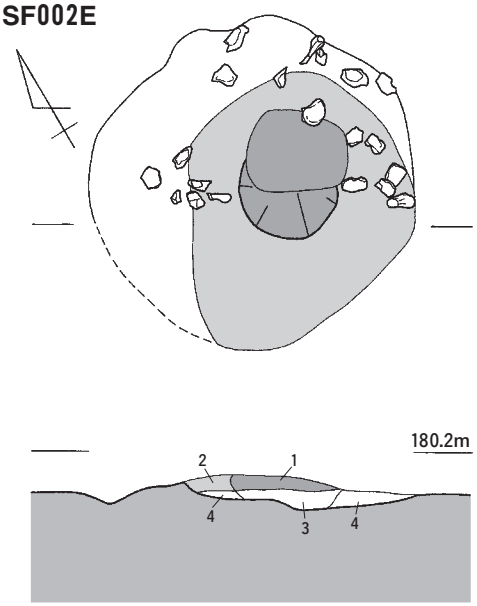
土坑SK006E(1/20)　土坑SK023E(1/20)　土坑SK065E(1/20)　土坑SK055E(1/20)
土坑SK072E(1/20)　土坑SK076E(1/20)　土坑SK082E(1/20)

SF003E



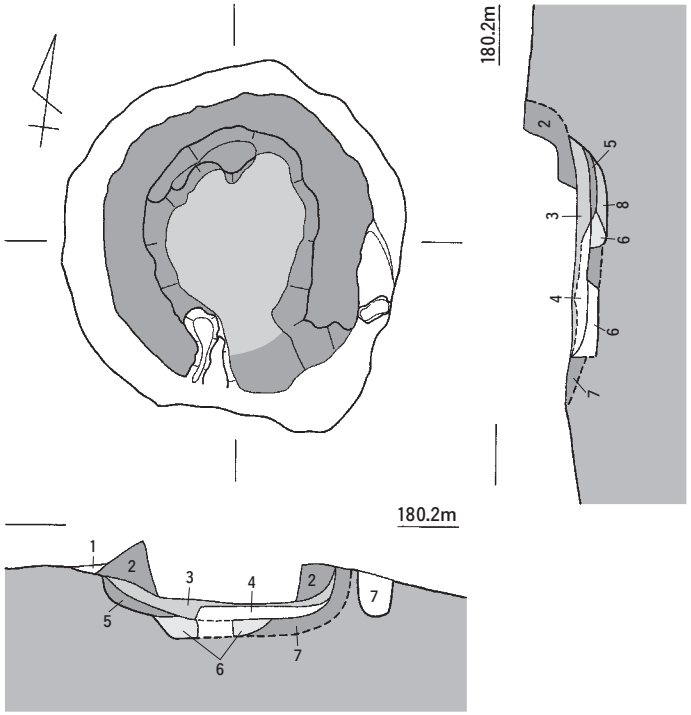
1［還元化］
2 にぶい赤褐 シルト質細砂(中礫含む)
3 褐 細砂(中礫含む)

SF002E

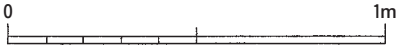


1 赤褐 極細砂(細礫～中礫少量含む)
2 暗褐 極細砂～細砂(中礫含む)
3 暗褐 細砂(中礫含む)
4 暗褐 細砂(中礫多く含む)

SF001E

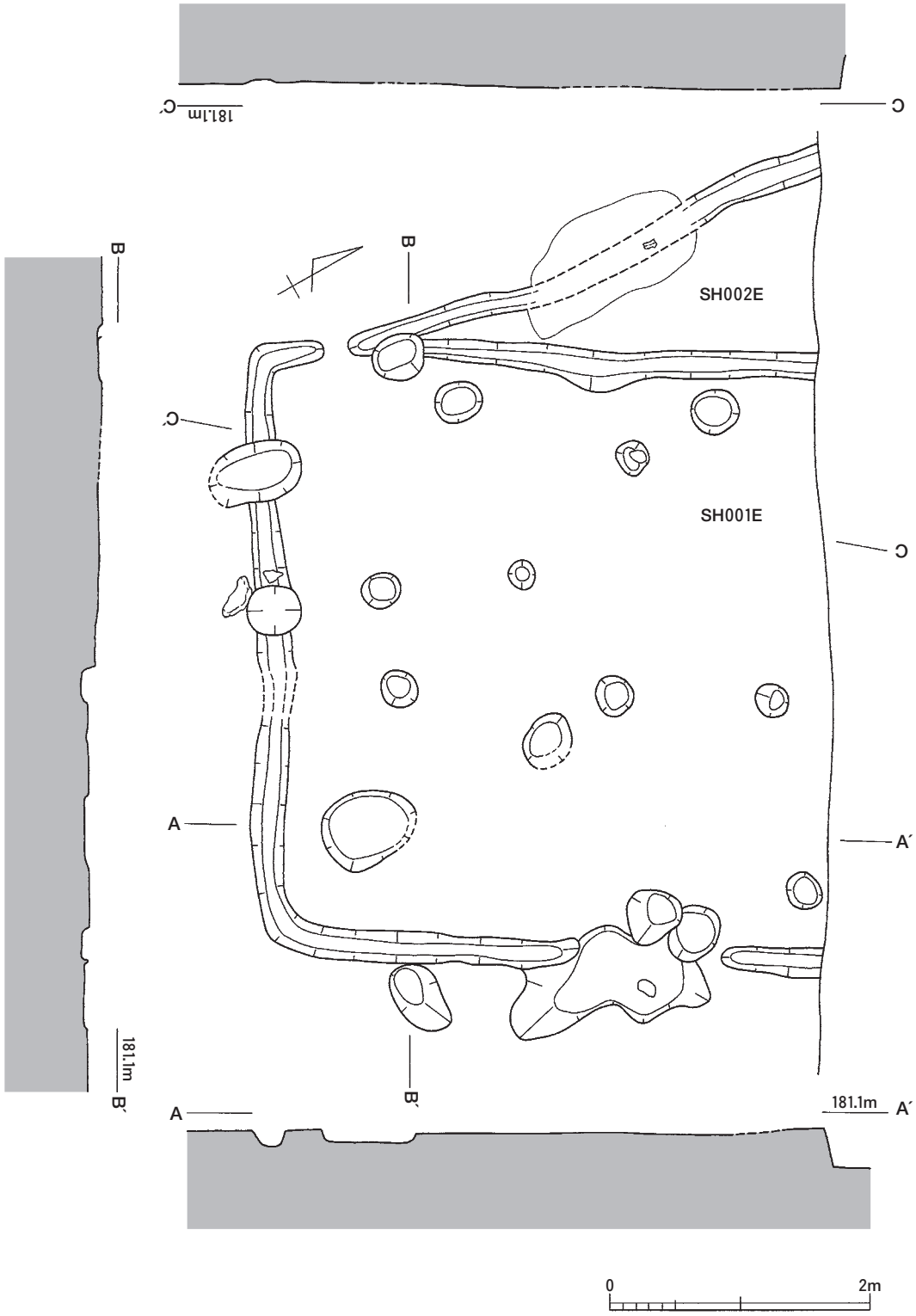


1 暗赤褐 シルト質細砂
2（焼土）
3［炭層］
4 灰褐 シルト質細砂
5（焼土）
6（焼土・炭混じる）
7（焼土）
8［炭層］

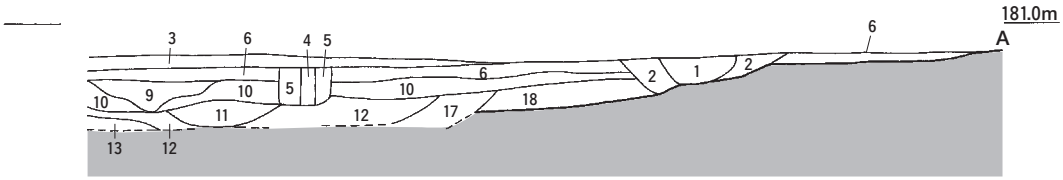


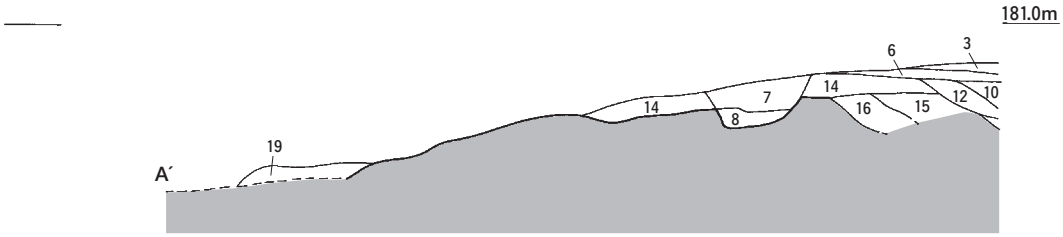
焼土SF003E(1/20)　焼土SF002E(1/20)　焼土SF001E(1/20)

SH001E・SH002E

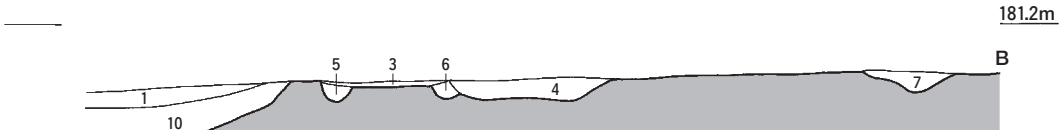


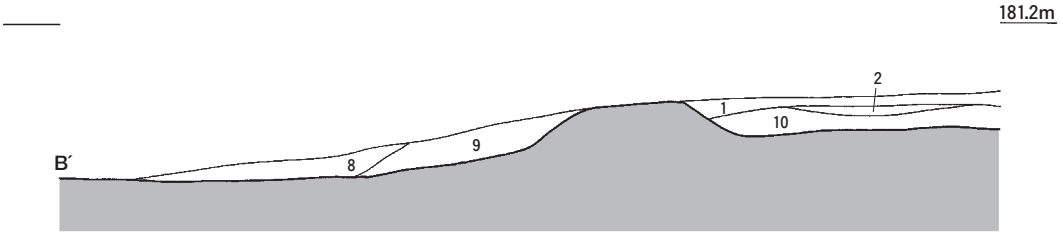
竪穴住居SH001E・SH002E(1/50)



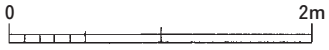


1 暗赤灰 粗砂～細礫
2 褐灰 細砂(中礫少量含む)
3 赤灰 細砂(中礫多量に含む)
4 黒褐 細砂(中礫少量含む)
5 黒褐 細砂(中礫含む)
6 褐灰 細砂 均一層
7 褐灰 細砂 均一層
8 赤灰 細砂(中礫多量に含む)
9 褐灰 細砂(中礫～大礫含む)
10 褐灰 細砂(中礫多量に含む)
11 褐灰 粗砂～大礫
12 褐灰 粗砂(中礫～大礫含む)
13 赤灰 粗砂～細礫
14 赤灰 細砂(中礫含む)
15 褐灰 細砂(中礫含む)
16 褐灰 粗砂(中礫含む)
17 褐灰 細砂(中礫～大礫含む)
18 褐灰 粗砂(中礫～大礫含む)
19 褐灰 細砂 均一層





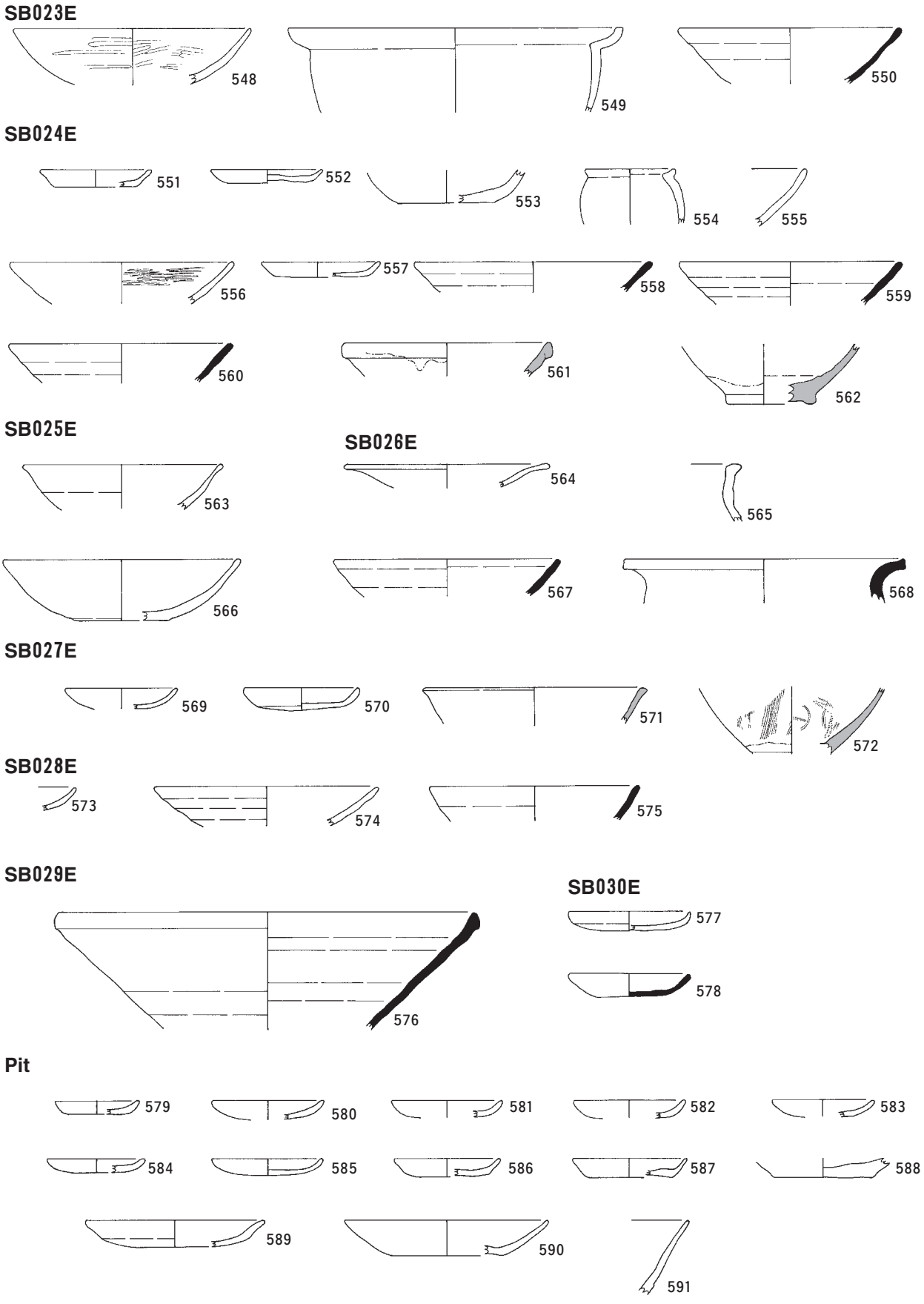
1 暗赤褐 細砂～粗砂(中礫多く含む)
2 褐 粗砂(中礫含む)
3 暗褐 シルト質極細砂～細砂(中礫含む)
4 褐 細砂～粗砂(中礫多く含む)
5 暗褐 細砂(中礫・炭含む)
6 褐 細砂(中礫多く含む)
7 にぶい黄褐 細砂(細礫・大礫含む)
8 暗褐 シルト質極細砂～細砂(細礫僅かに含む)
9 褐 細砂～粗砂(中礫多く含む)
10 暗褐 粗砂(中礫～大礫含む)[縄文土器堆積層]



縄文土器堆積土層断面(1/50)

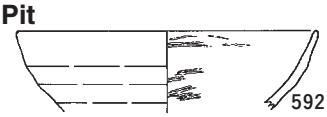
図版106

E地区 遺物



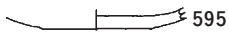
土器1（548～591）

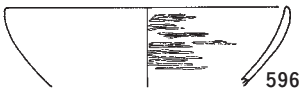
Pit

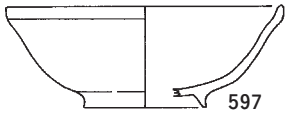

592

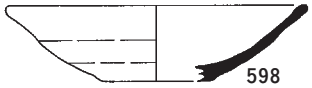
593

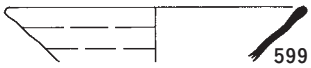
594

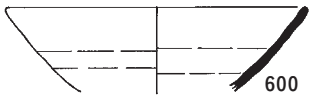

595

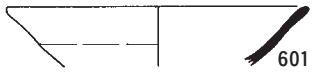

596

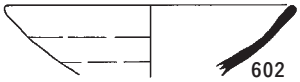

597

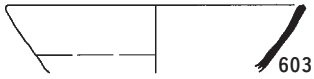

598

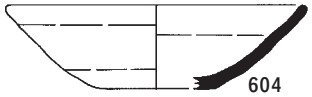

599


600


601

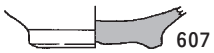

602


603


604

605

606


607

608

SK006E

609

SK023E

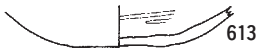
610

SK065E

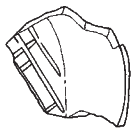
611

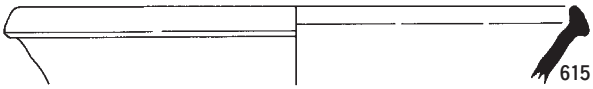
SK055E

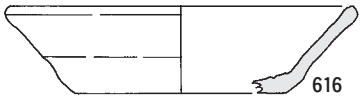
612


613

614




615


616

SK072E

617

618

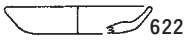
619

SK077E

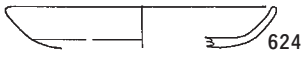
620

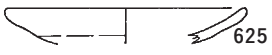
包含層

621

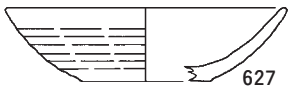

622

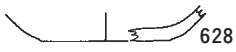
623

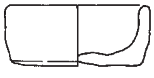

624

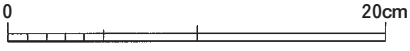

625

626

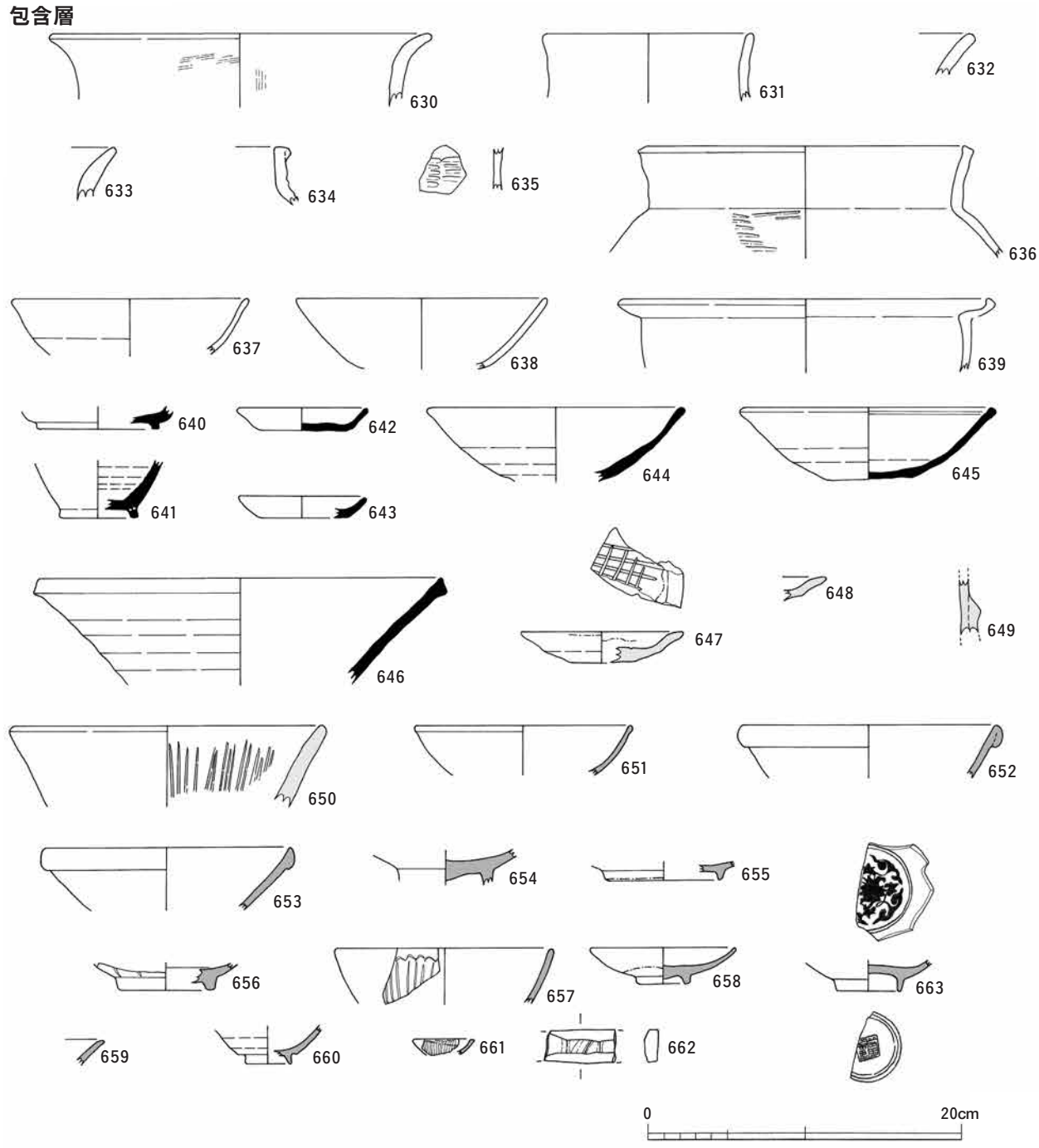

627

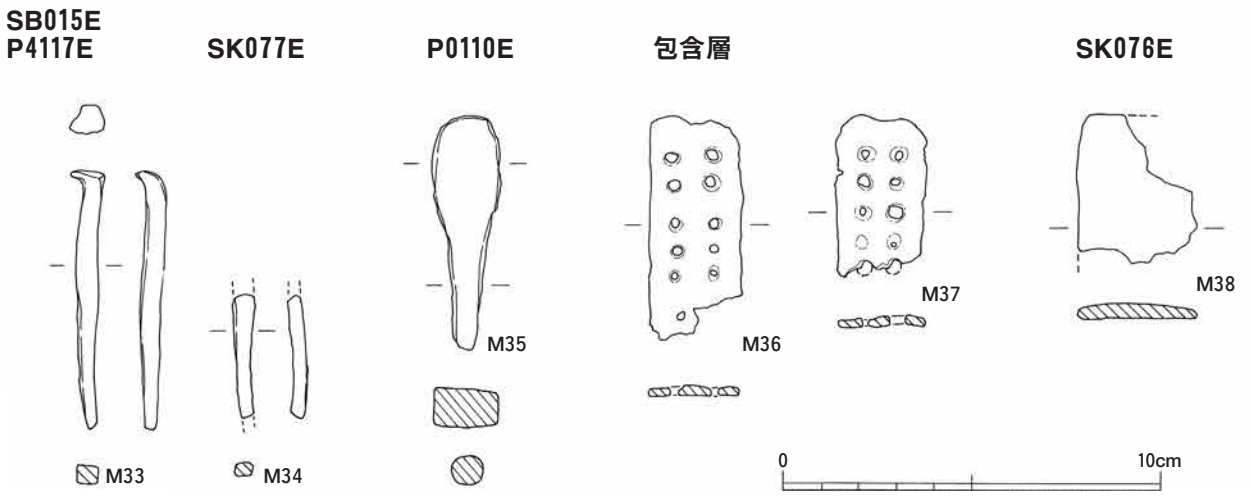

628


629



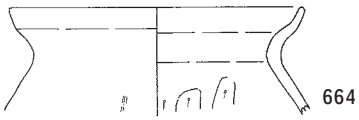
土器 2 (592～629)



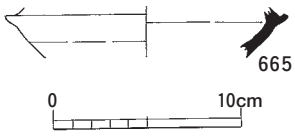


土器 3 ・金属器(630～663・M33～M38)

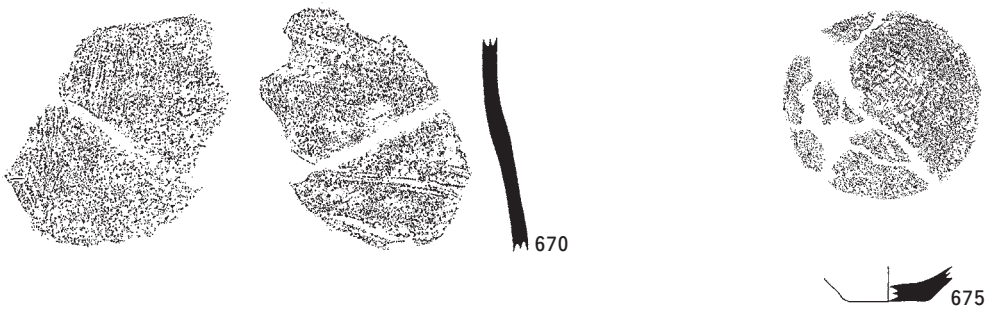
SH002E

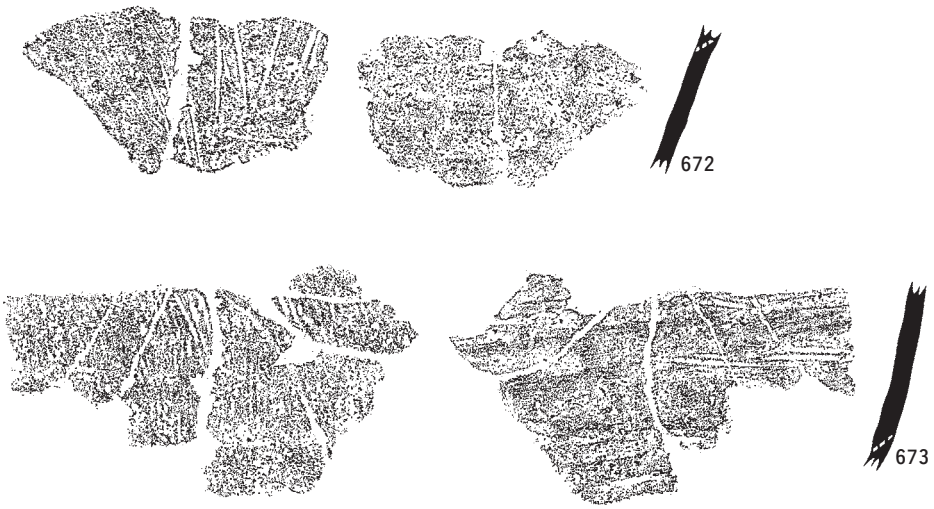


包含層



包含層



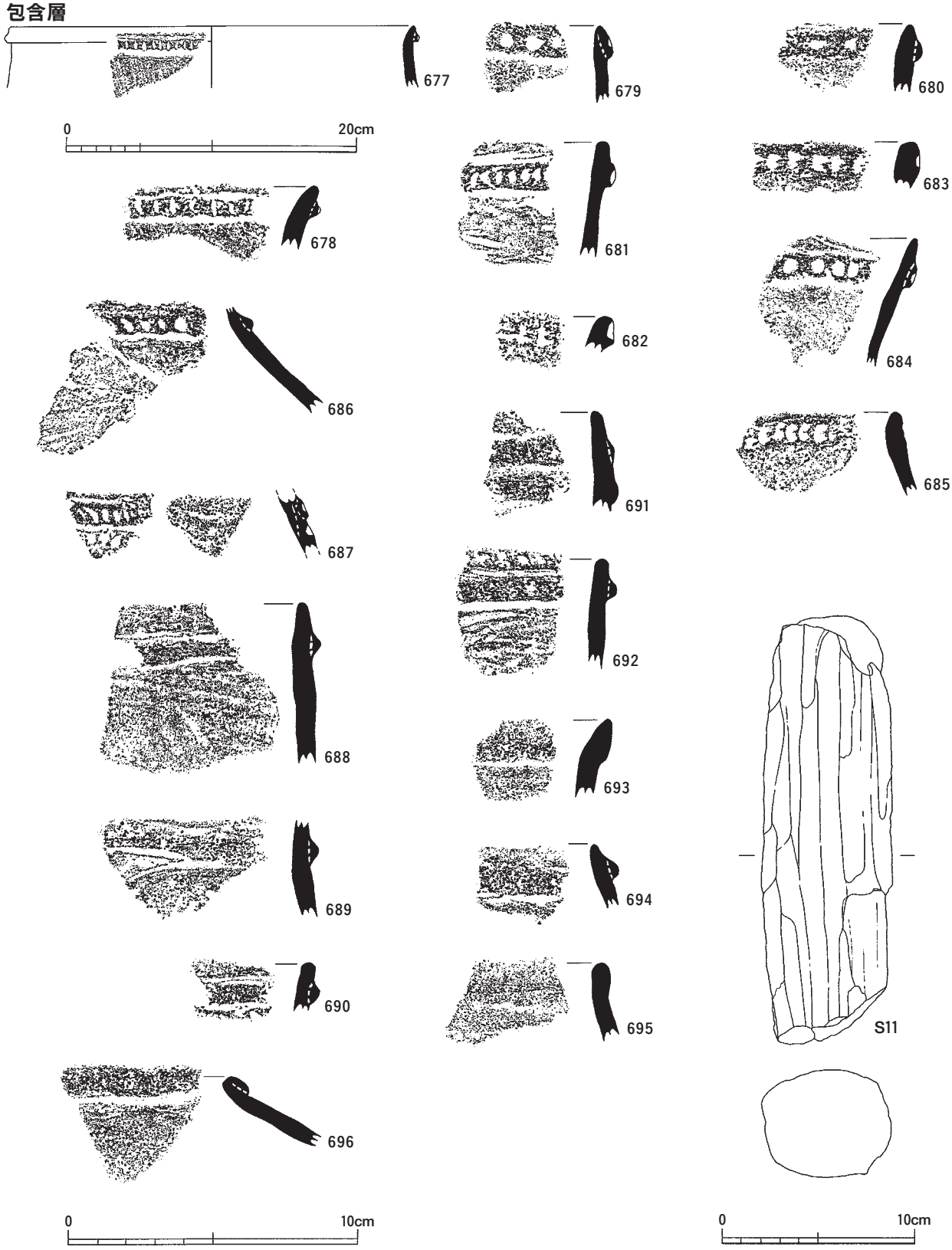


土器 4　縄文土器 1（664～676）

図版110

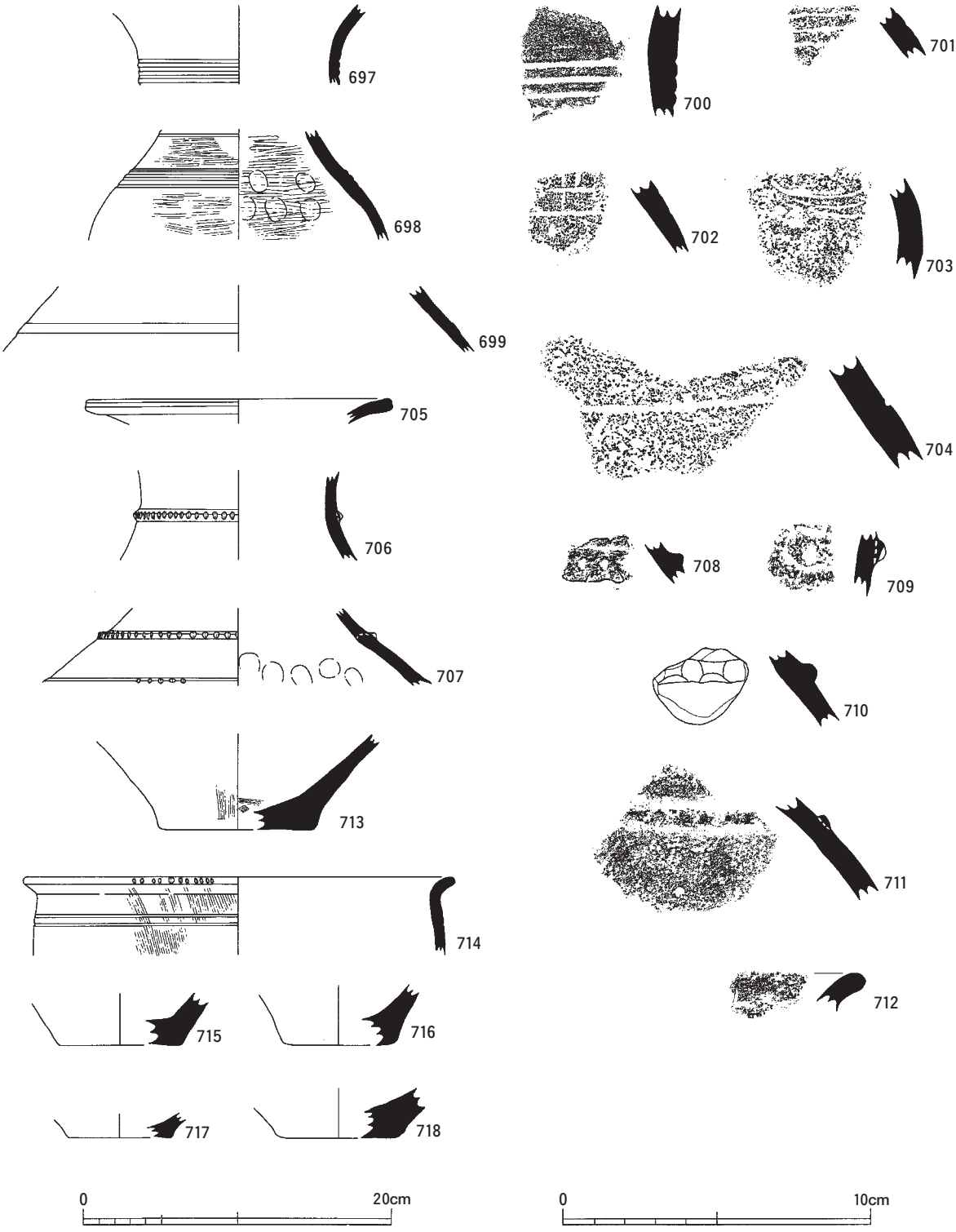
E地区　遺物

包含層



土器5　縄文土器2・石器(677～696・S11)

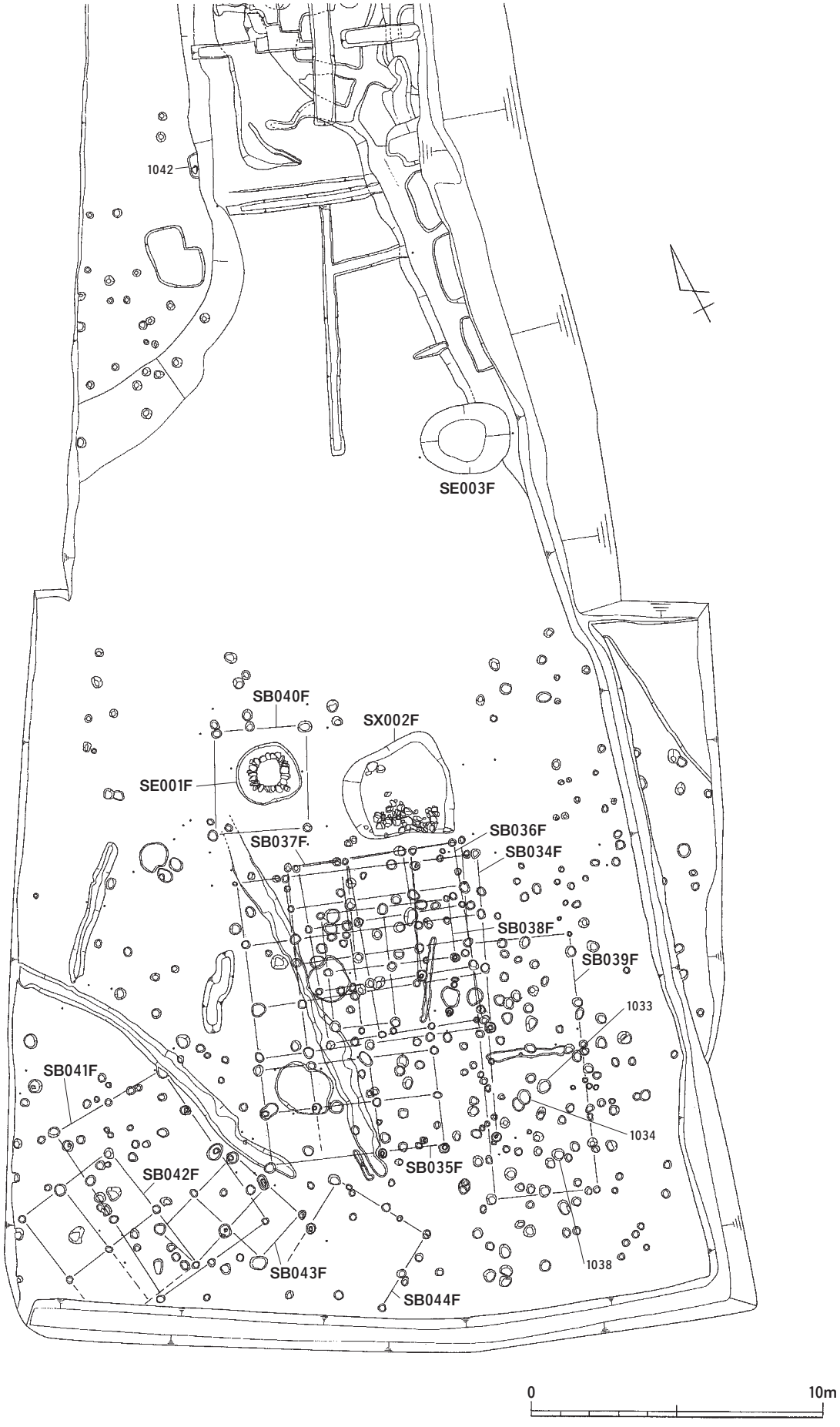
包含層



土器6　弥生土器(697～718)

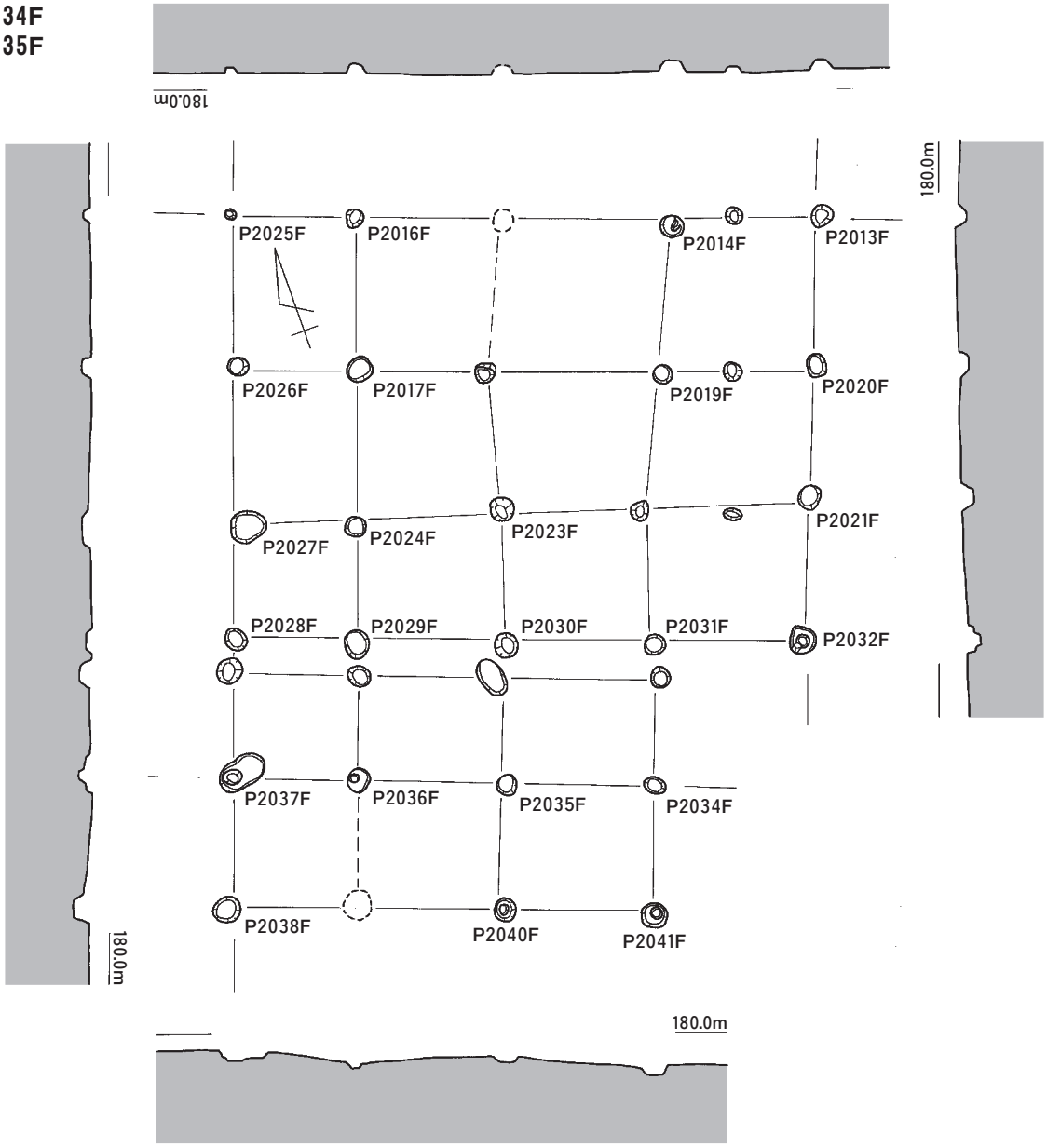
図版112　F地区　遺構

遺構配置図(1/300)

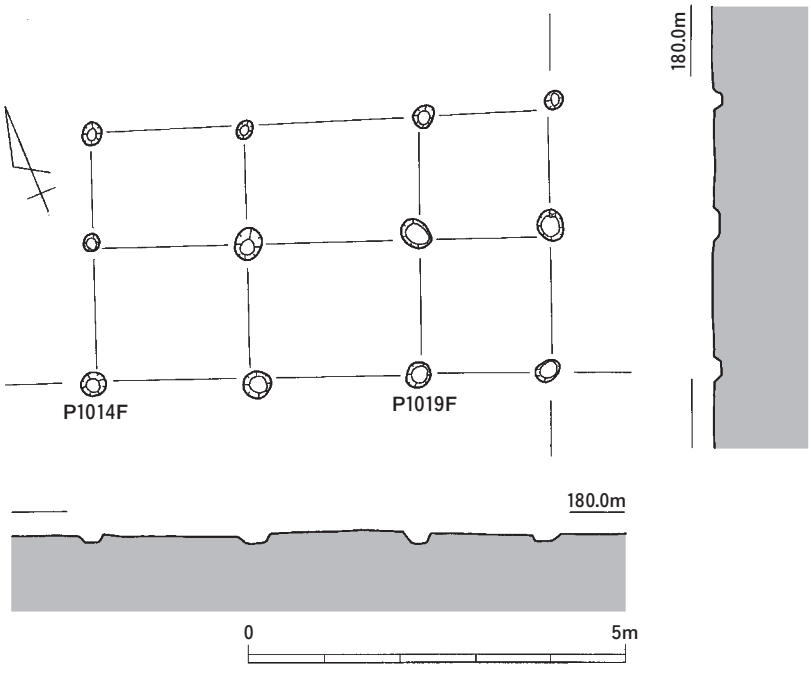

1042
SE003F
SB040F
SX002F
SE001F
SB037F
SB036F
SB034F
SB038F
SB039F
1033
SB041F
1034
SB035F
SB042F
SB043F
1038
SB044F
0
10m

遺構配置図(1/200)

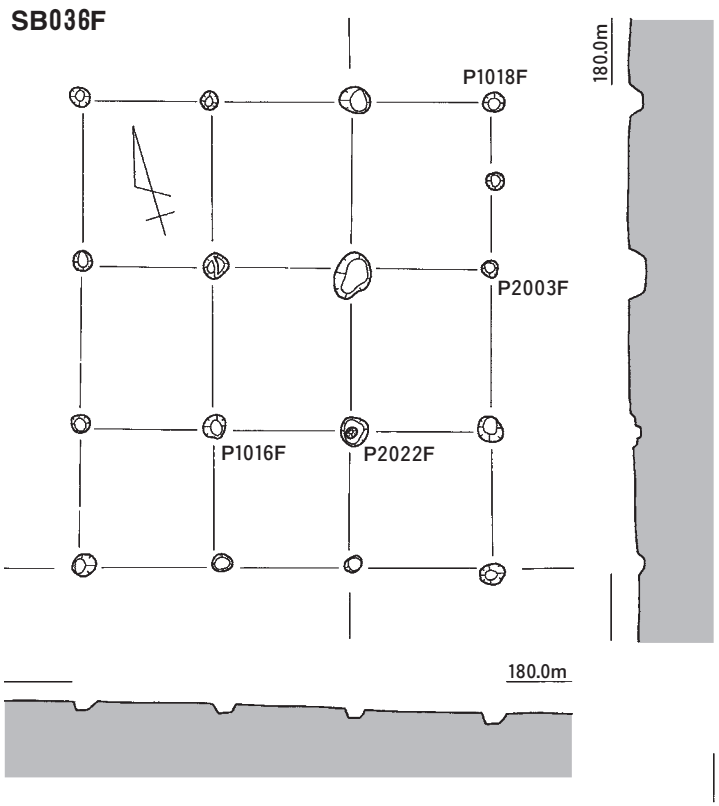
SB034F
SB035F

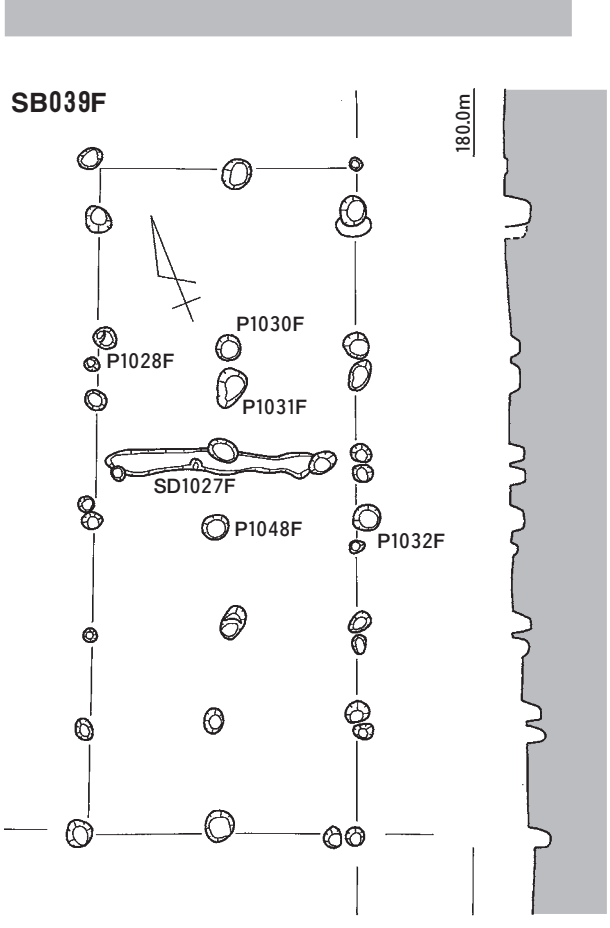


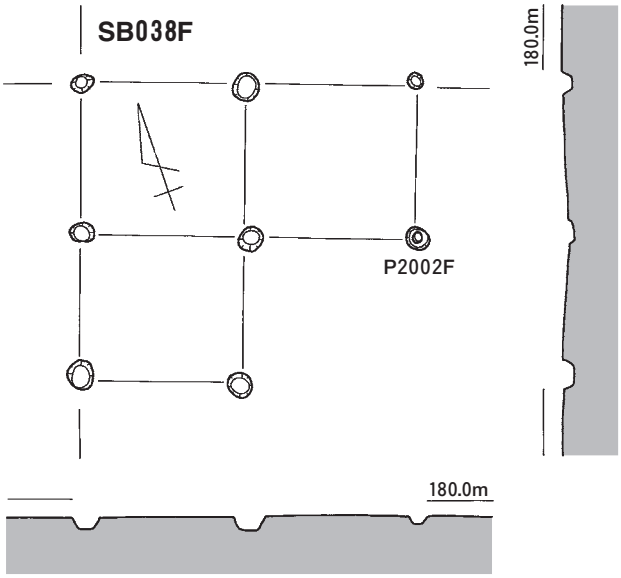
SB037F

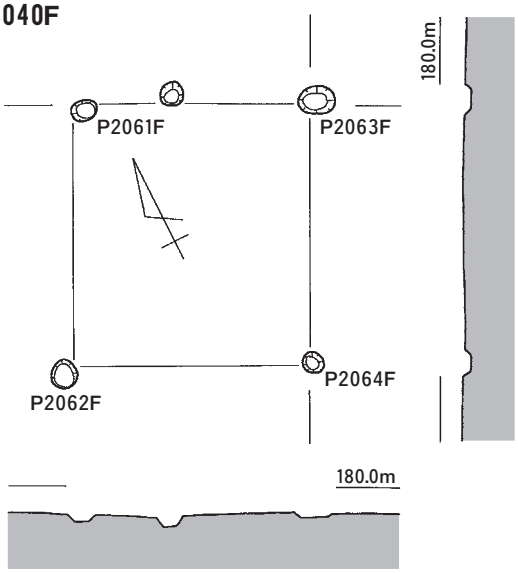


掘立柱建物SB034F・SB035F(1/100)　　掘立柱建物SB037F(1/100)

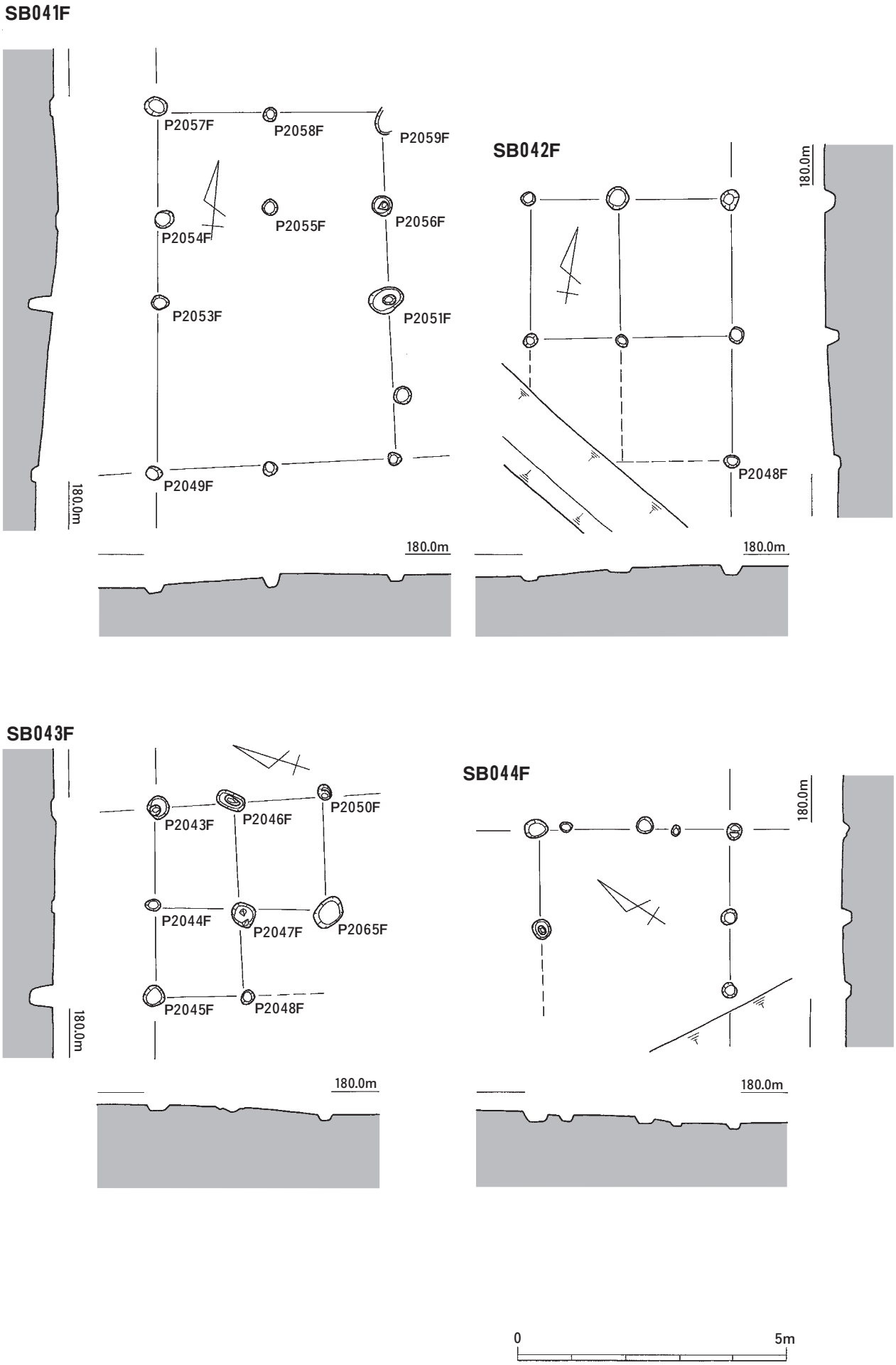




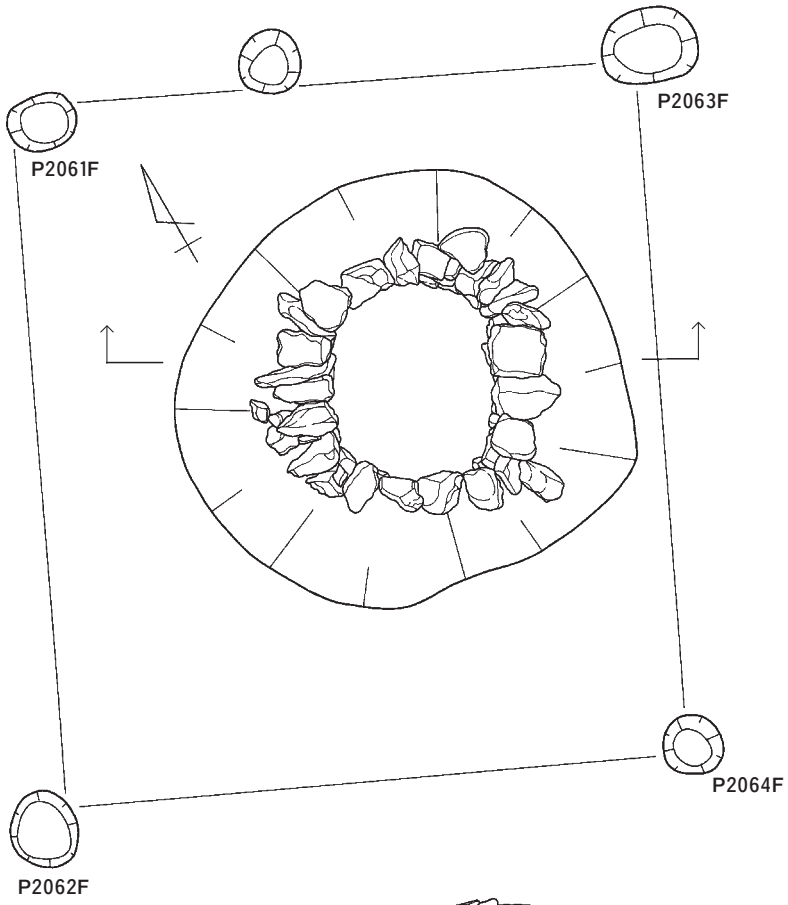


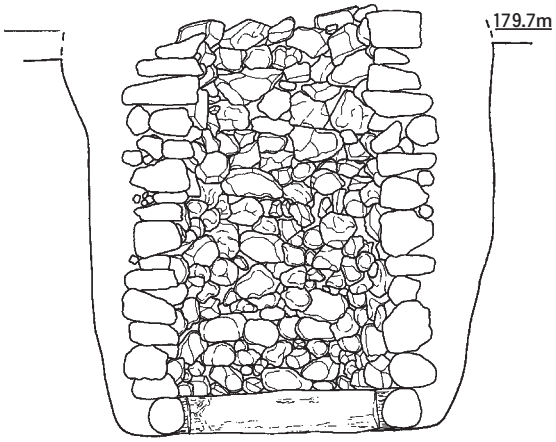


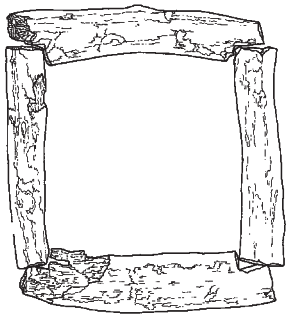
掘立柱建物SB036F(1/100)　掘立柱建物SB038F(1/100)
掘立柱建物SB039F(1/100)　掘立柱建物SB040F(1/100)



掘立柱建物SB041F(1/100)　掘立柱建物SB042F(1/100)
掘立柱建物SB043F(1/100)　掘立柱建物SB044F(1/100)



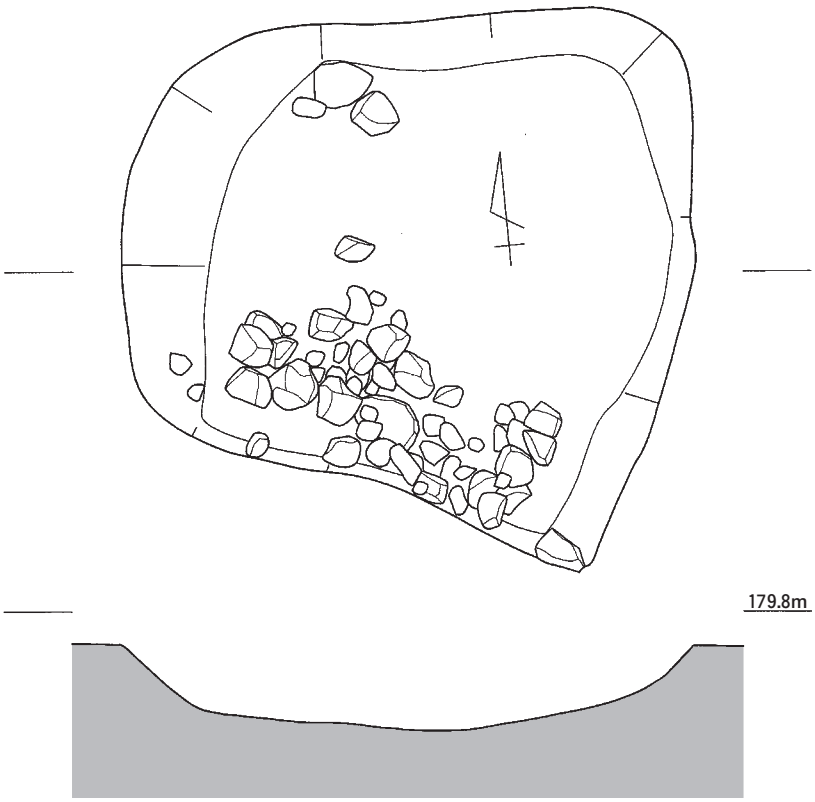




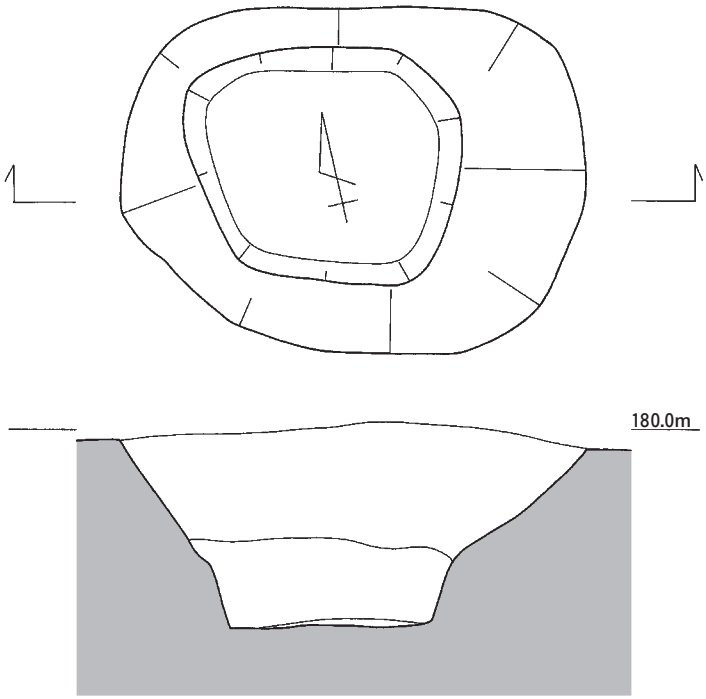
井戸SE001F(1/40)

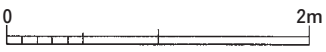
図版118 F地区 遺構

SX002F



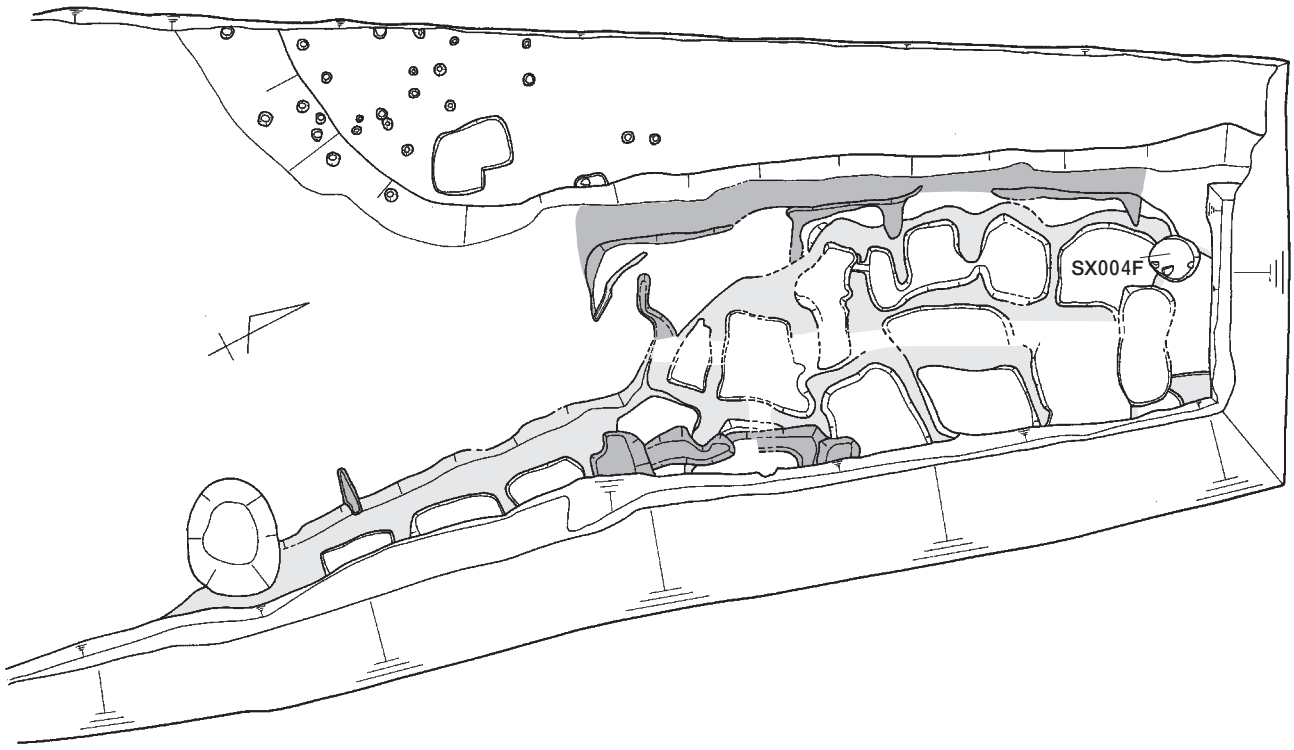
SE003F



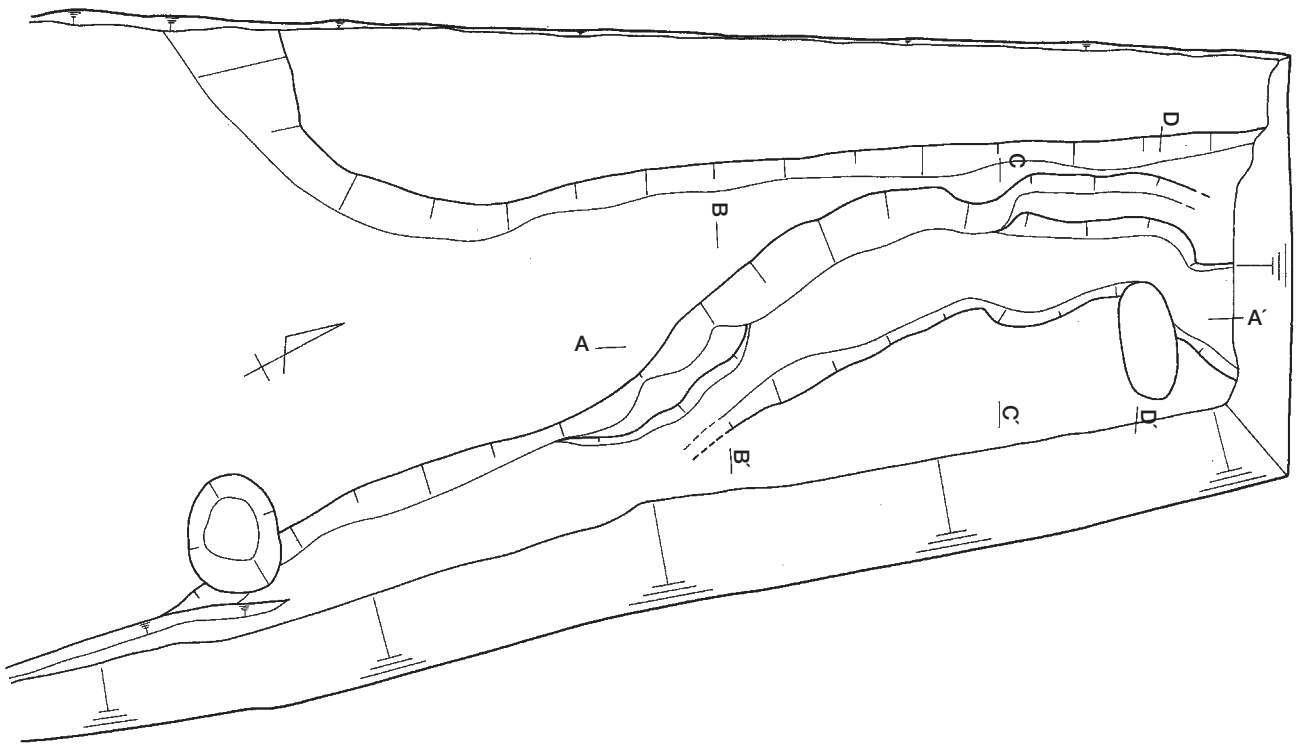


井戸SX002F(1/50)　井戸SE003F(1/50)

水田



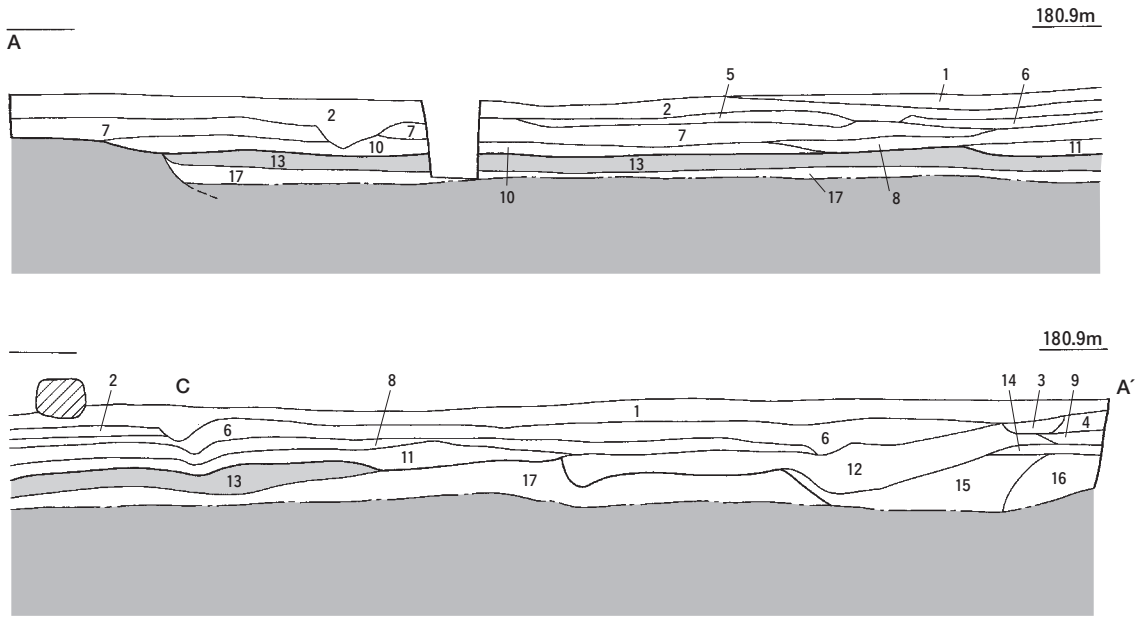
旧河道



0 10m

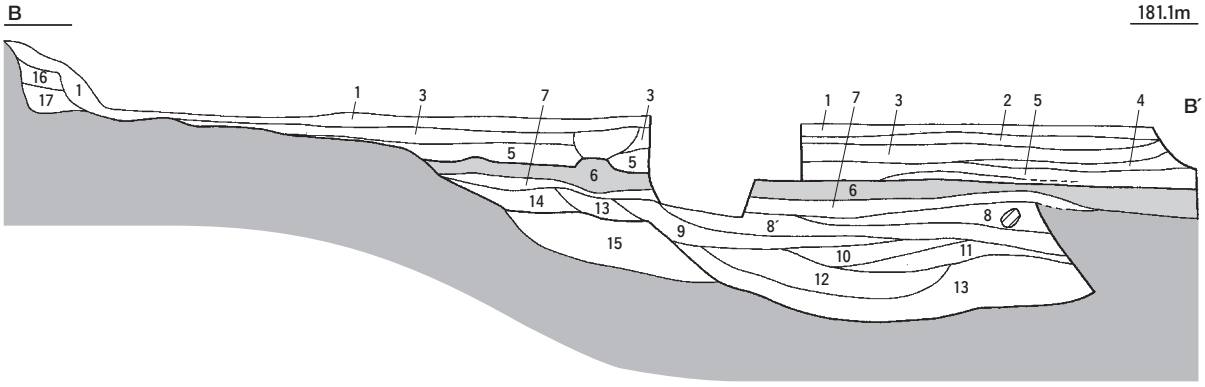
水田(1/200)　旧河道(1/200)

水田土層断面1



1 灰 砂質埴壌土 細砂 中礫若干混じる(1a層)
2 暗緑灰 重埴土 粘土 砂細 中礫少量含む(2a層)
3 オリーブ黒 軽埴土 細砂 中礫少量混じる
4 オリーブ褐 砂質 粗砂 中礫多量に混じる
5 オリーブ黒 重埴土 粘土 中礫(2b層)
6 暗緑灰 軽埴土 シルト 中礫(2b層)
7 オリーブ灰 砂質植土 シルト～細砂 中礫少量含む(2b層)
8 オリーブ黒 重埴土 シルト～極細砂 中礫混じる(3a層)
9 オリーブ黒 重埴土 シルト～細砂 中礫若干混じる(3a層)
10 灰オリーブ 軽埴土 シルト～細砂 中礫多量に含む(3b層)
11 暗緑灰 軽埴土 粗砂 砂細 中礫少量含む(3b層)
12 オリーブ黒 重埴土 粗砂 大礫少量混じる(3b層)
13 オリーブ黒 砂質埴土 砂細 中礫少量含む(4a層)
14 緑灰 重埴土 シルト～極細砂 中礫若干混じる[水田土壌化]
15 暗緑灰 重埴土 シルト 粘土
16 オリーブ黒 礫層 粗砂 中礫(b層)
17 暗緑灰 軽埴土 シルト～細砂 中礫

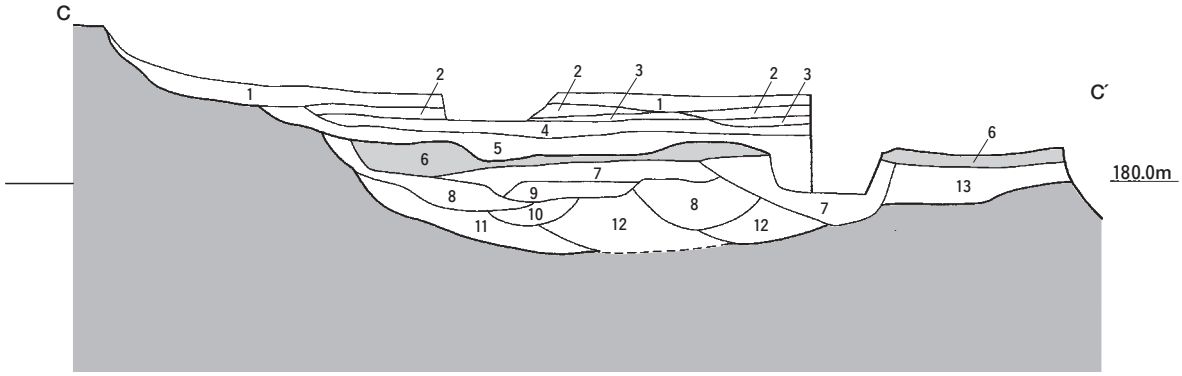
水田・旧河道土層断面2



1 暗緑灰 重埴土 粘土 砂細 中礫少量含む(1a層)
2 オリーブ黒 重埴土 粘土 中礫(1b層)
3 オリーブ灰 砂質植土 シルト～細砂 中礫少量含む(2a層)
4 オリーブ灰 砂質植土 シルト～細砂 中礫少量含む(2b層)
5 灰オリーブ 軽埴土 シルト～細砂 中礫多量に含む(3b層)
6 灰オリーブ シルト質埴壌土 シルト質極細砂 中礫少量含む(4a層)
7 灰オリーブ 砂壌土 細砂 砂礫～中礫含む(a)[土壌化](4b)
8 灰 軽埴土 シルト～極細砂 中礫含む(上段) 中礫以下の礫若干含む(下段)(a層)
9 オリーブ黒 重埴土 シルト～極細砂 粘着力強し 中礫若干含(a層)
10 暗オリーブ 砂質埴壌土 細砂 中礫多く含む(b層)
11 オリーブ黒 砂質埴土 シルト～細砂 細礫～中礫含む(a層)
12 オリーブ褐 軽埴土 シルト～細砂 中礫若干含む(b層)
13 暗オリーブ 軽埴土 シルト 中礫若干含む(b層)
14 オリーブ褐 軽埴土 シルト～極細砂 中礫若干含む しまりよい
15 暗オリーブ 軽埴土 シルト 中礫若干含む しまりよい(a層)
16 褐灰 砂質埴壌土 粗砂
17 褐灰 砂質埴壌土 中礫多量

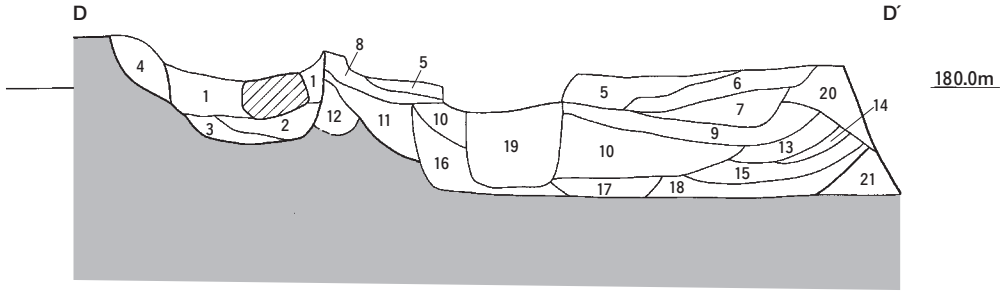
水田土層断面1 (1/50)　　水田・旧河道土層断面2 (1/50)

水田・旧河道土層断面 3



1 灰 砂質埴壌土 細砂 中礫若干混じる(1a層)
2 暗緑灰 重埴土 粘土 砂細 中礫少量含む(2a層)
3 暗緑灰 軽埴土 シルト 中礫(b層)
4 オリーブ黒 重埴土 シルト～極細砂 中礫混じる(3a層)
5 暗緑灰 軽埴土 粗砂 砂細 中礫少量含む(3b層)
6 灰オリーブ シルト質埴壌土 シルト質極細砂 中礫少量含む(4a層)
7 オリーブ灰 シルト質埴壌土 シルト質極細砂 中礫含む 緑色の砂岩礫を含む(a層)
8 灰オリーブ 砂壌土(砂礫に近い) 細砂 中礫多量に含む しまり悪い(b層)
9 オリーブ灰 砂質埴壌土 細砂～粗砂 中礫多量に含む(b層)
10 灰 埴壌土 シルト～細砂 中礫含む しまりよい(b層)
11 オリーブ灰 砂礫層 細砂 中礫多量に含む(b層)
12 灰オリーブ 礫層 細礫に若干粘土が混じる 大礫少量含む(b層)
13 褐 砂埴土 細砂 中礫多量に含む (鉄多し)(b層)

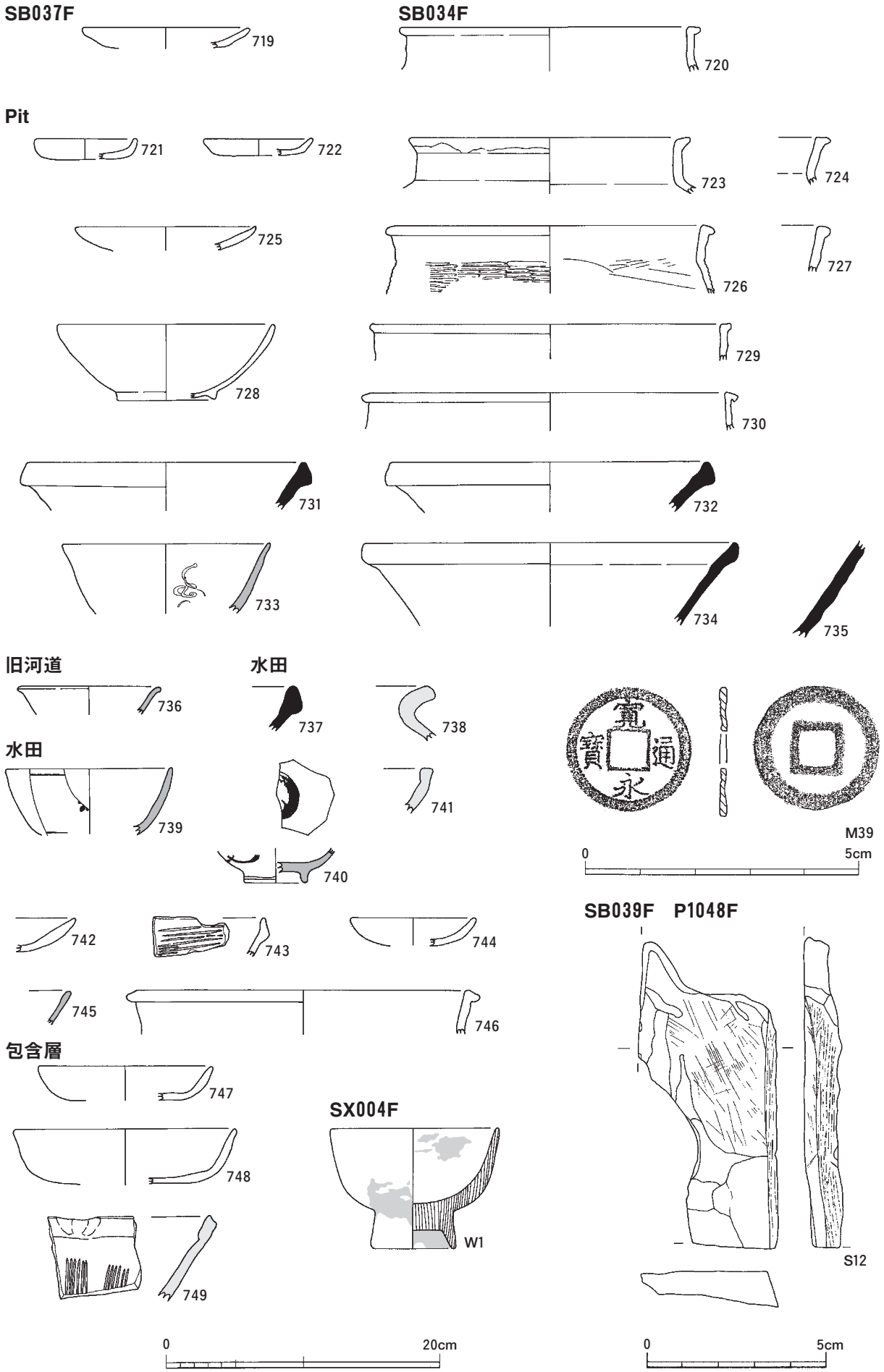
旧河道土層断面 4



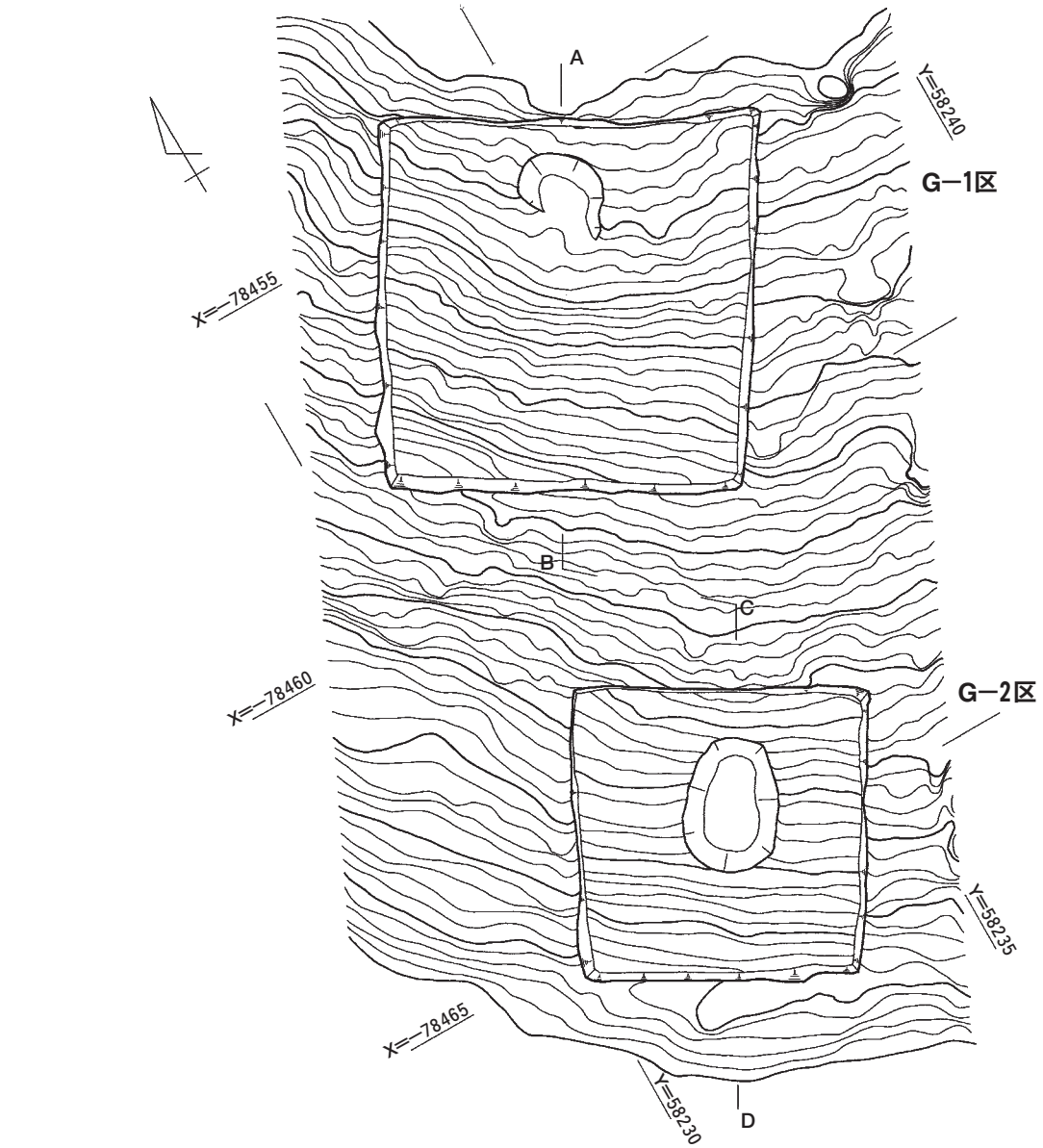
1 オリーブ黒 砂質埴土 シルト～極細砂 中礫若干混じる
2 オリーブ黒 重埴土 シルト質極細砂 中礫若干混じる 有機物が堆積
3 オリーブ黒 重埴土 シルト質細砂 中礫含む
4 オリーブ灰 砂土 細粒砂 中礫含む
5 灰オリーブ 砂壌土 細砂～粗砂 中礫若干含む(流水含む)
6 オリーブ黒 砂質埴壌土 細砂 中礫多量に含む しまりよい
7 オリーブ黒 埴壌土 細砂 中礫やや多く含む
8 暗緑灰 軽埴土 シルト～極細砂 中礫若干含む
9 暗オリーブ灰 粘土 シルト 砂礫のようなザラつきは感じられない
10 暗緑灰 粘土 シルト質極細砂 中礫若干含む
11 暗緑灰 重埴土 シルト質極細砂 中礫少量含む
12 オリーブ黒 砂礫層 粗砂 中礫～大礫多量に含む[流路][土壌化]
13 オリーブ黒 砂質壌土 細砂～粗砂 中礫含む
14 灰 砂土 細砂～粗砂 中礫含む しまり悪い(b層)
15 暗緑灰 軽埴土 シルト～細砂 中礫少量含む
16 暗緑灰 砂礫層 細砂 中礫多量に含む
17 暗緑灰 重埴土 シルト質極細砂 中礫～大礫含む
18 暗オリーブ灰 軽埴土 シルト～細砂中礫 ブロック状に所々見られる
19 灰 シルト質埴土 シルト～細砂 中礫多量に含む 黄色の砂岩礫がブロックであり
20 暗オリーブ 壌質砂土 細砂 中礫多量に含む しまり悪い
21 暗オリーブ 砂礫 細砂 中礫含む(粘性無し)

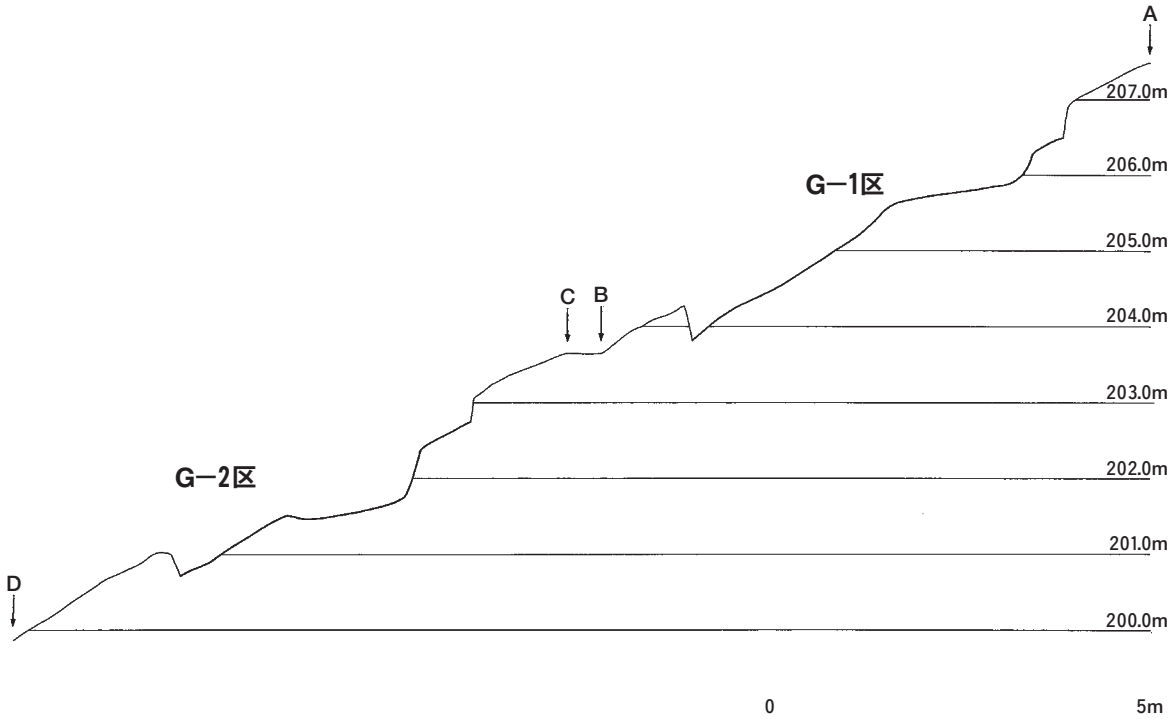
凡例
1a層　近世の水田土壌
2a層　中世～近世の間の水田土壌
3a層　中世～近世の間の水田土壌
4a層　中世の水田土壌(調査対象水田)
b 層　洪水砂層

水田・旧河道土層断面 3 (1/50)　　旧河道土層断面 4 (1/50)

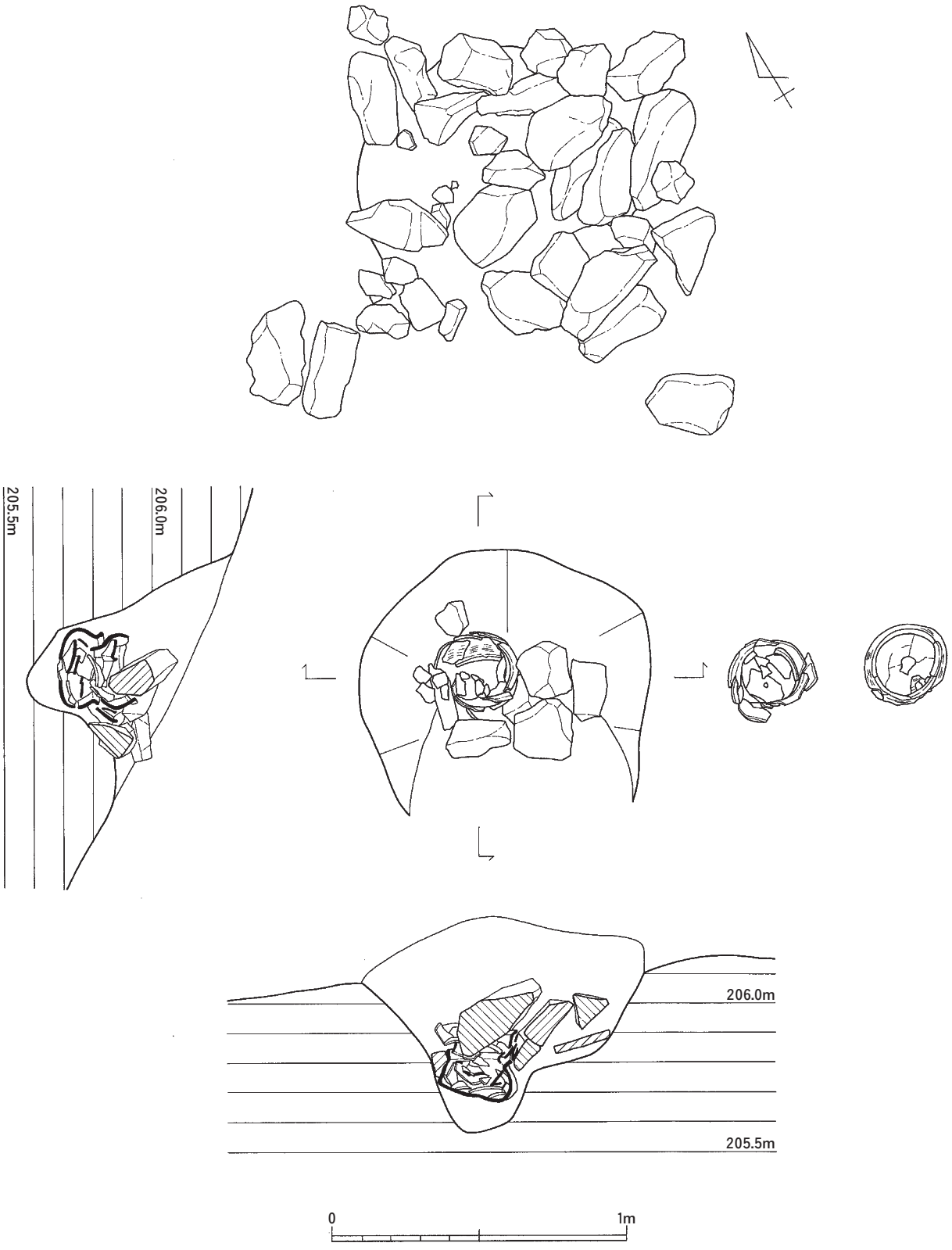


土器・木器・石器・金属器(719～749・W1・S12・M39)

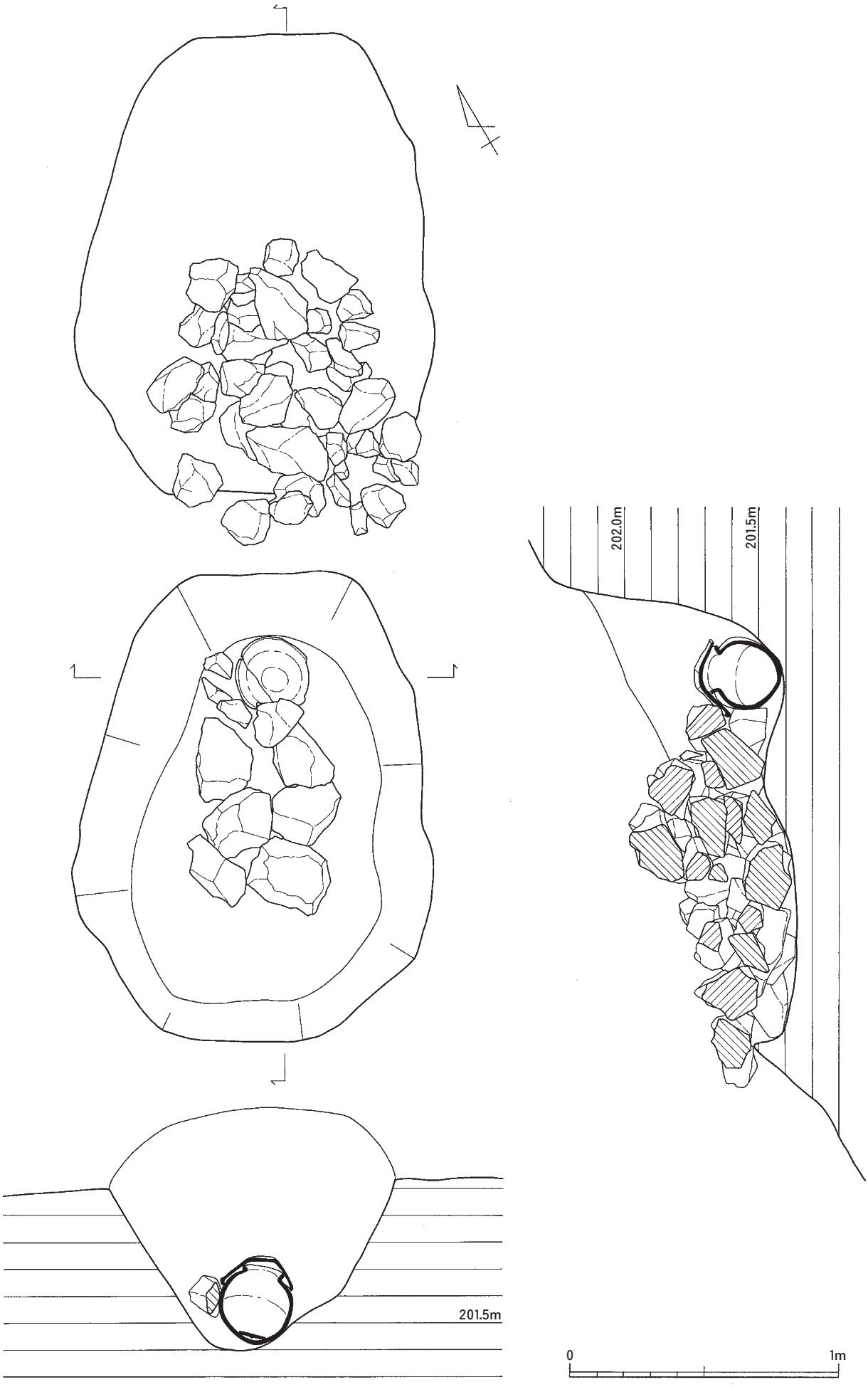

A
Y=58240
G−1区
X=−78455
B
C
X=−78460
G−2区
Y=58235
X=−78465
Y=58230
D


A
207.0m
206.0m
G−1区
205.0m
C
B
204.0m
203.0m
G−2区
202.0m
201.0m
D
200.0m
0
5m

調査区位置図(1/100)

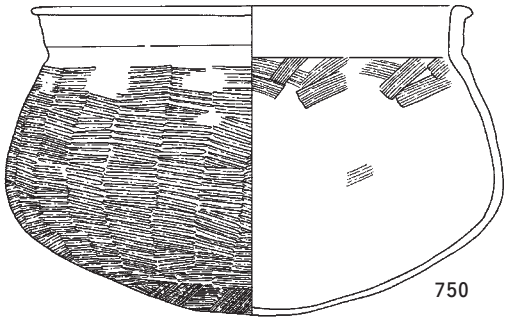


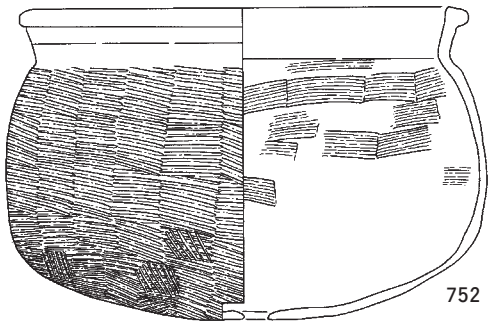
G－1区　墓ST001G(1/20)

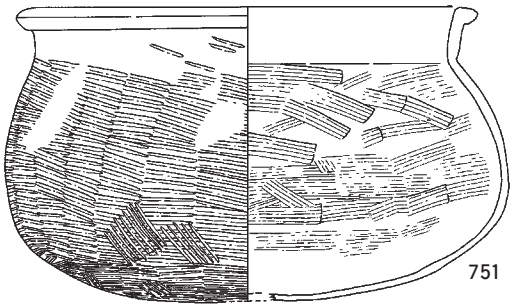


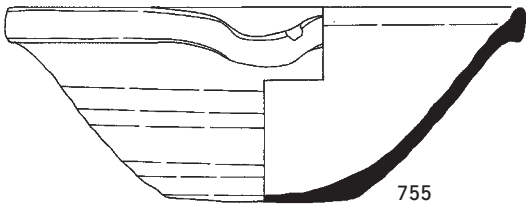
G－2区　経塚SX001G(1/20)

墓ST001G

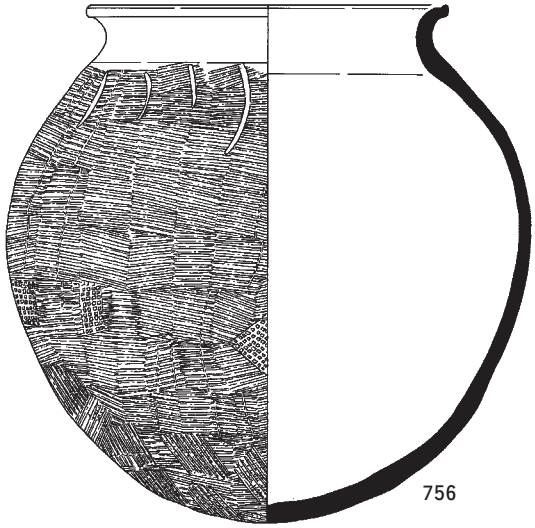


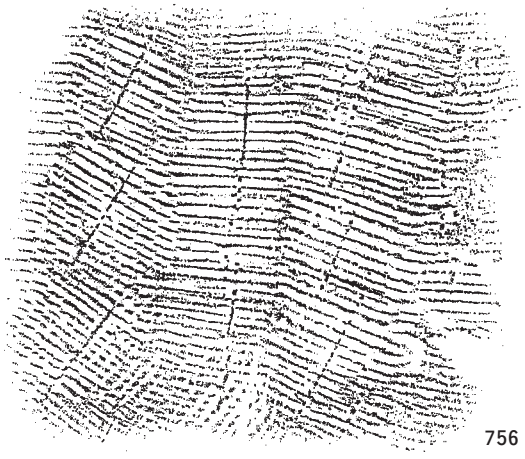


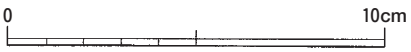




経塚SX001G







土器(750～756)

写真図版

1 田ノ口遺跡 遠景（南東から）

2 田ノ口遺跡 遠景（南西から）

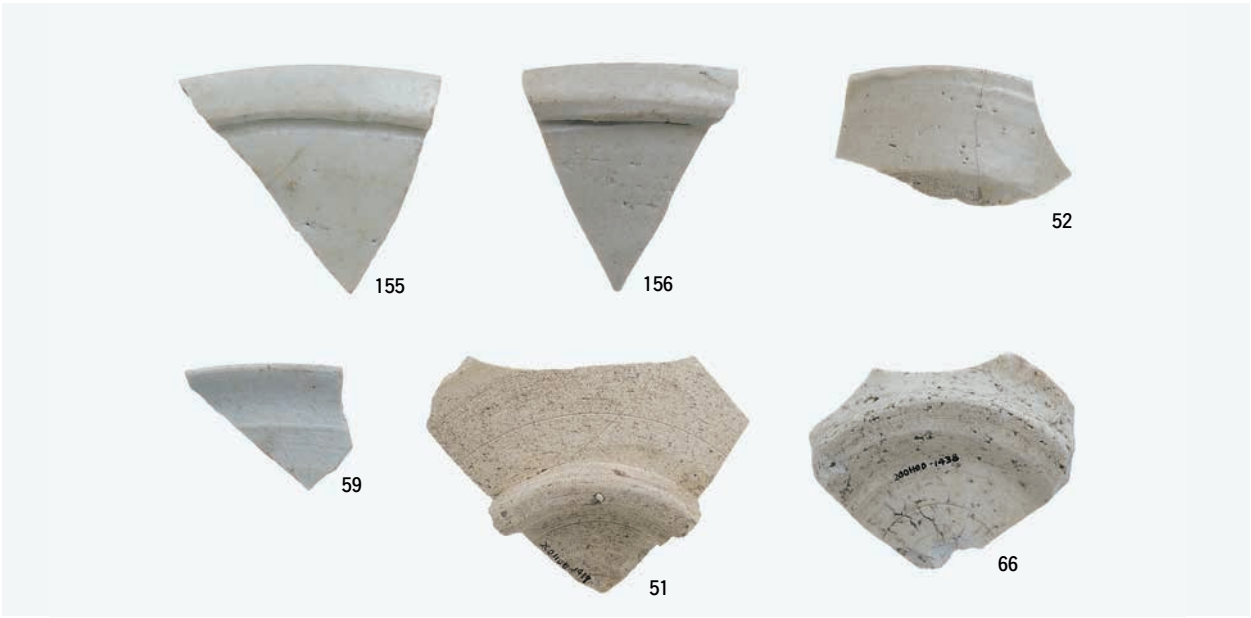
写真図版2　A・B・C地区　遺跡

3 田ノ口遺跡 近景（南東から）

4 A・B・C地区全景（北西から）

5　A地区全景（上が北東）

6　B・C地区全景（上が北東）

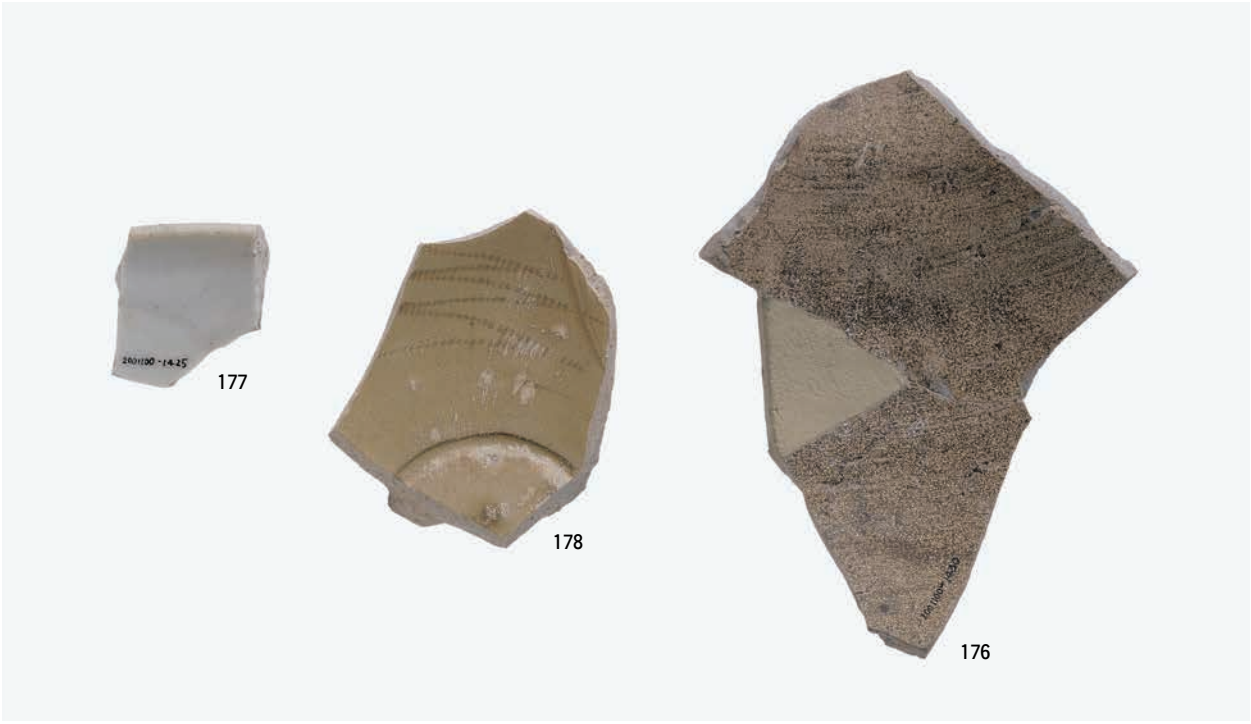

155
156
52
59
51
66

274
273
276
275
272
71
279

277
269
270
271
278
287

土器（白磁）

268



177

178

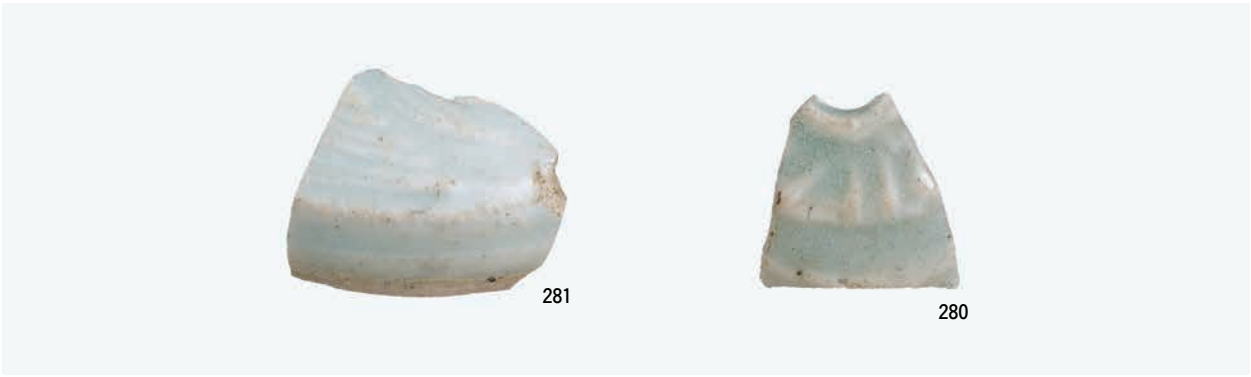
176

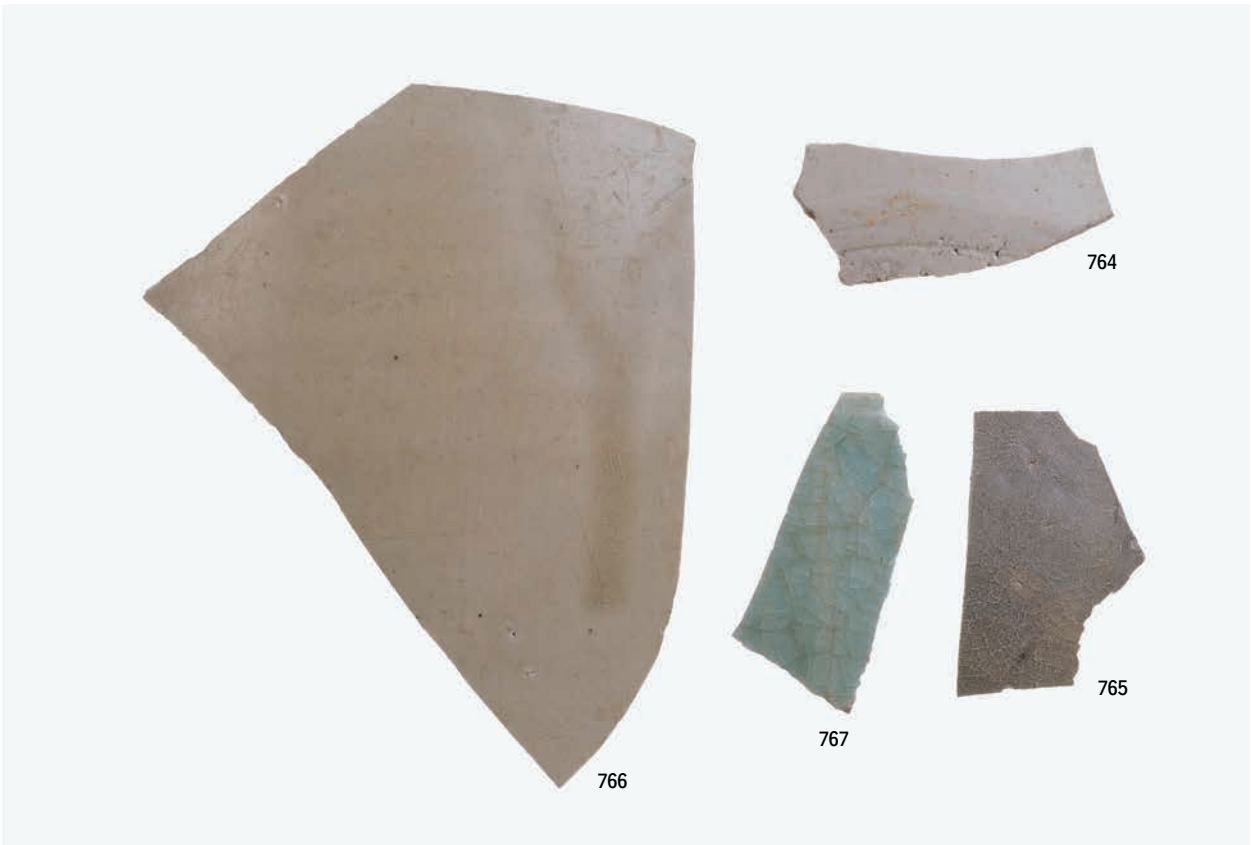
177

178

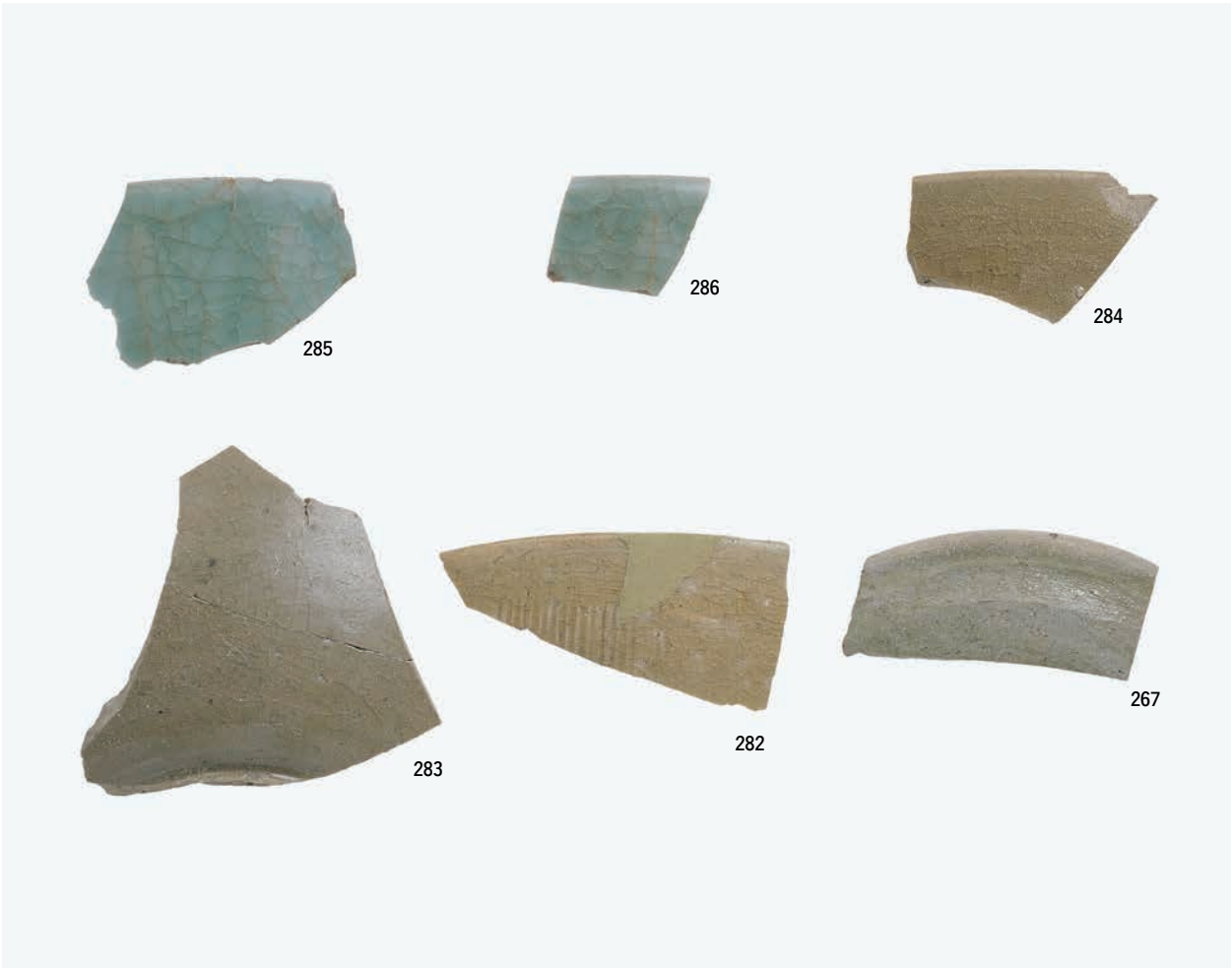
176

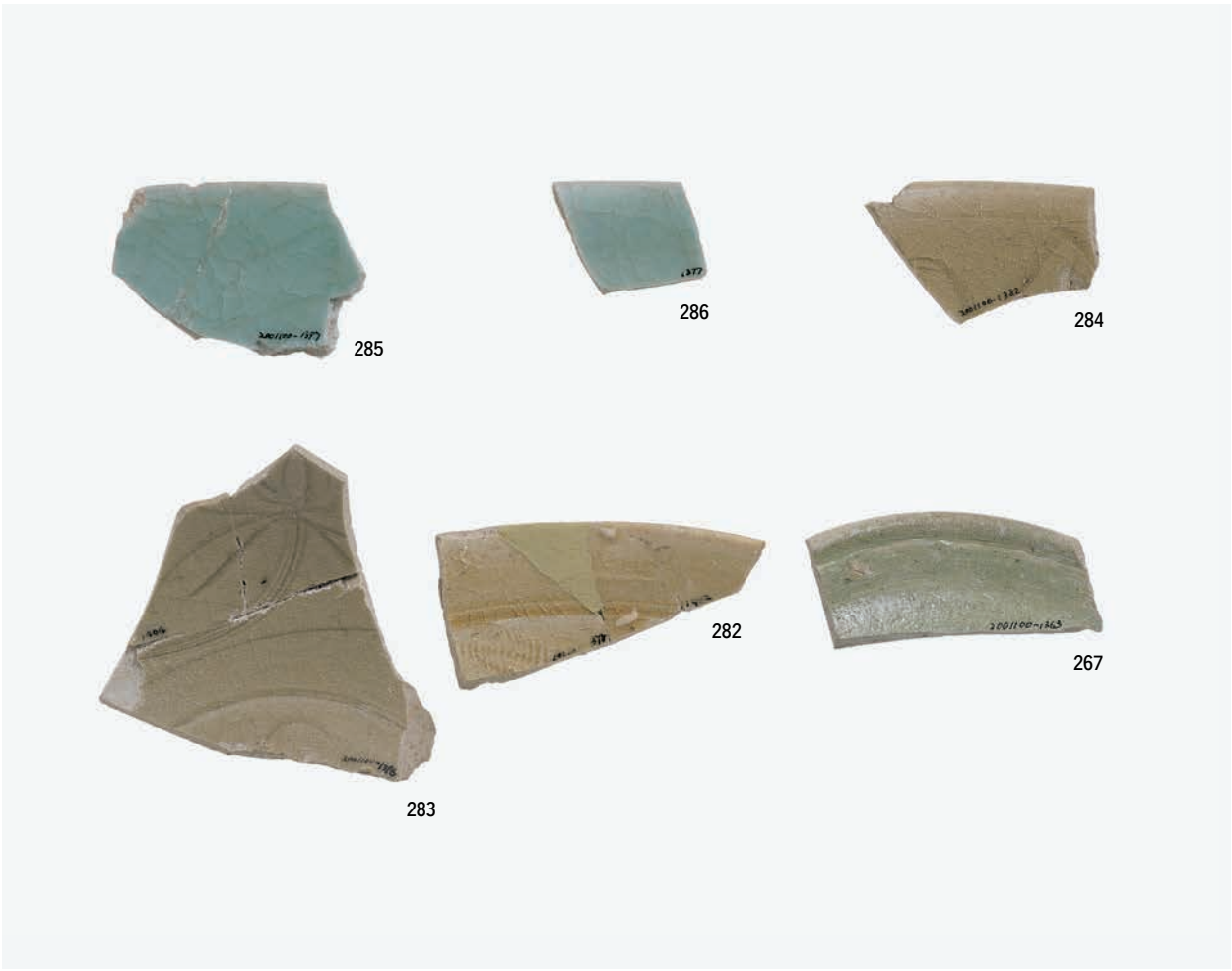
土器（白磁・青磁・施釉陶器）





土器（白磁・青白磁・青磁）





土器（青磁・緑釉陶器）

写真図版8　D・C・B・A地区　遺構

7 D・A・B・C地区全景（南東から）

8 D地区全景（西から）

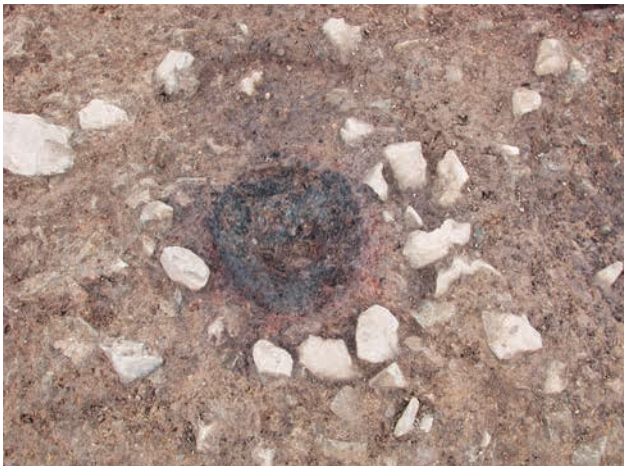
写真図版9　D地区　遺構

9 全景（上が北西）

10 鍛冶炉群SF002D（北西から）

11 鍛冶炉群SF002D断面（北西から）

12 柱穴P0562D（南西から）



13 鍛冶炉SF002DSF903D（南西から）

14 柱穴P0562D断面（南西から）

15 鍛冶炉SF002DSF903D断面（南西から）

16 鍛冶炉SF002DSF905D断面（南東から）

17 鍛冶炉SF589D断面（南東から）

18 焼土SF266D（南から）

19 焼土SF001DSF187D（南西から）

20 木棺墓ST215D(西から)

木棺墓ST215D出土遺物

359

347

359

347

529

530

531

532

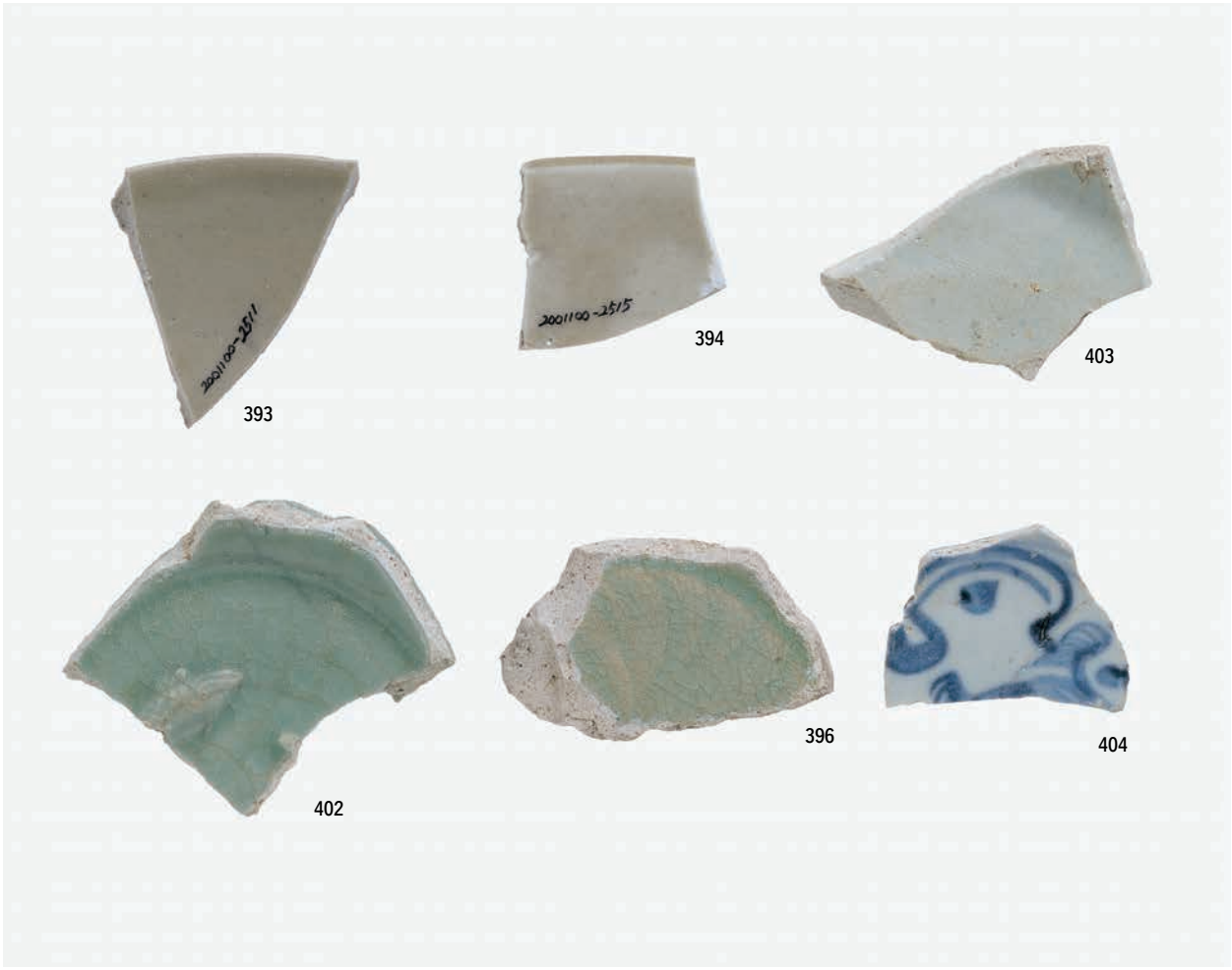
534

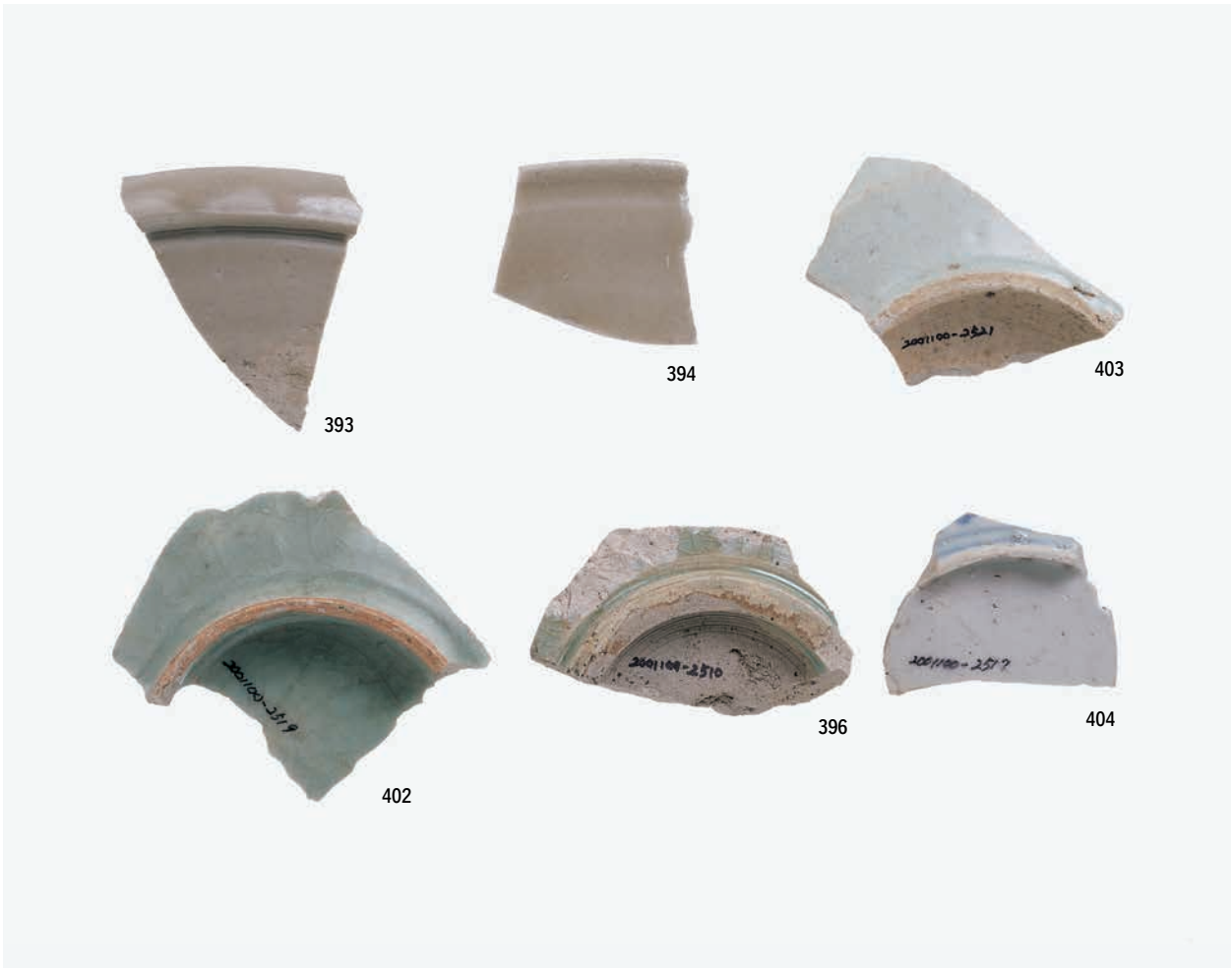
533

535

土器（白磁・青花）

写真図版14　D地区　遺物





土器（白磁・青磁・青花）

526

528

524

526

528

524

523

525

土器（施釉陶器）

土器（青磁）

663

541

540

542

545

544

543

663

541

540

542

545

544

543

土器（青花）

21 田ノ口遺跡全景（南西から）

22 E・F地区全景（西から）

23　E地区全景（西から）

24　E地区全景（南西から）

写真図版20　E地区　遺構

25　E地区全景（上が北東）

26 焼土SF001E検出状況
（北から）

27 焼土SF001E（南から）

28 焼土SF001E断割り
（北西から）

29 焼土SF001E埋土土層断面（南から）

30 焼土SF001E（東から）

31 焼土SF002E（北東から）

32 焼土SF003E（北から）

33 焼土SF002E断割り（南西から）

34 焼土SF003E断割り（南西から）

35 土坑SK006E土層断面（東から）

36 土坑SK082E土層断面（南東から）

658

619

615

614

616

620

土器（白磁・陶器・青花）

37　F地区全景（西から）

38　F地区全景（上が南東）

39 G地区遠景（南東から）

40 G地区全景（南西から）

41　G－1区　墓ST001G検出状況（南西から）
　　G－1区　墓ST001G出土土器

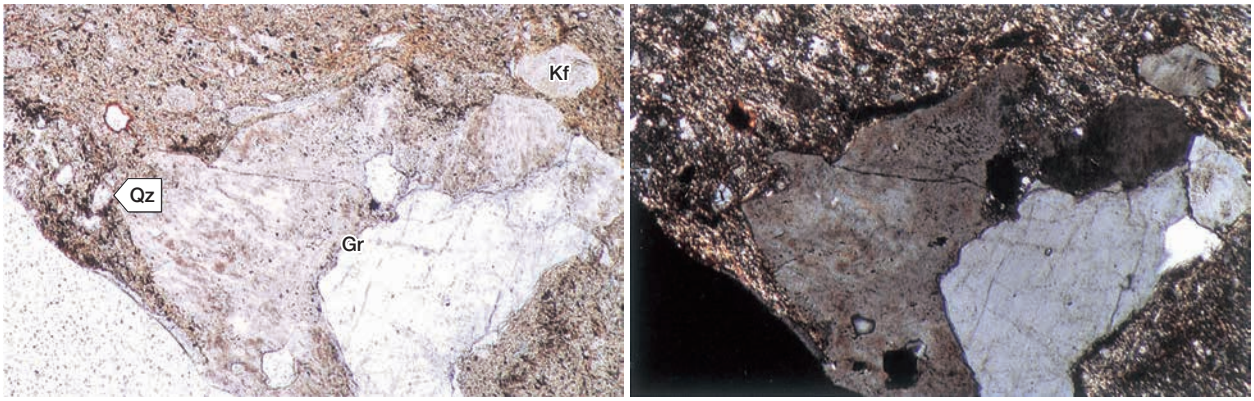
42　G－2区　経塚SX001G経筒検出状況（南西から）
　　G－2区　経塚SX001G出土土器・鏡

755
756

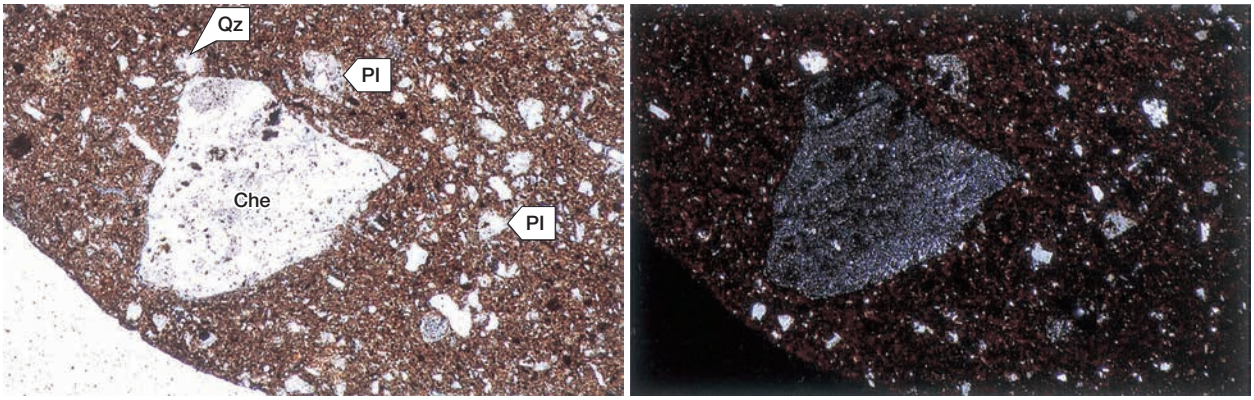
M40

M40

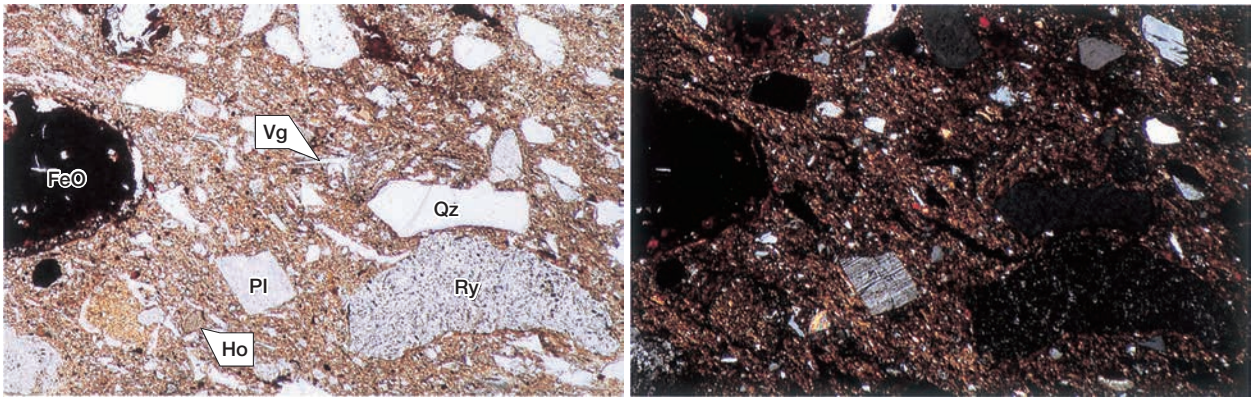
G－2区　経塚SX001G出土土器・鏡



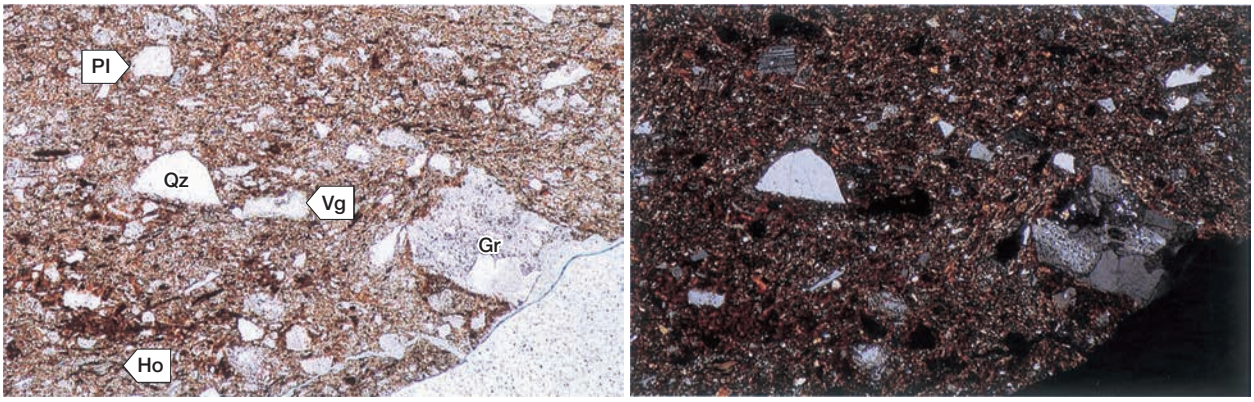
1. 資料No.1（報告No.102 土師器 皿 中世）



2. 資料No.2（報告No.108 土師器 皿 中世）



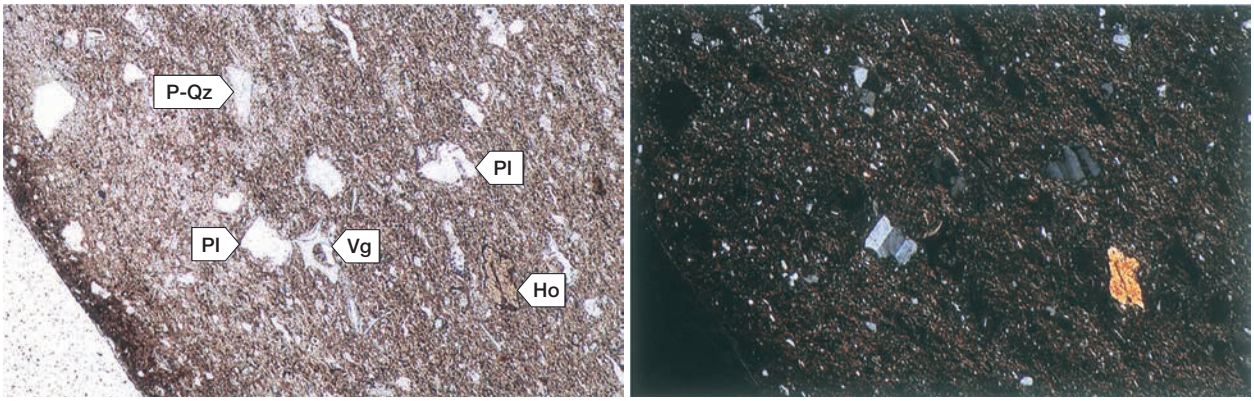
3. 資料No.3（報告No.120 土師器 鍋 中世）



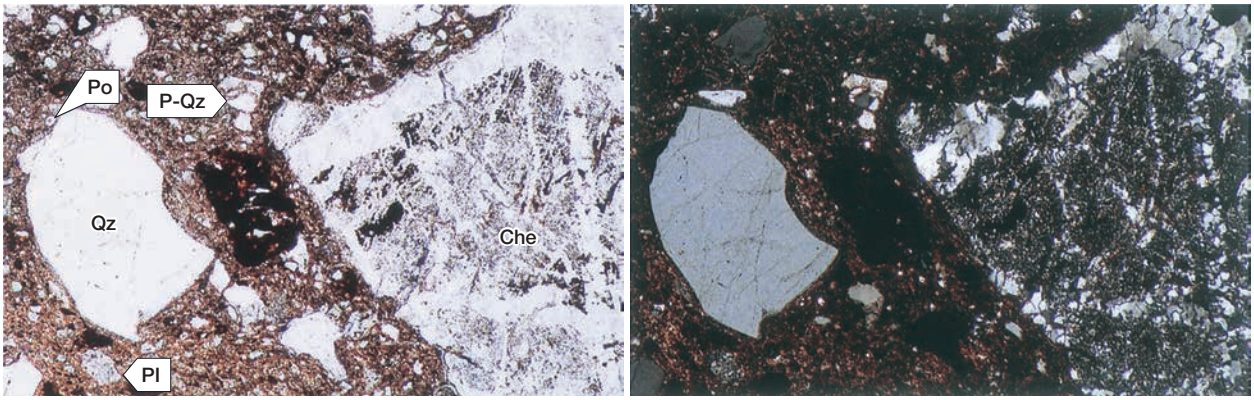
4. 資料No.4（報告No.179 土師器 皿 中世）

0. 5mm

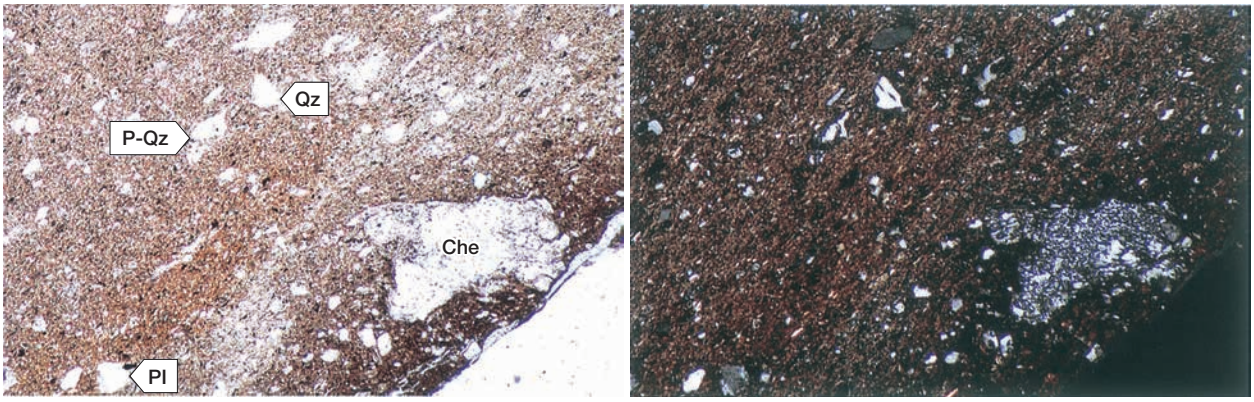
Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Che：チャート．Ry：流紋岩．
Gr：花崗岩．Vg：火山ガラス．FeO：酸化鉄結核．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



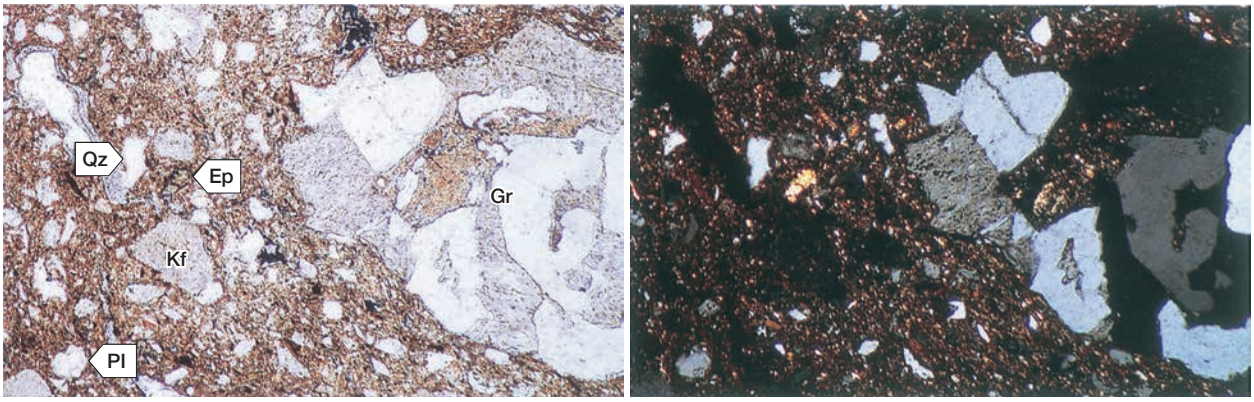
5. 資料No.5(報告No.188 瓦器 椀 中世)



6. 資料No.6(報告No.222 土師器 甕 中世)



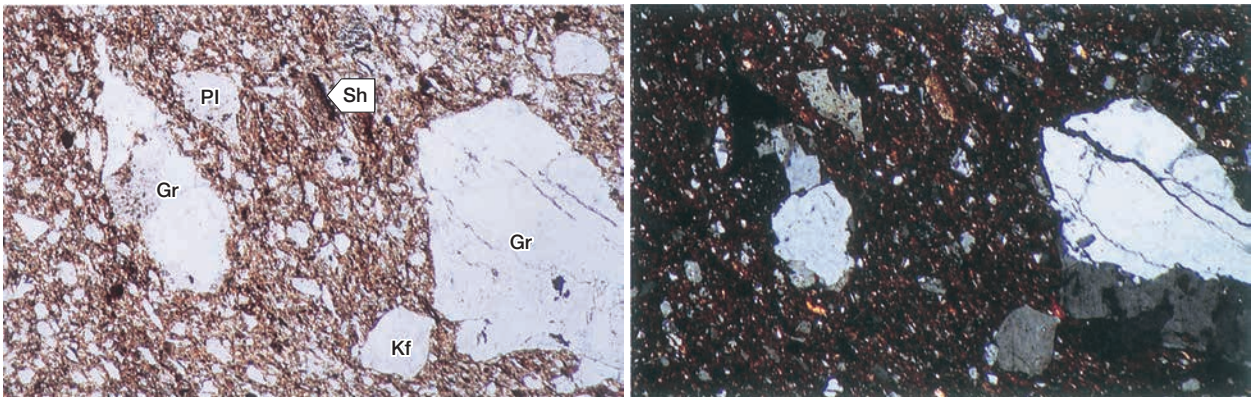
7. 資料No.7(報告No.233 瓦器 椀 中世)



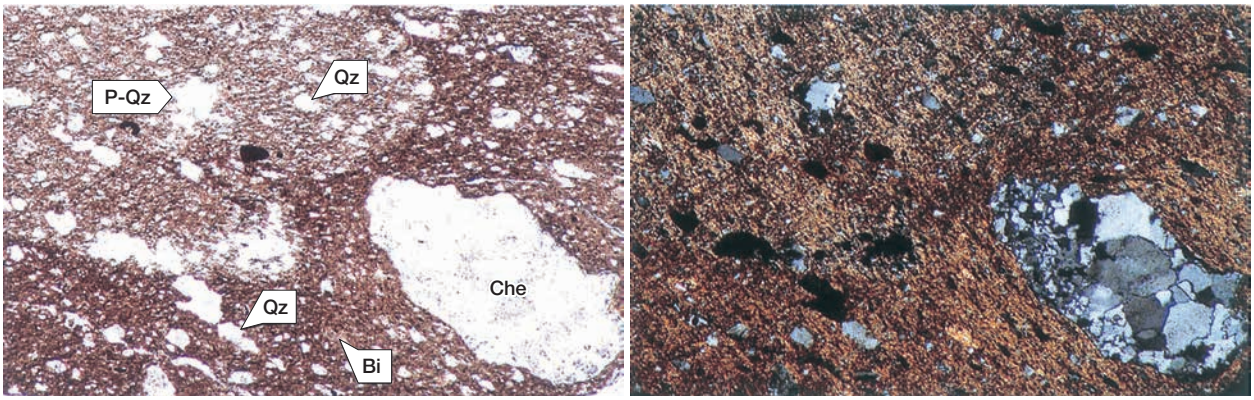
8. 資料No.8(報告No.288 土師器 甕 古墳)

0. 5mm

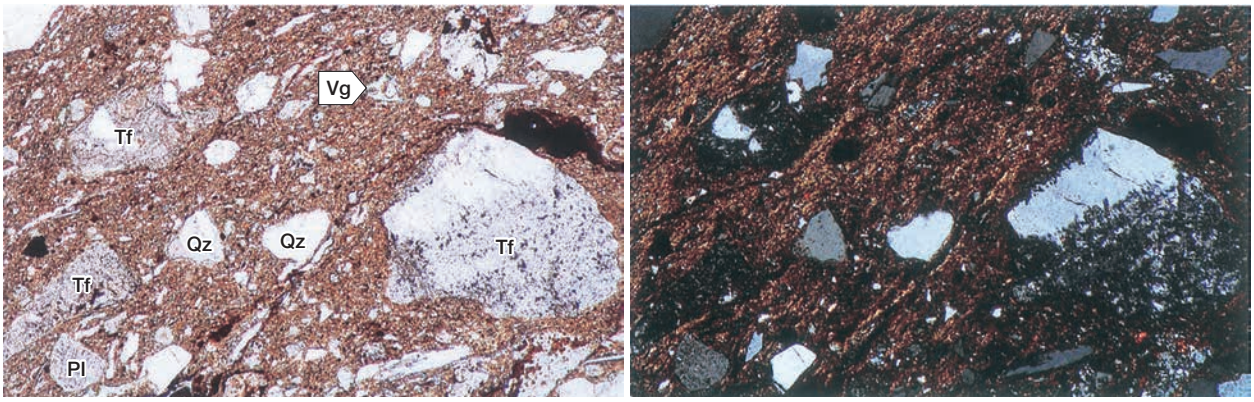
Qz：石英. Kf：カリ長石. Pl：斜長石. Ho：角閃石. Ep：緑レン石. Che：チャート.
P-Qz：多結晶石英. Gr：花崗岩. Vg：火山ガラス. Po：植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



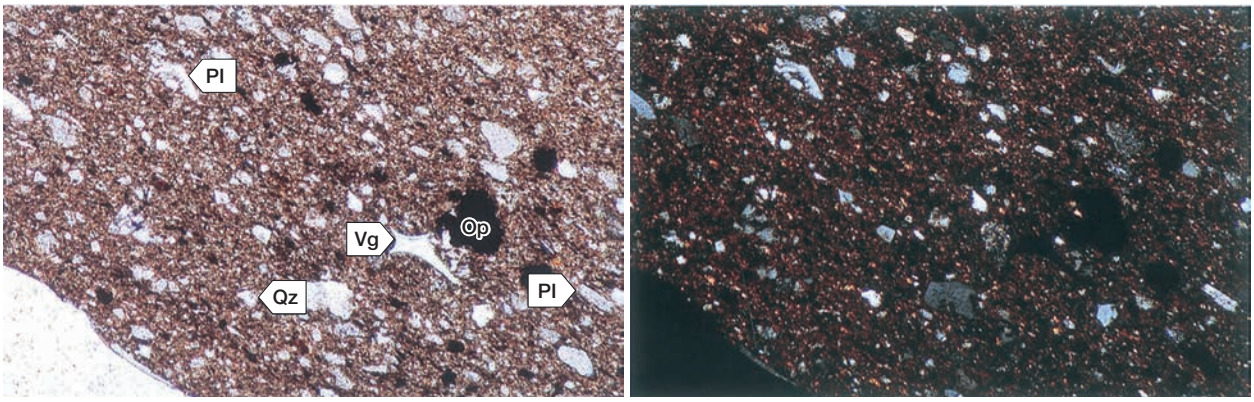
9. 資料No.9(報告No.303 土師器 皿 中世)



10. 資料No.10(報告No.318 黒色土器 椀 中世)



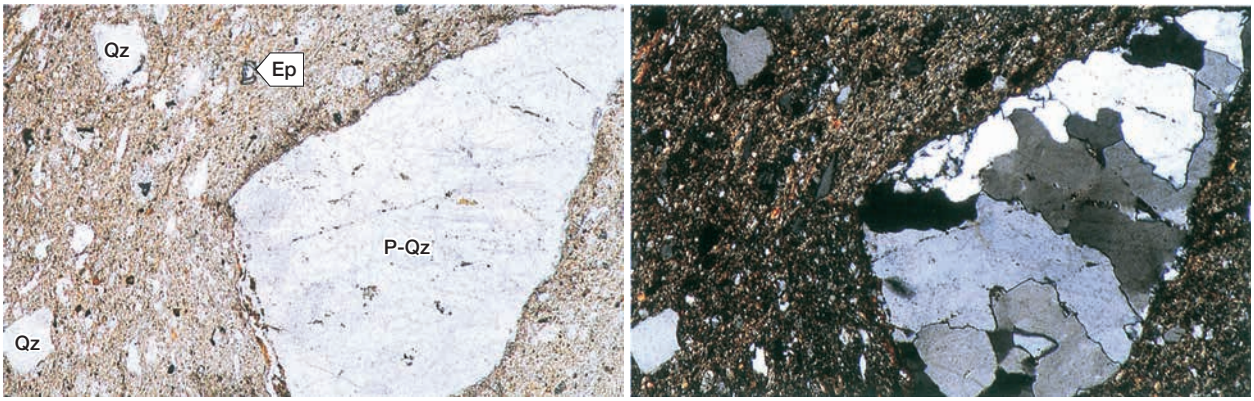
11. 資料No.11(報告No.323 土師器 鍋 中世)



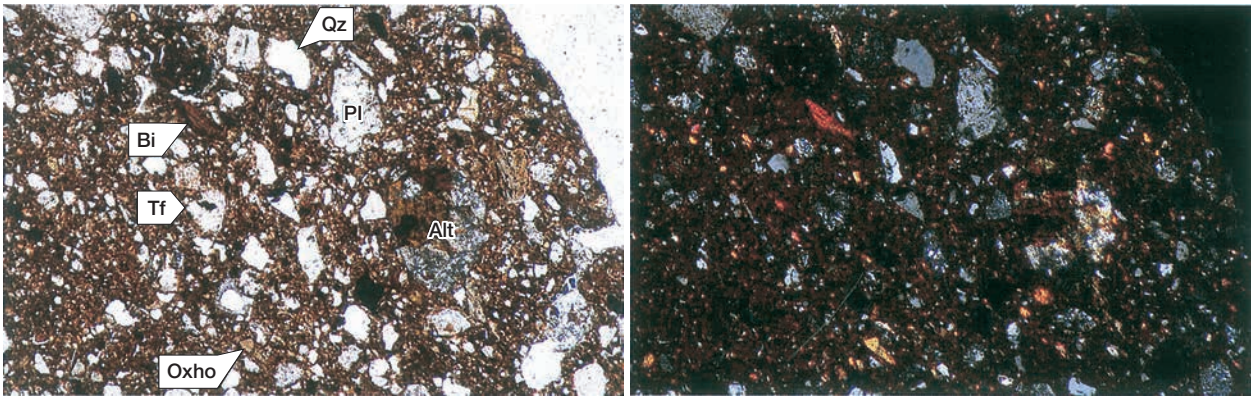
12. 資料No.12(報告No.332 土師器 皿 中世)

0. 5mm

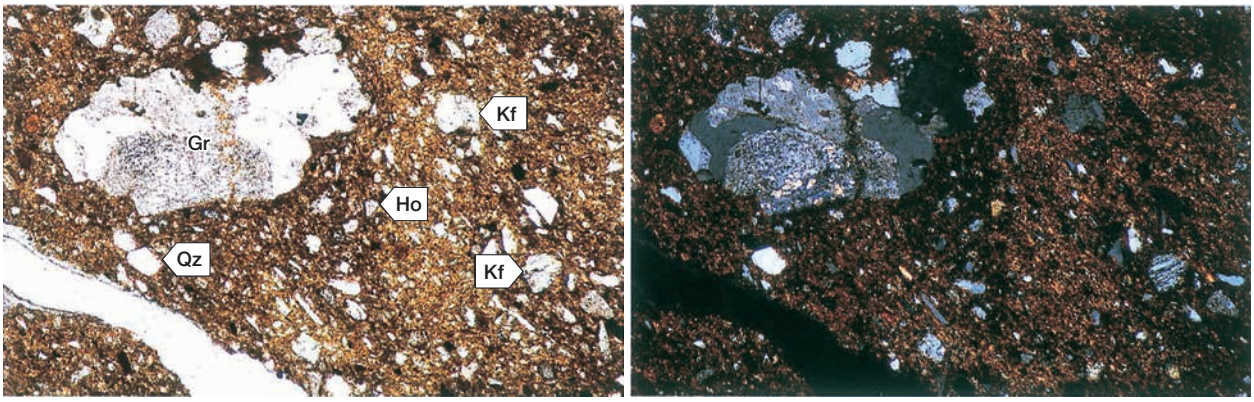
Qz：石英. Kf：カリ長石. Pl：斜長石. Bi：黒雲母. Op：不透明鉱物. Che：チャート.
Sh：頁岩. Tf：凝灰岩. P-Qz：多結晶石英. Gr：花崗岩. Vg：火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



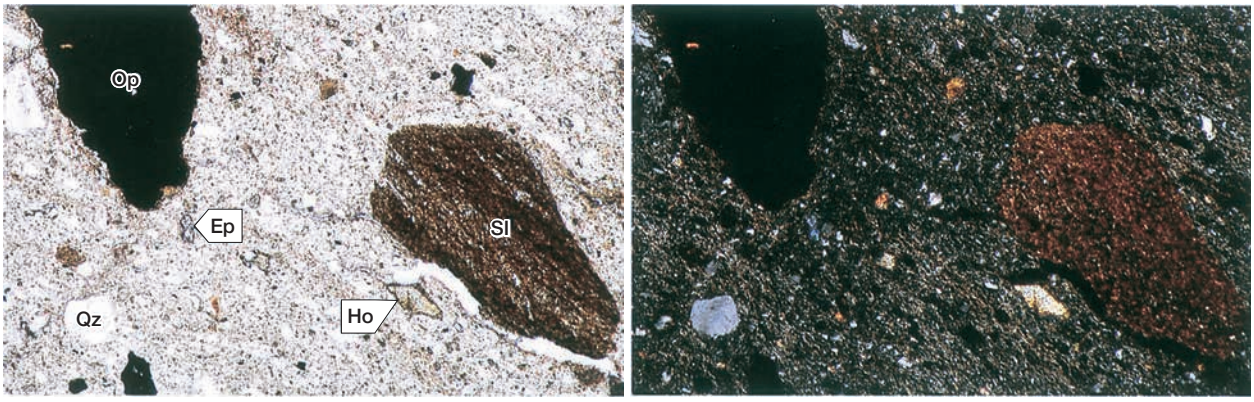
13. 資料No.13（報告No.363 土師器 皿 中世）



14. 資料No.14（報告No.366 土師器 皿 中世）



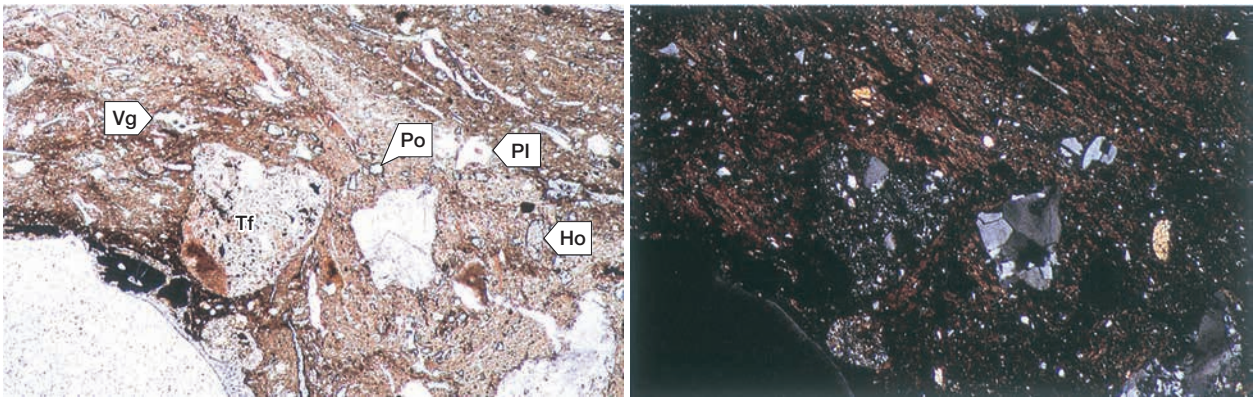
15. 資料No.15（報告No.401 土師器 皿 中世）



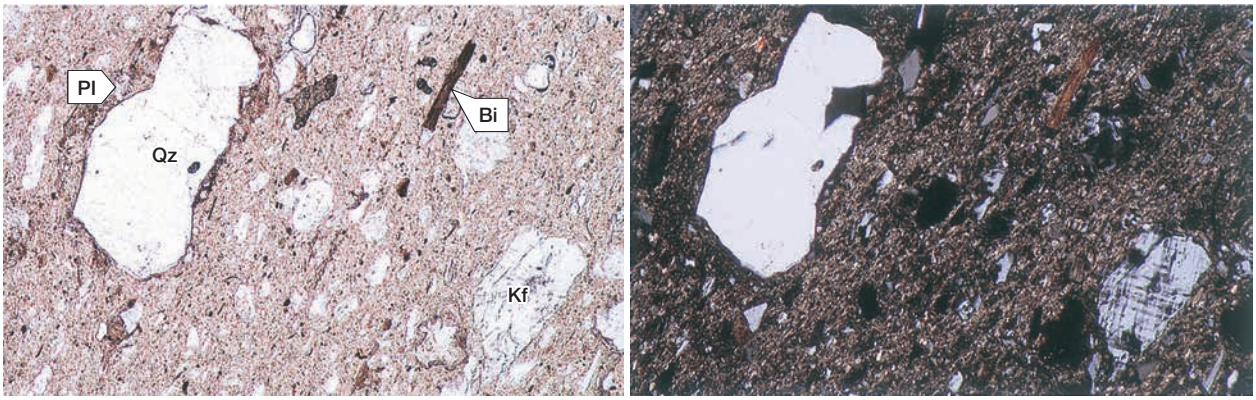
16. 資料No.16（報告No.415 土師器 鍋 中世）

0. 5mm

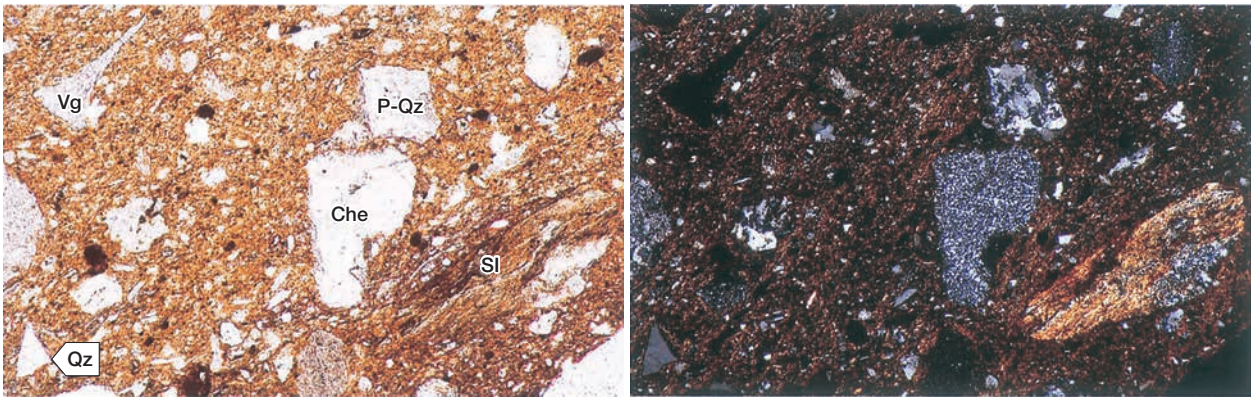
Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Oxho：酸化角閃石．Ep：緑レン石．
Bi：黒雲母．Op：不透明鉱物．Tf：凝灰岩．P-Qz：多結晶石英．Gr：花崗岩．Sl：粘板岩．Alt：変質岩．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



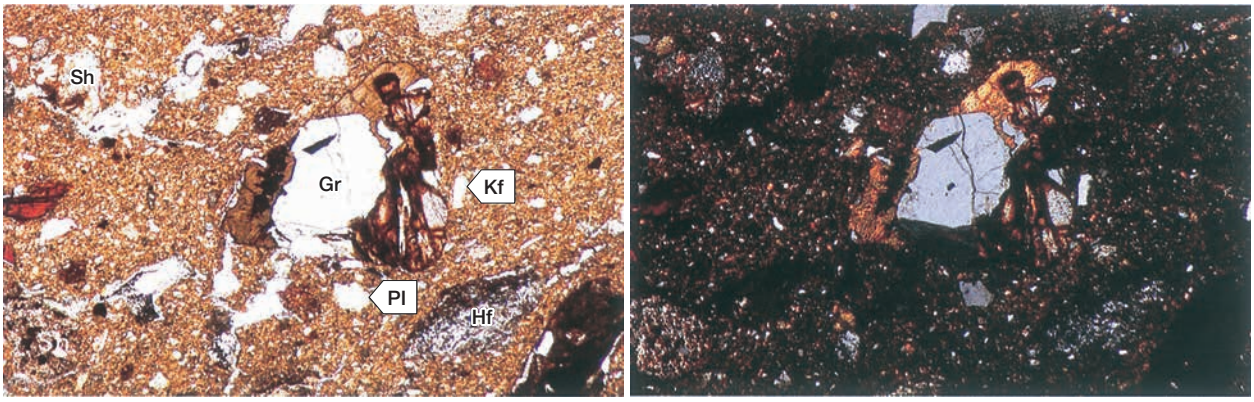
17. 資料No.17（報告No.463 土師器 鍋 中世）



18. 資料No.18（報告No.610 黒色土器 椀 中世）



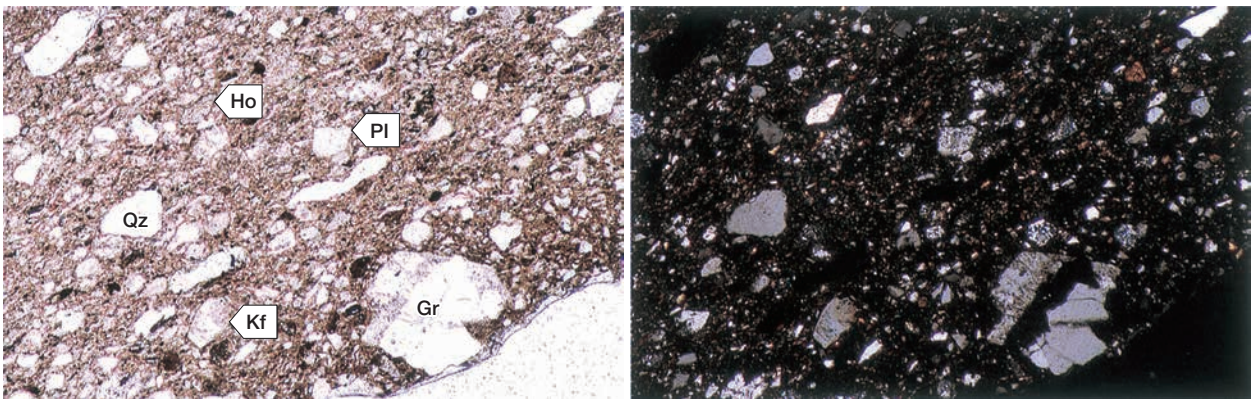
19. 資料No.19（報告No.664 土師器 甕 古墳）



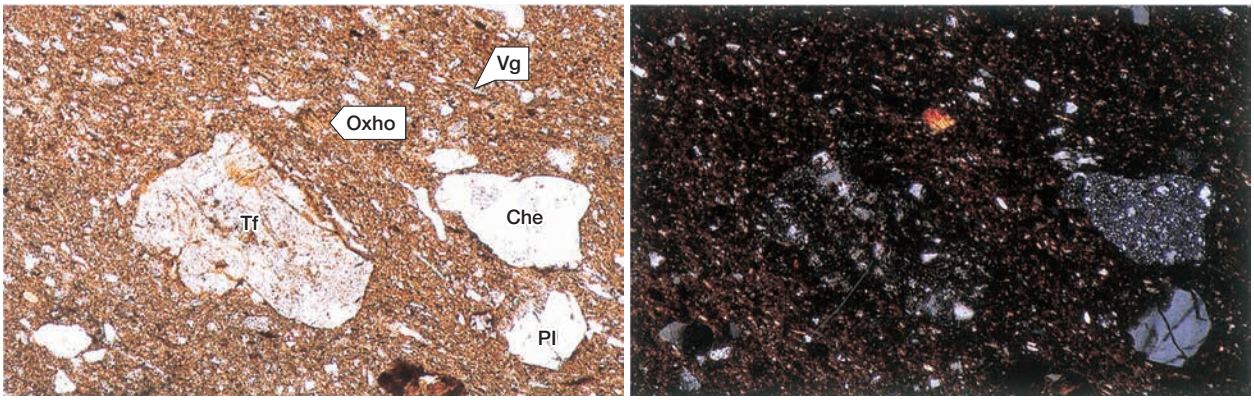
20. 資料No.20（報告No.674 縄文土器 深鉢 縄文後期）

0.5mm

Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Bi：黒雲母．Che：チャート．Sh：頁岩．
Tf：凝灰岩．P-Qz：多結晶石英．Gr：花崗岩．Hf：ホルンフェルス．Sl：粘板岩．Vg：火山ガラス．
Po：植物珪酸体．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



21．資料No.21（報告No.728 瓦器 椀 中世）



22．資料No.22（報告No.751 土師器 鍋 中世）

0．5mm

Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Oxho：酸化角閃石．Che：チャート．
Tf：凝灰岩．Gr：花崗岩．Vg：火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

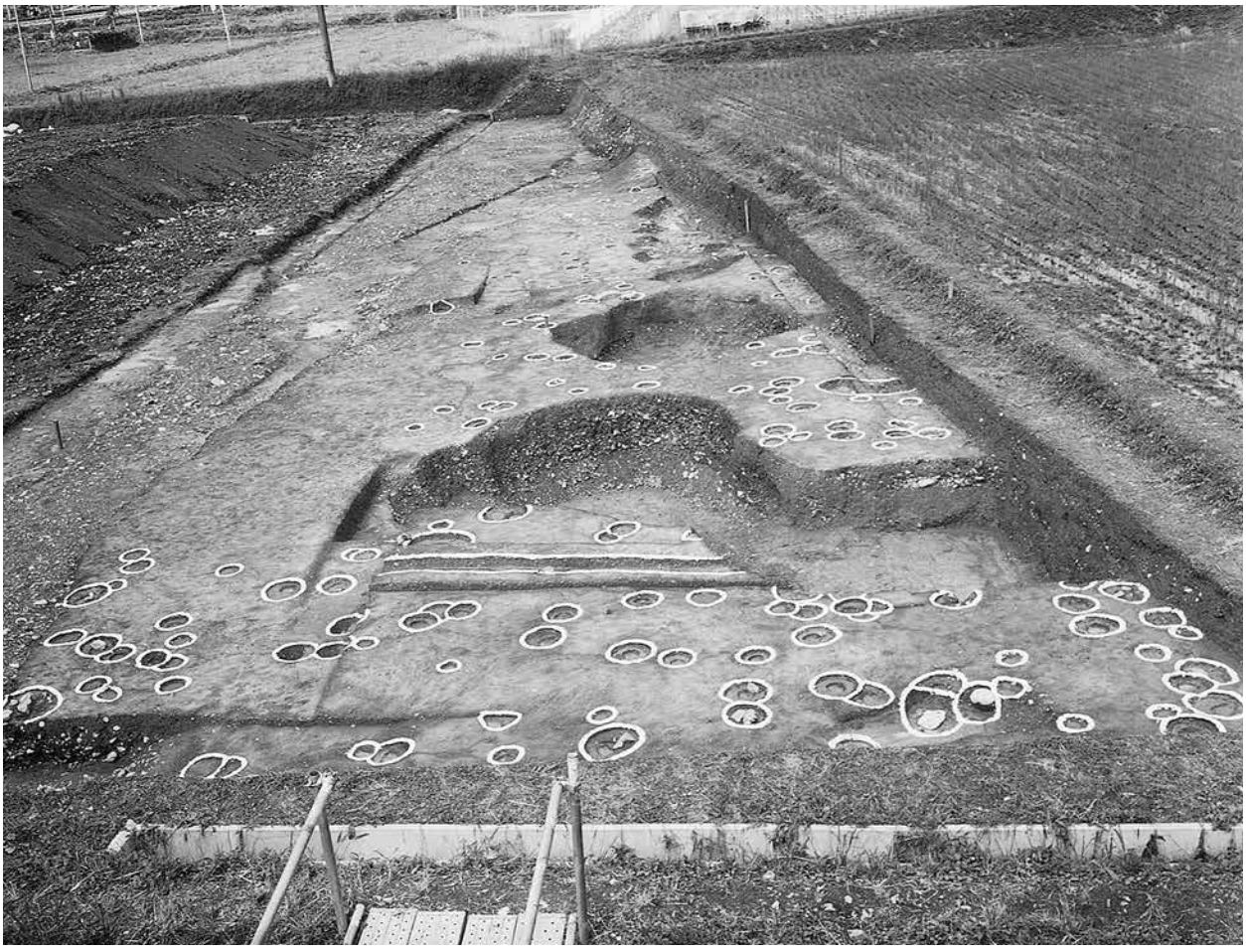
胎土薄片（6）

ガラス玉全体像

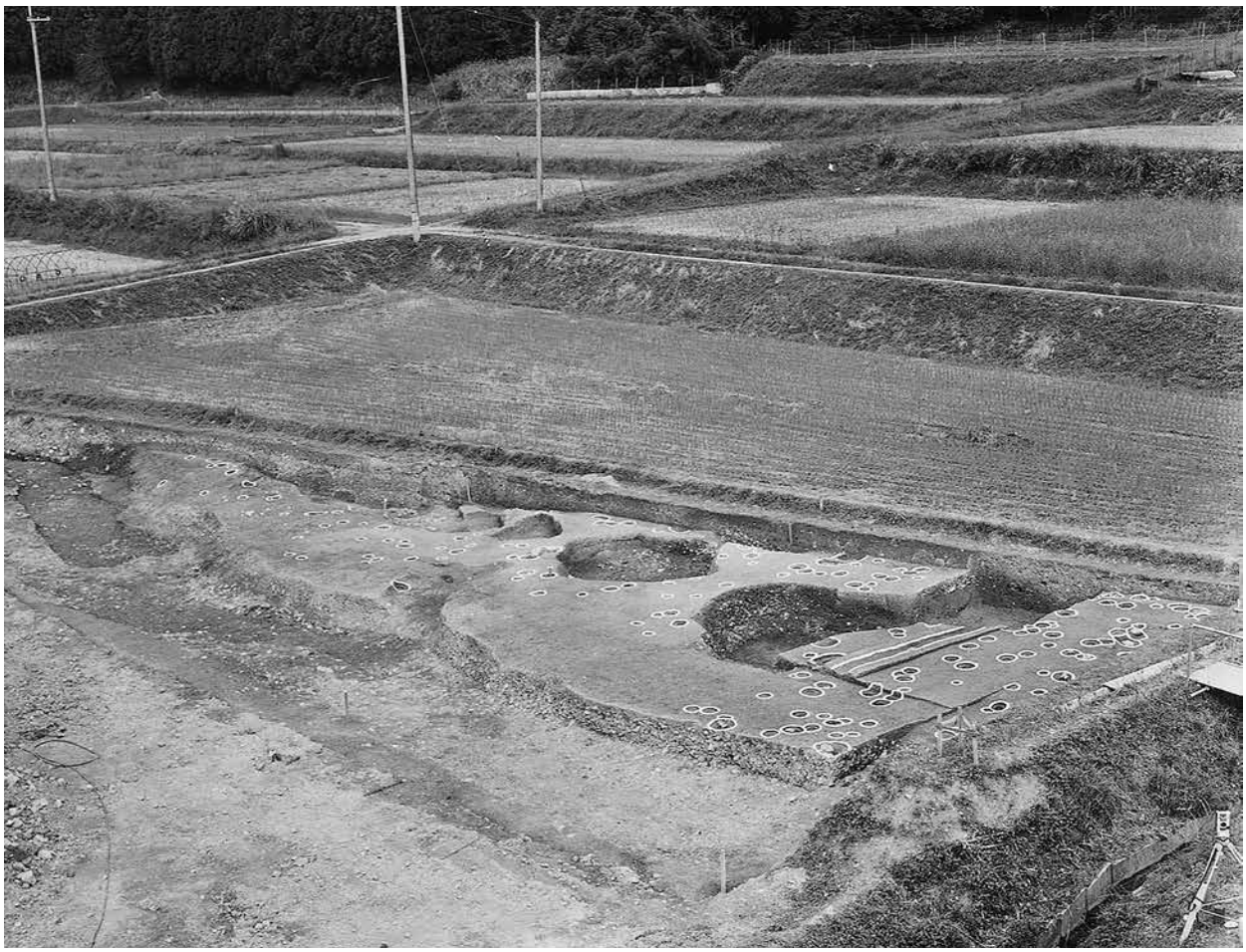
写真図版35　A・B・C地区　遺構

43　A・B・C地区全景（上が北西）

44　A・B・C地区全景（南西から）

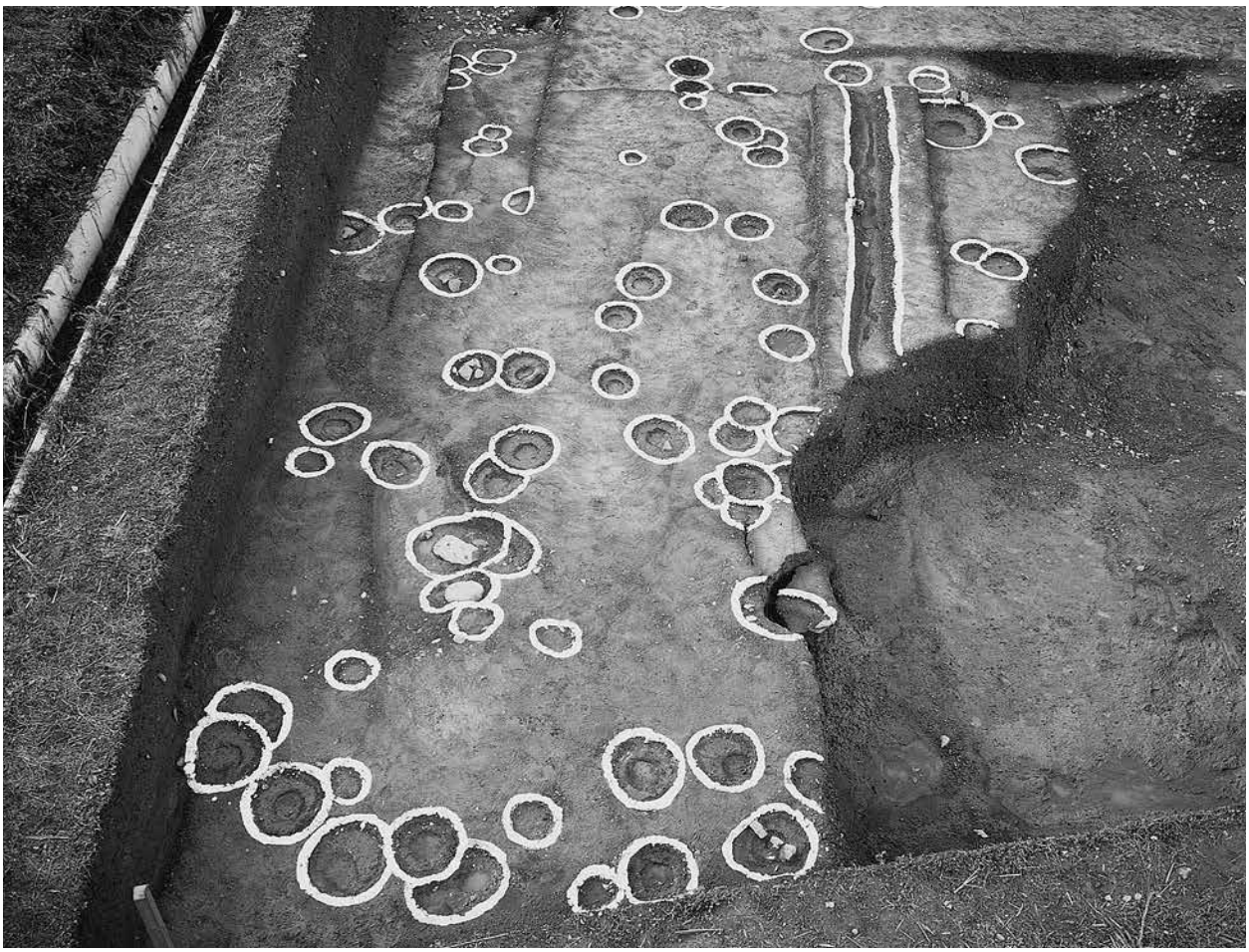


45　A地区全景（南東から）



46　A地区全景（南から）

47　A地区全景（南西から）



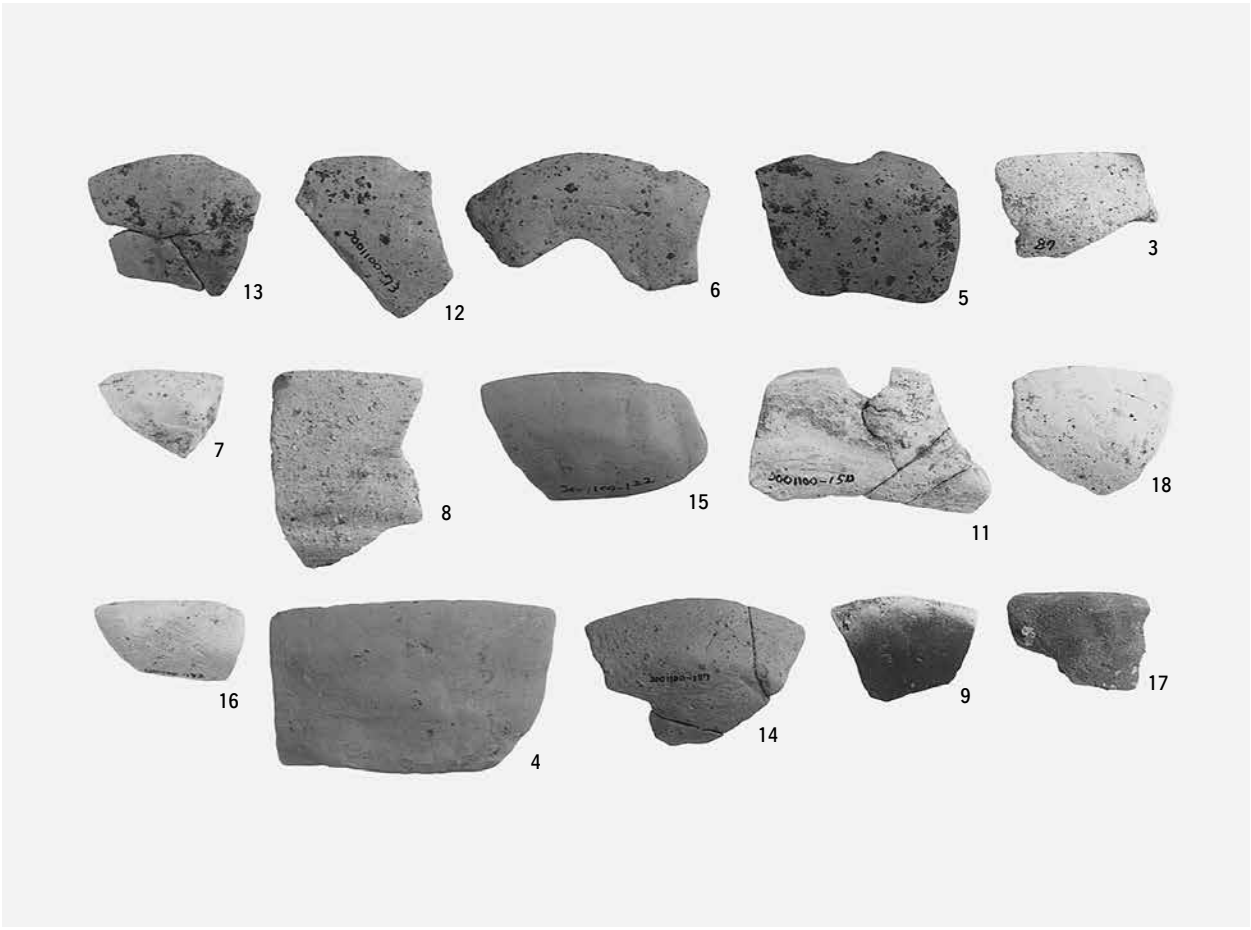
48 東半部全景（北東から）

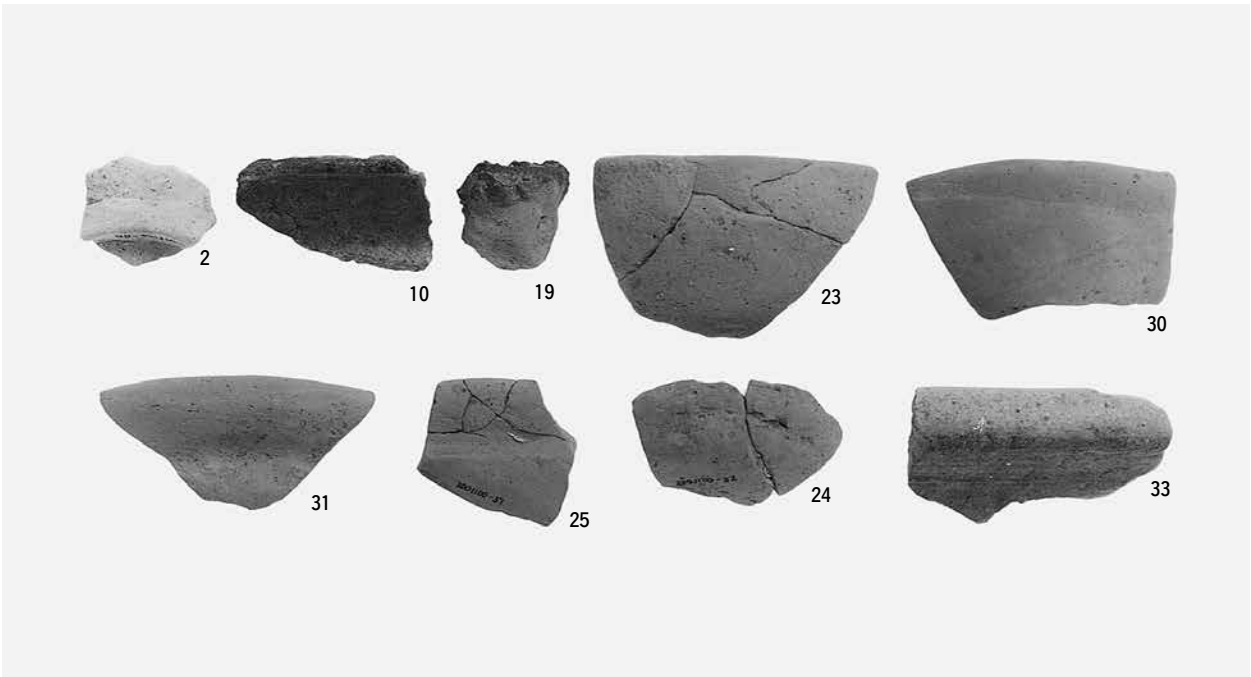
49 柱穴P0057A（南東から）

50 柱穴P0046A遺物出土状況（南東から）

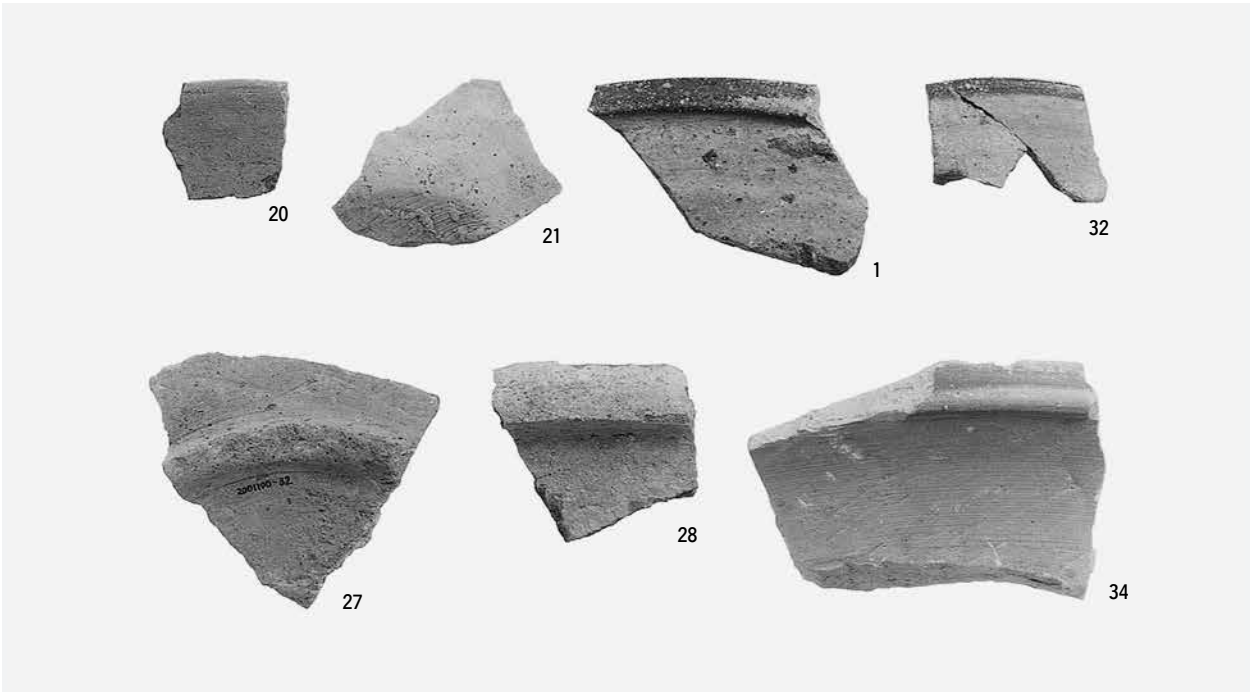
51 掘立柱建物SB006A 柱穴P0053A
土層断面（北西から）

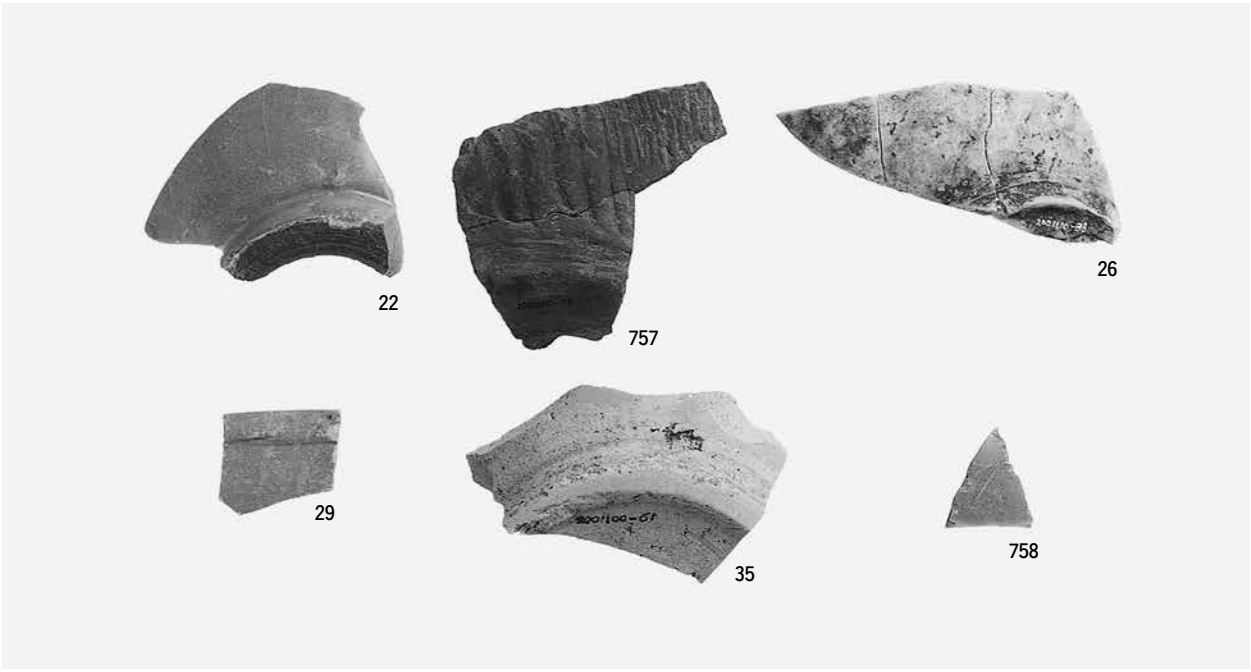
52 溝SD002A土層断面（南西から）





土器(1)





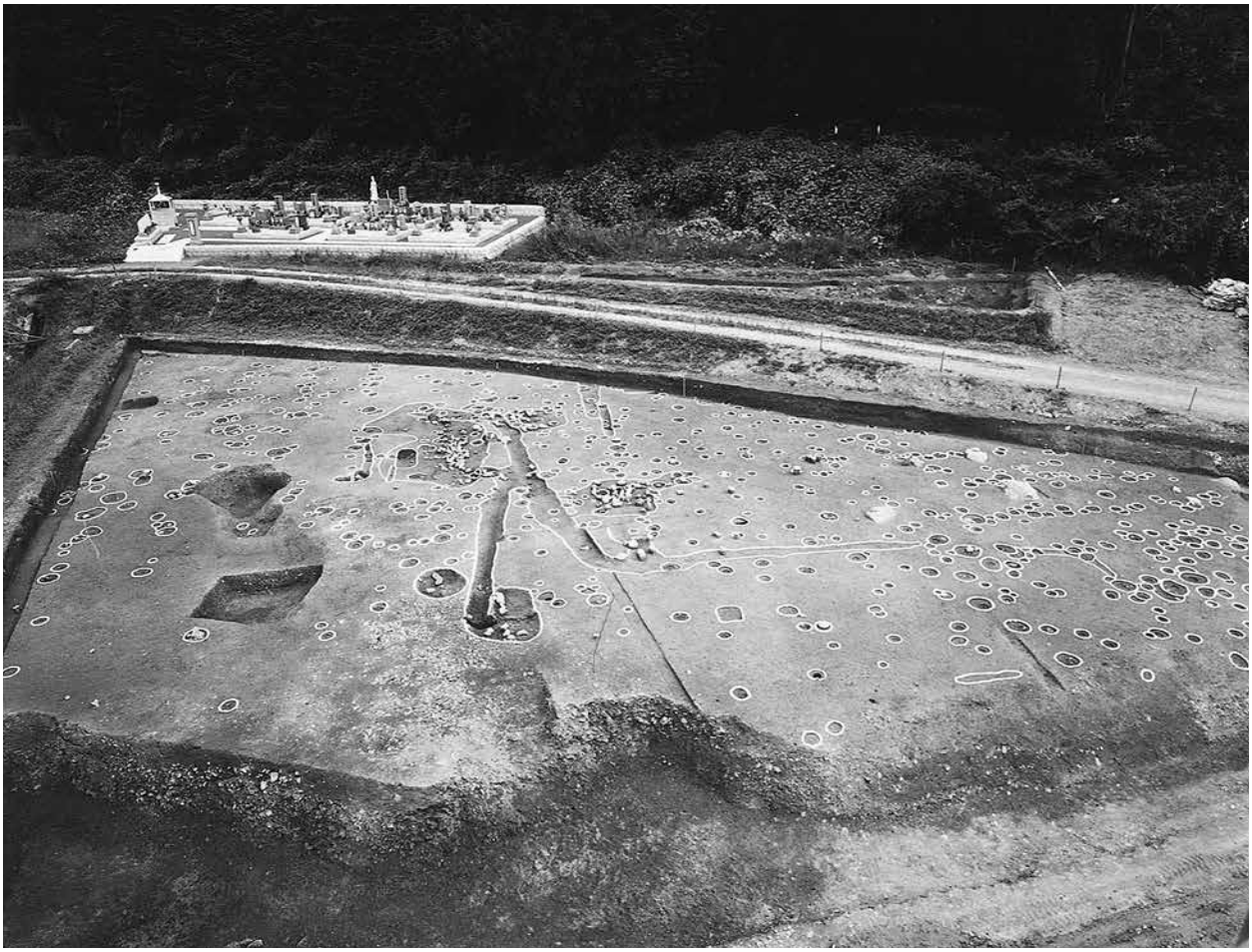
土器(2)・金属器

写真図版41　B・A地区　遺構

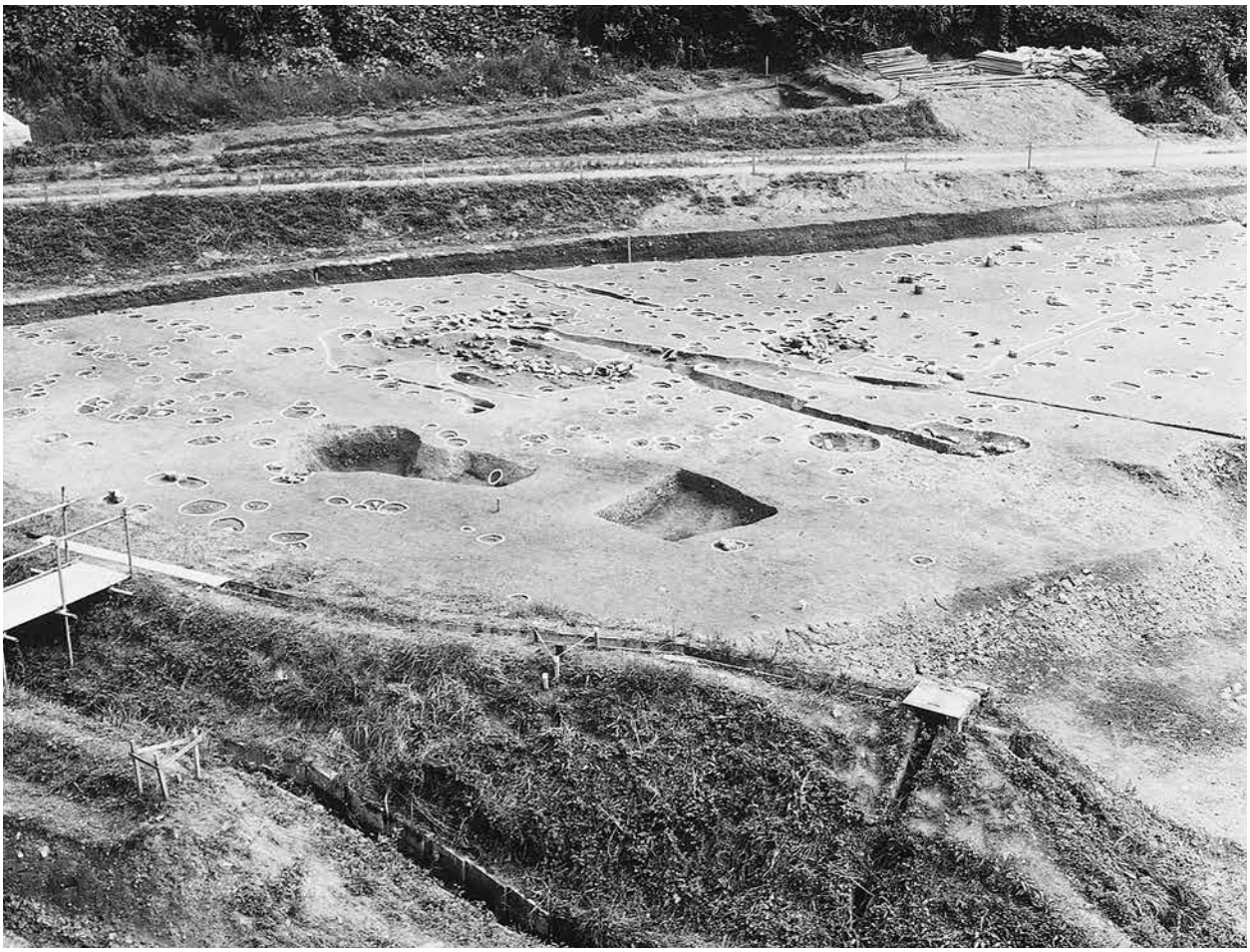
53 B・A地区全景（東から）

54　B地区全景（南から）

55　B地区全景（北東から）



56　B地区全景（南西から）



57　B地区全景（西から）

58　B地区全景（東から）

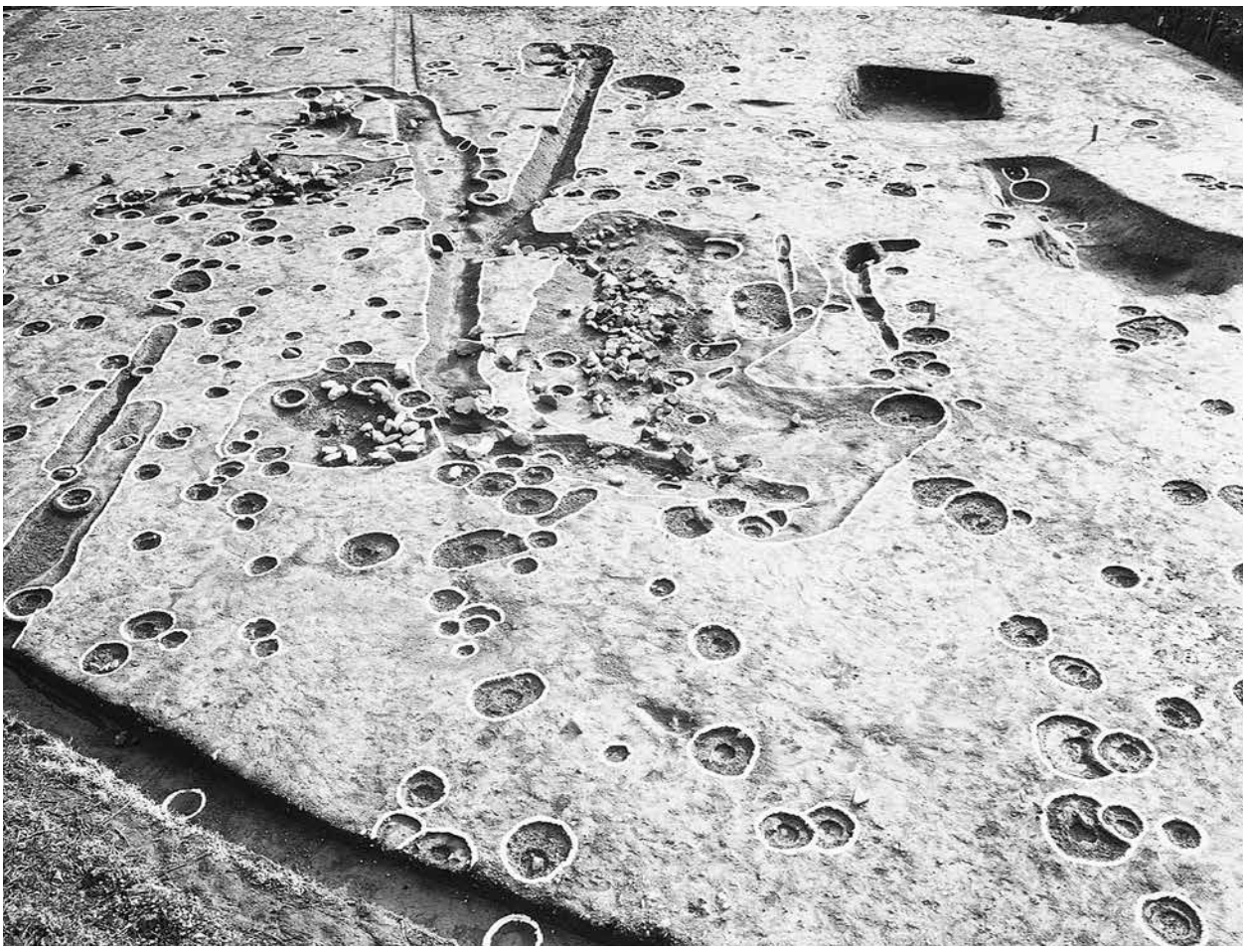
59　B地区全景（南から）

60 掘立柱建物SB010B～SB019B（東から）

61 掘立柱建物SB001B～SB016B（南から）

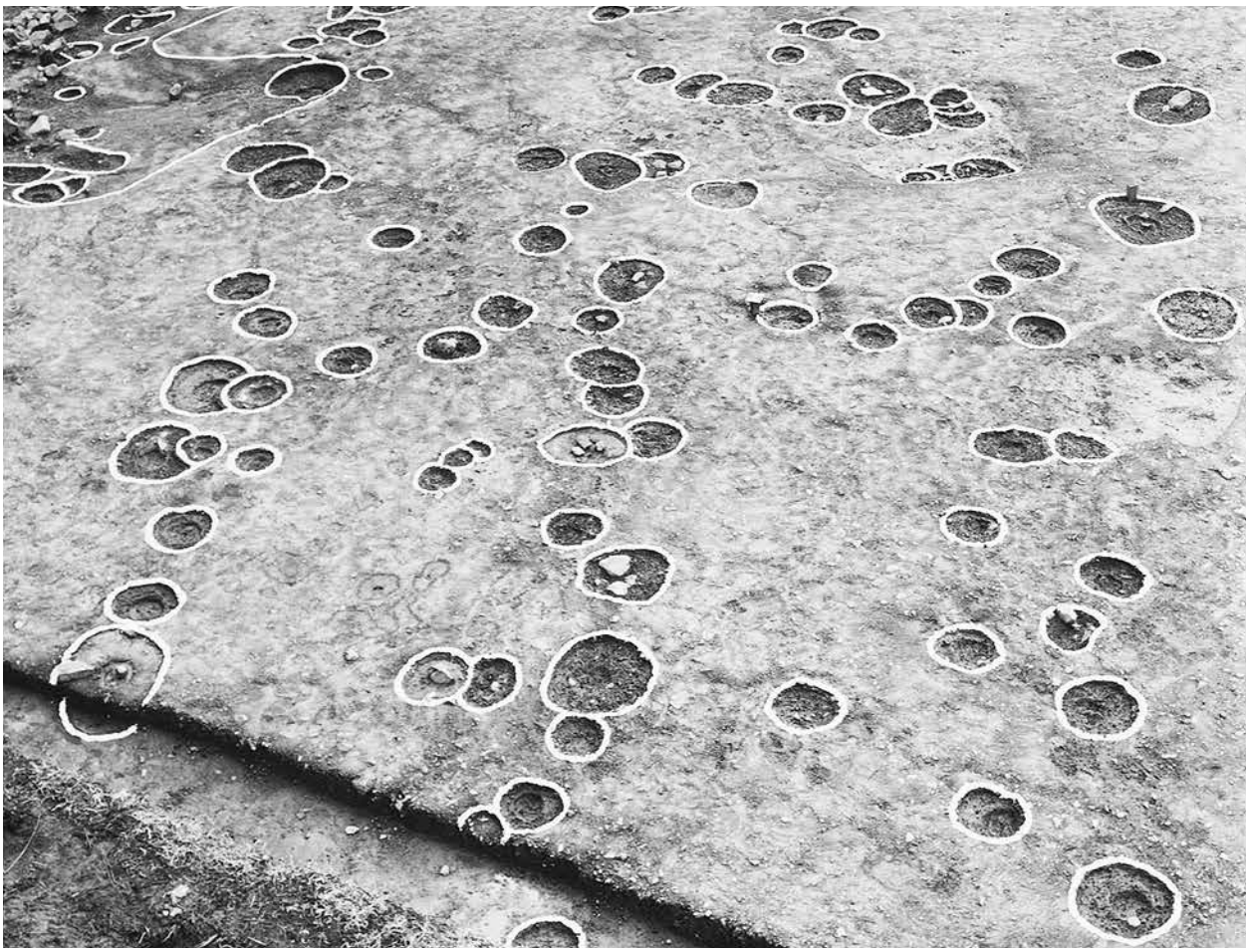
62 掘立柱建物SB010B～SB016B（南西から）

63 掘立柱建物SB017B～SB024B（南から）

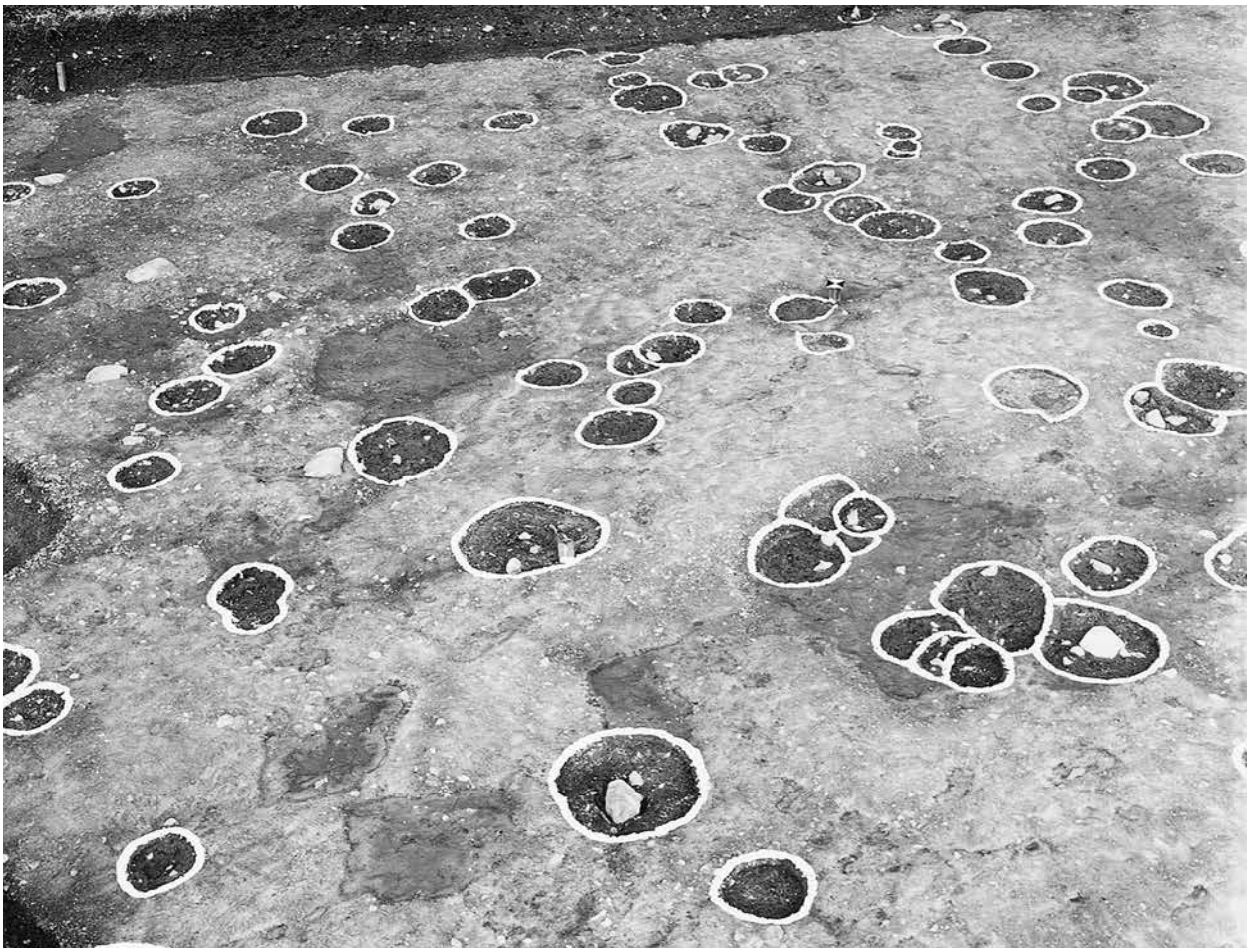


64 掘立柱建物SB001B～SB009B、土坑SK130B(北東から)

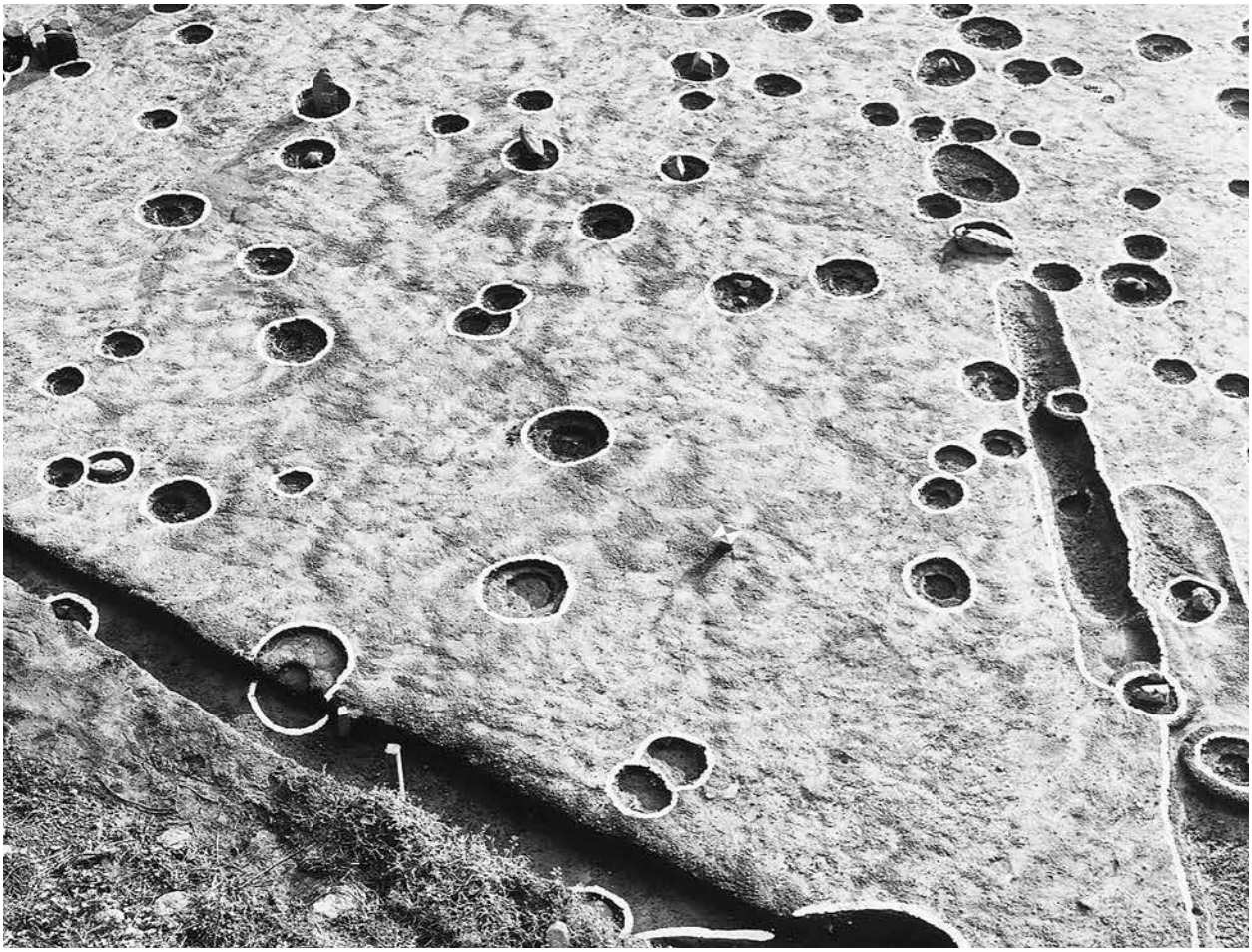
65 掘立柱建物SB001B～SB009B(北東から)



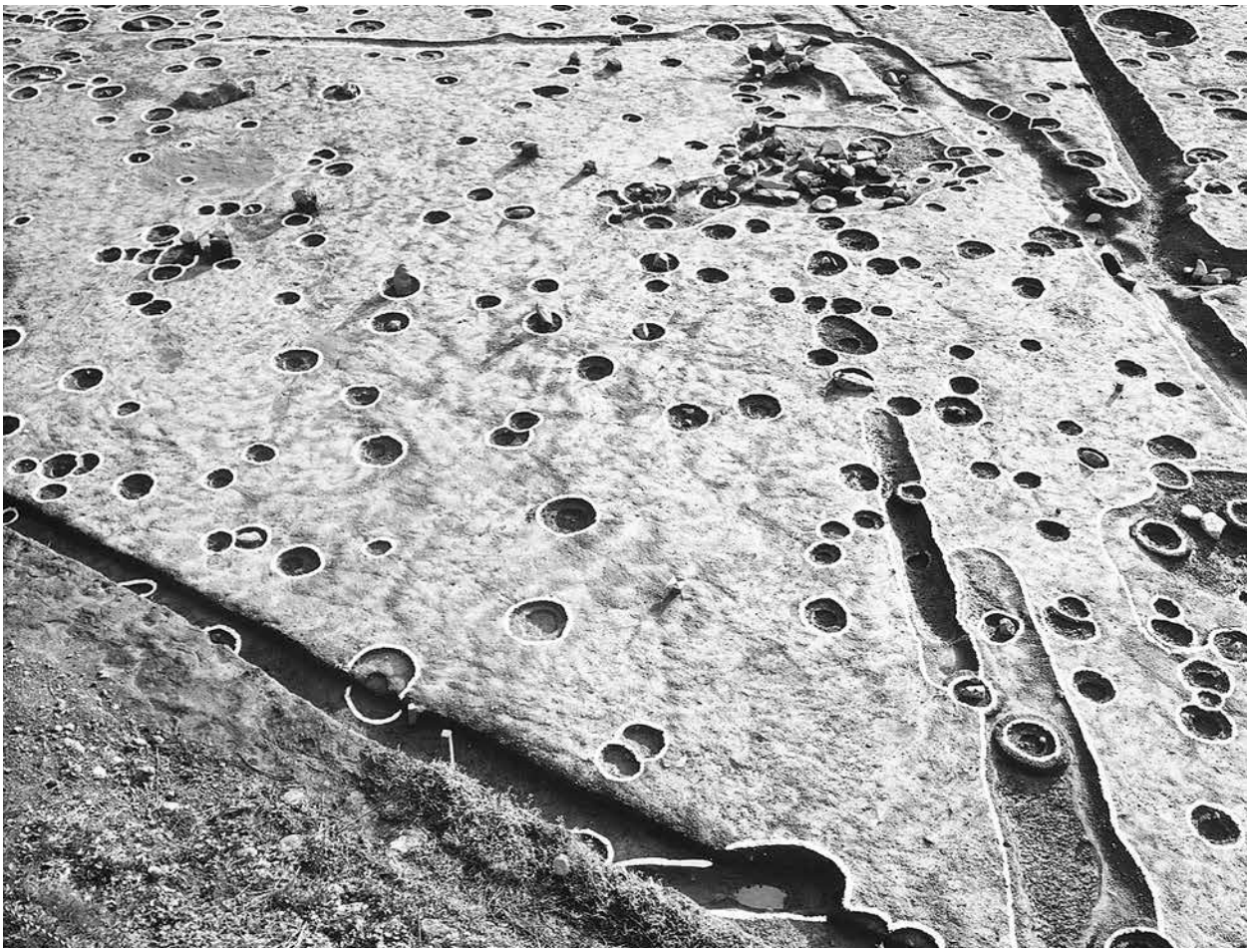
66 掘立柱建物SB007B（北東から）



67 掘立柱建物SB001B～SB003B（西から）



68 掘立柱建物SB012B・SB013B（北東から）

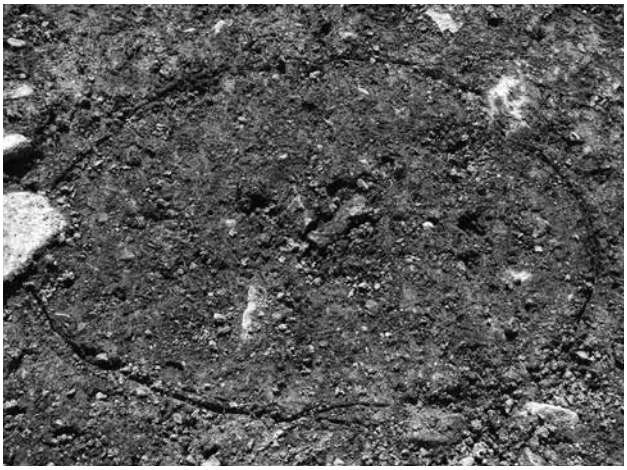


69 掘立柱建物SB011B～SB013B（北東から）

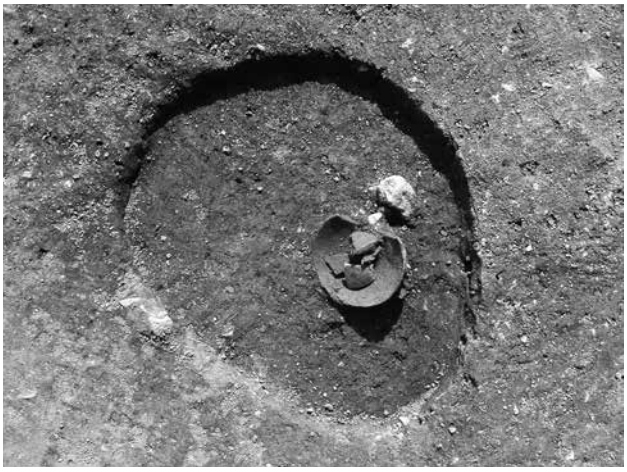
70 柱穴P0457B（北西から）

71 柱穴P0093B（南西から）

72 柱穴P0393B遺物出土状況（北西から）

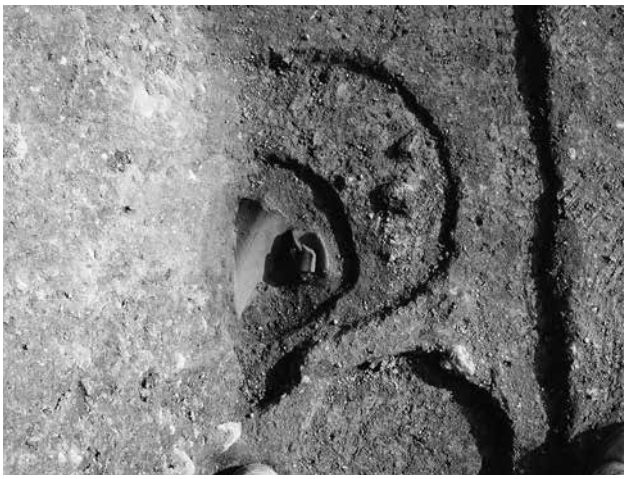


73 柱穴P0105B遺物出土状況（北西から）



74 柱穴P0180B遺物出土状況（北から）

75 柱穴P0352B遺物出土状況（北東から）



76 掘立柱建物SB017B 柱穴P0185B
遺物出土状況（北から）

77 掘立柱建物SB019B 柱穴P0179B
遺物出土状況（北から）

78 掘立柱建物SB006B 柱穴P0753B(南東から)

79 掘立柱建物SB015B 柱穴P0766B(南西から)

80 掘立柱建物SB015B 柱穴P0768B(南東から)

81 掘立柱建物SB015B 柱穴P0769B(南東から)

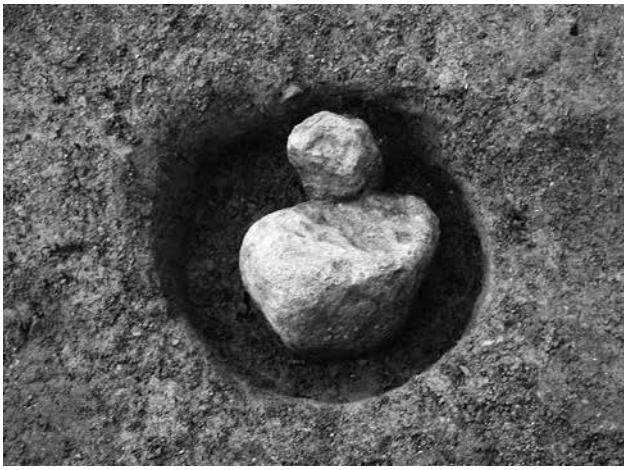
82 掘立柱建物SB015B 柱穴P0770B(東から)

83 掘立柱建物SB015B 柱穴P0771B(北東から)

84 掘立柱建物SB015B 柱穴P0774B(北東から)

85 掘立柱建物SB015B 柱穴P0775B(北東から)

86 掘立柱建物SB009B 柱穴P0283B(南東から)



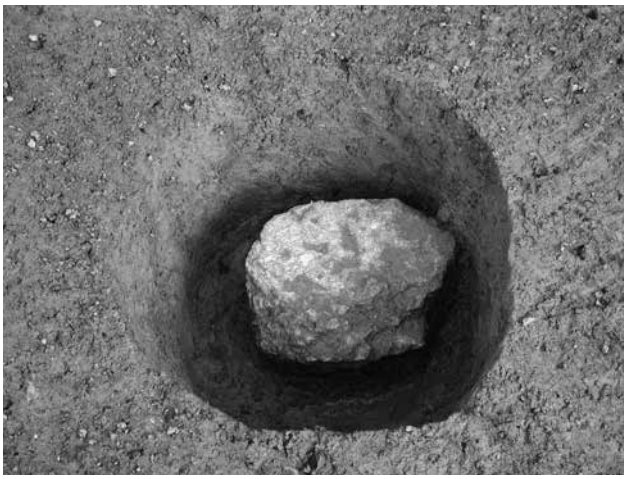
87 掘立柱建物SB009B 柱穴P0475B(南東から)

88 掘立柱建物SB009B 柱穴P0272B(南西から)

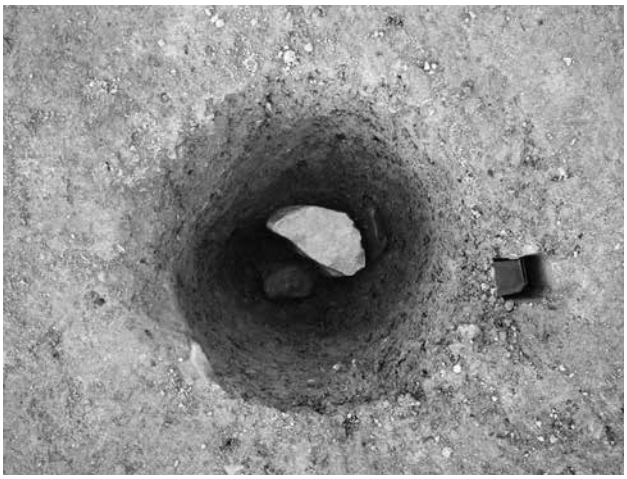
89 掘立柱建物SB009B 柱穴P0476B(南西から)

90 掘立柱建物SB009B 柱穴P0491B(南西から)

91 掘立柱建物SB009B 柱穴P0165B(北西から)

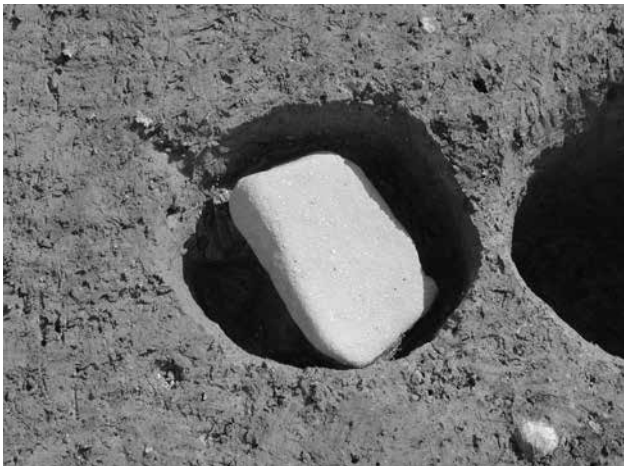


92 掘立柱建物SB013B 柱穴P0118B(南西から)

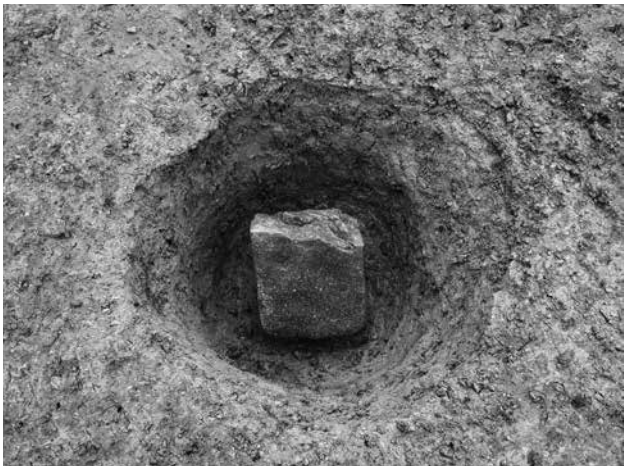


93 掘立柱建物SB014B 柱穴P0260B(南西から)

94 掘立柱建物SB016B 柱穴P0364B(南西から)



95 掘立柱建物SB023B 柱穴P0540B(北西から)

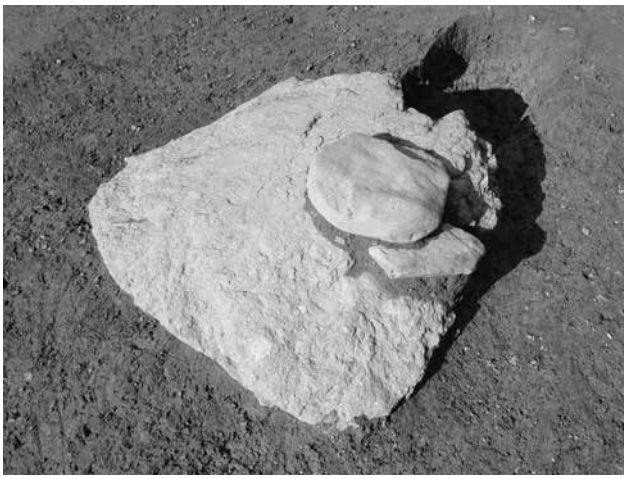


96 柱穴P0467B(北東から)

97 柱穴P0297B(南西から)

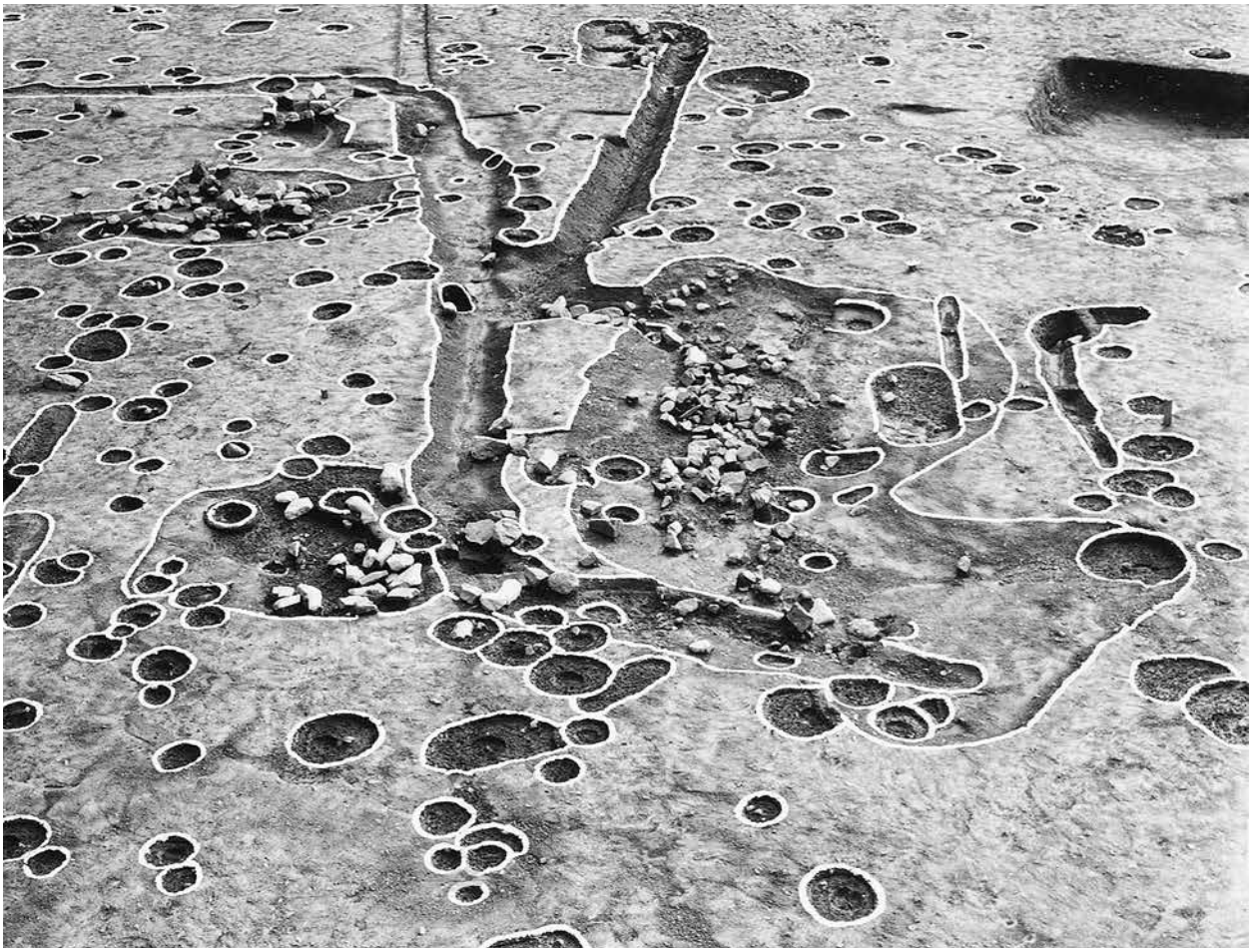
98 柱穴P0181B(北西から)

99 柱穴P0539B(北西から)



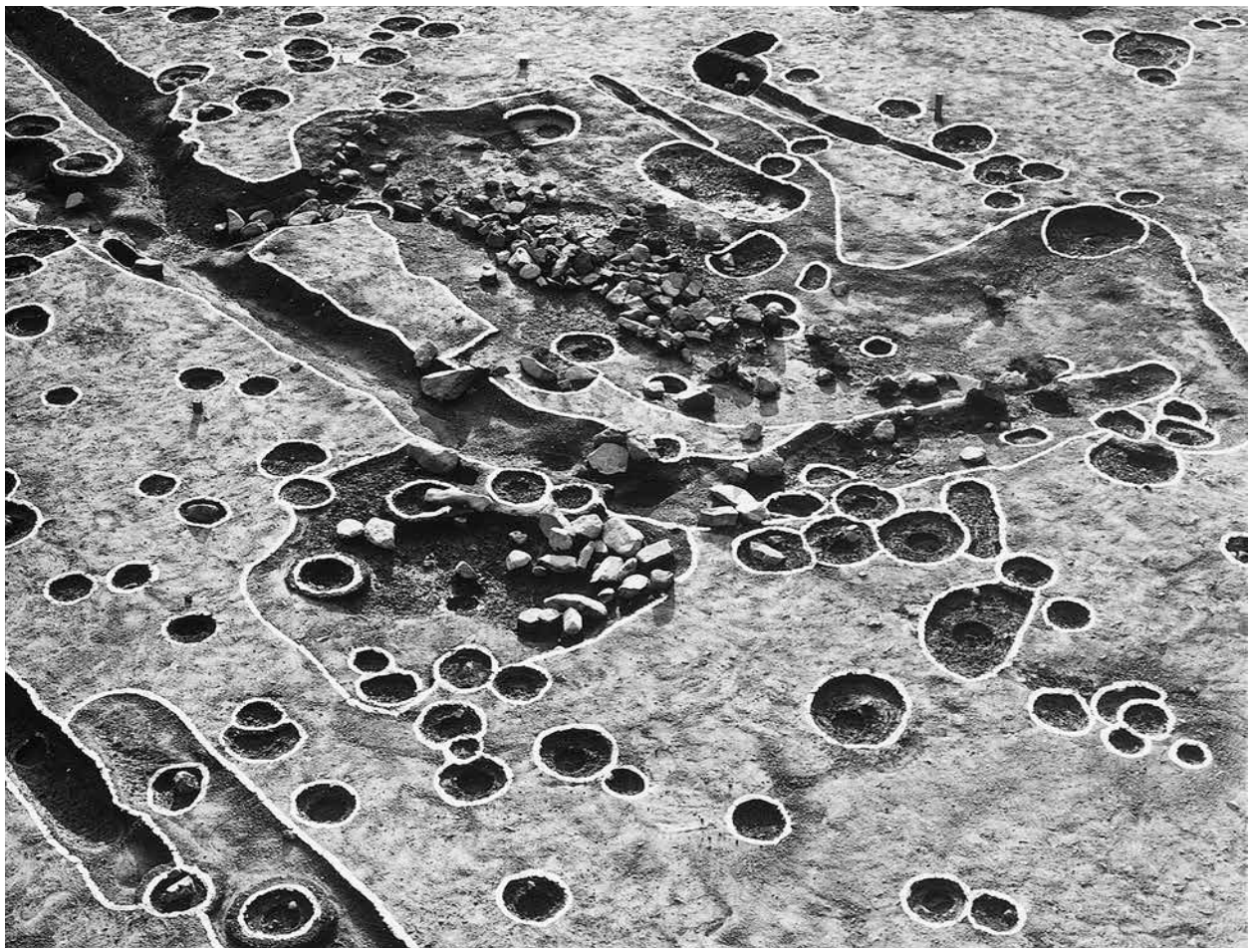
100 柱穴P0538B(南東から)

101 柱穴P0472B(北東から)

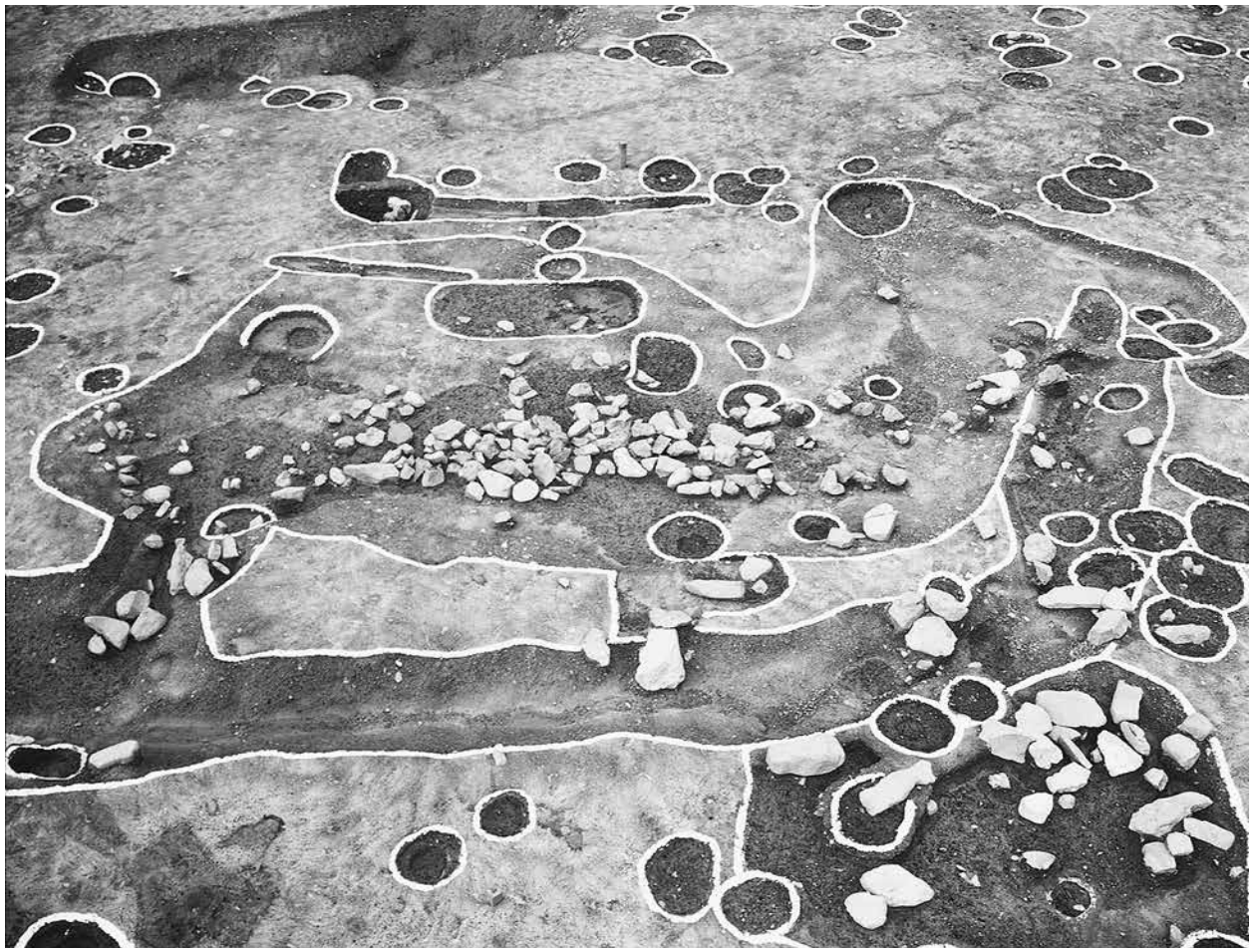


102 土坑SK130B・SK160B、溝SD128B(北から)

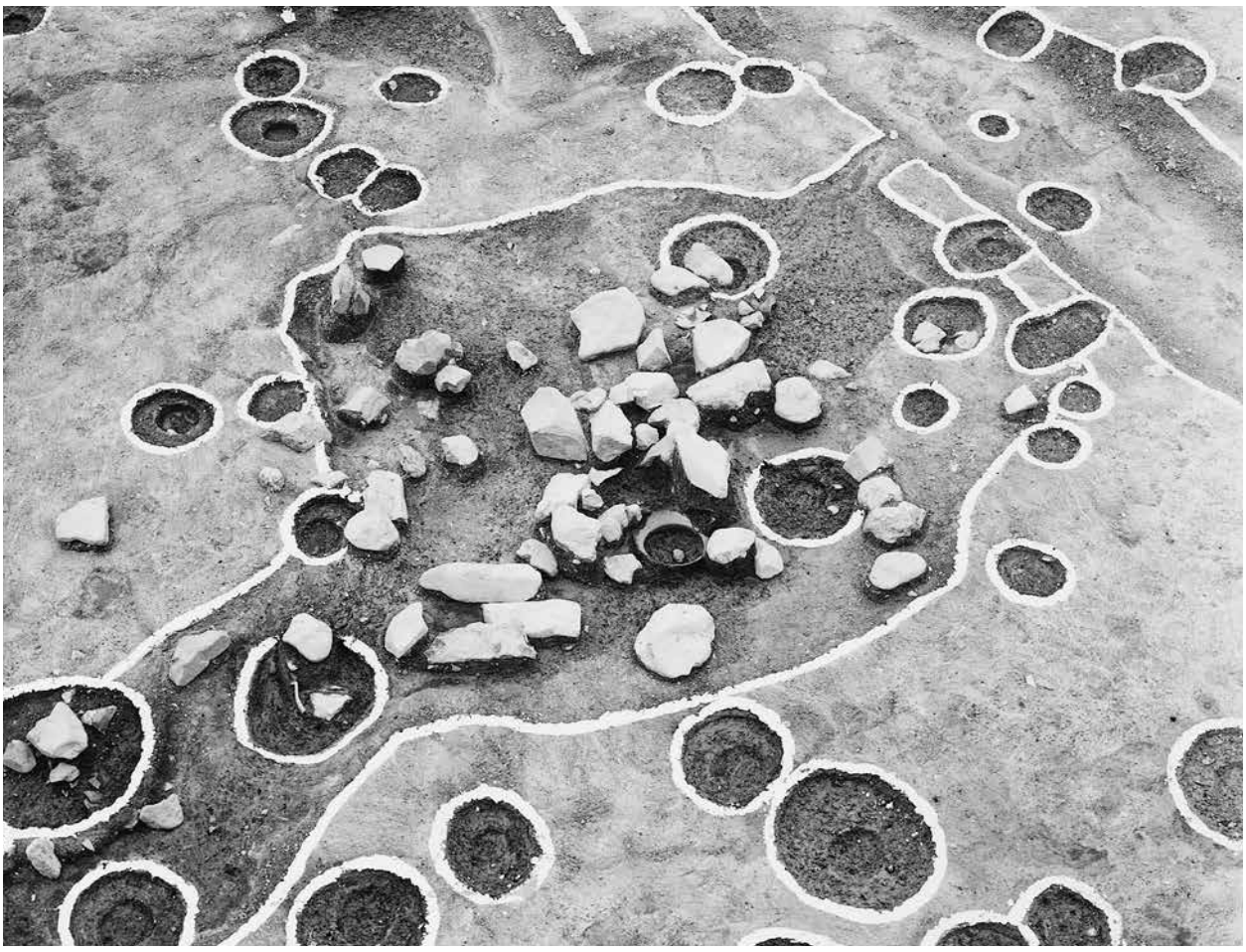
103 土坑SK130B・SK160B・SK213B(北西から)



104 土坑SK130B・SK160B・SK161B、溝SD128B（東から）



105 土坑SK130B・SK213B（南東から）



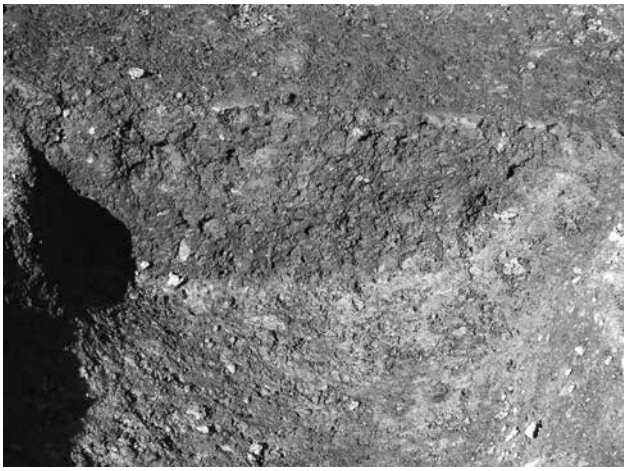
106 土坑SK161B(北東から)

107 土坑SK161B 遺物出土状況(北東から)

108 土坑SK213B（南東から）

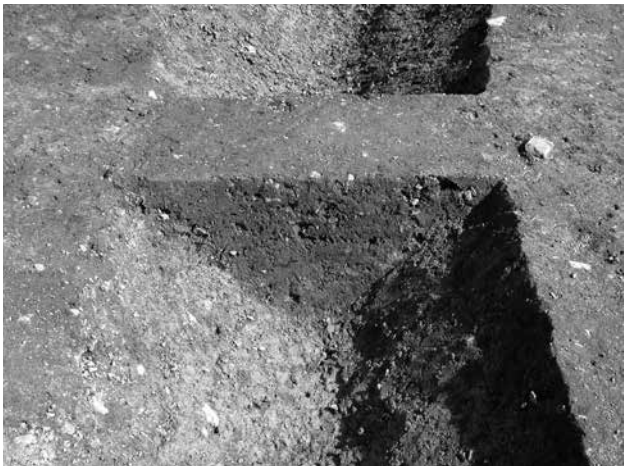
109 土坑SK213B北端下層
（南西から）

110 土坑SK213B北端上層
（南西から）



111 溝SD113B土層断面(南西から)

112 溝SD128B土層断面(南東から)

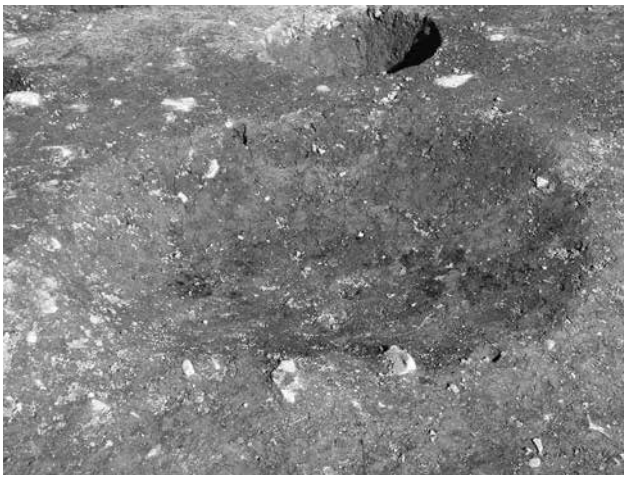


113 溝SD132B土層断面(南西から)

114 溝SD143B土層断面(南東から)

115 溝SD171B土層断面(南東から)

116 鍛冶炉SF111B(北東から)



117 土坑SK537B(南西から)

118 鍛冶炉SF111B土層断面(南西から)

119　B－2地区全景（西から）

120　B－2地区全景（南から）

67

70

81

87

90

95

96

105

114

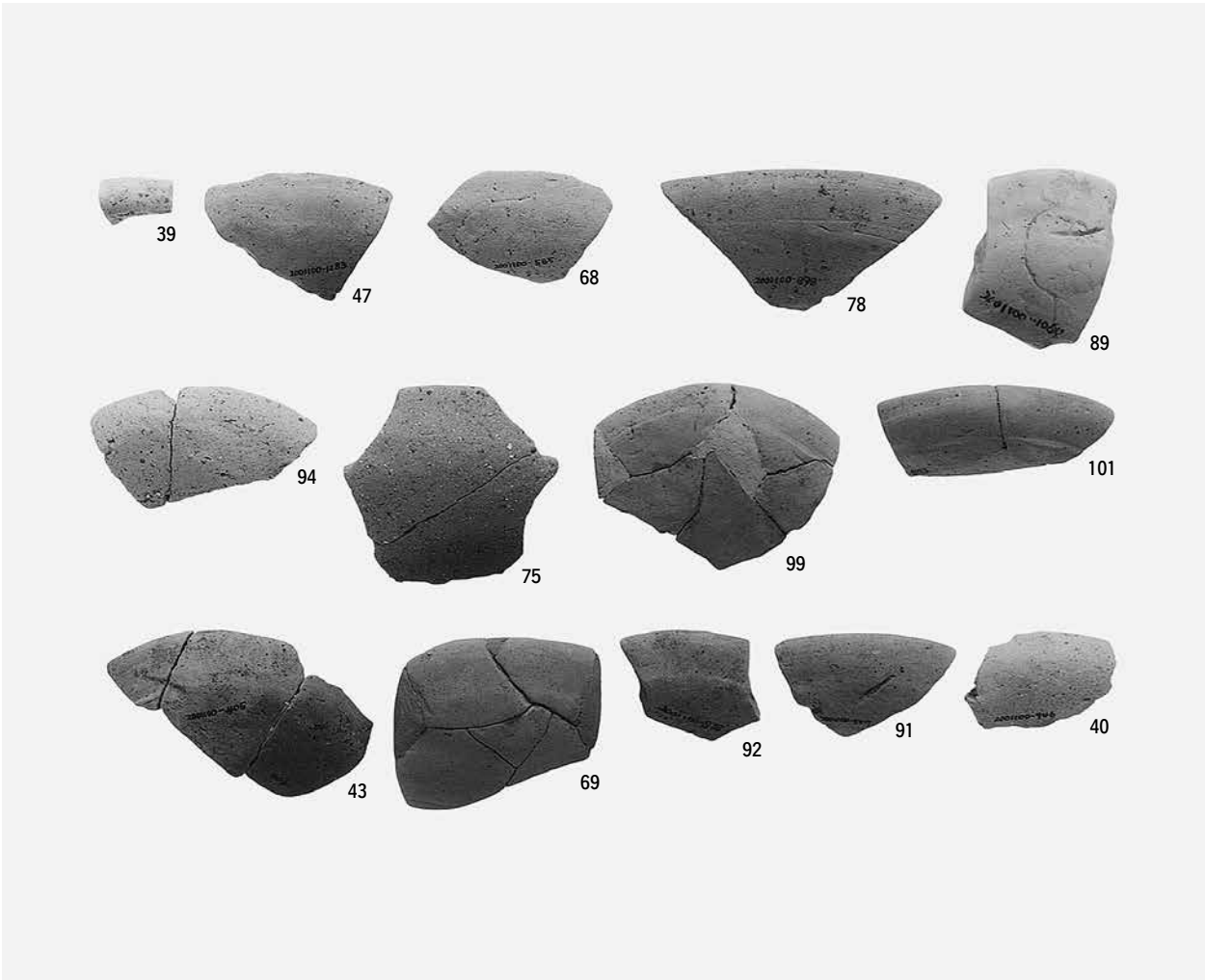
120

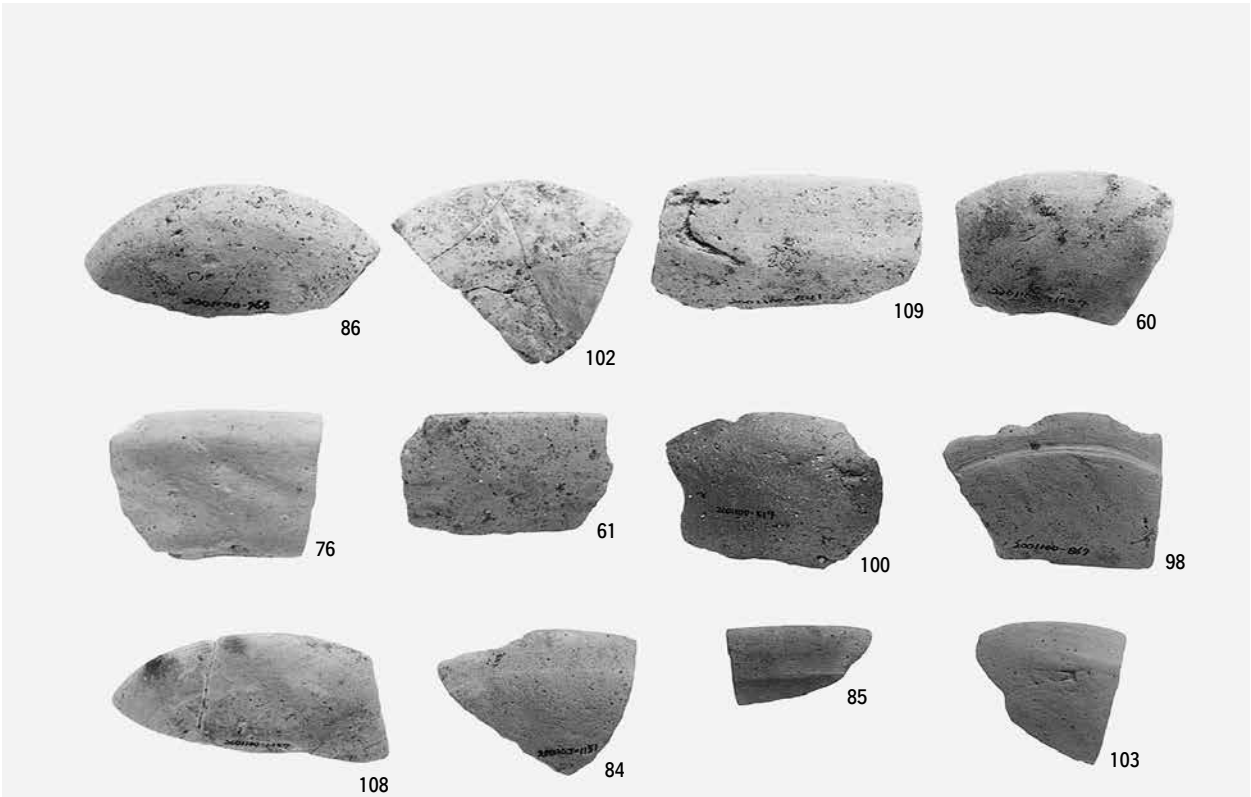
111

125

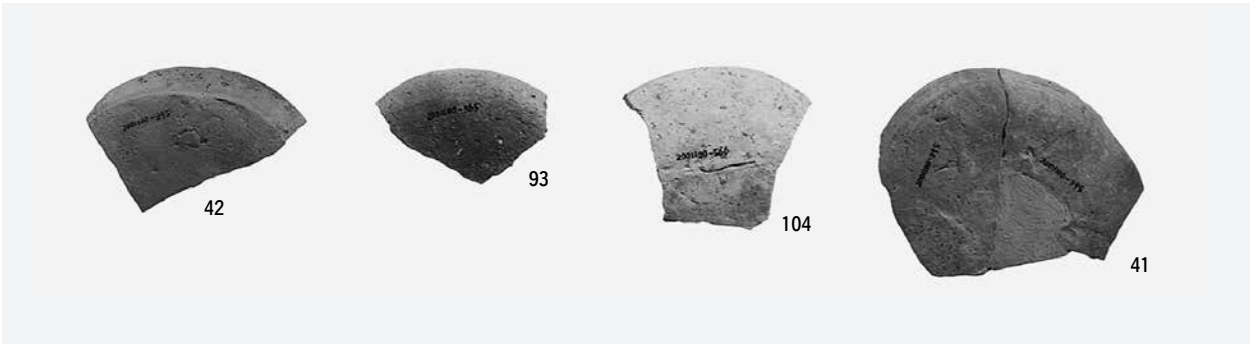
74

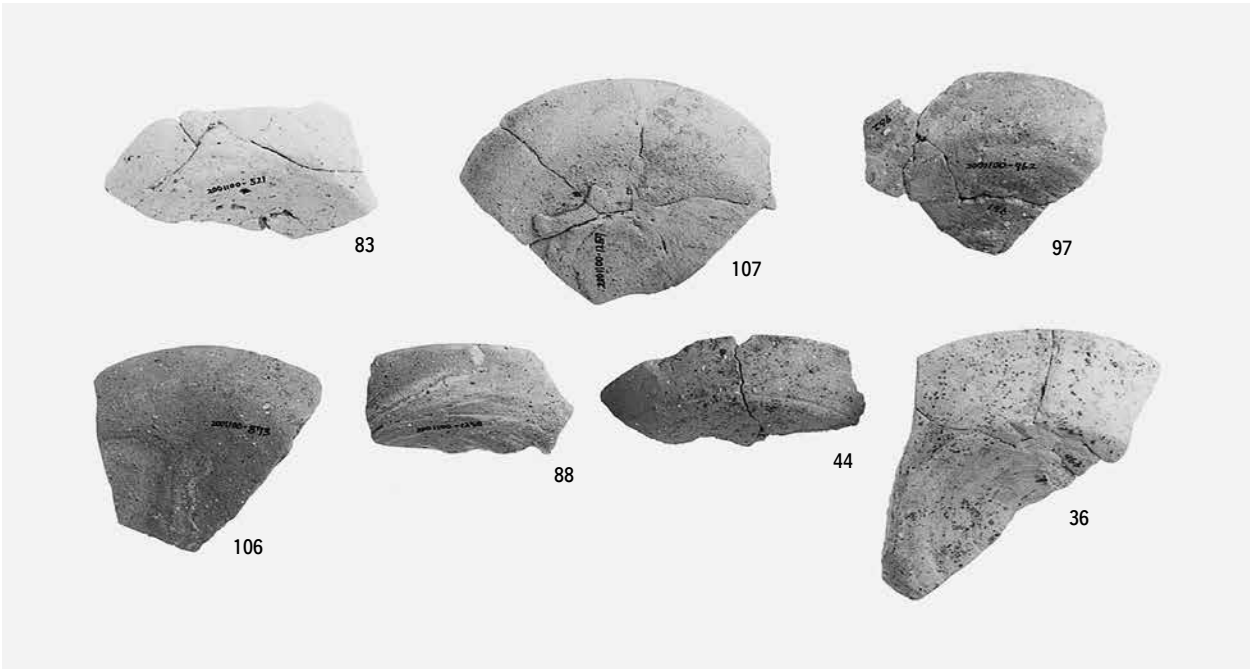
土器(1)

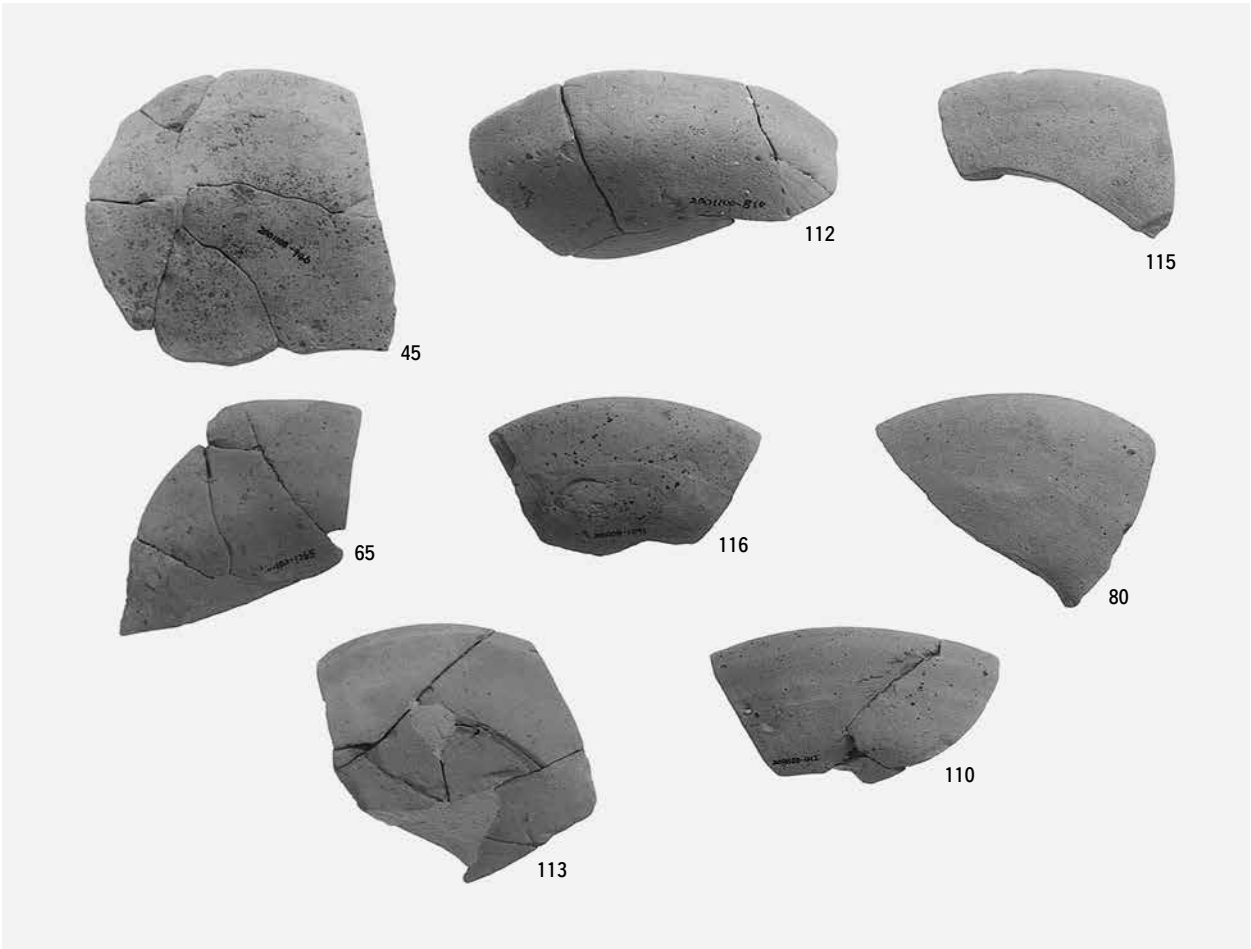

39
47
68
78
89
94
75
99
101
43
69
92
91
40


86
102
109
60
76
61
100
98
108
84
85
103

写真図版62　B地区　遺物







土器(3)

117

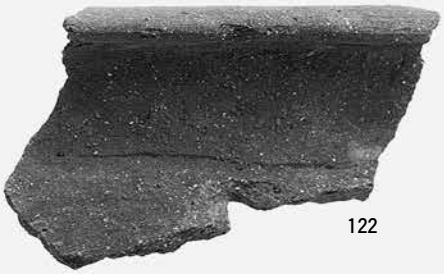
143

118

119

53

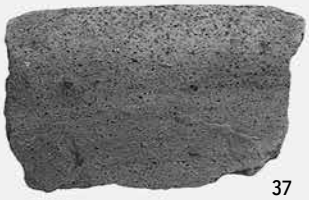
79


122

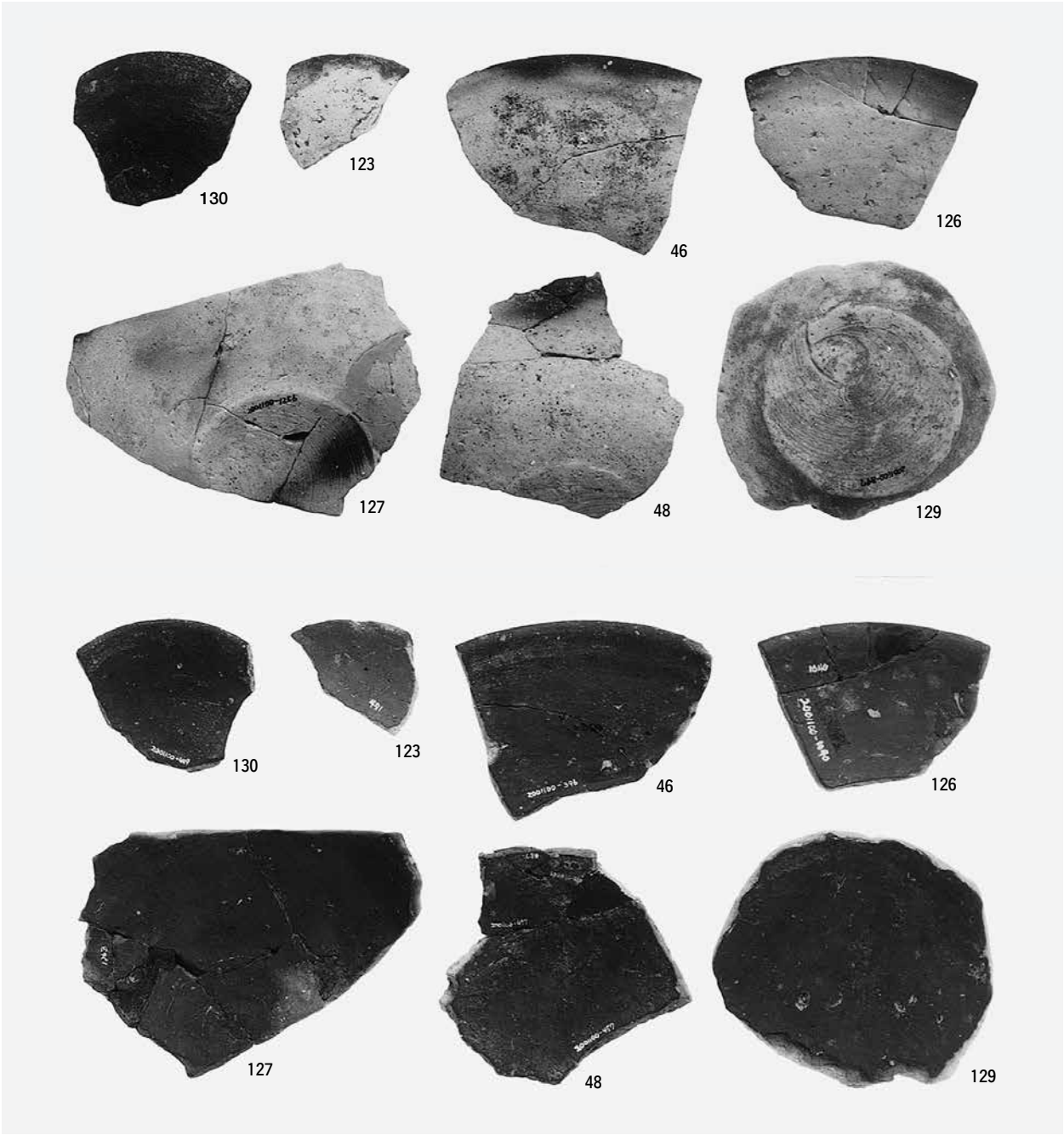
187

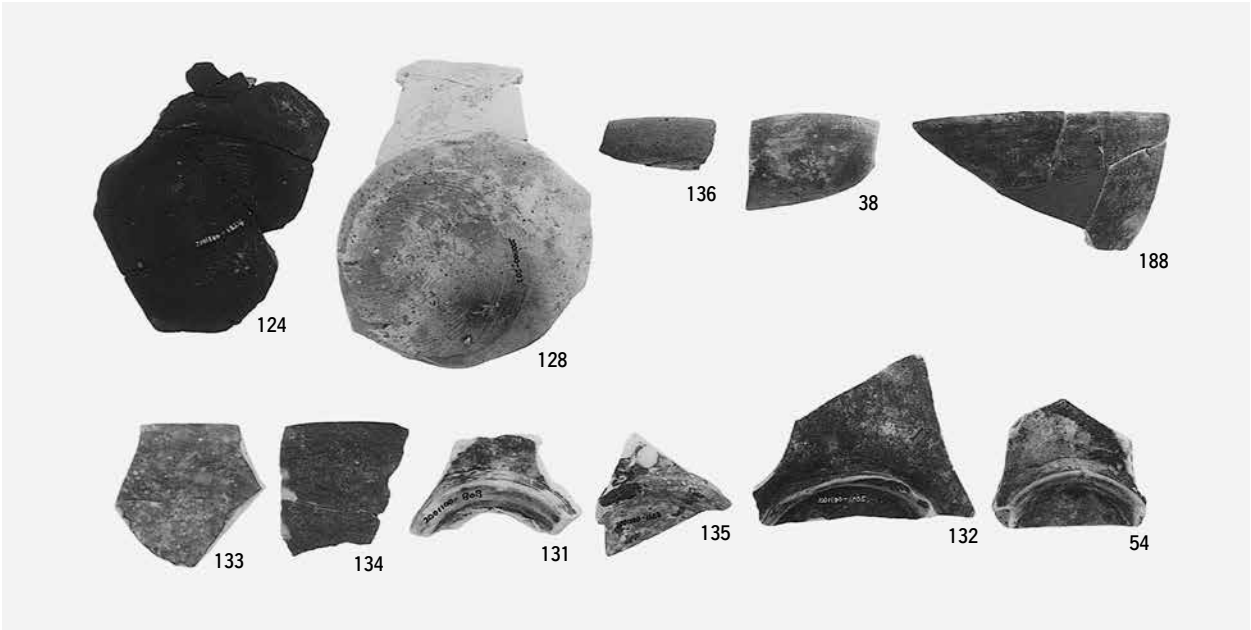
121

82

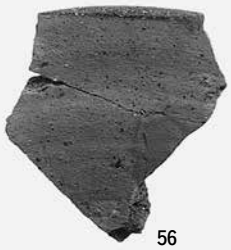

37

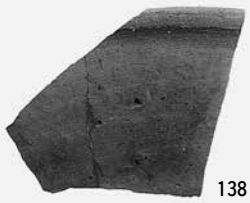
写真図版64　B地区　遺物





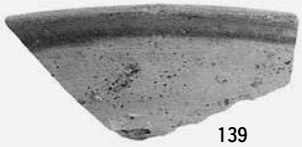
土器(5)

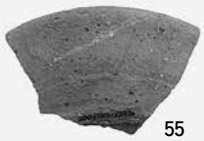

56


138

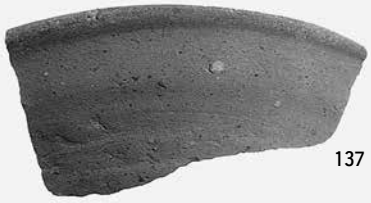
141

140


139


55

72


137

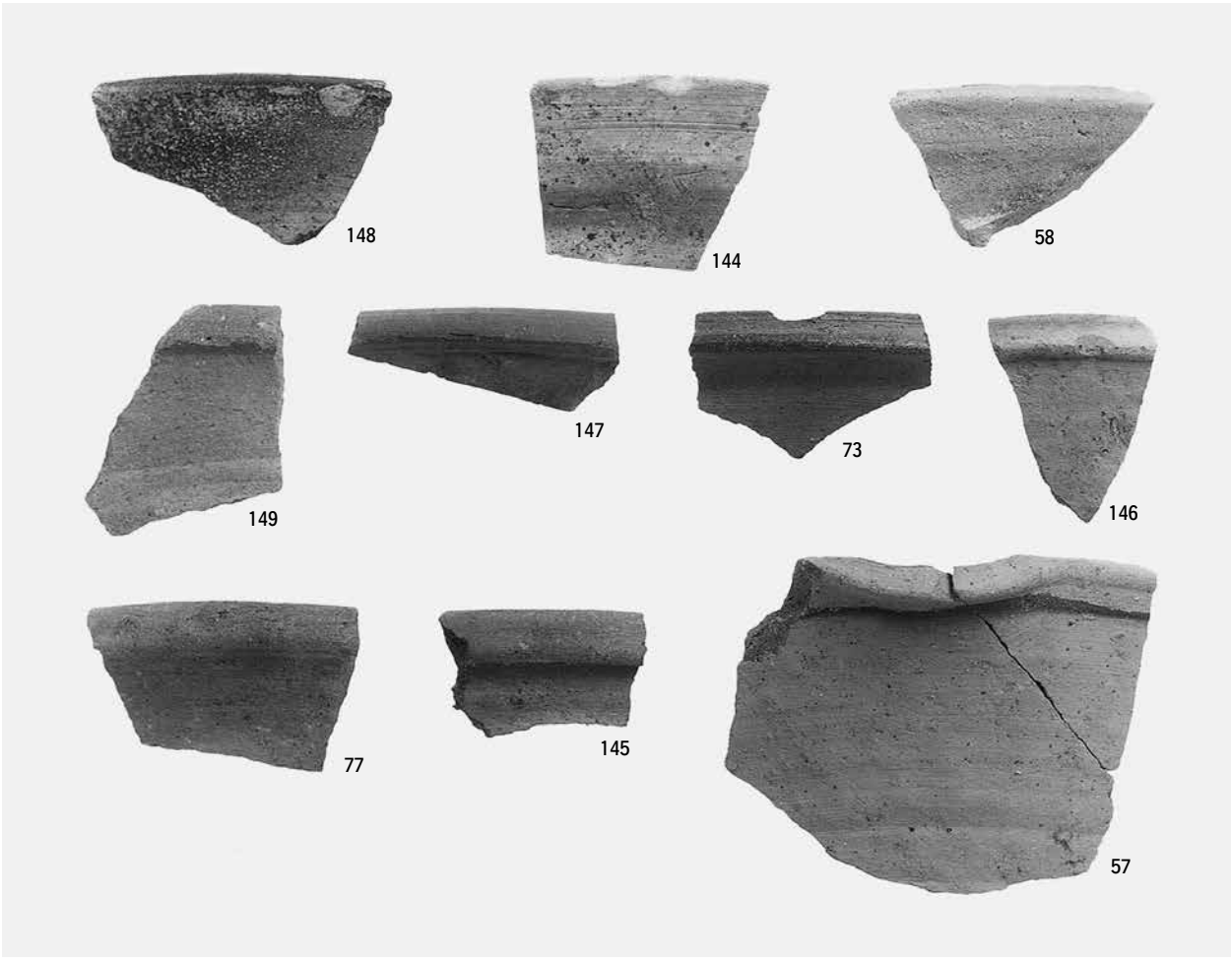
142

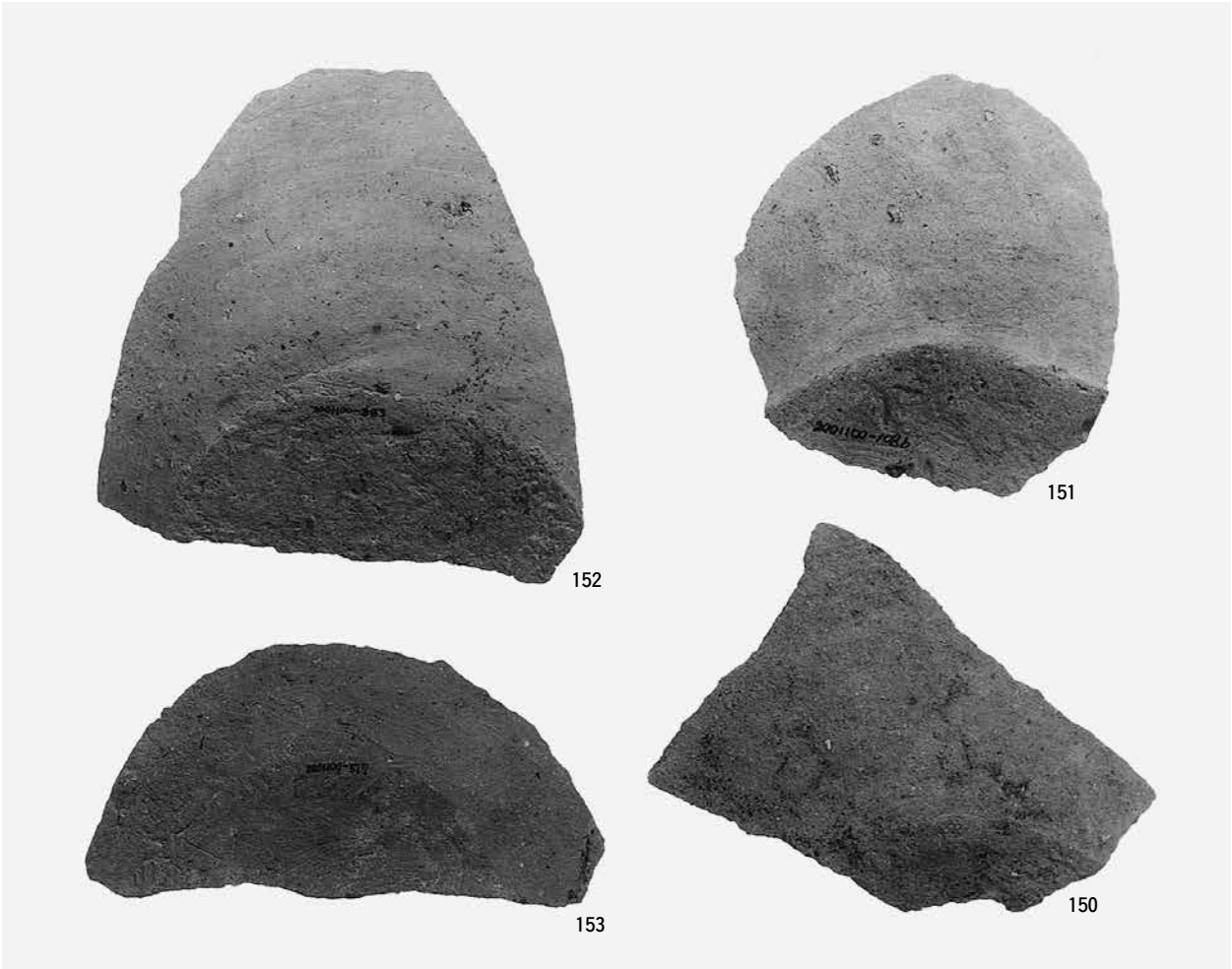
49

64

154

50





土器(7)

180

183

184

181

182

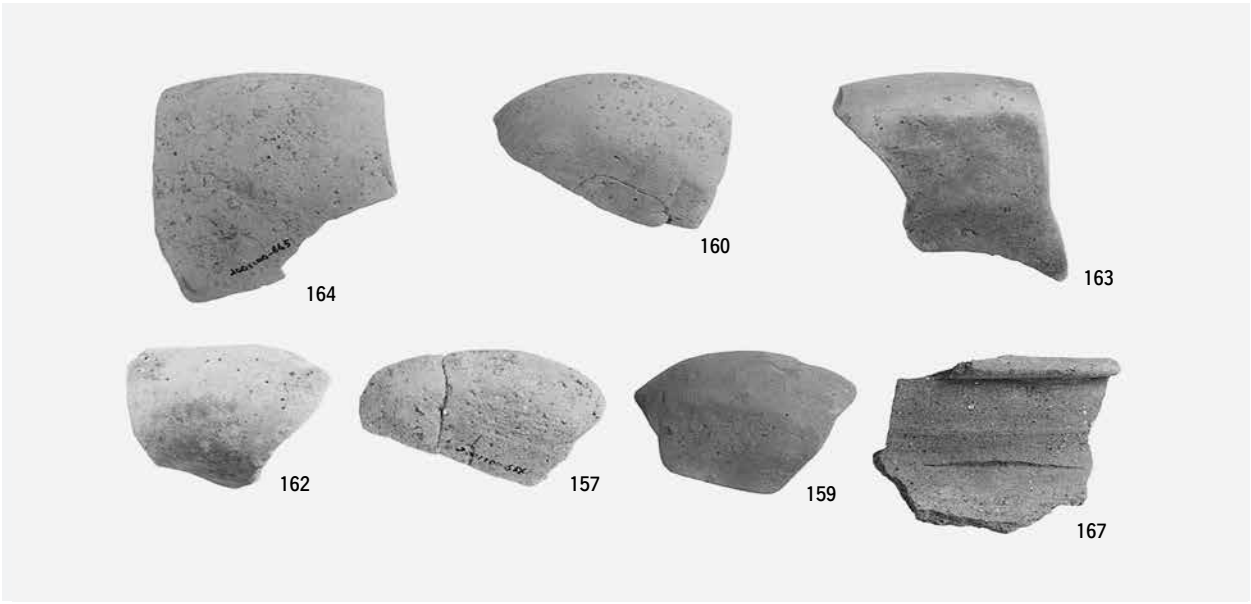
179

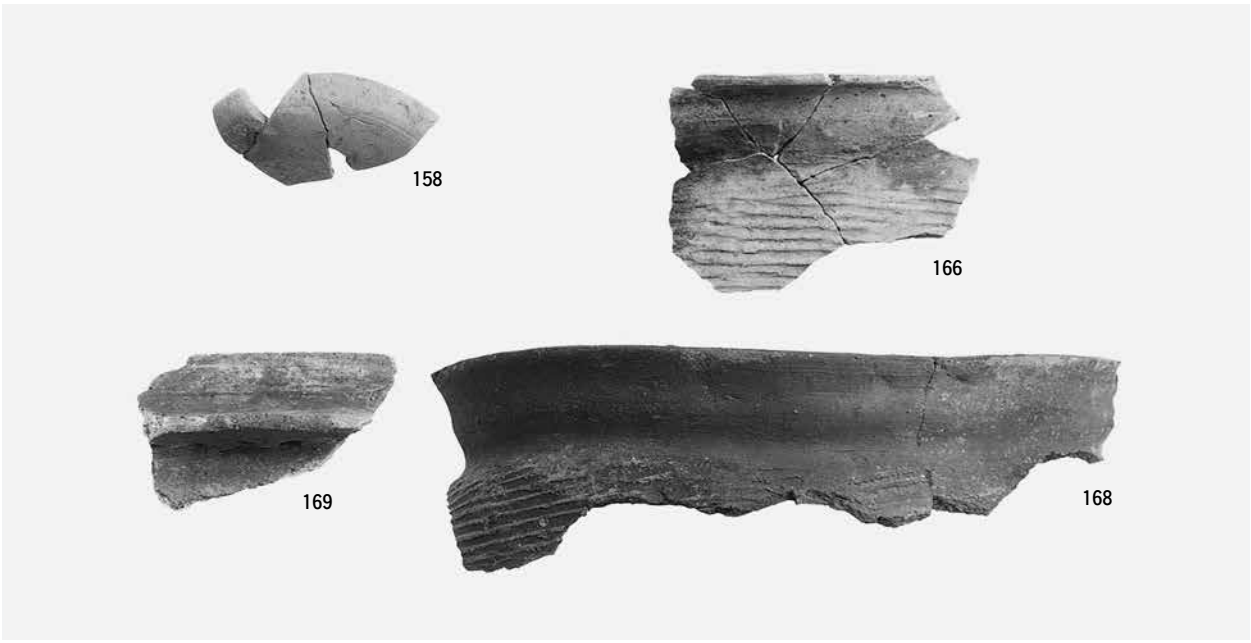
186

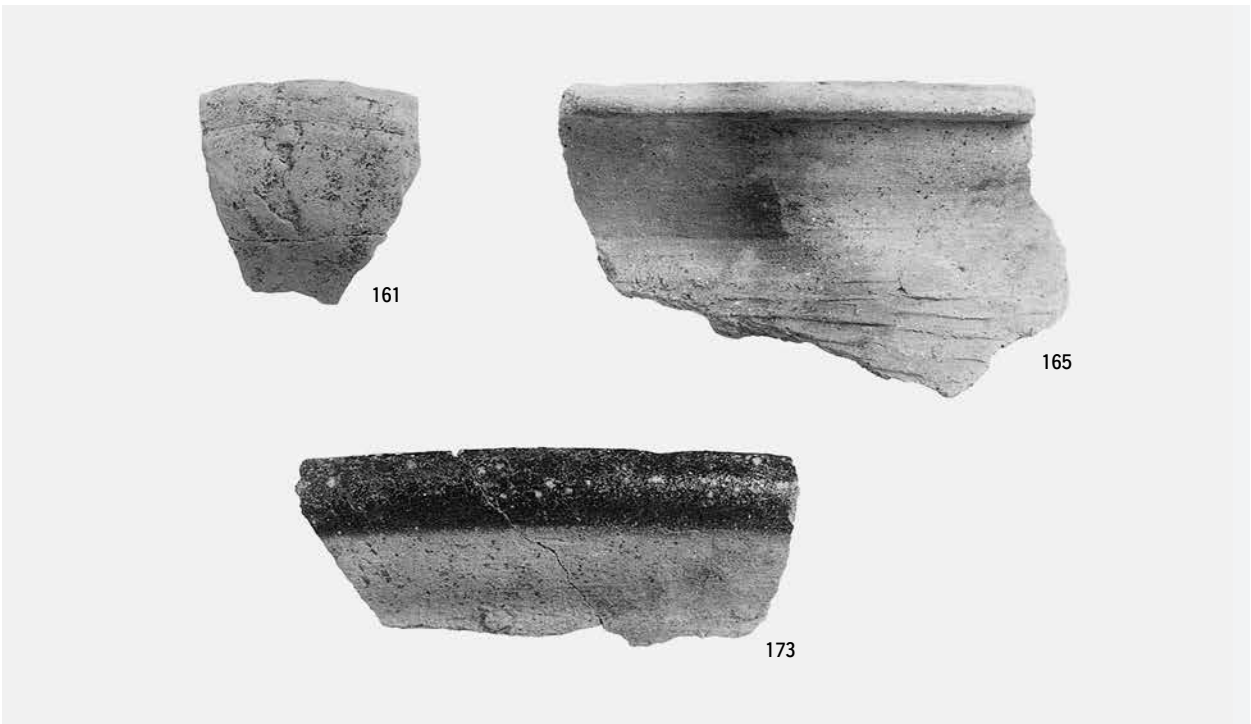
185

186

土器(8)







土器(9)

175

191

170

171

172

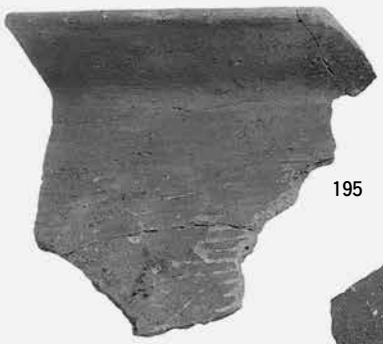
174

189

197

190

192


195

193

194

196

198

199

209

205

204

215

216

217

221

288

土器(11)

208

201

203

202

206

200

211

212

219

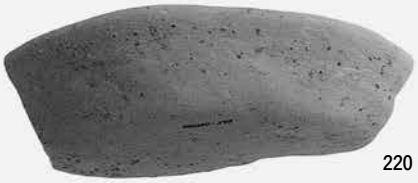
207

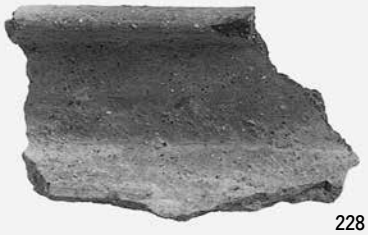
218

214

210

213

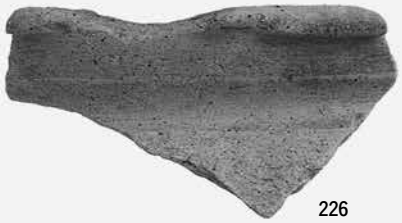

220


228

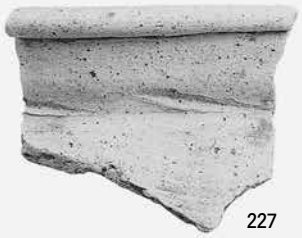
229

223

225


226

224


227

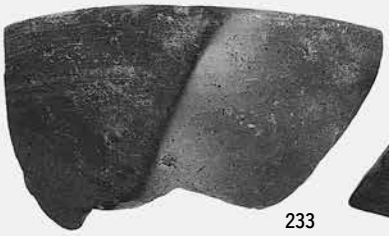
222

231

230

247

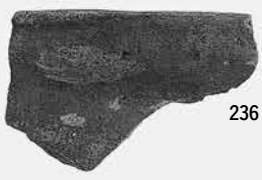
232


233

233

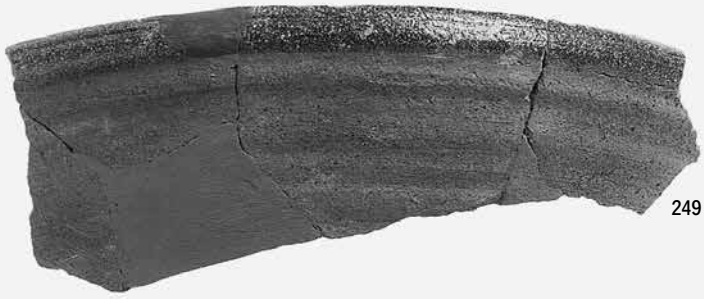
234

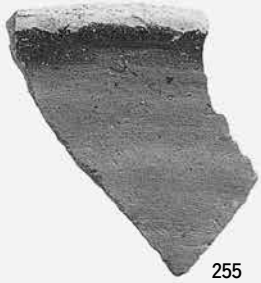
235


236

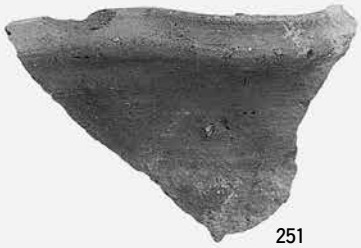
237

土器(13)

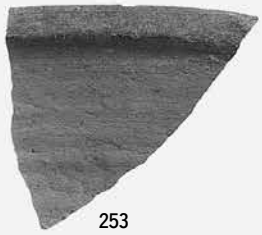

249

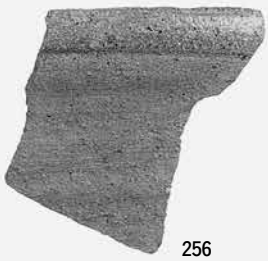

255

257


251

258


253


256

250

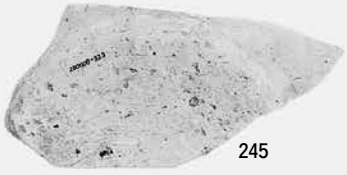
252

248

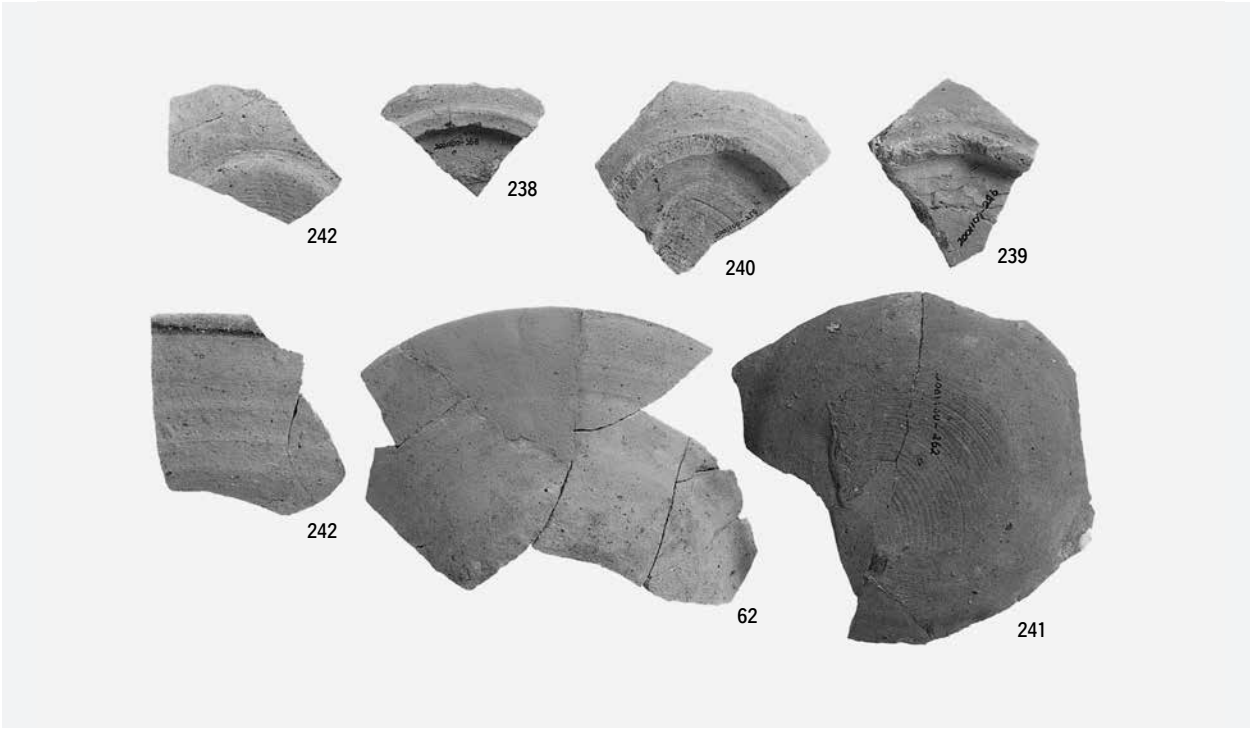
254

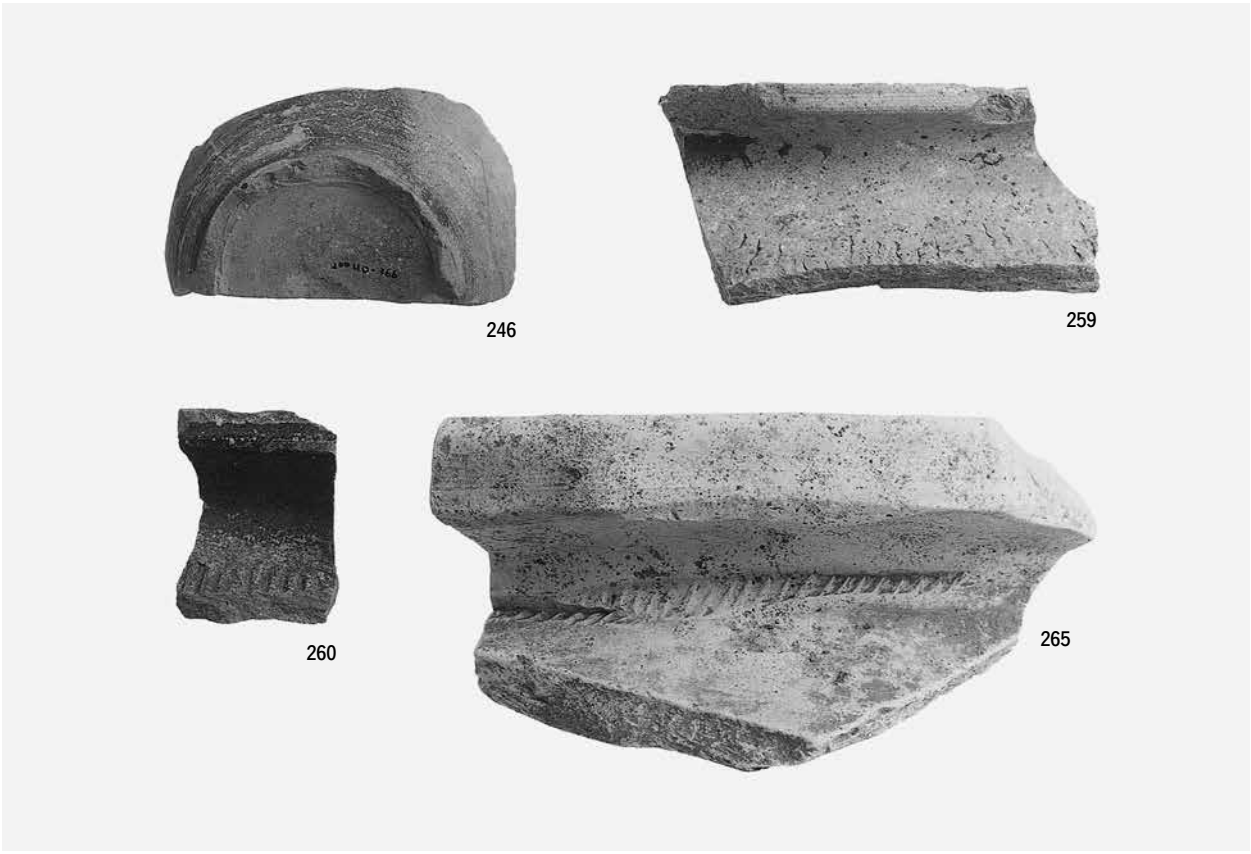
243

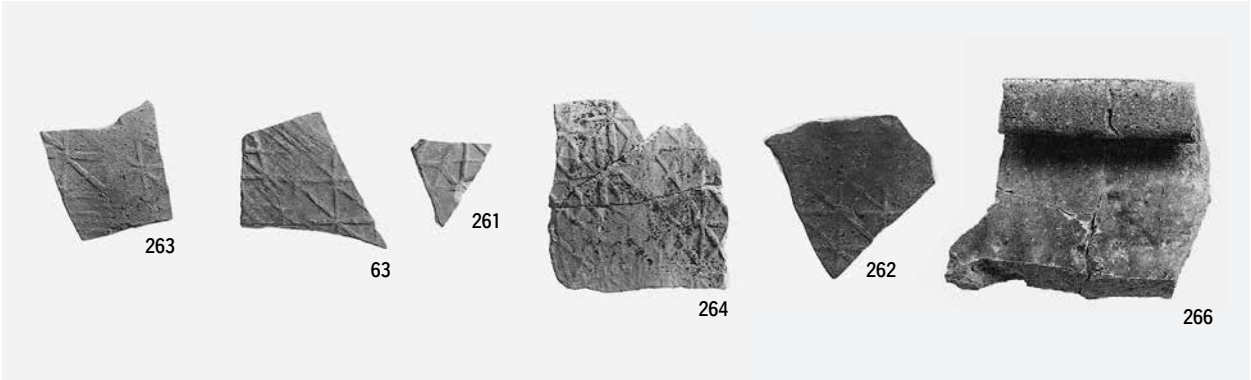
244


245

写真図版74　B地区　遺物

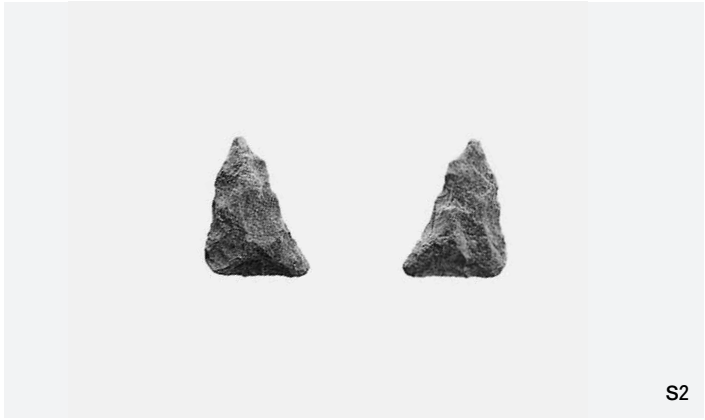






土器(15)

S1

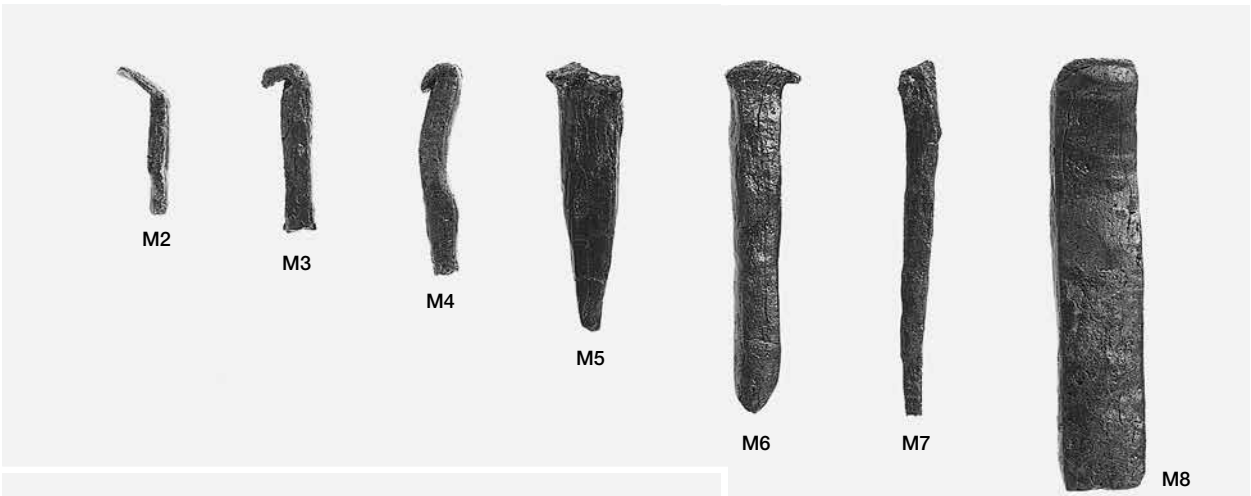


S2

S3

S4

S5


M2

M3

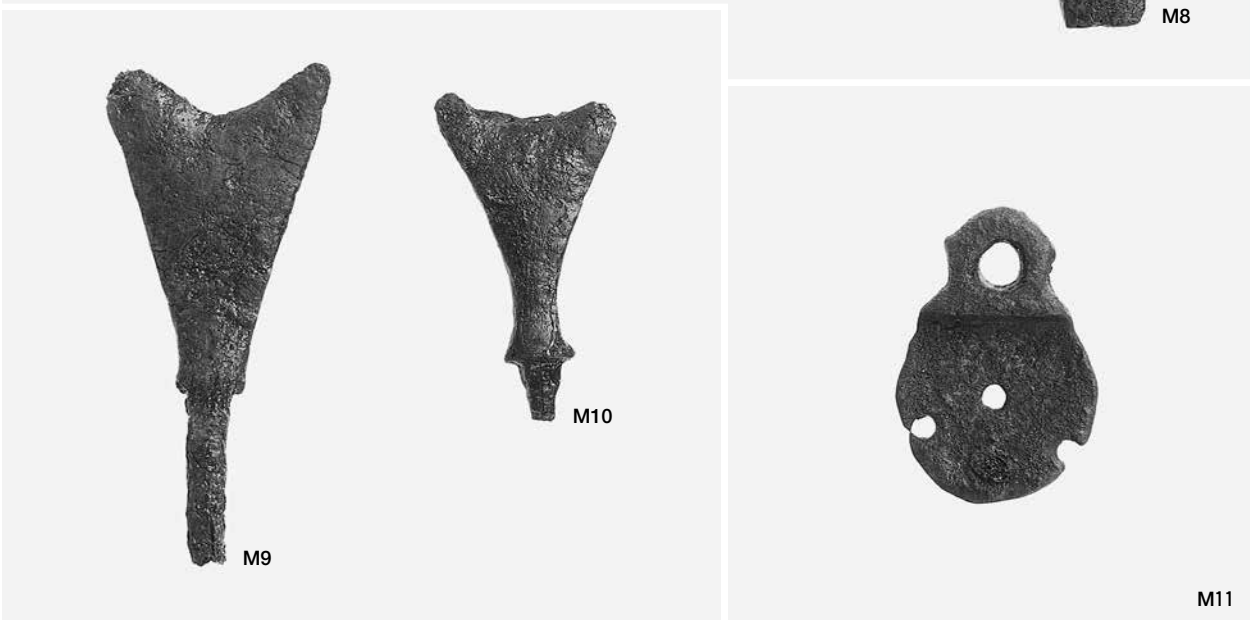
M4

M5

M6

M7

M8


M9

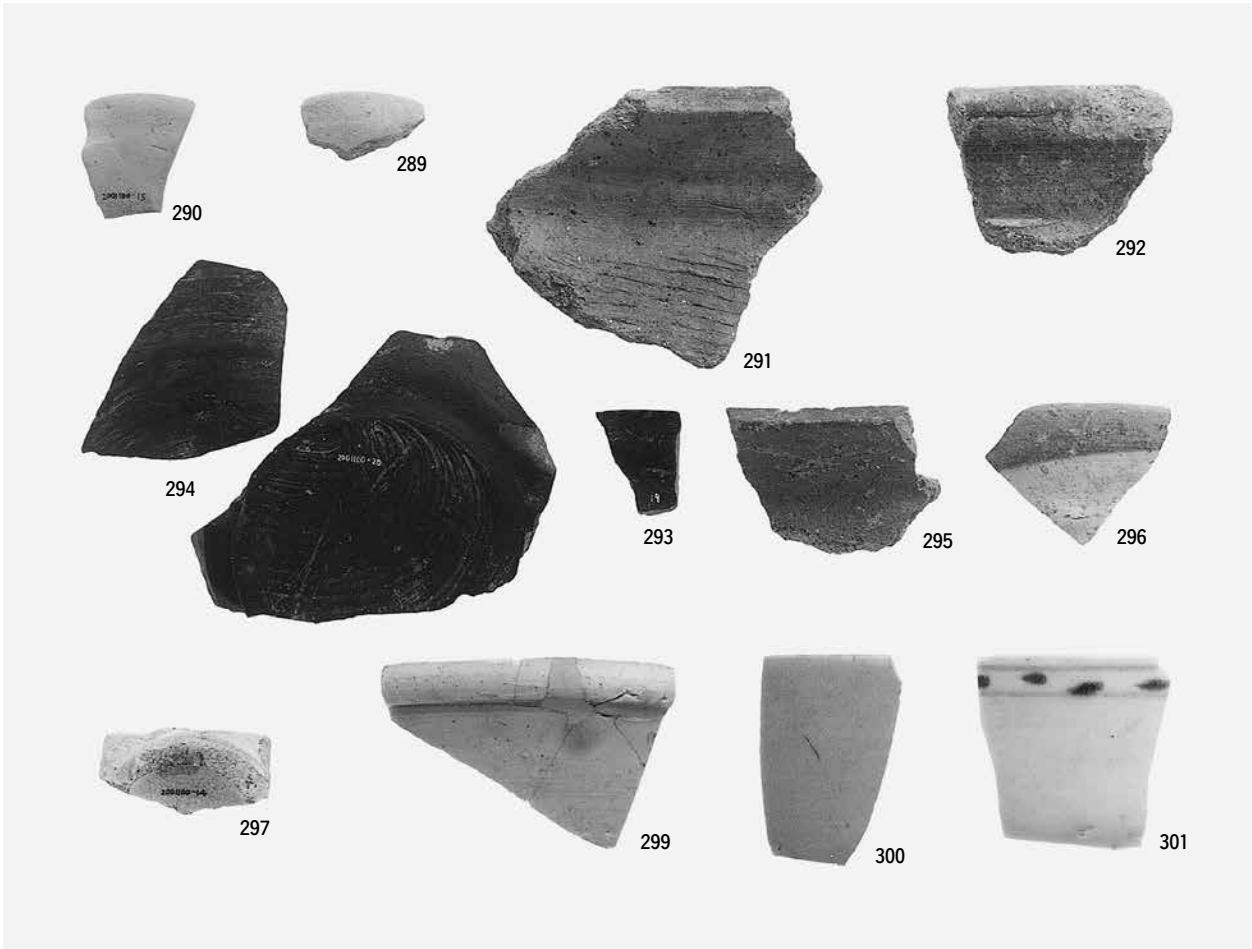
M10

M11

M12

M13

121　C地区全景（南東から）

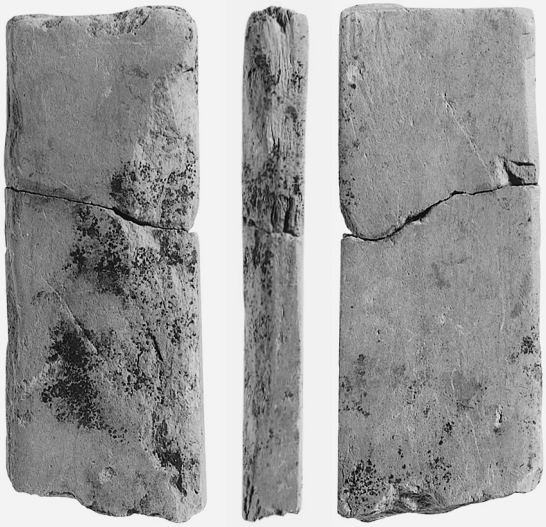


土器（1）

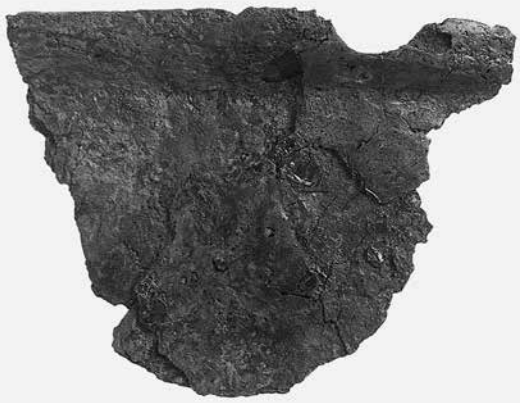
298

M16

M15



S6



M14

土器(2)・石器・金属器

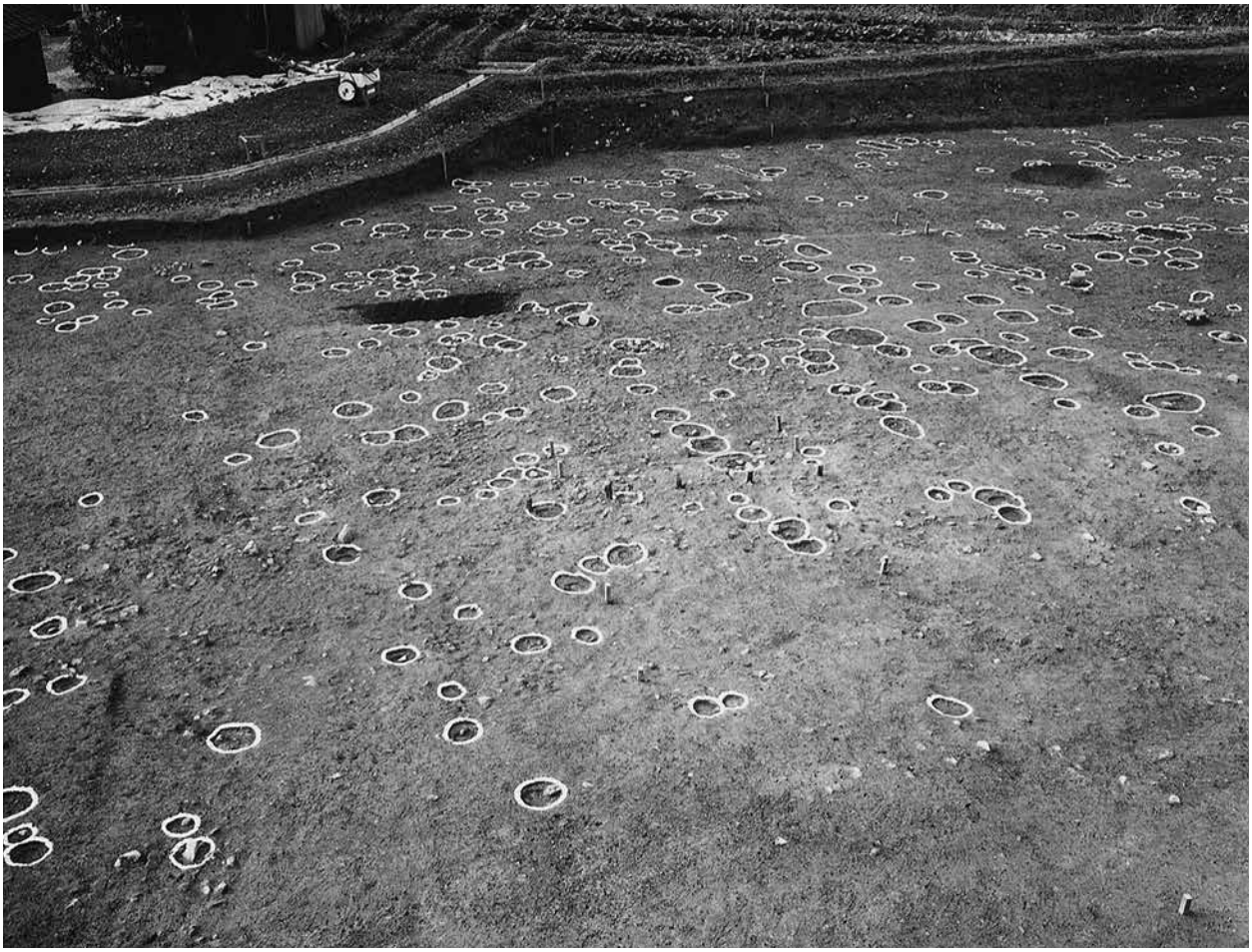
122 D地区全景（南西から）

123 D地区全景（北から）

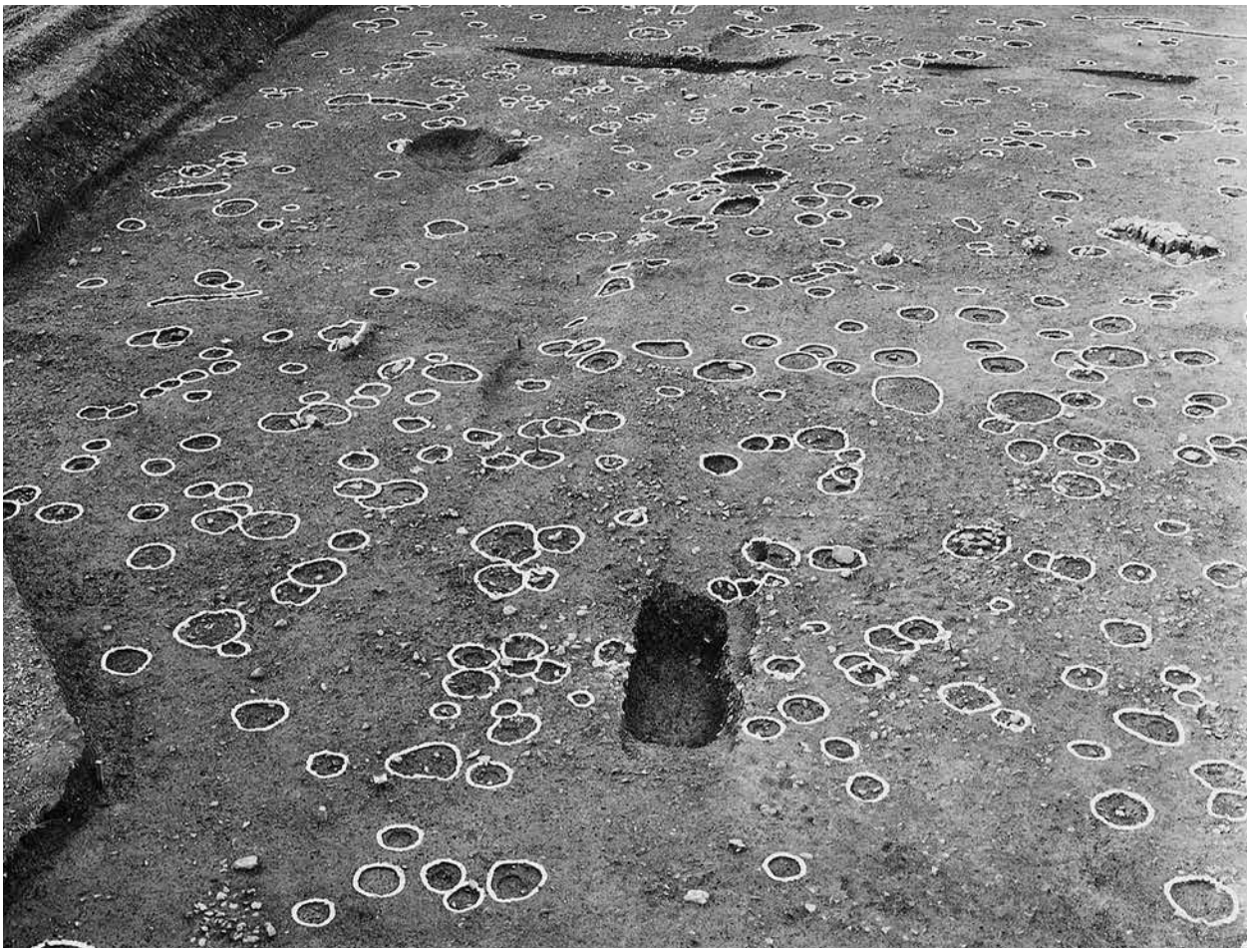
124 D地区全景（北から）

125 D地区全景（南東から）

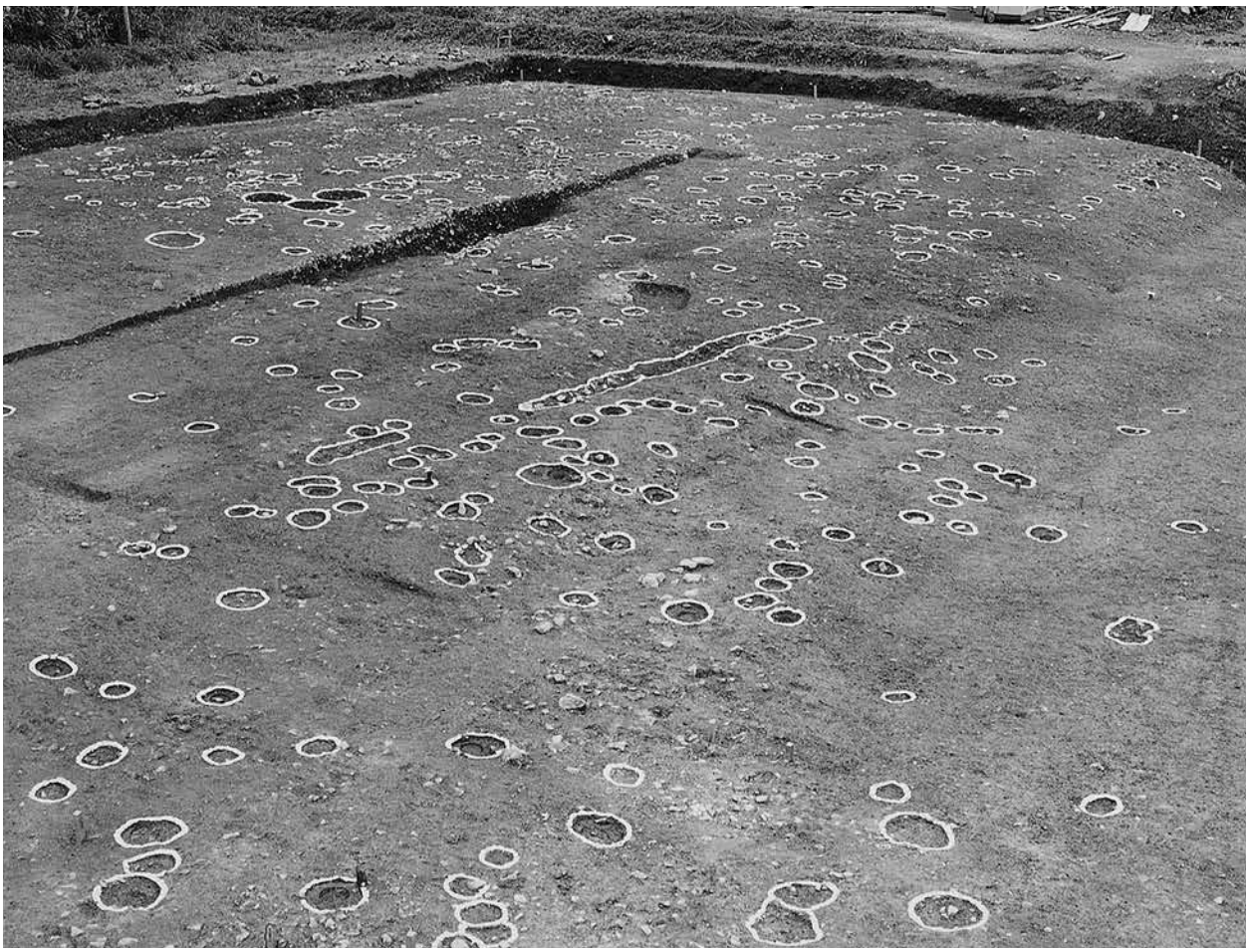
126 D地区全景（南東から）



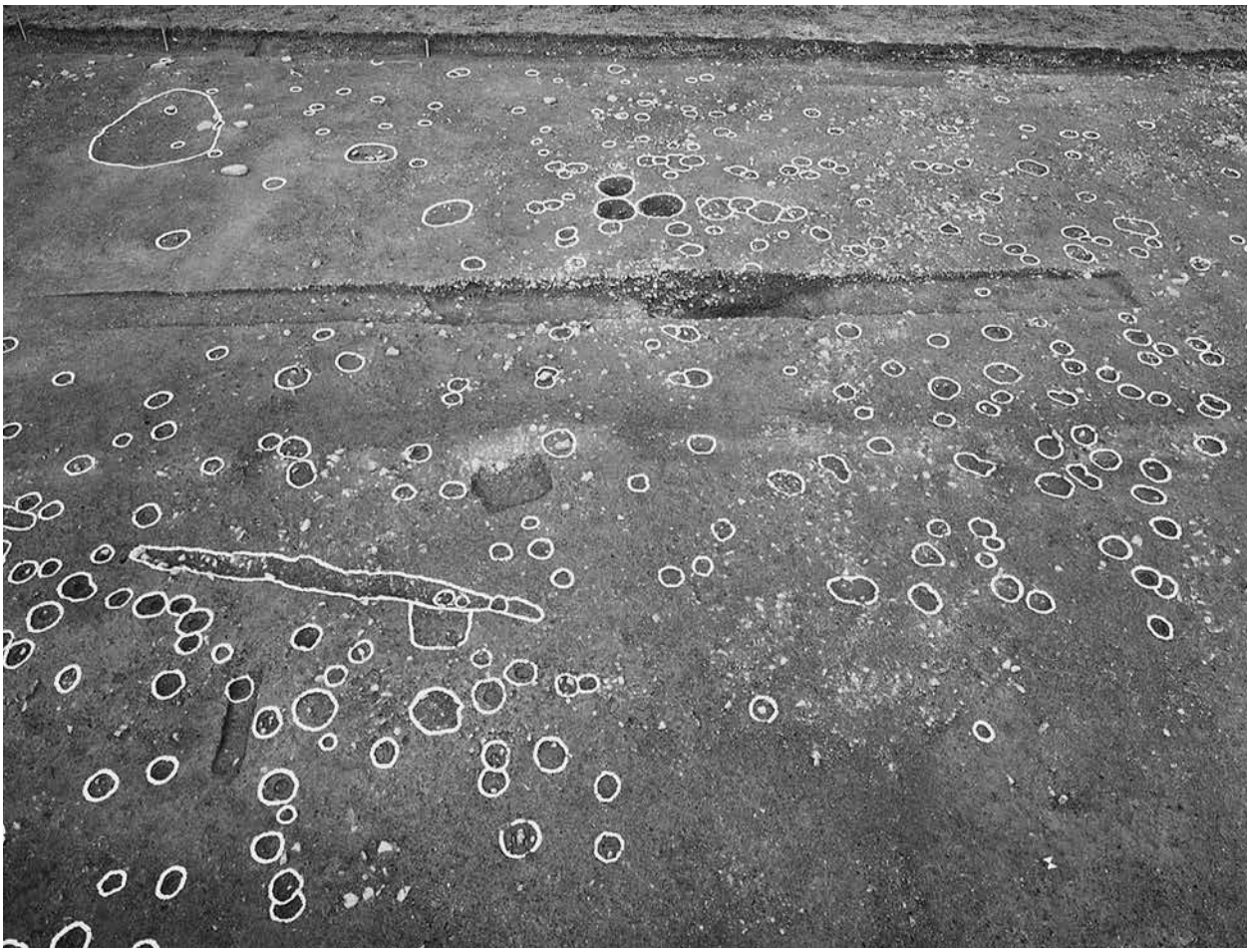
127 掘立柱建物SB007D・SB008D・SB009D・SB011D（北東から）



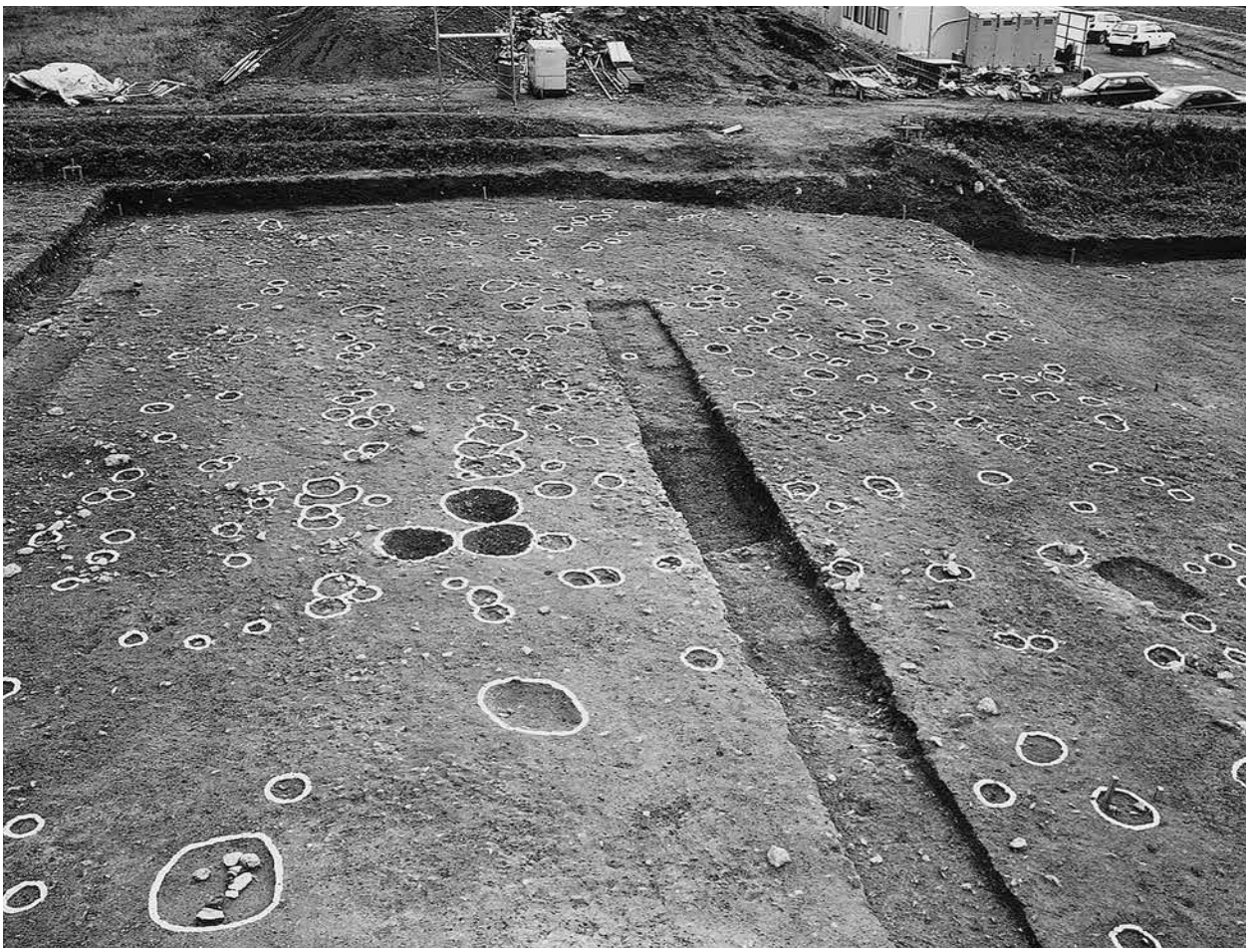
128 掘立柱建物SB007D・SB008D・SB009D・SB011D（南東から）



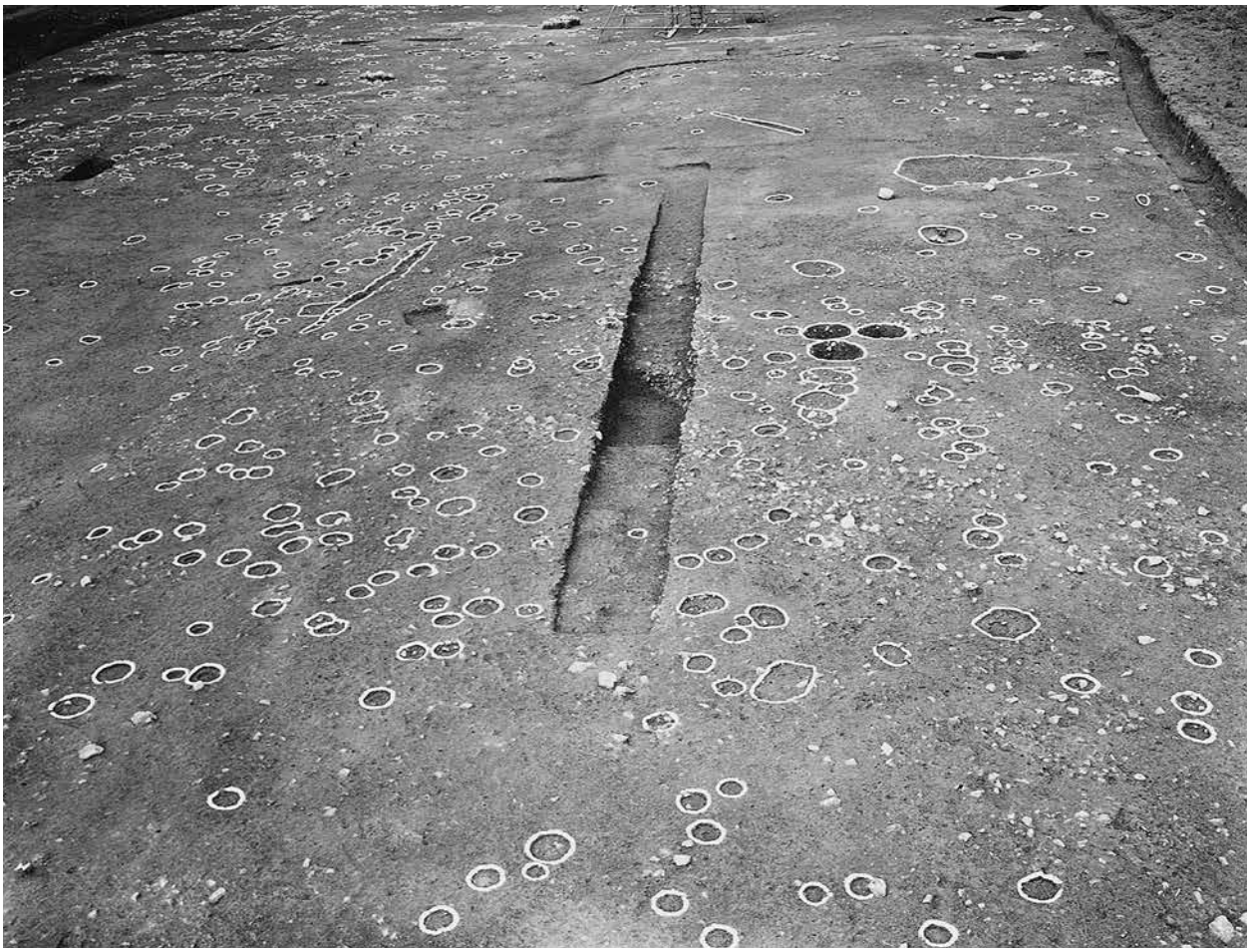
129 掘立柱建物SB008D～SB019D（西から）



130 掘立柱建物SB008D～SB019D（南東から）

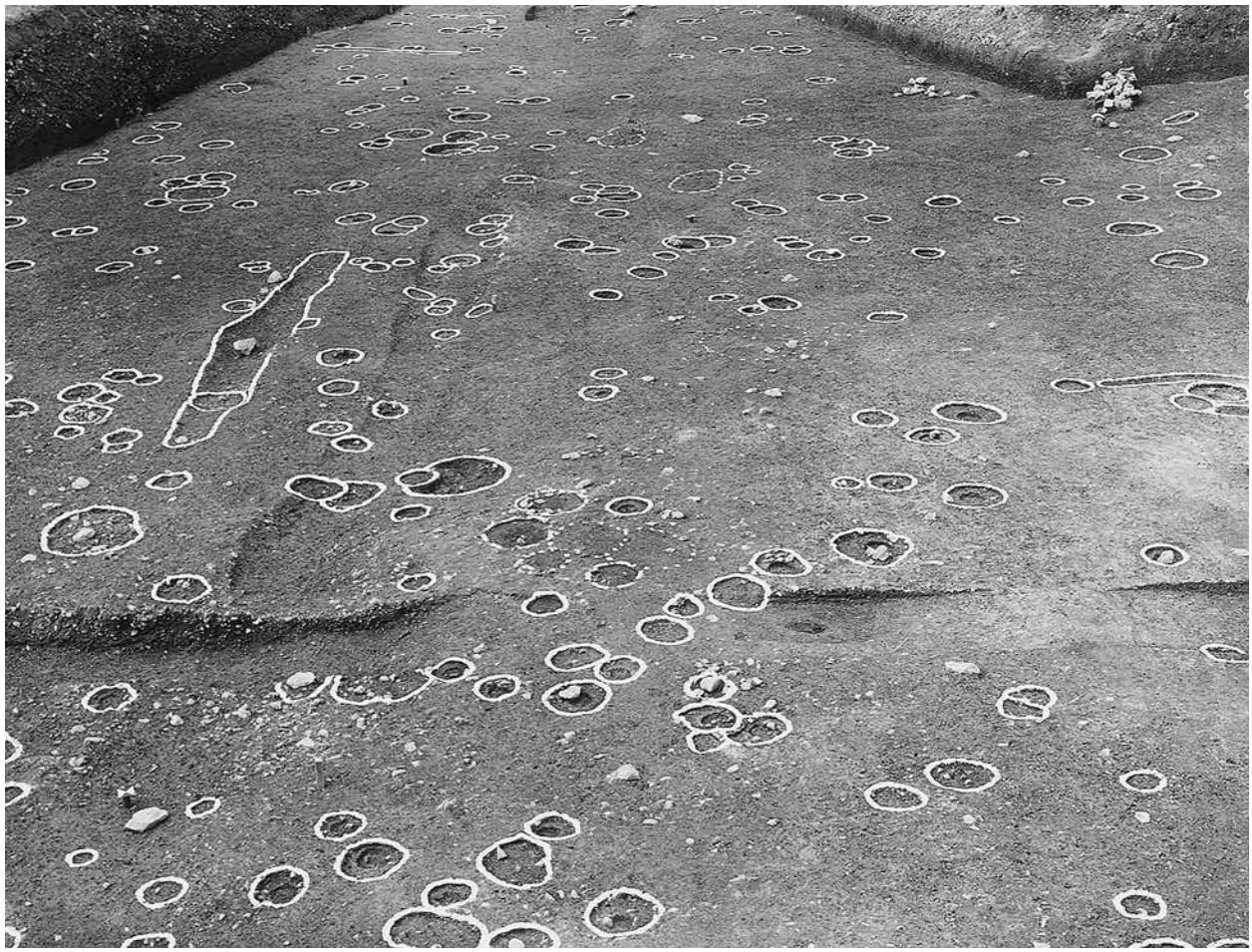


131 掘立柱建物SB015D～SB019D（北西から）

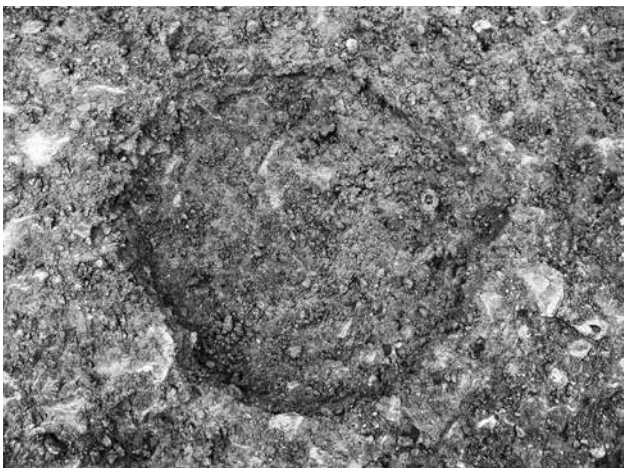


132 掘立柱建物SB016D～SB019D（南西から）

133 掘立柱建物SB001D・SB002D、鍛冶炉群（北西から）

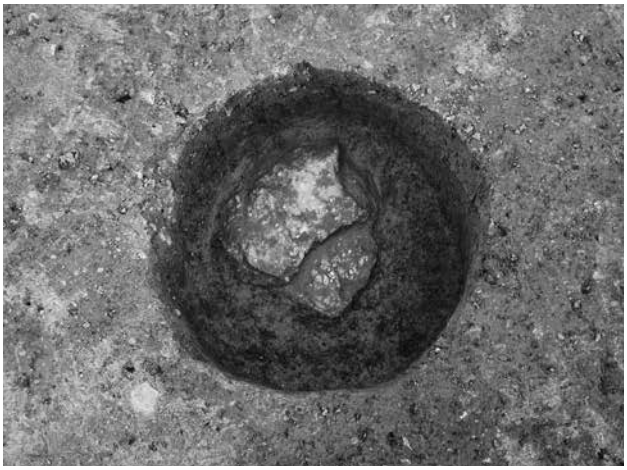


134 鍛冶炉群（南東から）

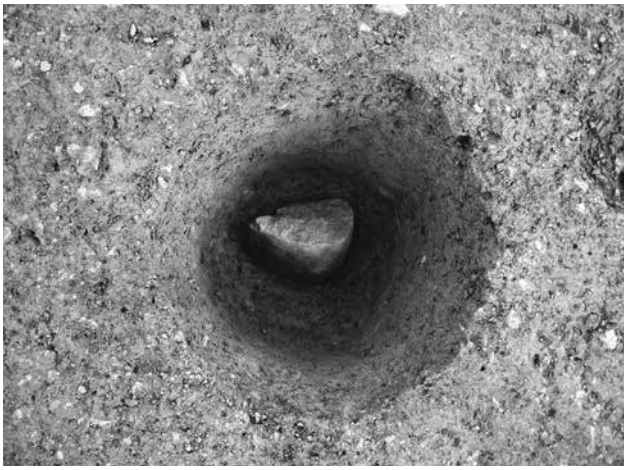


135 柱穴P0122D遺物出土状況(北西から)

136 柱穴P0075D遺物出土状況(南西から)



137 柱穴P0137D(南西から)



138 柱穴P0028D(北西から)

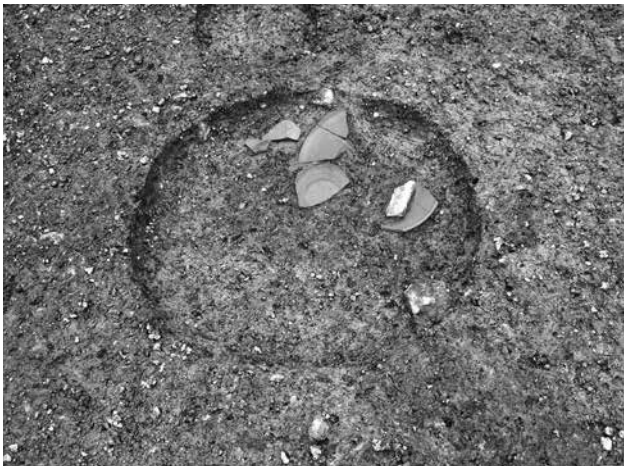
139 柱穴P0101D土層断面(南東から)

140 柱穴P0089D遺物出土状況(北西から)

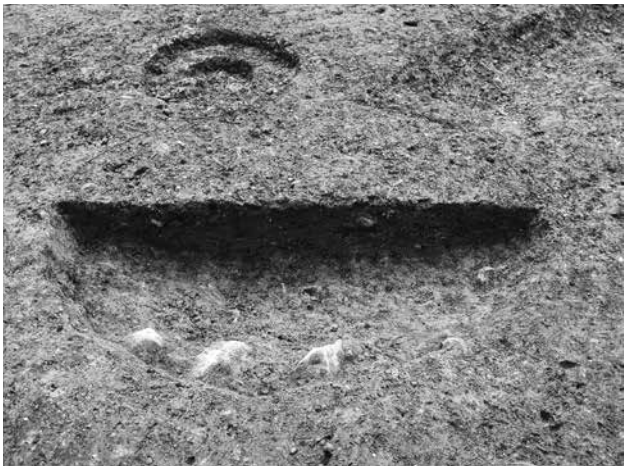
141 柱穴P0341D土層断面(南東から)

142 柱穴P0327D土層断面(北西から)

143 土坑SK005D検出状況（南から）



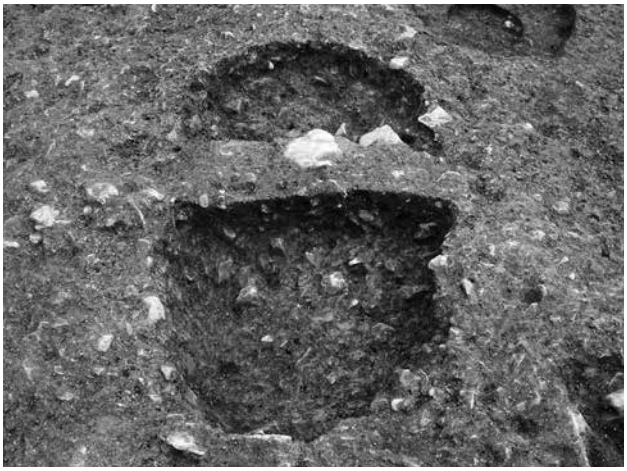
144 土坑SK154D遺物出土状況（南から）



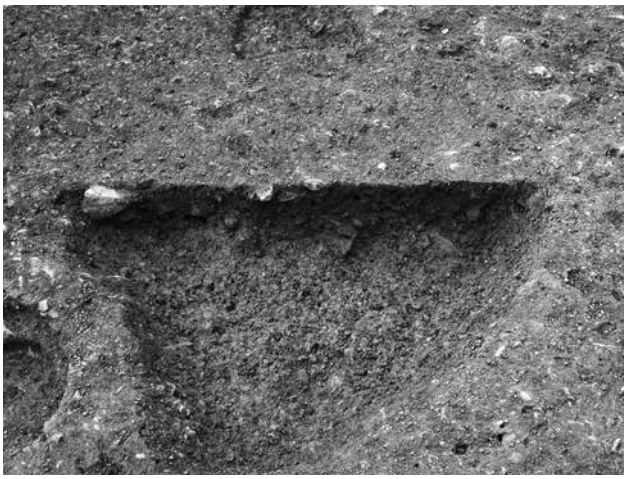
145 土坑SK212D土層断面（南から）

146 土坑SK213D土層断面（南東から）

147 土坑SK214D土層断面（北西から）

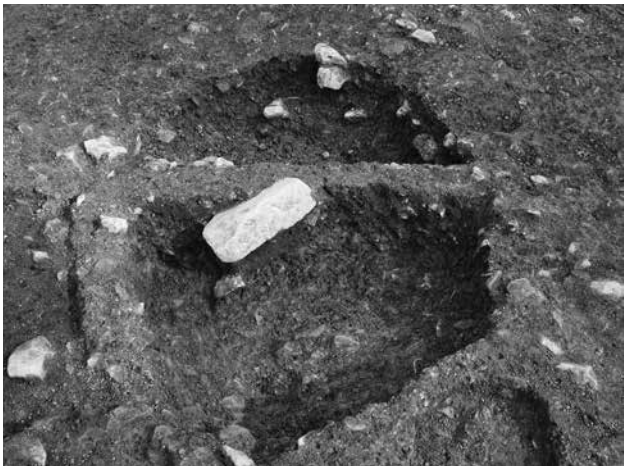


148 土坑SK218D土層断面（北西から）



149 土坑SK262D土層断面（南東から）

150 土坑SK617D土層断面（北東から）



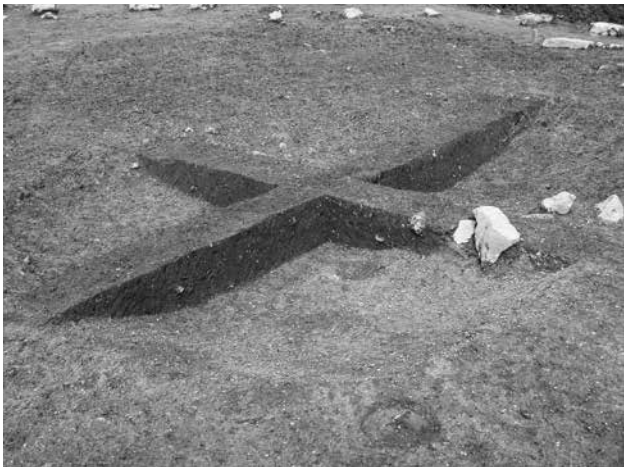
151 土坑SK217D土層断面(南西から)

152 土坑SK226D遺物出土状況(西から)

153 土坑SK123D・SK161D・SK162D(西から)

154 土坑SK162D土層断面(西から)

155 土坑SK004D土層断面(南から)



156 土坑SK153D土層断面(南から)

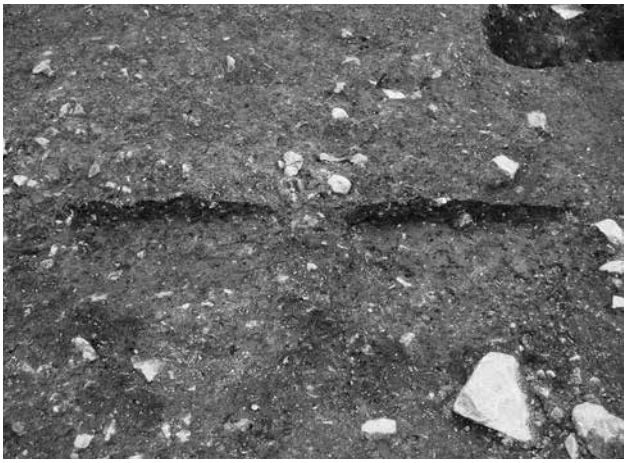
157 集石SS108D(東から)

158 集石SS108D(北東から)

159 土坑SK103D（西から）

160 焼土SF271D検出状況（南西から）

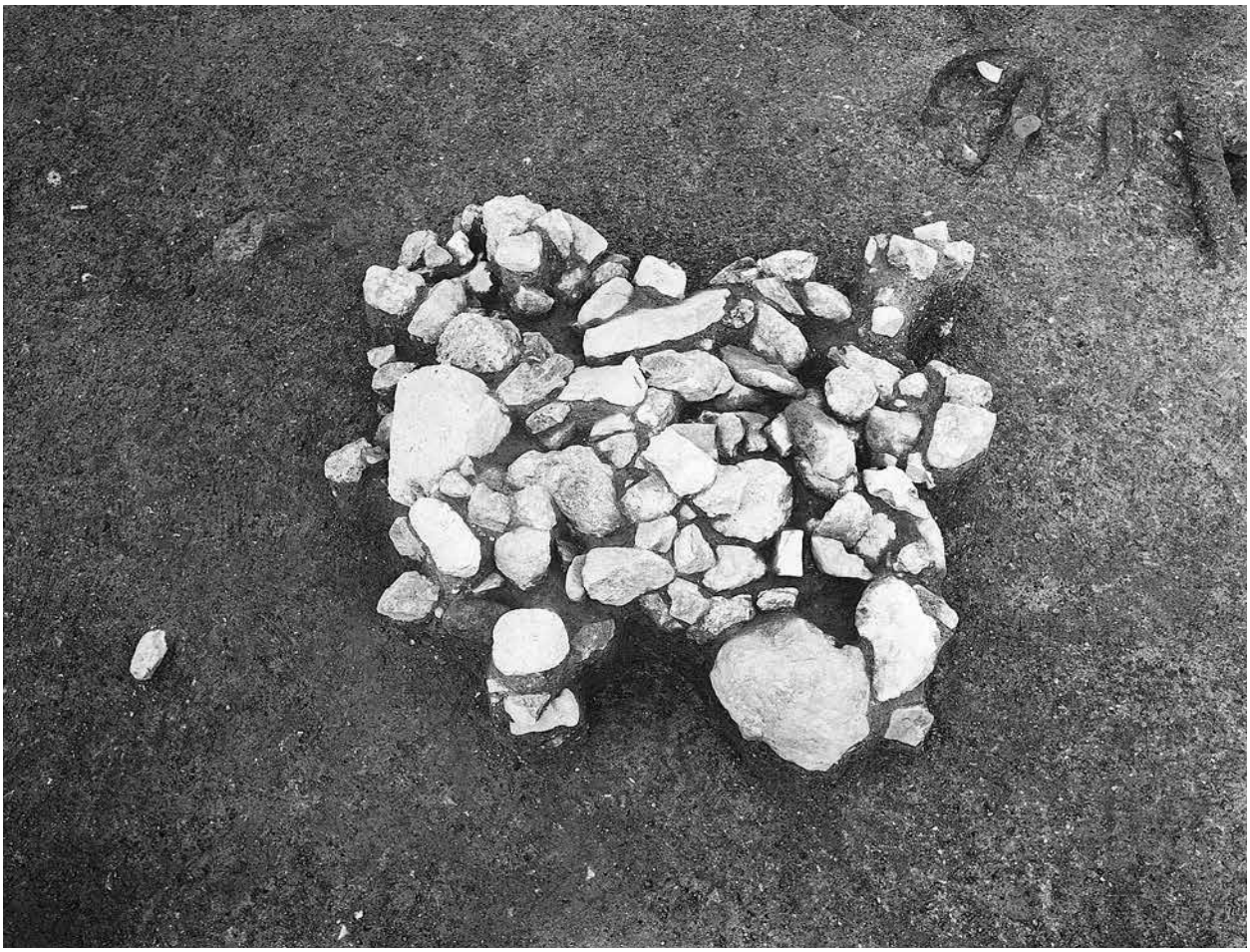
161 焼土SF001DSF187D検出状況（南西から）



162 焼土SF271D土層断面（南西から）

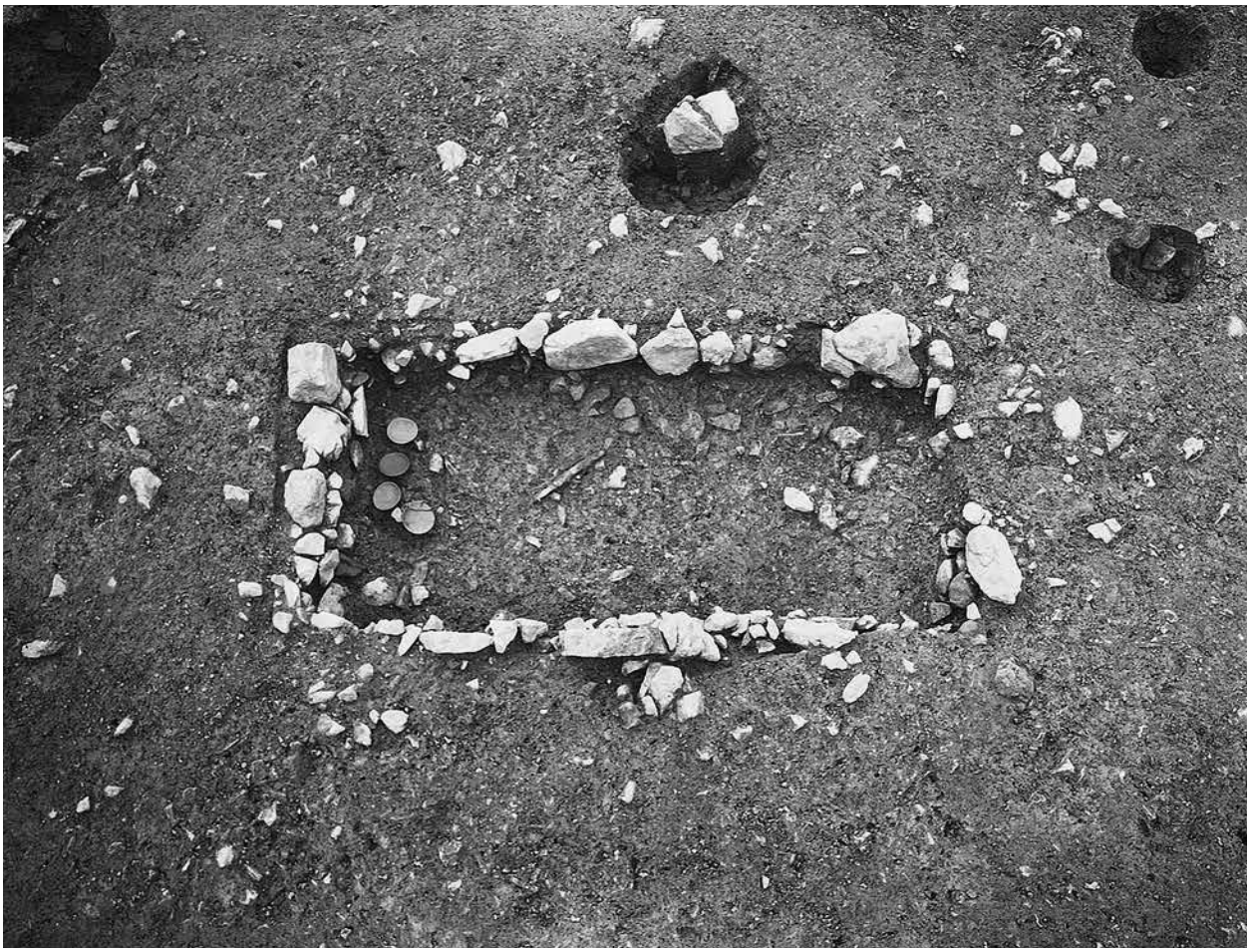
163 焼土SF279D土層断面（北西から）

164 集石SS006D（南東から）



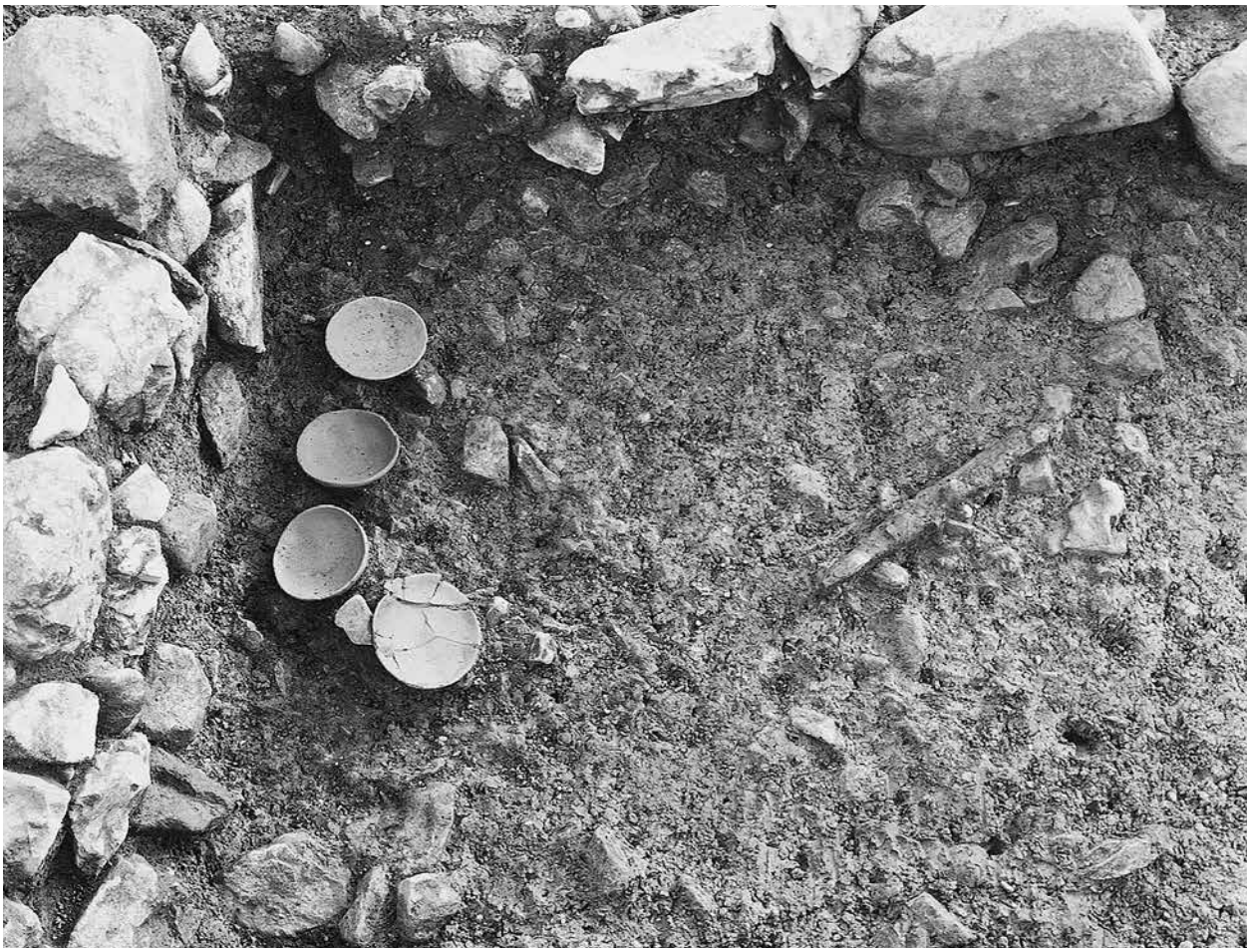
165 集石SS007D（南西から）

166 木棺墓ST215D検出状況（北から）

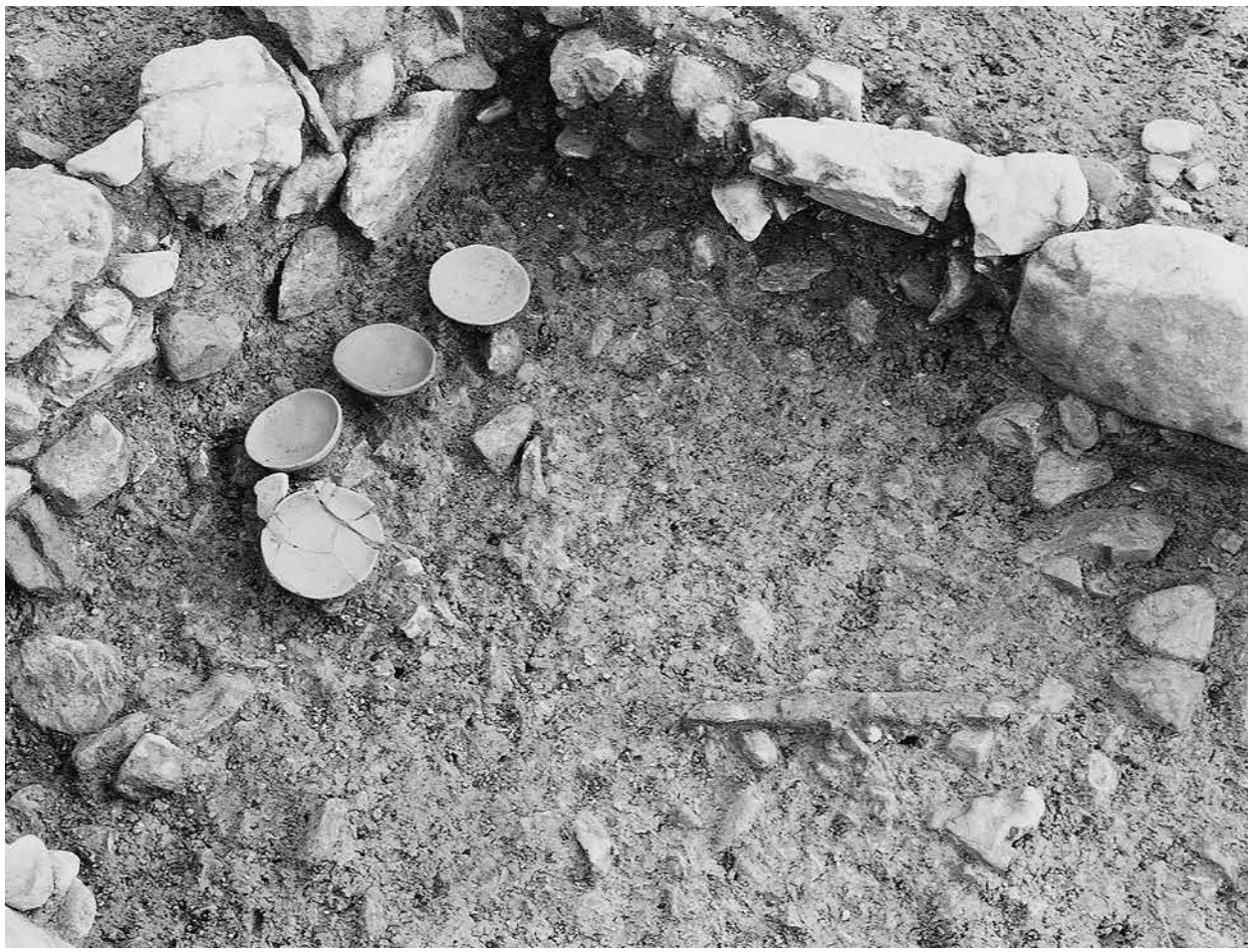


167 木棺墓ST215D（北から）

168 木棺墓ST215D（西から）



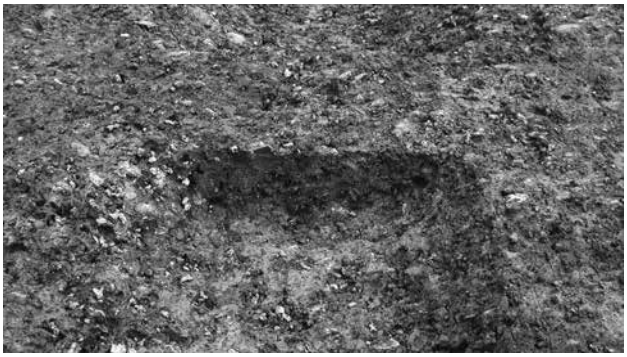
169 木棺墓ST215D遺物出土状況（北から）



170 木棺墓ST215D（北西から）

171 木棺墓ST215D遺物出土状況（東から）

172 溝SD189D土層断面（北西から）

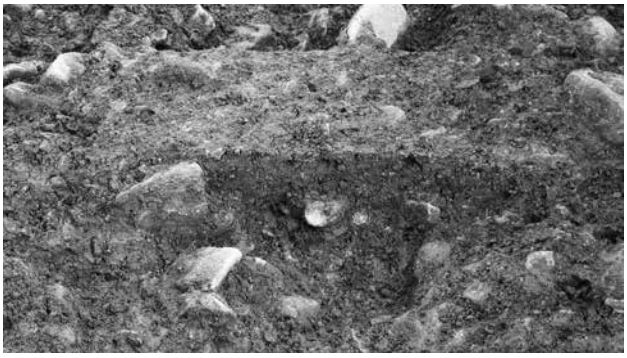


173 溝SD209D土層断面（南西から）

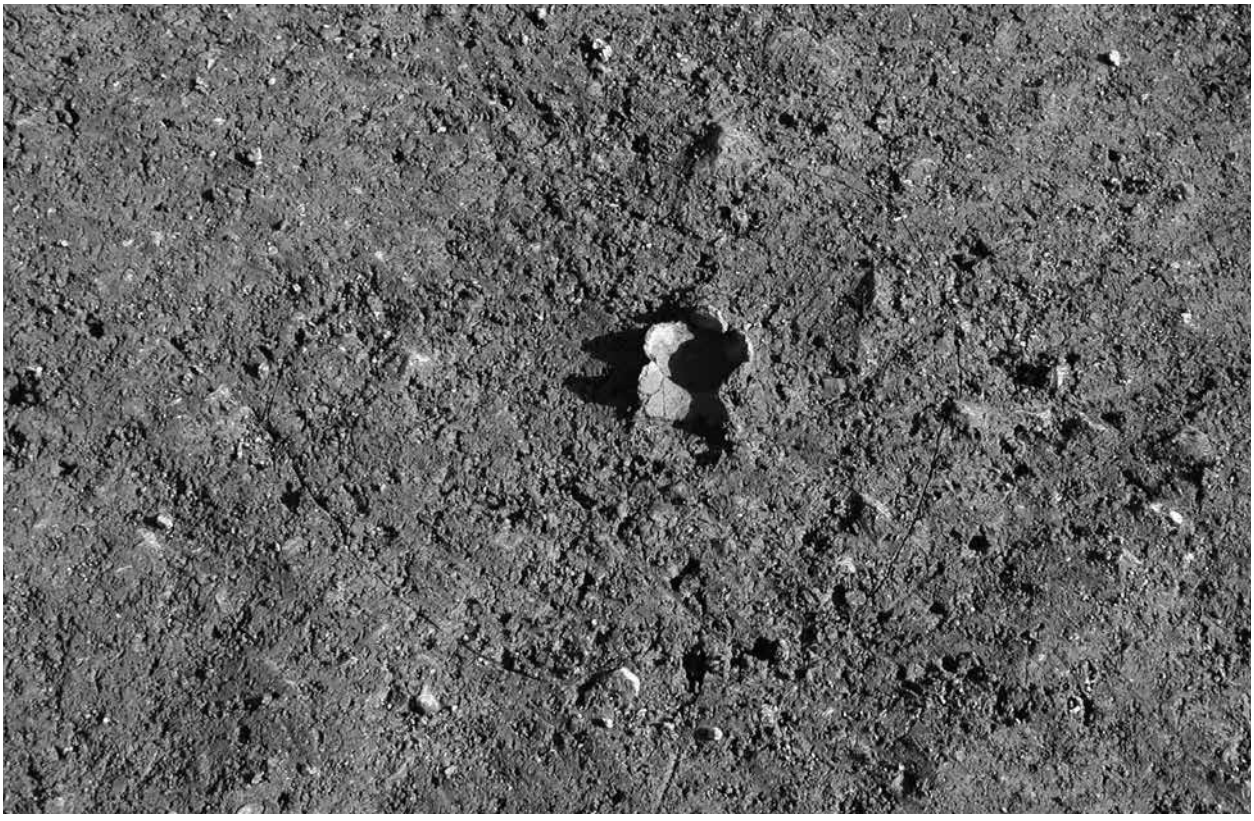
174 溝SD210D土層断面（南西から）

175 溝SD374D土層断面（南西から）

176 溝SD375D土層断面（南西から）



177 溝SD376D土層断面（北西から）



178 土坑SK207D検出状況（南西から）

179　D－3区遠景(西から)

180　D－3区全景(北東から)

181　D－3区全景(西から)

309

352

306

329

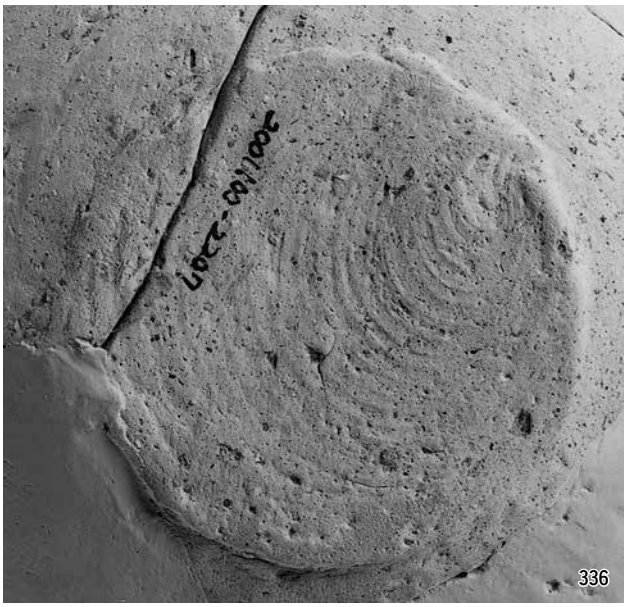
311

330

314

336

313


336

土器(1)

339

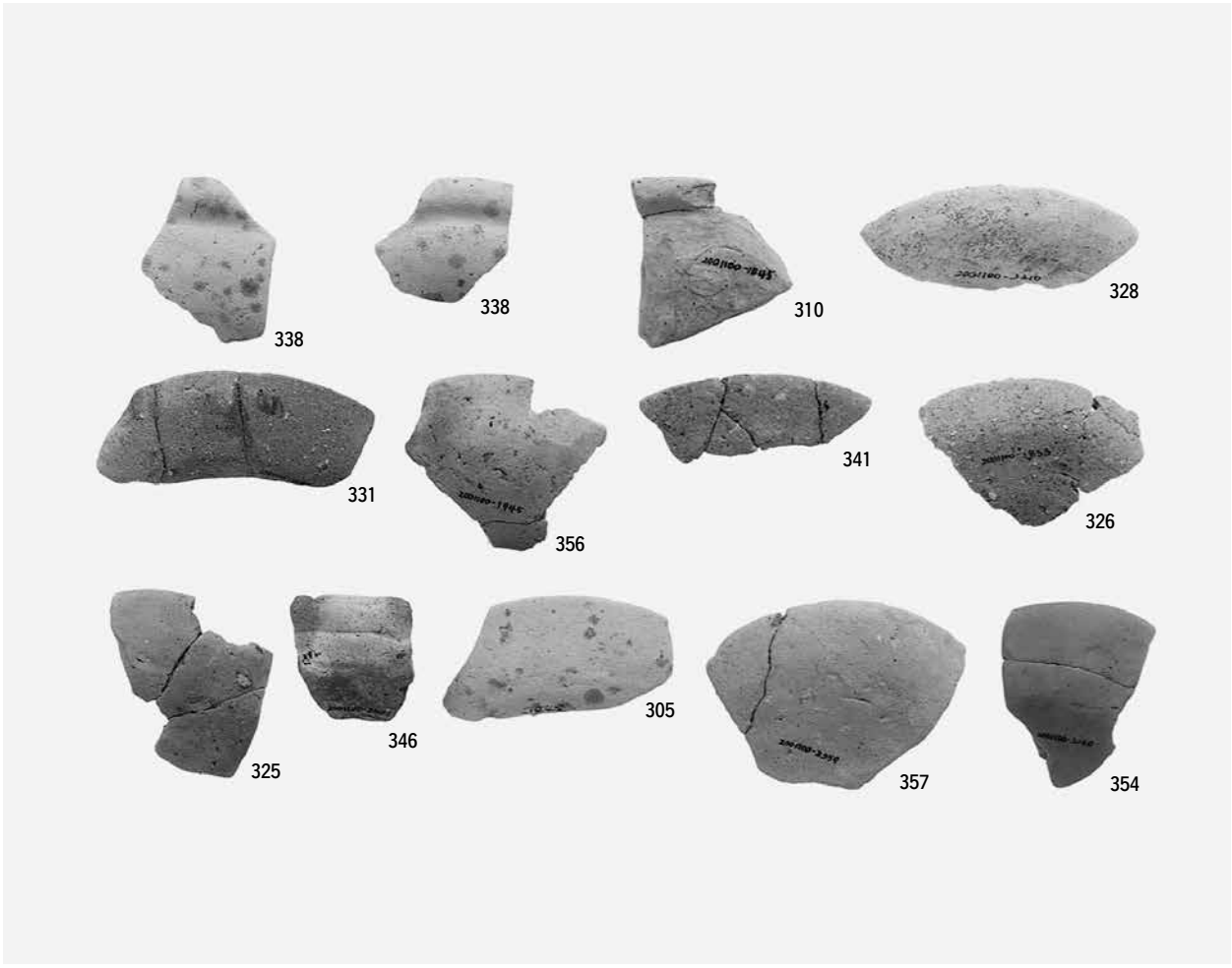
340

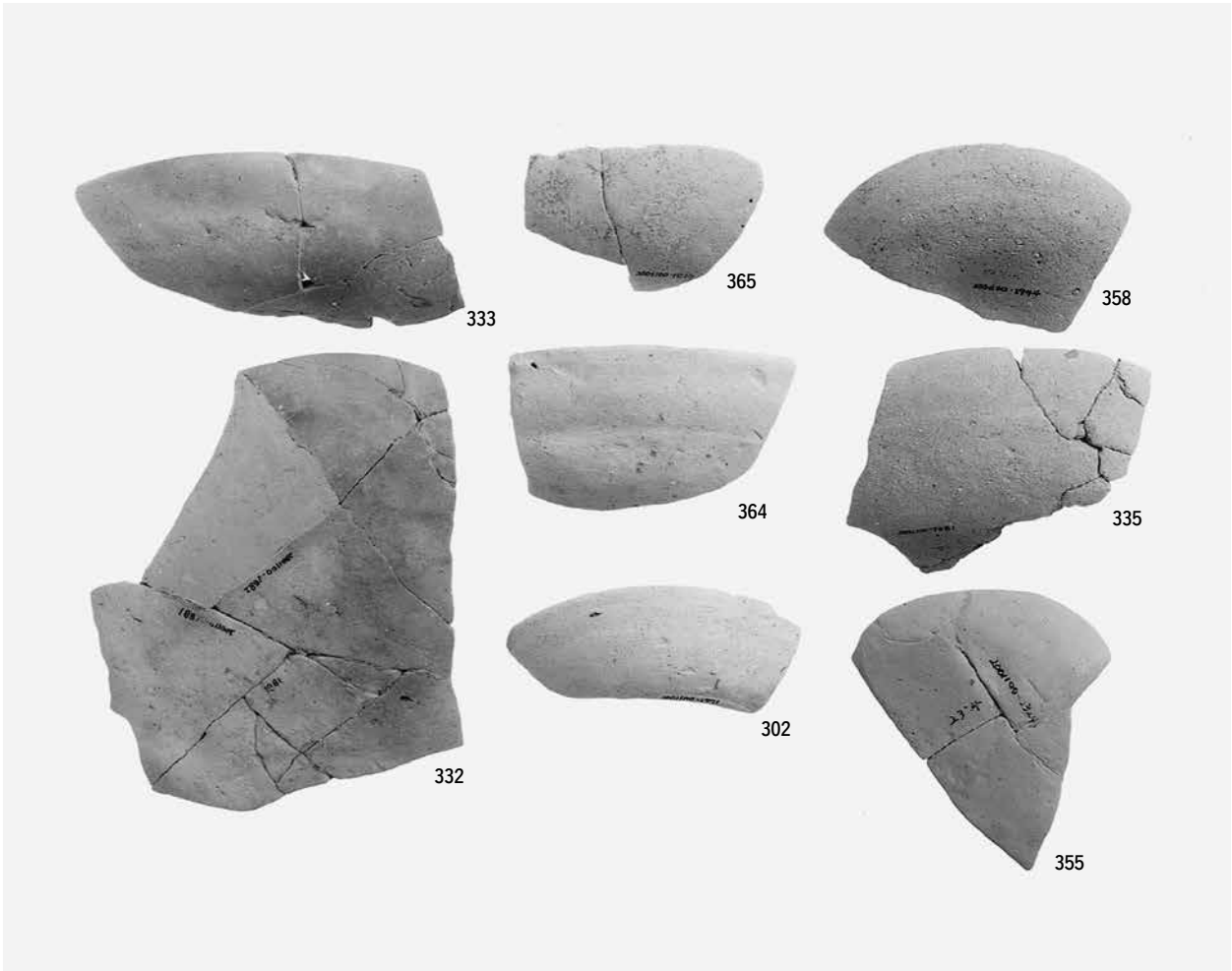
361

363

344

359


338
338
310
328
331
356
341
326
325
346
305
357
354


333
365
358
364
335
332
302
355

土器(3)

343

353

360

327

342

307

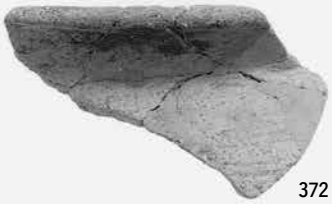
362

308

405

371

323


372

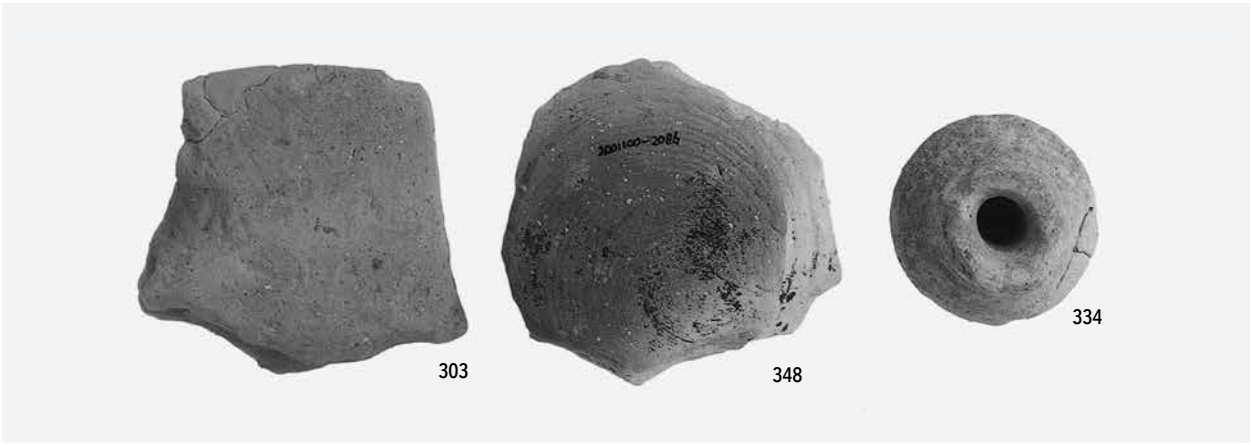
370

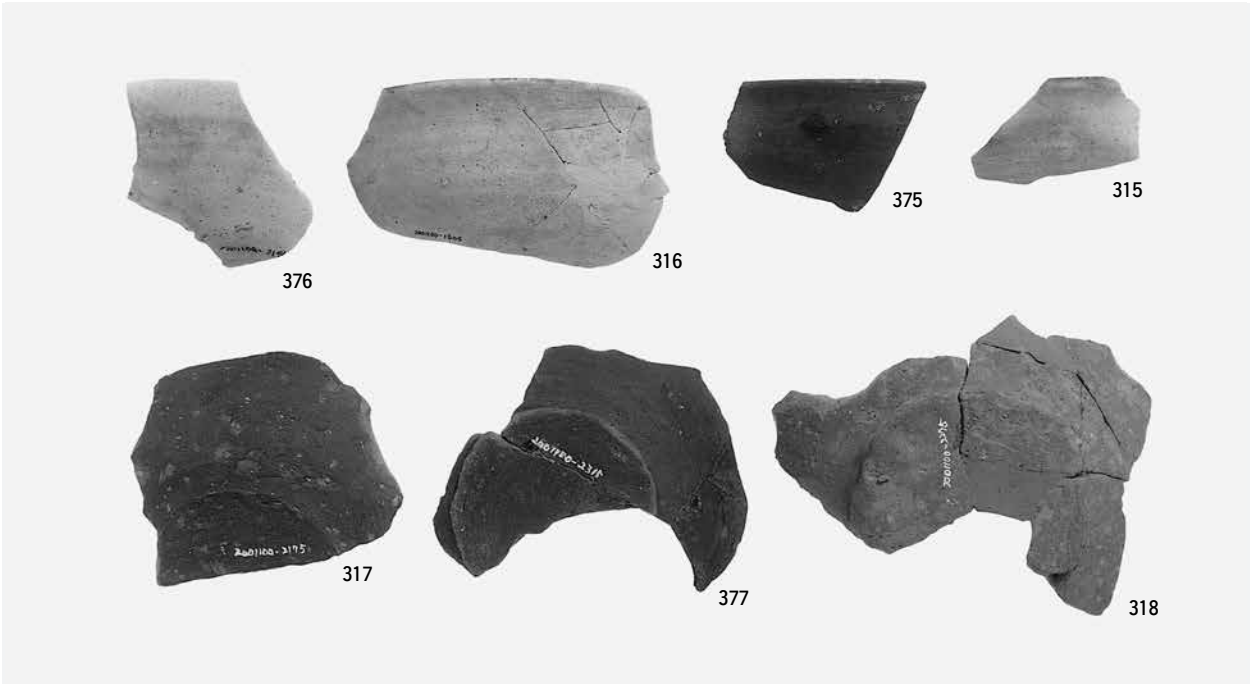
373

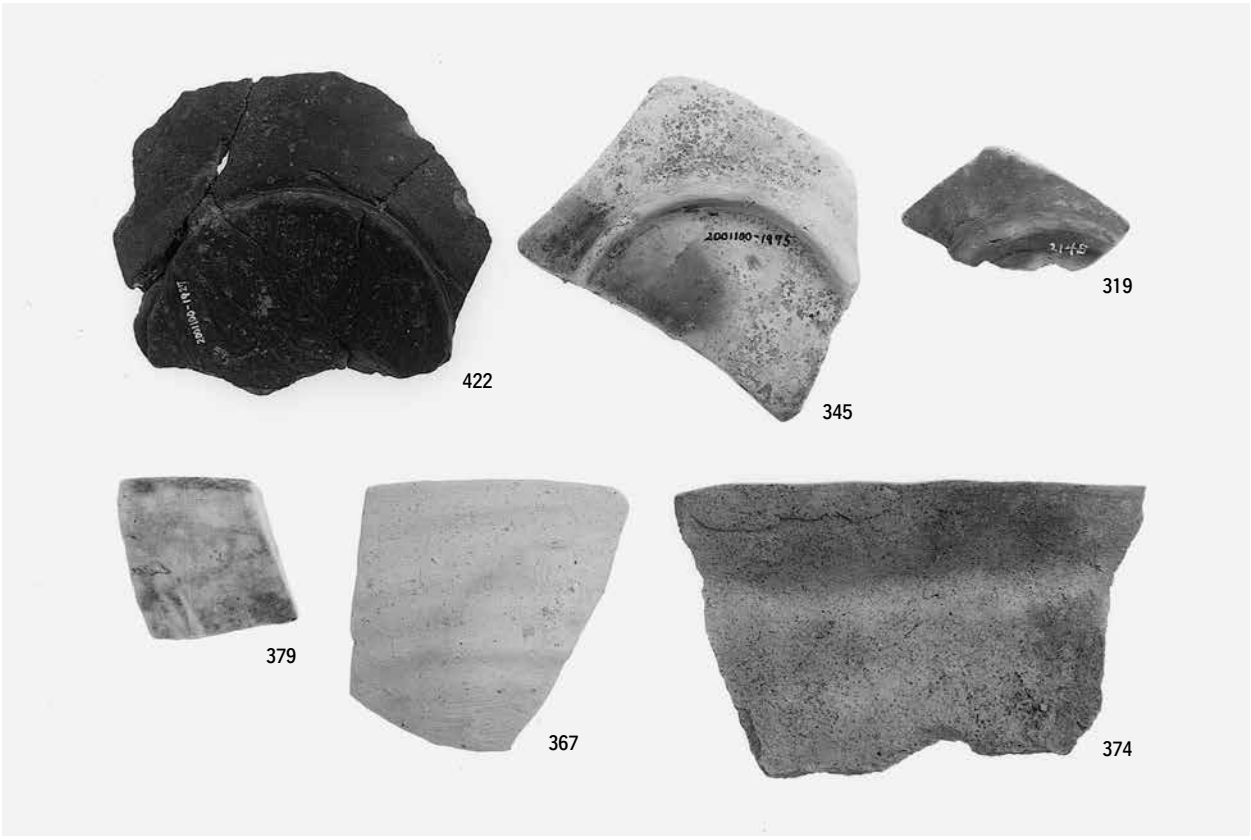
369

312

368



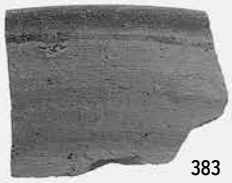


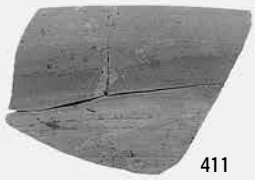


土器(5)

321

408

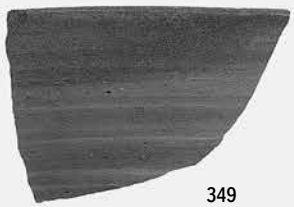

383

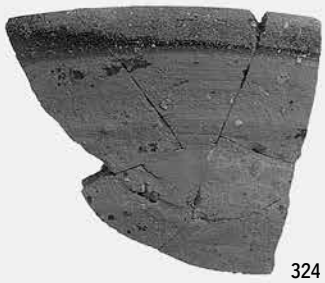

411

384

350

385


349


324

382

386

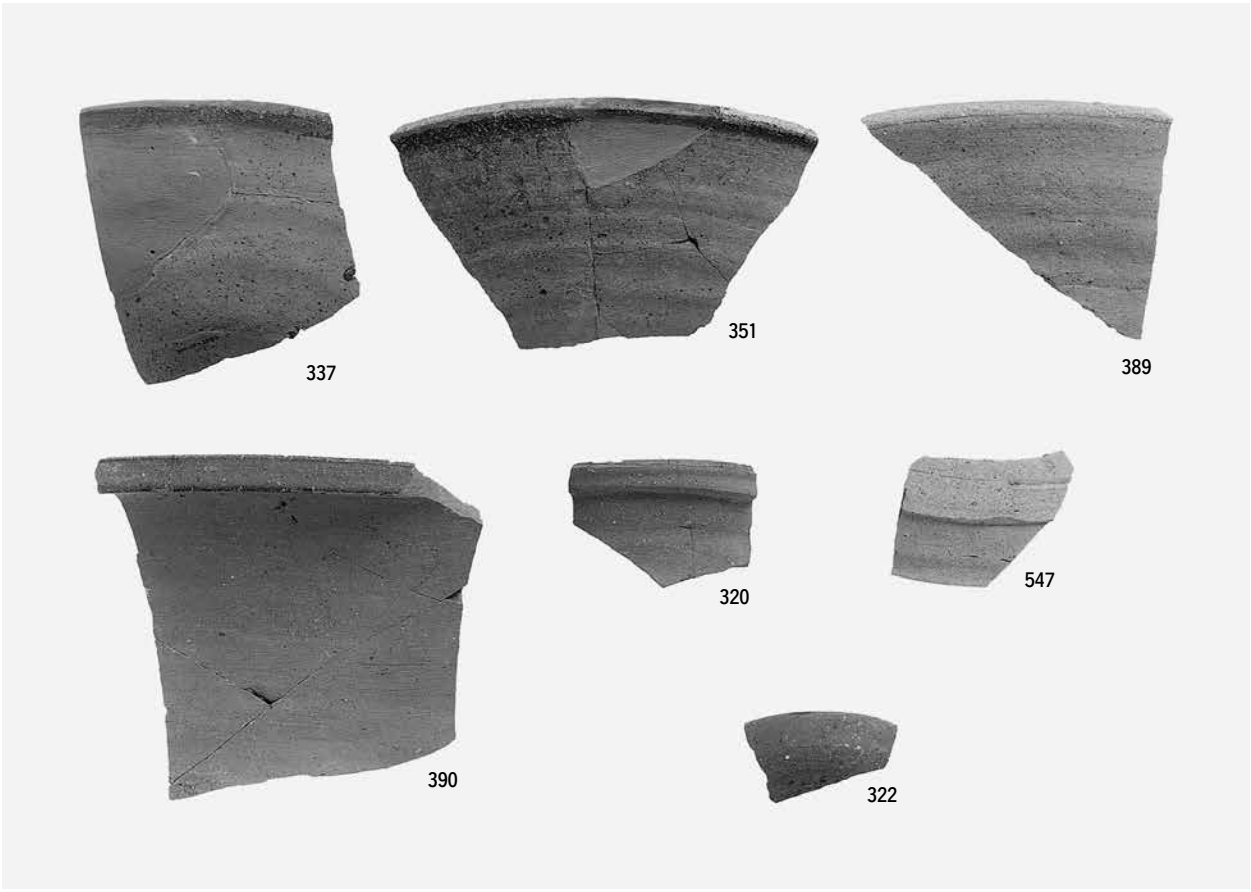
380

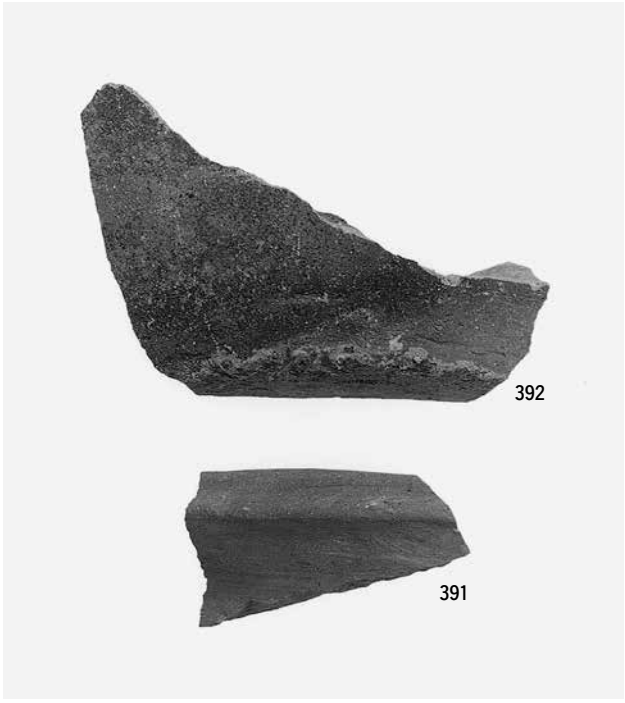
388

381

387

土器(6)





土器(7)

413

414

400

415

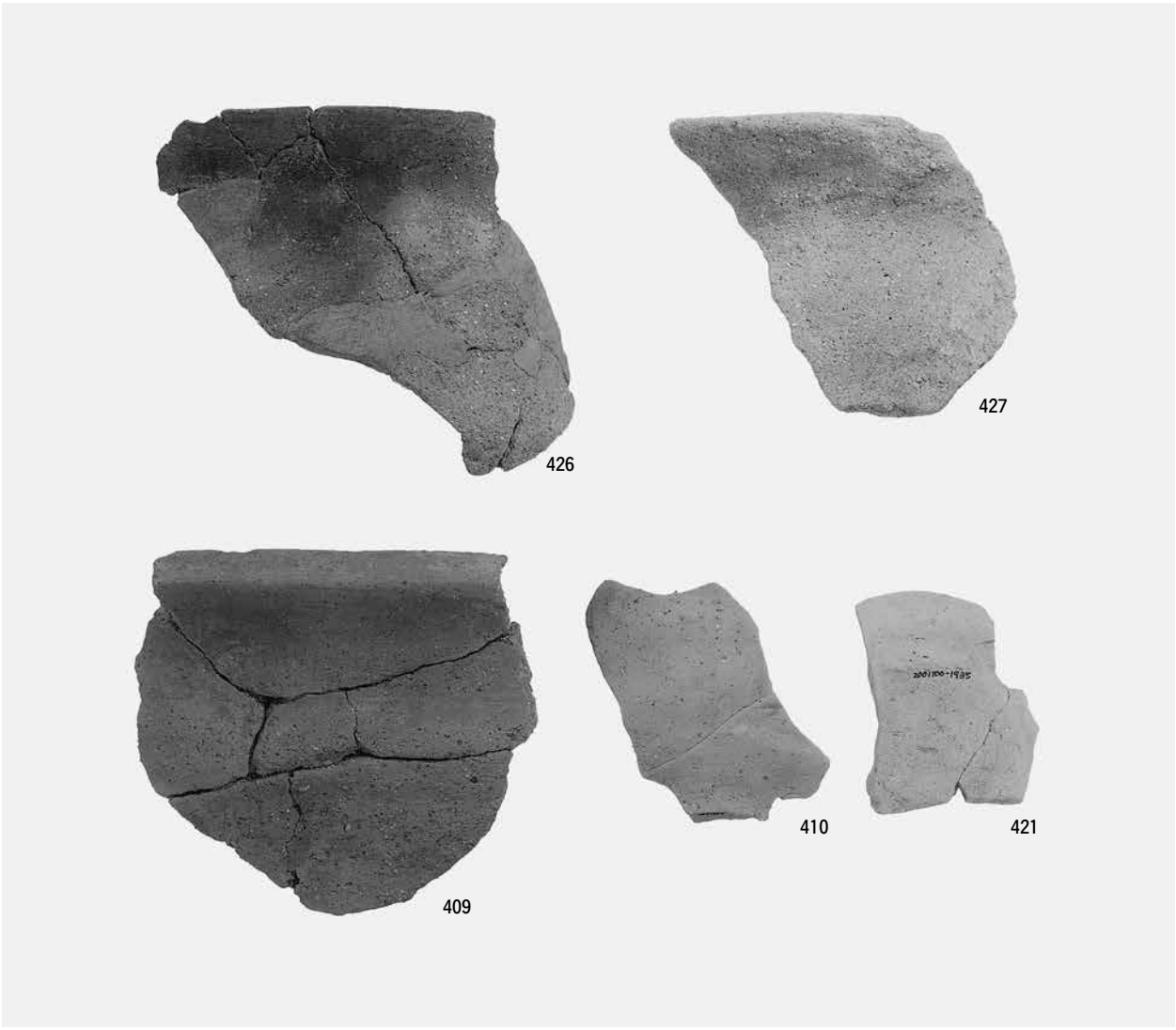
412

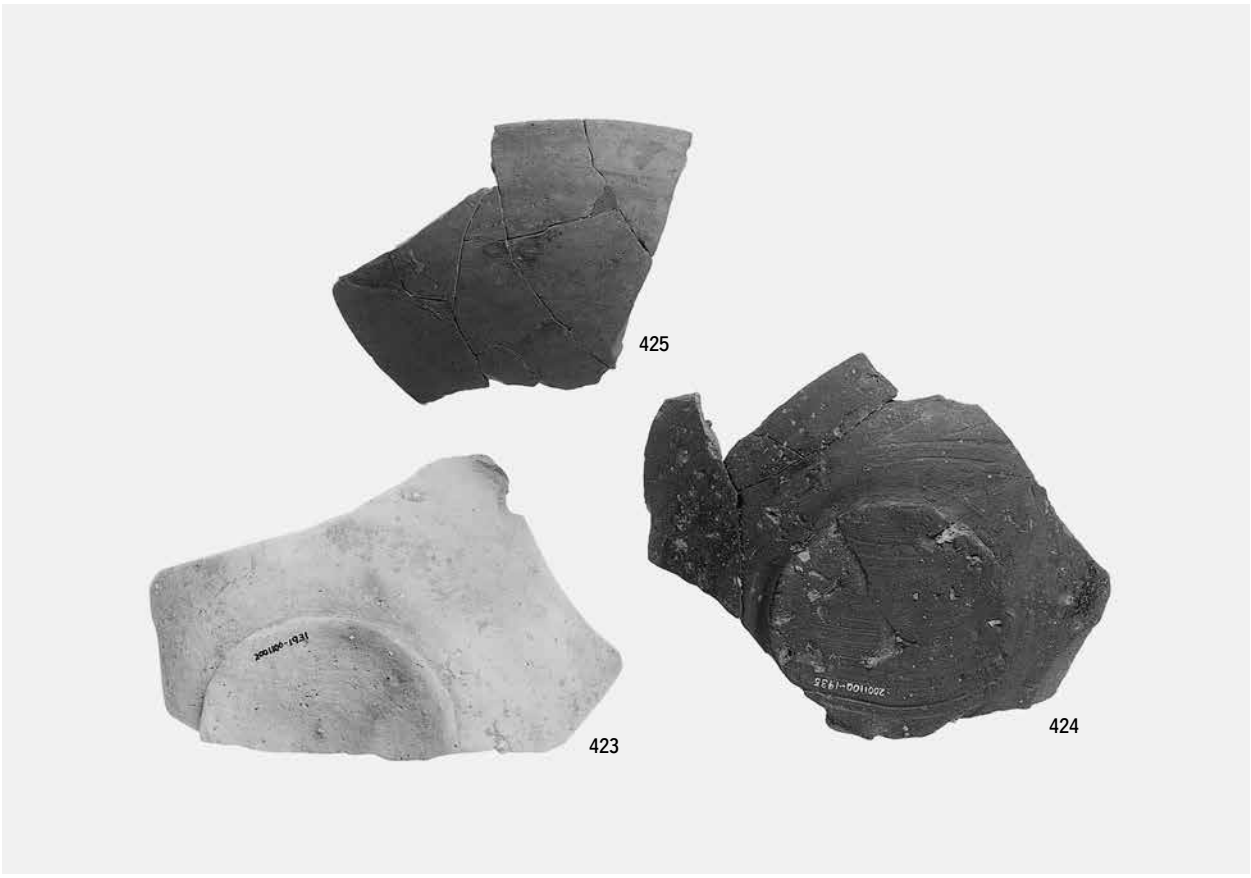
417

416

418

土器(8)





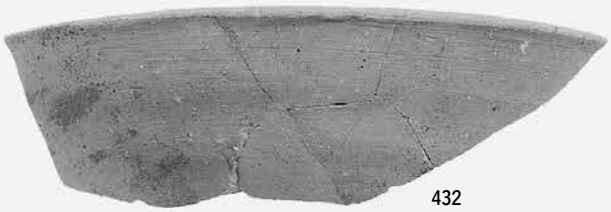
土器(9)

420

428

419

430


432

768

429

431

土器(10)

406

407

399

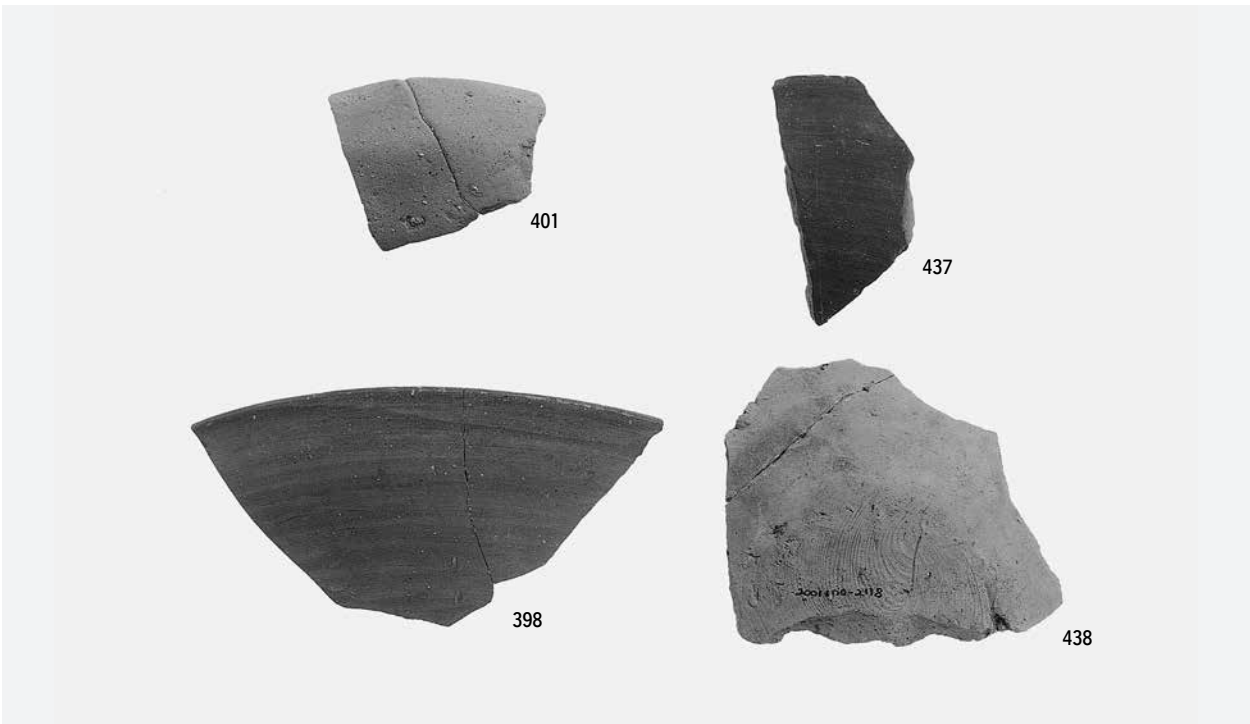
397

433

435

434

436


401

437

398

438

土器(11)

439

440

442

444

445

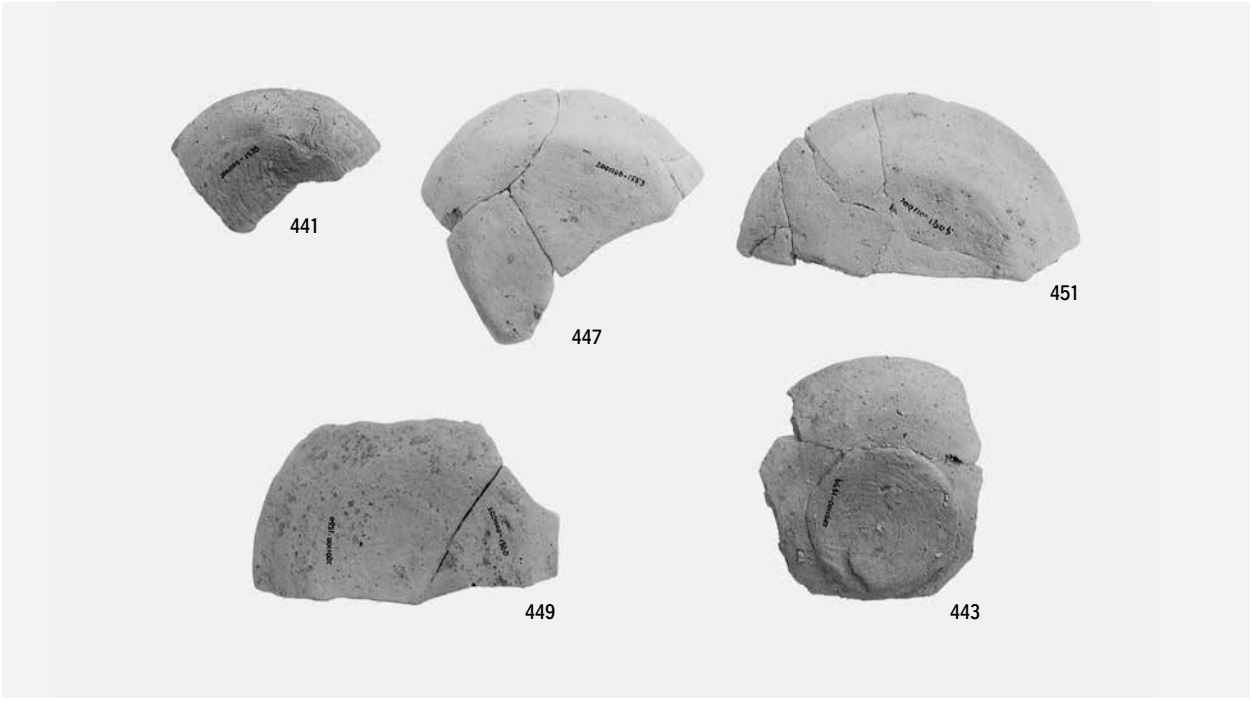
446

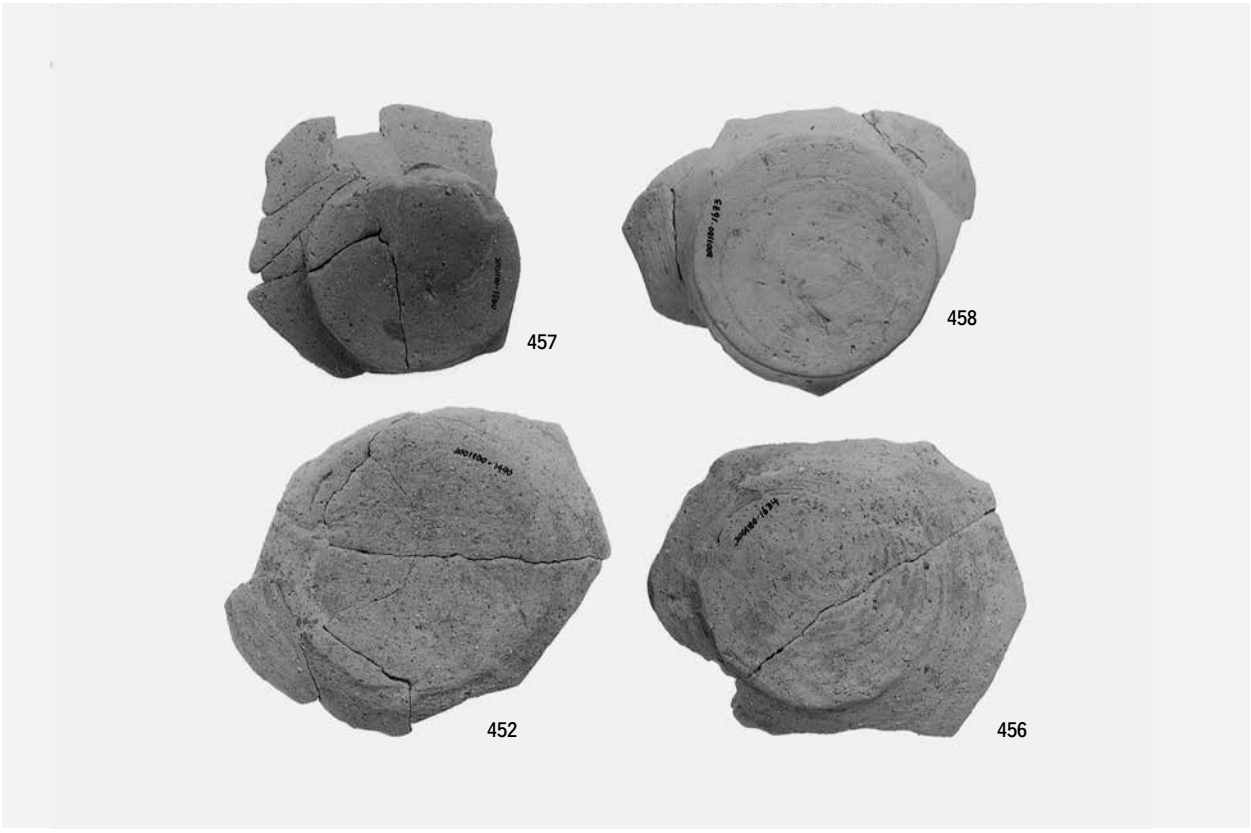
448

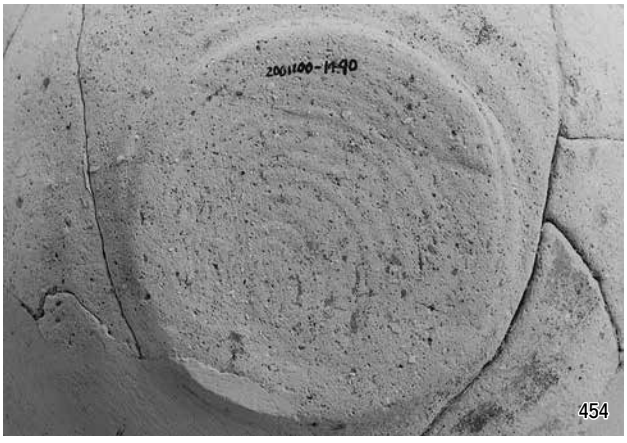
450

453

475





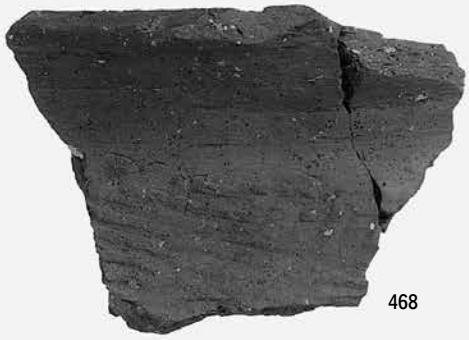


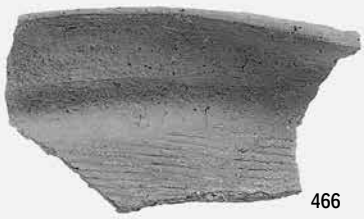
土器(13)

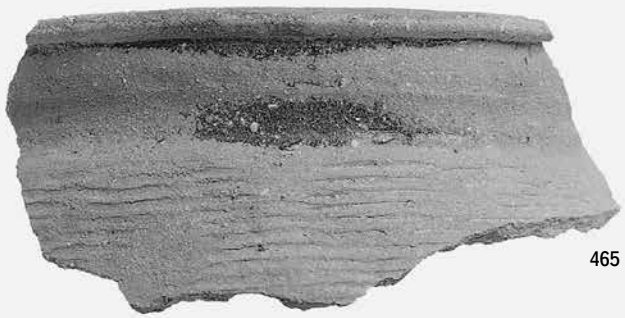
455

464

467


468


466

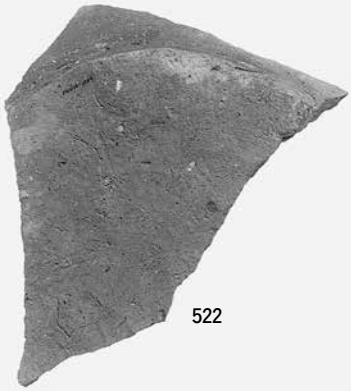

465

463

461

472

462


522

470

469

471

471

518

519

土器(15)

476

473

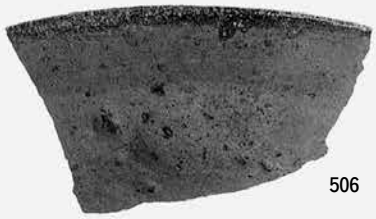
474

508

504

509

502


506

507

511

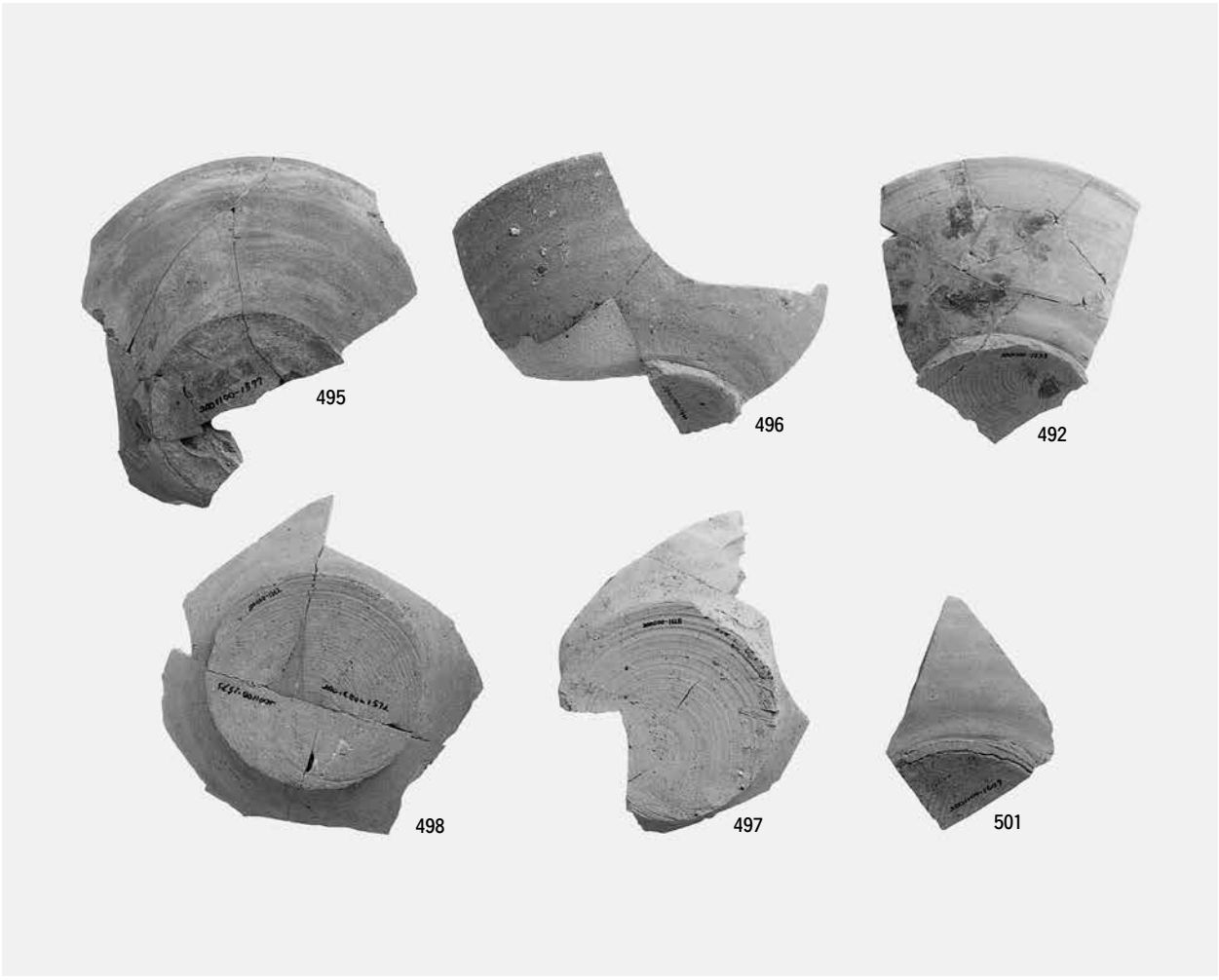
511

509

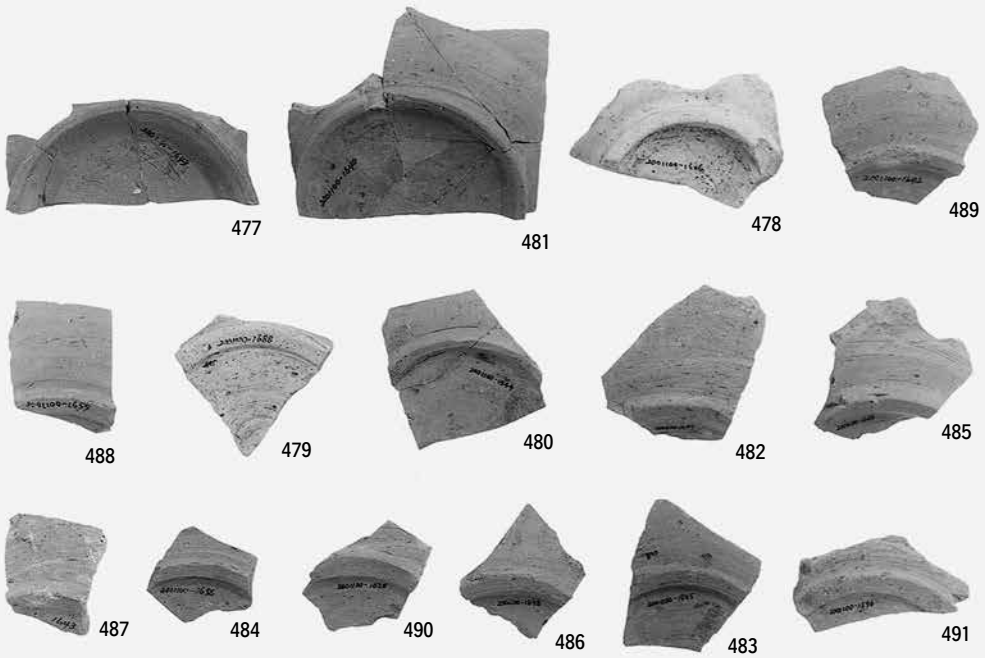
499

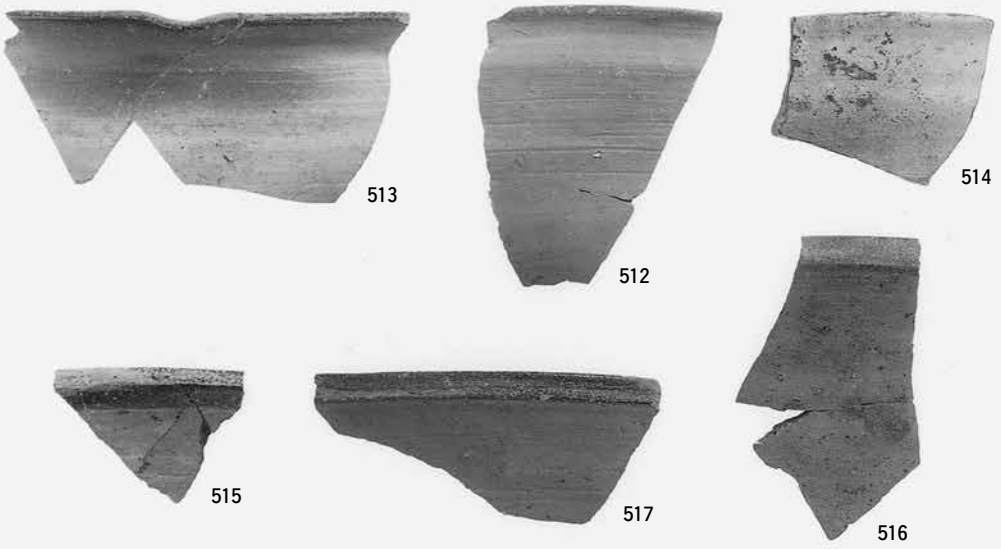
503

505

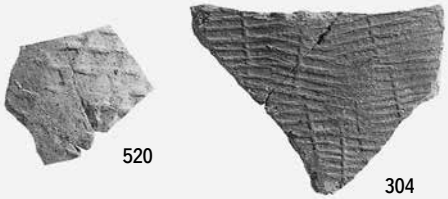


土器(17)


477
481
478
489
488
479
480
482
485
487
484
490
486
483
491

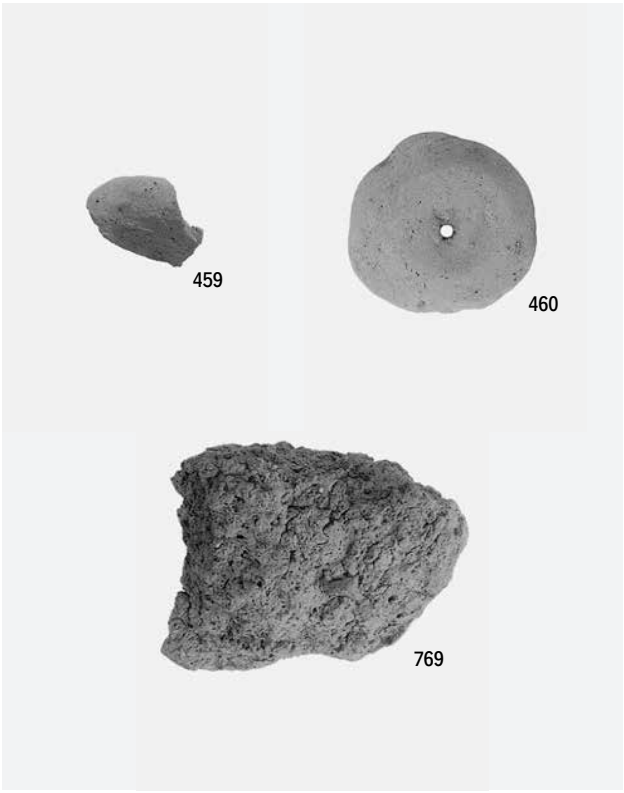

513
512
514
515
517
516

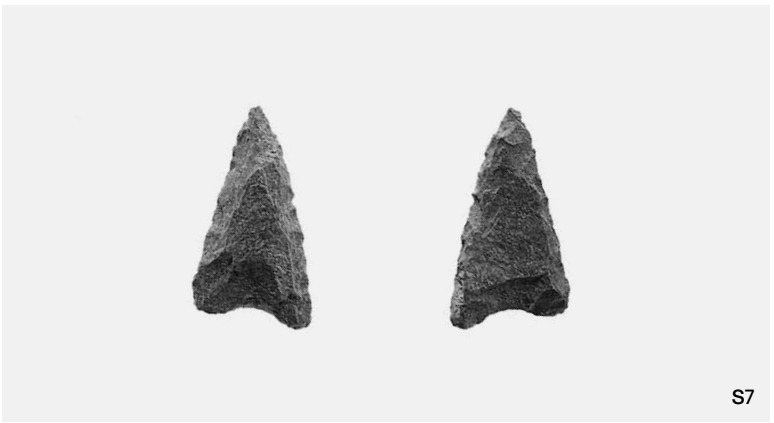
521


520
304

写真図版114　D地区　遺物

546




S7

J1

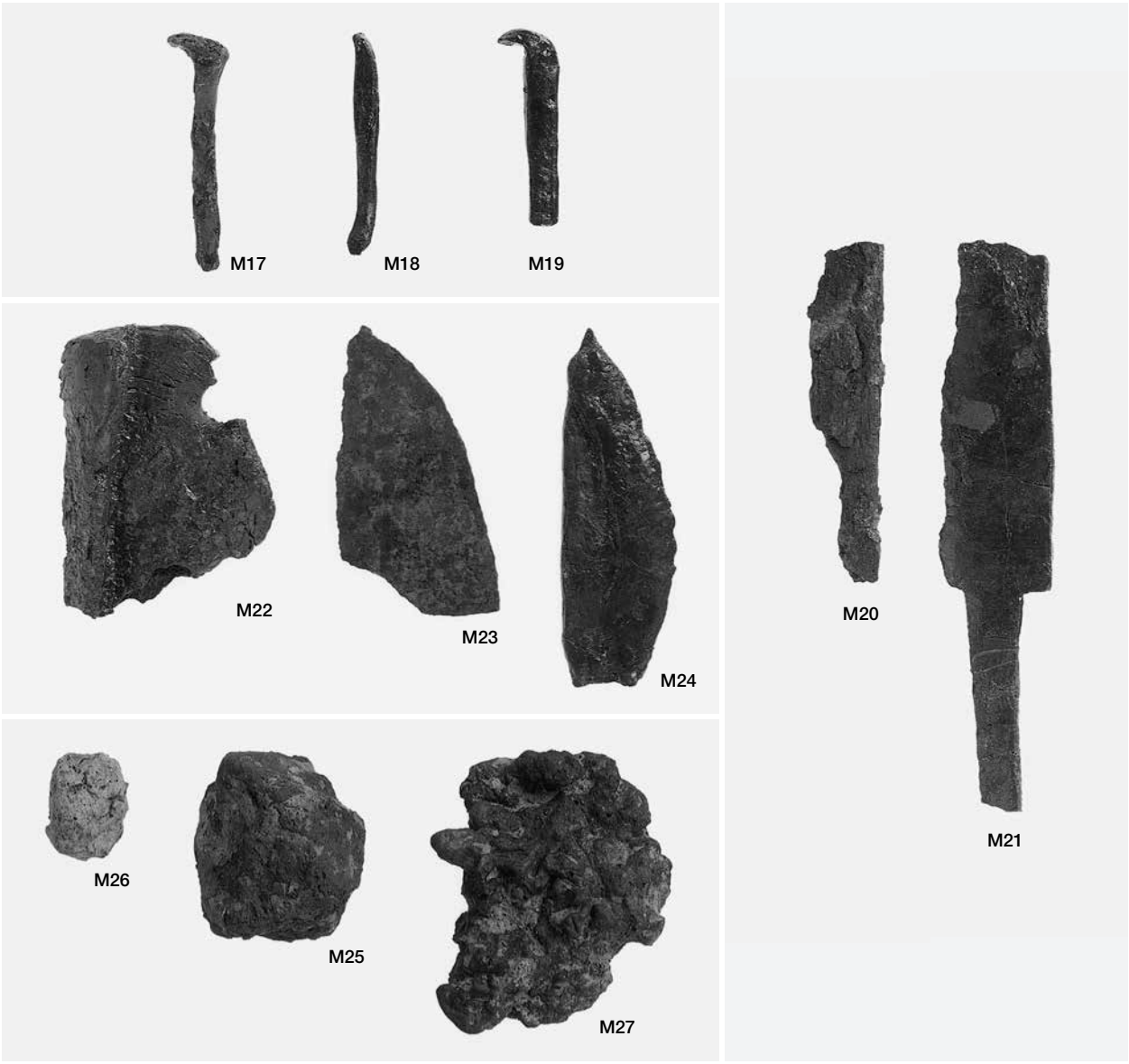
S8

土器(19)・石器(1)・玉

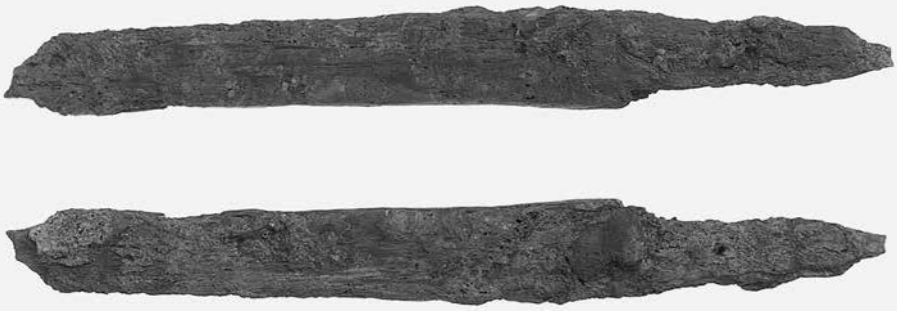
S9

S10

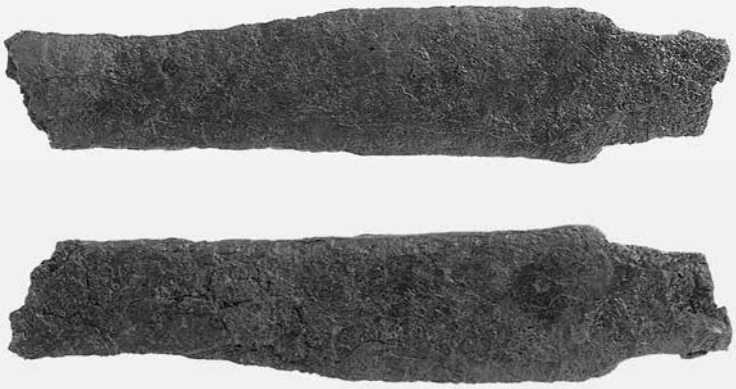
石器(2)



金属器(1)



M30



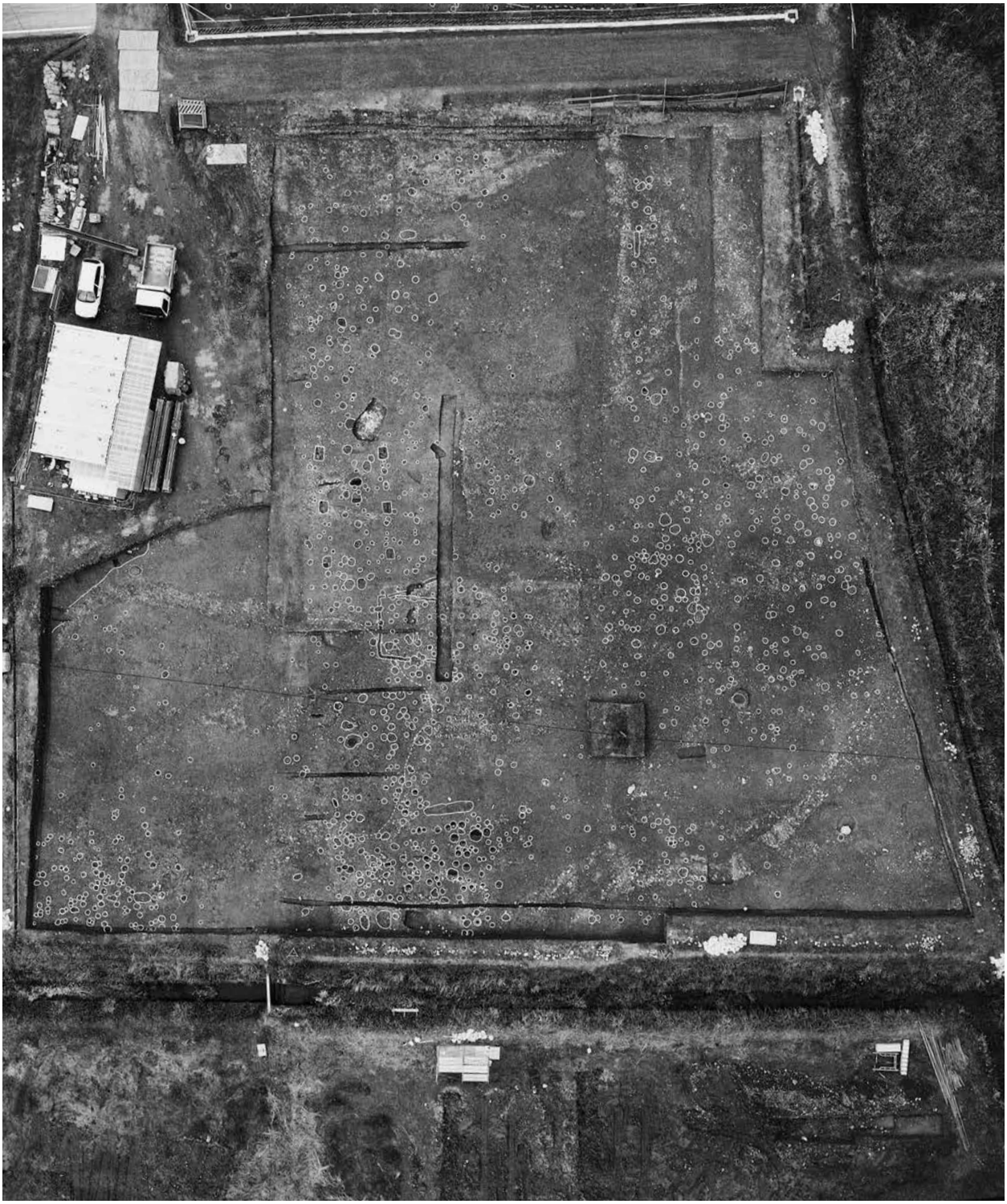
M31

M32

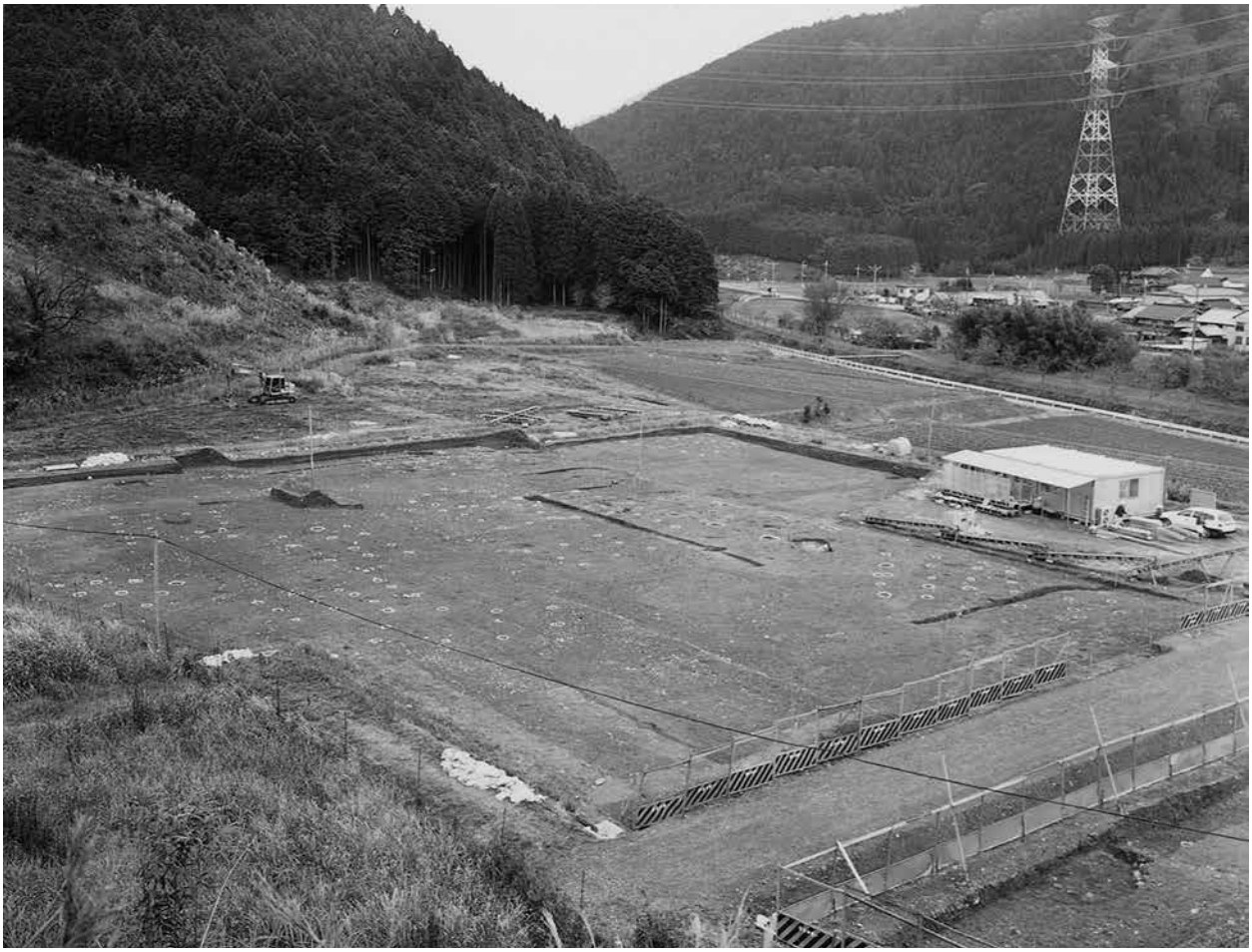
金属器(2)

182　E地区全景（南東から）

183　E地区全景（北東から）



184 全景(上が北西)

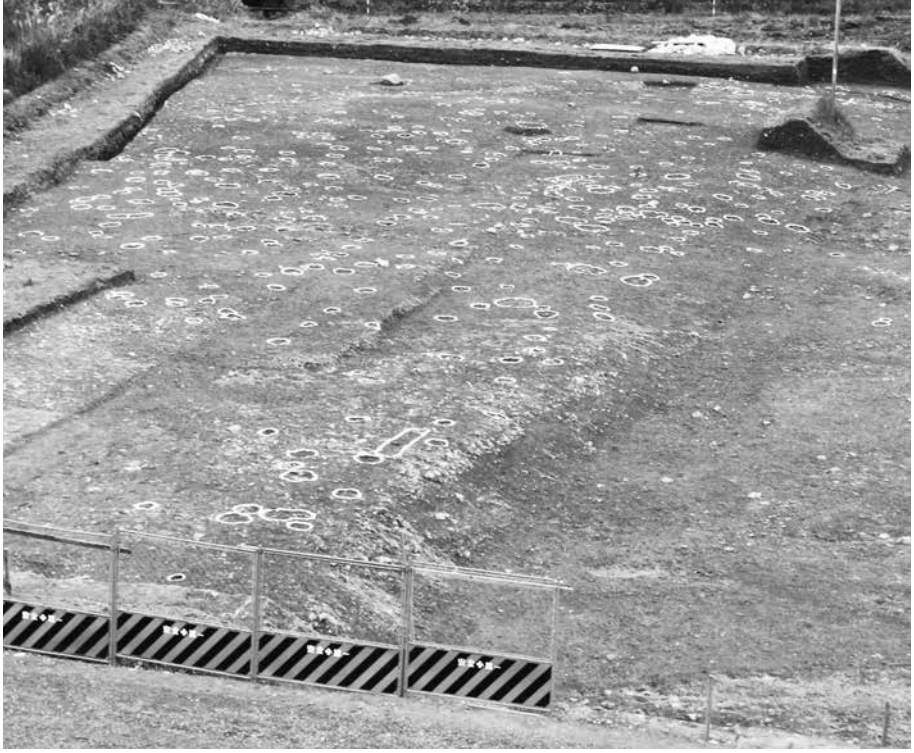


185 全景(北から)

186 全景(北西から)

187 全景(南東から)

188 北部の掘立柱建物群(北西から)



189 北部の柱穴群
（西から）

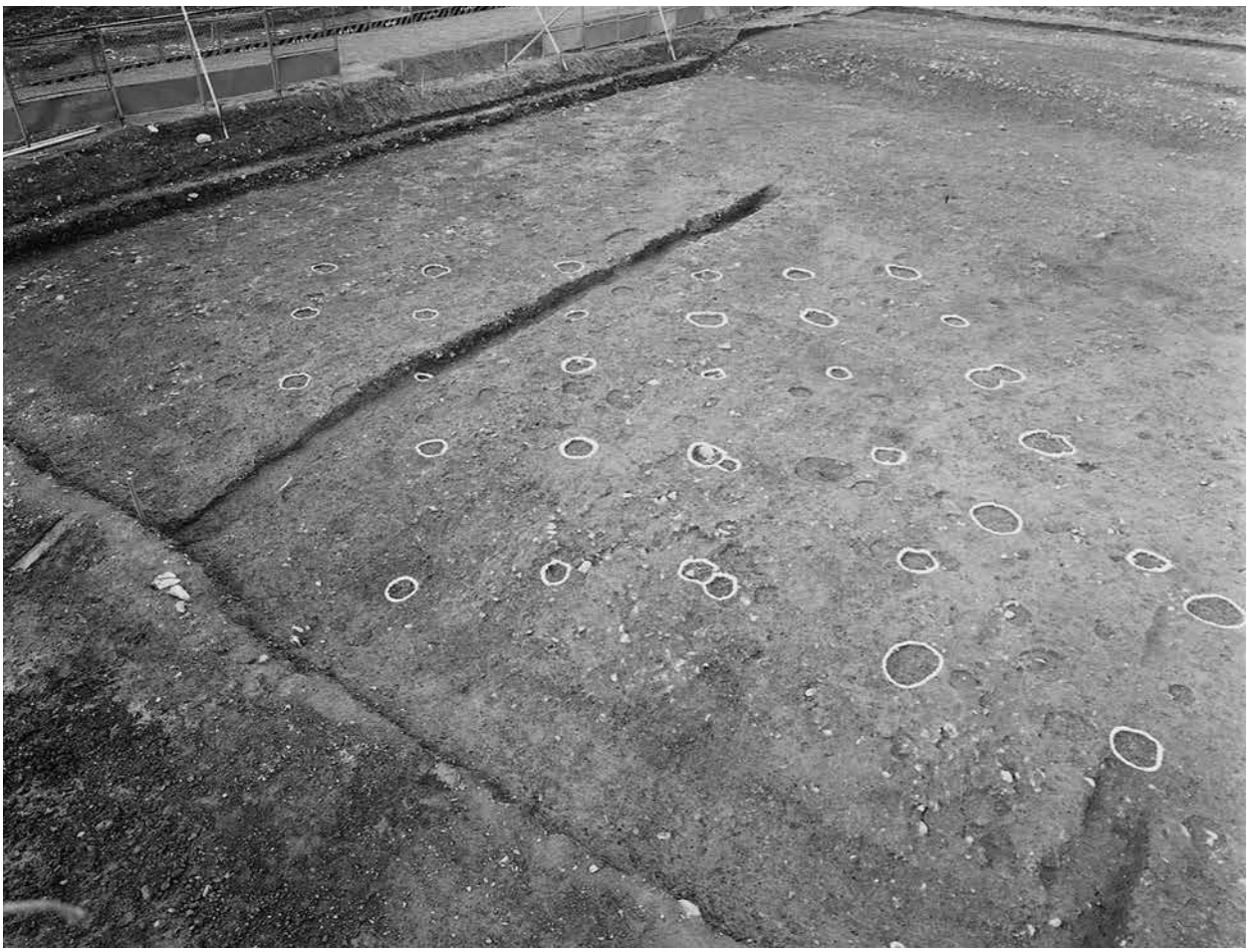
190 中部の柱穴群
（北西から）

191 南部の柱穴群
（東から）

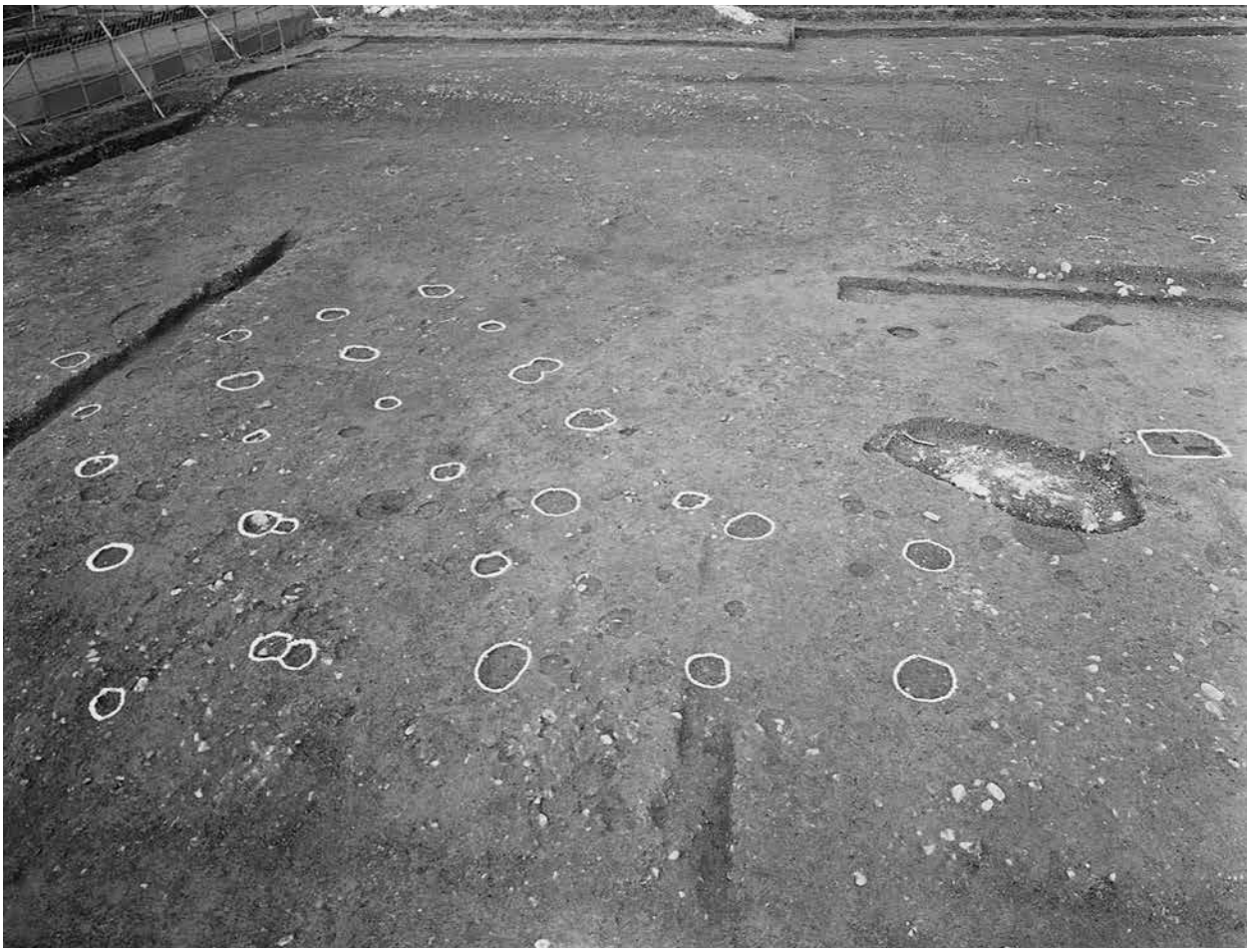
192 掘立柱建物SB001E～SB003E（北西から）

193 掘立柱建物SB003E・SB005E・SB009E（北西から）

194 掘立柱建物SB003E・SB005E・SB009E（南から）

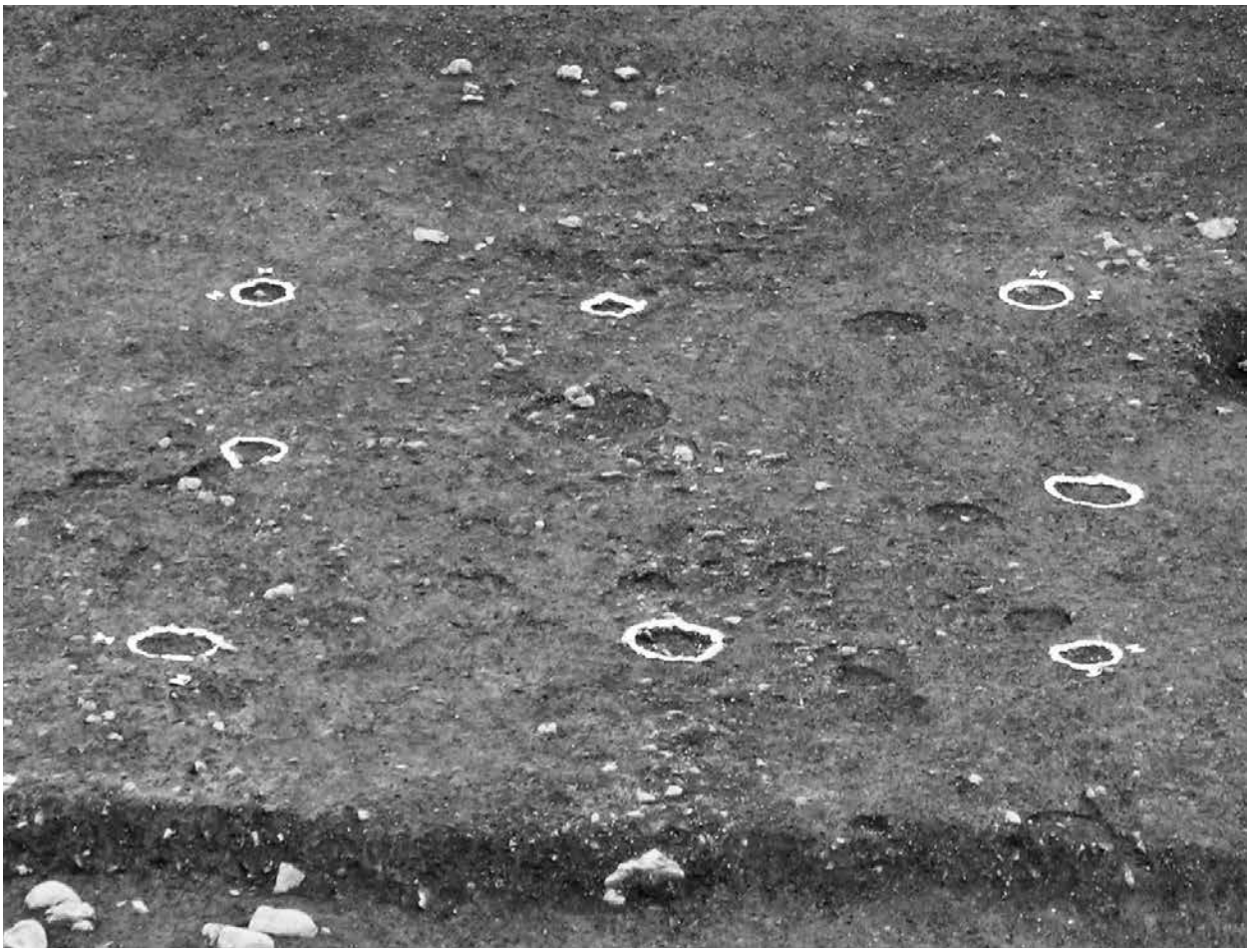


195 掘立柱建物SB013E（南から）



196 掘立柱建物SB013E・SB014E（南から）

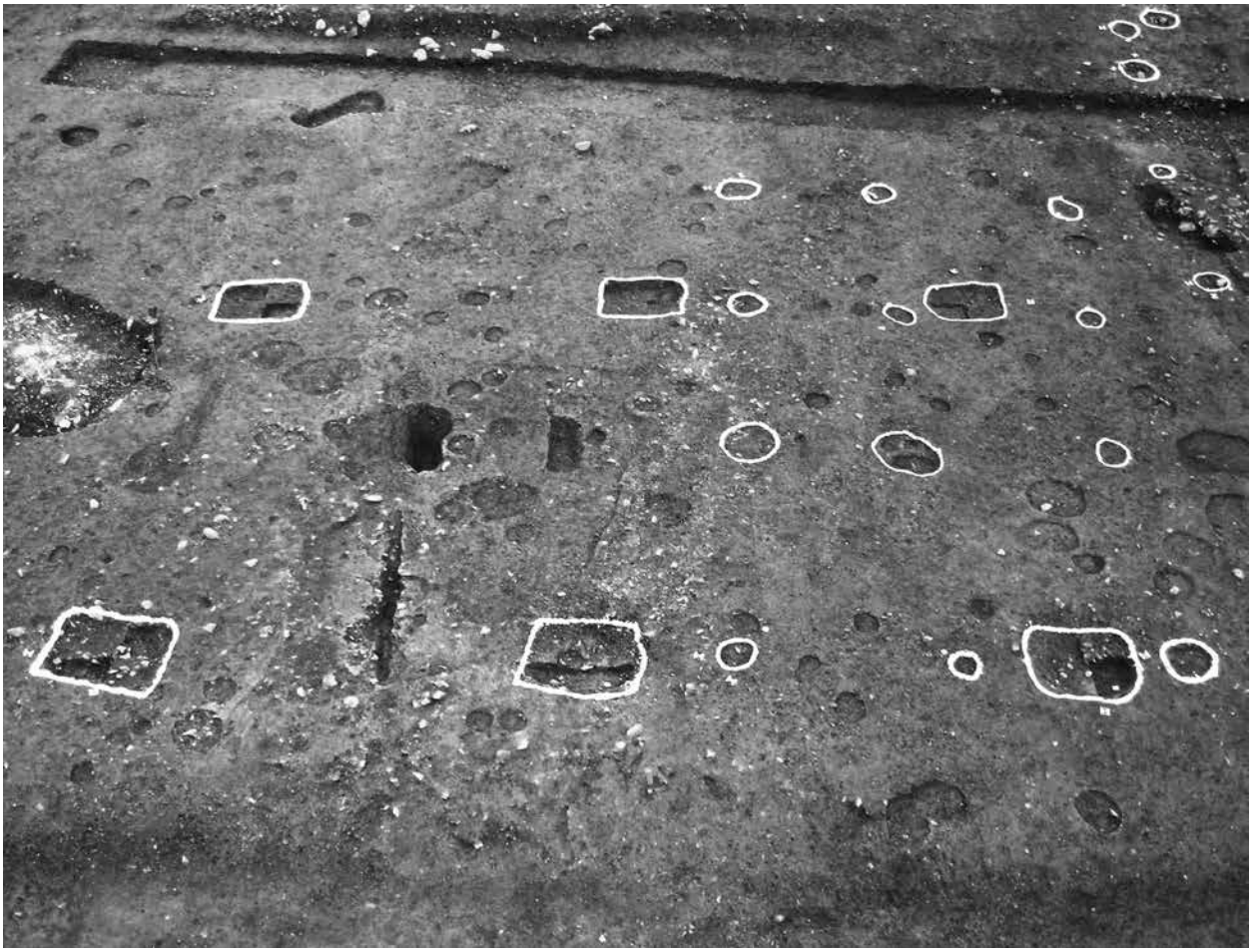
197 掘立柱建物SB015E～SB022E（南西から）



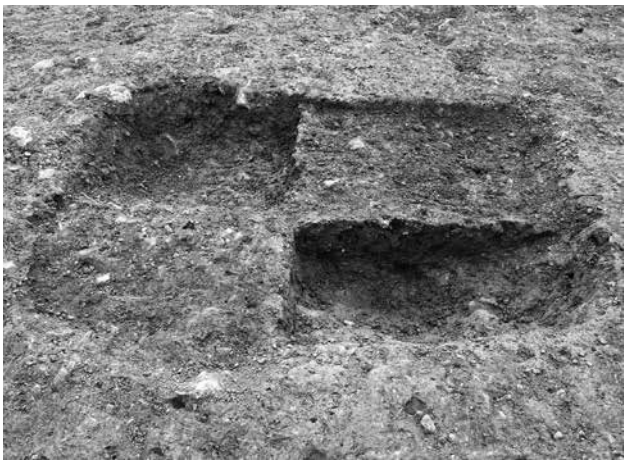
198 掘立柱建物SB016E（南西から）

199 掘立柱建物SB025E～SB027E（南西から）

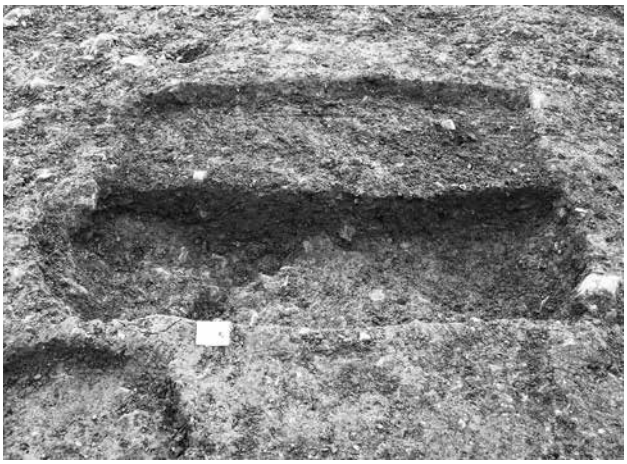
200 掘立柱建物SB028E（北から）



201 掘立柱建物SB015E(南西から)

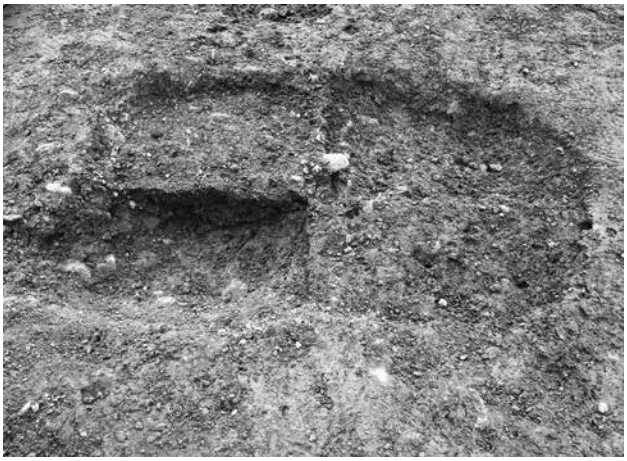


202 柱穴P4114E土層断面(北東から)



203 柱穴P4115E土層断面(北東から)

204 柱穴P4116E土層断面(北東から)



205 柱穴P4118E土層断面(南西から)

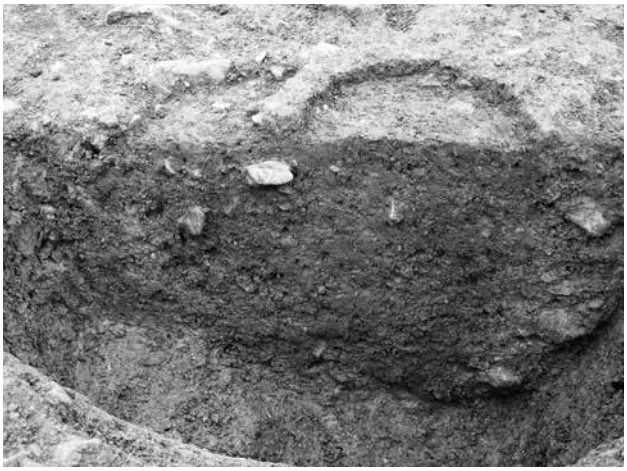
206 掘立柱建物SB018E 柱穴P4077E土層断面(北から)

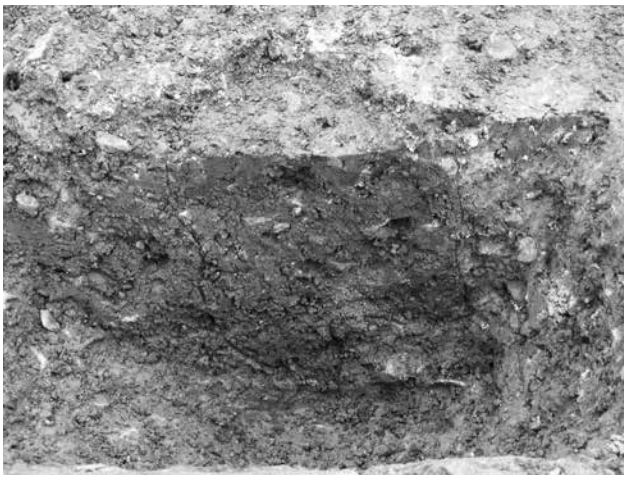
207 掘立柱建物SB018E 柱穴P4084E土層断面(南から)

208 掘立柱建物SB018E 柱穴P4085E土層断面(南から)

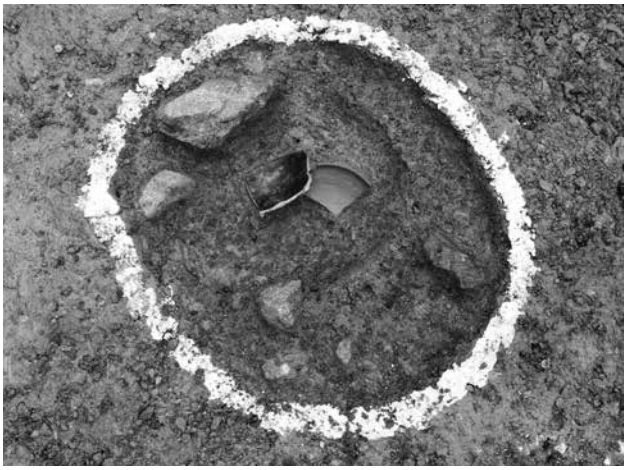
209 掘立柱建物SB018E 柱穴P4086E土層断面(南から)

210 掘立柱建物SB022E 柱穴P4121E土層断面(北東から)

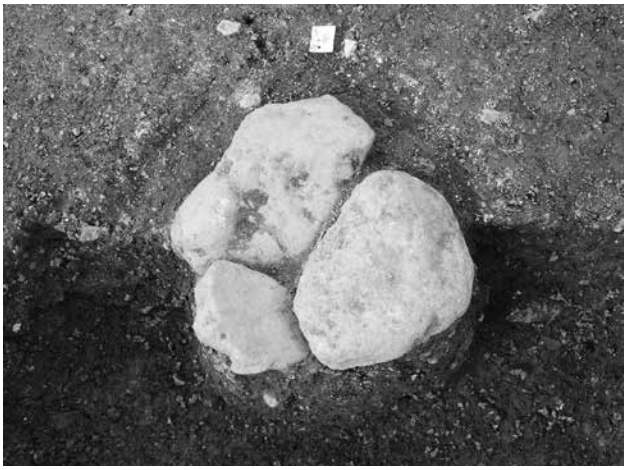

211 掘立柱建物SB022E 柱穴P4123E土層断面(北西から)


212 掘立柱建物SB022E 柱穴P4130E土層断面(南西から)

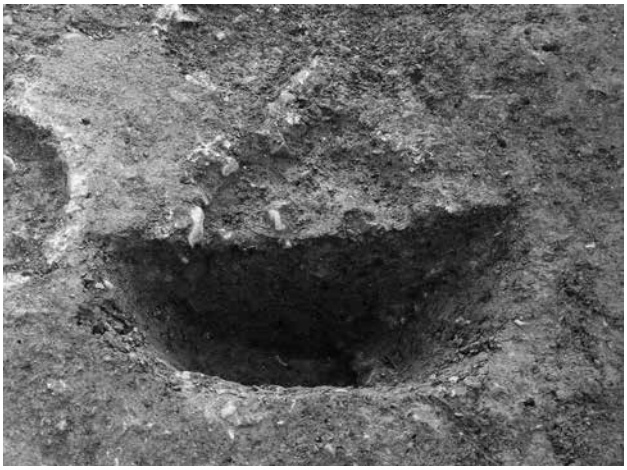
213 掘立柱建物SB022E 柱穴P4200E土層断面(西から)



214 掘立柱建物SB019E 柱穴P4102E遺物出土状況(南東から)

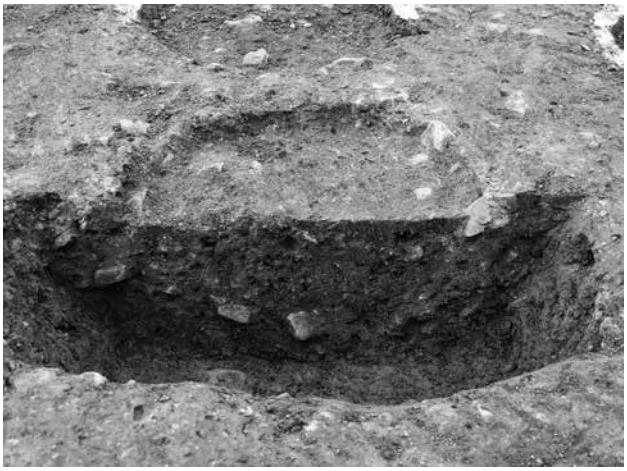


215 掘立柱建物SB005E 柱穴P4071E土層断面(南東から)



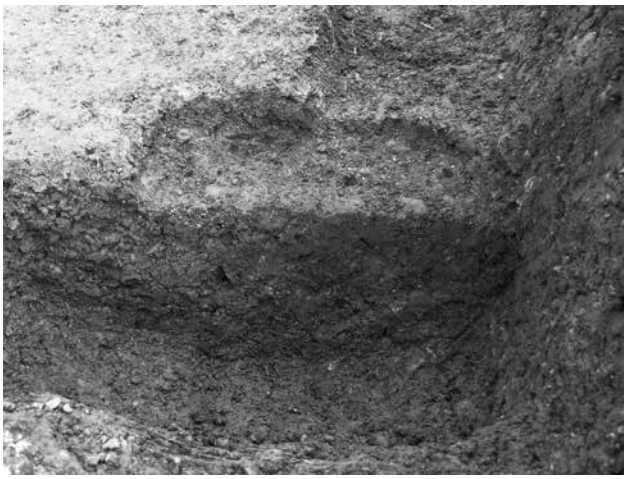
216 掘立柱建物SB028E 柱穴P4179E土層断面(北東から)

217 掘立柱建物SB028E 柱穴P4180E土層断面(北東から)

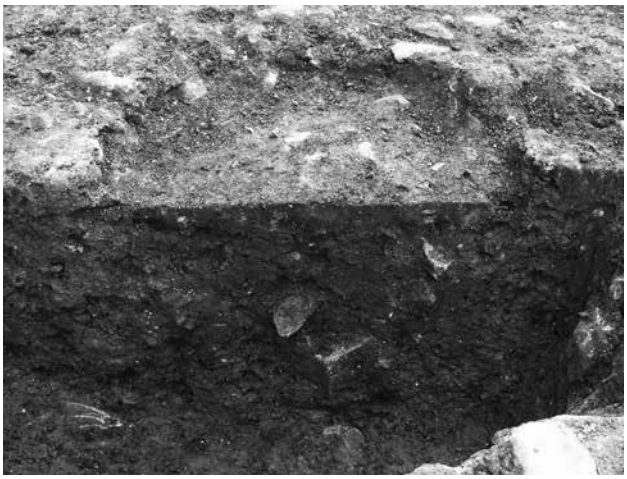


218 掘立柱建物SB028E 柱穴P4184E土層断面(南東から)

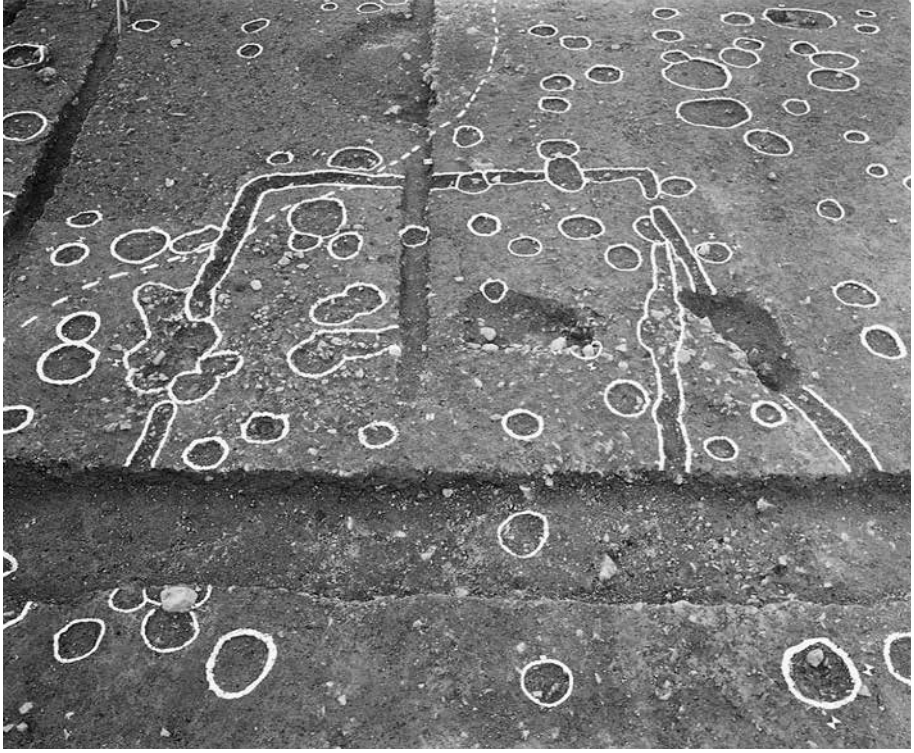
219 掘立柱建物SB028E 柱穴P4189E土層断面(南東から)



220 掘立柱建物SB028E 柱穴P4188E土層断面(北東から)

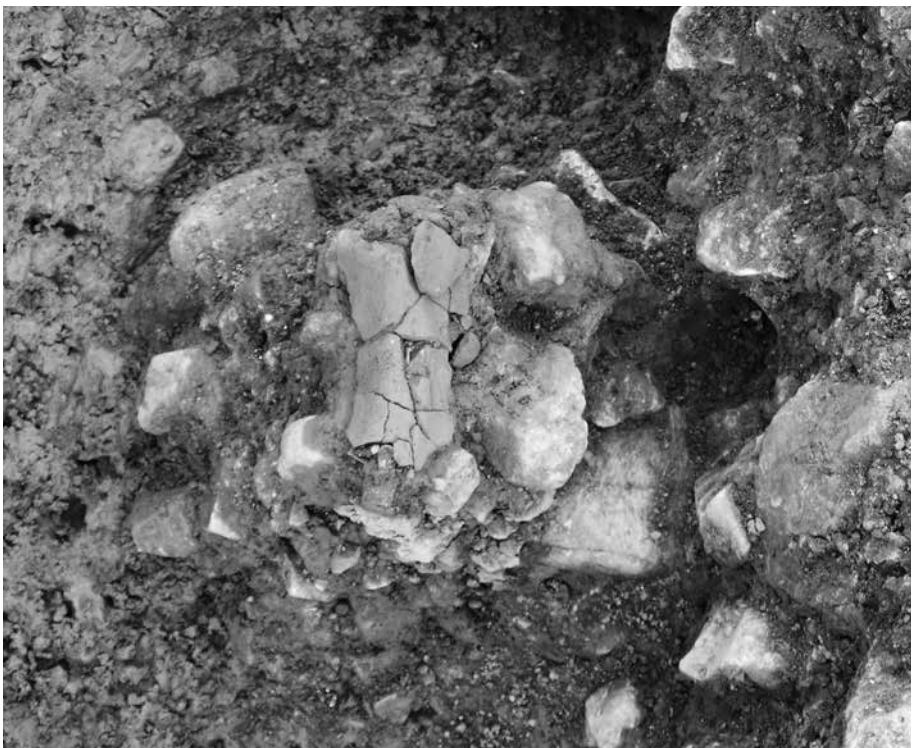


221 柱穴P4203E土層断面(南西から)



222 竪穴住居
SH001E・SH002E（北東から）

223 SH001Eに伴う
土器出土状況



224 SH001Eに伴う
土器出土状況（近接）

225 下層 谷部の土層堆積トレンチA（南東から）

226 下層 谷部の土層堆積トレンチB（南東から）

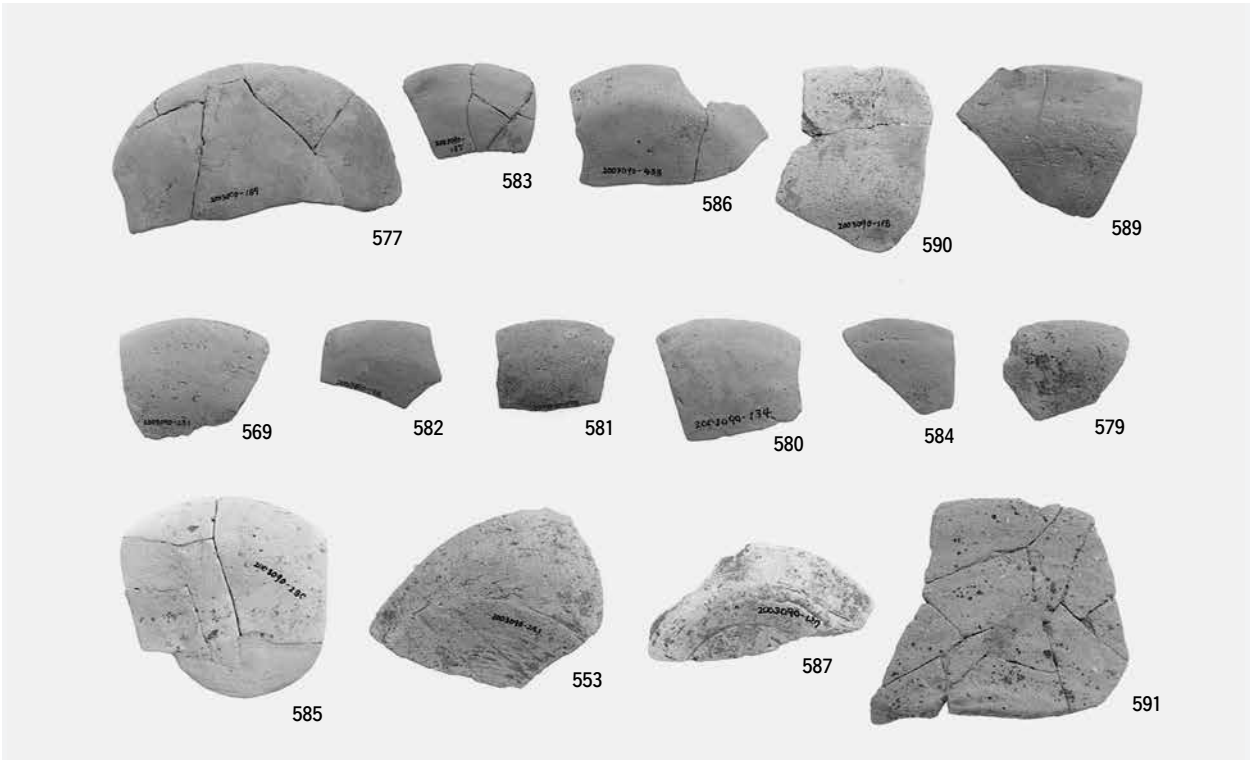
227 作業風景（北西から）

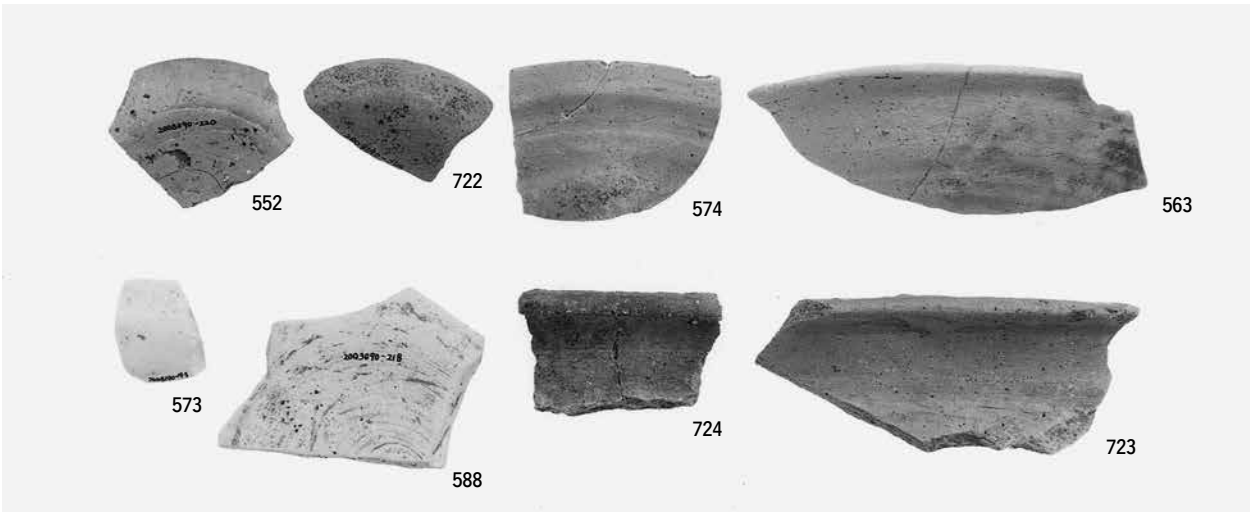
228　E－2区全景(上が北西)

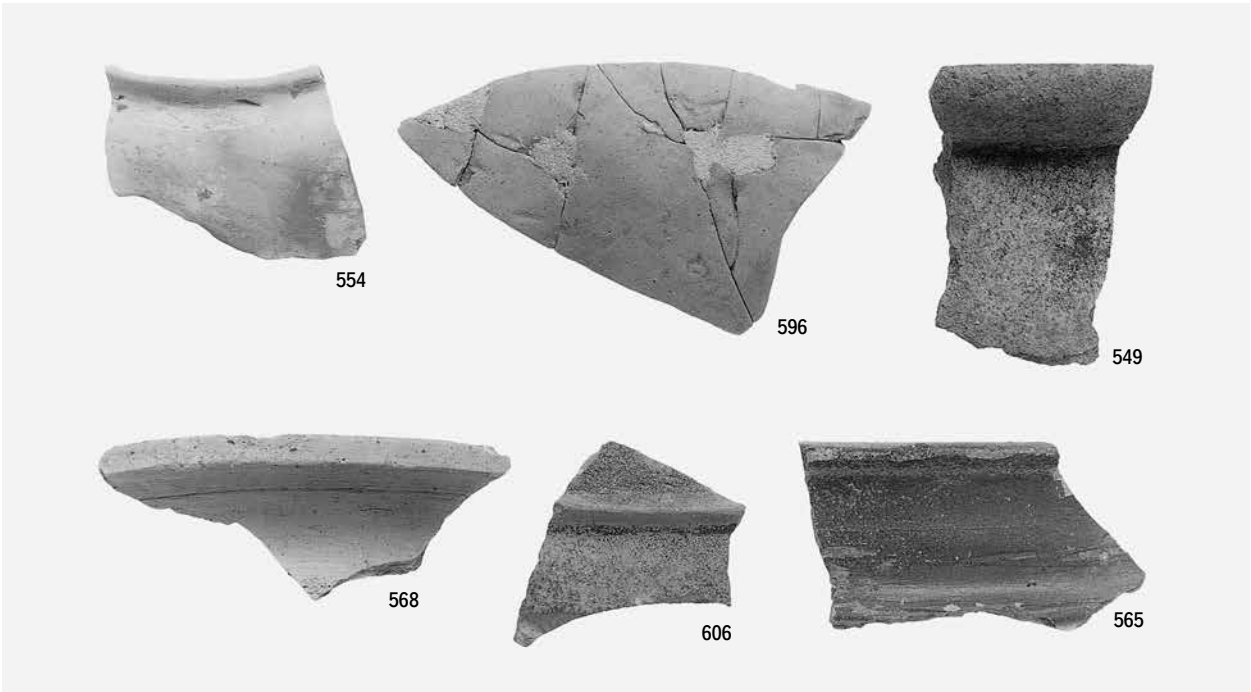
229　E－2区全景(南西から)

230　E－3区全景(北から)

231　E－3区全景(上が南西)


577
583
586
590
589
569
582
581
580
584
579
585
553
587
591


552
722
574
563
573
588
724
723


554
596
549
568
606
565

土器(1)

570

597

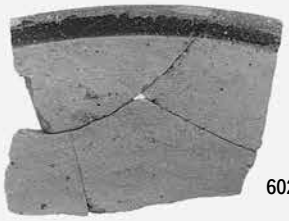
566

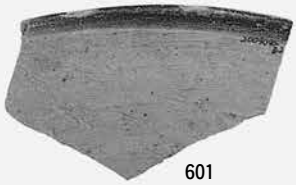
578

598

604

599


602

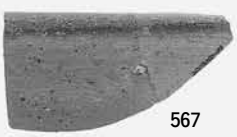

601

550

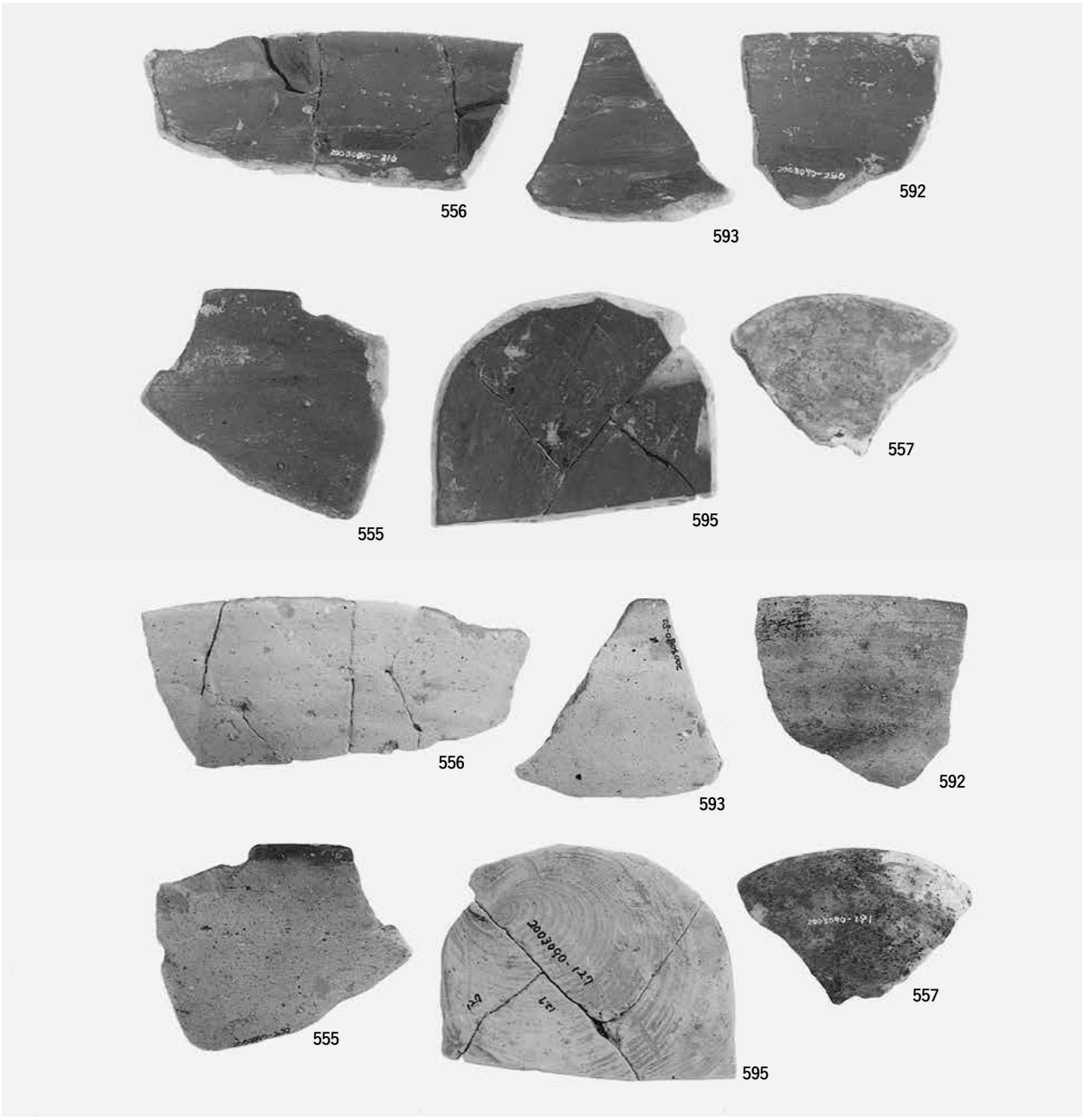
605

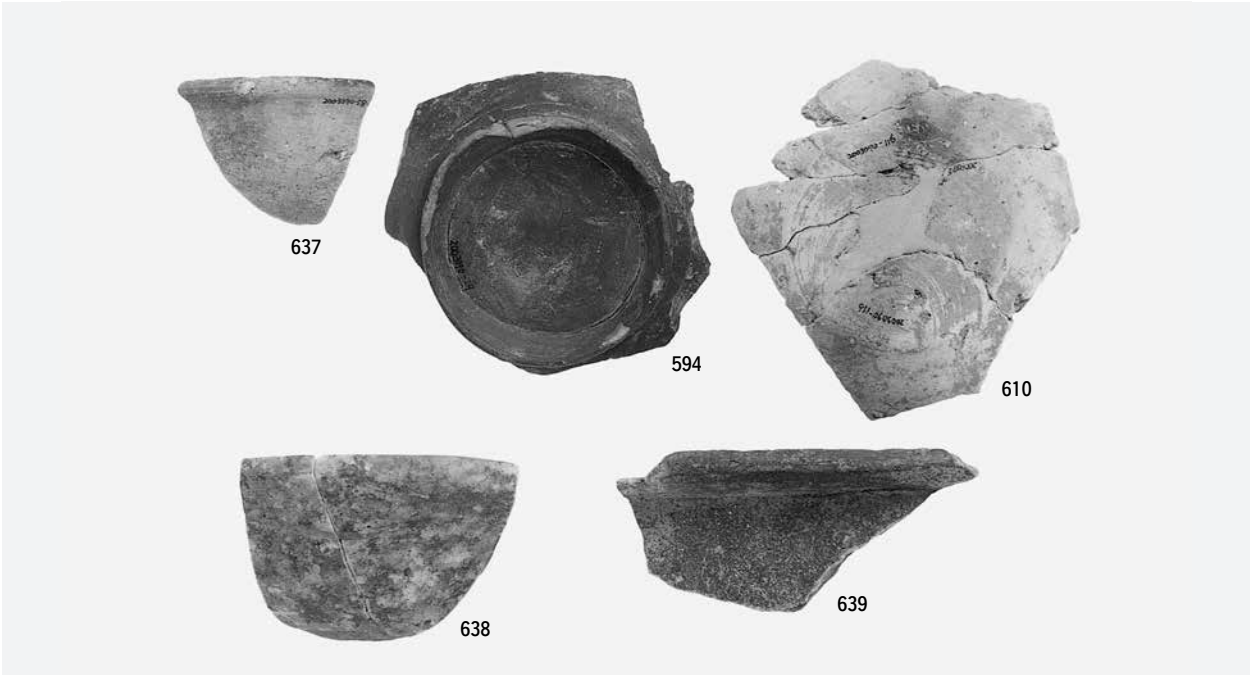
559

560

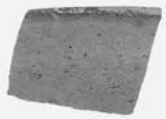

567

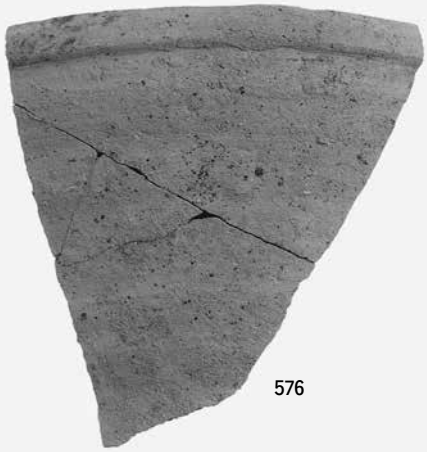
土器(2)


556
593
592
555
595
557
556
593
592
555
595
557


637
594
610
638
639

土器(3)


575


576

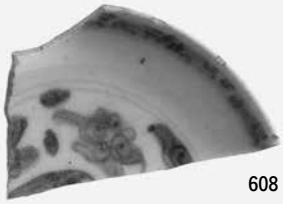
571

572

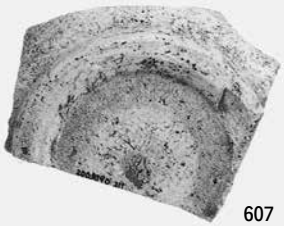
561

607

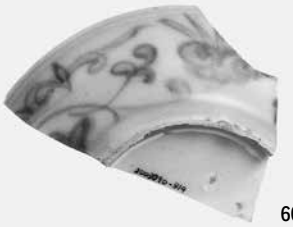
562

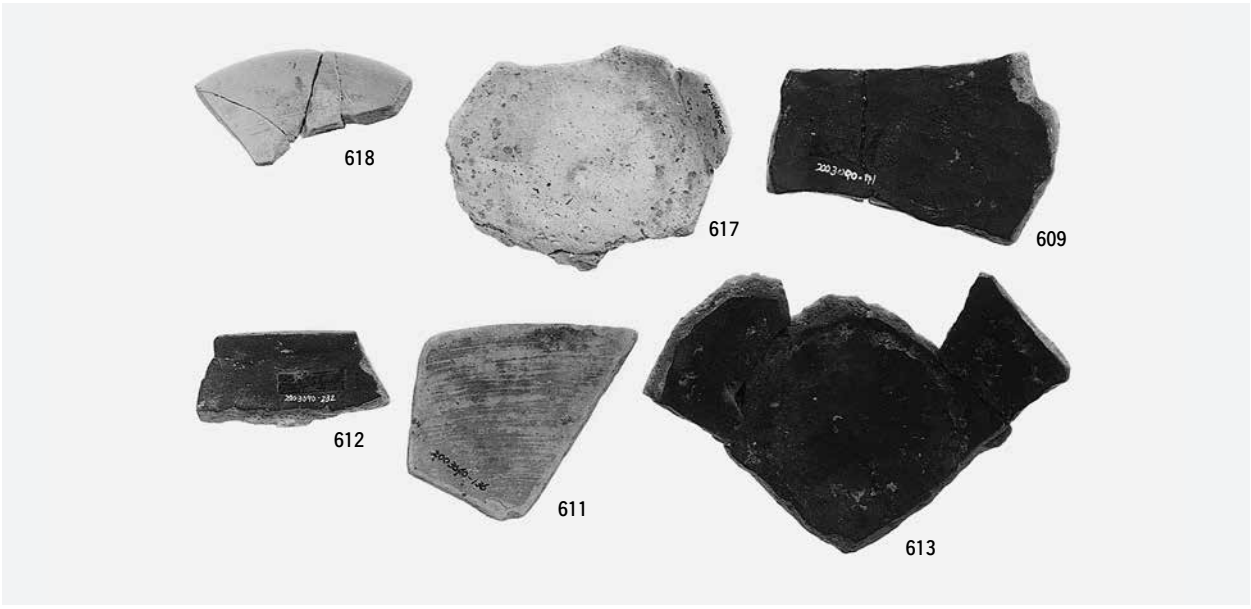

608

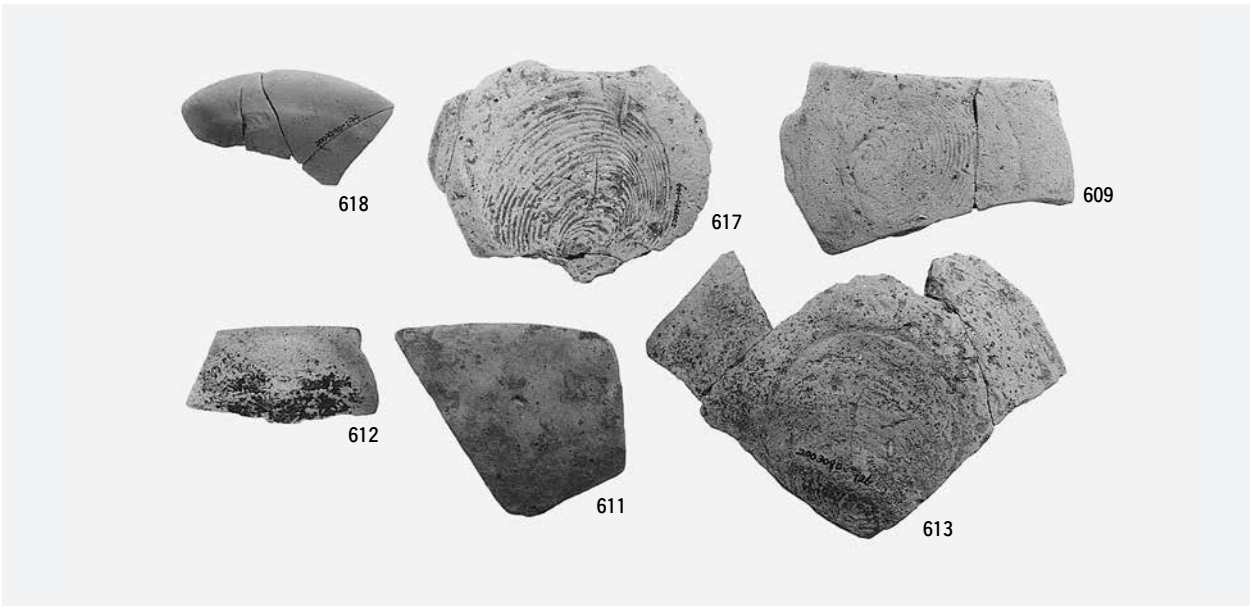
561

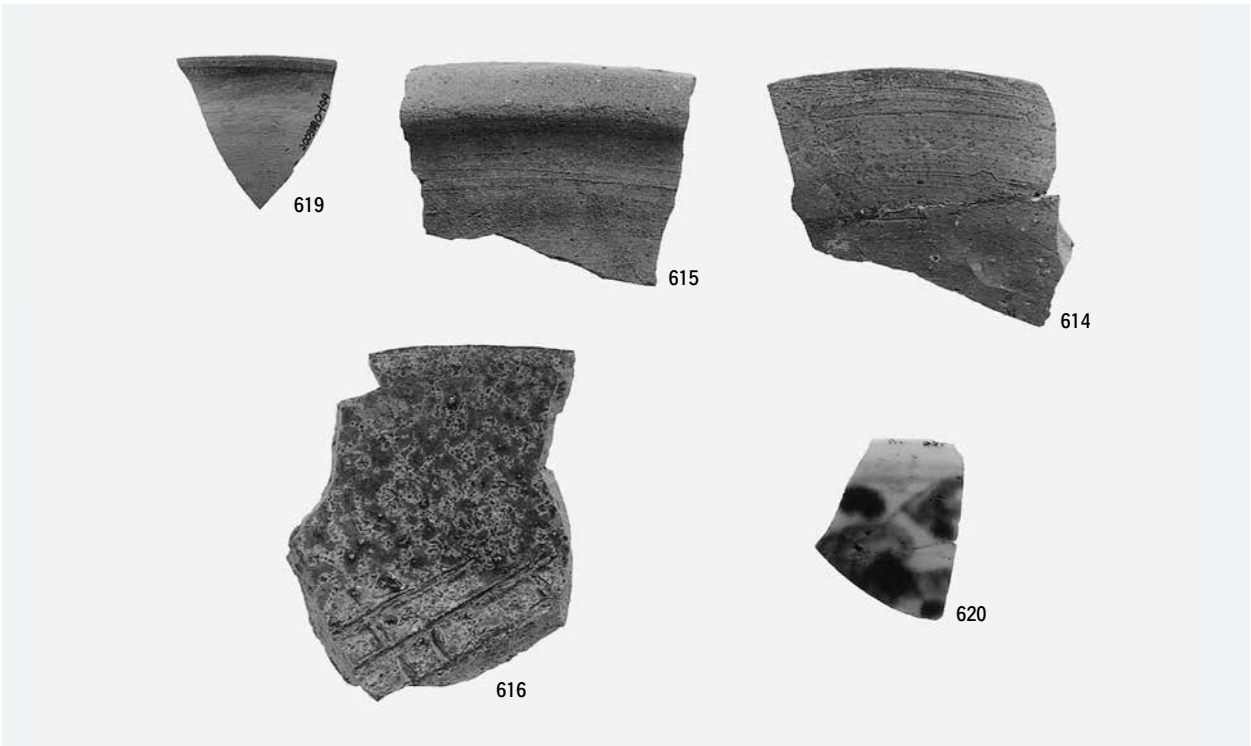

607

562


608


618
617
609
612
611
613


618
617
609
612
611
613


619
615
614
616
620

土器(5)

628

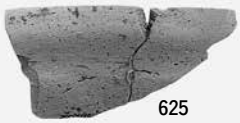
621

551

623

624

622


625

626

564

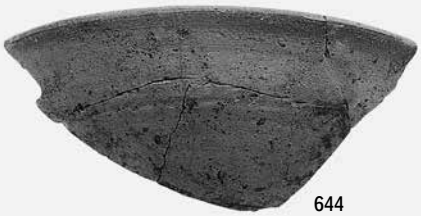
635

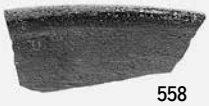
627

636

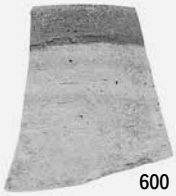
634

770


644


558

603


600

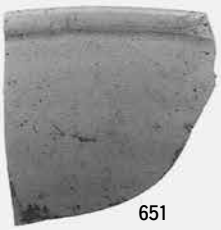
643

646

650

772

771

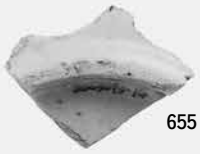

651

653

652

659

654


655

656

657

773

775

774

660

661

土器(7)

641

640

649

662

M34

M33

647

648

M35

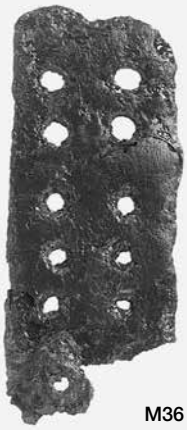
M38

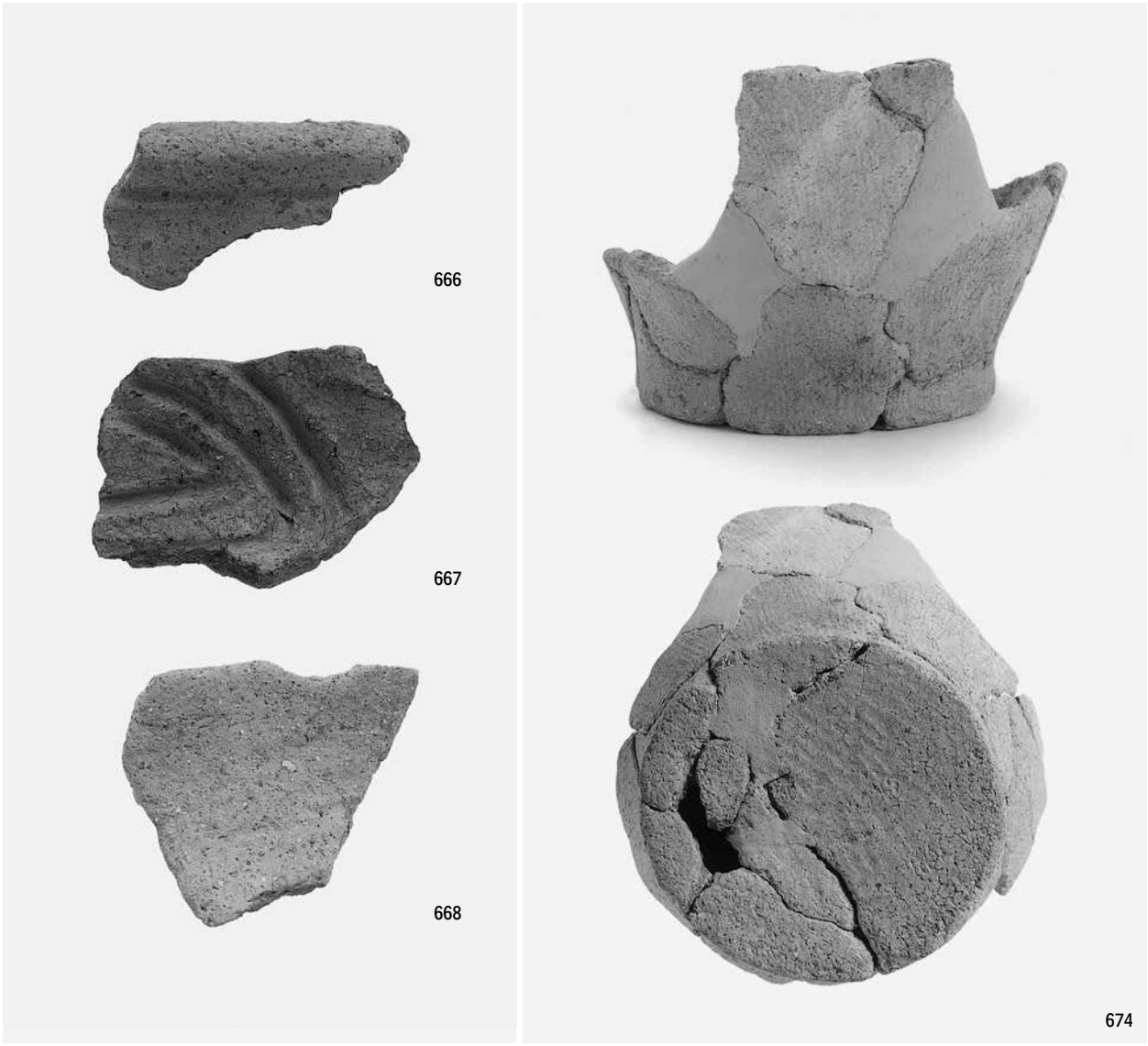
629

642

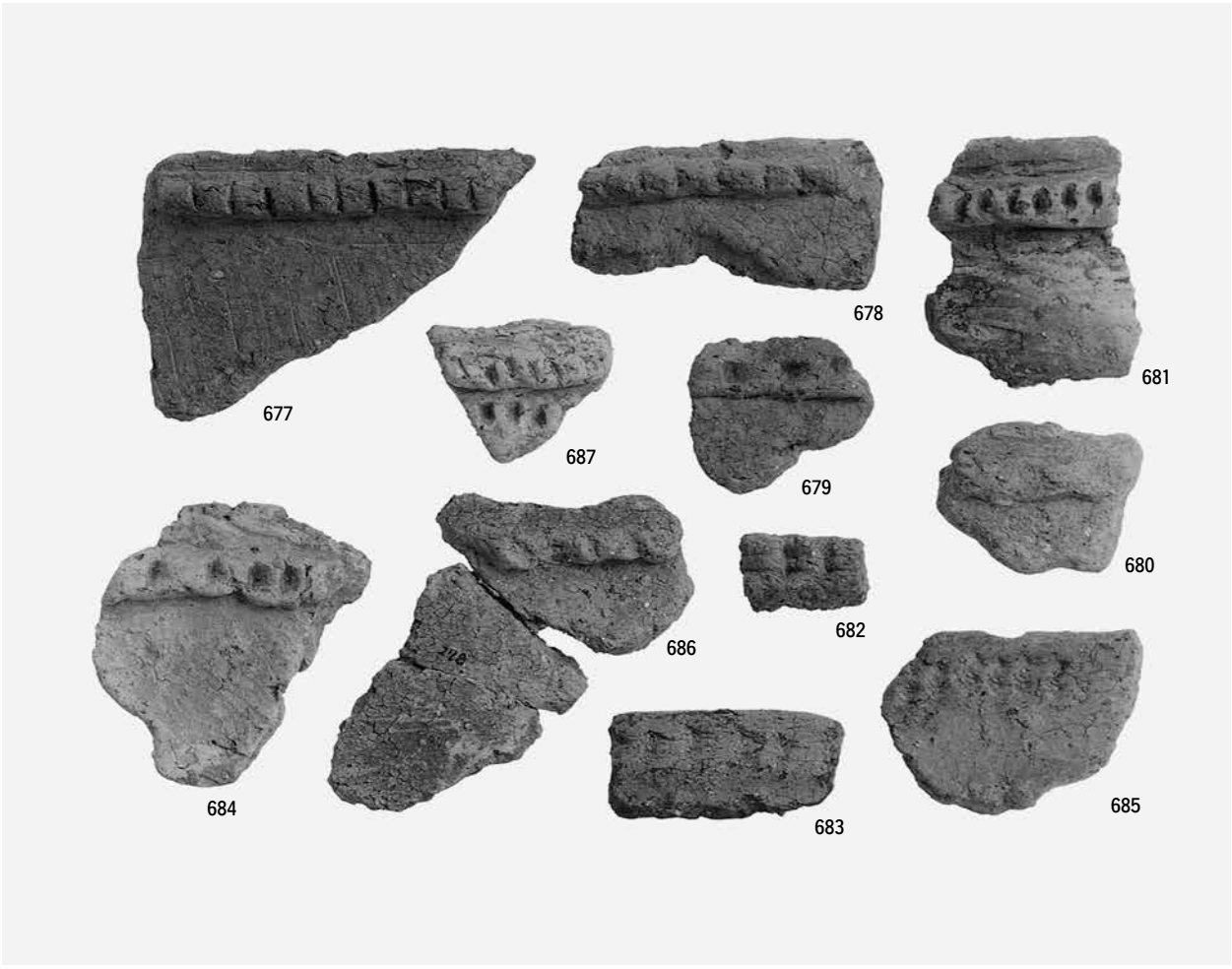
645

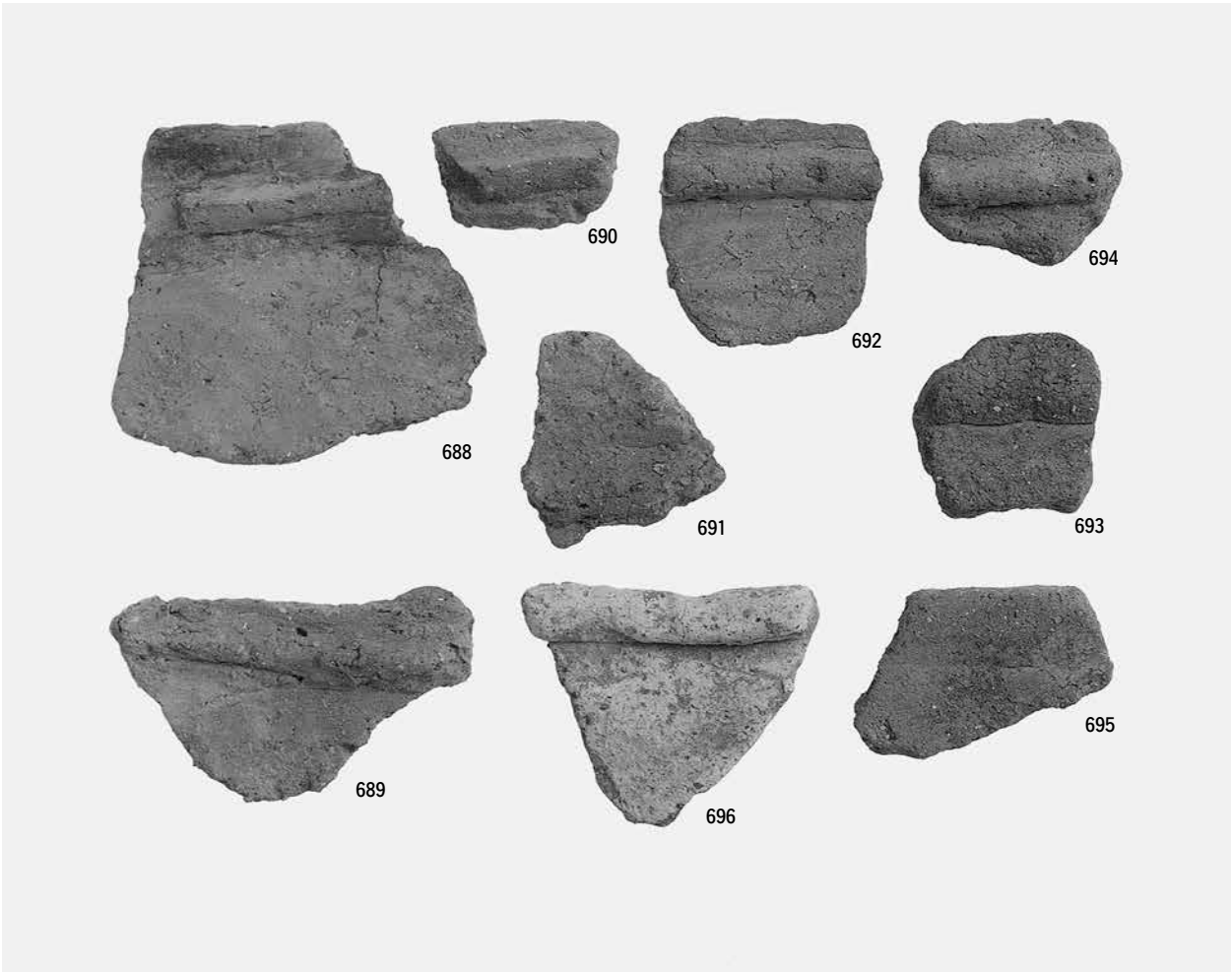
M37

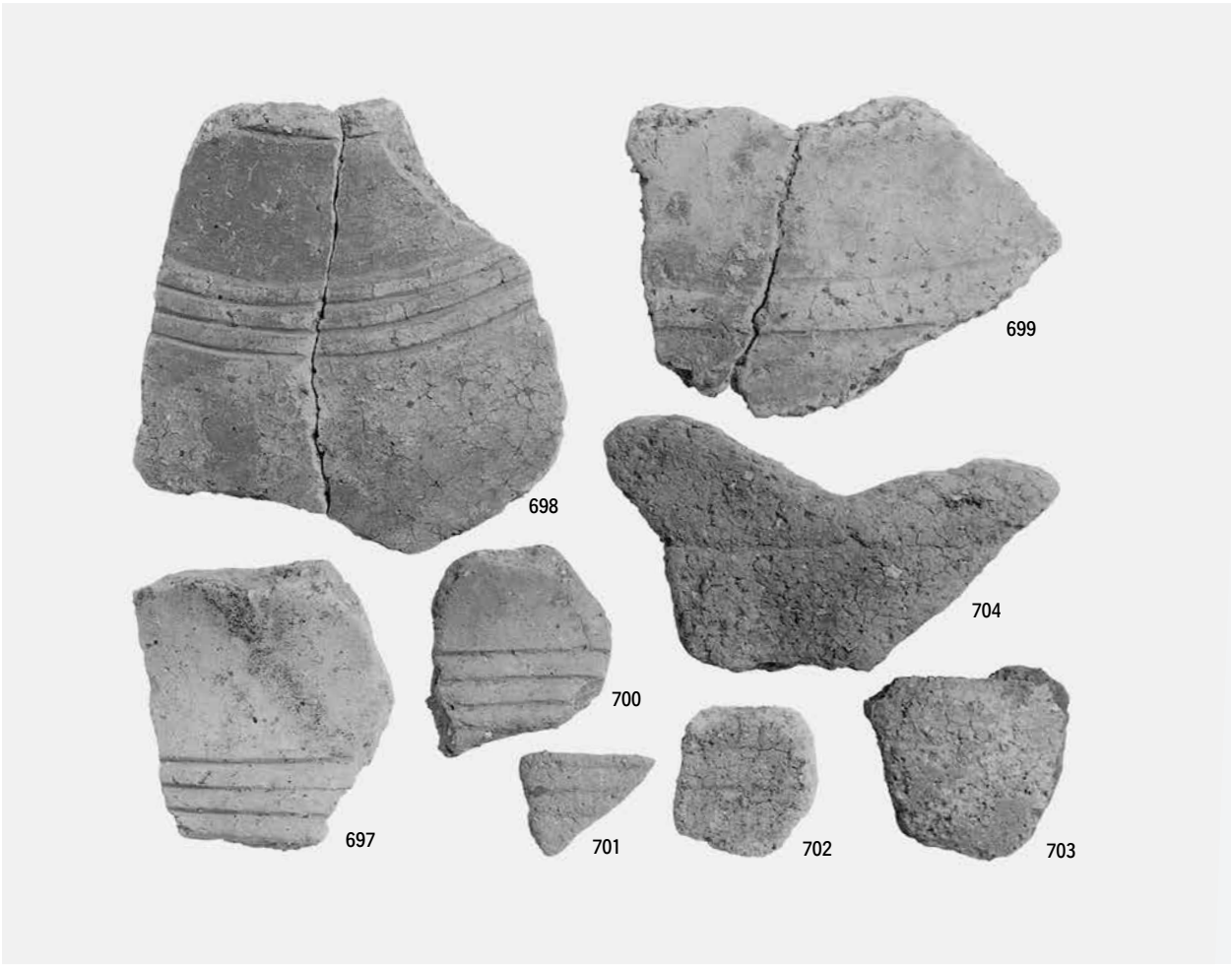

M36

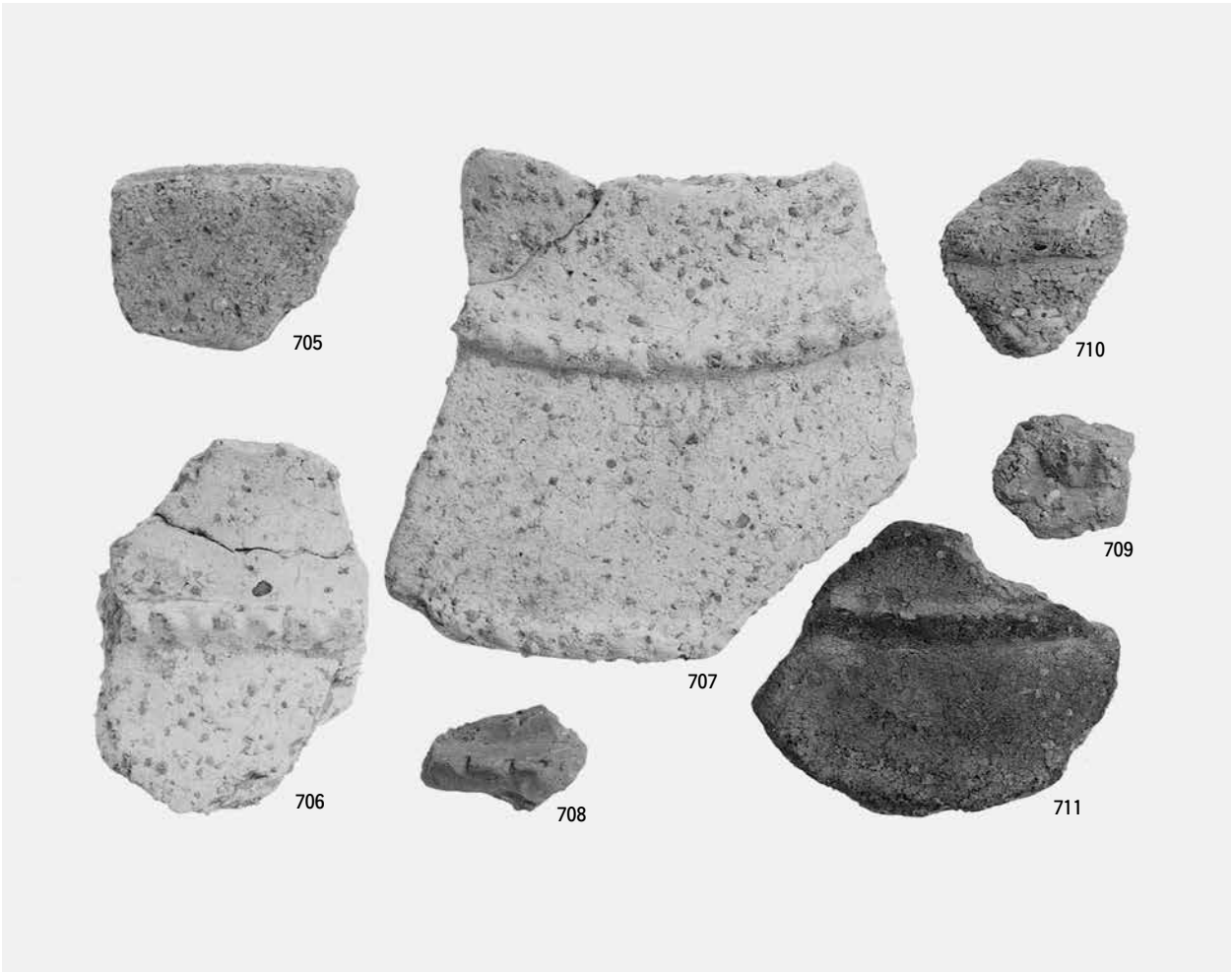


土器(9) 縄文土器

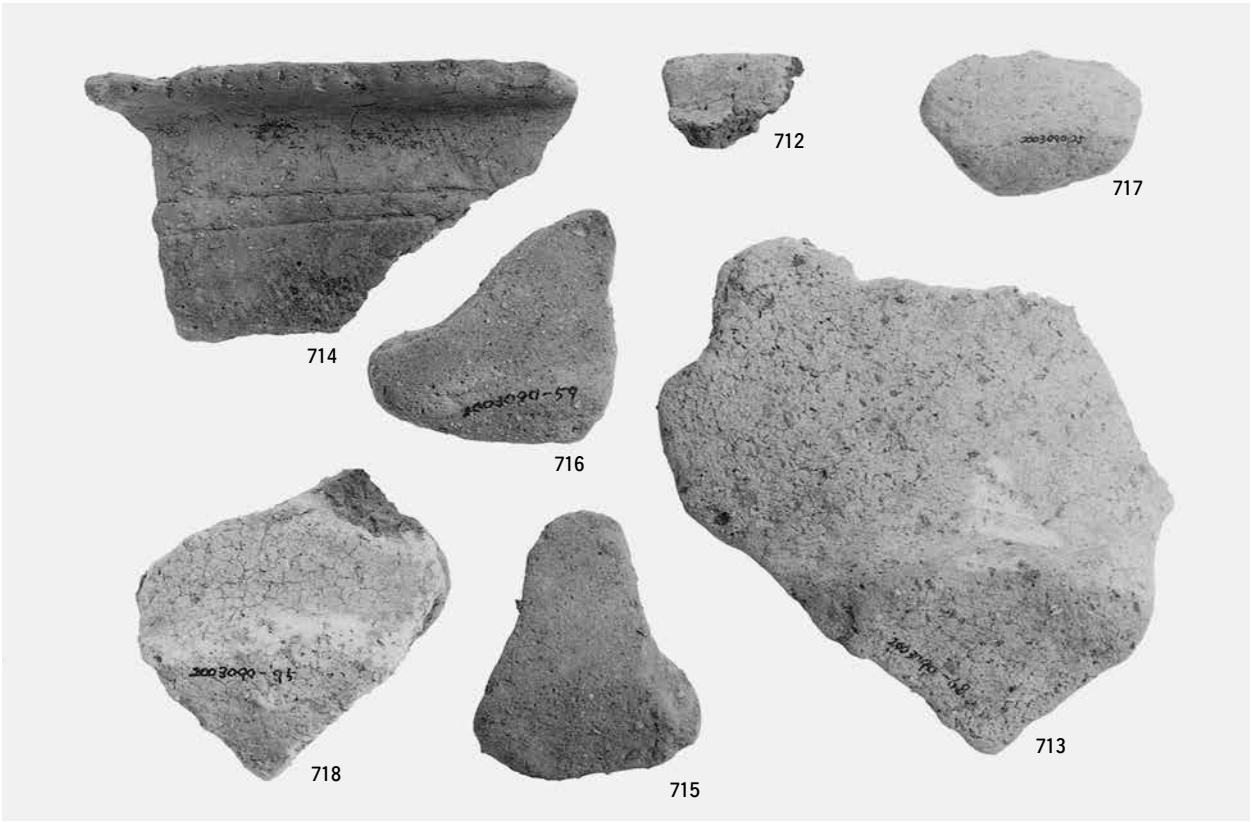

677
678
681
687
679
680
686
682
684
683
685

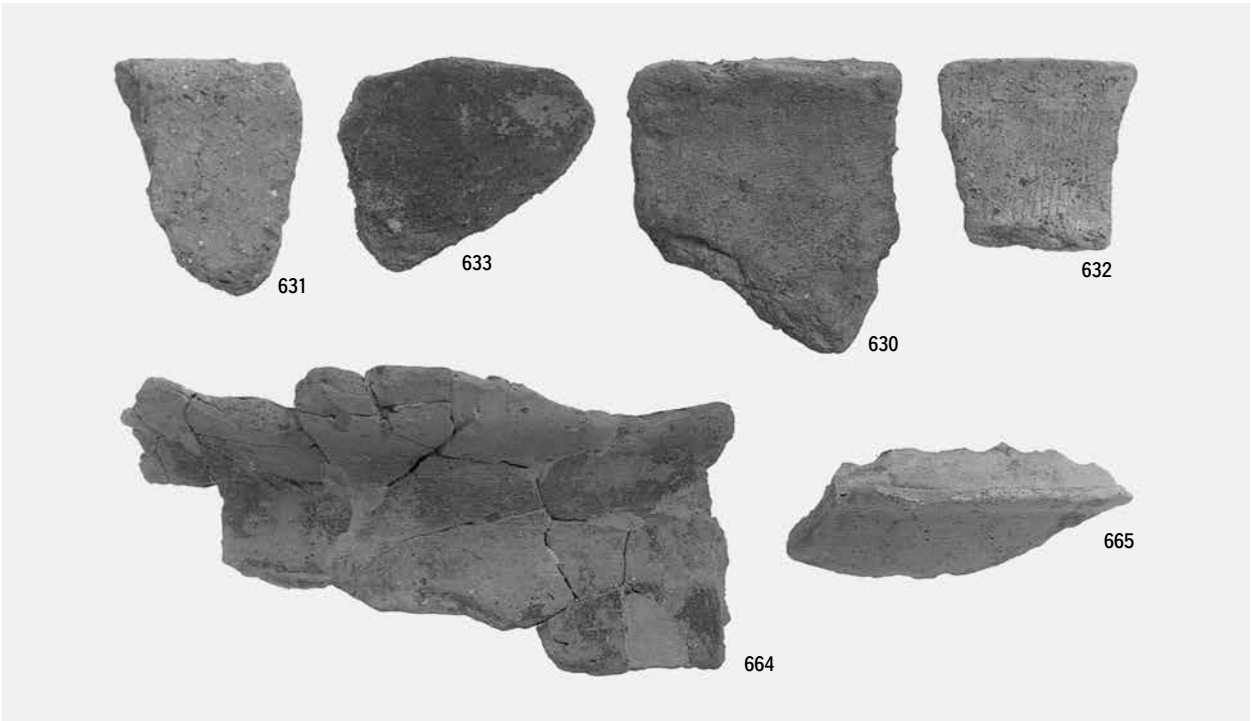

690
694
692
688
691
693
689
696
695





土器(11) 弥生土器



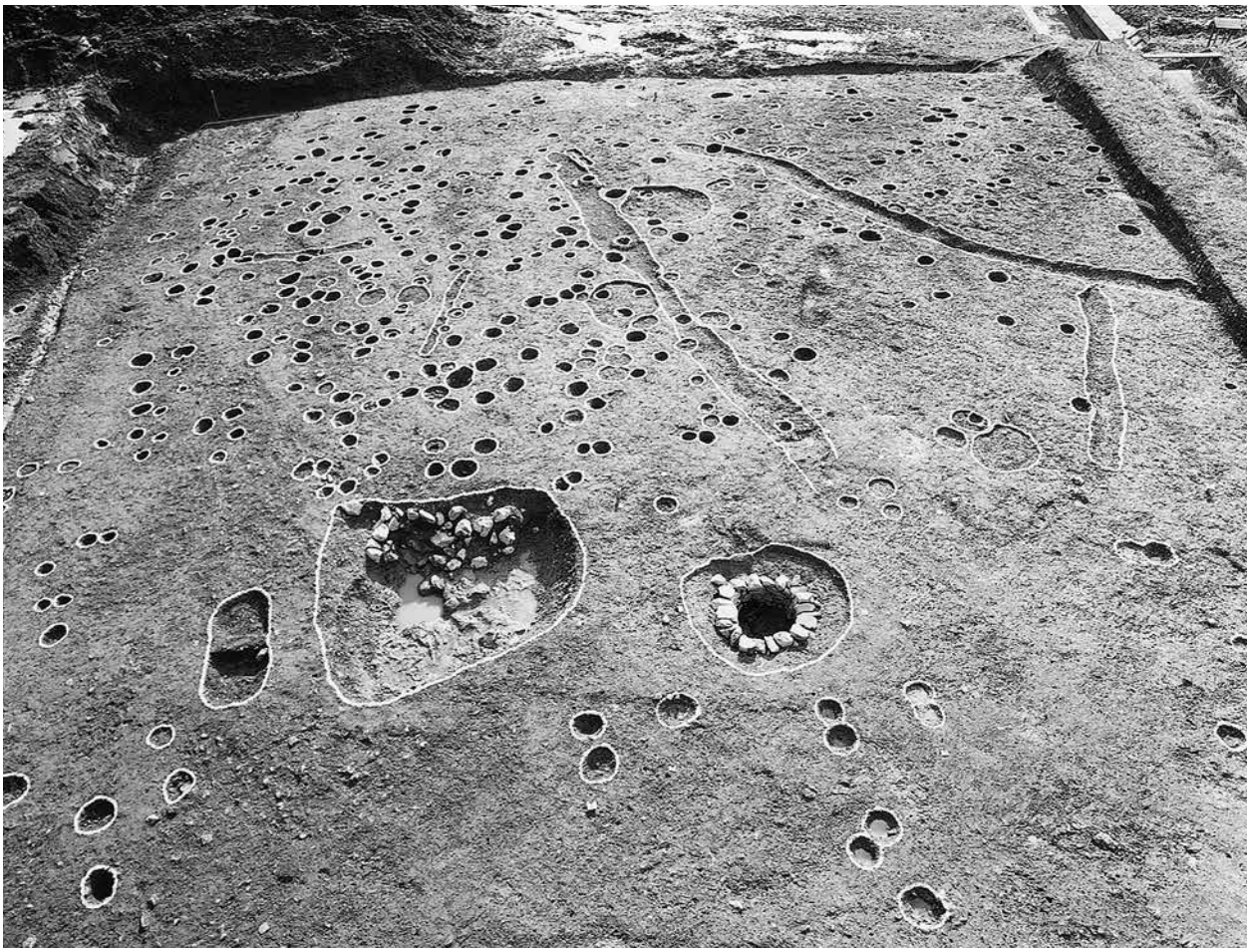


土器(12)　弥生土器・石器

232 全景(南西から)

233 全景(北東から)

234 全景(北から)



235 南半の遺構群(北から)

236 井戸SE001F
（南西から）

237 井戸SE001F断割り
（南西から）

238 井戸SE001F根太
出土状況（南西から）

239 北半 水田遺構(南から)

240 水田遺構(北から)

241 水田遺構面より上層の堆積(北から)

242 水田遺構面より上層の堆積(北から)

243 下層 旧河道の全景（南から）

244 下層 旧河道の状況（北から）

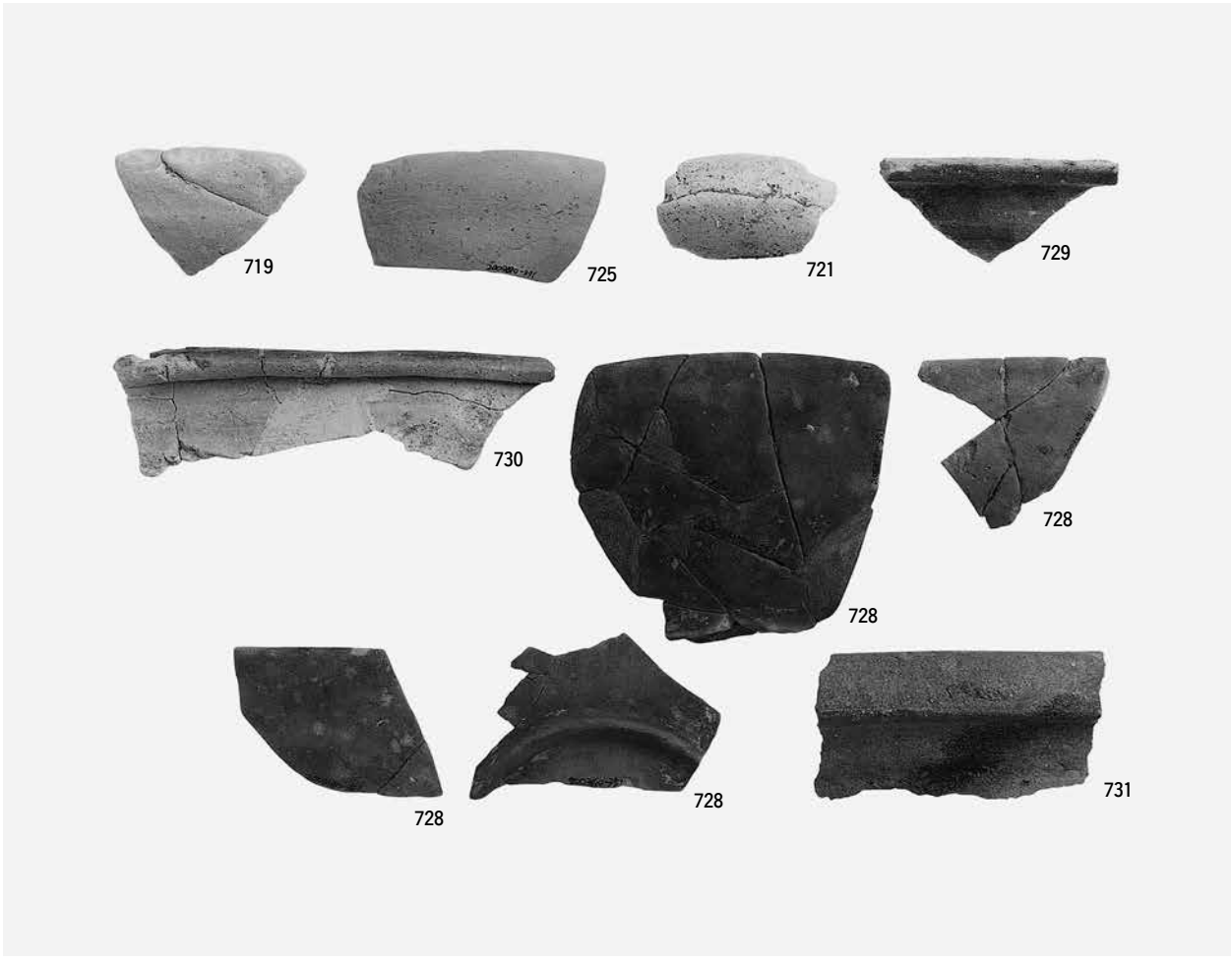
245 下層 旧河道の状況(南から)

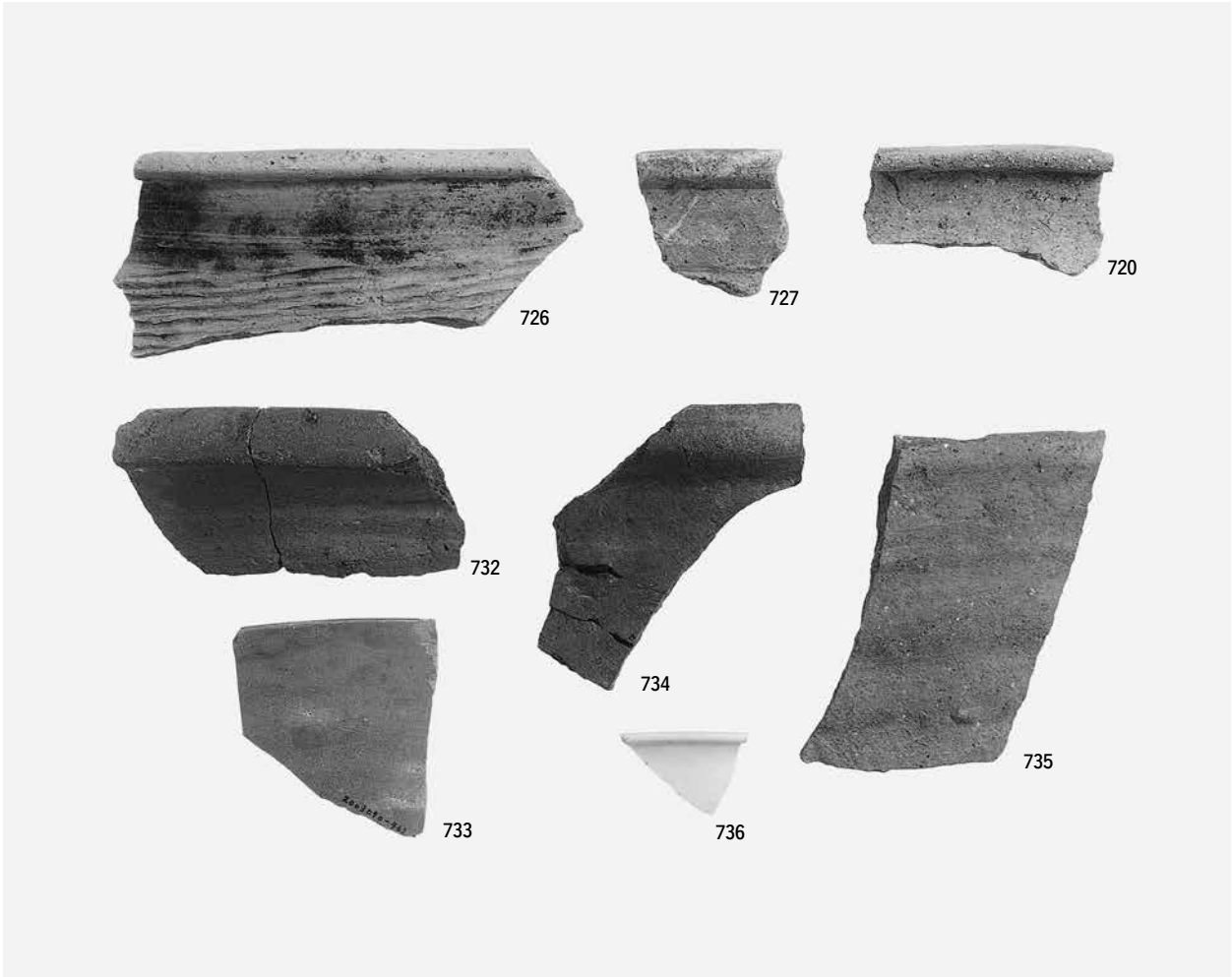
246 旧河道の堆積(1)

247 旧河道の堆積(2)

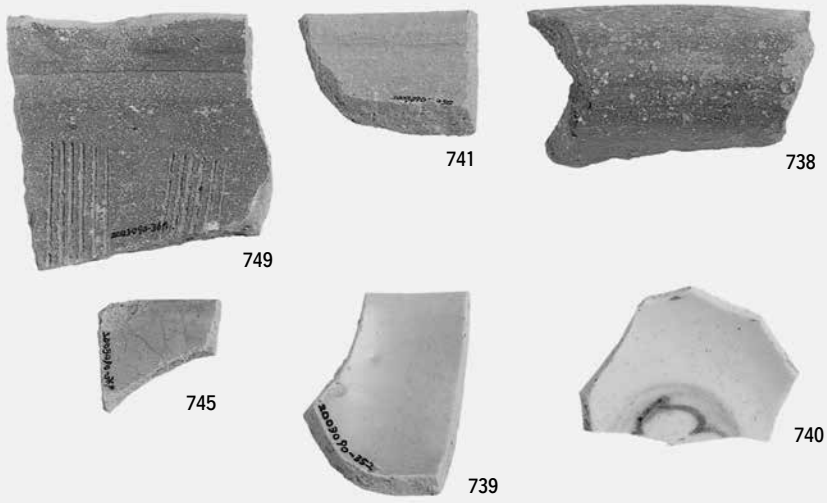
248 旧河道の堆積(3)

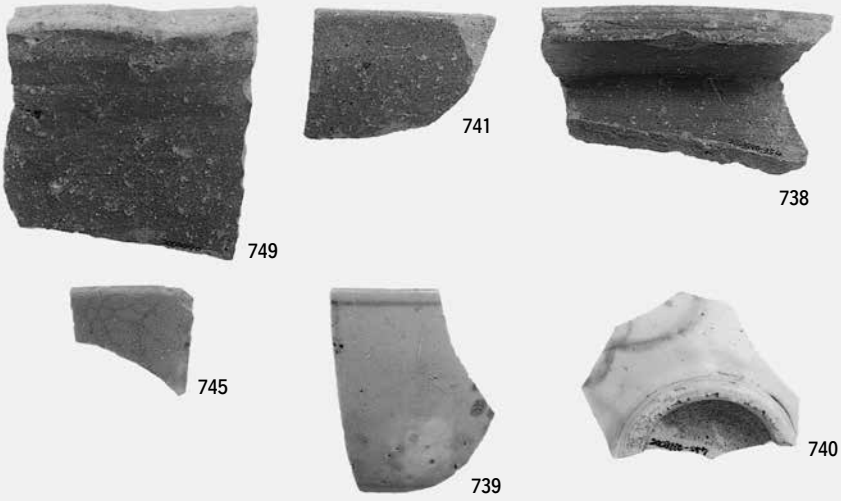
249 学識経験者 青木哲哉氏による調査

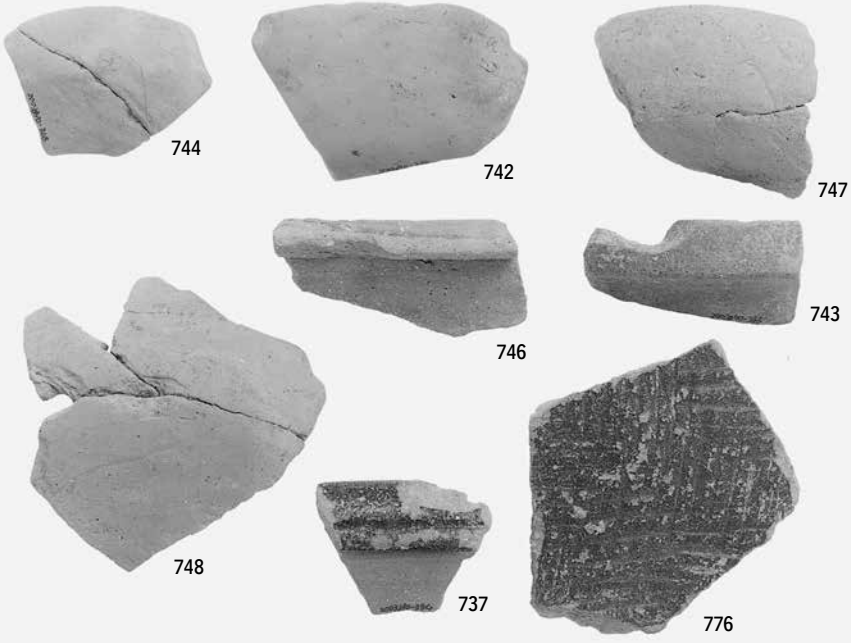

719
725
721
729
730
728
728
728
731


726
727
720
732
734
735
733
736

土器(1)

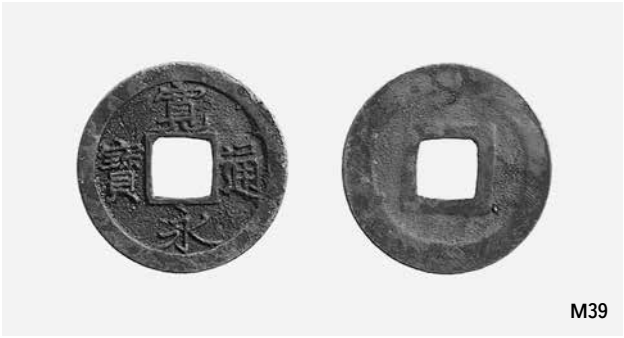

749
741
738
745
739
740


749
741
738
745
739
740


744
742
747
746
743
748
737
776

W1

S12



M39

木器・石器・金属器

250 調査前全景（南上空から）

251 調査前近景（南東から）

252 G－1区 表土掘削後(南西から)

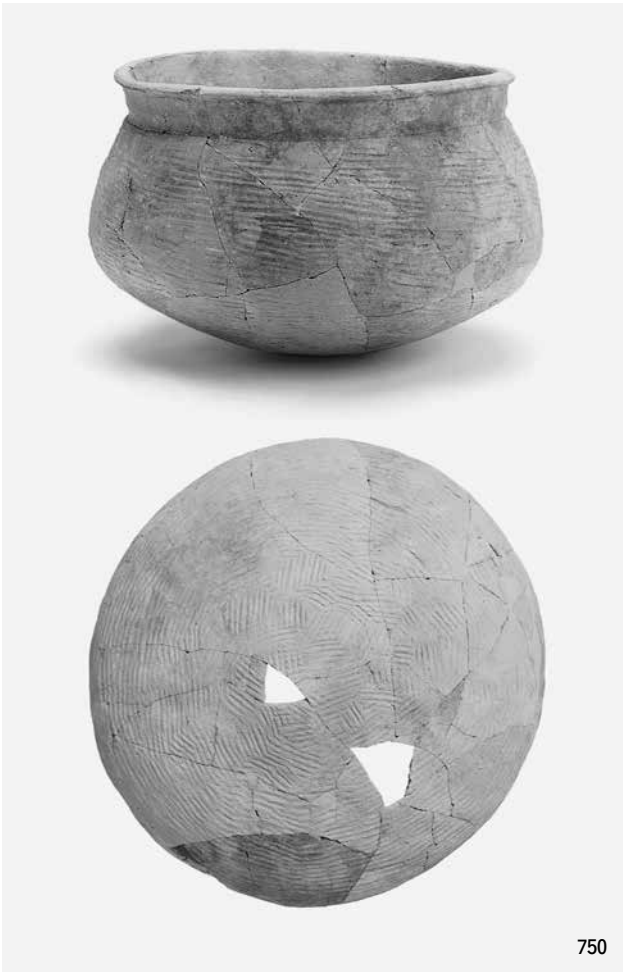
253 G－1区 墓ST001G上層検出状況(南西から)

254　G－1区　墓ST001G中層検出状況(1)(南西から)

255　G－1区　墓ST001G中層検出状況(2)(南西から)

256 G－1区 墓ST001G中層検出状況(3)(南西から)

257 G－1区 墓ST001G下層検出状況(南西から)


750

751

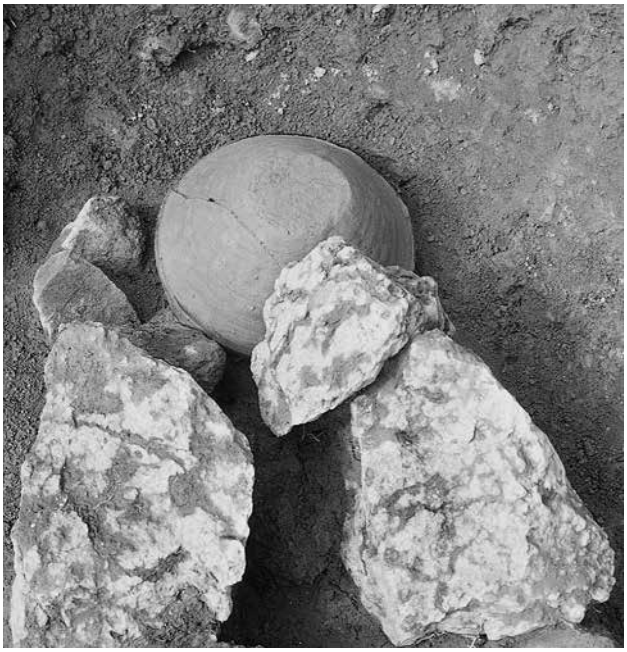
752

750
752
751

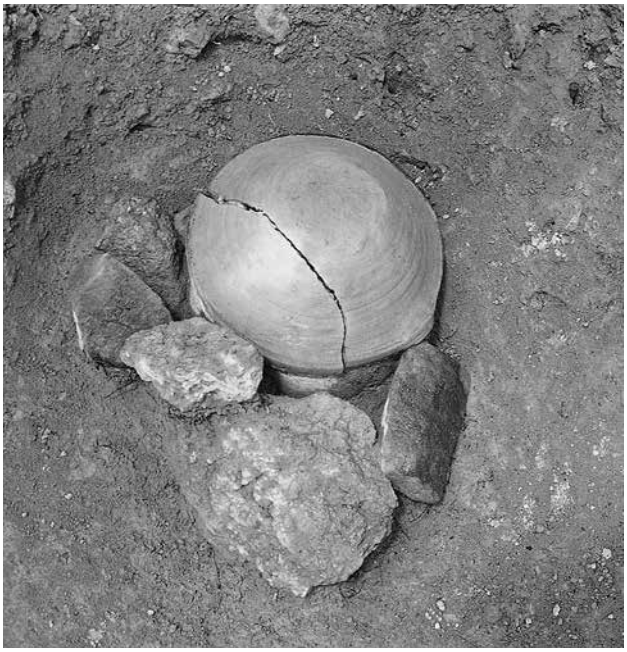
G－1区 墓ST001G出土土器

258 G－2区 表土掘削後(南西から)

259 G－2区 経塚SX001G上層検出状況(南西から)



260　G－2区　経塚SX001G経筒被覆状況（南西から）



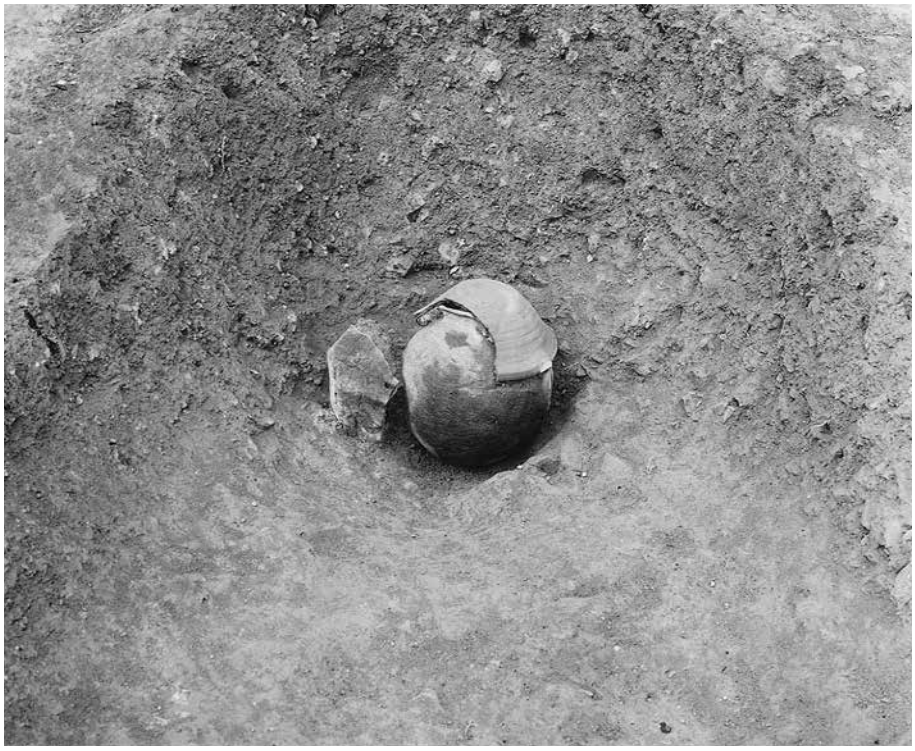
261　G－2区　経塚SX001G経筒検出状況（南西から）

262　G－2区　経塚SX001G経筒被覆状況(南西から)

263　G－2区　経塚SX001G経筒全景(1)(南西から)

264　G－2区　経塚SX001G経筒全景(2)(南西から)

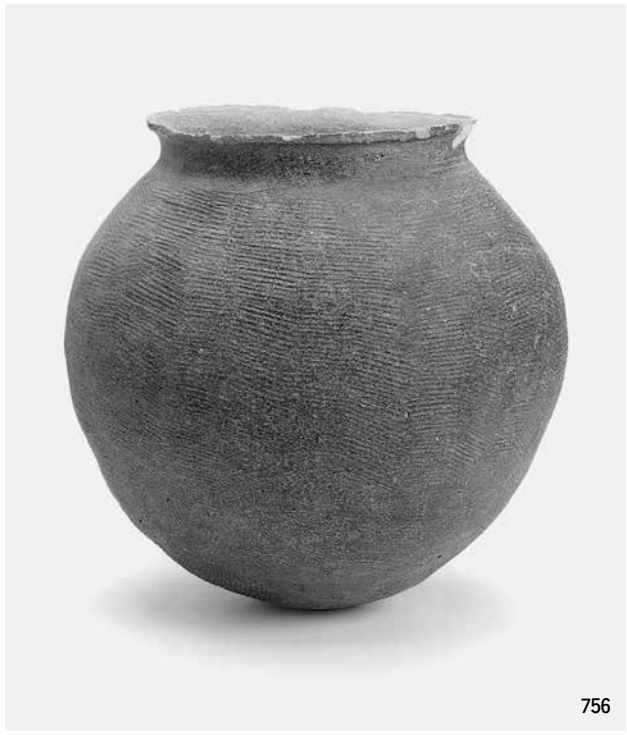
265 G－2区経塚SX001G経筒全景(1)
（南西から）



266 G－2区経塚SX001G経筒全景(2)
（南西から）

267 G－2区経塚SX001G経筒近景
（南西から）

755



756

G－2区 経塚SX001G出土土器

兵庫県文化財調査報告　第408冊

田ノ口遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日・和田山道路Ⅰ)
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

平成23年３月22日　発行

編　集　　兵庫県立考古博物館

〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町１丁目１番１号

℡ 079-437-5589

発　行　　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　　丸山印刷株式会社

〒676-8566　兵庫県高砂市神爪１丁目11番33号